
加須市

宮西 I / 宮東 I

首都圏氾濫区域堤防強化対策における
埋蔵文化財発掘調査報告
(第2分冊)

2021

国土交通省 関東地方整備局
公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

(第1分冊)

序

例言

凡例

目次

I	発掘調査の概要	1	(7) 河川跡	242
1	発掘調査に至る経過	1	(8) 遺構外出土遺物	269
2	発掘調査・報告書作成の経過	2		
3	発掘調査・報告書作成の組織	4		
II	遺跡の立地と環境	6	(第2分冊)	
1	地理的環境	6	3 古代の遺構と遺物	271
2	歴史的環境	7	(1) 住居跡	271
III	遺跡の概要	10	(2) 掘立柱建物跡	400
1	宮西・宮東遺跡の概要	10	(3) 井戸跡	407
IV	宮西遺跡の調査	12	(4) 溝跡	414
1	調査の概要	12	(5) 島跡	439
2	古代の遺構と遺物	13	(6) 土壙	447
	(1) 住居跡	15	(7) 遺物集中地点	480
	(2) 島跡	31	(8) 遺構外出土遺物	495
	(3) 土壙	32		
	(4) 遺構外出土遺物	42		
V	宮東遺跡の調査	45	VI 自然科学分析	496
1	調査の概要	45	1 宮東遺跡（第1次調査）出土骨の自然科学 分析	496
2	古墳時代の遺構と遺物	69	2 宮東遺跡（第2次調査）のテフラ分析、珪 藻・花粉分析	500
	(1) 住居跡	69	3 宮東遺跡（第4次調査）の放射性炭素年代 測定・樹種同定	523
	(2) 井戸跡	189	4 宮東遺跡（第5次調査）の珪藻・花粉分析	529
	(3) 溝跡	192	5 宮東遺跡（第6次調査）の花粉分析	538
	(4) 島跡	217		
	(5) 土壙	225	VII 調査のまとめ	542
	(6) 遺物集中地点	241		
			写真図版	

挿図目次

第2分冊

第234図 第1号住居跡	272	第267図 第36号住居跡出土遺物（1）	313
第235図 第1号住居跡出土遺物	273	第268図 第36号住居跡出土遺物（2）	314
第236図 第2号住居跡（1）	276	第269図 第37号住居跡	317
第237図 第2号住居跡（2）・遺物出土状況	277	第270図 第37号住居跡遺物出土状況	318
第238図 第2号住居跡出土遺物（1）	278	第271図 第37号住居跡出土遺物	319
第239図 第2号住居跡出土遺物（2）	279	第272図 第38号住居跡・遺物出土状況	321
第240図 第3号住居跡	282	第273図 第38号住居跡出土遺物	322
第241図 第3号住居跡遺物出土状況	283	第274図 第39号住居跡	324
第242図 第3号住居跡出土遺物（1）	284	第275図 第39号住居跡遺物出土状況	325
第243図 第3号住居跡出土遺物（2）	285	第276図 第39号住居跡出土遺物	325
第244図 第7号住居跡・出土遺物	288	第277図 第40号住居跡	327
第245図 第12号住居跡・出土遺物	289	第278図 第40号住居跡出土遺物	327
第246図 第13号住居跡・出土遺物	291	第279図 第43号住居跡	328
第247図 第20号住居跡・出土遺物	292	第280図 第43号住居跡出土遺物	328
第248図 第22号住居跡・遺物出土状況	294	第281図 第44号住居跡	329
第249図 第22号住居跡出土遺物（1）	295	第282図 第44号住居跡遺物出土状況	330
第250図 第22号住居跡出土遺物（2）	296	第283図 第44号住居跡出土遺物	331
第251図 第27号住居跡・遺物出土状況	298	第284図 第56号住居跡・出土遺物	333
第252図 第27号住居跡出土遺物（1）	299	第285図 第57号住居跡	333
第253図 第27号住居跡出土遺物（2）	300	第286図 第58号住居跡	334
第254図 第28号住居跡	302	第287図 第58号住居跡出土遺物	334
第255図 第28号住居跡出土遺物	302	第288図 第59号住居跡	335
第256図 第31号住居跡・遺物出土状況	303	第289図 第59号住居跡出土遺物	335
第257図 第31号住居跡出土遺物	304	第290図 第66号住居跡・出土遺物	336
第258図 第33号住居跡	306	第291図 第71号住居跡	337
第259図 第33号住居跡遺物出土状況	306	第292図 第73号住居跡	338
第260図 第33号住居跡出土遺物	307	第293図 第73号住居跡遺物出土状況	339
第261図 第34号住居跡	309	第294図 第73号住居跡出土遺物	340
第262図 第34号住居跡出土遺物	309	第295図 第74号住居跡・遺物出土状況	342
第263図 第35号住居跡	310	第296図 第74号住居跡出土遺物	343
第264図 第35号住居跡出土遺物	310	第297図 第75a号住居跡	345
第265図 第36号住居跡	311	第298図 第75b号住居跡（1）	346
第266図 第36号住居跡遺物出土状況	312	第299図 第75b号住居跡（2）	347
		第300図 第75b号住居跡（3）	348
		第301図 第75a号住居跡遺物出土状況（1）	

	349		第337図 第89号住居跡遺物出土状況	388
第302図	第75 a 号住居跡遺物出土状況 (2)			第338図 第89号住居跡出土遺物 (1)	389
	350		第339図 第89号住居跡出土遺物 (2)	390
第303図	第75 b 号住居跡遺物出土状況	351		第340図 第91号住居跡	393
第304図	第75号住居跡外遺物出土状況	352		第341図 第91号住居跡遺物出土状況	394
第305図	第75号住居跡出土遺物 (1)	353		第342図 第91号住居跡出土遺物	394
第306図	第75号住居跡出土遺物 (2)	354		第343図 第102号住居跡	395
第307図	第75号住居跡外出土遺物 (1)	355		第344図 第102号住居跡遺物出土状況	396
第308図	第75号住居跡外出土遺物 (2)	356		第345図 第102号住居跡出土遺物 (1)	397
第309図	第77号住居跡	362		第346図 第102号住居跡出土遺物 (2)	398
第310図	第77号住居跡遺物出土状況	363		第347図 第1号掘立柱建物跡	400
第311図	第77号住居跡出土遺物	363		第348図 第2号掘立柱建物跡	401
第312図	第78号住居跡	364		第349図 第3号掘立柱建物跡	402
第313図	第78号住居跡遺物出土状況	364		第350図 第4号掘立柱建物跡	403
第314図	第78号住居跡出土遺物	365		第351図 第6号掘立柱建物跡	404
第315図	第79号住居跡・出土遺物	366		第352図 第7号掘立柱建物跡	405
第316図	第81号住居跡	367		第353図 掘立柱建物跡出土遺物	406
第317図	第81号住居跡遺物出土状況	368		第354図 井戸跡 (1)	408
第318図	第81号住居跡出土遺物	368		第355図 井戸跡 (2)	409
第319図	第82 a 号住居跡	370		第356図 井戸跡出土遺物 (1)	410
第320図	第82 a 号住居跡遺物出土状況	371		第357図 井戸跡出土遺物 (2)	411
第321図	第82 b 号住居跡	372		第358図 溝跡 (1)	415
第322図	第82 b 号住居跡遺物出土状況	373		第359図 溝跡 (2)	416
第323図	第82号住居跡出土遺物	374		第360図 溝跡 (3)	417
第324図	第83号住居跡・遺物出土状況	376		第361図 溝跡 (4)	418
第325図	第83号住居跡出土遺物	377		第362図 溝跡 (5)	419
第326図	第84号住居跡	378		第363図 溝跡 (6)	420
第327図	第84号住居跡出土遺物	378		第364図 溝跡 (7)	421
第328図	第85号住居跡	379		第365図 溝跡 (8)	422
第329図	第85号住居跡遺物出土状況	379		第366図 溝跡 (9)	423
第330図	第85号住居跡出土遺物	380		第367図 溝跡 (10)	424
第331図	第86号住居跡	382		第368図 溝跡 (11)	425
第332図	第86号住居跡遺物出土状況	383		第369図 溝跡 (12)	426
第333図	第86号住居跡出土遺物	384		第370図 溝跡 (13)	427
第334図	第87号住居跡	385		第371図 溝跡 (14)	428
第335図	第88号住居跡・出土遺物	386		第372図 溝跡 (15)	429
第336図	第89号住居跡	387		第373図 溝跡 (16)	430

第374図 溝跡出土遺物（1）	434	第410図 第3号遺物集中遺物出土状況（2）	
第375図 溝跡出土遺物（2）	435		485
第376図 溝跡出土遺物（3）	436	第411図 第3号遺物集中出土遺物（1）	486
第377図 第3号畠跡	439	第412図 第3号遺物集中出土遺物（2）	487
第378図 第4号畠跡	440	第413図 第3号遺物集中出土遺物（3）	488
第379図 第5号畠跡（1）	441	第414図 第3号遺物集中出土遺物（4）	489
第380図 第5号畠跡（2）	442	第415図 第3号遺物集中出土遺物（5）	490
第381図 第6号畠跡	443	第416図 遺構外出土遺物	494
第382図 第7号畠跡（1）	444	第417図 ウマ骨格各部の名称	497
第383図 第7号畠跡（2）	445	第418図 出土骨	499
第384図 畠跡出土遺物	446	第419図 河川跡東トレーニングの模式柱状図および試料採取位置	502
第385図 土壌（1）	448	第420図 河川跡西壁の模式柱状図および試料採取位置	502
第386図 土壌（2）	449	第421図 軽石の屈折率	504
第387図 土壌（3）	450	第422図 重軽鉱物組成	505
第388図 土壌（4）	453	第423図 珪藻化石群集の産状	506
第389図 土壌（5）	454	第424図 花粉化石群集の産状	514
第390図 土壌（6）	457	第425図 テフラ	519
第391図 土壌（7）	458	第426図 重鉱物・軽鉱物	520
第392図 土壌（8）	459	第427図 珪藻化石	521
第393図 土壌（9）	460	第428図 花粉化石	522
第394図 土壌（10）	461	第429図 SJ-22埋積物の模式柱状図	523
第395図 土壌（11）	462	第430図 暦年較正結果（1σ）	525
第396図 土壌（12）	463	第431図 炭化物試料・木材	528
第397図 土壌（13）	464	第432図 主要珪藻化石群集	532
第398図 土壌出土遺物（1）	467	第433図 植物珪酸体含量	533
第399図 土壌出土遺物（2）	468	第434図 花粉化石・珪藻化石	536
第400図 土壌出土遺物（3）	469	第435図 植物珪酸体	537
第401図 土壌出土遺物（4）	470	第436図 1～4地点の模式柱状図および試料採取位置（○）	539
第402図 土壌出土遺物（5）	471	第437図 花粉化石	541
第403図 土壌出土遺物（6）	472	第438図 古墳時代遺物変遷図（1）	544
第404図 土壌出土遺物（7）	473	第439図 古墳時代遺物変遷図（2）	545
第405図 土壌出土遺物（8）	474	第440図 古代遺物変遷図（1）	546
第406図 遺物集中位置図	480	第441図 古代遺物変遷図（2）	547
第407図 第2号遺物集中遺物出土状況	481		
第408図 第2号遺物集中出土遺物	482		
第409図 第3号遺物集中遺物出土状況（1）			

表目次

第2分冊

第66表 第1号住居跡出土遺物観察表	274	第100表 第83号住居跡出土遺物観察表	377
第67表 第2号住居跡出土遺物観察表	280	第101表 第84号住居跡出土遺物観察表	378
第68表 第3号住居跡出土遺物観察表	286	第102表 第85号住居跡出土遺物観察表	381
第69表 第7号住居跡出土遺物観察表	288	第103表 第86号住居跡出土遺物観察表	384
第70表 第12号住居跡出土遺物観察表	290	第104表 第88号住居跡出土遺物観察表	386
第71表 第13号住居跡出土遺物観察表	291	第105表 第89号住居跡出土遺物観察表	391
第72表 第20号住居跡出土遺物観察表	293	第106表 第91号住居跡出土遺物観察表	394
第73表 第22号住居跡出土遺物観察表	297	第107表 第102号住居跡出土遺物観察表	399
第74表 第27号住居跡出土遺物観察表	301	第108表 掘立柱建物跡出土遺物観察表	406
第75表 第28号住居跡出土遺物観察表	302	第109表 井戸跡出土遺物観察表	412
第76表 第31号住居跡出土遺物観察表	305	第110表 溝跡一覧表	431
第77表 第33号住居跡出土遺物観察表	308	第111表 溝跡出土遺物観察表	437
第78表 第34号住居跡出土遺物観察表	309	第112表 畠跡一覧表	445
第79表 第35号住居跡出土遺物観察表	310	第113表 畠跡出土遺物観察表	447
第80表 第36号住居跡出土遺物観察表	315	第114表 土壙一覧表	465
第81表 第37号住居跡ピット一覧表	317	第115表 土壙出土遺物観察表	475
第82表 第37号住居跡出土遺物観察表	320	第116表 第2号遺物集中出土遺物観察表	483
第83表 第38号住居跡出土遺物観察表	323	第117表 第3号遺物集中出土遺物観察表	490
第84表 第39号住居跡出土遺物観察表	326	第118表 遺構外出土遺物観察表	495
第85表 第40号住居跡出土遺物観察表	327	第119表 検出分類群一覧	496
第86表 第43号住居跡出土遺物観察表	328	第120表 骨同定結果	497
第87表 第44号住居跡出土遺物観察表	332	第121表 テフラ分析結果	504
第88表 第56号住居跡出土遺物観察表	333	第122表 中粒砂以上の岩石片の産状	505
第89表 第58号住居跡出土遺物観察表	334	第123表 重軽鉱物分析結果	505
第90表 第59号住居跡出土遺物観察表	335	第124表 珪藻分析結果（1）	512
第91表 第66号住居跡出土遺物観察表	337	第125表 珪藻分析結果（2）	513
第92表 第73号住居跡出土遺物観察表	341	第126表 花粉分析結果	515
第93表 第74号住居跡出土遺物観察表	343	第127表 炭化物試料一覧	524
第94表 第75号住居跡出土遺物観察表	357	第128表 放射性炭素年代測定および暦年較正結果	
第95表 第77号住居跡出土遺物観察表	363		525
第96表 第78号住居跡出土遺物観察表	365	第129表 樹種同定結果	528
第97表 第79号住居跡出土遺物観察表	366	第130表 珪藻分析結果	531
第98表 第81号住居跡出土遺物観察表	369	第131表 花粉分析結果	533
第99表 第82号住居跡出土遺物観察表	375	第132表 植物珪酸体含量	533
		第133表 花粉分析結果	539

写真図版目次

図版1 1 宮西・宮東遺跡遠景（東から）

2 宮西・宮東遺跡遠景（西から）

図版2 1 宮西遺跡2次二面全景

2 宮西遺跡全景

宮西遺跡

図版3 1 第1号住居跡

2 第1号住居跡カマド（1）

3 第1号住居跡カマド（2）

4 第1号住居跡遺物出土状況

5 第2号住居跡

6 第3号住居跡

7 第4号住居跡

8 第4号住居跡遺物出土状況

図版4 1 第5号住居跡

2 第5号住居跡遺物出土状況

3 第5号住居跡カマド遺物出土状況

4 第6号住居跡

5 第6号住居跡カマド

6 第6号住居跡遺物出土状況

7 第7号住居跡

8 第7号住居跡カマド遺物出土状況

図版5 1 第3号畠跡

2 第101号土壙 3 第102号土壙

4 第103号土壙 5 第104号土壙

6 第105号土壙

7 第106・107号土壙

8 第109・110・111号土壙

図版6 1 第112号土壙 2 第113号土壙

3 第114号土壙

4 第114号土壙遺物出土状況（1）

5 第114号土壙遺物出土状況（2）

6 第115・116号土壙

7 第117号土壙

8 第117号土壙遺物出土状況

図版7 1～6 第1号住居跡出土遺物

7～9 第4号住居跡出土遺物

図版8 1～3 第4号住居跡出土遺物

4～6 第5号住居跡出土遺物

7 第6号住居跡出土遺物

8・9 第7号住居跡出土遺物

図版9 1～3 第7号住居跡出土遺物

4 第101号土壙出土遺物

5 第102号土壙出土遺物

6 第104号土壙出土遺物

7 第110号土壙出土遺物

8・9 第114号土壙出土遺物

図版10 1・2 第114号土壙出土遺物

3～7 第117号土壙出土遺物

8～10 遺構外出土遺物

図版11 1 三河型甕 2 羽口

3 石製品

宮東遺跡

図版12 1 宮東遺跡調査区全景（二面）

図版13 1 宮東遺跡調査区全景（三面）

図版14 1 第4号住居跡

2 第5号住居跡

3 第6号住居跡（1）

4 第6号住居跡（2）

5～8 第6号住居跡遺物出土状況

（1）～（4）

図版15 1 第9号住居跡 2 第10号住居跡

3～8 第10号住居跡遺物出土状況

（1）～（6）

図版16 1～4 第10号住居跡遺物出土状況

（7）～（10）

5 第11号住居跡 6 第14号住居跡

7 第14号住居跡遺物出土状況（1）

8 第14号住居跡遺物出土状況（2）

- | | | | |
|------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 図版17 | 1 第15号住居跡
2 第16号住居跡
3 第16号住居跡遺物出土状況（1）
4 第16号住居跡遺物出土状況（2）
5 第17号住居跡
6 第17号住居跡遺物出土状況（1）
7 第17号住居跡遺物出土状況（2）
8 第18号住居跡 | 図版22 | 1 第50号住居跡・第14号土壙
2 第51号住居跡
3 第51号住居跡遺物出土状況
4 第52号住居跡 5 第55号住居跡
6 第55号住居跡遺物出土状況（1）
7 第55号住居跡遺物出土状況（2）
8 第61号住居跡 |
| 図版18 | 1 第21号住居跡
2 第21号住居跡遺物出土状況（1）
3 第21号住居跡遺物出土状況（2）
4 第23号住居跡 5 第25号住居跡
6 第26号住居跡
7 第26号住居跡カマド
8 第26号住居跡遺物出土状況 | 図版23 | 1 第61号住居跡カマド
2 第62号住居跡
3 第62号住居跡遺物出土状況
4 第64号住居跡
5～8 第64号住居跡遺物出土状況
（1）～（4） |
| 図版19 | 1 第29号住居跡
2 第29号住居跡遺物出土状況
3 第42号住居跡
4 第42号住居跡カマド
5 第42号住居跡カマド遺物出土状況
6～8 第42号住居跡遺物出土状況
（1）～（3） | 図版24 | 1 第64号住居跡柱穴（1）
2 第64号住居跡柱穴（2）
3 第68・69号住居跡
4 第68・69号住居跡遺物出土状況
5 第70号住居跡
6 第72号住居跡
7 第90号住居跡
8 第90号住居跡カマド |
| 図版20 | 1 第42号住居跡遺物出土状況（4）
2 第42号住居跡遺物出土状況（5）
3 第45号住居跡
4 第45号住居跡カマド
5 第46号住居跡
6 第46号住居跡遺物出土状況
7 第47号住居跡
8 第47号住居跡遺物出土状況（1） | 図版25 | 1～4 第90号住居跡遺物出土状況
（1）～（4）
5 第92号住居跡
6 第92号住居跡カマド
7 第92号住居跡遺物出土状況（1）
8 第92号住居跡遺物出土状況（2） |
| 図版21 | 1 第47号住居跡遺物出土状況（2）
2 第47号住居跡遺物出土状況（3）
3 第48号住居跡
4 第48号住居跡遺物出土状況
5 第49号住居跡
6～8 第49号住居跡遺物出土状況
（1）～（3） | 図版26 | 1～3 第92号住居跡遺物出土状況
（3）～（5）
4 第93号住居跡 5 第94号住居跡
6 第94号住居跡カマド
7 第94号住居跡カマド遺物出土状況
8 第94号住居跡遺物出土状況（1） |
| | | 図版27 | 1 第94号住居跡遺物出土状況（2）
2 第94号住居跡遺物出土状況（3）
3 第95号住居跡
4 第95号住居跡遺物出土状況（1） |

- 5 第95号住居跡遺物出土状況（2）
 6 第96号住居跡（1）
 7 第96号住居跡（2）
 8 第96号住居跡遺物出土状況
- 図版28 1 第97号住居跡
 2 第97号住居跡遺物出土状況
 3 第97号住居跡カマド
 4 第97号住居跡カマド遺物出土状況
 5 第98号住居跡
 6 第98号住居跡カマド
 7 第98号住居跡遺物出土状況（1）
 8 第98号住居跡遺物出土状況（2）
- 図版29 1～3 第98号住居跡遺物出土状況
 （3）～（5）
 4 第98号住居跡住居内土壙
 5 第99号住居跡
 6 第99号住居跡カマド
 7 第99号住居跡カマド遺物出土状況
 （1）
 8 第99号住居跡カマド遺物出土状況
 （2）
- 図版30 1～8 第99号住居跡遺物出土状況
 （1）～（8）
- 図版31 1～4 第99号住居跡遺物出土状況
 （9）～（12）
 5 第100号住居跡 6 第101号住居跡
 7 第101号住居跡カマド
 8 第101号住居跡カマド遺物出土状況
- 図版32 1 第128号井戸跡（1）
 2 第128号井戸跡（2）
 3～5 第128号井戸跡遺物出土状況
 （1）～（3）
 6 第130号井戸跡
 7 第131号井戸跡
 8 第144号井戸跡
- 図版33 1 第40号溝跡（1）
 2 第40号溝跡（2）
- 3 第40号溝跡遺物出土状況（1）
 4 第40号溝跡遺物出土状況（2）
 5 第97号溝跡
 6 第97号溝跡噴砂検出状況（1）
 7 第97号溝跡噴砂検出状況（2）
 8 第98号溝跡
- 図版34 1 第154号溝跡
 2 第166号溝跡馬歯出土状況
 3 第227号溝跡
 4 第388・389号溝跡
 5 第9号畠跡 6 第14号畠跡
 7 第15号畠跡（南側）
 8 第16号畠跡
- 図版35 1 第96号土壙 2 第98号土壙
 3 第100号土壙 4 第124号土壙
 5 第124号土壙遺物出土状況
 6 第158号土壙 7 第179号土壙
 8 第222号土壙
 9 第222号土壙遺物出土状況
 10 第223号土壙 11 第225号土壙
 12 第242号土壙
 13 第242号土壙遺物出土状況
 14 第243号土壙 15 第244号土壙
 16 第245号土壙 17 第246号土壙
 18 第249号土壙
- 図版36 1 第253号土壙 2 第289号土壙
 3 第303号土壙 4 第304号土壙
 5 第305号土壙 6 第306号土壙
 7 第319号土壙 8 第320号土壙
 9 第320号土壙遺物出土状況
 10 第321号土壙 11 第322号土壙
 12 第323号土壙 13 第324号土壙
 14 第325号土壙 15 第326号土壙
 16 第327号土壙
 17 第327号土壙遺物出土状況
 18 第328号土壙
- 図版37 1 第334号土壙 2 第338号土壙

- 3 第342号土壙 4 第344号土壙
 5 第347号土壙
 6 第347号土壙遺物出土状況
 7 第354号土壙
 8 第354号土壙遺物出土状況
 9 第442号土壙
 10 河川跡全景（1）
- 図版38 1 河川跡全景（2）
 2～5 河川跡遺物出土状況（1）～（4）
- 図版39 1～18 河川跡遺物出土状況
 （5）～（22）
- 図版40 1 第1号住居跡
 2 第1号住居跡カマド
 3 第2号住居跡
 4 第2号住居跡遺物出土状況
 5 第2号住居跡カマド遺物出土状況
 6 第2号住居跡柱穴完堀
 7 第3号住居跡
 8 第3号住居跡カマド
- 図版41 1～3 第3号住居跡遺物出土状況
 （1）～（3）
 4 第12号住居跡
 5 第13号住居跡
 6 第20号住居跡
 7 第22号住居跡
 8 第22号住居跡カマド
- 図版42 1 第22号住居跡遺物出土状況（1）
 2 第22号住居跡遺物出土状況（2）
 3 第27号住居跡
 4 第27号住居跡カマド
 5 第31号住居跡
 6 第31号住居跡遺物出土状況
 7 第33号住居跡
 8 第33号住居跡遺物出土状況
- 図版43 1 第34号住居跡
 2 第35号住居跡
 3 第36号住居跡
- 4 第36号住居跡カマド
 5～8 第36号住居跡遺物出土状況
 （1）～（4）
- 図版44 1 第37号住居跡
 2 第37号住居跡カマド
 3 第38号住居跡
 4 第38号住居跡カマド
 5 第38号住居跡遺物出土状況
 6 第38号住居跡貯蔵穴
 7 第39号住居跡
 8 第39号住居跡遺物出土状況
- 図版45 1 第40号住居跡
 2 第40号住居跡カマド
 3 第43号住居跡
 4 第44号住居跡
 5 第44号住居跡カマド
 6 第56号住居跡
 7 第56号住居跡遺物出土状況
 8 第57号住居跡
- 図版46 1 第58号住居跡
 2 第58号住居跡カマド
 3 第59号住居跡
 4 第59号住居跡カマド
 5 第66・71号住居跡
 6 第73号住居跡
 7 第73号住居跡カマド
 8 第73号住居跡カマド遺物出土状況
- 図版47 1～4 第73号住居跡遺物出土状況
 （1）～（4）
 5 第74号住居跡
 6 第74号住居跡カマド
 7 第74号住居跡カマド遺物出土状況
 8 第74号住居跡遺物出土状況
- 図版48 1～3 第75a号住居跡
- 図版49 1 第75a号住居跡
 2 第75a号住居跡カマド
 3 第75a号住居跡カマド遺物出土状況

- (1)
- 4 第75 a 号住居跡カマド遺物出土状況
- (2)
- 5 第75 b 号住居跡覆土炭層 (1)
- 6 第75 b 号住居跡覆土炭層 (2)
- 7 第75 b 号住居跡炭層中焼土
- 8 第75 b 号住居跡炭層上遺物
- 図版50 1・2 第75 b 号住居跡
- 図版51 1～8 第75 b 号住居跡遺物出土状況
(1)～(8)
- 図版52 1～5 第75 b 号住居跡砂層検出状況
(1)～(5)
- 図版53 1～5 第75 b 号住居跡噴砂除去状況
(1)～(5)
- 図版54 1 第77号住居跡
- 2 第77号住居跡カマド
- 3 第77号住居跡遺物出土状況
- 4 第78号住居跡
- 5 第78号住居跡カマド
- 6 第78号住居跡カマド遺物出土状況
- 7 第78号住居跡遺物出土状況 (1)
- 8 第78号住居跡遺物出土状況 (2)
- 図版55 1 第79号住居跡
- 2 第79号住居跡カマド
- 3 第81号住居跡
- 4 第81号住居跡カマド
- 5 第81号住居跡カマド遺物出土状況
- 6～8 第81号住居跡遺物出土状況
(1)～(3)
- 図版56 1 第82 a 号住居跡
- 2 第82 a 号住居跡カマド
- 3 第82 a 号住居跡遺物出土状況 (1)
- 4 第82 a 号住居跡遺物出土状況 (2)
- 5 第82 b 号住居跡
- 6 第82 b 号住居跡カマド
- 7 第82 b 号住居跡遺物出土状況 (1)
- 8 第82 b 号住居跡遺物出土状況 (2)
- 図版57 1～4 第82 b 号住居跡遺物出土状況
(3)～(6)
- 5 第83号住居跡
- 6 第83号住居跡カマド
- 7 第83号住居跡遺物出土状況 (1)
- 8 第83号住居跡遺物出土状況 (2)
- 図版58 1 第84号住居跡
- 2 第85号住居跡
- 3 第85号住居跡カマド
- 4～8 第85号住居跡遺物出土状況
(1)～(5)
- 図版59 1 第86号住居跡
- 2 第86号住居跡カマド
- 3 第86号住居跡遺物出土状況 (1)
- 4 第86号住居跡遺物出土状況 (2)
- 5 第86号住居跡噴砂検出①
- 6 第86号住居跡噴砂検出②
- 7 第87号住居跡
- 8 第88号住居跡
- 図版60 1 第89号住居跡
- 2～8 第89号住居跡遺物出土状況
(1)～(7)
- 図版61 1 第91号住居跡
- 2 第91号住居跡遺物出土状況
- 3 第102号住居跡
- 4 第102号住居跡カマド
- 5 第102号住居跡カマド遺物出土状況
(1)
- 6 第102号住居跡カマド遺物出土状況
(2)
- 7 第102号住居跡遺物出土状況 (1)
- 8 第102号住居跡遺物出土状況 (2)
- 図版62 1 第1号掘立柱建物跡
- 2 第2号掘立柱建物跡
- 3 第3号掘立柱建物跡
- 4 第4号掘立柱建物跡
- 5 第6号掘立柱建物跡

- | | |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>6 第7号掘立柱建物跡
7 第55号井戸跡 8 第82号井戸跡

図版63 1 第98号井戸跡
2 第112号井戸跡
3 第112号井戸跡遺物出土状況
4 第113号井戸跡
5 第114号井戸跡
6 第120号井戸跡
7 第129号井戸跡
8 第139号井戸跡

図版64 1 第140号井戸跡
2 第141号井戸跡
3 第142号井戸跡
4 第142号井戸跡遺物出土状況
5 第39号溝跡
6 第39号溝跡遺物出土状況（1）
7 第39号溝跡遺物出土状況（2）
8 第56号溝跡

図版65 1 第57号溝跡
2 第57号溝跡遺物出土状況（1）
3 第57号溝跡遺物出土状況（2）
4 第65号溝跡 5 第78号溝跡
6 第83号溝跡 7 第147号溝跡
8 第148号溝跡

図版66 1 第149号溝跡
2 第149号溝跡炭化物層検出状況
3 第150号溝跡
4 第151号溝跡
5 第152号溝跡（北から）

図版67 1 第152号溝跡（南から）
2 第199・200号溝跡
3 第216号溝跡
4 第230号溝跡
5 第230号溝跡遺物出土状況

図版68 1 第7号竈跡 2 第55号土壙
3 第57号土壙 4 第67号土壙
5 第88号土壙 6 第90号土壙</p> | <p>7 第95号土壙 8 第97号土壙
9 第97号土壙馬骨出土状況
10 第99号土壙 11 第101号土壙
12 第110号土壙
13 第110号土壙遺物出土状況
14 第111号土壙 15 第113号土壙
16 第114号土壙 17 第117号土壙
18 第129号土壙

図版69 1 第171号土壙 2 第178号土壙
3 第203号土壙 4 第209号土壙
5 第224号土壙
6 第226・228号土壙
7 第227号土壙 8 第229号土壙
9 第233・234号土壙
10 第236号土壙
11 第236号土壙遺物出土状況
12 第237号土壙
13 第237号土壙炭化物堆積層
14 第240号土壙 15 第247号土壙
16 第247号土壙遺物出土状況
17 第256号土壙 18 第257号土壙

図版70 1 第259号土壙
2 第259号土壙遺物出土状況
3 第260号土壙 4 第262号土壙
5 第263号土壙
6 第263号土壙遺物出土状況（1）
7 第263号土壙遺物出土状況（2）
8 第264号土壙 9 第265号土壙
10 第266号土壙 11 第267号土壙
12 第267号土壙炭化物検出状況
13 第268号土壙 14 第271号土壙
15 第272号土壙 16 第275号土壙
17 第275号土壙炭化物検出状況
18 第277号土壙

図版71 1 第227号土壙遺物出土状況
2 第284号土壙
3 第284号土壙遺物出土状況</p> |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

4	第285号土壙	5	第286号土壙	3	第23号住居跡出土遺物	
6	第287号土壙	7	第290号土壙	4	第25号住居跡出土遺物	
8	第307号土壙			5～7	第26号住居跡出土遺物	
9	第307号土壙遺物出土状況			8・9	第29号住居跡出土遺物	
10	第318号土壙	11	第331号土壙	図版83	1～6 第42号住居跡出土遺物	
12	第331号土壙遺物出土状況			7	第45号住居跡出土遺物	
13	第340号土壙	14	第343号土壙	8	第47号住居跡出土遺物	
15	第348号土壙			9	第49号住居跡出土遺物	
16	第348号土壙遺物出土状況			図版84	1～5 第55号住居跡出土遺物	
17	第355号土壙	18	第420号土壙	6	第62号住居跡出土遺物	
図版72	1	第426号土壙	2	第427号土壙	7～10 第64号住居跡出土遺物	
	3	第429号土壙	4	第430号土壙	図版85	1～5 第64号住居跡出土遺物
	5	第431号土壙	6	第434号土壙	6	第65号住居跡出土遺物
	7	第434号土壙遺物出土状況（1）			7・8 第68号住居跡出土遺物	
	8	第434号土壙遺物出土状況（2）			9 第90号住居跡出土遺物	
	9	第3号遺物集中地点（1）		図版86	1～7 第92号住居跡出土遺物	
	10	第2号遺物集中地点（1）			8・9 第94号住居跡出土遺物	
	11	第2号遺物集中地点（2）		図版87	1～7 第94号住居跡出土遺物	
	12	第3号遺物集中地点（2）			8～10 第96号住居跡出土遺物	
	13	第3号遺物集中地点（3）		図版88	1～8 第96号住居跡出土遺物	
図版73	1～4	第5号住居跡出土遺物			9・10 第97号住居跡出土遺物	
	5～8	第6号住居跡出土遺物		図版89	1～11 第98号住居跡出土遺物	
図版74	1～8	第6号住居跡出土遺物		図版90	1～10 第98号住居跡出土遺物	
図版75	1	第6号住居跡出土遺物		図版91	1～12 第99号住居跡出土遺物	
	2	第9号住居跡出土遺物		図版92	1～9 第99号住居跡出土遺物	
	3～8	第10号住居跡出土遺物			10 第101号住居跡出土遺物	
図版76	1～9	第10号住居跡出土遺物		図版93	1 第128号井戸跡出土遺物	
図版77	1～10	第10号住居跡出土遺物			2・3 第131号井戸跡出土遺物	
図版78	1～5	第10号住居跡出土遺物			4～6 第40号溝跡出土遺物	
	6～8	第14号住居跡出土遺物			7・8 第68号溝跡出土遺物	
図版79	1～6	第14号住居跡出土遺物			9 第227号溝跡出土遺物	
	7	第15号住居跡出土遺物		図版94	1 第222号土壙出土遺物	
	8	第16号住居跡出土遺物			2 第223号土壙出土遺物	
図版80	1～3	第16号住居跡出土遺物			3 第320号土壙出土遺物	
	4～7	第17号住居跡出土遺物			4・5 第327号土壙出土遺物	
図版81	1～8	第17号住居跡出土遺物			6～9 第347号土壙出土遺物	
図版82	1・2	第21号住居跡出土遺物			10 第352号土壙出土遺物	

図版95	1～4	第354号土壙出土遺物	6・7	第39号住居跡出土遺物	
	5・6	第1号遺物集中出土遺物	8	第43号住居跡出土遺物	
	7～9	河川跡出土遺物	9・10	第44号住居跡出土遺物	
図版96	1～10	河川跡出土遺物	図版112	1・2	第44号住居跡出土遺物
図版97	1～8	河川跡出土遺物		3	第56号住居跡出土遺物
図版98	1～9	河川跡出土遺物		4	第58号住居跡出土遺物
図版99	1～9	河川跡出土遺物		5	第66号住居跡出土遺物
図版100	1～9	河川跡出土遺物		6～10	第73号住居跡出土遺物
図版101	1～7	河川跡出土遺物	図版113	1～4	第73号住居跡出土遺物
	8・9	遺構外出土遺物		5～8	第74号住居跡出土遺物
図版102	1	土玉		9	第75号住居跡出土遺物
	2	羽口	図版114	1～10	第75号住居跡出土遺物
	3	金属製品	図版115	1～3	第75号住居跡出土遺物
	4	石製品（1）		4	第77号住居跡出土遺物
	5	石製品（2）		5～8	第78号住居跡出土遺物
	6	石製品（3）		9～11	第81号住居跡出土遺物
	7	木製品（1）		12	第82号住居跡出土遺物
	8	木製品（2）	図版116	1～9	第82号住居跡出土遺物
図版103	1・2	第1号住居跡出土遺物	図版117	1	第83号住居跡出土遺物
	3～10	第2号住居跡出土遺物		2～9	第85号住居跡出土遺物
図版104	1～3	第2号住居跡出土遺物		10	第86号住居跡出土遺物
	4～7	第3号住居跡出土遺物	図版118	1	第86号住居跡出土遺物
図版105	1～7	第3号住居跡出土遺物		2～10	第89号住居跡出土遺物
図版106	1～5	第3号住居跡出土遺物	図版119	1～3	第89号住居跡出土遺物
	6・7	第12号住居跡出土遺物		4・5	第91号住居跡出土遺物
図版107	1	第13号住居跡出土遺物		6～11	第102号住居跡出土遺物
	2	第20号住居跡出土遺物	図版120	1	第2号掘立柱建物跡出土遺物
	3～7	第22号住居跡出土遺物		2	第3号掘立柱建物跡出土遺物
	8～10	第27号住居跡出土遺物		3～6	第112号井戸跡出土遺物
図版108	1・2	第27号住居跡出土遺物		7・8	第142号井戸跡出土遺物
	3	第28号住居跡出土遺物	図版121	1・2	第39号溝跡出土遺物
	4	第31号住居跡出土遺物		3・4	第56号溝跡出土遺物
	5～9	第33号住居跡出土遺物		5	第57号溝跡出土遺物
図版109	1～9	第36号住居跡出土遺物		6	第149号溝跡出土遺物
図版110	1～9	第36号住居跡出土遺物		7	第152号溝跡出土遺物
	10	第37号住居跡出土遺物		8	第216号溝跡出土遺物
図版111	1～5	第38号住居跡出土遺物		9	第230号溝跡出土遺物

10	第5号畠跡出土遺物	11	第309号土壙出土遺物
11	第6号畠跡出土遺物	図版124 1	第318号土壙出土遺物
図版122 1	第55号土壙出土遺物	2	第331号土壙出土遺物
2	第67号土壙出土遺物	3～5	第420号土壙出土遺物
3	第153号土壙出土遺物	6	第426号土壙出土遺物
4	第171号土壙出土遺物	7	第429号土壙出土遺物
5	第178号土壙出土遺物	8・9	第430号土壙出土遺物
6	第234号土壙出土遺物	図版125 1・2	第434号土壙出土遺物
7	第237号土壙出土遺物	3・4	第2号遺物集中出土遺物
8	第247号土壙出土遺物	5～7	第3号遺物集中出土遺物
9	第257号土壙出土遺物	8	遺構外出土遺物
10	第263号土壙出土遺物	図版126 1	土錘・羽口・鉄滓
図版123 1～6	第263号土壙出土遺物	2	金属製品
7	第268号土壙出土遺物	3	石製品（1）
8	第271号土壙出土遺物	図版127 1～3	石製品（2）～（4）
9	第272号土壙出土遺物	図版128 1～3	石製品（5）～（7）
10	第284号土壙出土遺物		

3 古代の遺構と遺物

古代の遺構は、住居跡44軒、掘立柱建物跡6棟、井戸跡13基、畠跡5箇所、溝跡68条、土壙153基、遺物集中2箇所が検出された。

住居跡は古墳時代に引き続き、遺跡中央部の170m程の範囲に集中する。ただし、9世紀中葉以降になると、1軒ずつではあるが、西側調査区やVI区等にも住居跡が造られるようになる。

8世紀初頭から10世紀前半まで集落跡は継続するが、8世紀後半は一時的な断絶が認められる。これは古墳時代と同じように、集落の中心が別の箇所に移っていたと考えられる。

住居跡の規模は、4m前後の小型のものが多く、10世紀前半まであまり変化は認められない。主軸方位は、東側調査区の中央からIII区にかけては、北または東を向くものが多く、統一感がある。ただし、第78・86号住居跡は東に傾き、完全に統制されていたわけでは無い。

中央調査区東側から東側調査区西寄りにかけて検出された住居跡群は、いずれもやや西に主軸が傾く特徴が認められる。集落域の西端に位置することから、何らかの制約があったのであろうか。

掘立柱建物跡は東側調査区からIV区にかけて検出され、その分布は集落域と重複する。基本的には側柱建物だが、1棟のみ総柱建物が検出された。おそらく、集落に付属する倉庫のような施設であったと考えられる。

井戸跡は東側調査区、II・VI区から検出され、全て素掘りであった。このうちVI区から検出された第142号井戸跡からは、中央部に須恵器大甕の破片が廃棄された状態で検出された。上層から検出されているため、埋没が進んだ段階で捨てられたものと考えられ、隣接する遺物集中地点の遺物と接合関係にある点が注目される。

溝跡は調査区全域で検出された。特に、第152号溝跡は調査区を横断する大規模な溝跡で、何等かの区画施設等であった可能性が考えられる。

畠跡は集落の周辺から検出されている。走行方向は基本的に南—北方向で、統一感がある。

土壙は調査区全域で検出され、特にII区からVI区にかけて多く分布する傾向にある。

遺物集中地点はVI区から2箇所検出された。どちらも9世紀中葉から後半の時期に形成されたもので、10m前後の範囲から遺物が多数検出され、石製の巡方が出土した点は特筆される。

この他に、宮東遺跡からは、地震によって発生した液状化現象による噴砂の痕跡が多数検出された。中央調査区、II～VI区の各調査区で検出されており、住居跡内や溝跡内から検出されたものもあった。遺構内や遺構の周辺で検出されたもの等は各遺構図に示した。

自然現象である噴砂の走行方向に画一性は認められないが、北西—南東方向に走行するものと、北東—南西方向に走行するものが多い点が注目される。

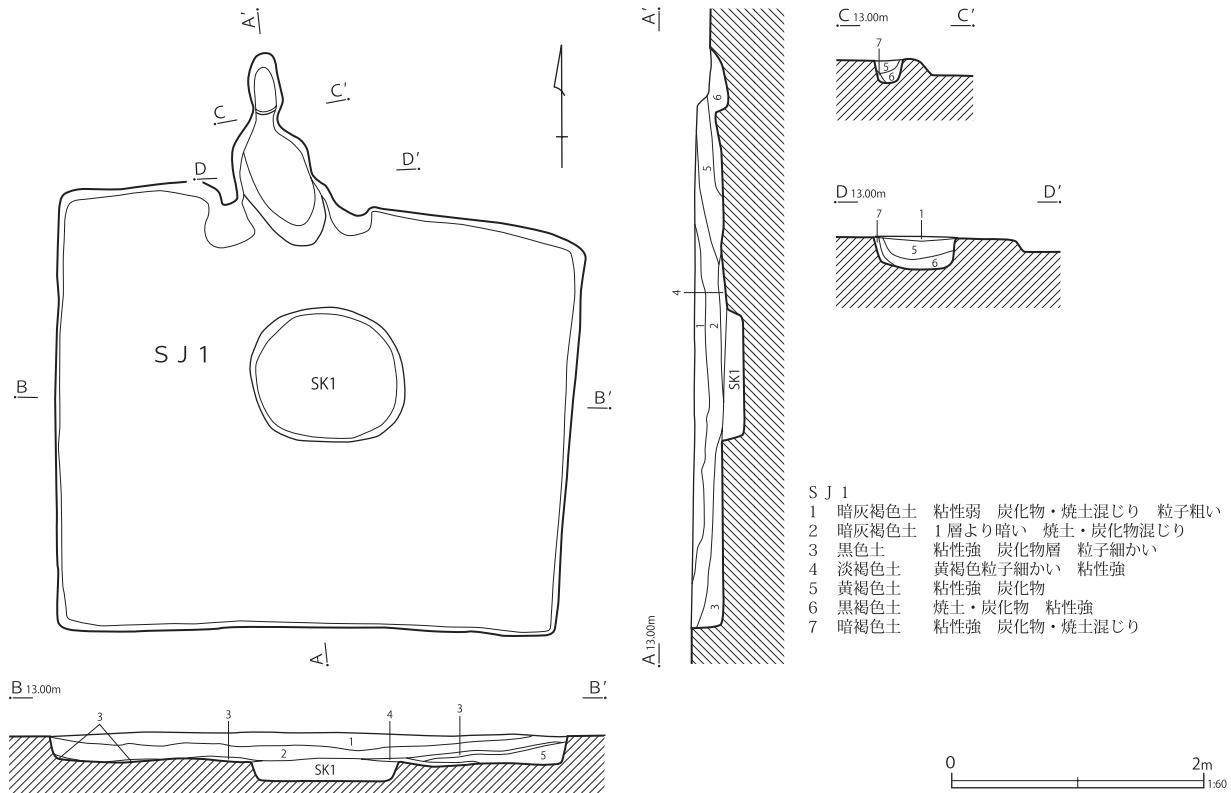
これが立地に起因するものなのか、震源の違いによるものなのか、環境によるものなのか等、要因はさまざま考えられるが、詳細は不明である。

遺物については、須恵器は識別できた限りで武藏国南比企、末野、東金子、上野国太田金山、下野国三毳、益子、堀ノ内、下總国三和、常陸国新治など、実に様々な地域の土器が出土した。

土師器でも、上総地方の製品と考えられる内面に斜格子状暗文の施された壺や、宮西遺跡でも検出された三河型甕、東海地方で使用される伊勢型甕など、広範な地域から土器類が持ち込まれている状況が捉えられた。

(1) 住居跡

古代の住居跡は、44軒検出された。時期がわかるものを細かく見ていくと、8世紀前半が9軒、8世紀中葉が8軒、9世紀前半が4軒、9世紀中葉が5軒、9世紀後半が7軒、10世紀前半が1軒となる。



第234図 第1号住居跡

第1号住居跡（第234図）

第1次調査における東側調査区の中央北壁際、H-14グリッドに位置する。

平面形態は東西にやや長い長方形で、規模は長軸4.17m、短軸3.50m、深さ0.24mを測り、主軸方位はN-1°-Wを指す。覆土はレンズ状に堆積する。全層に焼土や炭化物を含み、南側の床面付近からは、三角堆積状の炭化物層が検出された。北壁やや西寄りには、カマドが設けられる。住居跡の中央部からは、床下土壙と考えられる第1号土壙が検出された。

カマドは、袖が0.5m程住居跡内に張り出し、燃焼部は僅かに掘り窪められ、煙道部との境界に0.10m程の段を持つ構造である。カマドの規模は全長1.54m、幅0.61m、深さ0.24mを測る。覆土には焼土や炭化物粒子を含むが、明確な焼土層や炭化物層は検出されなかった。

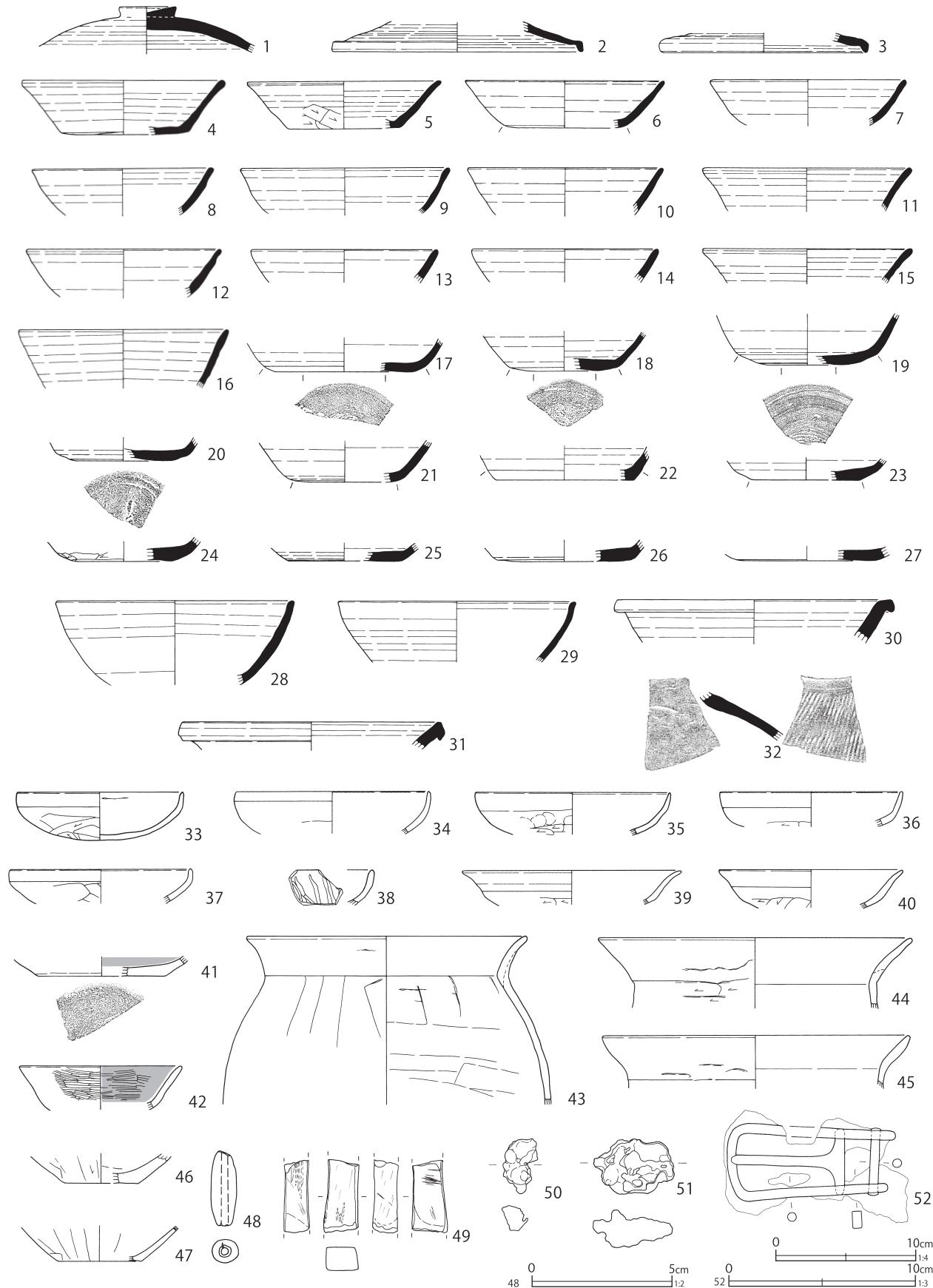
壁溝、ピット等は検出されなかった。

遺物は須恵器蓋・坏・塊・鉢・甕、土師器坏・甕、ロクロ土師器坏、土錐、砥石、鉄滓、鉗具が出土した（第235図1～52）。

1～32は須恵器である。1～3は蓋で、2は南北企の製品である。1は胎土に角閃石を含む。4～27は坏である。南北企の製品を主体とし、新治、三毳、益子または堀ノ内等の製品を含む。特に、新治の製品が、南北企に次いで多い点が注目される。南北企の坏はいずれも、底部回転糸切り離し後外周回転ヘラケズリ調整と推察され、鳩山編年III期に帰属するものと考えられる。

4、5は新治の製品で、底部調整は単一方向の手持ちヘラケズリが施される。また、5は外面下半に手持ちヘラケズリが施される。16は色調・胎土が三毳の製品と類似するが、内外面のロクロ目がきつい。20は底部回転ヘラ切り離し無調整のもので、益子または堀ノ内の製品と考えられる。

28、29は塊で、南北企の製品である。30は鉢と



第235図 第1号住居跡出土遺物

第66表 第1号住居跡出土遺物観察表（第235図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	—	[3.4]	—	I K	70	良好	黄灰	硬質で0.4mm程の角閃石を含む 胎土は緻密 外面回転ヘラケズリ後ナデ調整	
2	須恵器	蓋	(17.7)	[2.1]	—	I J	10	普通	灰赤	南比企産 外面に坏との重ね焼きによる変色が認められる 焼成は良いが還元不良により赤色を呈する	
3	須恵器	蓋	(14.6)	[1.4]	—	I K	5	良好	黄灰	外面降灰	
4	須恵器	坏	14.1	3.9	9.1	I K	50	普通	黄灰	新治産 底部手持ちヘラケズリ 体部外面下端に煤付着 内面のロクロ目がきつい	103-1
5	須恵器	坏	(13.6)	[3.3]	(8.1)	A I K	15	普通	褐灰	新治産 体部外面下端手持ちヘラケズリ 外面のロクロ目きつい	
6	須恵器	坏	(14.0)	3.3	(7.4)	I J K	15	普通	黄灰	南比企産 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	
7	須恵器	坏	(13.7)	[3.3]	—	I J K	10	普通	灰白	南比企産 器面の摩耗が激しい	
8	須恵器	坏	(12.6)	[3.4]	—	I J K	20	良好	灰白	南比企産 外面の器面が非常に滑らか 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	
9	須恵器	坏	(14.8)	[3.3]	—	I J K	10	良好	灰	南比企産 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	
10	須恵器	坏	(13.8)	[3.4]	—	E I K	10	普通	灰白	三毳産か	
11	須恵器	坏	(14.5)	[3.0]	—	A I K	5	普通	灰白	新治産	
12	須恵器	坏	(13.7)	[3.4]	—	I K	15	普通	灰白	器面の剥離が激しい	
13	須恵器	坏	(14.7)	[2.3]	—	I K	5	普通	灰白	三毳産	
14	須恵器	坏	(13.1)	[2.4]	—	I K	15	良好	灰		
15	須恵器	坏	(14.7)	[2.5]	—	A I K	20	普通	黄灰	新治産	
16	須恵器	坏	(14.8)	[4.2]	—	E I K	20	普通	灰白	内外面のロクロ目きつい	
17	須恵器	坏	—	[2.4]	(9.9)	C I K	20	普通	灰白	三毳産か 外周回転ヘラケズリ 内面摩耗が激しい	
18	須恵器	坏	—	[2.7]	(7.7)	E H I J K	20	普通	淡黄	南比企産	
19	須恵器	坏	—	[3.6]	(7.3)	C E I K	30	良好	灰白	三毳産か 外周回転ヘラケズリ	
20	須恵器	坏	—	[1.6]	(7.9)	E I	25	良好	灰	益子産または堀ノ内産か 回転ヘラ切り離し無調整	
21	須恵器	坏	—	[2.9]	(7.4)	I J K	20	普通	灰	南比企産	
22	須恵器	坏	—	[2.4]	(10.0)	A I	5	良好	灰褐	新治産 底部および体部外面下端に回転ヘラケズリ調整が施される	
23	須恵器	坏	—	[1.5]	(8.0)	E K	10	普通	灰白	三毳産か	
24	須恵器	坏	—	[1.4]	(7.8)	I K	40	普通	灰白	強く被熱 摩耗が激しい	
25	須恵器	坏	—	[1.3]	(8.0)	I K	5	良好	橙	南比企産	
26	須恵器	坏	—	[1.5]	(9.7)	D E I K	10	普通	灰白	内面煤付着 底部手持ちヘラケズリ調整	
27	須恵器	坏	—	[0.9]	(10.0)	E I J K	5	普通	にぶい褐	南比企産 焼成不良により褐色になっている	
28	須恵器	塊	(16.8)	[6.0]	—	E I J	20	良好	灰	南比企産	
29	須恵器	塊	(16.6)	[4.3]	—	I J K	10	良好	褐	南比企産	
30	須恵器	鉢	(19.3)	[3.1]	—	D I J K	5	普通	灰白	南比企産 鈿状物質は短く少ない 0.3～0.4cm程の小礫や長石を含む	
31	須恵器	甕	(18.1)	[1.9]	—	A I K	5	普通	黄灰	新治産	
32	須恵器	甕	—	[3.4]	—	I K	—	—	灰白		
33	土師器	坏	(11.6)	3.4	—	C E I K	30	普通	橙	口縁部歪み強い 内面油煙付着か	103-2
34	土師器	坏	(13.7)	[3.0]	—	C I K	5	普通	にぶい橙		
35	土師器	坏	(13.8)	[3.0]	—	C I K	10	普通	褐		
36	土師器	坏	(12.9)	[2.5]	—	C I	10	普通	橙		
37	土師器	坏	(12.8)	[2.4]	—	C I K	10	普通	橙		
38	土師器	坏	—	[2.5]	—	B I K	5	普通	橙	暗文	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
39	土師器	坏	(15.3)	[2.4]	—	C I K	5	普通	橙		
40	土師器	坏	(13.0)	[2.7]	—	B C I K	20	普通	橙		
41	ロクロ土師器	坏	—	[1.3]	(9.0)	C H I K	20	普通	にぶい橙	内黒 内外面摩耗により調整不明 外面黒斑有り	
42	ロクロ土師器	坏	(11.4)	[3.1]	—	E H I K	15	普通	にぶい黄橙	内黒	
43	土師器	甕	(19.6)	[12.1]	—	A H I K	20	普通	にぶい赤褐	内外面ともに摩耗が激しい	
44	土師器	甕	(21.8)	[5.0]	—	C I K	15	普通	橙		
45	土師器	甕	(21.5)	[3.8]	—	C I K	20	普通	にぶい橙	内外面煤付着	
46	土師器	甕	—	[2.1]	(5.1)	E H I K	25	普通	にぶい黄橙	内外面ともに摩耗	
47	土師器	甕	—	[2.6]	(6.0)	C I K	25	普通	灰黄褐	外面全体煤付着	
48	土製品	土錘	長さ4.0 孔径0.3	幅1.4 重さ7.1g		B C I K	100	普通	橙		126-1
49	石製品	砥石	長さ[5.2]	幅2.5	厚さ1.8	重さ39.6g				凝灰岩か 砥面4遺存	127-1
50	鉄滓	鍛冶滓	長さ2.9	幅1.7	厚さ1.3	重さ6.6g					126-1
51	鉄滓	楕形鍛冶滓	長さ2.9	幅4.2	厚さ2.0	重さ20.6g					126-1
52	鉄製品	鉸具	長さ9.0	幅4.2	厚さ0.9	重さ103.2g				大型の方形鉸具 馬具（鎧か腹帶）の鉸具か	126-2

推察される。31、32は甕である。32は外面に平行タタキが施される。

33～40は土師器の坏である。33～36は北武藏型坏で、口縁部はやや外反気味に立ち上がる。38は暗文坏の破片である。39、40は皿形の坏で、口縁部が大きく外反する。41、42はロクロ土師器で、内黒の坏である。41は底径が広く、42は内外面にミガキが施される。

43～47は土師器の甕である。43は頸部が「く」の字状になるもので、胴部上位に最大径を持つ。44は口縁部に最大径を持つが、胴部がやや膨らむものと推察される。

48は土製品の土錘である。49は凝灰岩製の砥石か。50、51は鉄滓で、51は楕形鍛冶滓である。52は鉄製品の鉸具で、大型であることから馬具の鉸具と考えられる。

遺物の時期は、須恵器坏の年代や土師器坏・甕の形状から、8世紀中葉と考えられる。

第2号住居跡（第236・237図）

第1次調査における東側調査区の中央部、I-14・15グリッドに位置する。

平面形態は方形で、規模は長軸6.23m、短軸6.22m、深さ0.23mを測り、主軸方位はN-2°

-Wを指す。覆土はレンズ状に堆積し、上層には砂質土、下層には炭化物・焼土粒子が含まれていた。

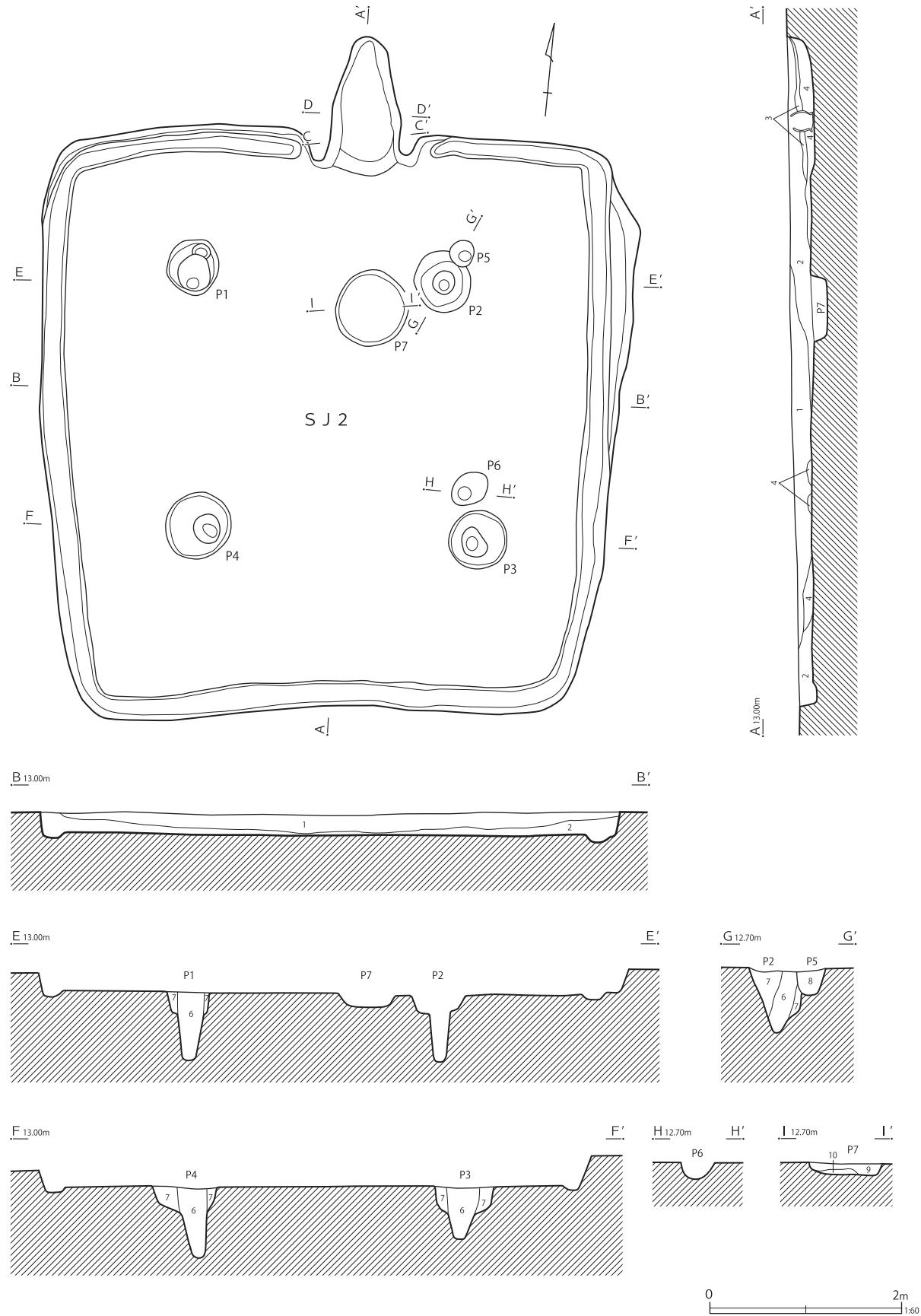
北壁中央部には、カマドが設けられ、壁溝はカマドを除いて全周する。住居跡内からは柱穴と考えられるピットが4基と、ピットの脇に位置する小ピットが3基検出された。

カマドは、袖が0.4m程住居跡内に張り出し、燃焼部は僅かに掘り窪められ、奥壁から煙道部に向って急峻に立ち上がる構造を持つ。カマドの規模は全長1.43m、幅0.82m、深さ0.29mを測る。

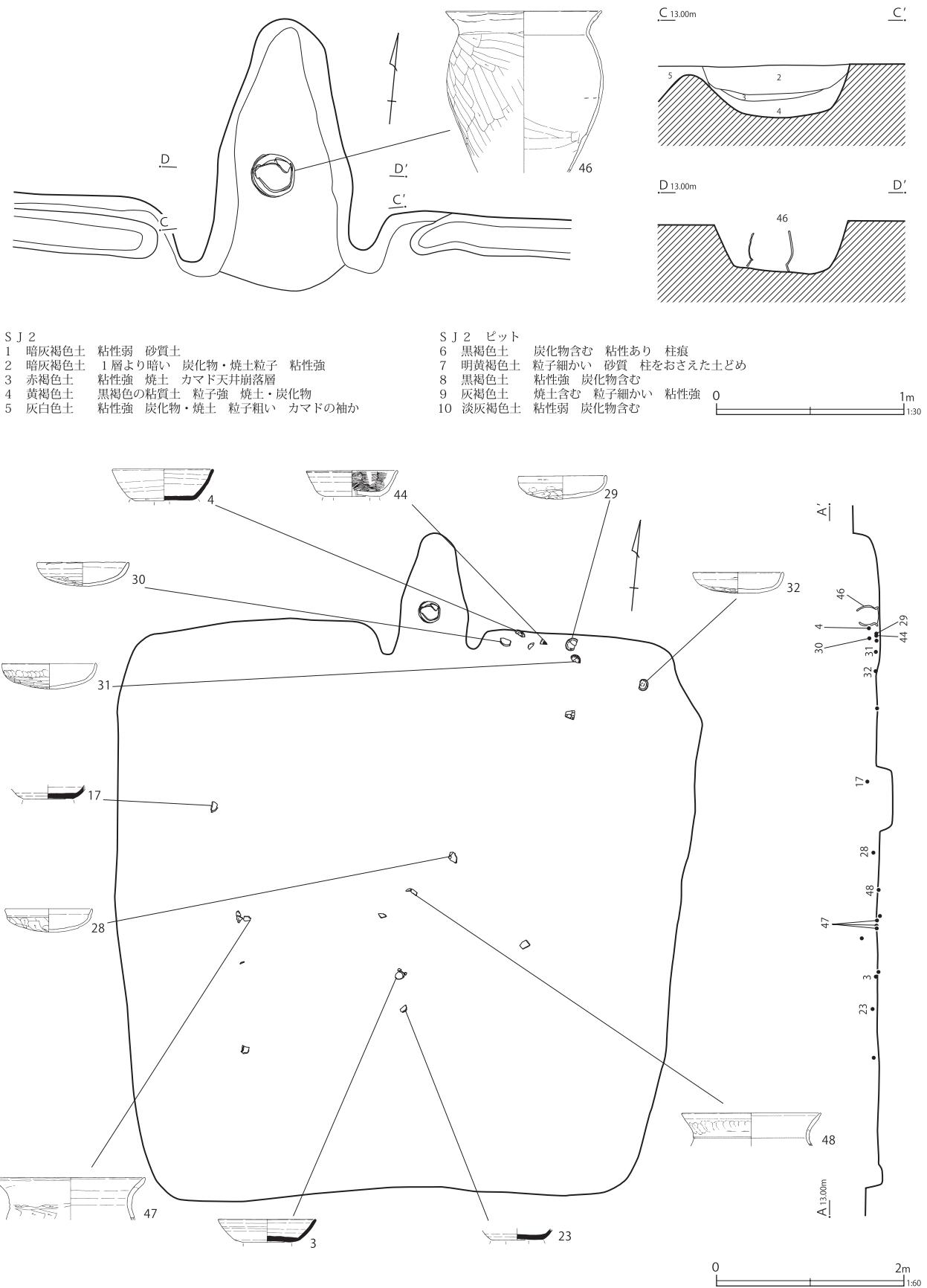
覆土は火床面直上に焼土や炭化物を含む黄褐色土が厚く堆積し、その上をカマド天井の崩落層と考えられる赤褐色土が覆う。カマド燃焼部の中央には、下端部を打ち欠かれた土師器の甕が逆位で据えられ、支脚として転用されていたと推察される。覆土中から明確な焼土層や炭化物層は検出されなかった。

壁溝はカマドを除いて全周し、規模は幅0.20～0.32m、深さ0.04～0.06mを測る。

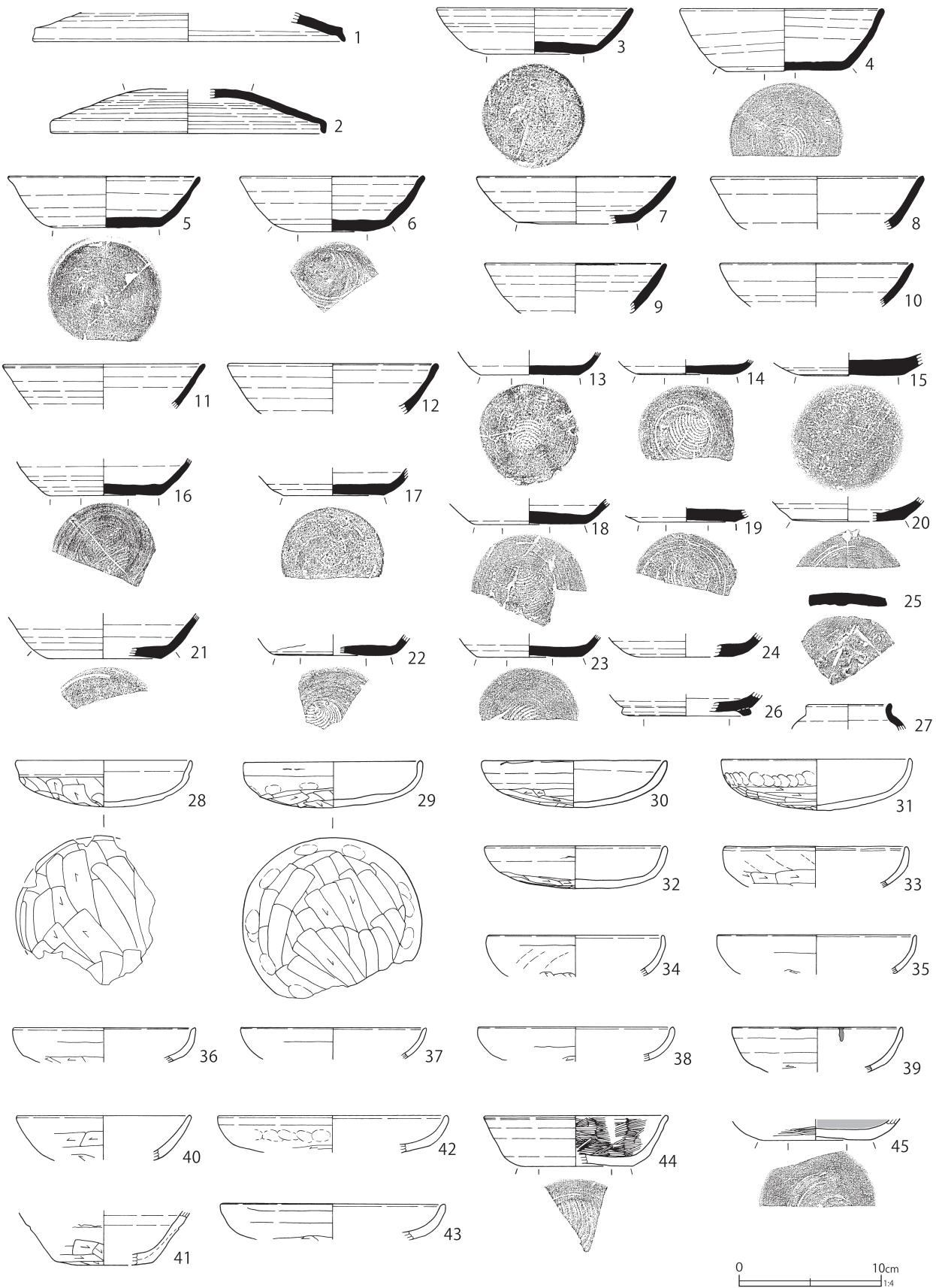
ピットは7基検出された。このうちピット1～4は、等間隔で方形に並ぶことから、住居跡の柱穴と考えられる。柱間は芯々距離で2.60～2.70m



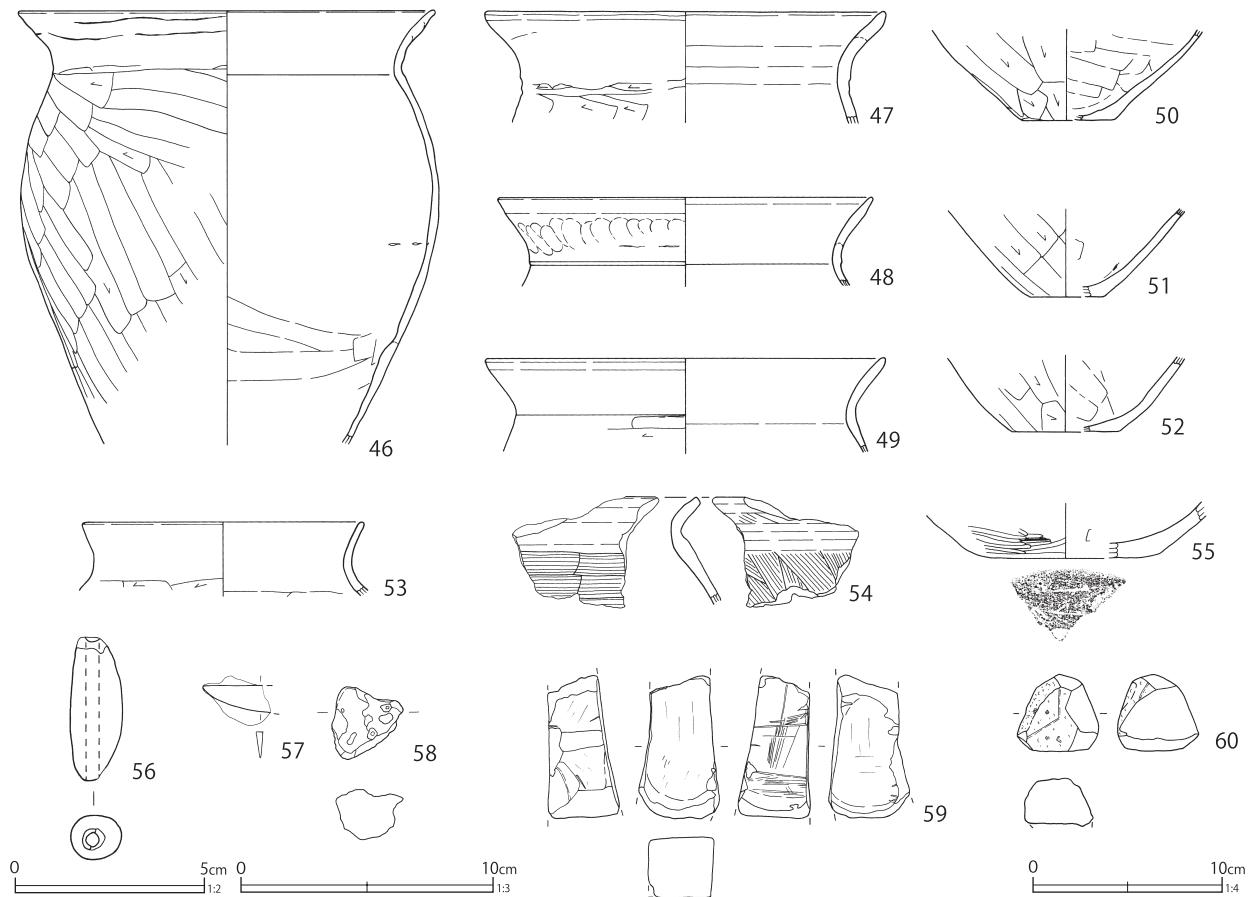
第236図 第2号住居跡（1）



第237図 第2号住居跡（2）・遺物出土状況



第238図 第2号住居跡出土遺物（1）



第239図 第2号住居跡出土遺物（2）

である。平面形態は円形または橢円形で、ピットの中心部に、柱材を据えるための円形のピットが深く掘り込まれ、周囲に根固めのための砂質土が充填される。

各ピットの規模は、ピット1が長径0.58m、短径0.53m、深さ0.70mを測る。ピット2は長径0.64m、短径0.58m、深さ0.72mを測る。ピット3は直径0.61m、深さ0.53mを測る。ピット4は長径0.71m、短径0.68m、深さ0.70mを測る。

ピット2・3には、脇に小規模なピット5・6が掘り込まれ、ピット1の北側にも同様の小穴が認められる。規模は、ピット5が長径0.27m、短径0.25m、深さ0.25mを測り、ピット6が長径0.42m、短径0.31m、深さ0.18mを測る。ピット2と5の重複関係を見ると、ピット5が後から掘削されていることがわかる。柱の補強材を立てた柱穴か。

ピット7はカマドの正面に位置する。平面形態は橢円形で、規模は長径0.80m、短径0.73m、深さ0.10mを測る。カマドの灰を掻き出して埋めたピットと状況は似るが、覆土には炭化物や焼土を少量含むものの、明確な炭化物層や焼土層は検出されなかった。

遺物は住居跡中央部と、カマドの周辺から多く検出され、須恵器蓋・壺・高台付壺・小型壺、土師器壺・皿・甕、ロクロ土師器壺、土錐、砥石・磨石、刀子等が出土した（第238・239図1～60）。

1～27は須恵器である。1、2は蓋で、2は南比企の製品である。1は肉厚で摘まみ上げのような口唇部を持つ。

3～25は壺である。南比企の製品を主体とし、新治、三毳等の製品が僅かに含まれる。南比企の製品は、底部全周回転ヘラケズリ調整と底部回転

第67表 第2号住居跡出土遺物観察表（第238・239図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(21.9)	[2.0]	—	E I K	10	良好	灰	南比企産 胎土は緻密 口唇部外縁および内面に重ね焼きによる変色が認められる（高台付坏、蓋による交互重ね）	
2	須恵器	蓋	19.0	[3.0]	—	I	50	良好	灰	No.14 南比企産 底部全周回転ヘラケズリ後ナデ消しか	103-3
3	須恵器	坏	(13.5)	3.2	6.8	E I J K	65	良好	灰	No.3 南比企産 鳩山Ⅲ期 底部周辺回転ヘラケズリ 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	103-4
4	須恵器	坏	13.9	4.4	7.9	E I J K	50	普通	灰白	南比企産 底部全周回転ヘラケズリ 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	103-5
5	須恵器	坏	13.3	3.6	7.4	E H I J K	60	普通	灰	南比企産 底部全周回転ヘラケズリ 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	
6	須恵器	坏	(12.7)	3.9	(4.9)	E I J K	35	普通	灰白	南比企産 胎土は粗い	
7	須恵器	坏	(13.8)	3.3	(8.4)	E I K	20	普通	灰白	底部回転ヘラケズリ調整	
8	須恵器	坏	(14.6)	[3.7]	—	E I K	25	普通	灰黄	全体強く被熱 器面の摩耗が激しい	
9	須恵器	坏	(12.5)	[3.5]	—	E I K	10	良好	灰白	内面口唇部直下に巻き上げ痕が巡る	
10	須恵器	坏	(13.3)	[4.1]	—	E I K	15	普通	灰白	三毳産か	
11	須恵器	坏	(13.9)	[3.2]	—	I J	20	普通	灰	南比企産	
12	須恵器	坏	(14.4)	[3.5]	—	E I J K	20	良好	灰	南比企産 鳩山Ⅱ期か 外面降灰	
13	須恵器	坏	—	[1.7]	6.8	E I J K	80	普通	灰白	南比企産	
14	須恵器	坏	—	[1.0]	(7.0)	I J K	60	普通	灰白	南比企産	
15	須恵器	坏	—	[1.6]	7.1	E I K	90	普通	灰白	下総産か 要検討 内外面ともに黒く変色している 外面は器面の剥離が激しい	
16	須恵器	坏	—	[2.3]	(7.6)	I J	35	良好	灰白	南比企産 鳩山Ⅱ期 ヘラ記号有り 底部外周回転ヘラケズリ	
17	須恵器	坏	—	[1.9]	7.0	E I J K	60	良好	灰	No.9 南比企産	
18	須恵器	坏	—	[1.8]	(7.7)	E I J K	50	普通	灰白	南比企産 焼成不良により内底部が褐色を呈する	
19	須恵器	坏	—	[0.9]	(6.7)	E I J K	40	良好	灰	南比企産	
20	須恵器	坏	—	[1.7]	(8.0)	C E I K	25	普通	灰白	外面は黒く変色している	
21	須恵器	坏	—	[3.1]	(7.9)	I J K	30	良好	灰	南比企産 内面降灰 微小な窯体付着体部下端および底部回転ヘラケズリ	
22	須恵器	坏	—	[1.4]	(8.0)	I J K	15	良好	灰	南比企産 外面に積み上げ痕が残る	
23	須恵器	坏	—	[1.6]	(7.4)	I J K	40	普通	灰白	No.13 南比企産	
24	須恵器	坏	—	[1.6]	(6.9)	E I K	10	良好	灰		
25	須恵器	坏	—	[0.7]	—	A E I	35	良好	灰	新治産か 底部手持ちヘラケズリ	
26	須恵器	高台付坏	—	[1.5]	(8.0)	E I	10	良好	灰		
27	須恵器	小型壺	(5.6)	[1.7]	—	E I J K	10	普通	にぶい黄橙	南比企産	
28	土師器	坏	(12.2)	3.3	—	B C E K	55	普通	橙	No.18	103-6
29	土師器	坏	12.2	3.2	—	C I K	80	普通	橙	No.6 強い指頭痕により内面に凹凸ができる	103-7
30	土師器	坏	(12.8)	3.3	—	C E I K	50	普通	橙	No.2 北武藏型坏	103-8
31	土師器	坏	13.1	3.6	—	C E H I K	60	普通	橙	No.7	103-9
32	土師器	坏	12.5	3.0	—	C E I K	65	普通	橙	No.8	103-10
33	土師器	坏	(12.6)	[2.9]	—	C E I K	20	普通	黄橙	北武藏型坏	
34	土師器	坏	(12.1)	[2.8]	—	C I K	10	普通	橙		
35	土師器	坏	(13.8)	[2.7]	—	C I	10	普通	橙		
36	土師器	坏	(12.6)	[2.4]	—	C I K	15	普通	にぶい黄橙		
37	土師器	坏	(12.8)	[2.2]	—	C H I	10	普通	明赤褐	極微細な輝石を多く含む	
38	土師器	坏	(13.5)	[2.3]	—	C I	10	普通	橙	極微細な輝石を多く含む	
39	土師器	坏	(11.9)	[3.1]	—	C D I K	15	普通	橙	口唇部に油煙付着 黒斑有り	
40	土師器	坏	(12.0)	[3.1]	—	C H I K	15	普通	にぶい橙	内面全体煤付着	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
41	土師器	壺	—	[3.8]	(6.8)	C H I K	20	普通	橙	外面の積み上げ痕が明瞭に残る 灰白色粘土を粒状（1～3mm）に含む	
42	土師器	皿	(15.9)	[2.6]	(13.7)	C E I K	15	不良	橙		
43	土師器	皿	(15.6)	[2.5]	—	C E I K	15	普通	橙		
44	ロクロ土師器	壺	(12.7)	3.6	(7.9)	C H I K	25	普通	赤	下総系 内面ミガキ	104-1
45	ロクロ土師器	壺	—	[1.4]	(8.0)	C E	20	普通	黄橙	内黒 外面ミガキ 黒斑有り	
46	土師器	甕	21.8	[22.9]	—	C E H I K	90	普通	橙	No.1 支脚転用か	104-2
47	土師器	甕	(20.9)	[5.9]	—	C H I K	30	普通	橙	No.10	
48	土師器	甕	(19.5)	[4.7]	—	C E H I K	15	普通	にぶい橙	No.17	
49	土師器	甕	(21.0)	[5.0]	—	B C E H I K	15	普通	橙		
50	土師器	甕	—	[4.8]	(5.0)	B H I K	20	普通	明赤褐		
51	土師器	甕	—	[4.6]	(4.0)	C E I K	15	普通	にぶい橙		
52	土師器	甕	—	[4.0]	(5.6)	B C E I K	20	普通	橙		
53	土師器	甕	(14.4)	[3.9]	—	C E I K	20	普通	明赤褐	頸部内面煤付着	
54	土師器	甕	—	[5.7]	—	A E I K	5	普通	淡橙	伊勢型甕	104-3
55	土師器	甕	—	[3.0]	(10.0)	A E I	15	普通	にぶい赤褐	常陸型甕 脇部外面下端ミガキ 底部木葉痕有り	
56	土製品	土錐	長さ[3.7] 幅1.3 孔径0.3 重さ6.1g			C I K	100	普通	橙		126-1
57	鉄製品	刀子	刃長[2.8] 刃幅1.0 背幅0.3 重さ3.8g					切先			126-2
58	鉄滓	楕形鍛冶滓	長さ2.9 幅2.7 厚さ2.0 重さ92.1g								126-1
59	石製品	砥石	長さ[7.5] 幅4.3 厚さ3.8 重さ159.4g					凝灰岩 砥面4遺存 刀物痕			127-1
60	石製品	磨石	長さ4.0 幅[4.3] 厚さ[2.6] 重さ18.9g					角閃石安山岩 多孔質 自然面遺存 使用面1遺存			127-1

糸切り離し後外周回転ヘラケズリの2種類があり、後者が主体的である。これらは鳩山編年Ⅱ～Ⅲ期に帰属するものと考えられる。25は底部手持ちヘラケズリ調整で、底部中央にヘラ起こし痕が認められる。新治の製品か。

26は高台付壺で、高台部は低い。27は小型壺で、南北比企の製品である。

28～41は土師器の壺である。28～39は北武藏型壺で、やや大型のものが多く、外面中位に無調整帯を持ち、口縁部は外反氣味に立ち上がる。40、41は深身になる壺である。42、43は皿である。調整は北武藏型壺と類似する。

44、45はロクロ土師器の壺である。44は赤みが強く、内面全体に横方向のミガキが施され、底部は回転糸切り離し後外周回転ヘラケズリ調整が施される。45は内黒の壺で、底部は外周回転ヘラケズリ調整が施される。

46～55は土師器の甕である。46～53は武藏型甕で、46は頸部が「く」の字状になり、脇部上位に

最大径を持つ。脇部下端を打ち欠かれ、カマドの支脚に転用されていた。頸部形状から8世紀中葉に比定される。54は伊勢型甕である。内外面に刷毛目調整が施され、口唇部は僅かに摘み上げられる。55は常陸型甕である。胎土に雲母を多く含み、外面下端にミガキが施され、底部には木葉痕が認められる。

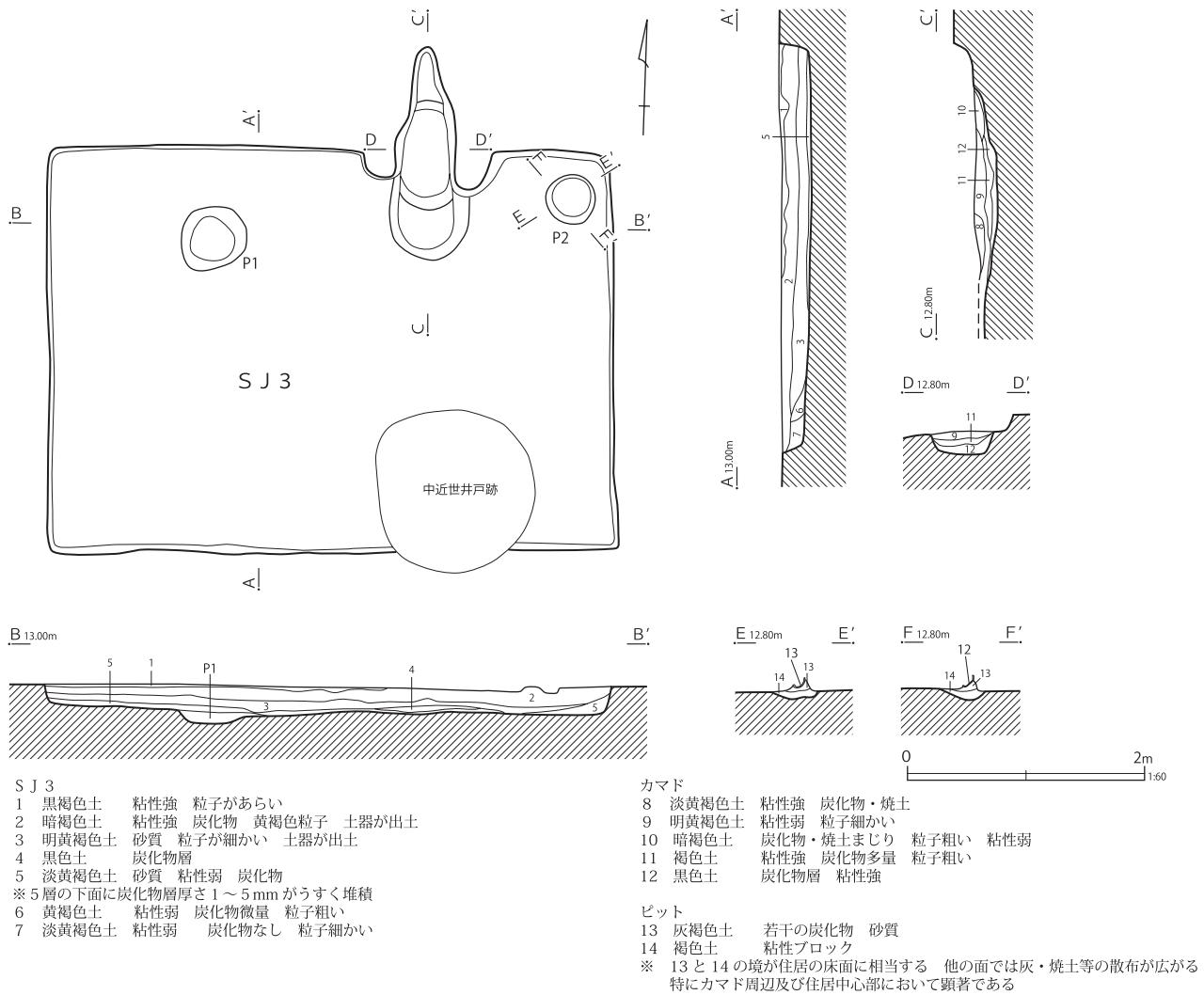
56は土製品の土錐である。57は鉄製品で、刀子の切先である。58は鉄滓である。59、60は石製品で、59は凝灰岩製の砥石であり、60は角閃石安山岩製の磨石である。

遺物の時期は、須恵器壺の年代や土師器壺・甕の形状から、8世紀中葉と考えられる。

第3号住居跡（第240・241図）

第1次調査における西側調査区の中央北壁際、D-4・5グリッドに位置し、南壁の一部を、中・近世の井戸跡によって壊される。

本住居跡は宮東遺跡の集落域からは西に60m離れ、宮西遺跡の集落域からも東に100m以上離れ



第240図 第3号住居跡

る孤立した住居跡である。出土遺物も内黒の壺が多く、内黒の大型壺を複数持つことなど、他の住居跡とは様相が異なる住居跡である。

平面形態は東西に長い長方形で、規模は長軸4.74m、短軸3.43m、深さ0.26mを測り、主軸方位はN-1°-Wを指す。覆土は水平堆積で、全層から遺物が多く出土した。上層は覆土に炭化物を含み、下層は砂質土が堆積する。床面直上には薄い炭化物層が堆積していた。

北壁やや東寄りには、カマドが設けられる。住居跡の北半部からは、ピットが2基検出された。

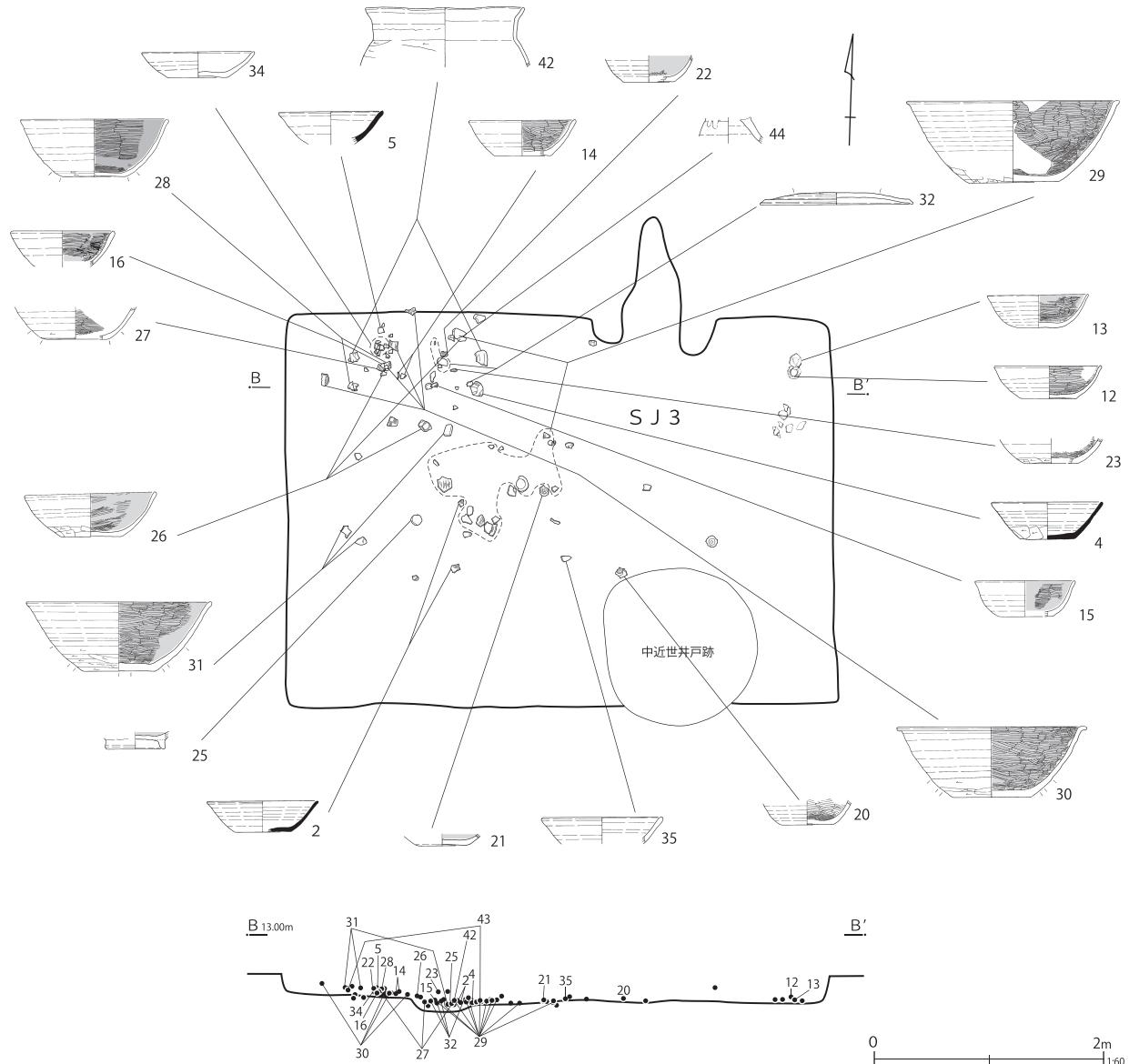
カマドは、袖が0.4m程住居跡内に張り出し、燃焼部は浅く掘り窪められ、煙道部に向って緩やか

に立ち上がる構造を持つ。

カマドの規模は、全長1.80m、幅0.50m、深さ0.18mを測る。覆土には焼土・炭化物を含み、火床面直上には炭化物層が形成されていたが、遺物は出土しなかった。

ピットは、住居跡の北半部から2基検出された。ピット1は西寄りに位置し、平面形態は橢円形で、規模は長径0.60m、短径0.53m、深さ0.07mを測る。周辺から遺物が多く出土した。

ピット2は住居跡北東隅に位置する。平面形態は円形で、規模は直径0.4m、深さ0.07mを測る。検出された位置から、貯蔵穴の可能性も考えられるが、遺物はあまり出土しなかった。



第241図 第3号住居跡遺物出土状況

壁溝は検出されなかった。

遺物は全層から多く出土したが、床面付近から出土した遺物の分布は、住居跡の北西部に集中し、器種は壺類が多く、甕類が少ない。カマド内から出土した遺物は無かつた。

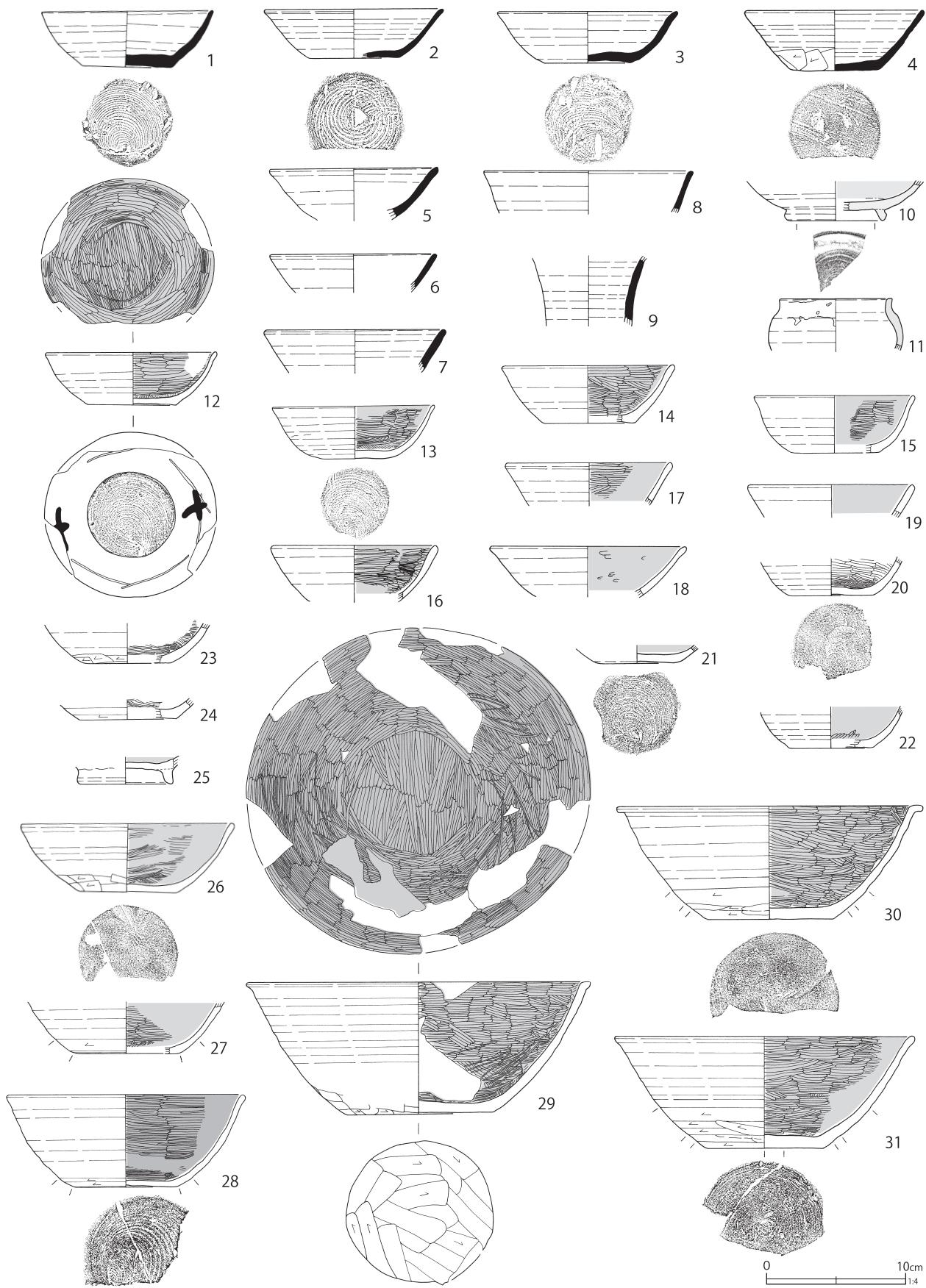
遺物は須恵器壺・塊・長頸瓶、灰釉陶器塊・小型壺、ロクロ土師器壺・塊・大塊・蓋、土師器甕が出土した（第242・243図1～44）。

1～9は須恵器である。1～7は壺で、南比企、末野、東金子、三毳、三和の製品が少量ずつ出土

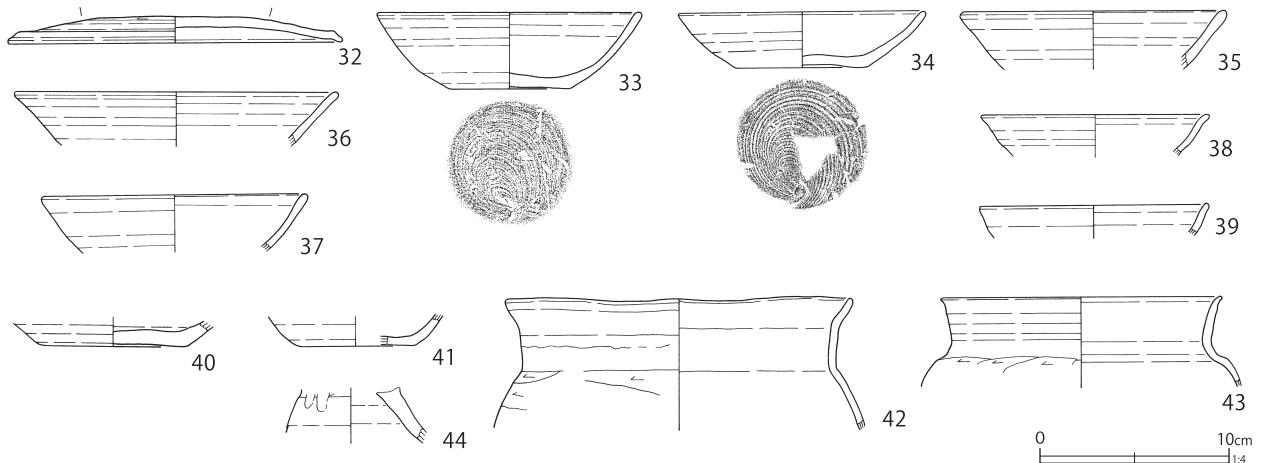
した。このうち1～4は全形がわかるもので、1は南比企、2は末野、3は三毳、4は三和と産地が異なる。1は鳩山編年VII期、4は浜ノ台段階と考えられる。

8は末野の製品で、口径が広く、直立気味に開くことから塊と推察される。9は長頸瓶で、南比企の製品である。

10、11は灰釉陶器である。10は塊で、東濃の製品と推察され、内面に刷毛塗りの痕跡が認められる。施釉方法や高台の形状から、光ヶ丘1号窯式



第242図 第3号住居跡出土遺物（1）



第243図 第3号住居跡出土遺物（2）

段階と考えられる。11は小型壺である。器面が発泡し、内面には降灰を受ける。

12～41はロクロ土師器である。12～24は内黒の壺で、いずれも胎土に角閃石を含むことから、利根川流域の製品と考えられる。底部調整は基本的に回転糸切り離し無調整で、23、24は外面下端に手持ちヘラケズリ調整が施される。

12、13は器壁が薄く、12は体部外面の2箇所に「十」と墨書きされ、体部中位に一条のミガキが廻る。

25は内黒の高台付壺で、底部のみが残存するため全体像は不明だが、高台部は低く、直線的である。

26～28はやや大型になる内黒の壺である。26、27は壺形で、26は外面下端に手持ちヘラケズリ調整が施され、底部は回転糸切り離し後に不整方向の手持ちヘラケズリ調整が施される。

27は外面下端に回転ヘラケズリ調整が施されるが、底部は糸切り離し無調整である。

28は椀形のもので、外面下端に回転ヘラケズリ調整が施され、底部は回転糸切り離し無調整である。

29～31は内黒の大壺である。いずれも胎土に角閃石を含むことから、利根川流域で作られた製品と考えられる。3点とも大型品であるが、器形や調整方法には差違が認められる。

29は口縁部に歪みがあるが、口径が20cmを越え

るもので、口唇部が僅かに外反して面を持つ。外面下端には手持ちヘラケズリ調整が施され、底部は全面に手持ちヘラケズリ調整が施される。

30は口唇部が外反して面を持ち、鉢形になる。外面下端および底部全体に、回転ヘラケズリ調整が施される。

31は口唇部が外反せず、外面下半および底部全体に、回転ヘラケズリ調整が施される。

32は蓋である。扁平でつまみが無く、口縁部が大きく外反し、天井部外面には丁寧な回転ヘラケズリ調整が施される。胎土に角閃石を非常に多く含むことから、利根川流域で作られた製品と考えられる。

33～41は壺である。いずれも胎土に角閃石を含むことから、利根川流域で作られた製品と考えられる。33は胎土にチャート粒を多く含む。34は底径が大きく、扁平な器形である。胎土に角閃石を非常に多く含み、外面には黒斑状の変色が認められる。

42～44は土師器の甕である。42は「コ」の字状口縁の甕で、口縁部にやや歪みがあるが、定型化した段階のものと考えられる。44は小型台付甕の脚部である。

遺物の時期は、須恵器壺の年代や甕の形状から、9世紀中葉～後半と考えられる。

第68表 第3号住居跡出土遺物観察表（第242・243図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	12.0	4.0	6.0	EJK	70	普通	灰白	No.56 南比企産 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる 重ね焼きによる焼成不良により外面の胴部下半から底部にかけて赤色化している	104-4
2	須恵器	壺	(12.6)	3.5	6.7	BHK	60	普通	灰	No.8・11 末野産	104-5
3	須恵器	壺	(12.7)	3.6	6.1	EIK	65	普通	灰白	三毳産 外面被熱	104-6
4	須恵器	壺	(12.6)	4.3	(6.6)	IK	50	普通	灰白	No.47 三和産 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる 外面下端および底部手持ちヘラケズリ 長石粒を多く含む	104-7
5	須恵器	壺	(11.8)	[3.7]	—	IK	15	普通	灰	No.29 三毳産か	
6	須恵器	壺	(11.7)	[2.8]	—	IK	10	普通	黄灰		
7	須恵器	壺	(12.6)	[4.1]	—	EIK	10	良好	黄灰	東金子産か	
8	須恵器	塊か	(14.6)	[3.0]	—	BIK	10	普通	黄灰	末野産	
9	須恵器	長頸瓶	—	[5.0]	—	EIJK	60	普通	灰	南比企産	
10	灰釉陶器	塊	—	[2.8]	(6.6)	IK	20	良好	灰白	東濃産 内面灰釉ハケ塗り 光ヶ丘1号窯式古段階 三ヶ月高台 釉は薄くほぼ発色していない	105-1
11	灰釉陶器	小型壺	(7.9)	[3.8]	—	K	10	良好	灰白	内面降灰 頸部外面に降灰が厚く付着し発泡している 9世紀前半から中葉のものか	
12	ロクロ土師器	壺	12.1	3.75	6.3	CIK	80	普通	橙	No.72 内黒 外面2ヶ所に墨書「+」体部外面に1条のミガキが巡る	105-2
13	ロクロ土師器	壺	11.3	3.8	5.0	CHIK	80	普通	黄橙	No.71 内黒 器壁が薄い	105-3
14	ロクロ土師器	壺	(12.0)	4.1	(6.6)	CDEIK	30	普通	にぶい橙	No.38・39 内黒	
15	ロクロ土師器	壺	(11.2)	4.1	(6.5)	CDIK	20	普通	にぶい黄橙	No.44 内黒 外面は摩耗が激しく底部調整は不明	
16	ロクロ土師器	壺	(11.7)	[3.7]	—	CIK	40	普通	橙	No.57	
17	ロクロ土師器	壺	(11.6)	[3.0]	—	CEIK	10	普通	灰黄褐	内黒	
18	ロクロ土師器	壺	(13.7)	[3.6]	—	CEIK	20	普通	にぶい橙	内黒	
19	ロクロ土師器	壺	(11.7)	[2.4]	—	CIK	10	普通	明赤褐	No.27 内黒 摩耗により調整不明瞭	
20	ロクロ土師器	壺	—	[2.7]	(6.2)	CEIK	50	普通	橙	No.23 内面ミガキ 内面煤付着 被熱により黒色処理が飛んだものか	
21	ロクロ土師器	壺	—	[1.8]	5.3	CIK	70	普通	橙	No.19 内黒	
22	ロクロ土師器	壺	—	[3.0]	(5.9)	CEIK	15	普通	橙	No.42 内黒	
23	ロクロ土師器	壺	—	[2.8]	(6.4)	CEIK	30	普通	橙	No.43 内面ミガキ 外面下端および底部手持ちヘラケズリ	
24	ロクロ土師器	壺	—	[1.4]	(7.0)	CIK	10	良好	明赤褐	内面ミガキ 体部外面下端へラケズリ調整	
25	ロクロ土師器	高台付壺	—	[1.9]	6.5	CEHIK	90	普通	明赤褐	No.4 内黒 底部回転糸切り離し無調整	
26	ロクロ土師器	壺	(14.9)	4.9	7.0	CHIK	45	不良	橙	No.36・69・76 内黒 外面下端および底部外周手持ちヘラケズリ 胎土に1cm程の小石を含む	105-4
27	ロクロ土師器	壺	—	[3.7]	(7.5)	CEHIK	15	普通	橙	No.33 内黒	
28	ロクロ土師器	壺	(16.6)	6.6	(7.5)	CIK	25	普通	にぶい橙	No.27・35 内黒 外面下端回転ヘラケズリ	
29	ロクロ土師器	塊	24.3	9.5	10.5	CEIK	80	普通	明黄褐	No.5・6・10・12～16・18・49・51・52・69 内黒 大型塊 口唇部が外反する 外面下端～底部にかけて手持ちヘラケズリが施される	105-5
30	ロクロ土師器	塊	(21.2)	8.1	(9.0)	CHIK	40	普通	橙	No.25・18・30・34 内黒 外面黒斑有り 体部外面下端および底部回転ヘラケズリ調整 胎土に角閃石を非常に多く含む	105-6

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
31	ロクロ土師器	塊	(21.0)	8.0	(8.3)	C E H I	35	普通	橙	No.2・3・74 下総系 外面黒斑有り 体部外面下端および底部回転ヘラケズ リ調整 胎土に角閃石を多く含む	105-7
32	ロクロ土師器	蓋	(17.4)	1.4	—	C H I K	50	不良	明赤褐	No.41・46・63・65 器形は須恵器だが 胎土に角閃石を多く含むため利根川沿 川で作られた土師器と考えられる 摘 みの剥離痕跡は認められない	106-1
33	ロクロ土師器	坏	(13.7)	4.0	6.4	C E H I K M	60	不良	明赤褐	胎土に1~4mm程のチャート粒、角閃 石を含む 群馬県内の利根川流域の製 品か	106-2
34	ロクロ土師器	坏	12.8	2.9	6.9	C H I K	70	不良	橙	No.31 器形は須恵器に近いが胎土に角 閃石を多く含むため利根川沿川で作ら れた土師器と考えられる	106-3
35	ロクロ土師器	坏	(13.6)	[3.1]	—	C D H I K	10	普通	にぶい黄橙	No.22 内面ミガキだが摩耗している 角閃石を多く含む	
36	ロクロ土師器	坏	(16.7)	[2.9]	—	C E I K	10	普通	明赤褐		
37	ロクロ土師器	坏	(13.6)	[3.0]	—	C I K	20	普通	明赤褐	被熱	
38	ロクロ土師器	坏	(11.7)	[2.2]	—	C E H I	15	普通	暗赤褐	角閃石を多く含む 利根川流域の製品 か	
39	ロクロ土師器	坏	(11.8)	[1.7]	—	C H I K	10	普通	明赤褐		
40	ロクロ土師器	坏	—	[1.4]	(7.4)	C E I K	50	普通	橙	胎土に角閃石を含む	
41	ロクロ土師器	坏	—	[1.5]	(6.4)	C E H I K	15	普通	明赤褐		
42	土師器	甕	(18.0)	[6.9]	—	C I K	25	普通	橙	No.26・70	106-4
43	土師器	甕	(14.5)	[4.8]	—	C I K	40	普通	橙		106-5
44	土師器	小型台付甕	—	[2.9]	—	C E H I K	80	普通	赤褐	No.67	

第7号住居跡（第244図）

第1次調査における東側調査区の中央北壁際、I-16グリッドに位置し、第93号土壙と重複する。遺構の北半部は調査区域外へ延びるため、平面形態は不明である。

規模は、残存部で長軸5.10m、短軸2.98m、深さ0.05mを測り、長軸方位はN-85°-Eを指す。覆土は削平され、床面付近の覆土が僅かに残存するのみであったが、焼土と炭化物が含まれていた。

カマド、壁溝、ピット等は検出されなかった。

遺物は須恵器甕、土師器坏・甕が出土した（第244図1～6）。

1は須恵器の甕で、内外面ともにナデ調整が施される。

2～6は土師器である。2は坏で、外面下半に手持ちヘラケズリ調整が施される。3～6は甕である。3は「コ」の字状口縁の甕で、定型化した段階のものである。

遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、土師器甕の頸部形状から9世紀中葉と考えられる。

第12号住居跡（第245図）

第1次調査における東側調査区の東寄り、I-J-17グリッドに位置する。第2号掘立柱建物と重複し、本遺構が古い。遺構の北部は搅乱によって壊されるため、平面形態は不明である。

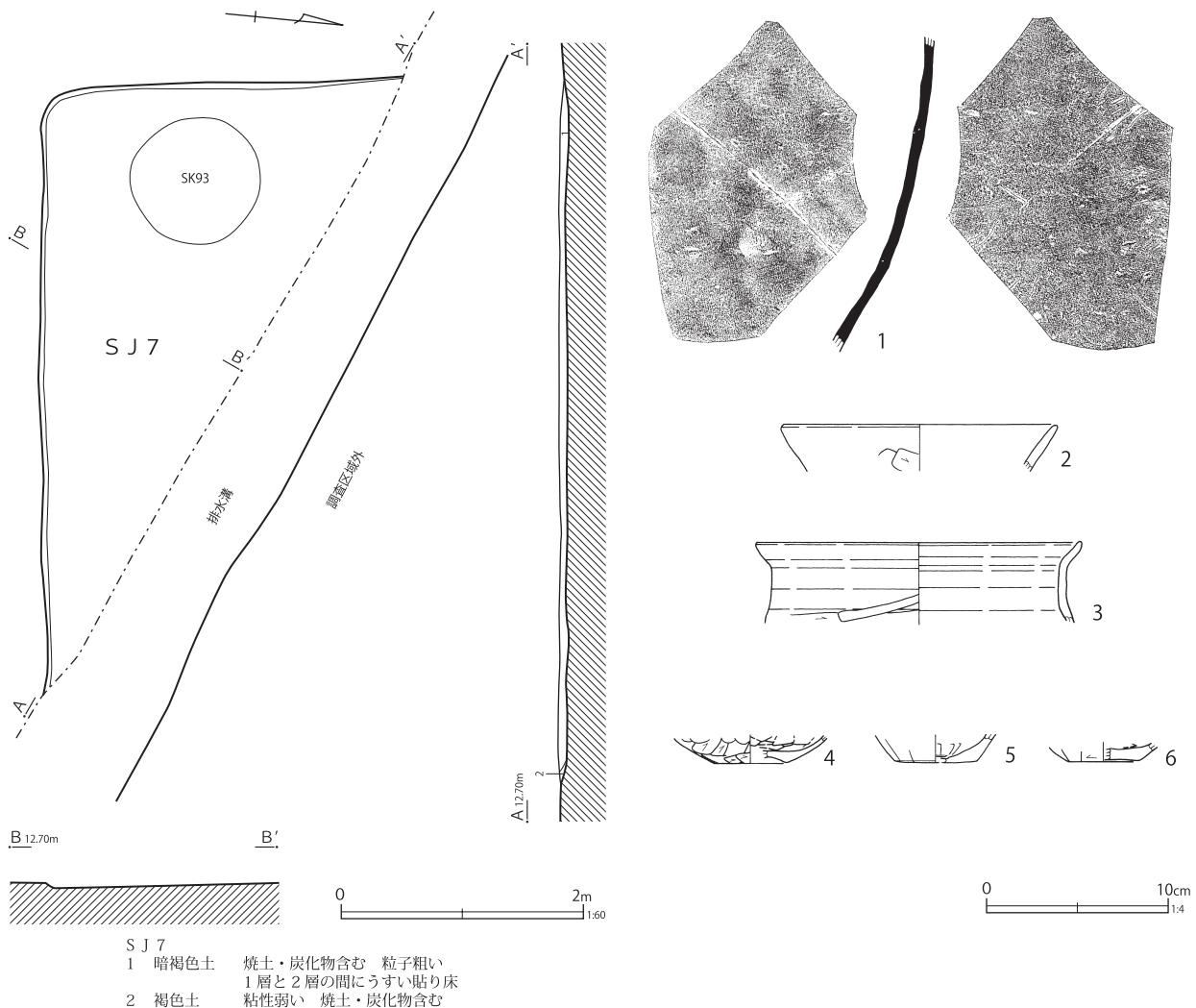
規模は、残存部で長軸4.40m、短軸3.67m、深さ0.18mを測り、長軸方位はN-90°を指す。覆土は西側から東側に向って土が流れ込む堆積状況を示す。上層には炭化物が、下層には焼土粒子と炭化物が含まれていた。

壁溝は住居内を全周して検出された。規模は、幅0.14～0.31m、深さ0.04～0.14mを測る。

カマドは北側の搅乱によって失われていた。ピット等は検出されなかった。

遺物は須恵器蓋・坏、土師器坏・甕・小型台付甕が出土した（第245図1～10）。

1～6は須恵器である。1は須恵器の蓋で、南比企の製品である。2～6は坏で、南比企の製品を主体として末野等の製品が少量含まれる。2は南比企の坏で、底部は全周回転ヘラケズリ調整が



第244図 第7号住居跡・出土遺物

第69表 第7号住居跡出土遺物観察表（第244図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	—	[17.3]	—	E I J K	5	良好	赤灰	南比企産 外面赤みを帯びる	
2	土師器	壺	(15.0)	[2.5]	—	A C E H I K	5	普通	明赤褐		
3	土師器	甕	(17.8)	[4.5]	—	C E I K	15	普通	明褐灰	外面黒斑有り 外面煤付着	
4	土師器	甕	—	[1.5]	(4.0)	C H I K	25	普通	黒褐		
5	土師器	甕	—	[1.5]	(4.6)	C G I K	30	普通	にぶい褐		
6	土師器	甕	—	[1.0]	(4.0)	A E H I K	20	普通	にぶい黄橙		

施され、鳩山編年II期に帰属すると考えられる。

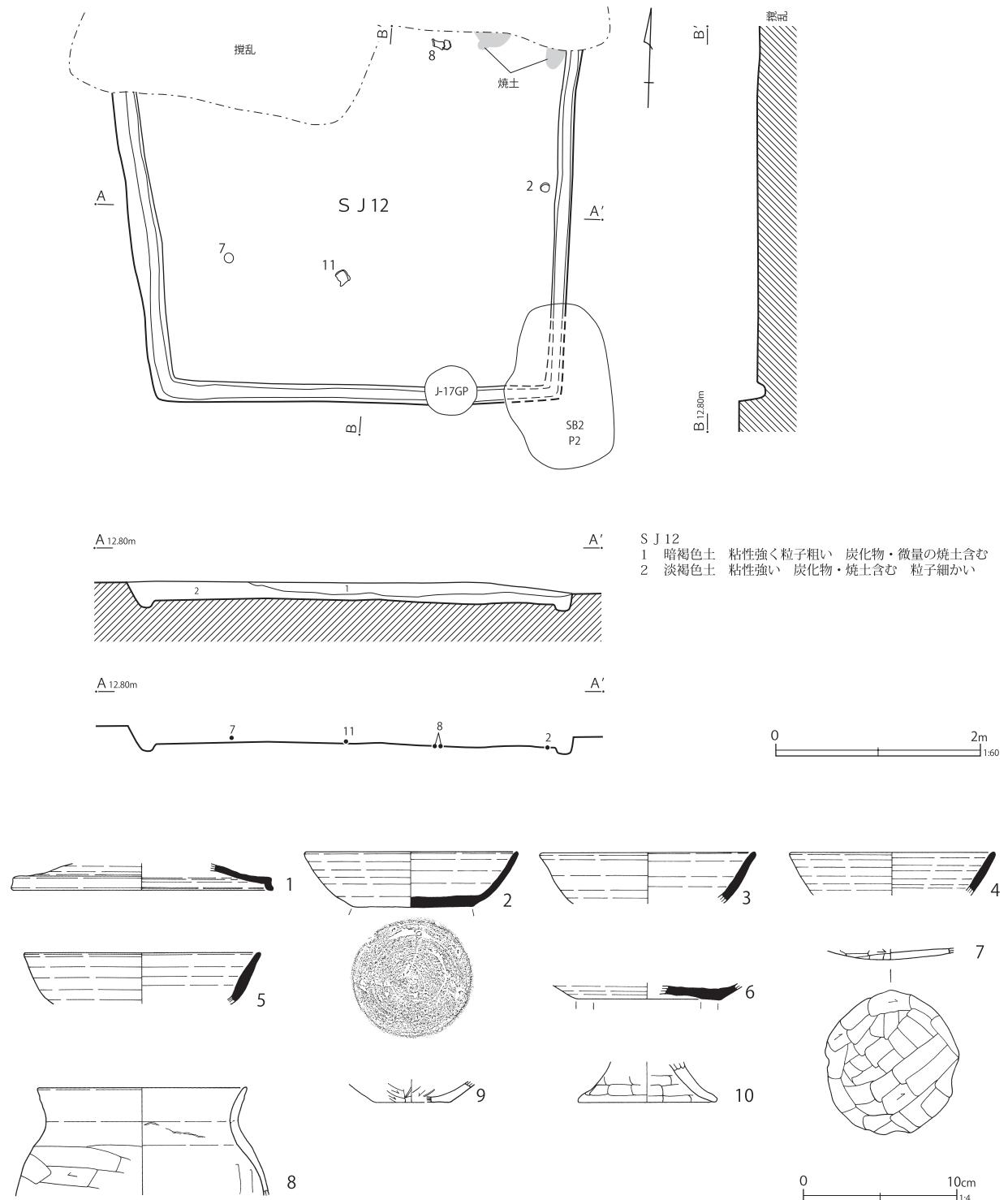
7~10は土師器である。7は壺の底部で、底部のみが円盤状に残存する。

8~10は甕である。8は胴部上半に最大径を持つものと考えられる。10は小型台付甕の脚部である。

遺物の時期は、須恵器壺の年代から、8世紀中葉と考えられる。

第13号住居跡（第246図）

第1次調査における東側調査区の中央やや東寄りの南壁際、J-16・17グリッドに位置する。第20号住居跡と同位置で重複し、本遺構が新しい。



第245図 第12号住居跡・出土遺物

遺構の南半部は調査区域外に延びるため、平面形態は不明である。

規模は、残存部で長軸3.57m、短軸2.45m、深さ0.14mを測り、主軸方位はN-3°-Wを指す。

覆土はレンズ状に堆積し、ほぼ全層に焼土と炭化物が含まれていた。カマドは北壁中央やや西寄りに設けられ、カマドの正面からは、ピットが1基検出された。

第70表 第12号住居跡出土遺物観察表（第245図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(16.9)	[1.7]	—	E I J	10	良好	灰	南比企産 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	
2	須恵器	坏	(13.6)	3.6	7.7	D E J K	60	良好	暗灰	No.4 南比企産 0.5～1.0cm程度の大形の石英等が多く含まれる	106-6
3	須恵器	坏	(13.7)	[3.3]	—	D E I	5	良好	暗灰	未野産か	
4	須恵器	坏	(13.1)	[2.8]	—	I J K	5	良好	灰	南比企産 口唇部に降灰を受ける	
5	須恵器	坏	(15.1)	[3.3]	—	I K	5	普通	灰黄		
6	須恵器	坏	—	[1.0]	(9.3)	E I J K	10	良好	黄灰	南比企産	
7	土師器	坏	—	[0.6]	—	C H I K	100	普通	橙	胎土に角閃石を多量に含む	
8	土師器	甕	(13.4)	[6.9]	—	C E I K	30	普通	明赤褐		106-7
9	土師器	甕	—	[1.4]	(5.0)	C E I K	10	普通	明赤褐		
10	土師器	小型台付甕	—	[2.6]	(8.7)	C E I K	20	普通	橙		

カマドは袖が住居内に0.35m程張り出し、燃焼部は浅く掘り窪められ、煙道部に向って緩やかに立ち上がる構造を持つ。規模は、全長1.55m、幅0.52m、深さ0.16mを測る。

覆土は、火床面付近に焼土や炭化物が混じる層が0.05～0.10m程堆積し、その上をカマド天井の崩落土と考えられる4層が覆う。全層に焼土粒子や炭化物が含まれるが、焼土層や炭化物層は検出されなかった。

ピットは平面形態が円形で、規模は直径0.30m、深さ0.12mを測り、覆土には炭化物や焼土が含まれていた。

壁溝は検出されなかった。

遺物は、須恵器蓋・坏、土師器坏・甕、用途不明の石製品が出土した（第246図1～10）。1～5は須恵器である。1は蓋で、南比企の製品である。2～5は坏である。南比企、三毳、新治の製品が含まれる。5は新治の製品で、底径が大きいため盤状坏になる可能性がある。

6～9は土師器である。6、7は坏で、6は北武藏型坏である。扁平だが平底にはならない。7は厚手の坏で、底径が大きく、平底になり、胎土に角閃石を含む。

8、9は甕である。8は頸部形状が弓形になる。9は胴部のみだが、小型台付甕になると推察される。

10は用途不明の石製品である。角閃石安山岩製で、方形または長方形に加工されており、表面には整形痕が残る。

遺物の時期は、須恵器坏や土師器坏・甕の形状から、8世紀後半から9世紀初頭と考えられる。

第20号住居跡（第247図）

第1次調査における東側調査区の中央やや東寄りの南壁際、J-16・17グリッドに位置する。第13号住居跡と同位置で重複し、本遺構が古い。遺構の南半部は調査区域外に延びるため、平面形態は不明である。

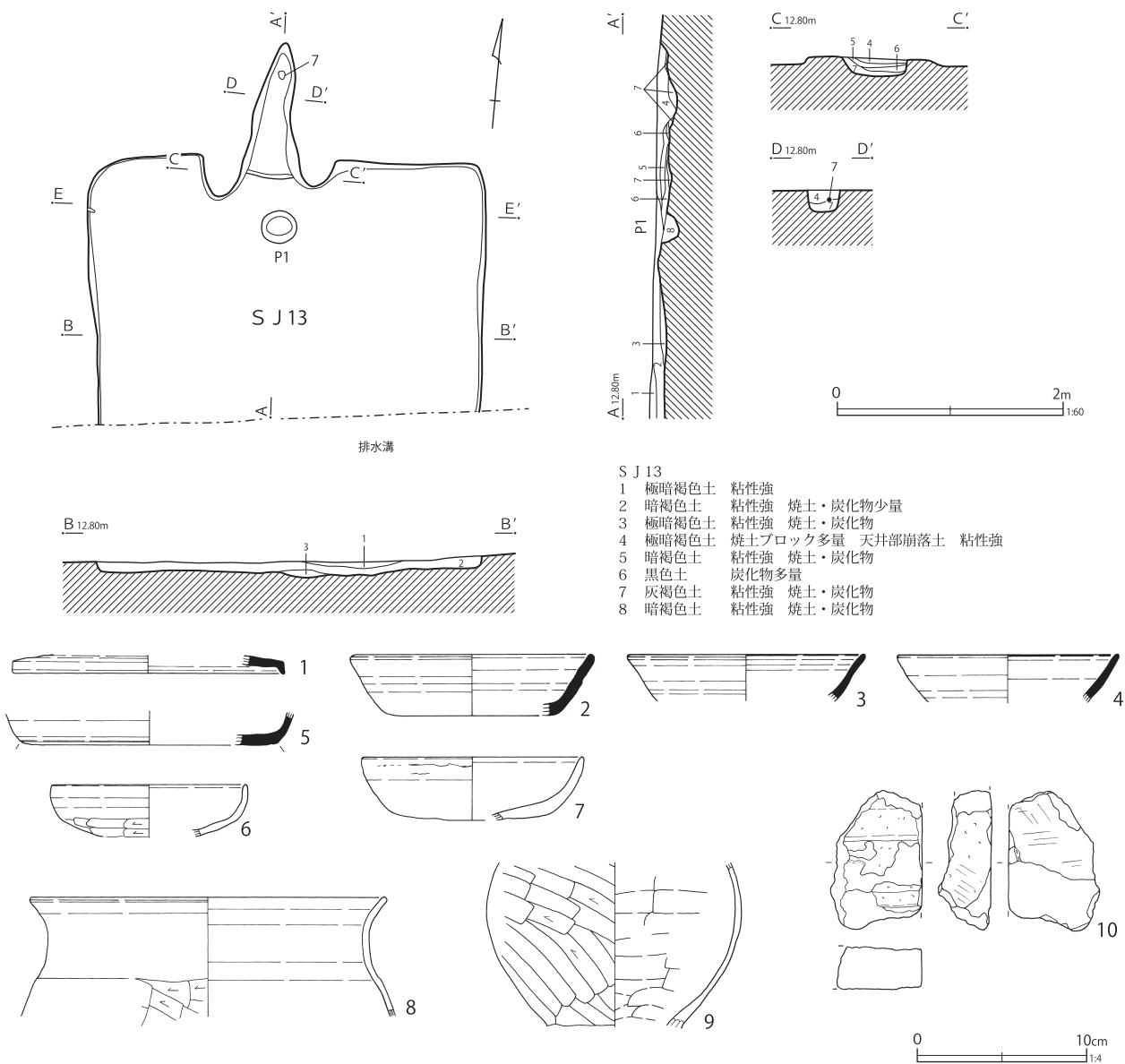
規模は、残存部で長軸5.20m、短軸3.52m、深さ0.25mを測り、主軸方位はN-8°-Wを指す。

覆土は基本的に単層で、焼土と炭化物を少量含む。東寄りには焼土と炭化物を多く含む層がレンズ状に堆積する。カマドは北壁西寄りに設けられる。

カマドは袖が住居跡内に0.35m程張り出し、燃焼部は浅く掘り窪められ、煙道部に向って緩やかに立ち上がる構造を持つ。規模は、全長1.10m、幅0.45m、深さ0.12mを測る。覆土は、層に焼土粒子や炭化物が含まれるが、焼土層や炭化物層は検出されなかった。

壁溝、ピットは検出されなかった。

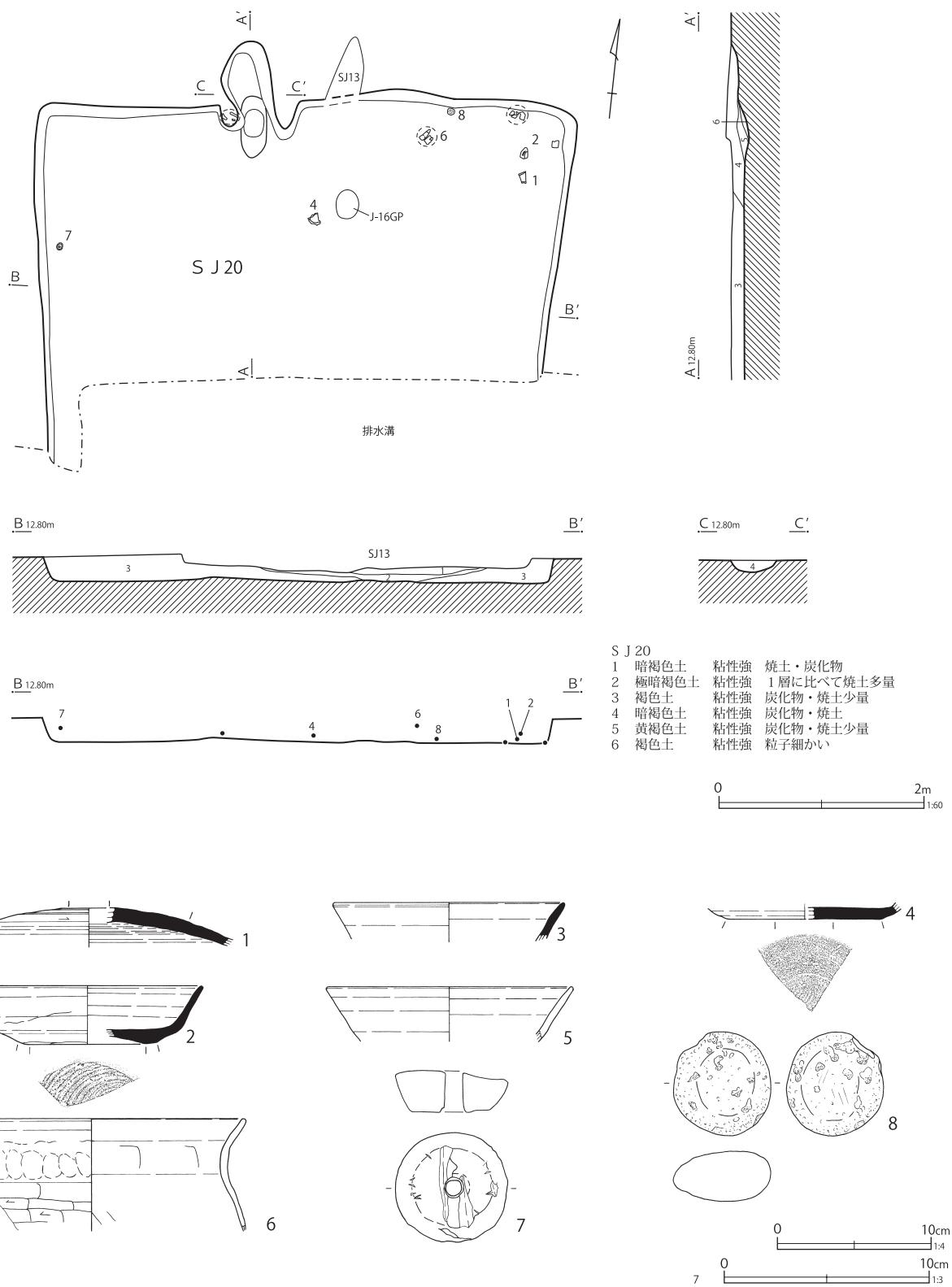
遺物は、須恵器蓋・坏、ロクロ土師器坏、土師器甕、紡錘車、磨石が出土した（第247図1～8）。



第246図 第13号住居跡・出土遺物

第71表 第13号住居跡出土遺物観察表（第246図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(15.9)	[1.1]	—	I J	5	良好	灰	南比企産 外面に重ね焼きの痕跡があり 内面降灰	
2	須恵器	壺	(13.9)	3.6	(9.8)	D I K	15	普通	灰白	三毳産 外面および内面上半の剥離が激しい	
3	須恵器	壺	(13.7)	[2.8]	—	D I K	10	普通	灰白	三毳産	
4	須恵器	壺	(12.8)	[2.8]	—	I J K	10	普通	灰	南比企産	
5	須恵器	壺	—	[1.9]	(15.2)	A D H I K	20	普通	橙	新治産 盤状壺か	
6	土師器	壺	(11.3)	[3.1]	—	C E I K	25	普通	橙		
7	土師器	壺	(12.8)	3.7	(9.0)	C H I K	35	普通	にぶい黄橙	カマド 内外面摩耗激しく調整不明	107-1
8	土師器	甕	(20.7)	[7.0]	—	B C H I K	10	普通	橙		
9	土師器	小型台付甕	—	[9.6]	—	C E H I K	20	普通	にぶい橙		
10	石製品	不明	長さ8.2 幅5.4 厚さ3.1 重さ80.4 g							角閃石安山岩 多孔質 整形痕遺存	



第247図 第20号住居跡・出土遺物

1～4は須恵器である。1は蓋で、新治の製品である。2～4は壺で、2は腰が張る。4は底部外周回転ヘラケズリの壺で、南比企の製品である。

5はロクロ土師器の壺である。6は土師器の甕で、頸部形状は「コ」の字状口縁甕の前段階的な要素を持つ。混入品か。

第72表 第20号住居跡出土遺物観察表（第247図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	—	[2.5]	—	A D I K	25	良好	黄灰	No.7 新治産	107-2
2	須恵器	坏	(14.8)	3.8	(9.0)	E I K	40	良好	黄灰	No.6	
3	須恵器	坏	(14.8)	[2.5]	—	D I K	10	普通	灰白	三毳産か	
4	須恵器	坏	—	[1.0]	(10.0)	D E I J K	30	普通	灰黄	No.8 南比企産	
5	ロクロ土師	坏	(15.7)	[3.5]	—	C H I K	10	普通	灰白	外側黒斑有り 色調は須恵器	
6	土師器	甕	(19.6)	[7.2]	—	B C E H I K	15	普通	橙	No.2	
7	石製品	鋤鍤車	径5.4 孔径0.9 厚さ2.0 重さ74.8g							No.9 ホルンフェルス 刃物痕複数	127-1
8	石製品	磨石	長さ6.7 幅6.3 厚さ3.2 重さ95.8g							No.3 角閃石安山岩 多孔質 自然面 遺存 使用面1	127-1

7は石製の紡錘車である。ホルンフェルス製で、刃物痕が多数認められる。8は角閃石安山岩製の磨石である。

遺物の時期は、須恵器坏の形状から、8世紀中葉～後半と考えられる。

第22号住居跡（第248図）

第1・2次調査における中央調査区と東側調査区の境界部、H-12・13グリッドに位置する。両調査区に跨るため、東半分は第1次調査で、西半分は第2次調査で検出された。遺構の中央部は、排水溝によって帶状に壊される。

平面形態は東西にやや長い長方形で、規模は長軸3.75m、短軸3.10m、深さ0.34mを測り、主軸方位はN-74°-Eを指す。

覆土は東半部と西半部で残存深度が異なるため、詳細な堆積状況は不明だが、東半部の土層断面を見ると、レンズ状に堆積している。覆土は全体に焼土と炭化物を含み、壁際には三角堆積が認められた。

北壁中央やや東寄りにはカマドが設けられ、カマドの脇にあたる住居跡南東角には、貯蔵穴が設けられる。壁溝はカマドを除いて全周し、カマドの燃焼部からはピットが1基検出された。

カマドは袖が住居跡内に僅かに張り出し、燃焼部は平坦で、煙道部に向って緩やかに立ち上がる構造を持つ。カマド天井の一部が崩れずに現存し、煙道の煙出し部が良い状態で検出された。規模は、全長1.87m、幅0.65m、深さ0.45mを測る。

覆土は、燃焼部の奥に炭化物を含む塊状の黒色土があり、煙道部から燃焼部の火床面にかけて焼土層が薄く堆積し、その上には住居内と同じ覆土が流入する。このような状況から、カマド廃絶後もカマドは開口した状態のまま放置され、自然に埋没していったと推察される。煙道の煙出し部からは、胴部下端を打ち欠いた土師器の甕が出土した。煙道部分の構築材として使用されたものか。

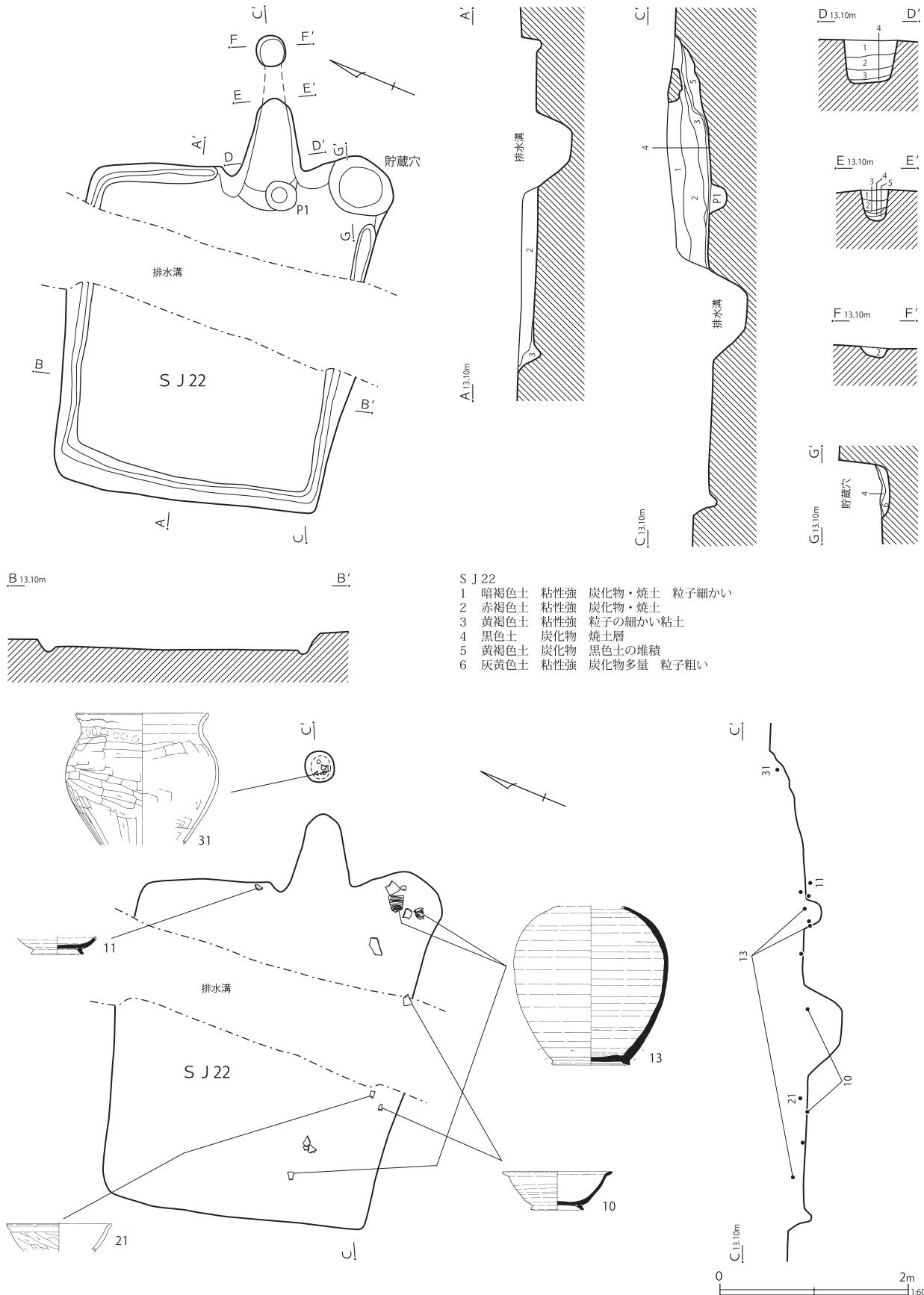
貯蔵穴の平面形態は楕円形で、規模は長径0.74m、短径0.57m、深さ0.51mを測る。貯蔵穴内からは、頸部を欠損した須恵器の長頸瓶が出土した。

壁溝はカマドと貯蔵穴を除いて全周し、規模は幅0.14～0.36m、深さ0.08～0.10mを測る。

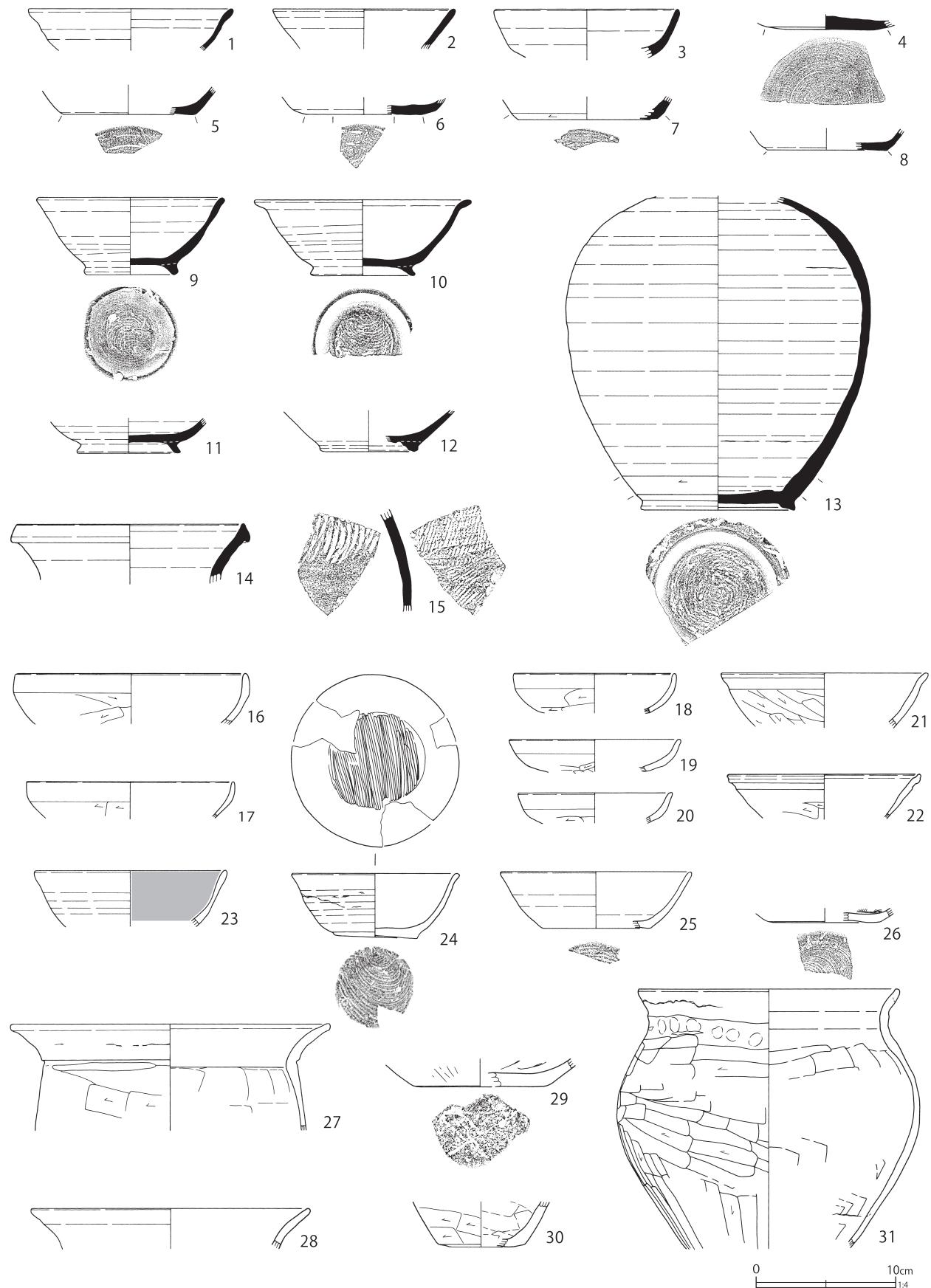
ピットは、カマドの燃焼部内から1基検出された。平面形態は円形で、規模は直径0.35m、深さ0.10mを測る。カマドから流出した炭化物層により覆われていたため、カマド周辺から検出されるピットと同様のものと考えられる。

遺物は住居跡内全体から散発的に検出され、須恵器坏・高台付坏・長頸瓶・甕、土師器坏、ロクロ土師器坏、土師器甕、用途不明の鉄製品、磨石が出土した（第249・250図1～36）。大きく分けて2時期の遺物が含まれ、8世紀前半の一群と、9世紀後半の一群に分かれる。

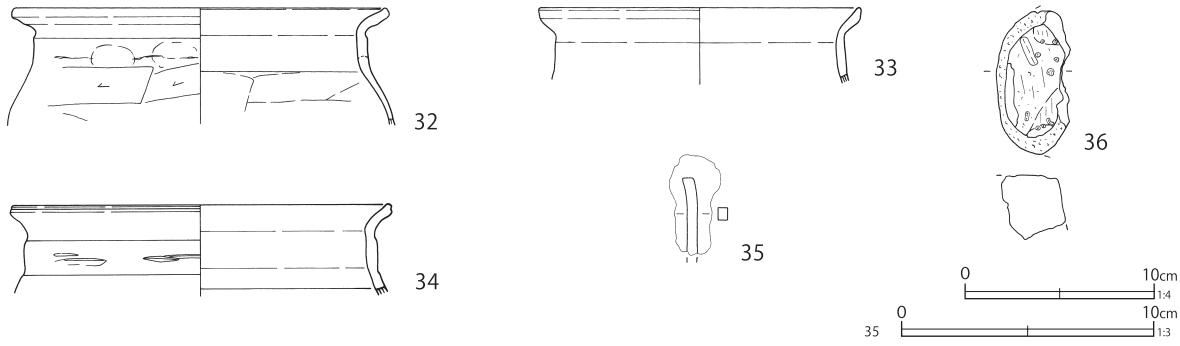
1～15は須恵器である。1～8は坏で、南比企、末野の製品が含まれる。4は底部全周回転ヘラケズリ調整が施され、5～8も破片だが回転ヘラケ



第248図 第22号住居跡・遺物出土状況



第249図 第22号住居跡出土遺物（1）



第250図 第22号住居跡出土遺物（2）

ズリ調整が確認できる。これらは底径が大きいことから、8世紀前半代の遺物と考えられる。

9～12は高台付壺である。いずれも末野の製品で、器形の特徴から9世紀後半と考えられる。

13は頸部が欠損するが、長頸瓶と考えられる。貯蔵穴から出土した。大型の破片2点が接合して形になったものだが、これらの接合面が砥具として転用されていた。割れてしまったか、意図的に割ったものを、砥具として転用し、貯蔵穴に保管していた可能性が考えられる。14、15は甕で、14は口径がやや小さくなる。

16～22は土師器の壺である。16～20は北武藏型壺で8世紀前半の遺物である。16～18は口縁部が垂直気味に立ち上がり、19、20は口縁部が外反する。21、22は9世紀後半の遺物と考えられ、口径がやや大きく、器壁が大きく開くものである。口唇部に段を持ち、外面全体に手持ちヘラケズリ調整が施される。

23～26はロクロ土師器である。23は内黒の壺である。24～26は壺で、24は内底面、26は内面にミガキが施される。24は体部内面にも不整方向のナデのような調整が施される。いずれも9世紀代のものか。

27～34は土師器の甕である。27、28は口縁部に最大径を持ち、胴部がやや膨らむ形状のものと推察される。29は常陸型甕で、外面下端にミガキが施され、底部には木葉痕が認められる。これらは8世紀前半の遺物と考えられる。

31～34は「コ」の字状口縁の甕で、「コ」の字はだいぶ崩れている。31はカマドの構築材として使用されていたと考えられる。いずれも9世紀末の遺物と考えられる。

35は用途不明の鉄製品である。断面が方形の棒状品である。36は角閃石安山岩製の磨石である。

遺物の時期は、8世紀前半と9世紀後半から末の2時期があるが、床面から出土した遺物がいずれも9世紀末のものであることと、カマドの構築材として使用された甕が、9世紀末のものであることから、本住居跡は9世紀末のものと推察される。

他の遺構との重複が無いため、8世紀代の遺物が出土した原因是不明だが、まとまった量の遺物が出土しているため、検出されなかった8世紀代の遺構が、周辺にあった可能性が高い。

第27号住居跡（第251図）

第1次調査における東側調査区の西端部、H・I-13グリッドに位置する。第28号住居跡と重複し、本遺構が古い。

平面形態は東西にやや長い方形で、規模は長軸3.30m、短軸2.90m、深さ0.35mを測り、主軸方位はN-26°-Wを指す。

覆土は水平堆積で、全層に炭化物を含み、下層からは土器も多く出土した。カマドは北壁中央部に設けられる。

カマドは袖が住居跡内に0.33m程張り出す。燃焼部は方形で、燃焼部の奥壁中央から、細い煙道

第73表 第22号住居跡出土遺物観察表（第249・250図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	(14.4)	[3.0]	—	D E I K	10	普通	にぶい橙	末野産	
2	須恵器	壺	(13.0)	[2.8]	—	E I K	10	普通	灰		
3	須恵器	壺	(12.9)	[3.4]	—	I J	5	普通	灰白	南比企産	
4	須恵器	壺	—	[0.9]	(6.8)	E I K	45	良好	褐灰		
5	須恵器	壺	—	[2.0]	(9.4)	I J K	10	普通	黄灰	南比企産	
6	須恵器	壺	—	[1.2]	(8.4)	J K	10	普通	灰白	南比企産 外面煤付着	
7	須恵器	壺	—	[1.6]	(10.0)	I	10	普通	にぶい橙		
8	須恵器	壺	—	[1.5]	(8.6)	I	10	普通	灰		
9	須恵器	高台付壺	(13.1)	5.5	6.2	C I K	30	普通	淡黄	末野産	107-3
10	須恵器	高台付壺	(15.2)	5.4	(7.0)	I K	40	普通	灰	2次SJ1No.4・7 末野産 体部外面中央に円形に煤付着	107-4
11	須恵器	高台付壺	—	[2.5]	(7.2)	B E	10	普通	灰白	No.5 末野産	
12	須恵器	高台付壺	—	[2.9]	(6.4)	B I K	20	普通	褐灰	末野産	
13	須恵器	長頸瓶	—	[22.4]	(10.6)	E H I K	25	良好	灰	貯蔵穴No.2・3 2次SJ1No.1 転用砥具肩部に降灰を受ける 接合面が転用されている	107-5
14	須恵器	甕	(16.0)	[4.2]	—	E I J K	5	良好	灰	南比企産	
15	須恵器	甕	—	[7.3]	—	E I K	5	良好	灰		
16	土師器	壺	(16.2)	[3.6]	—	B C H I K	10	普通	橙		
17	土師器	壺	(14.5)	[2.7]	—	B H K	5	普通	にぶい橙		
18	土師器	壺	(11.3)	[2.8]	—	B I K	15	普通	にぶい橙		
19	土師器	壺	(12.0)	[2.3]	—	B C I K	10	普通	橙		
20	土師器	壺	(10.8)	[2.1]	—	C E I K	20	普通	橙		
21	土師器	壺	(14.6)	[3.9]	—	C E H I K	20	普通	にぶい橙	2次SJ1No.3 外面煤付着	
22	土師器	壺	(13.6)	[3.2]	—	C E I K	10	普通	にぶい橙		
23	ロクロ土師器	壺	(13.5)	[4.0]	—	B H I K	20	普通	にぶい橙	内黒 外面ともに激しく摩耗	
24	ロクロ土師器	壺	11.5	4.5	5.9	E H I K	75	良好	橙	全体被熱 内面は赤みが強い	107-6
25	ロクロ土師器	壺	(13.4)	4.0	(7.6)	C E I K	15	普通	にぶい橙	内外面強く被熱し摩耗が激しい	
26	ロクロ土師器	壺	—	[1.0]	(8.0)	C E I K	20	普通	にぶい橙		
27	土師器	甕	(22.6)	[7.6]	—	A B C E H I K	20	普通	にぶい橙	外面煤付着	
28	土師器	甕	(19.6)	[2.9]	—	C H I K	5	普通	橙		
29	土師器	甕	—	[2.0]	(9.4)	A D E	20	普通	にぶい赤褐	常陸型甕 外面の摩耗が激しい	
30	土師器	甕	—	[3.2]	(6.2)	C I K	25	普通	にぶい褐	外面煤付着	
31	土師器	甕	(18.6)	[18.5]	—	C H I K	55	良好	橙	No.1 煙出穴No.1 種子圧痕か	107-7
32	土師器	甕	(19.4)	[6.3]	—	B H I K	25	普通	にぶい橙		
33	土師器	甕	(16.7)	[4.0]	—	C H I K	10	普通	橙		
34	土師器	甕	(19.6)	[4.8]	—	C I K	10	普通	橙		
35	鉄製品	不明	長さ[3.0] 幅0.4 厚さ0.5 重さ10.9 g						断面方形の棒状金具	126-2	
36	石製品	磨石	長さ7.6 幅[4.0] 厚さ[3.4] 重さ43.1 g						角閃石安山岩 多孔質 自然面遺存 使用面1遺存	127-1	

が壁外へ0.90m程伸びる構造を持つ。燃焼部は浅く掘り窪められ、煙道部との間には0.07m程の段を持って立ち上がる。

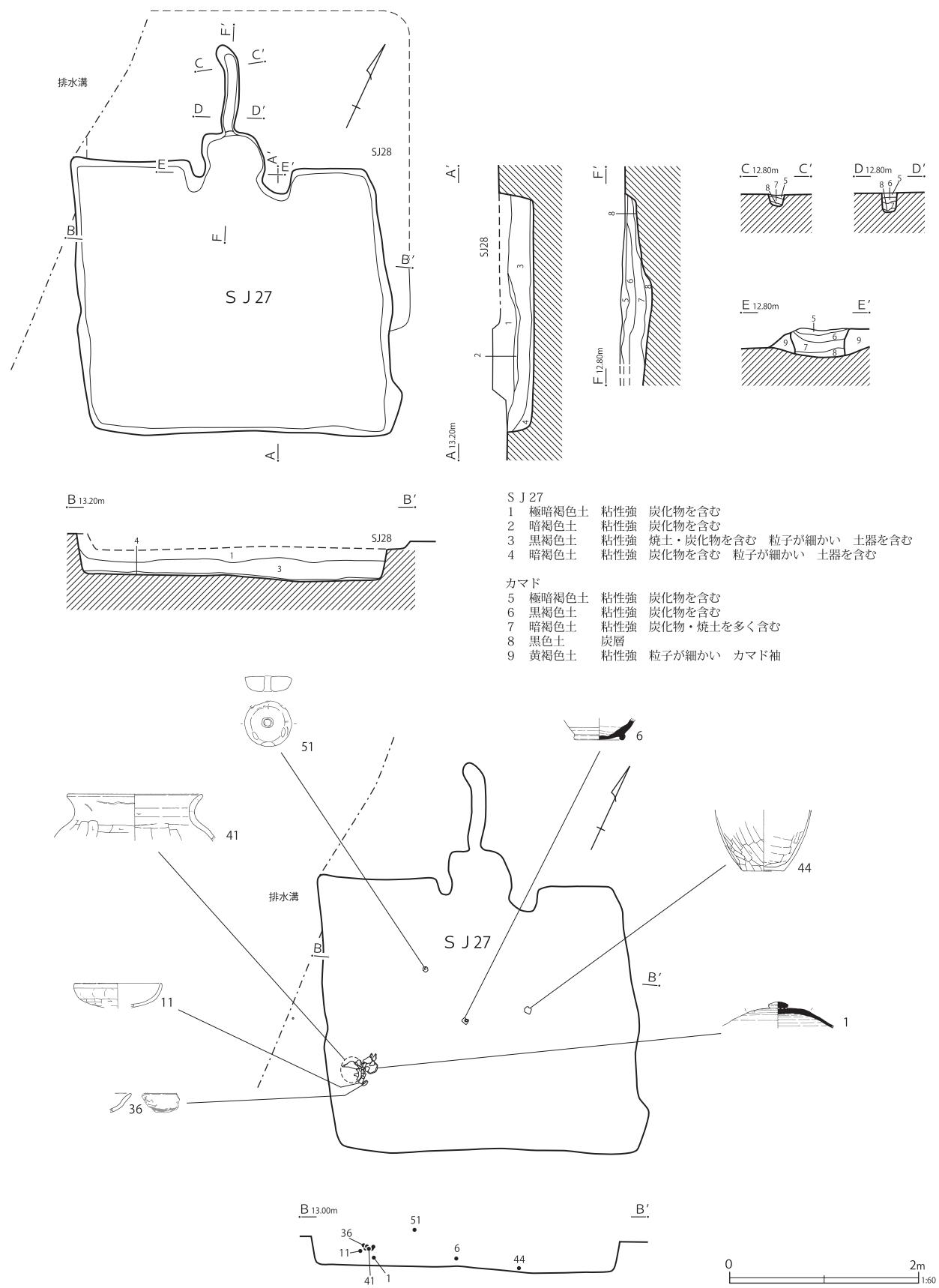
規模は、全長1.70m、幅は燃焼部が0.80m、煙道部が0.90m、深さは燃焼部が0.33m、煙道部が0.11mを測る。覆土は、火床面直上に炭化物層が薄く堆積し、その上を焼土や炭化物混じりの土が覆って

いた。

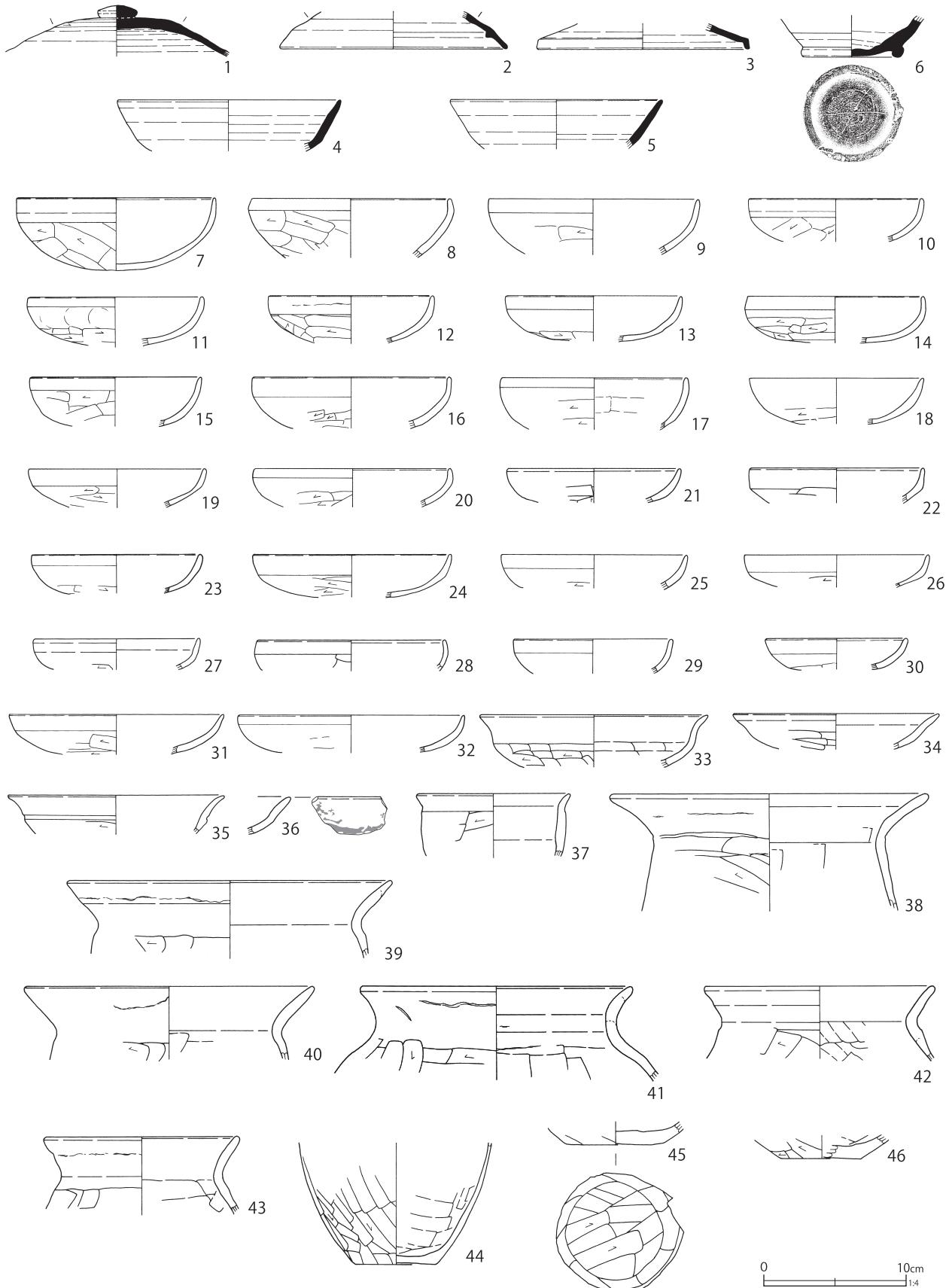
壁溝、ピットは検出されなかった。

遺物は住居跡南西部の一角から比較的多く検出され、須恵器蓋・壺・瓶類、土師器壺・皿・鉢・甕、高壺、紡錘車、用途不明の鉄製品等が出土した（第252・253図1～52）。

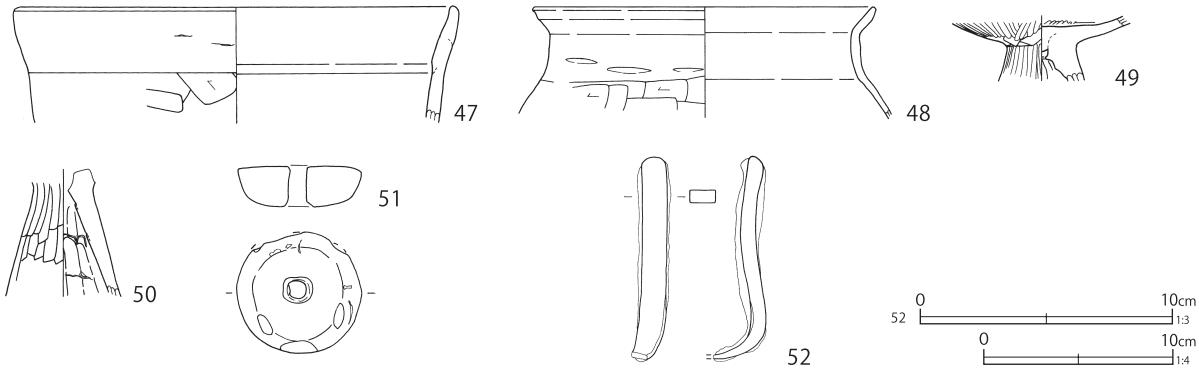
1～6は須恵器である。1～3は蓋で、1は硬



第251図 第27号住居跡・遺物出土状況



第252図 第27号住居跡出土遺物（1）



第253図 第27号住居跡出土遺物（2）

質で白みが強く、東海地方の製品と推察される。2はカエリを持つ。4、5は壺である。4は三毳、5は新治の製品であり、口径・底径ともに大きいことから、8世紀初頭から前半のものと考えられる。

6は瓶類の底部で、高台は丸みが強く、底部は出つ尻氣味になる。

7～50は土師器である。7～29は北武藏型壺である。7～9は大型で深身になる。口縁部は7が直立気味に立ち上がり、8はやや内湾し、9はやや外反する。9は口縁部外面に施されるヨコナデの下に、無調整帶を持つ。

10～17はやや深身のもので、11、13、14、16、17は口縁部ヨコナデの下に、無調整帶を持つ。11は無調整帶に指頭圧痕が認められる。19～29は浅身になるもので、深身のものと同様に、口縁部ヨコナデの下に無調整帶を持つものが一定量見受けられる。

31～36は皿である。31、32は口縁部がやや内屈気味に立ち上がり、33～36は口縁部が外反する。35は体部中位に沈線が廻り、明瞭な段を持つ。36は破片だが、外面に油煙状の煤が付着する。37は鉢で、やや小型の製品である。口縁部が大きく外反し、口縁部にはヨコナデ、胴部はヘラケズリが施される。

38～46は甕である。38～40は、口縁部に最大径を持ち、胴部がやや膨らむ形状と推察される。42、

43は「く」の字状口縁への過渡期にある甕か。47は口縁部のみだが、甕になると推察される。鉢形になる甕か。

48は「コ」の字状口縁甕である。9世紀中葉～後半のものであり混入品か。49、50は高壺である。5世紀代の遺物であり、混入品と考えられる。

51は流紋岩製の紡錘車である。高い位置から検出されたため、第28号住居跡の遺物である可能性もある。52は用途不明の鉄製品である。断面形状は長方形で、先端が湾曲する。

遺物の時期は、須恵器蓋や壺の年代と、土師器壺や甕の形状から、7世紀末～8世紀前半と考えられる。

第28号住居跡（第254図）

第1次調査における東側調査区の西端部、H・I-13グリッドに位置する。第27号住居跡と重複し、本遺構が新しい。

本遺構は、第27号住居跡の南北断面図上に住居跡の形が現れていたことと、大型で残存率が高い土器が第28号住居跡出土遺物としてあがっていたことから、住居跡と判断した。

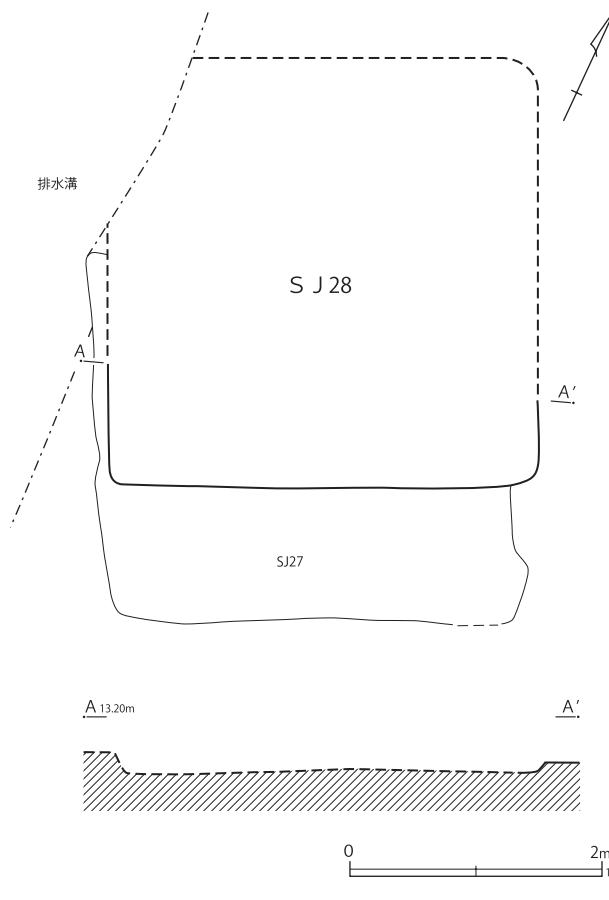
平面図に実線で示した範囲は、第27号住居跡の断面図上で確認できた範囲である。平面形態や堆積状況、カマド等の有無は不明である。

遺物は須恵器の甕が出土した（第255図1）。1はバケツ形の甕で、新治の製品である。胴部全体に横方向の平行タタキが施され、口縁部内面には

第74表 第27号住居跡出土遺物観察表 (第252・253図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	—	[3.6]	—	I K	75	良好	灰白	No.11 東海産 外面降灰 摘み径2.8	107-8
2	須恵器	蓋	—	[2.6]	(15.8)	I	10	普通	黄灰		
3	須恵器	蓋	(14.8)	[1.8]	—	H I	10	普通	にぶい黄橙	未野産か、外面降灰 内面に重ね焼きによる変色が認められる	
4	須恵器	坏	(15.6)	[3.6]	—	B K	10	普通	灰白	三毳産	
5	須恵器	坏	(14.8)	[3.4]	—	A D I	5	普通	灰	新治産	
6	須恵器	瓶類	—	[2.9]	6.7	B I	80	良好	灰白	No.2 内外面降灰 ヘラ記号有り	
7	土師器	坏	(13.7)	5.1	—	C D I K	35	普通	橙		107-9
8	土師器	坏	(13.7)	[4.1]	—	C E H I K	20	普通	にぶい橙	口唇部煤付着	
9	土師器	坏	(14.6)	[3.9]	—	B C I K	5	普通	橙		
10	土師器	坏	(12.0)	[3.0]	—	C D H I K	10	普通	橙		
11	土師器	坏	(12.0)	[3.4]	—	C D I K	20	普通	灰黄褐	No.5	
12	土師器	坏	(11.3)	[3.3]	—	B C D I K	25	普通	にぶい橙	内外面煤付着	
13	土師器	坏	(12.1)	[3.2]	—	B C I K	35	普通	橙	外面摩耗が激しい	107-10
14	土師器	坏	(12.2)	[3.2]	—	B C I K	25	普通	にぶい赤褐	外面煤付着	
15	土師器	坏	(11.8)	[3.4]	—	C E I K	20	普通	橙		
16	土師器	坏	(13.6)	[3.5]	—	C E I K	10	普通	橙		
17	土師器	坏	(12.8)	[3.6]	—	C D E H I K	10	普通	橙		
18	土師器	坏	(12.0)	[3.2]	—	B C I K	15	普通	にぶい橙	器面の摩耗が激しい	
19	土師器	坏	(12.2)	[2.7]	—	C E H I K	10	普通	橙		
20	土師器	坏	(13.6)	[2.7]	—	C E H I K	10	普通	にぶい橙		
21	土師器	坏	(12.0)	[2.4]	—	C E H I K	5	普通	灰褐	内面一部剥離	
22	土師器	坏	(12.0)	[2.4]	—	C H I K	5	普通	にぶい橙		
23	土師器	坏	(11.7)	[2.7]	—	C E I K	15	普通	橙	内面煤付着	
24	土師器	坏	(13.8)	[3.0]	—	B C I K	10	普通	にぶい橙		
25	土師器	坏	(12.9)	[2.4]	—	B C D I K	10	普通	にぶい橙	内外面煤付着	
26	土師器	坏	(12.8)	[2.3]	—	C E I K	5	普通	橙		
27	土師器	坏	(11.4)	[2.1]	—	C H I K	5	普通	橙		
28	土師器	坏	(13.0)	[2.2]	—	C H I K	5	普通	にぶい黄橙		
29	土師器	坏	(10.9)	[2.4]	—	B I	5	普通	橙	外面剥離が激しい	
30	土師器	坏	(10.7)	[2.1]	—	C E H I K	10	普通	にぶい褐		
31	土師器	皿	(14.9)	[2.8]	—	C E I K	10	普通	橙		
32	土師器	皿	(15.6)	[2.6]	—	C E H I K	5	普通	橙	内外面ともに摩耗	
33	土師器	皿	(15.8)	[3.6]	—	A C H I K	20	普通	にぶい赤褐		
34	土師器	皿	(14.4)	[2.5]	—	A H I K	10	普通	にぶい橙	口唇部内縁から外面にかけて摩耗が激しい	
35	土師器	皿	(15.0)	[2.7]	—	C H I K	5	普通	橙		
36	土師器	皿	—	[2.6]	—	C E H I K	5	普通	橙	No.10 外面炭化物付着	
37	土師器	鉢	(10.5)	[4.4]	—	C E G H I K	5	普通	黄灰	器表面風化	
38	土師器	甕	(22.0)	[8.2]	—	C H I K	10	普通	にぶい橙		
39	土師器	甕	(22.4)	[5.5]	—	A C E H I K	20	普通	明赤褐		
40	土師器	甕	(20.0)	[5.3]	—	B C E H I K	10	普通	橙		
41	土師器	甕	18.6	[6.6]	—	A C H I K	40	普通	明赤褐	No.4 歪みが強い	108-1
42	土師器	甕	(15.8)	[5.2]	—	C G H I K	10	普通	にぶい赤褐		
43	土師器	甕	(13.3)	[5.4]	—	A C E I K	30	普通	赤褐	口縁部内面に煤付着	
44	土師器	甕	—	[8.5]	5.6	A C E I K	50	普通	にぶい褐	No.3 外面煤付着 底部のみ摩耗が激しく調整は不明瞭	108-2
45	土師器	甕	—	[1.6]	6.9	C G H I	90	普通	橙		
46	土師器	甕	—	[1.6]	(5.6)	C E H I K	15	普通	にぶい橙		
47	土師器	甕か	(22.7)	[6.1]	—	C H I J K	5	普通	明赤褐		
48	土師器	甕	(17.7)	[5.9]	—	C E H I	20	普通	にぶい橙	SJ28に帰属するものか	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
49	土師器	高壺	—	[3.4]	—	A C E H I K	30	普通	明赤褐	古墳時代	
50	土師器	高壺	—	[6.7]	—	A H I K	25	普通	橙	外面摩耗 古墳時代	
51	石製品	鉗錘車	径4.9	孔径1.1	厚さ1.6	重さ52.5 g				No.1 流紋岩	127-1
52	鉄製品	不明	長さ[8.0]	幅1.0	厚さ0.5	重さ14.6 g					126-2



第254図 第28号住居跡

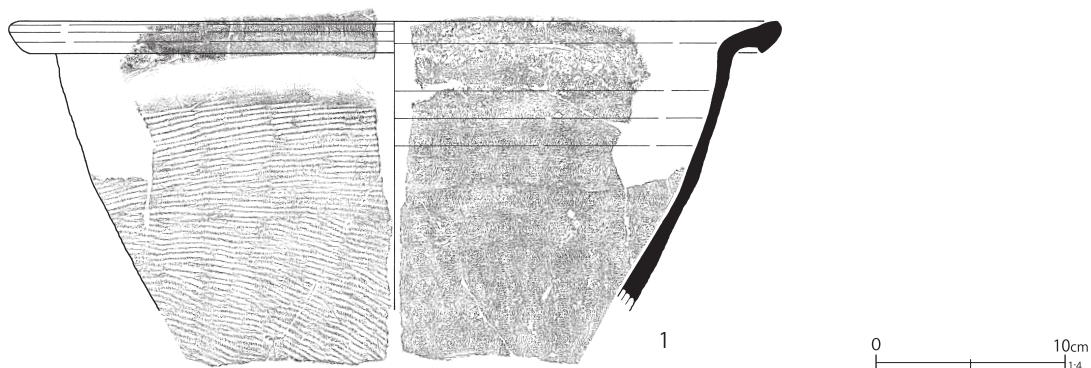
使用による摩耗が認められた。口縁部形状やタタキの方向から、8世紀前半～中葉と考えられる。第27・36号住居跡からも接合破片や同一個体と考えられる破片が出土地しているが、大部分を占めるのは第28号住居跡から出土した破片である。

遺物が1点のみであり、遺構の形や堆積状況も不明なため、詳細は不明だが、須恵器甕の時期と、第27号住居跡と切り合ってことから8世紀中葉の遺構と考えられる。

第31号住居跡（第256図）

第2次調査における中央調査区の北東角、G・H-12グリッドに位置し、西壁の一部を第82号井戸跡によって壊される。遺構の北半部は調査区域外へ延び、東側は排水溝によって壊されるため、平面形態は不明である。

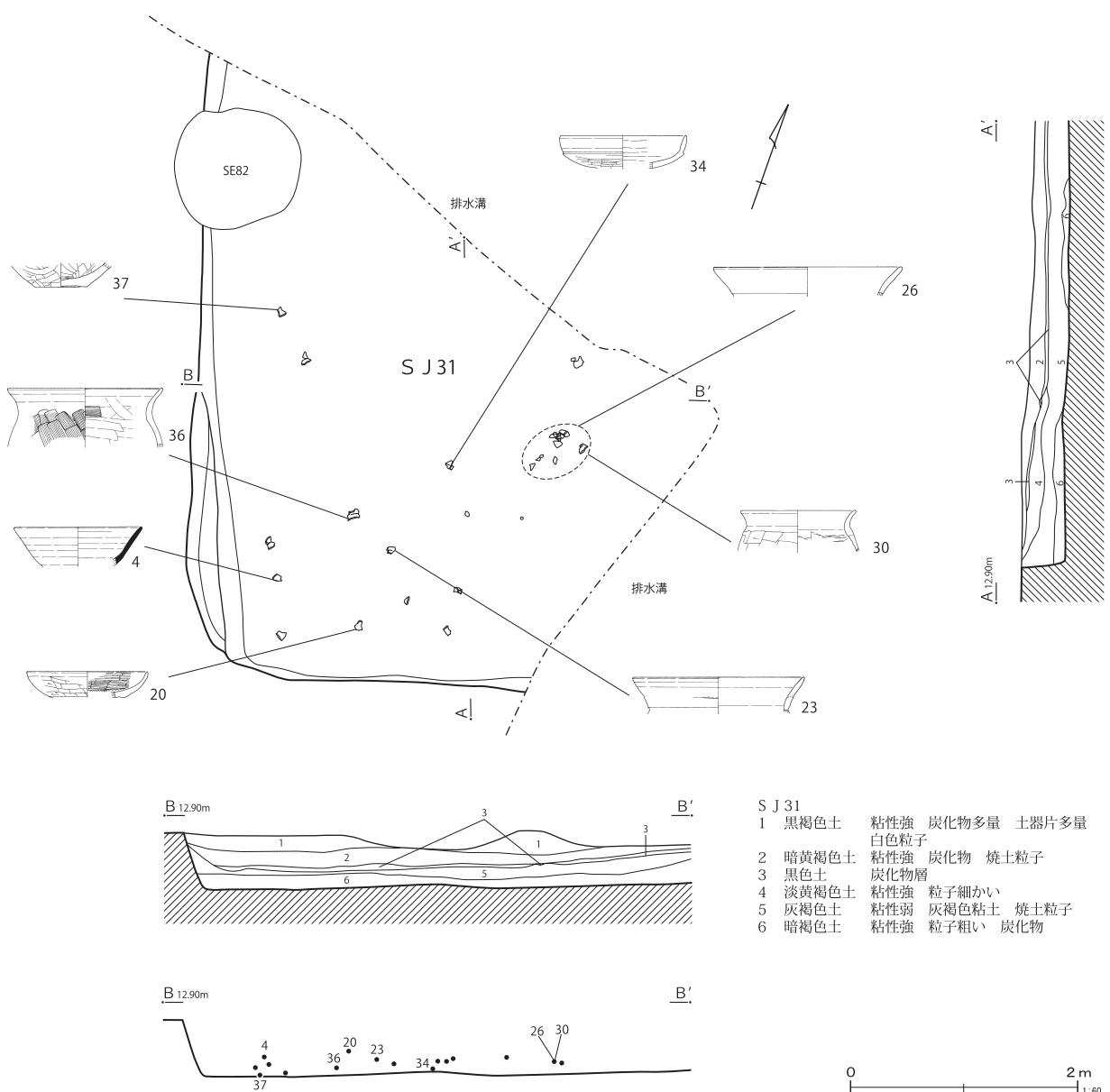
規模は、残存部で長軸5.45m、短軸4.65m、深さ0.50mを測り、長軸方位はN-18°-Wを指す。覆土は水平堆積で、中層には薄い炭化物層が堆積する。



第255図 第28号住居跡出土遺物

第75表 第28号住居跡出土遺物観察表（第255図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	(39.8)	[15.2]	—	A D I K	40	普通	灰	2次SJ7No.32 新治産 口縁部内面が摩耗している	108-3



第256図 第31号住居跡・遺物出土状況

カマド、壁溝、ピットは検出されなかった。遺物は住居跡全体から散発的に検出され、須恵器蓋・壺、土師器壺・甕、火打石が出土した（第257図1～38）。

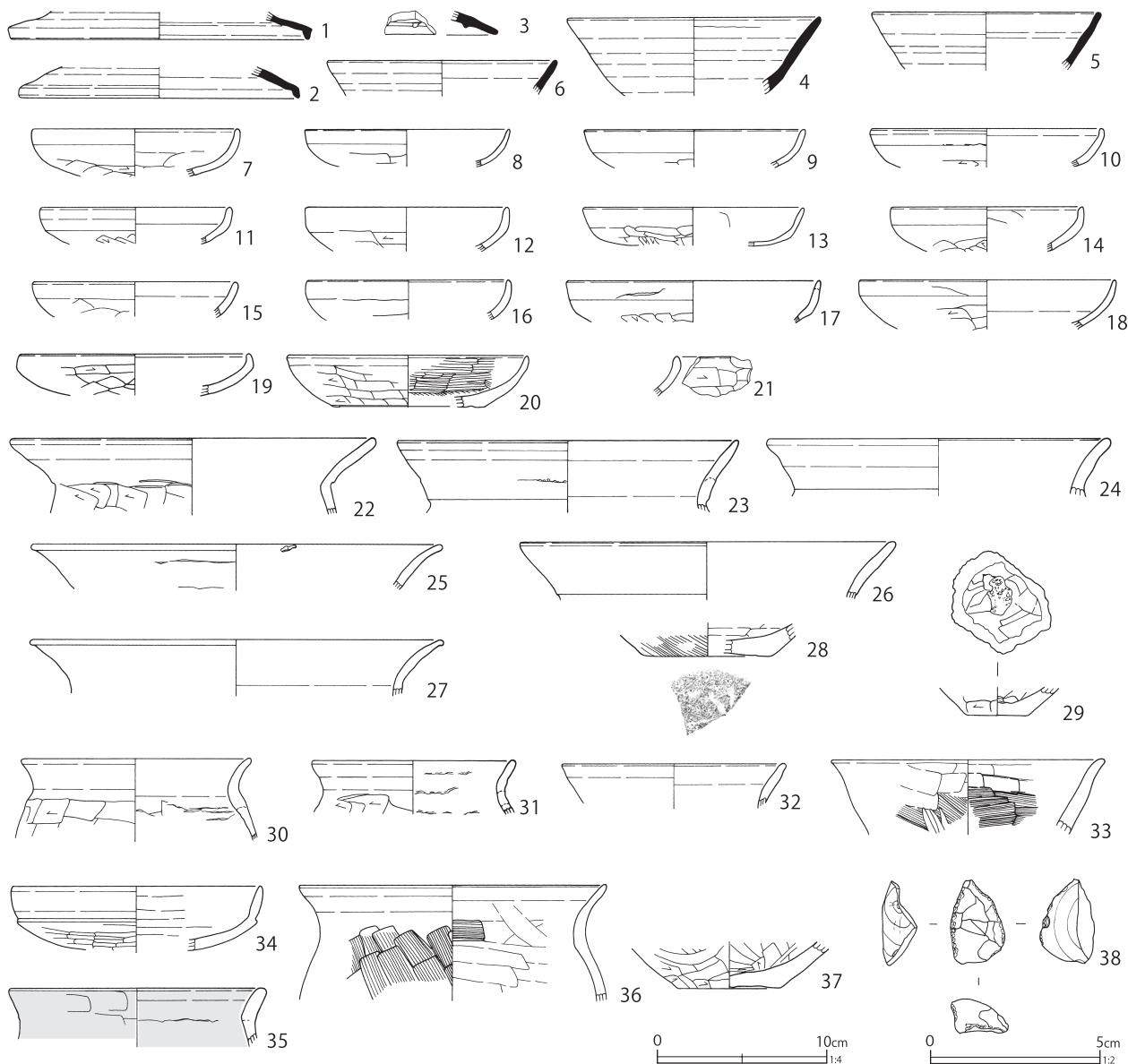
1～6は須恵器である。1～3は蓋で、1は南比企、2は末野の製品である。3はカエリ付きの蓋になる。4～6は壺で、三毳と南比企の製品が含まれる。

7～37は土師器である。7～21は壺で、7～17は北武藏型壺である。扁平で口径が大きく、口縁

部がやや外反するものが多い。口縁部外面のヨコナデと下半のヘラケズリの間に無調整帶を持つものが一定量含まれる。20は扁平で口径が大きいもので、内面全体に横方向のミガキが施される。

22～32は甕で、22～27は口縁部に最大径を持ち、胴部がやや膨らむものと推察される。28は常陸型甕で、外面下端に縦方向のミガキが施される。

30～32は口径が小さいため、小型台付甕と考えられる。頸部は「く」の字状に屈曲する。33は小型の甕で、内外面に刷毛目調整が施され、鉢形に



第257図 第31号住居跡出土遺物

なるものと推察される。古式の様相を持つことから混入品の可能性がある。

34～37は古墳時代の遺物で、混入品と考えられる。34は壺蓋模倣壺である。35は鉢で、内外面に赤彩が施される。36、37は甕で、36は外面に刷毛目調整が施される。

38はチャート製の火打石である。中・近世の井戸跡と重複関係にあるため、近世の混入品の可能性も考えられる。

遺物の時期は、土師器壺や甕の形状から、8世紀前半と考えられる。

第33号住居跡（第258・259図）

第2次調査における中央調査区の北東部、G-12グリッドに位置する。第34号住居跡、第101・188・189号土壙と重複し、第101・188・189号土壙より古く、第34号住居跡より新しい。

遺構の南西部は第188・189号土壙によって、南東隅は第101号土壙によって壊され、また北半部は調査区域外へと延びるため、平面形態は不明である。

規模は、残存部で長軸2.84m、短軸2.55m、深さ0.34mを測り、長軸方位はN-18°-Wを指す。

第76表 第31号住居跡出土遺物観察表（第257図）

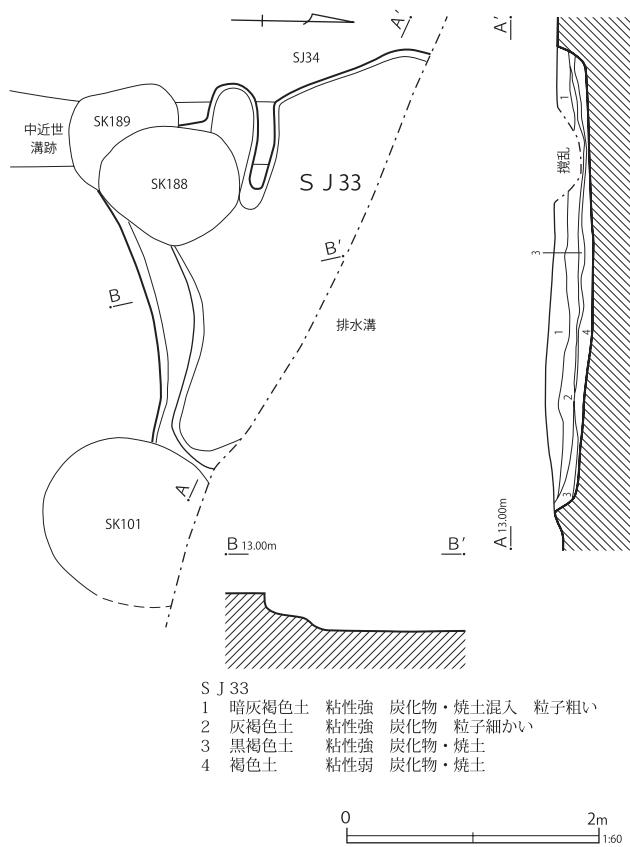
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(17.5)	[1.5]	—	E I J K	5	良好	灰	南比企産	
2	須恵器	蓋	(16.4)	[1.8]	—	D E I K	10	普通	灰黄	未野産 口唇部外縁に重ね焼きによる 変色が認められる	
3	須恵器	蓋	—	[1.9]	—	D E I	5	普通	にぶい黄橙		
4	須恵器	坏	(14.8)	[4.5]	—	C E I K	40	普通	灰白	No.1 SJ7No.87 三毳産か	108-4
5	須恵器	坏	(13.3)	[3.4]	—	I J K	25	良好	灰	南比企産 外面降灰	
6	須恵器	坏	(13.4)	[2.1]	—	C E I K	10	普通	灰白	三毳産	
7	土師器	坏	(12.0)	[2.8]	—	C D I K	10	普通	にぶい橙		
8	土師器	坏	(12.0)	[2.2]	—	C H I K	5	普通	にぶい橙		
9	土師器	坏	(12.8)	[2.2]	—	C H I K	5	普通	にぶい橙		
10	土師器	坏	(13.6)	[2.3]	—	C H I K	5	普通	にぶい橙		
11	土師器	坏	(11.0)	[2.1]	—	C E I K	10	普通	橙		
12	土師器	坏	(12.0)	[2.6]	—	C D E K	10	普通	にぶい橙	内面および破断面に煤付着	
13	土師器	坏	(12.8)	[2.2]	—	C I K	15	普通	にぶい橙		
14	土師器	坏	(11.0)	[2.6]	—	C E I K	10	普通	橙		
15	土師器	坏	(11.8)	[2.0]	—	C E I K	10	普通	にぶい橙	被熱の為か外面が変色し摩耗している	
16	土師器	坏	(11.6)	[2.3]	—	C E H I K	10	普通	橙		
17	土師器	坏	(14.8)	[2.4]	—	C I K	10	普通	橙	内面被熱により変色	
18	土師器	坏	(15.0)	[2.9]	—	C H I K	5	普通	橙		
19	土師器	坏	(13.4)	[2.4]	—	D H I K	5	普通	明赤褐	内外面煤付着	
20	土師器	坏	(14.0)	[3.0]	(9.1)	E H I K	20	普通	橙	No.2 内面ミガキ 胎土に赤色粒子多	
21	土師器	坏	—	[2.3]	—	C E H I K	5	普通	にぶい赤褐	内外面赤彩 外面煤付着	
22	土師器	甕	(21.0)	[4.5]	—	E I K	15	普通	にぶい橙		
23	土師器	甕	(20.0)	[4.2]	—	B C E H I K	5	普通	にぶい橙	No.8	
24	土師器	甕	(20.0)	[3.4]	—	C D E H I K	10	普通	にぶい褐	口唇部に煤付着	
25	土師器	甕	(24.0)	[2.7]	—	B C H I K	5	普通	橙	口唇部に土器作成時の粘土カス付着	
26	土師器	甕	(22.0)	[3.4]	—	B C I K	25	普通	橙	No.3 外面煤付着 内面黒斑有り	
27	土師器	甕	(24.0)	[3.3]	—	C H I K	5	普通	にぶい橙		
28	土師器	甕	—	[1.9]	(7.0)	A D E G I K	15	普通	橙	常陸型甕 多量の雲母・長石粒を含む 内面煤付着	
29	土師器	甕	—	[1.7]	3.7	A C I K	75	普通	にぶい赤褐	底部外面摩耗が激しい 内底面調整時のケズリカスと考えられる粘土粒付着	
30	土師器	小型台付甕	(13.2)	[4.8]	—	C H I K	25	普通	にぶい橙	No.3 内面頸部から口唇部にかけて摩耗	
31	土師器	小型台付甕	(11.6)	[3.1]	—	C E I K	15	普通	にぶい赤褐	内面煤付着	
32	土師器	小型台付甕	(12.9)	[2.6]	—	C E I K	15	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着	
33	土師器	甕	(16.0)	[4.4]	—	C D E H I K	10	普通	にぶい黄橙		
34	土師器	坏	(14.6)	[3.7]	—	B C H I K	5	普通	明赤褐	No.9 古墳時代	
35	土師器	鉢	(15.0)	[3.5]	—	C I K	10	普通	明赤褐	内外面赤彩 古墳時代	
36	土師器	甕	(18.0)	[7.8]	—	C D G H I K	10	普通	にぶい橙	No.7 古墳時代	
37	土師器	甕	—	[2.7]	(6.0)	B E I	25	普通	明赤褐	No.10 外面煤付着 古墳時代	
38	石製品	火打石	長さ2.5 幅[1.6] 厚さ[1.0] 重さ3.8 g							チャート 側縁部弱い潰れ 縦長剥片 素材 稜の再生有り	

覆土は水平堆積で、全層に焼土粒子と炭化物が含まれる。西壁南寄りからカマドらしき構造物が検出されたが、中は焼けておらず、用途は不明である。南壁には階段状の段が設けられるが、性格は不明である。

カマド、壁溝、ピットは検出されなかった。

遺物は住居跡中央部からまとまって検出され、須恵器坏、土師器坏・皿・甕、磨石が出土した（第260図1～22）。

1、2は須恵器の坏である。1は底部全周回転



第258図 第33号住居跡

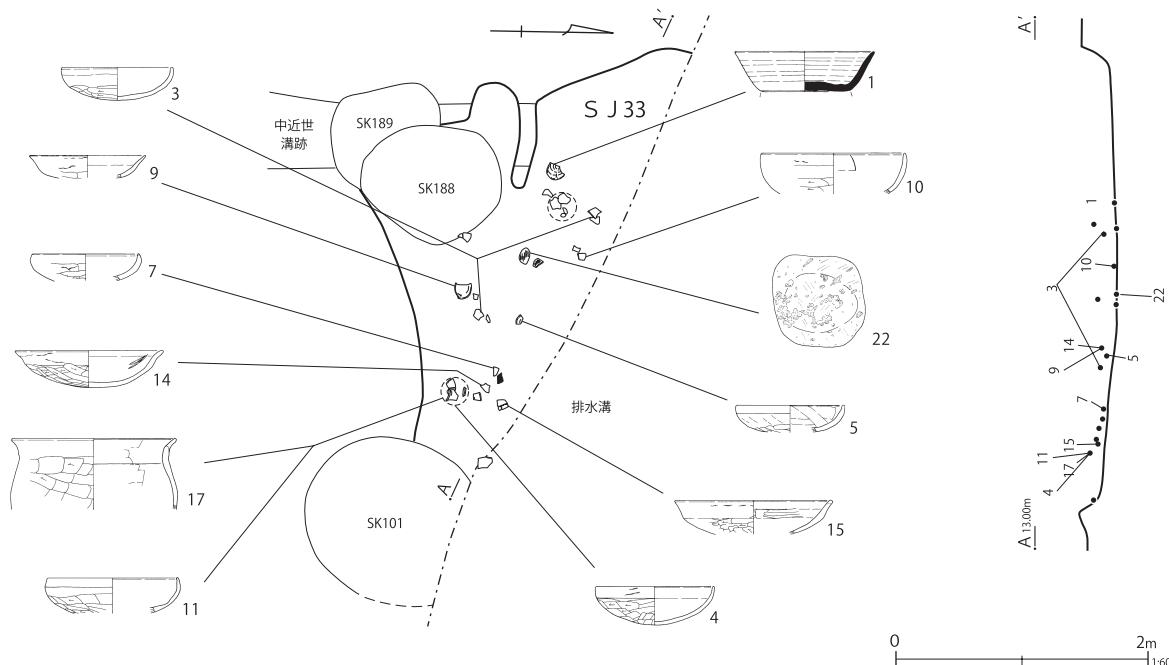
ヘラケズリ調整が施されるが、回転ヘラ切り痕が僅かに残る。堀ノ内の製品である可能性がある。2も底部に回転ヘラケズリ調整が認められる。

3~21は土師器である。3~15は壺で、3~6は北武藏型壺である。3、4はやや深身で底部の丸みが強く、5、6は浅身で扁平になり、口縁部ヨコナデの下に無調整帶を持つ。3は内面全体に煤が付着し、一部灯芯が当たっていた痕跡が認められることから、灯火具として使用されていたと考えられる。8、9は口縁部が大きく外反する。

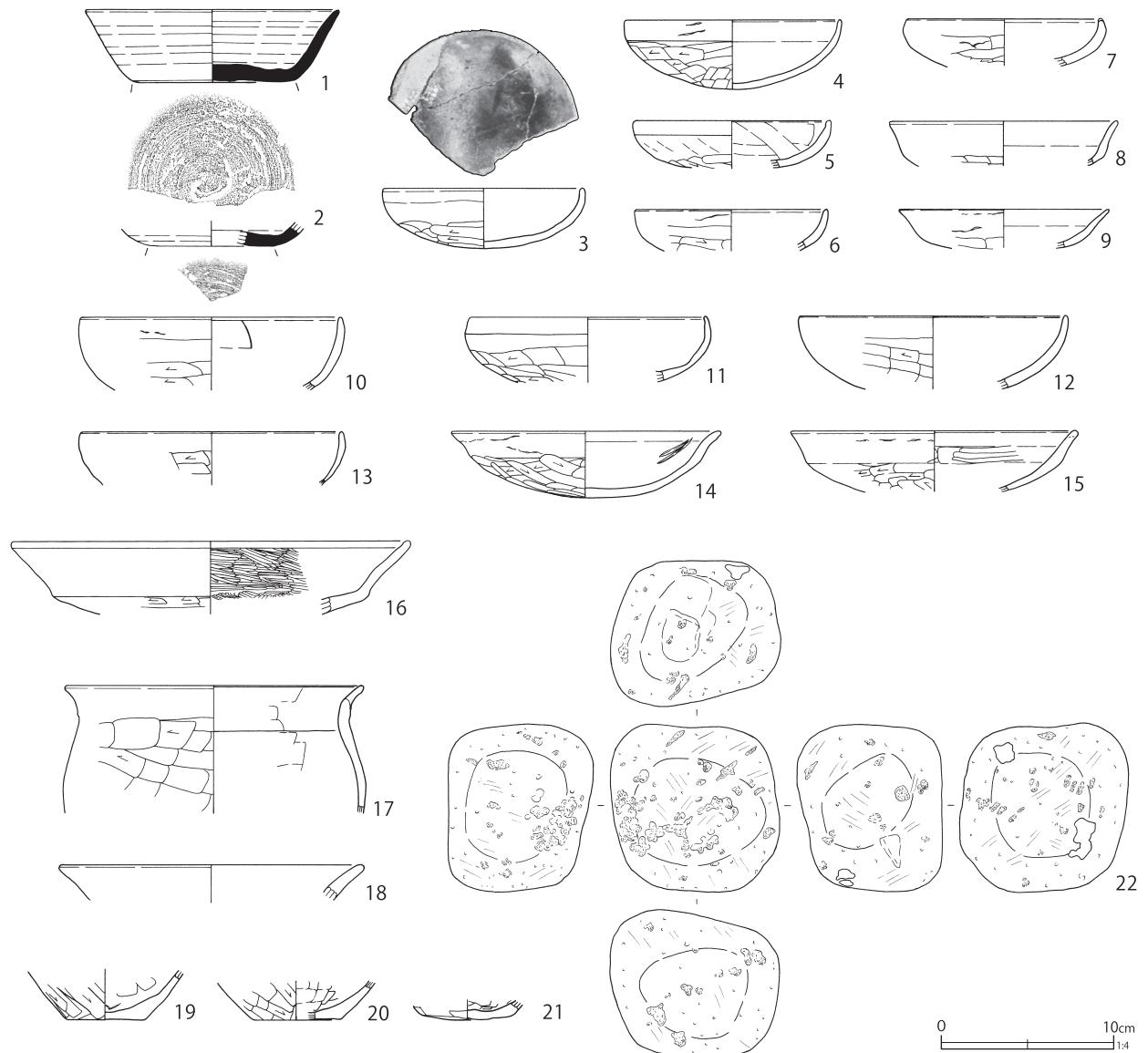
10~13はやや大型の壺である。いずれも北武藏型壺で、口縁部はやや内湾気味になり、口縁部ヨコナデの下に無調整帶を持つ。14、15は皿形で、口縁部が大きく外反する大型の壺である。16は皿で特に口径が大きく、内面には横方向のミガキが施される。

17~21は甕である。胴部に最大径を持ち、頸部の屈曲が緩い。

22は角閃石安山岩製の磨石である。



第259図 第33号住居跡遺物出土状況



第260図 第33号住居跡出土遺物

遺物の時期は、須恵器壺や土師器壺、甕の形状から、8世紀前半と考えられる。

第34号住居跡（第261図）

第2次調査における中央調査区の北東部、G-11・12グリッドに位置する。第33・35号住居跡と重複し、第33号住居跡より古く、第35号住居跡より新しい。住居跡の中央部は中・近世の土壙によって大きく壊される。覆土が浅く、東側はプランが確認できなかったため、平面形態は不明である。

規模は、残存部で長軸6.24m、短軸5.13m、深

さ0.10mを測り、長軸方位はN-74°-Eを指す。覆土はほぼ削平されているため、堆積状況は不明だが、床面付近の覆土には炭化物が少量含まれていた。

北壁西寄りからは、南北方向に長い楕円形の焼土跡が検出された。規模は、長径1.37m、短径0.75m、深さ0.10mを測り、堆積土中には、焼土層が含まれていた。

カマド、壁溝、ピット等は検出されなかった。遺物は土師器壺・甕が出土した（第262図1～8）。1～5は壺で、北武藏型壺である。浅身で

第77表 第33号住居跡出土遺物観察表（第260図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	(14.4)	4.2	9.8	D E I	50	普通	灰	No.1 堀ノ内産か	108-5
2	須恵器	壺	—	[1.4]	(7.2)	I K	15	良好	灰黄	内面および破断面に煤付着	
3	土師器	壺	(11.4)	3.5	—	C H I K	45	普通	橙	No.4・10	108-6
4	土師器	壺	(12.4)	4.0	—	C D H I K	35	普通	橙	No.17 被熱有り	108-7
5	土師器	壺	(11.2)	[2.7]	—	C I K	20	普通	明赤褐	No.11 外面煤付着 被熱の影響か外面全体が変色	
6	土師器	壺	(11.0)	[2.4]	—	C H I K	10	普通	橙		
7	土師器	壺	(11.2)	[2.7]	—	A C E H I K	15	普通	にぶい橙	No.12	
8	土師器	壺	(13.0)	[2.5]	—	C E H I K	10	普通	にぶい橙		
9	土師器	壺	(12.0)	[2.3]	—	C E H I K	5	普通	橙	No.9 内面煤付着	
10	土師器	壺	(15.0)	[4.2]	—	C H I K	10	普通	にぶい橙	No.5	
11	土師器	壺	(13.6)	[3.8]	—	C E H I K	25	普通	にぶい橙	No.17 外面煤付着 割れた後に被熱したか 内外面ともに摩耗	108-8
12	土師器	壺	(15.4)	[4.2]	—	A C H I K	15	普通	橙		
13	土師器	壺	(15.0)	[3.1]	—	A C H I K	5	普通	にぶい橙		
14	土師器	壺	15.4	3.8	—	C E H I K	50	普通	明赤褐	No.9 外面煤付着 歪み有り	108-9
15	土師器	壺	(16.3)	[3.5]	—	A E H I K	10	普通	にぶい黄橙	No.15	
16	土師器	皿	(23.0)	[4.2]	—	C H I K	5	普通	にぶい橙	内面ミガキ 内面煤付着	
17	土師器	甕	(17.0)	[7.4]	—	A E I K	20	普通	橙	No.17	
18	土師器	甕	(17.0)	[2.2]	—	C E H I K	5	普通	明赤褐	内面煤付着	
19	土師器	甕	—	[2.9]	4.4	A C I K	40	普通	にぶい黄褐	内面が部分的に変色している	
20	土師器	甕	—	[2.2]	(5.0)	C D G H I	10	普通	にぶい橙		
21	土師器	甕	—	[1.1]	(5.0)	E H I K	35	普通	橙		
22	石製品	磨石	長さ9.7 幅9.8 厚さ8.4 重さ426.3 g						No.7 角閃石安山岩 多孔質 使用面6 煤わざかに付着		
									127-2		

扁平のものが多く、口縁部はやや外反気味に立ち上がり、口縁部外面ヨコナデの下に無調整帶を持つものが含まれる。

6～8は甕である。いずれも破片であるため、詳細は不明である。

遺物の点数が少ないため詳細はわからないが、重複関係や出土した土師器壺の器形等から、8世紀前半と考えられる。

第35号住居跡（第263図）

第2次調査における中央調査区の北東部、G-11グリッドに位置する。第34号住居跡と重複し、本遺構が古い。住居跡の南東部は中・近世の土壌によって大きく壊される。

平面形態は東西にやや長い長方形で、規模は長軸4.09m、短軸3.12m、深さ0.21mを測り、長軸方位はN-65°-Eを指す。覆土は第34号住居跡によって削平されるが、床面付近の覆土には炭化物

が少量含まれていた。

住居跡の北西部からは、ピットが1基検出された。平面形態は円形で、規模は長径0.77m、短径0.73m、深さ0.08mを測る。

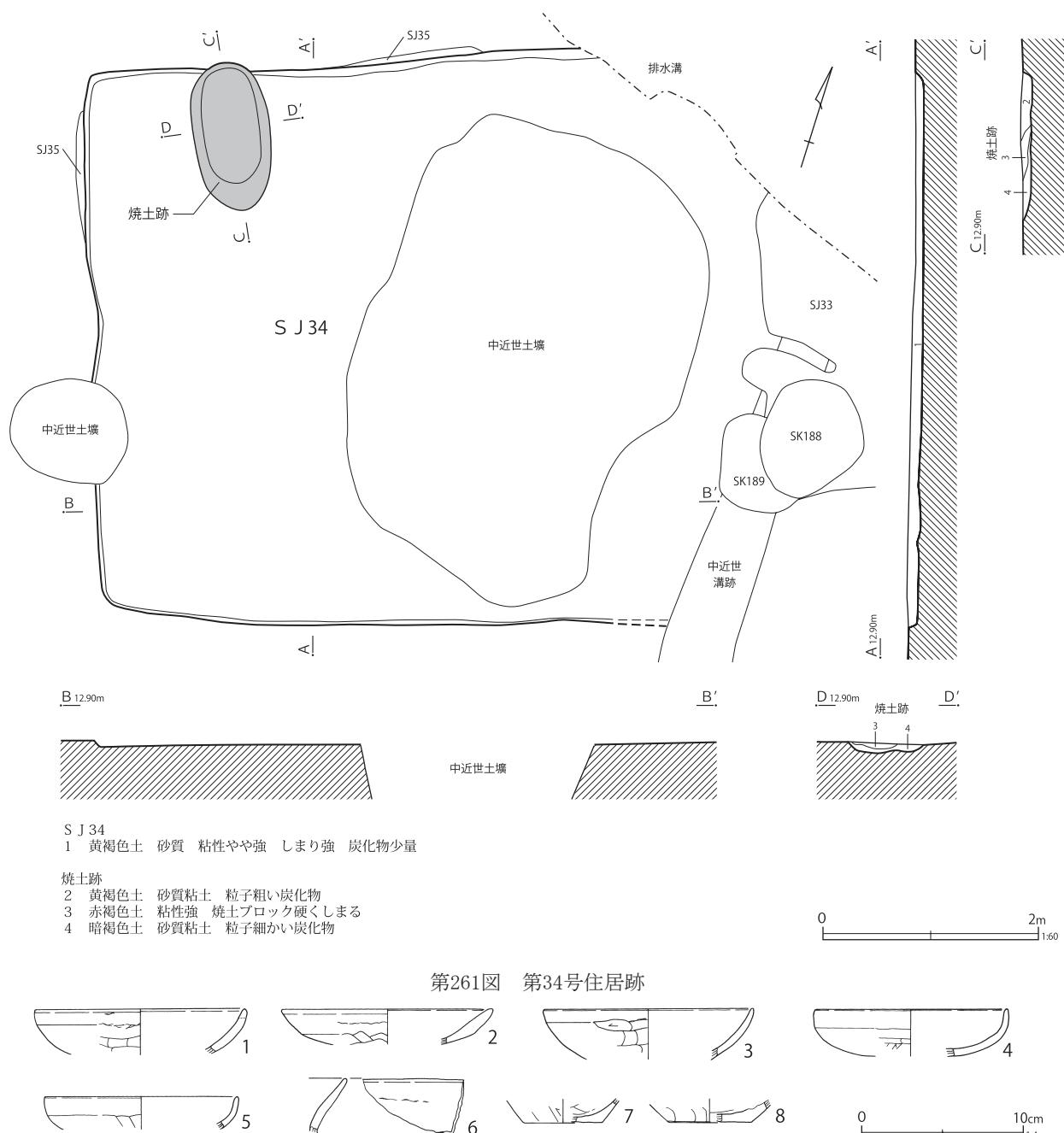
カマド、壁溝等は検出されなかった。

遺物は土師器壺が出土した（第264図1～3）。1～3は北武藏型壺である。1、2はやや深身で、口縁部は垂直気味に立ち上がり、口縁部外面ヨコナデの直下までヘラケズリが施される。3はやや浅身で、口縁部はやや外反しながら立ち上がる。

遺物の点数が少ないため詳細はわからないが、重複関係や出土した土師器壺の器形等から、8世紀初頭～前半と考えられる。

第36号住居跡（第265・266図）

第2次調査における中央調査区の東側、H-I-12グリッドに位置する。第37・43号住居跡と重複し、本遺構が新しい。住居跡の中央部には、後

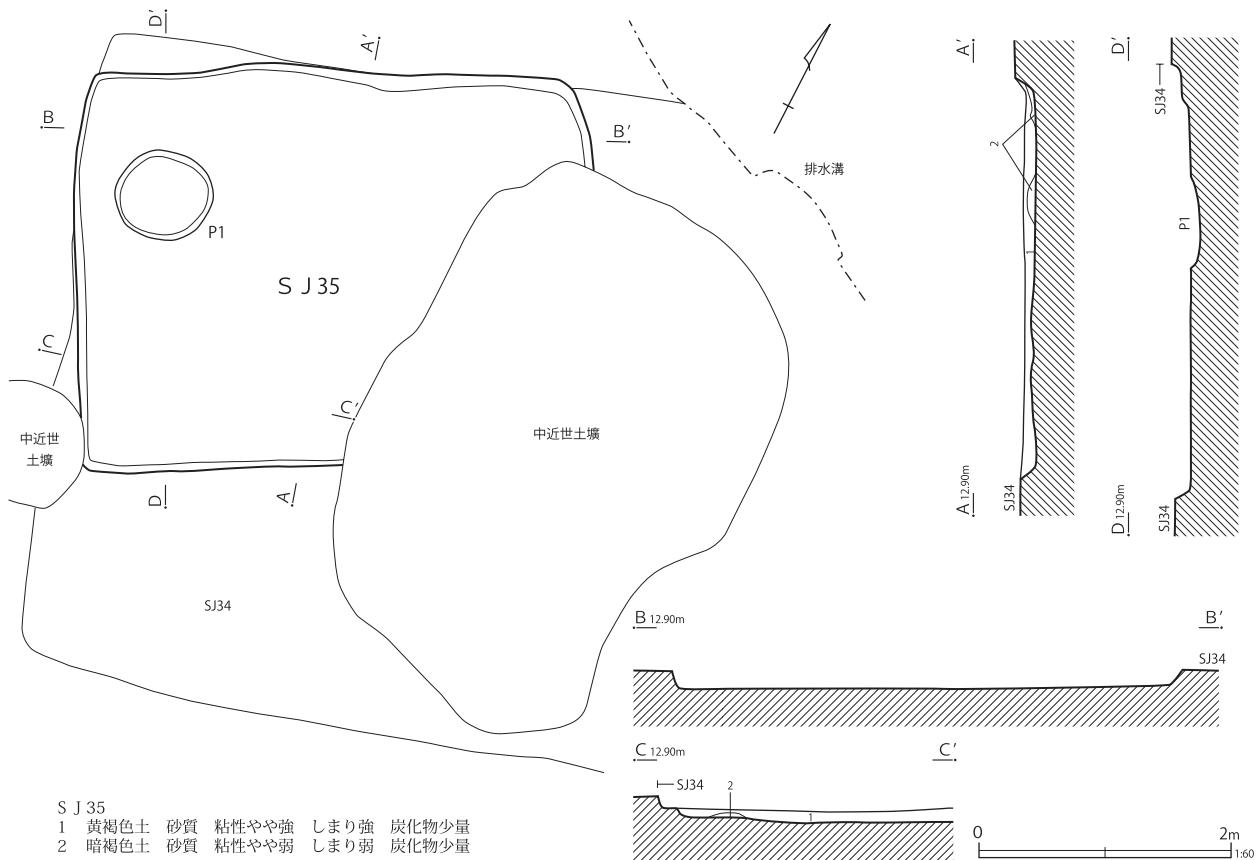


第261図 第34号住居跡

第262図 第34号住居跡出土遺物

第78表 第34号住居跡出土遺物観察表 (第262図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(13.2)	[2.8]	—	C E H I K	10	普通	にぶい橙		
2	土師器	壺	(13.0)	[2.1]	—	C E H I K	5	普通	橙	内面摩耗が激しい	
3	土師器	壺	(13.0)	[3.1]	—	C G I K	10	普通	にぶい赤褐		
4	土師器	壺	(11.8)	[2.9]	—	C E H I K	5	普通	橙		
5	土師器	壺	(11.8)	[2.0]	—	C E I K	5	普通	橙		
6	土師器	甕	—	[3.3]	—	E H I K	5	普通	にぶい橙		
7	土師器	甕	—	[1.4]	(4.9)	C E I K	35	普通	にぶい橙	底部外面は摩耗が激しい 内外面共に 煤付着	
8	土師器	甕	—	[1.4]	(5.0)	C H I K	20	普通	にぶい褐	外面煤付着	



第263図 第35号住居跡



第264図 第35号住居跡出土遺物

第79表 第35号住居跡出土遺物観察表（第264図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(12.0)	[3.3]	—	A C I K	20	普通	にぶい褐	内面黒斑有り	
2	土師器	壺	(12.0)	[3.6]	—	C E I K	10	普通	にぶい橙		
3	土師器	壺	(12.0)	[3.0]	—	C E H I K	20	普通	にぶい褐		

代の地震によって発生した液状化現象に伴うと推察される、噴砂の痕跡が東西方向に走っていた。

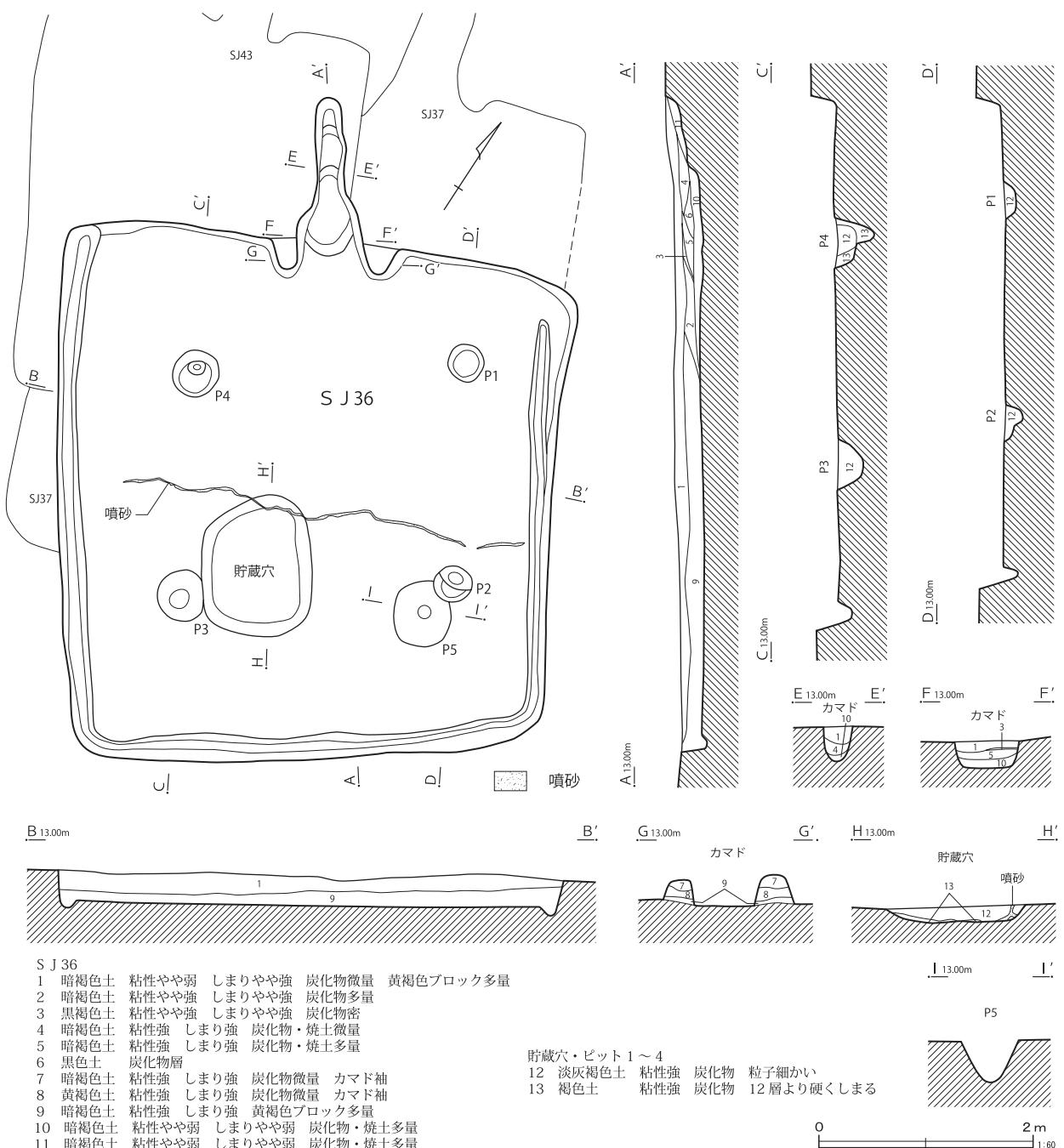
平面形態は南北にやや長い方形で、規模は長軸5.00m、短軸4.58m、深さ0.32mを測り、主軸方位はN-26°-Wを指す。覆土は全層に炭化物を含み、床面付近には焼土も含まれていた。

北壁中央には、カマドが設けられ、壁溝は北壁以外で検出された。住居内の四方には、柱穴の可

能性があるピットが位置する。住居跡の中央やや南西寄りには、貯蔵穴と判断された土壙が検出された。

カマドは袖が住居跡内に0.37m程張り出す。平面形態は燃焼部が幅広で、煙道部はやや狭くなる。燃焼部は僅かに掘り窪められ、煙道部との間には0.10m程の段を持って立ち上がる。

規模は、全長1.47m、幅0.55m、深さ0.25mを測る。



第265図 第36号住居跡

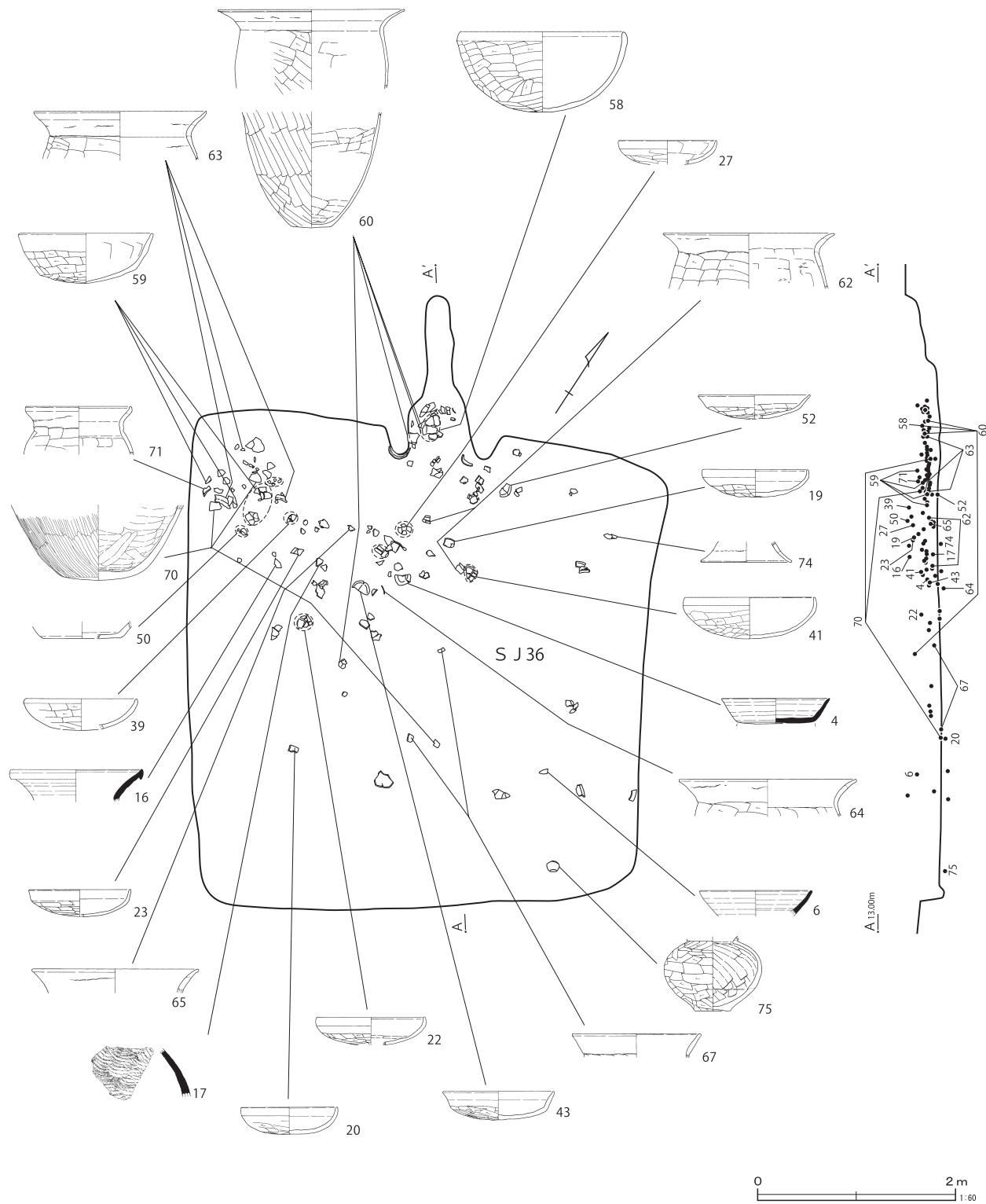
覆土は、焼土と炭化物を多く含み、中層からは炭化物層が検出された。

壁溝は北壁以外で検出された。規模は幅0.16～0.27m、深さ0.04～0.38mを測る。

ピットは5基検出された。ピット1～4は平面形態が円形または楕円形で、規模はピット1が長径0.35m、短径0.34m、深さ0.11mを測る。ピット

2は長径0.34m、短径0.33m、深さ0.17mを測る。ピット3は長径0.48m、短径0.45m、深さ0.22mを測る。ピット4は直径0.43m、深さ0.29mを測る。いずれも浅いが、住居跡内の四方に等間隔で位置することから、柱穴の可能性がある。

ピット5は平面形態が丸みの強い隅丸方形で、規模は長径0.61m、短径0.54m、深さ0.32mを測り、

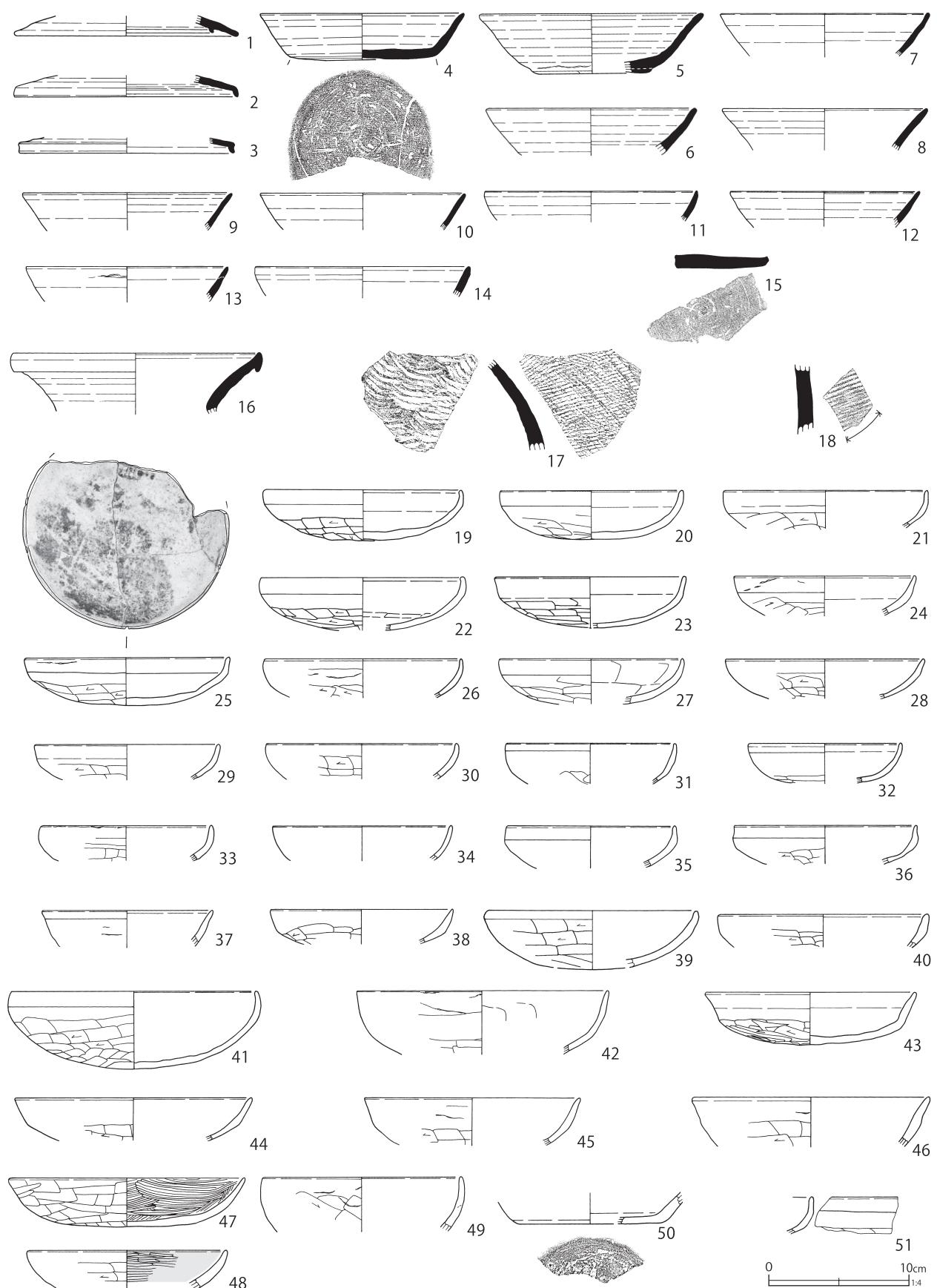


第266図 第36号住居跡遺物出土状況

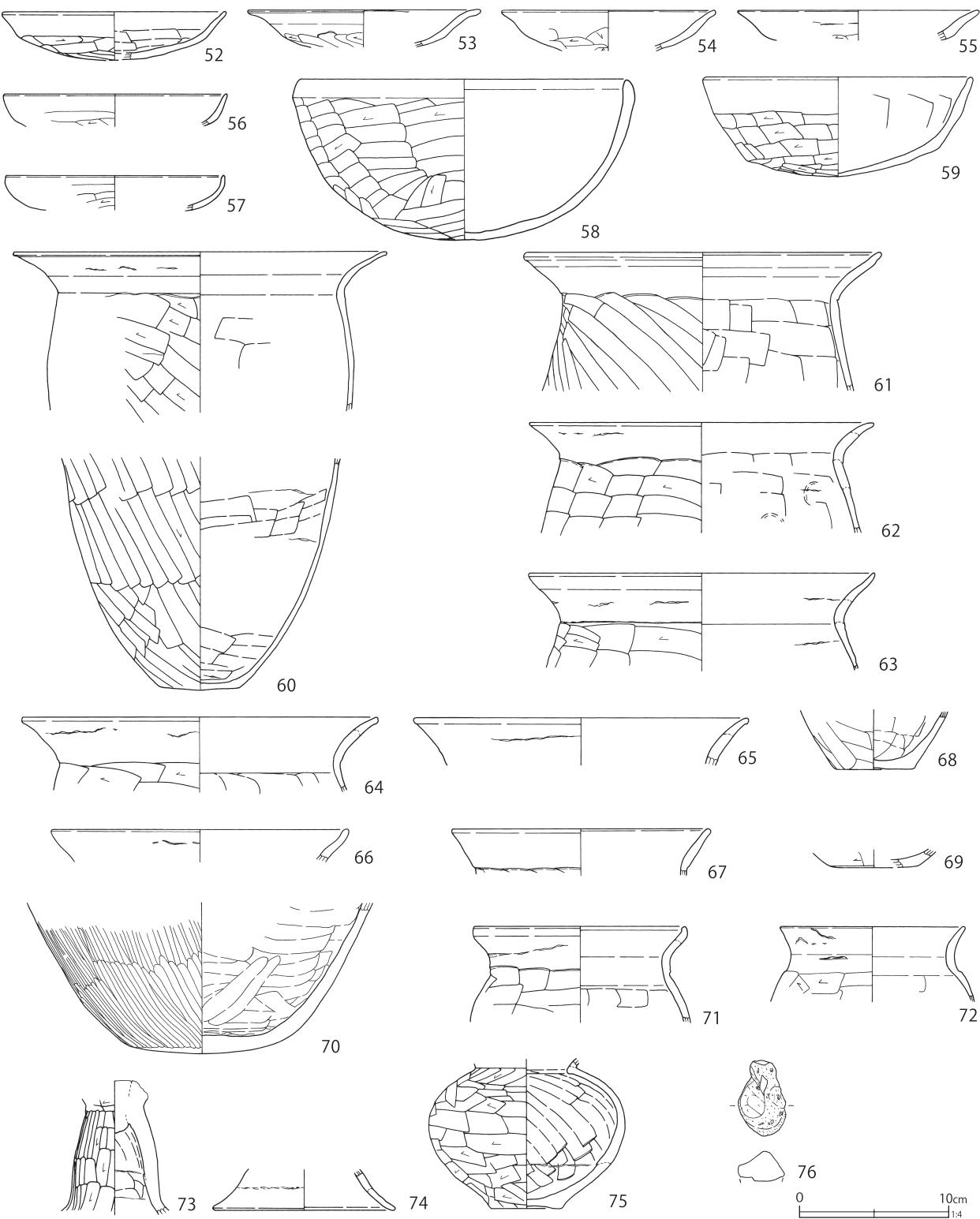
ピット2に壊されている。検出された位置から、柱穴か柱穴に関連するピットの可能性がある。

貯蔵穴は平面形態がやや歪んだ隅丸方形で、規

模は長径1.32m、短径1.02m、深さ0.13mを測る。覆土には炭化物が含まれていた。検出された位置や、周辺からあまり遺物が出土していないことか



第267図 第36号住居跡出土遺物（1）



第268図 第36号住居跡出土遺物（2）

ら、床下土壙である可能性もある。

遺物は住居跡全体から出土するが、特に北西部とカマド周辺からまとまって検出され、須恵器蓋・

壺・甕、土師器壺・皿・鉢・甕・小型台付甕・高壺・磨石等が出土した(第267・268図1~76)。

1~18は須恵器である。1~3は蓋で、1は末

第80表 第36号住居跡出土遺物観察表 (第267・268図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(15.8)	[1.4]	—	B I K	5	普通	灰白	末野産	
2	須恵器	蓋	(15.8)	[1.5]	—	I K	5	普通	灰褐	内面降灰	
3	須恵器	蓋	(15.2)	[1.0]	—	I J K	5	普通	褐灰	南比企産	
4	須恵器	坏	14.3	3.3	10.2	E I J K	65	普通	褐灰	No.8 南比企産	109-1
5	須恵器	坏	(15.7)	4.3	(8.5)	I K	20	普通	灰白	底部粘土貼り付け	
6	須恵器	坏	(14.7)	[3.3]	—	E I K	30	良好	灰白	No.33 三毳産	109-2
7	須恵器	坏	(14.8)	[3.1]	—	I J K	5	普通	灰白	南比企産	
8	須恵器	坏	(14.6)	[3.0]	—	I K	10	普通	黄灰	口唇部に重ね焼きによる変色が認められる	
9	須恵器	坏	(14.8)	[2.6]	—	D I K	5	普通	灰白		
10	須恵器	坏	(14.6)	[2.6]	—	I K	5	普通	褐灰	東金子産か	
11	須恵器	坏	(15.0)	[2.1]	—	B I K	5	普通	灰白		
12	須恵器	坏	(13.4)	[2.5]	—	J K	5	普通	にぶい黄橙	南比企産	
13	須恵器	坏	(14.4)	[2.5]	—	I J K	5	普通	褐灰	南比企産	
14	須恵器	坏	(15.2)	[2.1]	—	B I J	5	普通	灰	口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる 南比企産	
15	須恵器	坏	—	[1.0]	—	I K	5	普通	灰白		
16	須恵器	甕	(17.6)	[4.3]	—	B I J	25	普通	褐灰	No.20 南比企産 内面および口唇部外縁降灰	
17	須恵器	甕	—	[6.5]	—	B E H I K	5	良好	灰	No.94	
18	須恵器	甕	—	[5.0]	—	B I	5	普通	灰	外面平行タタキ 転用砥具	
19	土師器	坏	13.9	[3.5]	—	C I K	50	普通	にぶい橙	No.64	109-3
20	土師器	坏	(12.8)	[3.5]	—	C E H I K	30	普通	にぶい橙	No.1	
21	土師器	坏	(14.4)	[2.7]	—	C E H I K	20	普通	にぶい橙		
22	土師器	坏	(14.4)	[3.7]	—	A C H I K	40	普通	にぶい橙	No.18	109-4
23	土師器	坏	(13.4)	3.6	—	C E I K	50	普通	にぶい黄橙	No.21	109-5
24	土師器	坏	(12.8)	[2.8]	—	C E I K	15	普通	橙		
25	土師器	坏	14.5	3.4	—	C G H I K	75	普通	橙	No.12 外面一部煤付着	109-6
26	土師器	坏	(13.9)	[2.7]	—	C H I K	10	普通	にぶい橙		
27	土師器	坏	(13.0)	[3.2]	—	C H I K	60	普通	明赤褐	No.7	109-7
28	土師器	坏	(14.0)	[2.8]	—	C H I K	10	普通	にぶい橙		
29	土師器	坏	(13.0)	[2.5]	—	C E I K	10	普通	橙		
30	土師器	坏	(13.4)	[2.5]	—	C H I K	5	普通	橙		
31	土師器	坏	(12.0)	[2.9]	—	C H I K	10	普通	橙		
32	土師器	坏	(10.7)	[2.8]	—	C E I K	15	普通	橙		
33	土師器	坏	(12.0)	[2.5]	—	C H I K	5	普通	にぶい橙		
34	土師器	坏	(12.6)	[2.5]	—	C E H I K	10	不良	にぶい橙	内外面摩耗が激しく調整は不明瞭	
35	土師器	坏	(11.8)	[2.9]	—	C H I K	10	普通	橙	内外面共に摩耗	
36	土師器	坏	(13.0)	[2.7]	—	C E H I K	15	普通	橙		
37	土師器	坏	(12.0)	[2.6]	—	C H I K	5	普通	橙		
38	土師器	坏	(13.0)	[2.4]	—	C E H I K	20	普通	にぶい橙		
39	土師器	坏	(14.9)	[3.8]	—	A E H I K	20	普通	橙	No.25	
40	土師器	坏	(14.6)	[2.4]	—	C H I K	10	普通	橙		
41	土師器	坏	(17.2)	5.5	—	C I K	45	普通	橙	No.34	109-8
42	土師器	坏	(17.8)	[4.5]	—	C D H I K	5	普通	橙		
43	土師器	坏	14.8	3.7	—	C D G I K	60	普通	橙	No.15	109-9
44	土師器	坏	(15.8)	[3.0]	—	C H I K	5	普通	にぶい橙		
45	土師器	坏	(15.2)	[3.3]	—	C H I K	5	普通	橙		
46	土師器	坏	(16.8)	[3.5]	—	C E H I K	10	普通	にぶい橙	内外面煤付着	
47	土師器	坏	(16.6)	3.5	(8.3)	C E H I K	45	普通	にぶい黄橙	内面ミガキ	110-1

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
48	土師器	壺	(14.0)	[2.8]	—	C H I K	5	普通	明赤褐	内面赤彩 内面ミガキ	
49	土師器	壺	(14.0)	[3.9]	—	C H I K	10	普通	橙		
50	土師器	壺	—	[2.2]	(10.0)	A H I K	40	普通	橙	No.26	
51	土師器	壺	—	[2.6]	—	A C H I K	5	普通	にぶい橙		
52	土師器	皿	14.8	3.2	—	A C I K	70	普通	にぶい赤褐	No.105	110-2
53	土師器	皿	(15.4)	[2.6]	—	C H I K	15	普通	にぶい橙		
54	土師器	皿	(14.0)	[2.7]	—	C H I K	15	普通	橙		
55	土師器	皿	(16.0)	[2.0]	—	C E H I K	5	普通	橙		
56	土師器	皿	(14.8)	[2.1]	—	H I K	10	普通	にぶい橙		
57	土師器	皿	(14.6)	[2.3]	—	C H I K	10	普通	にぶい赤褐		
58	土師器	鉢	(22.0)	10.7	—	A E H I K	55	普通	にぶい褐	No.50 SJ8No.3	110-3
59	土師器	鉢	18.0	6.6	—	C D G H I K	75	普通	にぶい橙	No.27・84・85・98	110-4
60	土師器	甕	(24.8)	[35.1]	(5.2)	C E I K	15	普通	にぶい橙	No.40・49・50・58 SJ8No.1	110-5
61	土師器	甕	23.6	[9.2]	—	A C G H I K	50	普通	橙	No.100	110-6
62	土師器	甕	(23.0)	[7.4]	—	A C I K	20	普通	にぶい橙	No.63・90	
63	土師器	甕	(22.9)	[6.5]	—	A C E I K	40	普通	橙	No.29・67・76	110-7
64	土師器	甕	(23.6)	[5.0]	—	A C E H I K	20	普通	橙	No.113	
65	土師器	甕	(22.0)	[3.1]	—	A C H I K	5	普通	にぶい赤褐	No.93	
66	土師器	甕	(19.9)	[2.1]	—	E H I K	5	普通	にぶい赤褐		
67	土師器	甕	(17.0)	[3.0]	—	A C H I K	5	普通	明赤褐	No.30・109	
68	土師器	甕	—	[3.9]	(5.0)	C E G I K	40	普通	明赤褐	No.103 外面煤付着	
69	土師器	甕	—	[1.2]	(6.0)	C H I K	20	普通	橙		
70	土師器	甕	—	[20.0]	10.1	A E H I K	70	普通	淡黄	No.72・86・107 常陸型甕 外面黒斑 有り	110-8
71	土師器	小型台付甕	(14.0)	[6.4]	—	A C H I K	20	普通	にぶい赤褐	No.97	
72	土師器	小型台付甕	(12.2)	[5.0]	—	B C I K	25	普通	にぶい赤褐	No.4 内外面煤付着	
73	土師器	高壺	—	[9.0]	—	A H I K	85	普通	明赤褐	古墳時代	
74	土師器	高壺	—	[2.7]	(11.8)	A C E I K	35	普通	橙	No.112 古墳時代	
75	土師器	小型壺か	—	[10.0]	4.7	A E I K	60	普通	灰黄	No.108 内外面煤付着 古墳時代	110-9
76	石製品	磨石	長さ5.0 幅3.1 厚さ[2.0] 重さ13.7g							角閃石安山岩 多孔質 刃物痕1 自然面遺存	127-2

野、3は南比企の製品である。1はカエリがある。4～15は壺で、南比企を主体とし、東金子、三毳の製品が含まれる。底部が残存しているものは、全周回転ヘラケズリ調整が施される。

16～18は甕で、18は破損部が砥具として転用されている。

19～75は土師器である。19～36は北武藏型壺で、浅身で扁平なものが主体である。口縁部はやや外反して立ち上がり、口縁部外面ヨコナデの下に無調整帯を持つものが多い。25は内面に煤が付着する。19～28はやや大型になる。

41～46は大型の壺で、41は口縁部が内湾し、42～46は外反する。47、48は浅身の壺で、内面全体にミガキが施される。48は内面に赤彩が施される。

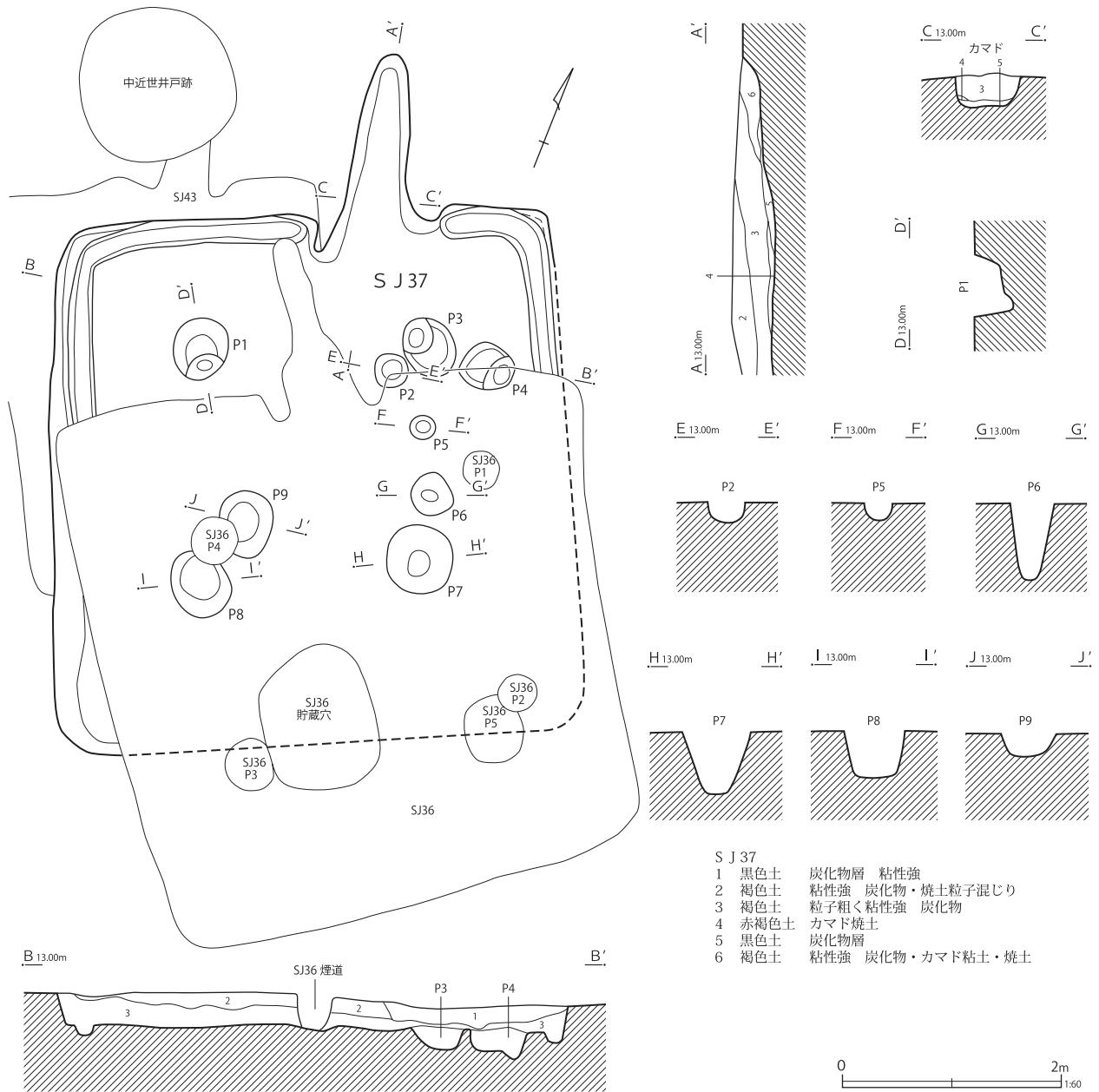
52～57は皿である。52～55は口縁部が大きく外反し、55、56はやや内湾気味に立ち上がる。58、59は鉢で、丸底になる。

60～72は甕である。60～69は口縁部に最大径を持ち、胴部がやや膨らむものと推察される。70は常陸型甕で、外面下半にミガキが施される。71、72は小型台付甕と考えられる。

73～75は古墳時代の遺物で、混入品と考えられる。73、74は高壺で、脚部に僅かな膨らみを持つ。75は小型壺か。

76は角閃石安山岩製の磨石で、刃物痕が認められる。

遺物の時期は、須恵器壺や土師器壺・甕の形状から、8世紀前半と考えられる。



第269図 第37号住居跡

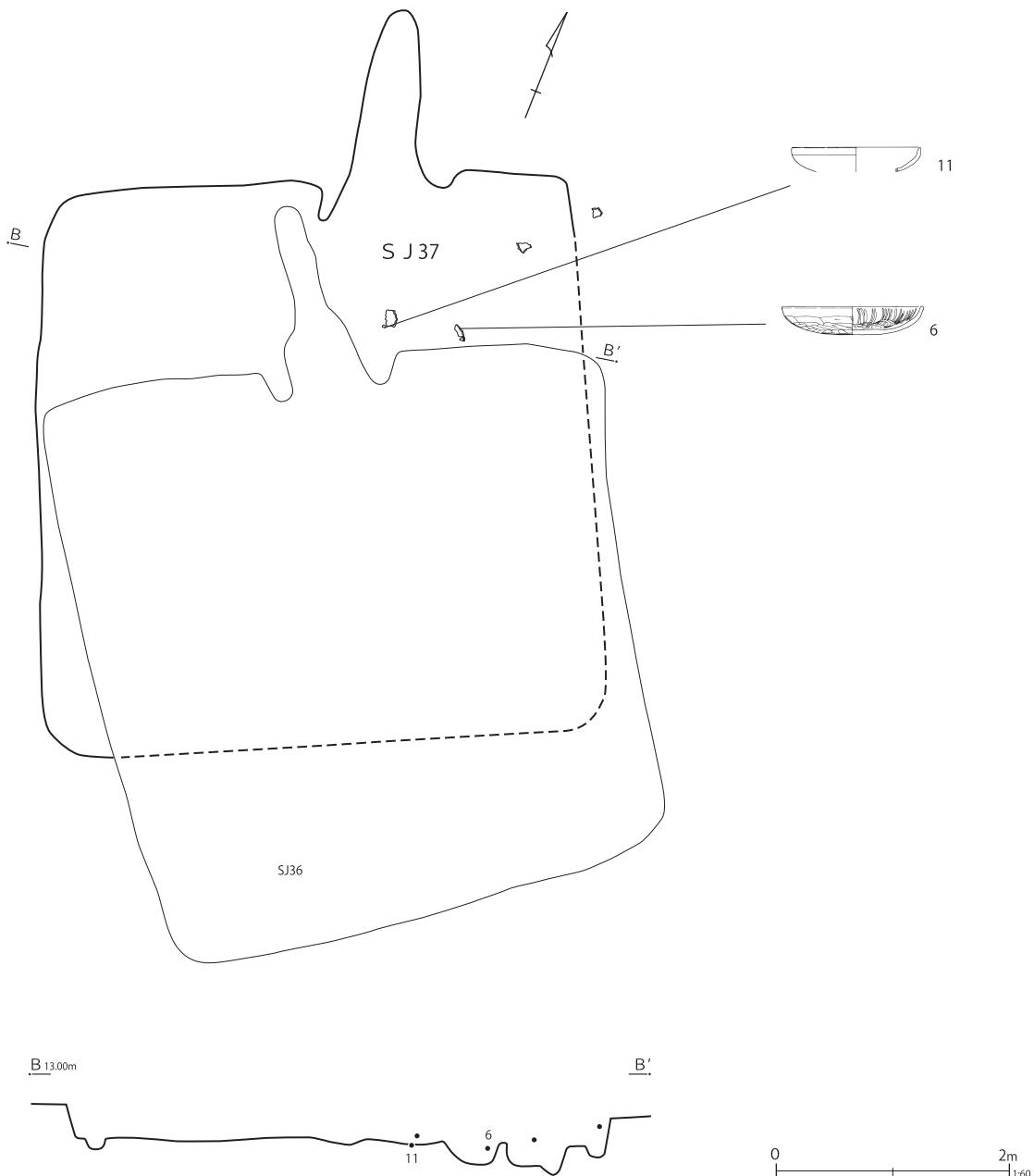
第81表 第37号住居跡ピット一覧表 (第269図)

番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
1	55	50	34	6	39	35	71
2	32	30	18	7	62	60	58
3	60	45	21	8	64	52	43
4	48	42	26	9	59	49	21
5	23	21	14				

第37号住居跡 (第269・270図)

第2次調査における中央調査区の東側、H・I -12グリッドに位置する。第36・43号住居跡と重

複し、第36号住居跡より古く、第43号住居跡より新しい。第36号住居跡によって住居跡の中央部から南半部を大きく壊される。



第270図 第37号住居跡遺物出土状況

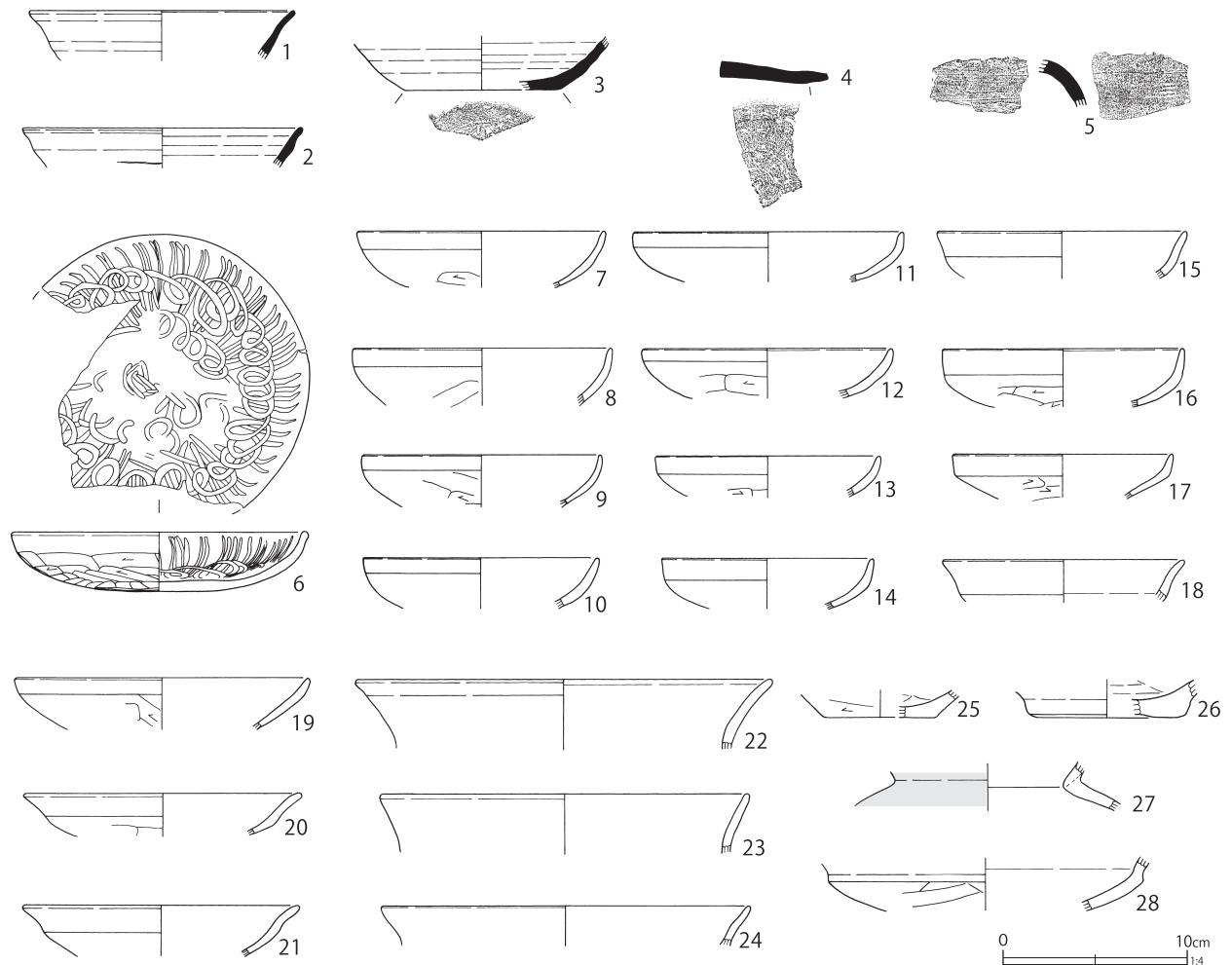
平面形態は南北にやや長い長方形で、規模は、推定で長軸4.86m、短軸4.52m、深さ0.33mを測り、主軸方位はN-18°-Wを指す。覆土はレンズ状に堆積し、全層に炭化物が含まれる。住居跡東側の上層からは、厚さ0.15m程の炭化物層が検出された。

北壁やや東寄りにはカマドが設けられ、壁溝は、確認可能な範囲ではカマドを除き全周する。ピットは住居跡内の四方から、それぞれ検出されてい

る。

カマドは袖が住居跡内に0.40m程張り出し、燃焼部は平坦で、煙道部に向って緩やかに立ち上がる構造を持つ。規模は全長2.00m、幅0.51m、深さ0.38mを測る。覆土は火床面直上に炭化物層、その上に焼土層が薄く堆積する。

壁溝は、カマドを除いて全周すると推察され、規模は、残存部で幅0.18~0.26m、深さ0.06~0.27mを測る。



第271図 第37号住居跡出土遺物

ピットは8基検出された（第81表）。北西部を除いて、2～3基ほどのピットが、住居跡内の四方からまとまって検出された。全てのピットが該当するかはわからないが、検出された位置から住居跡の柱穴である可能性がある。

遺物は須恵器坏・瓶類、土師器坏・皿・甕・高坏等が出土した（第271図1～28）。1～5は須恵器である。1～4は坏で、新治の製品を含む。4は底部に全周回転ヘラケズリ調整が施され、3も回転ヘラケズリ調整が確認できる。5は瓶類か。

6～28は土師器である。6は暗文坏で、内面に放射状暗文と、内底面に2～3重の螺旋状暗文が施される。7～14は北武藏型坏である。口縁部は僅かに外反して立ち上がるものを主体として、浅身で扁平なものが多い。19～21は皿である。19は

口縁部が直線的に開き、20、21は外反する。

22～26は甕で、いずれも破片のため全体像は不明である。

27は壺と考えられ、外面に赤彩が施される。28は高坏で、立ち上がり部に段を持つ。どちらも混入と考えられる。

遺物の時期は、須恵器坏の底部調整や土師器坏の器形から、8世紀中葉と考えられる。

第38号住居跡（第272図）

第2次調査における中央調査区の中央部南寄り、H-10グリッドに位置する。第44号住居跡、第51・58号溝跡と重複し、第44号住居跡より新しい。排水溝によって東壁およびカマドの一部を壊され、西壁の一部は中・近世の井戸跡によって壊される。

平面形態はやや歪んだ方形で、規模は長軸

第82表 第37号住居跡出土遺物観察表（第271図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	(14.2)	[2.7]	—	A I	5	普通	褐灰	新治産	
2	須恵器	壺	(15.0)	[2.1]	—	B H I	5	普通	灰		
3	須恵器	壺	—	[2.9]	(8.4)	E	15	普通	褐灰	外面全体被熱により摩耗が激しい	
4	須恵器	壺	—	[1.0]	—	I K	5	普通	褐灰	新治産か	
5	須恵器	瓶類か	—	[2.4]	—	I	5	普通	褐灰	外面降灰	
6	土師器	壺	(15.8)	3.2	—	C E H I K	65	普通	橙	No.4 暗文壺 内底面摩耗により暗文 が一部消えている	110-10
7	土師器	壺	(13.2)	[3.0]	—	C E K	10	普通	橙		
8	土師器	壺	(13.8)	[3.1]	—	C I K	10	普通	橙		
9	土師器	壺	(12.7)	[2.8]	—	B C I K	5	普通	にぶい褐		
10	土師器	壺	(12.5)	[2.7]	—	B C I K	10	普通	にぶい橙		
11	土師器	壺	(14.4)	[2.7]	—	B C I K	10	普通	にぶい橙	No.2	
12	土師器	壺	(13.3)	[2.7]	—	B C I K	15	普通	にぶい橙	内外面煤付着	
13	土師器	壺	(12.0)	[2.2]	—	C I K	10	普通	橙		
14	土師器	壺	(11.2)	[2.7]	—	C E I K	5	普通	橙		
15	土師器	壺	(13.4)	[2.5]	—	C I K	10	普通	にぶい橙		
16	土師器	壺	(12.8)	[3.1]	—	B I K	15	普通	にぶい橙		
17	土師器	壺	(11.7)	[2.3]	—	C K	10	普通	にぶい橙		
18	土師器	壺	(12.8)	[2.3]	—	C I K	10	普通	橙		
19	土師器	皿	(15.8)	[2.8]	—	C E I K	5	普通	橙		
20	土師器	皿	(14.6)	[2.3]	—	B C D E I K	10	普通	橙		
21	土師器	皿	(14.8)	[2.7]	—	C I K	5	普通	橙		
22	土師器	甕	(22.3)	[3.8]	—	C E K	5	普通	橙		
23	土師器	甕	(19.6)	[3.2]	—	B I K	5	普通	にぶい橙		
24	土師器	甕	(19.8)	[2.1]	—	C H I K	5	普通	明赤褐	内外面煤付着	
25	土師器	甕	—	[1.5]	(5.8)	C K	10	普通	にぶい黄橙		
26	土師器	甕	—	[2.0]	(8.4)	B E H I K	20	普通	浅黄橙		
27	土師器	壺	—	[2.5]	—	E I K	10	普通	浅黄橙	外面赤彩 古墳時代	
28	土師器	高壺	—	[2.8]	—	C H I K	15	普通	明赤褐	古墳時代	

4.30m、短軸3.88m、深さ0.20mを測り、主軸方位はN-85°-Wを指す。覆土は水平堆積で、全層に焼土と炭化物を含む。住居跡南西側の床面からは、薄い炭化物層が検出された。

東壁やや南寄りにはカマドが設けられ、壁溝は、カマドおよび南東角を除き全周する。住居跡の南東角からは、貯蔵穴が検出された。

カマドは排水溝によって煙道部分が壊される。カマドの袖は住居跡内に僅かに張り出し、燃焼部は平坦な構造を持つ。規模は、残存部で全長0.85m、幅0.53m、深さ0.18mを測る。覆土は火床面直上に焼土層が堆積し、その上に炭化物混じりの土が堆積していた。

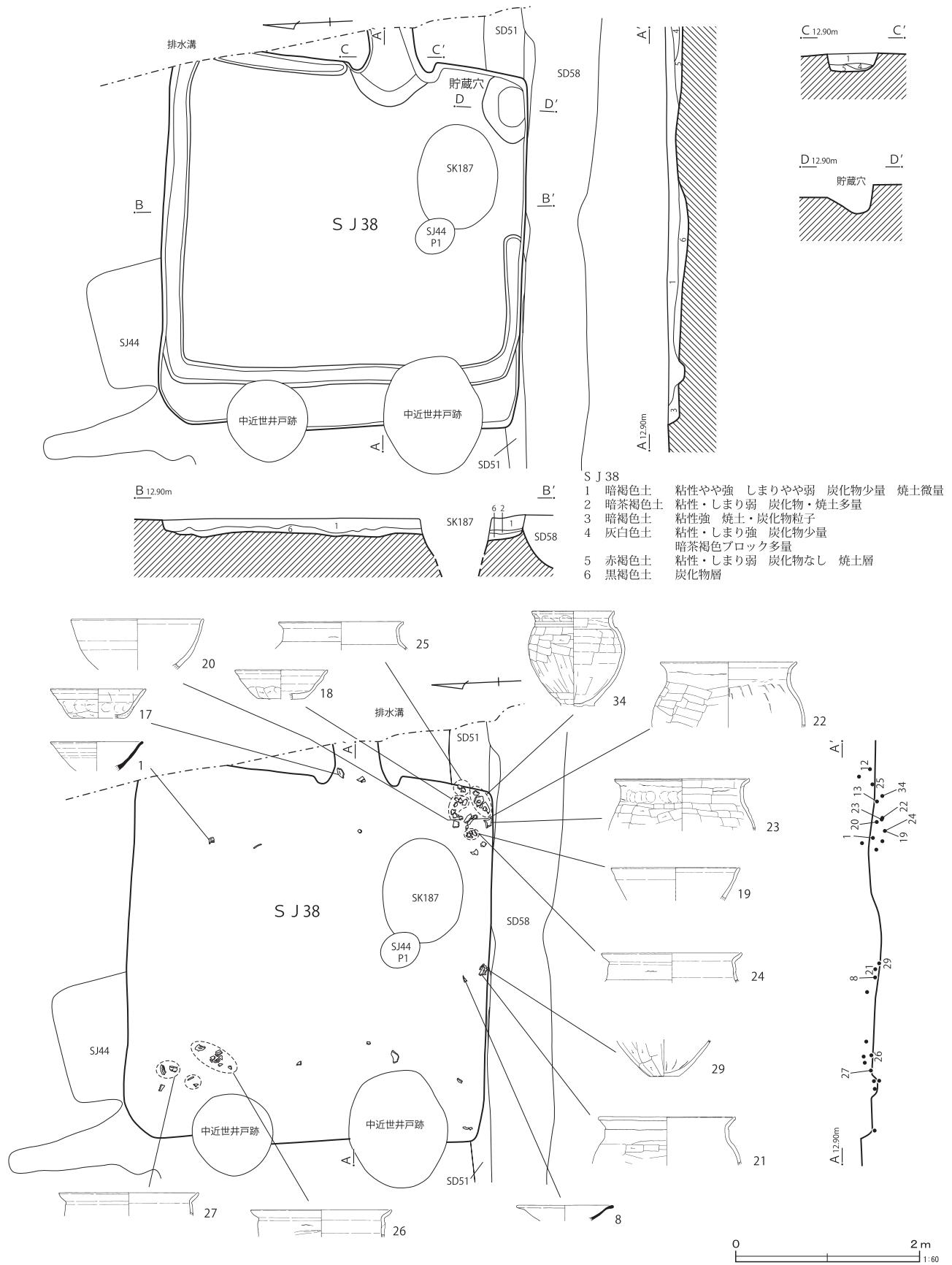
壁溝はカマドおよび住居跡の南東隅を除いて全

周し、規模は幅0.16~0.26m、深さ0.02~0.07mを測る。西壁側は、壁溝と住居の壁の間に0.45m程の空間がある。

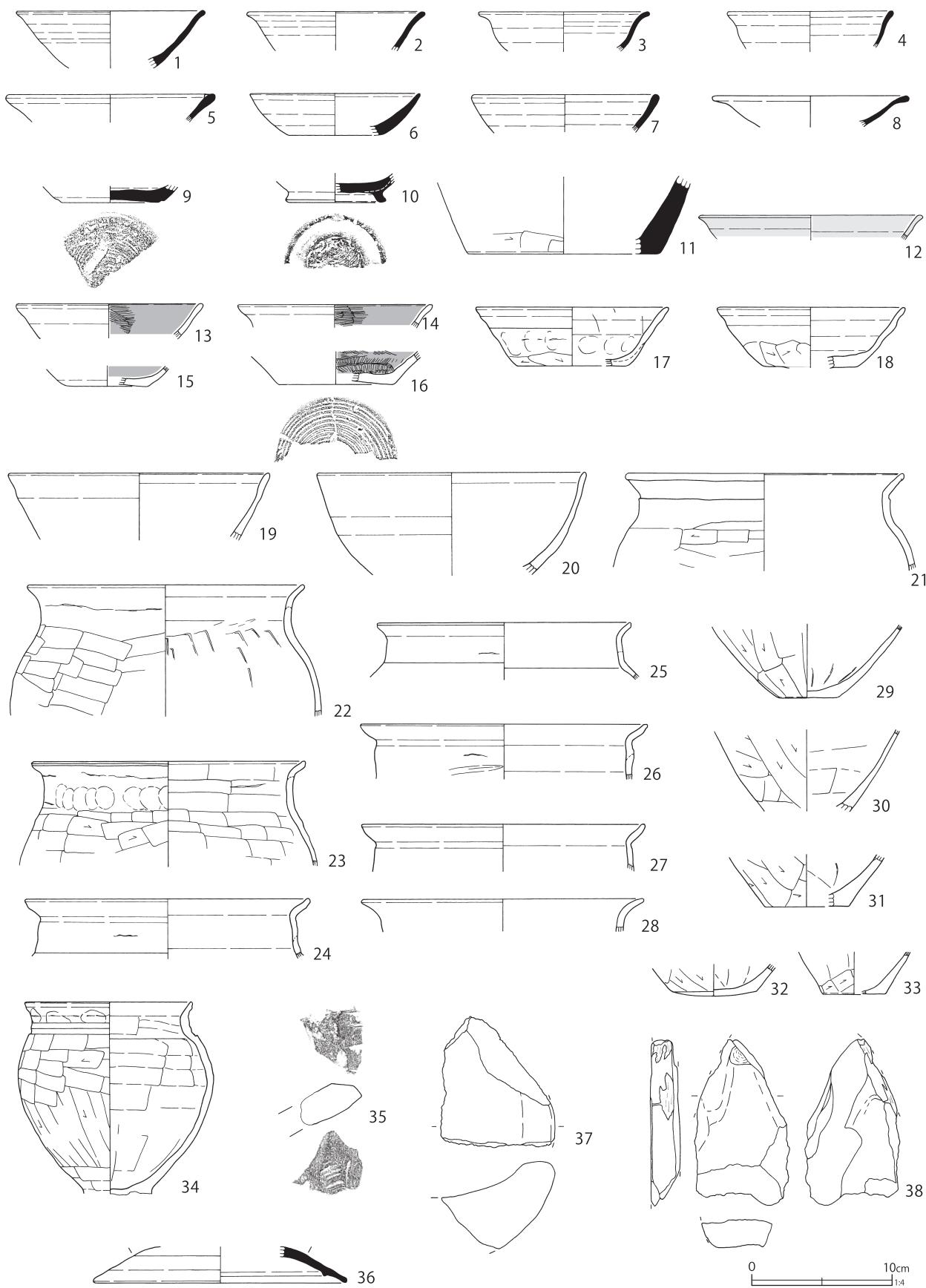
貯蔵穴は平面形態が東西にやや長い楕円形で、規模は長径0.70m、短径0.45m、深さ0.17mを測る。貯蔵穴からは、土器がまとまって出土した。

遺物は住居跡全体から出土しているが、貯蔵穴からは特に集中的に検出され、須恵器蓋・壺・皿・高台付壺、灰釉陶器塊、ロクロ土師器壺・土師器壺・鉢・甕・小型台付甕、瓦、用途不明の石製品、砥石等が出土した（第273図1~38）。

1~11は須恵器である。1~7、9は壺で、南北比、末野、三毳の製品を含む。8は皿、10は高台付壺で、末野の製品である。11は甕で、外面下



第272図 第38号住居跡・遺物出土状況



第273図 第38号住居跡出土遺物

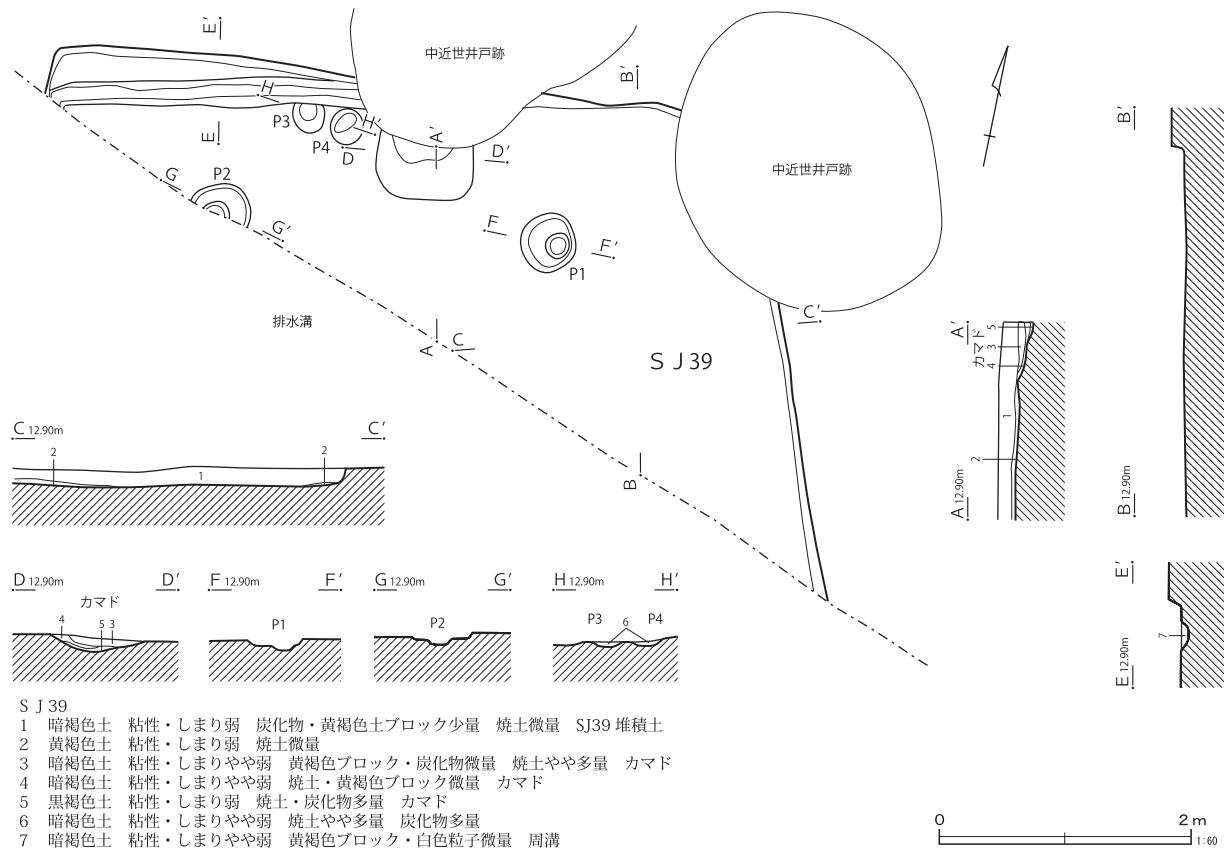
第83表 第38号住居跡出土遺物観察表（第273図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	(13.2)	[4.0]	—	B C D I	40	普通	灰黄	No.14 内外面共に一部黒く変色している	
2	須恵器	壺	(12.2)	[2.8]	—	B D E K	10	普通	褐灰	内外面煤付着	
3	須恵器	壺	(12.0)	[2.8]	—	D I K	15	普通	褐灰	末野産か	
4	須恵器	壺	(11.6)	[2.6]	—	I J	5	普通	褐灰	南比企産	
5	須恵器	壺	(14.6)	[1.9]	—	I K	10	普通	灰白	三毳産か	
6	須恵器	壺	(12.0)	[2.9]	(6.7)	I J	25	普通	灰	南比企産	
7	須恵器	壺	(13.0)	[2.6]	—	I	5	普通	灰白	三毳産か	
8	須恵器	皿	(13.6)	[2.2]	—	C D E I K	15	普通	にぶい橙	No.34 末野産	
9	須恵器	壺	—	[1.1]	(7.0)	E I K	35	普通	灰	全体被熱	
10	須恵器	高台付壺	—	[2.0]	(6.6)	C E H K	45	普通	にぶい橙	末野産	
11	須恵器	甕	—	[5.4]	(13.6)	B K	15	普通	褐灰	No.29 脊部外面下端にヘラケズリが施される	
12	灰釉陶器	塊	(15.4)	[1.3]	—	I K	5	良好	灰	内外面灰釉刷毛塗り 釉は発色していない	
13	ロクロ土師器	壺	(13.0)	[2.5]	—	C H I K	5	普通	灰白	内黒	
14	ロクロ土師器	壺	(13.6)	[1.6]	—	D H	10	普通	にぶい橙	内黒	
15	ロクロ土師器	壺	—	[1.4]	(6.0)	C H I K	30	普通	にぶい褐	内黒 内外面共に摩耗が激しく調整は不明	
16	ロクロ土師器	壺	—	[2.3]	(8.2)	I K	45	普通	灰白	内黒 全体被熱	111-1
17	土師器	壺	(13.5)	4.1	(7.7)	C E I K	45	普通	にぶい橙	No.11 内外面煤付着 内面剥離が激しい	111-2
18	土師器	壺	13.0	[4.2]	(6.5)	B C H I K	55	普通	橙	No.3 内外面煤付着	111-3
19	土師器	鉢	(18.3)	[4.7]	—	C D E I K	10	普通	にぶい黄橙	No.7 外面摩耗が激しい	
20	土師器	鉢	(18.7)	[7.2]	—	B C E I K	10	普通	橙	No.4 内外面共に摩耗が激しい	
21	土師器	甕	(19.3)	[6.8]	—	C H I K	15	普通	にぶい橙	No.35 外面全体煤付着	
22	土師器	甕	(19.4)	[9.3]	—	C D H I K	20	普通	にぶい橙	No.5 内面頸部半ばまで煤付着	111-4
23	土師器	甕	(19.3)	[7.4]	—	C D E I K	25	普通	橙	No.6 外面頸部まで煤付着	
24	土師器	甕	(19.8)	[4.2]	—	C H I K	10	普通	にぶい橙	No.7 外面煤付着	
25	土師器	甕	(17.8)	[4.0]	—	E I K	5	普通	浅黄橙	No.1	
26	土師器	甕	(20.0)	[3.9]	—	C E H I K	10	普通	にぶい橙	No.17	
27	土師器	甕	(19.8)	[3.3]	—	C H I K	20	普通	にぶい橙	No.16 内外面煤付着	
28	土師器	甕	(19.7)	[2.3]	—	B C I K	10	普通	橙		
29	土師器	甕	—	[5.2]	4.0	B H I K	35	普通	にぶい褐	No.36 外面煤付着	
30	土師器	甕	—	[5.8]	—	C H I K	20	普通	橙	外面煤付着	
31	土師器	甕	—	[3.7]	(6.0)	C E I K	30	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着	
32	土師器	甕	—	[2.2]	6.0	B E I K	45	普通	にぶい黄橙	外面煤付着	
33	土師器	甕	—	[2.0]	(4.2)	C I K	20	普通	にぶい橙	外面煤付着	
34	土師器	小型台付甕	11.7	[13.6]	—	C H I K	75	普通	橙	No.2 外面全体煤付着 口唇部内縁に煤および炭化物付着	111-5
35	瓦	不明	長さ[4.5] 幅[4.2] 厚さ2.1				5	普通	にぶい橙	酸化焰焼成 側部2度のケズリ 凸面 ヘラナデ	
36	須恵器	蓋	(17.7)	[2.5]	—	D I K	5	良好	灰		
37	石製品	不明	長さ[9.3] 幅[8.1] 厚さ[4.6] 重さ316.1g							No.33 安山岩 内面・外面上位研磨か	127-2
38	石製品	砥石	長さ[11.8] 幅[6.8] 厚さ2.1 重さ239.1g							緑泥片岩 使用面2遺存	127-2

端にヘラケズリ調整が施される。

12は灰釉陶器の塊である。内外面に施釉されるが、釉は発色していない。

13～16はロクロ土師器である。13～16は内黒の壺で、16は底径が大きく厚手であることから、やや大型の壺になる可能性がある。



第274図 第39号住居跡

17~34は土師器である。17、18は壺で、外面下端に手持ちヘラケズリ調整が施される。19、20は大型の鉢である。19は体部が直線的に開き、20はやや内湾気味になる。

21~34は甕である。22~33は「コ」の字状口縁甕で、定型化した段階である。34は小型台付甕で、貯蔵穴からまとめて出土した。

35は瓦で、側部の小破片であるため瓦の種別は不明である。凸面はケズリ後にナデ、側部は2度のケズリが施され、凹面には布目が残る。

36は須恵器の蓋で、カエリを持つ。混入品か。

37は用途不明の石製品である。安山岩製で、部分的に研磨されている。38は緑泥片岩製の砥石である。

遺物の時期は、須恵器壺や土師器壺、甕の形状から、9世紀中葉と考えられる。

第39号住居跡（第274・275図）

第2次調査における中央調査区の中央南壁際、

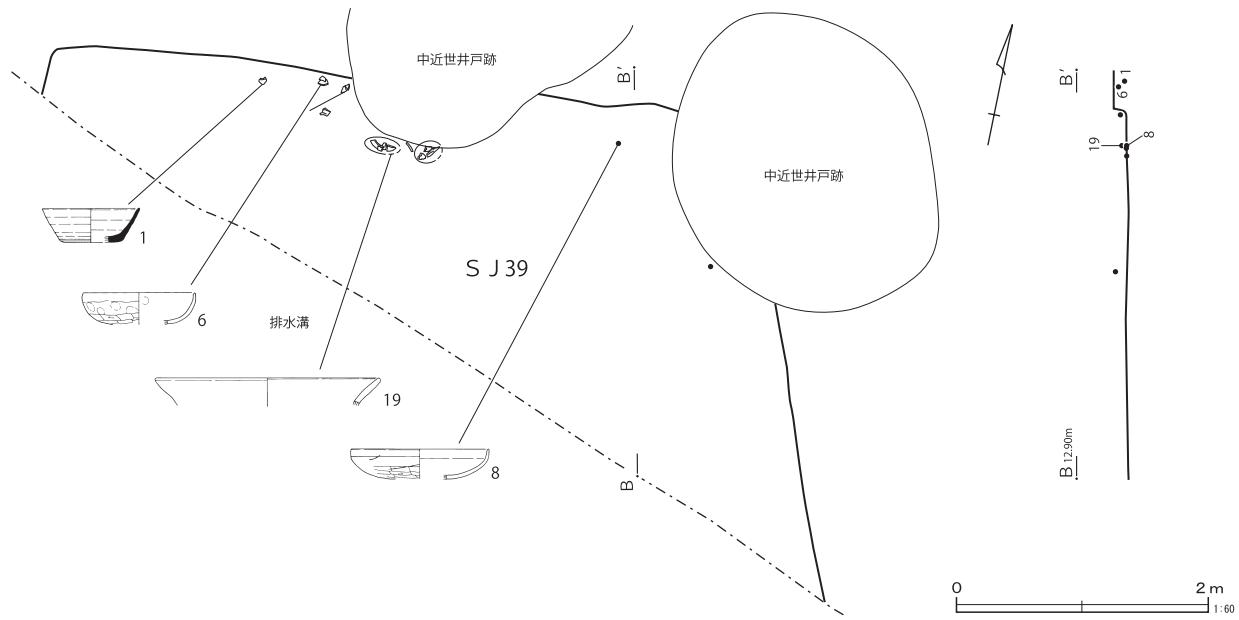
H-9・10グリッドに位置する。中・近世の井戸跡によってカマドと住居跡の北東角を壊される。住居跡の南半部は調査区域外へと延びるため、平面形態は不明である。

規模は、残存部で長軸4.96m、短軸3.80m、深さ0.16mを測り、主軸方位はN-12°-Wを指す。覆土はほぼ単層で、全層に焼土を含む。北壁中央部にはカマドが設けられる。壁溝は北壁のカマドの西側で検出された。ピットは住居跡内の北側から検出された。

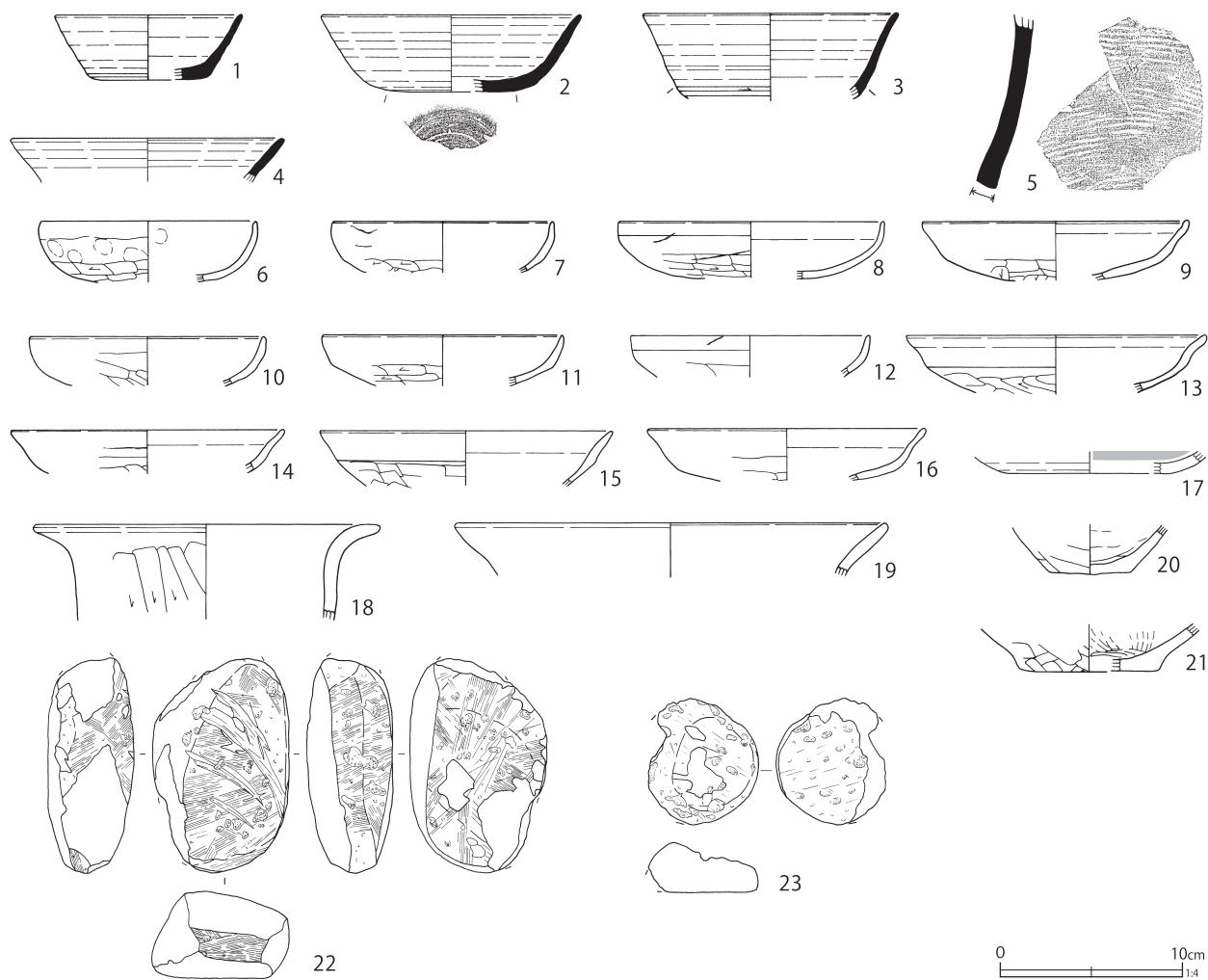
カマドは中・近世の井戸跡により壊され、燃焼部の一部が残存するのみで、形態や規模等は不明である。覆土は焼土と炭化物を多く含むが、明確な焼土層や炭化物層は検出されなかった。

壁溝は北壁のカマドより西側で検出され、規模は幅0.15~0.23m、深さ0.05mを測る。

ピットは北壁寄りから4基検出された。平面形態はいずれも楕円形で、規模はピット1が長径



第275図 第39号住居跡遺物出土状況



第276図 第39号住居跡出土遺物

第84表 第39号住居跡出土遺物観察表（第276図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	(10.1)	3.5	(5.9)	D E K	20	良好	紫灰	No.8	111-6
2	須恵器	壺	(14.0)	4.2	(7.0)	I K	15	普通	橙	酸化焰焼成	
3	須恵器	壺	(13.8)	[4.7]	—	A E I K	15	良好	黄灰	堀ノ内産か 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	
4	須恵器	壺	(14.8)	[2.3]	—	I K	5	普通	灰	東金子産か	
5	須恵器	甕	—	[9.5]	—	E G H I K	5	良好	灰	転用砥具	
6	土師器	壺	(11.6)	[3.3]	—	C E H I K	30	普通	橙	No.6	
7	土師器	壺	(12.0)	[2.8]	—	C H I K	20	普通	にぶい橙		
8	土師器	壺	(14.4)	[3.1]	—	A C I K	15	普通	にぶい橙	No.2 外面黒斑有り	
9	土師器	壺	(13.0)	[2.9]	—	C E H I K	10	普通	橙		
10	土師器	壺	(12.7)	[2.7]	—	C E I K	10	普通	にぶい橙		
11	土師器	壺	(13.0)	[2.7]	—	A C H I K	15	普通	にぶい橙		
12	土師器	壺	(13.0)	[2.3]	—	A C I K	10	普通	明赤褐		
13	土師器	皿	(16.4)	[3.2]	—	C E K	30	普通	にぶい橙	111-7	
14	土師器	皿	(15.0)	[2.4]	—	C H I K	5	普通	にぶい橙		
15	土師器	皿	(16.0)	[3.0]	—	C E I K	15	普通	にぶい橙		
16	土師器	皿	(15.0)	[2.8]	—	A C E H I K	10	普通	にぶい橙		
17	ロクロ土師器	壺	—	[1.2]	(8.8)	C I K	5	普通	橙	内黒 外面黒斑有り	
18	土師器	甕	(19.0)	[5.2]	—	E I K	10	普通	浅黄橙		
19	土師器	甕	(23.4)	[2.9]	—	C H I K	30	普通	明赤褐	No.5 外面の摩耗が激しい	
20	土師器	甕	—	[2.7]	(4.6)	C E H I K	40	普通	橙		
21	土師器	甕	—	[2.6]	(6.2)	C H I K	25	普通	にぶい橙	外面煤付着	
22	石製品	磨石	長さ11.7 幅7.5 厚さ4.7 重さ247.8 g						角閃石安山岩 多孔質 全面使用 刃物痕 線条痕ランダム 欠失部全面煤付着	127-2	
23	石製品	磨石	長さ6.9 幅6.0 厚さ2.7 重さ24.8 g						軽石 使用面2	127-2	

0.48m、短径0.44m、深さ0.08mを測る。ピット2は残存部で長径0.48m、短径0.28m、深さ0.09mを測る。ピット3は長径0.25m、短径0.24m、深さ0.03mを測る。ピット4は長径0.28m、短径0.25m、深さ0.02mを測る。このうちピット1・2は位置から柱穴の可能性があるが、浅いため不明である。

遺物はカマドの周辺から比較的多く検出され、須恵器壺・甕、土師器壺・皿・甕、ロクロ土師器壺、磨石等が出土した（第276図1～23）。1～5は須恵器である。1～4は壺で、1は小型である。2は底部に回転ヘラケズリ調整が認められる。5は甕で、破損部を砥具として転用されている。

6～16は土師器である。6～12は壺で、北武藏型壺である。口縁部はやや外反気味に立ち上がり、口縁部外面ヨコナデの下に無調整帶を持つ。13～16は皿である。いずれも口縁部が外反する。17は

ロクロ土師器である。内黒の壺で、底径が大きい。

18～21は土師器の甕である。全体像がわかるものは無い。18は甕の可能性もある。21は混入か。

22・23は磨石で、22は角閃石安山岩製、23は軽石製である。22は刃物痕が認められる。

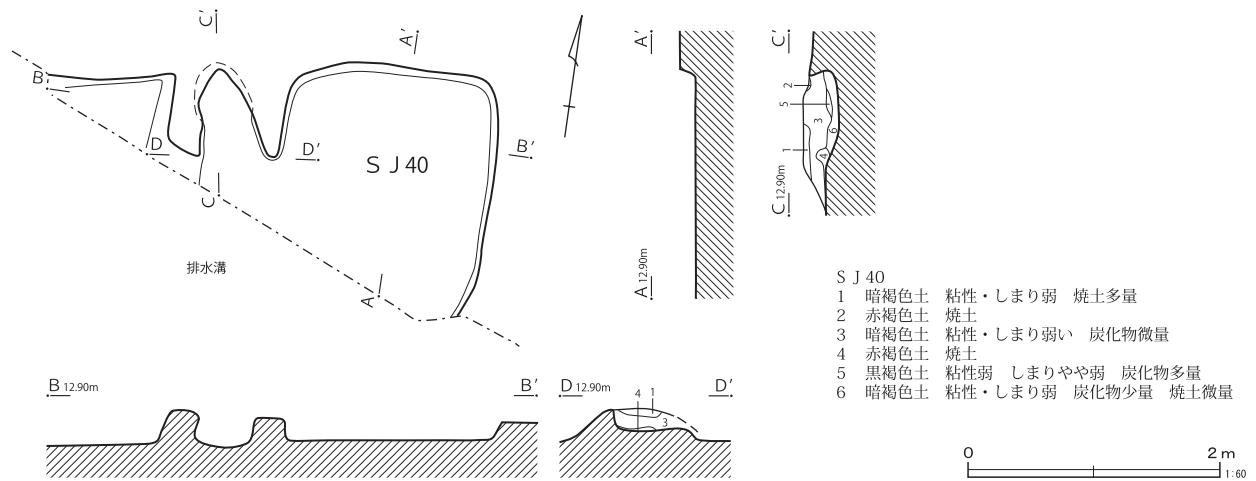
遺物の時期は、須恵器壺の底部調整や土師器壺の器形から、8世紀前半～中葉と考えられる。

第40号住居跡（第277図）

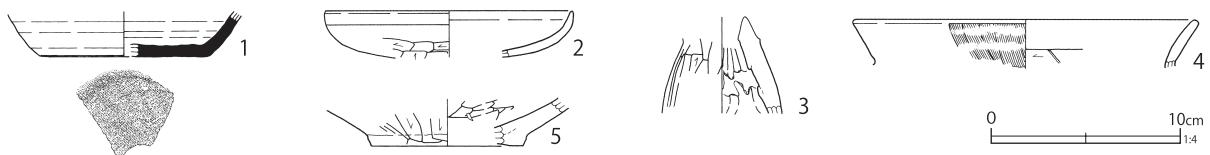
第2次調査における中央調査区の中央南壁際、I-10・11グリッドに位置する。住居跡の南半部は調査区域外へ延びるため平面形態は不明である。

規模は、残存部で長軸3.65m、短軸1.95m、深さ0.15mを測り、主軸方位はN-11°-Wを指す。覆土は削平され、カマド部分のみが残存していた。

カマドは北壁に設けられ、袖が0.70m程住居跡内に張り出し、燃焼部は浅く掘り窪められ、奥壁



第277図 第40号住居跡



第278図 第40号住居跡出土遺物

第85表 第40号住居跡出土遺物観察表（第278図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	—	[2.3]	5.4	A E I	30	良好	灰	堀ノ内産か	
2	土師器	壺	(13.0)	[2.4]	—	C E H I K	15	普通	にぶい赤褐		
3	土師器	高壺	—	[5.1]	—	C H I K	20	普通	灰褐	古墳時代	
4	土師器	甕	(18.0)	[2.5]	—	C H I K	5	普通	褐灰	古墳時代	
5	土師器	甕	—	[2.5]	(8.0)	C E H I K	15	普通	褐灰	古墳時代	

から煙道部に向って抉り気味に立ち上がる。覆土は炭化物と焼土を多く含み、一部焼土をブロック状に含むが、明瞭な炭化物層や焼土層は確認できなかった。

壁溝、ピット等は検出されなかった。

遺物は須恵器壺、土師器壺・高壺・甕が出土した（第278図1～5）。1は須恵器の壺である。底部は単一方向の手持ちヘラケズリ調整が施され、堀ノ内の製品である可能性がある。

2～5は土師器である。2は北武藏型壺で、口縁部はやや外反し、口縁部外面ヨコナデの下に無調整帯を持つ。

3～5は混入品と考えられる。3は高壺の脚部

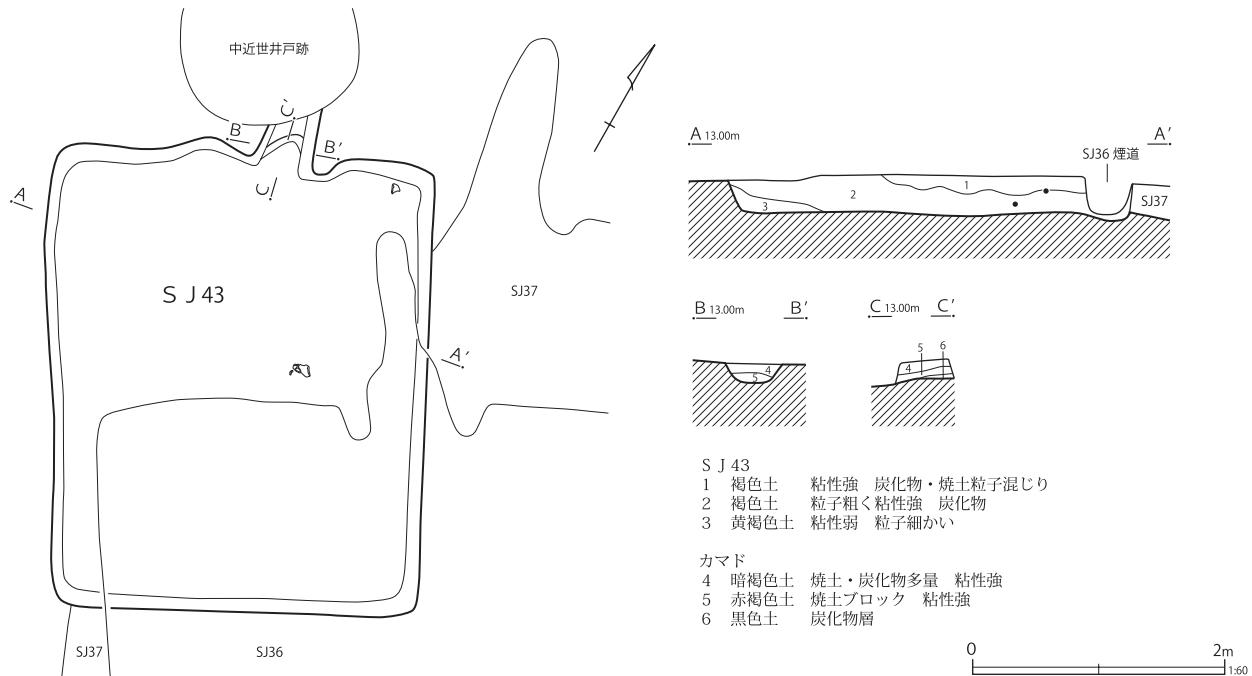
で、やや膨らみを持つ。4、5は甕である。4は口縁部で、外面に刷毛目調整が施される。

遺物の点数が少ないため詳細はわからないが、カマド袖の形状や須恵器壺や土師器壺の器形から、8世紀代の住居跡と考えられる。

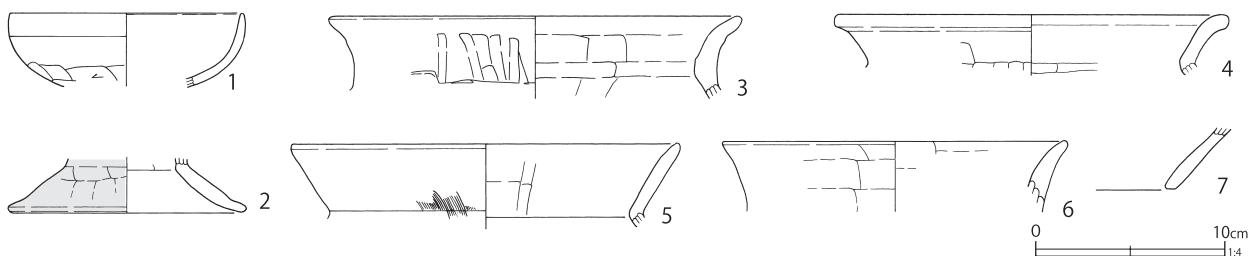
第43号住居跡（第279図）

第2次調査における中央調査区の東側、H・I-12グリッドに位置する。第36・37号住居跡と重複し、本遺構が古い。カマドは中・近世の井戸跡によって大きく壊される。

平面形態は南北に長い長方形で、規模は長軸3.73m、短軸3.04m、深さ0.33mを測り、主軸方位はN-27°-Wを指す。覆土はレンズ状に堆積し、



第279図 第43号住居跡



第280図 第43号住居跡出土遺物

第86表 第43号住居跡出土遺物観察表（第280図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(11.8)	[3.7]	—	C D E H I K	60	普通	橙	外側赤彩 古墳時代	111-8
2	土師器	高壺	—	[2.8]	(12.0)	C E I K	10	普通	にぶい橙		
3	土師器	甕	(21.2)	[4.3]	—	B H I K	15	普通	にぶい赤褐	古墳時代	
4	土師器	甕	(20.2)	[3.1]	—	B H I K	10	普通	にぶい橙	古墳時代	
5	土師器	甕	(20.0)	[4.4]	—	C I K	10	普通	橙	古墳時代	
6	土師器	甕	(18.0)	[3.7]	—	C H I K	15	普通	橙	古墳時代	
7	土師器	甕	—	[3.2]	—	B D I	5	普通	にぶい橙	古墳時代	

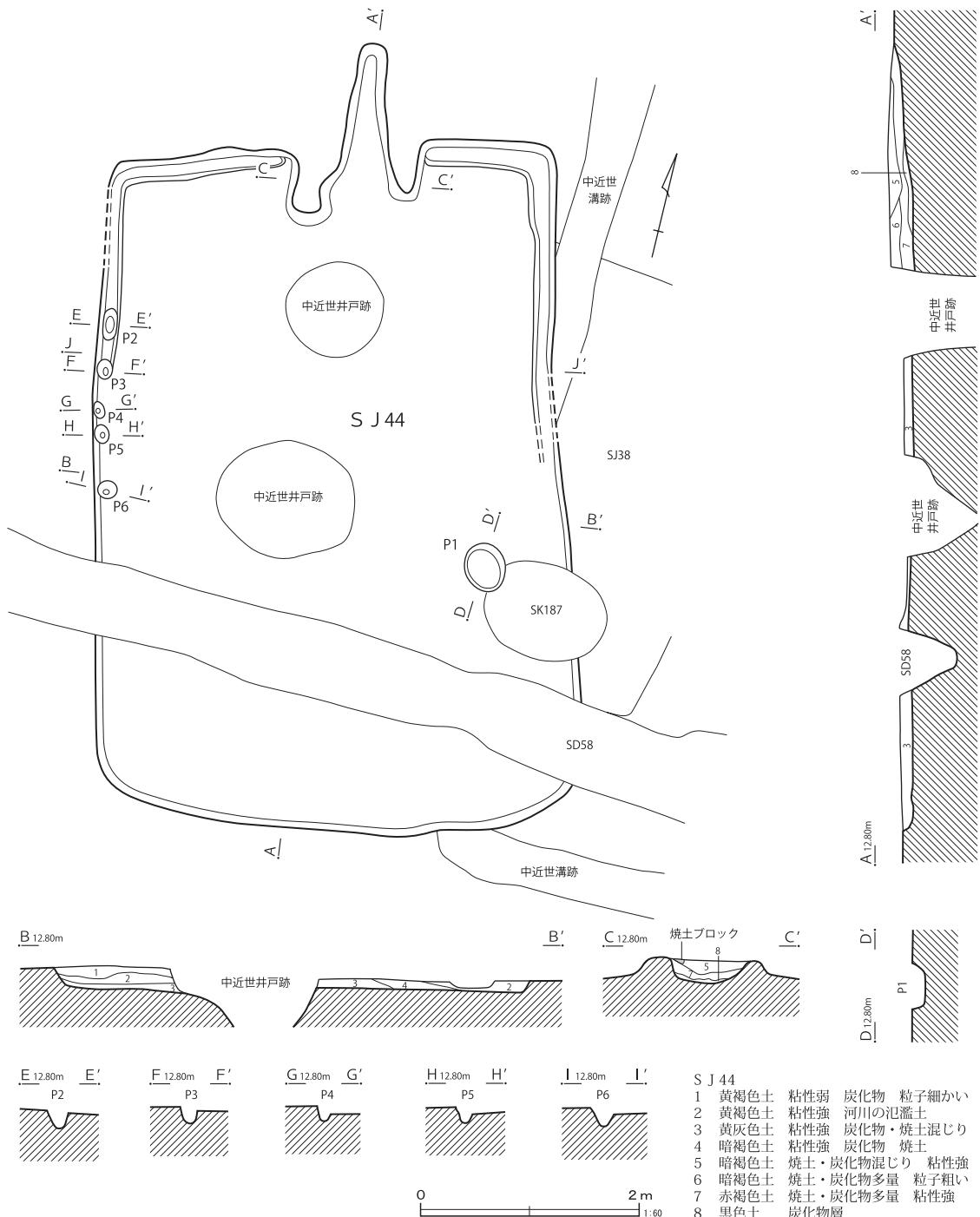
炭化物を含む。北壁の中央やや東寄りには、カマドが設けられていた。

カマドは、袖が僅かに住居跡内に張り出し、焼部は平坦に造られる。煙道部付近は中・近世の井戸跡によって壊されていた。規模は、残存部で全長0.57m、幅0.45m、深さ0.14mを測る。覆土は火床面直上に炭化物層が薄く堆積し、その上に焼

土ブロック混じりの土、さらに焼土粒子と炭化物を多く含む層が覆う。

壁溝、ピット等は検出されなかった。

遺物は土師器壺・高壺・甕・甕が出土した（第280図1～7）。1は土師器の壺である。深身の北武蔵型壺で口縁部外側ヨコナデの下に無調整帶を持つ。



第281図 第44号住居跡

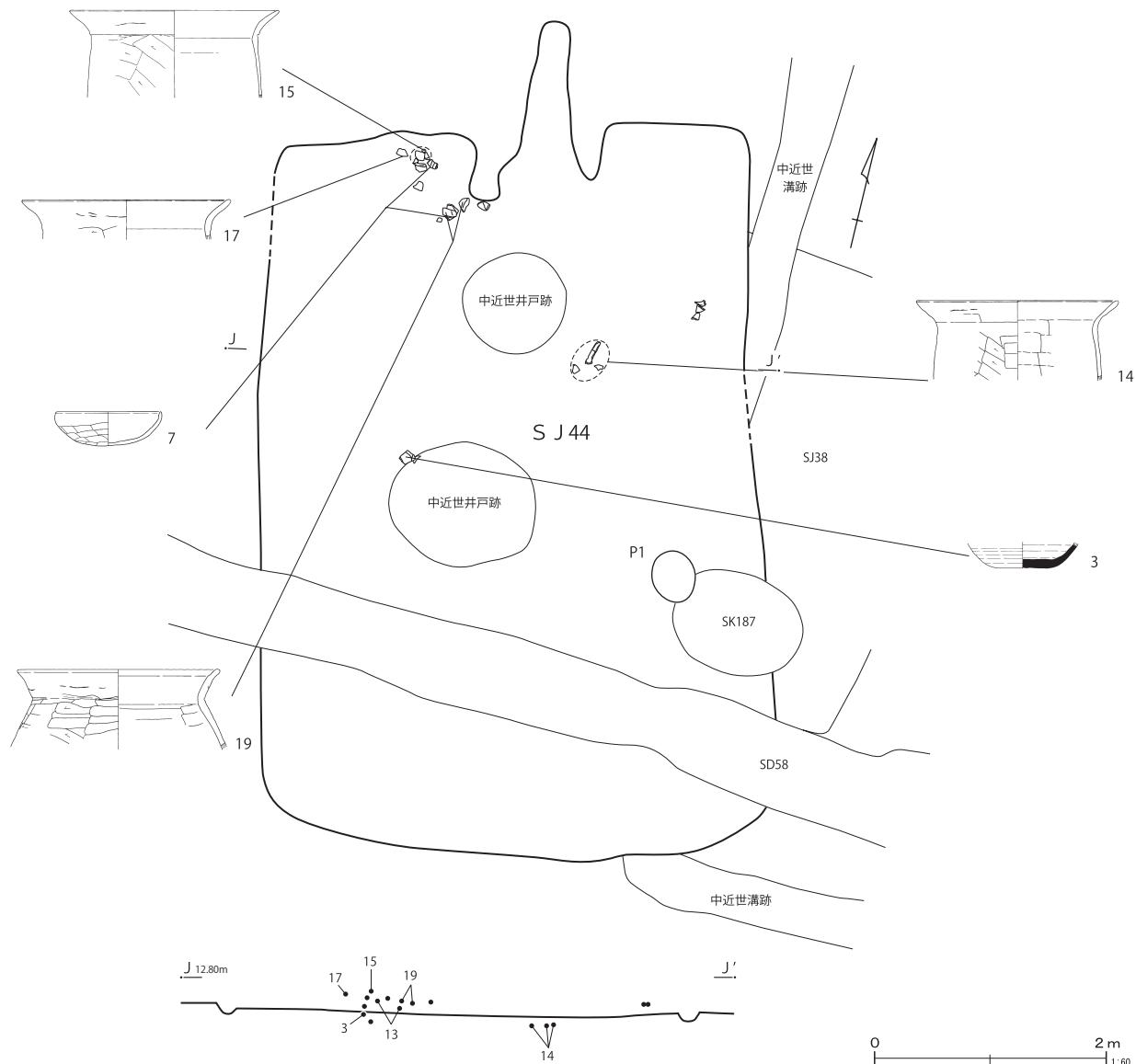
2～7は混入品と考えられる。2は高壙の脚部で、外面に赤彩が施される。3～6は甕で、いずれも古墳時代のものと推察される。7は単孔式の甕である。

住居跡に伴うと考えられる遺物は1点のみであるため、詳細な時期はわからないが、土師器壙の

形状や重複関係から、8世紀前半の住居跡と考えられる。

第44号住居跡（第281・282図）

第2次調査における中央調査区の中央南壁際、H・I-10グリッドに位置する。第58号溝跡、第187号土壙と重複する。遺構の一部は中・近世の



第282図 第44号住居跡遺物出土状況

井戸跡によって壊される。

平面形態は南北に長い長方形で、規模は長軸6.30m、短軸4.13m、深さ0.10mを測り、主軸方位はN-10°-Wを指す。覆土は削平を受けるが、西壁際では比較的残存状況が良く、上層には炭化物、下層には炭化物と焼土を含む。北壁の中央には、カマドが設けられ、カマドを除いて壁溝が廻る。西壁際からは小規模なピットが連続して検出された。

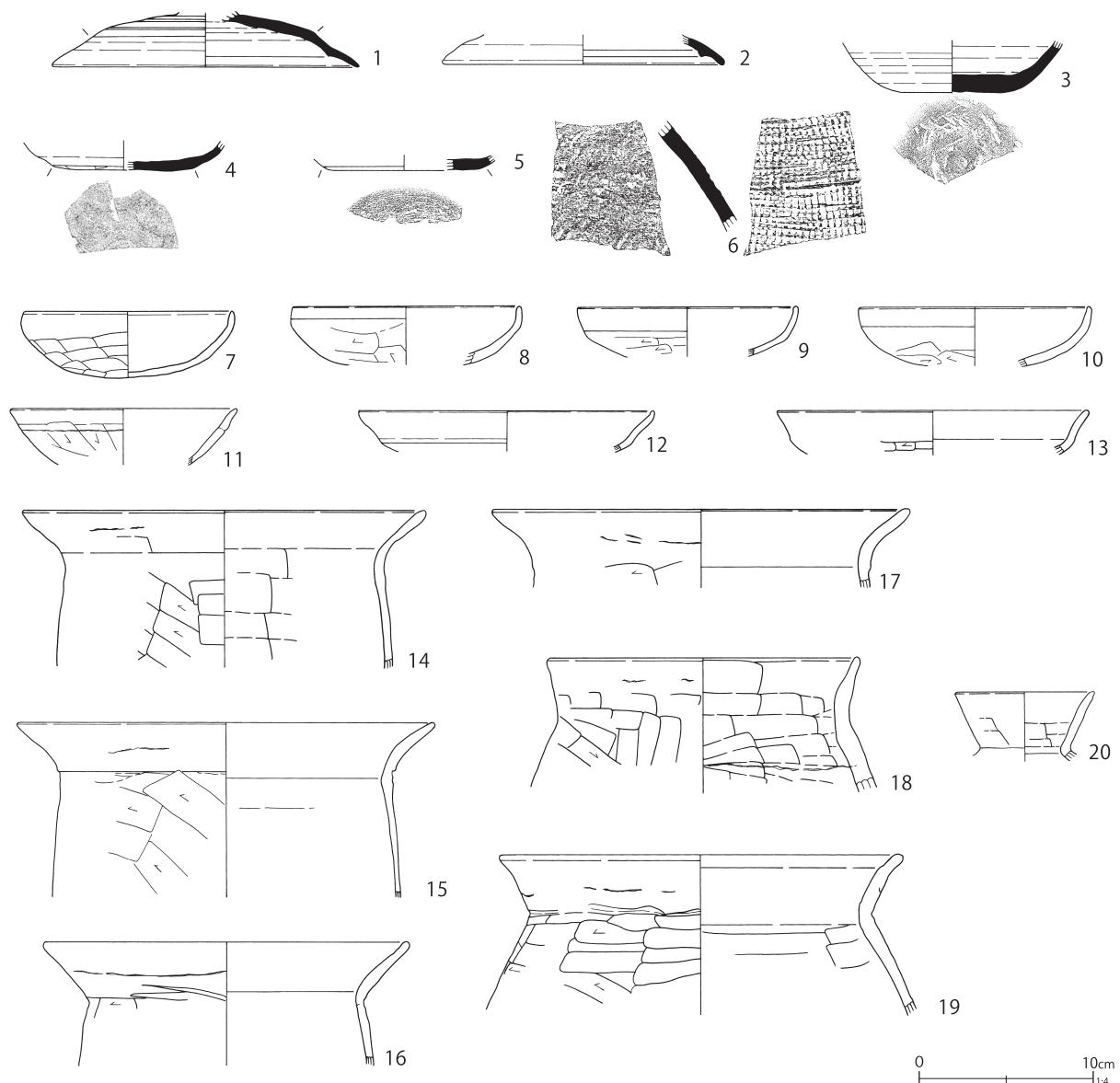
カマドは、袖が0.65m程住居跡内に張り出し、燃焼部は平坦に造られ、煙道部に向って緩やか

に立ち上がる構造を持つ。規模は全長1.75m、幅0.55m、深さ0.21mを測る。覆土は火床面直上に炭化物層が薄く堆積し、その上を焼土粒子と炭化物を多く含む層が覆う。

壁溝はカマドを除く住居跡北半部で検出された。規模は幅0.16~0.25m、深さ0.02~0.05mを測る。

西壁中央部の壁溝中からは、ピットが連続して検出された。

ピットは6基検出された。ピット1は南東部から検出された。平面形態は楕円形で、規模は長径0.45m、短径0.35m、深さ0.14mを測る。



第283図 第44号住居跡出土遺物

ピット2～6は西壁中央部から検出された。平面形態は円形または橢円形で、規模はピット2が長径0.29m、短径0.13m、深さ0.06mを測る。ピット3は長径0.17m、短径0.14m、深さ0.11mを測る。ピット4は長径0.15m、短径0.10m、深さ0.06mを測る。ピット5は長径0.17m、短径0.11m、深さ0.08mを測る。ピット6は直径0.17m、深さ0.11mを測る。いずれも小規模で浅いピットだが、壁溝から並んで検出された点が注目される。壁の構築に関する支柱痕の可能性がある。

遺物は住居跡の北側から散発的に検出され、須

器蓋・壺・甕、土師器壺・皿・甕・埴形土器が出土した（第283図1～20）。1～6は須器である。1、2は蓋で、ともに短いカエリがある。3～5は壺である。底部は、4、5は回転ヘラケズリ調整が認められ、3は布でミガキが施されたかのように滑らかである。6は甕である。

7～20は土師器である。7～11は壺で、いずれも北武藏型壺である。口縁部は垂直に立ち上がるものと、やや外反するものが含まれる。11は大きく開く形の壺で、体部には縦方向のヘラケズリが施される。12、13は皿である。12は口縁部がやや

第87表 第44号住居跡出土遺物観察表（第283図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(17.3)	[3.1]	—	B I K	60	普通	灰	No.10 SJ9No.16 末野産 内底面に十字に指ナデが施される 歪み有り	111-9
2	須恵器	蓋	(16.0)	[1.7]	—	B D I	5	普通	灰白		
3	須恵器	坏	—	[2.9]	(6.0)	E I K	30	良好	灰オリーブ	SJ9No.10 外面の器面が非常に滑らか 焼成後に布ミガキか	
4	須恵器	坏	—	[1.7]	(8.2)	I K	20	普通	褐灰		
5	須恵器	坏	—	[0.8]	(9.4)	D E I K	15	普通	灰白		
6	須恵器	甕	—	[6.9]	—	D E I K	5	普通	褐灰		
7	土師器	坏	11.9	3.8	—	C E I K	70	普通	橙	No.4・11 内外面共に摩耗	111-10
8	土師器	坏	(12.9)	[3.3]	—	C I K	15	普通	にぶい橙		
9	土師器	坏	(12.3)	[2.8]	—	C H I K	10	普通	橙		
10	土師器	坏	(13.0)	[3.3]	—	C H I K	30	普通	にぶい橙		112-1
11	土師器	坏	(12.8)	[3.2]	—	C H I K	15	普通	にぶい橙		
12	土師器	皿	(16.8)	[2.3]	—	C I K	10	普通	橙		
13	土師器	皿	(17.7)	[2.5]	—	C E H I K	5	普通	にぶい褐		
14	土師器	甕	(23.0)	[9.0]	—	C E I K	15	普通	にぶい橙	SJ19No.8～10	
15	土師器	甕	(23.8)	[10.0]	—	B C E H I K	15	普通	橙	No.2	
16	土師器	甕	(20.6)	[7.1]	—	B C E H I K	15	普通	にぶい橙	SJ9No.15	
17	土師器	甕	(23.6)	[4.5]	—	C H I K	10	普通	橙	No.1	
18	土師器	甕	(17.6)	[7.7]	—	C E I K	20	普通	橙	歪みが強い	
19	土師器	甕	(22.4)	[9.2]	—	B C E H I K	25	普通	橙	No.7・8	112-2
20	土師器	埴形土器	(7.8)	[3.9]	—	C E H I K	25	普通	にぶい橙	古墳時代	

内屈し、13は外反する。

14～19は甕である。14～17は口縁部に最大径を持つもので、胴部の膨らみは弱い。19は頸部が「く」の字状になるが、肉厚である。混入品か。

20は埴形土器で、混入品と考えられる。

遺物の時期は、須恵器蓋・坏や土師器坏・甕の形状から、7世紀末～8世紀前半と考えられる。

第56号住居跡（第284図）

第4次調査におけるII区の西壁、L-17グリッドに位置する。調査区の壁面からカマドの煙道部のみが検出された。住居跡の本体は調査区域外へ延びるため、平面形態や規模、堆積状況は不明である。煙道部の覆土中には、焼土ブロックが多く含まれる。

遺物は煙道部から灰釉陶器が1点出土した。（第284図1）。1は灰釉陶器の長頸瓶と考えられる。全体的に被熱し、変色している。

遺物が1点のみであるため詳細はわからないが、

灰釉陶器が出土したことから9世紀以降の住居跡と考えられる。

第57号住居跡（第285図）

第4次調査におけるII区の北西角、L-17グリッドに位置する。遺構の大部分は調査区域外へ延びるため、平面形態は不明である。

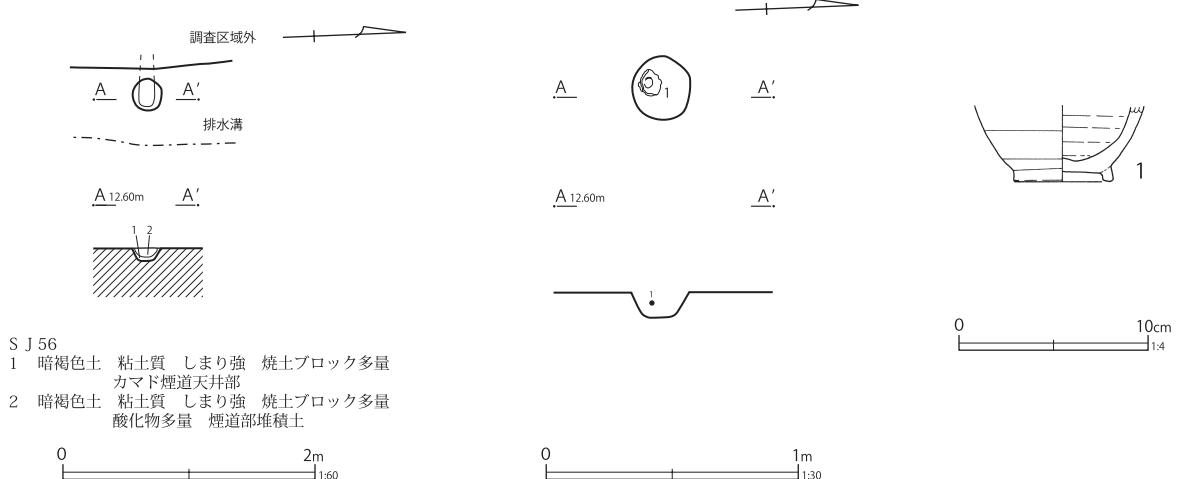
規模は、残存部で長軸2.35m、短軸0.85m、深さ0.17mを測り、主軸方位はN-88°-Eを指す。覆土は単層で、焼土ブロックを含む。北壁の東寄りにはカマドが設けられていた。

カマドは、袖が住居跡内に張り出し、燃焼部は平坦で、煙道部との間に0.10m程の段を持って上がる。規模は、残存部で全長0.85m、幅0.50m、深さ0.19mを測る。覆土には焼土ブロックや炭化物が含まれていたが、明確な焼土層や炭化物層は検出されなかった。

壁溝、ピット等は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

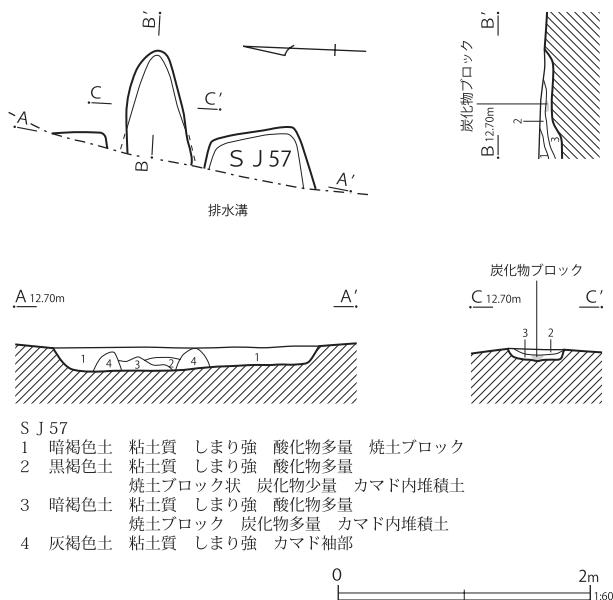
S J 56 カマド煙道部



第284図 第56号住居跡・出土遺物

第88表 第56号住居跡出土遺物観察表（第284図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	灰釉陶器	長頸瓶か	—	[3.9]	5.0	B I K	80	普通	灰白	カマドNo.1 全体被熱により黒く変色している	112-3



第285図 第57号住居跡

遺物が出土していないため詳細な時期は不明だが、検出面から古代の遺構と考えられる。

第58号住居跡（第286図）

第4次調査におけるII区の中央南壁際、L・M-19グリッドに位置する。第66・71号住居跡と重複し、本遺構が新しい。遺構の南西部は調査区域外へ延びるため、平面形態は不明である。

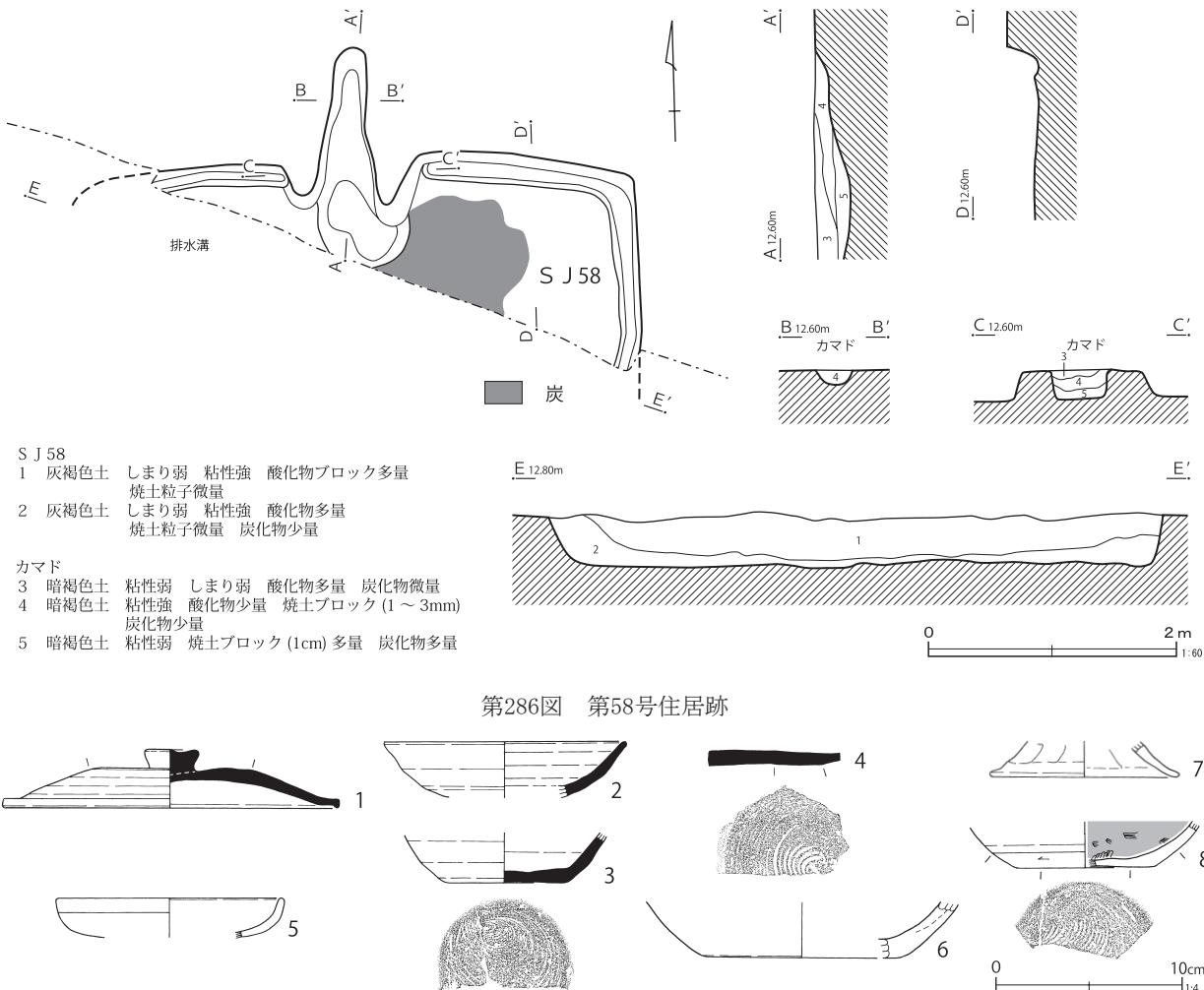
規模は、残存部で長軸3.85m、短軸1.60m、深さ0.28mを測り、長軸方位はN-0°を指す。覆土はレンズ状に堆積し、全層に焼土粒子を含む。カマドは北壁に設けられ、カマドを除いて壁溝が全周する。

カマドは、袖が0.60m程住居跡内に張り出し、燃焼部は浅く掘り窪められ、煙道部に向って緩やかに立ち上がる構造を持つ。規模は、残存部で全长1.70m、幅0.50m、深さ0.27mを測る。覆土は床面直上に焼土ブロックと炭化物を多く含む層が堆積し、上層は焼土・炭化物の含有量が減少する。明確な焼土層や炭化物層は検出されなかった。

壁溝は、検出された範囲の中ではカマドを除いて全周する。規模は、幅0.15~0.25m、深さ0.02~0.03mを測る。

ピットは検出されなかった。

遺物は須恵器蓋・壺、土師器壺・甕・小型台付甕、ロクロ土師器壺等が出土した（第287図1~8）。1~4は須恵器である。1は蓋で、三甕の製品である可能性がある。2~4は壺である。三甕と東金子の製品を含む。底部は3が回転糸切り



第287図 第58号住居跡出土遺物

第89表 第58号住居跡出土遺物観察表 (第287図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	—	3.1	(18.0)	I K	25	普通	灰白	三毳産か 摘み径2.9 摘み周辺にわずかに糸切り痕が残る	
2	須恵器	坏	(13.0)	[3.0]	—	B I K	10	普通	灰白	三毳産か	
3	須恵器	坏	—	[2.6]	(7.8)	B I	30	普通	灰白	東金子産か	
4	須恵器	坏	—	[0.8]	(8.0)	E I K	35	普通	灰白	三毳産 被熱により部分的に赤褐色に変色している	
5	土師器	坏	(12.0)	[2.1]	—	E H I K	10	普通	にぶい橙		
6	土師器	甕か	—	[2.9]	(10.0)	E H K	10	普通	にぶい橙	外面黒斑有り	
7	土師器	小型台付甕	—	[1.9]	(10.0)	C D E I K	30	普通	にぶい橙		
8	ロクロ土師器	坏	—	[2.3]	(7.6)	E H K	30	普通	橙	内黒 黒色処理はだいぶとんでいる 外面下端から底部周辺にかけて回転ヘラケズリ調整	112-4

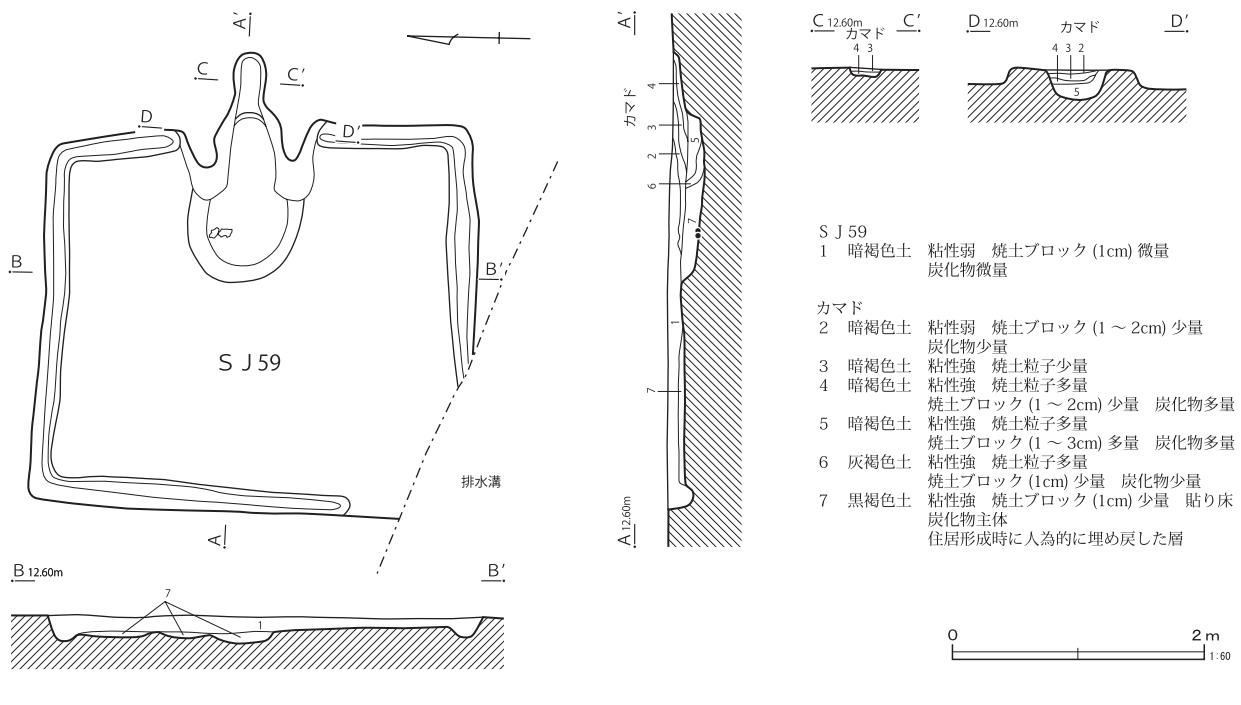
離し無調整で、4は回転糸切り後、外周回転ヘラケズリ調整が施される。

5~7は土師器である。5は坏で、浅身で扁平のものである。6は甕の底部と考えられる。7は

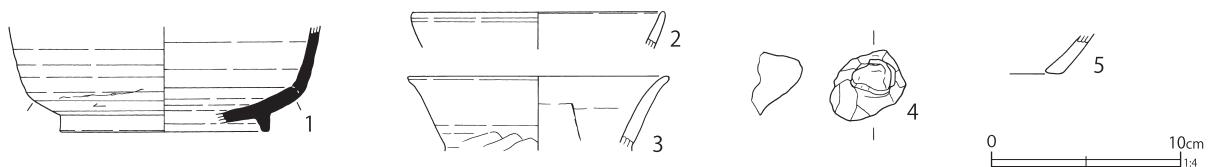
小型台付甕の脚部である。

8はロクロ土師器で、内黒の坏である。外面下端に回転ヘラケズリ調整が施される。

遺物の時期は、点数が少なく、やや時期幅があ



第288図 第59号住居跡



第289図 第59号住居跡出土遺物

第90表 第59号住居跡出土遺物観察表 (第289図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	高台付壺	—	[5.5]	(11.0)	A I K	20	普通	灰	新治産	
2	土師器	壺	(13.0)	[1.9]	—	C E H I K	5	普通	にぶい黄橙		
3	土師器	小型壺か	(13.5)	[3.9]	—	C E H I K	15	普通	にぶい橙		
4	土師器	甌	—	—	—	B H I K	100	普通	にぶい橙	把手 縦3.7 横4.0 厚さ2.2	
5	土師器	甌	—	[2.1]	—	C D K	5	普通	淡黄	黒斑有り	

るため詳細は不明だが、9世紀前半の住居跡と考えられる。

第59号住居跡 (第288図)

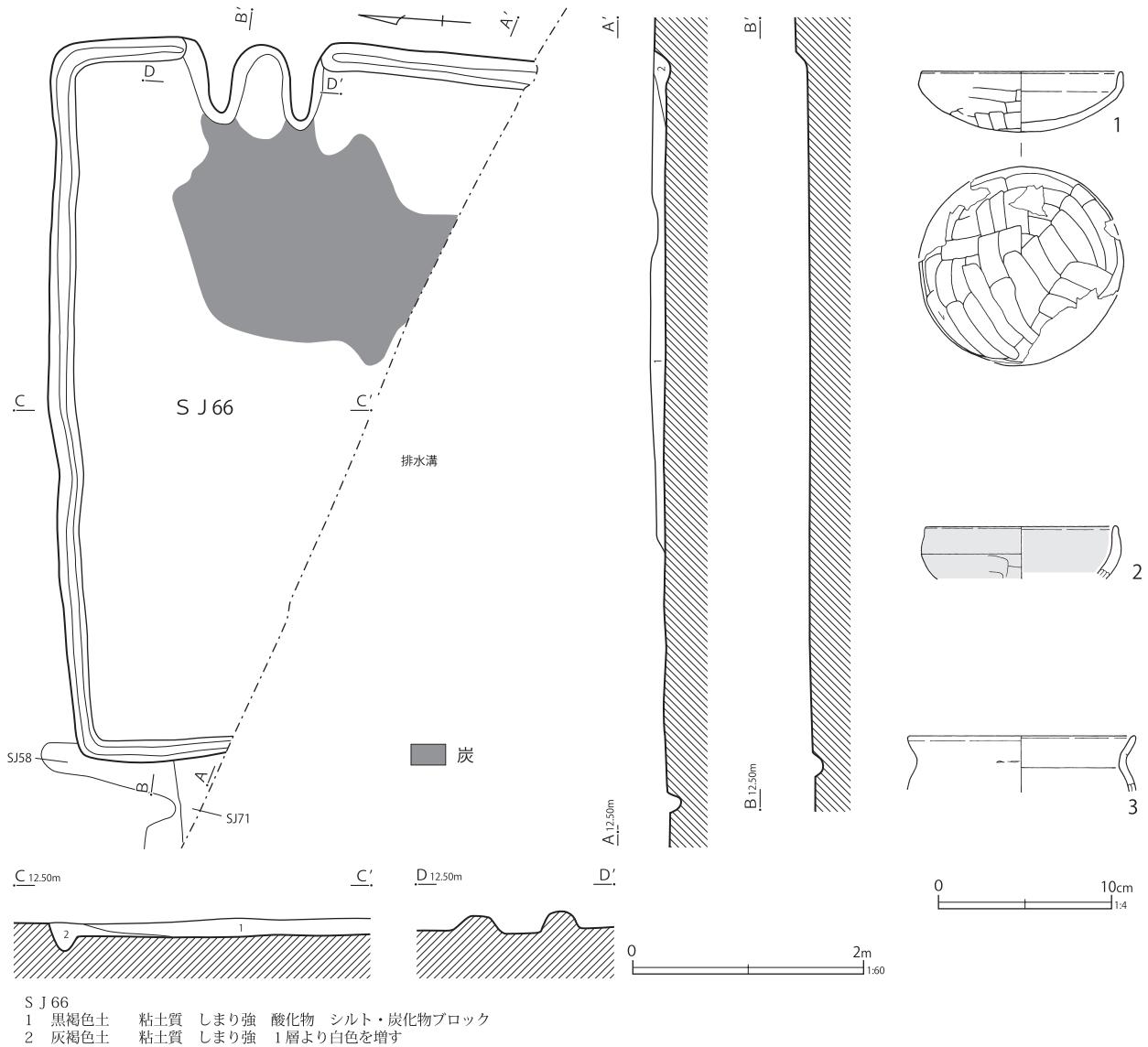
第4次調査におけるII区の中央やや東寄りの南壁際、L・M-19・20グリッドに位置する。遺構の南西角は排水溝によって壊される。

平面形態は方形で、規模は長軸3.43m、短軸3.12m、深さ0.19mを測り、主軸方位はN-90°を指す。覆土はほぼ単層で、焼土ブロックや炭化物を含む。カマドは東壁に設けられ、カマドと南西

角を除いて壁溝が全周する。

カマドは、袖が0.60m程住居跡内に張り出し、燃焼部は僅かに掘り窪められ、煙道部に向って緩やかに立ち上がる構造を持つ。規模は全長1.15m、幅0.53m、深さ0.12mを測る。覆土は全層に焼土ブロックと炭化物を含み、下層は含有量が多く、上層は少ない。

カマドの下からは、燃焼部を中心として床下土壙状の掘り込みが検出された。規模は長径1.35m、短径0.90m、深さ0.13mを測る。覆土は炭化物を主



第290図 第66号住居跡・出土遺物

体とし、カマド燃焼部の直下は焼土ブロックや炭化物を多く含む層が堆積している。

壁溝はカマドの周囲と、住居跡南西角を除いて全周し、規模は幅0.15~0.25m、深さ0.05~0.10mを測る。

ピットは検出されなかった。

遺物は須恵器高台付壺、土師器壺・小型壺・甌等が出土した（第289図1~5）。1は須恵器の高台付壺で、新治の製品である。底部外周には回転ヘラケズリ調整が施される。

2~5は土師器である。2は壺の破片である。

3は小型壺の口縁部の可能性がある。混入品か。4は把手付甌の把手である。5は単孔式の甌である。

遺物の時期は、点数が少ないため詳細は不明だが、須恵器高台付壺の形状や住居跡の形状から8世紀代の住居跡と考えられる。

第66号住居跡（第290図）

第4次調査におけるII区の中央や東寄りの南壁際、L・M-19・20グリッドに位置する。第58・71号住居跡と重複し、本遺構が古い。遺構の南半部は調査区域外へ延びるため、平面形態は不

第91表 第66号住居跡出土遺物観察表（第290図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	11.5 (8.8)	3.5 [3.0]	—	C E H I K	75	普通	橙	No.1	112-5
2	土師器	壺	(13.0)	[3.2]	—	E H I K	5	普通	にぶい橙	内外面赤彩	
3	土師器	甕			—	C H I K	10	普通	橙		

明である。

規模は、残存部で長軸6.23m、短軸4.20m、深さ0.19mを測り、主軸方位はN-87°-Eを指す。覆土はほぼ削平されているが、僅かに残存した箇所にはシルトや炭化物ブロックが含まれていた。カマドは東壁北寄りに設けられ、カマドを除いて壁溝が全周する。

カマドは、袖が0.70m程住居跡内に張り出す。規模は全長0.80m、幅0.53m、深さ0.18mを測る。覆土は削平を受け、残存していないかった。カマドの正面からは、炭化物層の広がりが確認された。

壁溝は確認できた範囲では、カマドを除いて全周する。規模は幅0.20~0.25m、深さ0.08~0.14mを測る。

ピットは検出されなかった。

遺物は土師器壺・甕等が出土した（第290図1~3）。1、2は壺である。1は北武藏型壺で、口縁部は垂直気味に立ち上がる。2は内外面に赤彩が施される。

3は甕の頸部破片である。

遺物の時期は、点数が少ないため詳細は不明だ

が、土師器壺の形状や重複関係から8世紀代の住居跡と考えられる。

第71号住居跡（第291図）

第4次調査におけるII区の中央や東寄りの南壁際、L・M-19グリッドに位置する。第58・66号住居跡と重複する。遺構の大部分は調査区域外へ延びるため、平面形態は不明である。

規模は、残存部で長軸1.96m、短軸0.95m、深さ0.12mを測り、長軸方位はN-83°-Eを指す。覆土は単層で、炭化物を少量含む。

検出された範囲が狭いため、カマド、壁溝、ピット等は検出されず、遺物も出土しなかった。

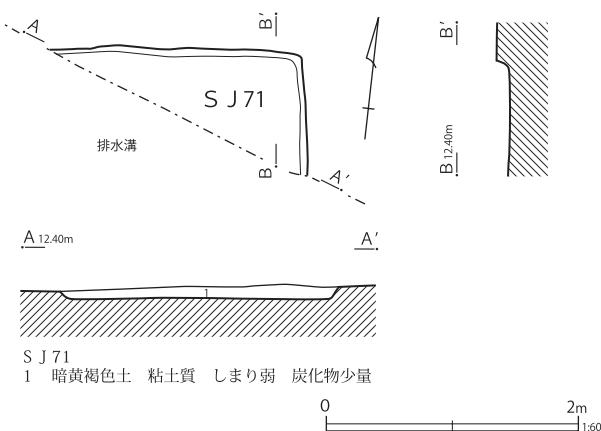
遺物が出土していないため詳細は不明だが、重複関係から古代の遺構と考えられる。

第73号住居跡（第292・293図）

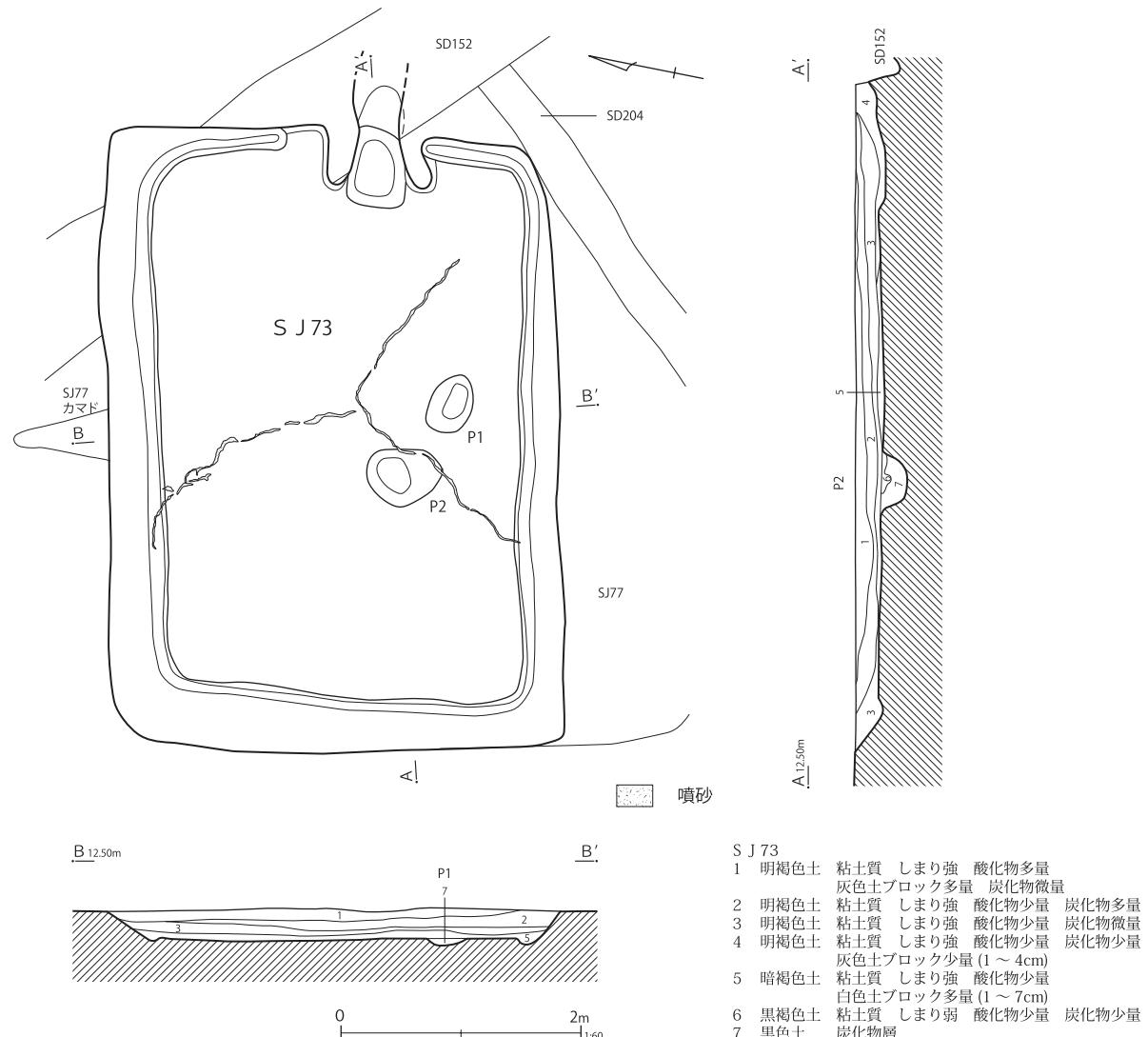
第4次調査におけるIII区の中央や西寄り、M-22グリッドに位置する。第77号住居跡、第152号溝跡と重複し、本遺構が古い。カマドの煙道部は第152号溝跡によって壊される。床面には、後世の地震によって発生した液状化現象に伴う噴砂痕跡が、住居跡の中央を中心に三方向に走行していた。

平面形態は東西に長い長方形で、規模は長軸5.26m、短軸3.80m、深さ0.25mを測り、主軸方位はN-78°-Eを指す。覆土は緩やかなレンズ状堆積で、全層に炭化物を含む。カマドは東壁やや南寄りに設けられ、カマドを除いて壁溝が全周する。

カマドは煙道部が壊されるが、袖が0.55m程住居跡内に張り出し、燃焼部は僅かに掘り窪められ、煙道部に向って緩やかに立ち上がる構造と推察される。



第291図 第71号住居跡



第292図 第73号住居跡

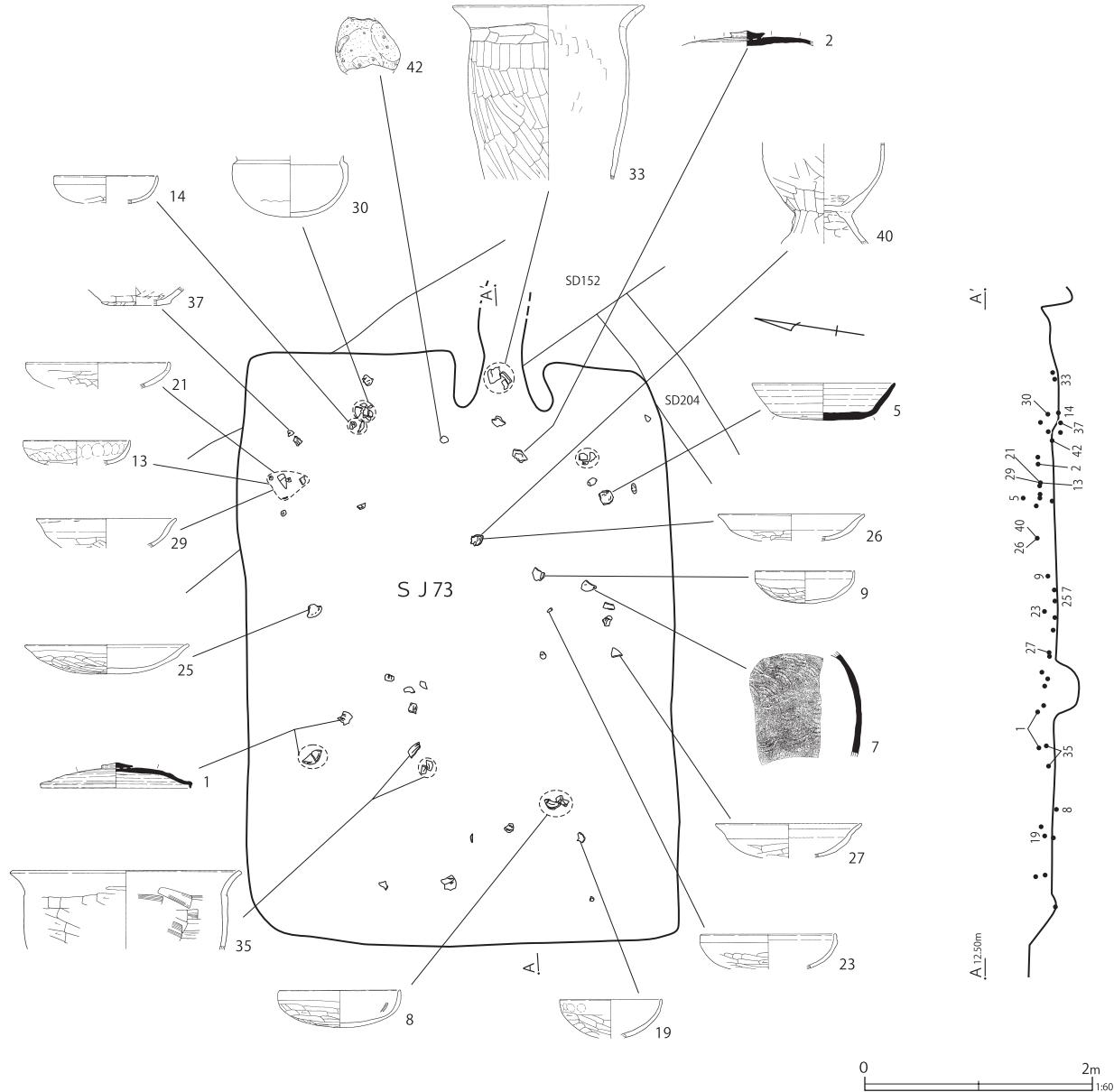
規模は、残存部で全長0.98m、幅0.45m、深さ0.25mを測る。覆土は住居内の堆積土と同じ土層が流入し、異なる点は火床面付近に灰色土ブロック混じりの土が堆積することのみであった。

壁溝はカマドを除いて全周し、規模は幅0.12～0.25m、深さ0.06～0.08mを測る。

ピットは住居跡の中央部から2基検出された。平面形態はどちらも橢円形で、規模はピット1が長径0.50m、短径0.35m、深さ0.08mを測る。ピット2は長径0.63m、短径0.47m、深さ0.21mを測る。ピット2の覆土中には炭化物層が厚く形成されていた。

遺物は住居跡全体から比較的多く検出され、須恵器蓋・壺・甕、土師器壺・皿・鉢・小型壺・甕・台付甕、磨石等が出土した（第294図1～42）。1～7は須恵器である。1～4は蓋で、南比企と末野の製品を含む。4は短いカエリが付く。5、6は壺である。5は底部全周回転ヘラケズリ調整が施される。6は三毳の製品で、混入品か。7は甕である。

8～40は土師器である。8～24は壺で、8～17は北武藏型壺である。口縁部はやや外反して立ち上がり、口縁部外面ヨコナデの下に無調整帯を持つものが多い。18は暗文壺である。20は内外面に



第293図 第73号住居跡遺物出土状況

赤彩が施される。21～23は大型で扁平の壺である。24は内黒の壺で、外面下端にヘラケズリ調整が施される。

25～29は皿で、いずれも口縁部が大きく外反する。30は鉢である。31は内外面ともに黒色処理が施されるもので、器種は不明だが丸みが強いため、壺や塊・鉢等になると考えられる。

32は小型の壺か。混入品の可能性がある。33～38は甕である。33は口縁部に最大径を持ち、頸部の屈曲が弱く、胴部がやや膨らむ。

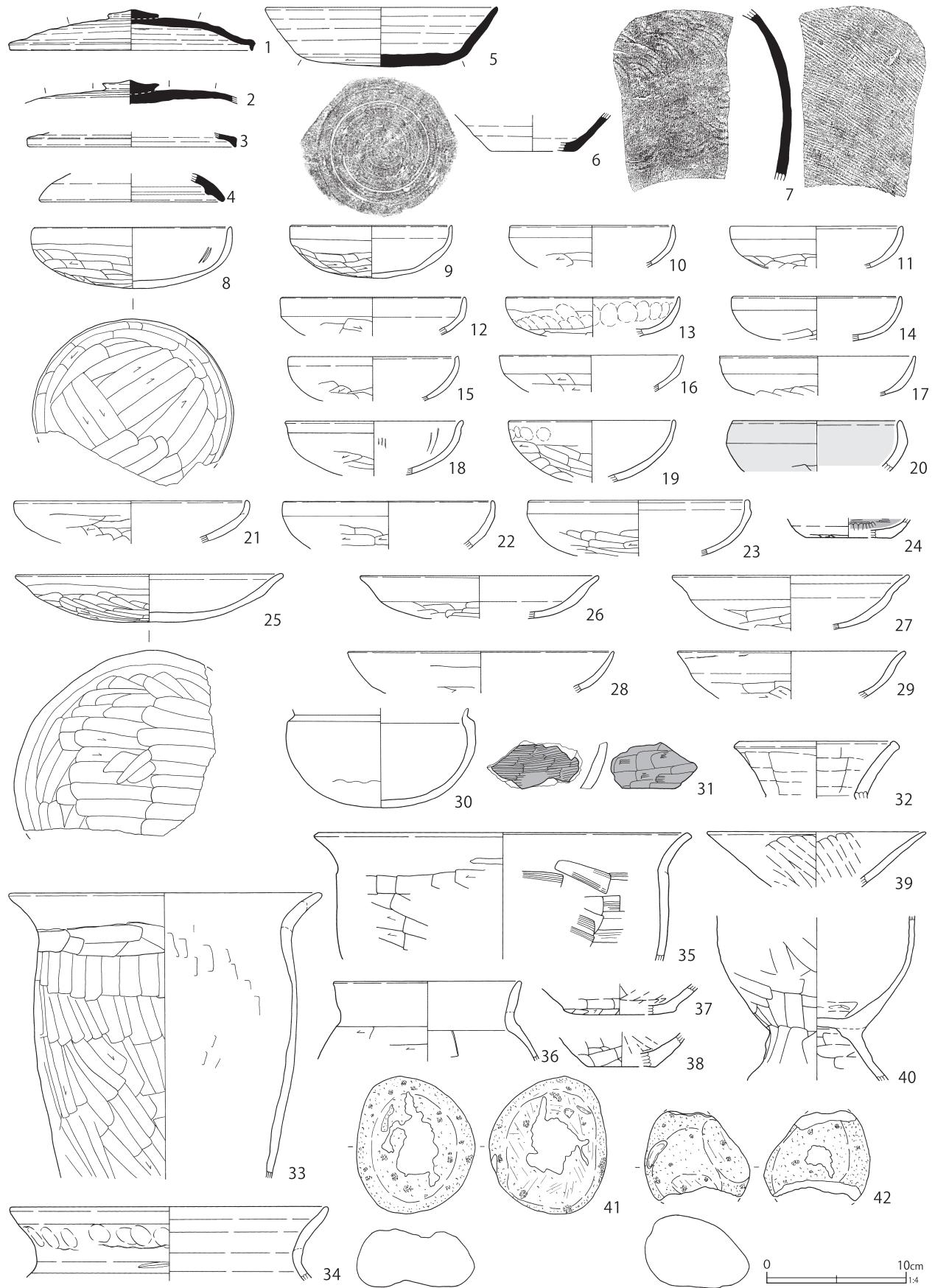
39は高壺または坩形土器と考えられる。40は台付甕である。どちらも混入品と考えられる。

41、42は角閃石安山岩製の磨石である。

遺物の時期は、須恵器壺や土師器壺の器形から、8世紀前半と考えられる。

第74号住居跡（第295図）

第4次調査におけるⅢ区の南東端、O-25グリッドに位置する。遺構の東側は削平を受け、南半部は調査区域外へ延びるため、平面形態は不明である。



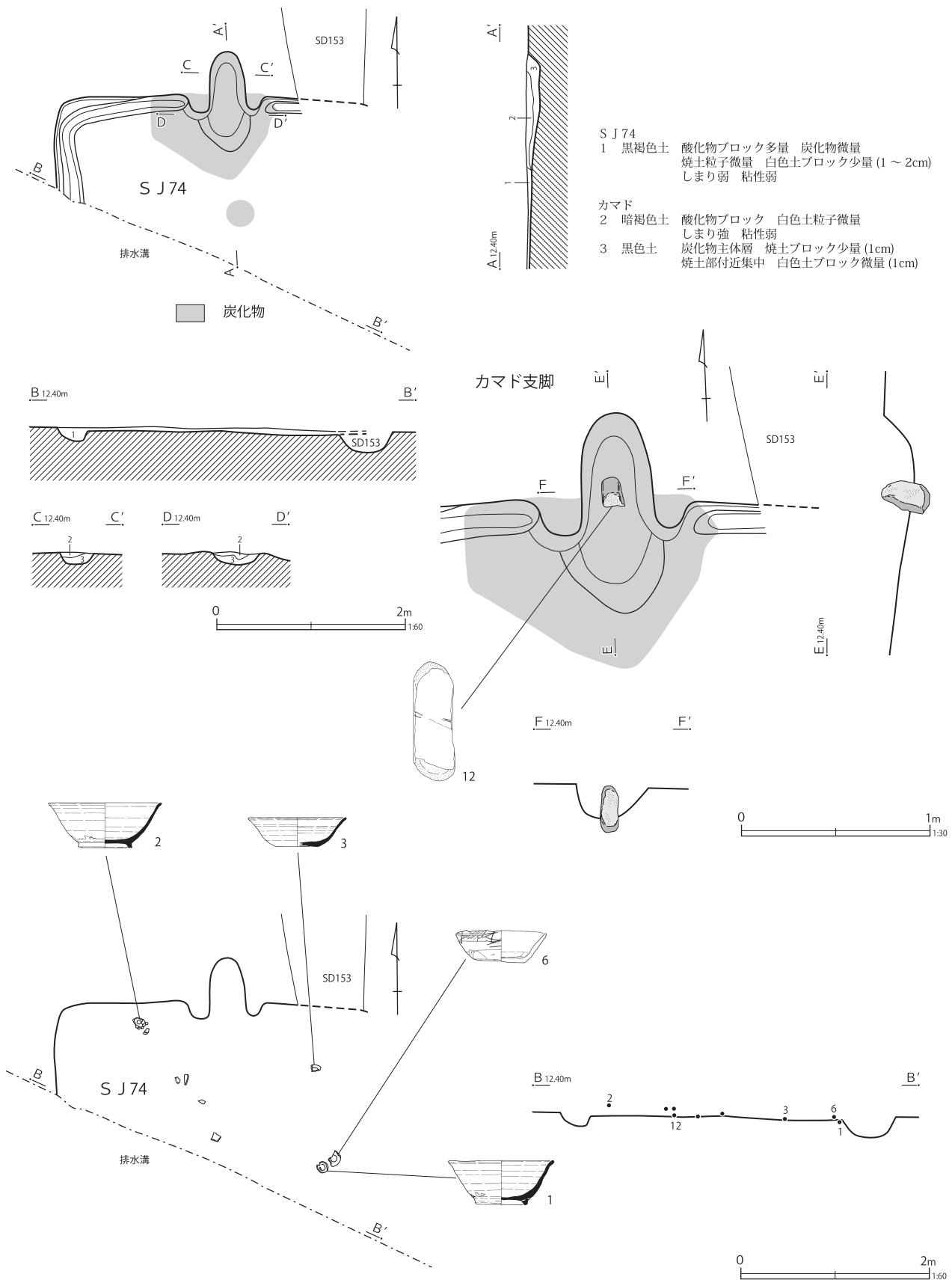
第294図 第73号住居跡出土遺物

第92表 第73号住居跡出土遺物観察表（第294図）

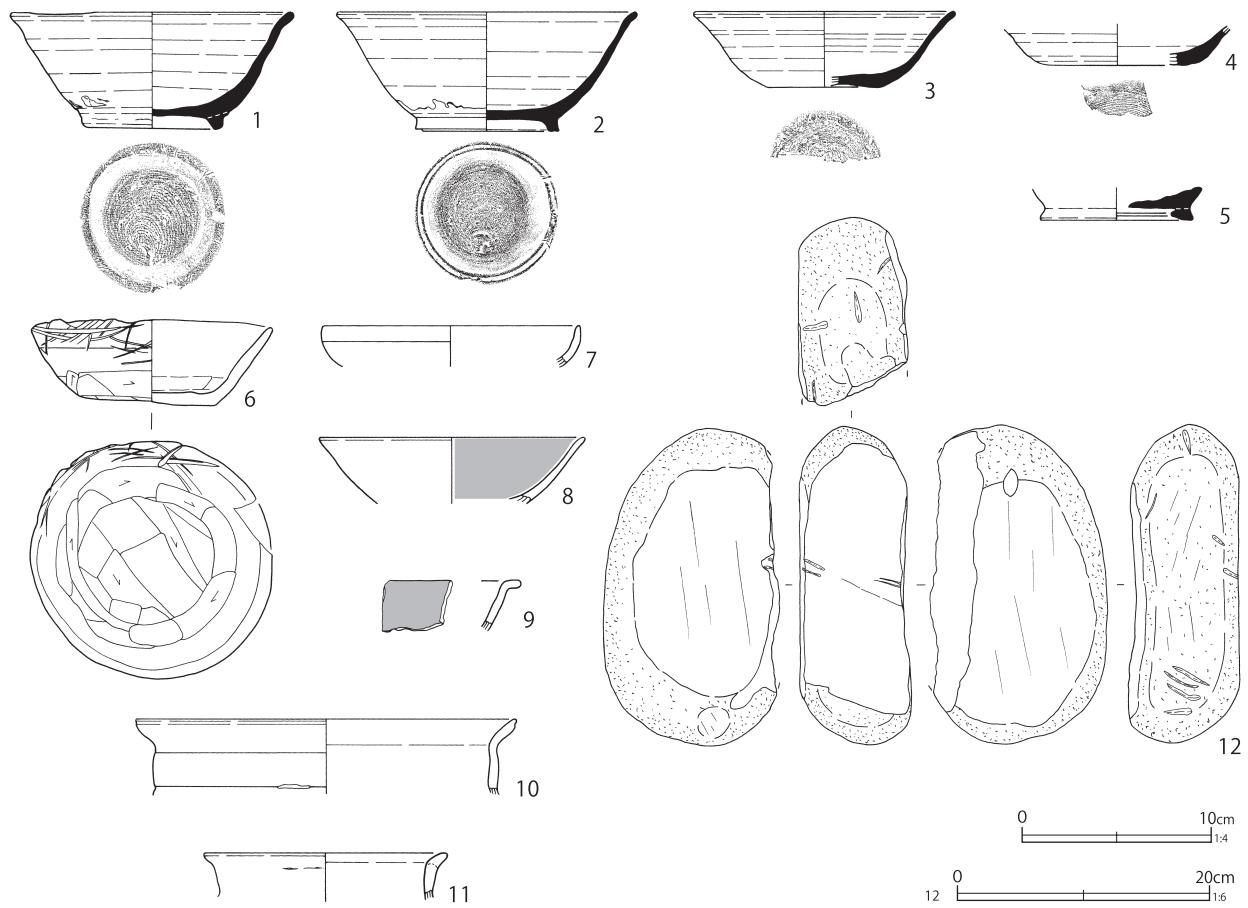
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	17.3	2.9	—	E I K	85	普通	灰	No.5・8 南比企産か 歪み有り	112-6
2	須恵器	蓋	—	[1.7]	—	B E I K	70	良好	灰白	No.17 末野産 外面煤付着	
3	須恵器	蓋	(14.7)	[1.0]	—	I J K	5	普通	黄灰	南比企産か	
4	須恵器	蓋	(13.1)	[2.0]	—	E I K	10	良好	灰	カエリ部および口唇部摩耗	
5	須恵器	坏	(16.5)	4.2	9.0	E I K	60	普通	灰	No.22 P1No.1	112-7
6	須恵器	坏	—	[2.5]	(6.0)	I K	20	普通	灰白	三毳産 混入か	
7	須恵器	甕	—	[12.4]	—	E I K	5	良好	暗青灰	No.23	
8	土師器	坏	14.0	4.4	—	C E H I K	75	普通	橙	No.34	112-8
9	土師器	坏	11.5	3.7	—	C E H I K	65	普通	橙	No.24	112-9
10	土師器	坏	(11.6)	[3.0]	—	B C H I K	10	普通	橙		
11	土師器	坏	(12.2)	[3.0]	—	C E H I K	40	普通	にぶい橙		
12	土師器	坏	(13.0)	[2.7]	—	A C E I K	10	普通	橙		
13	土師器	坏	(12.4)	[2.8]	—	C E	30	普通	橙	No.2	
14	土師器	坏	(12.0)	[3.1]	—	C E I K	15	普通	灰黄褐	No.40	
15	土師器	坏	(12.0)	[3.1]	—	C E H I K	20	普通	にぶい橙	外面黒斑有り	
16	土師器	坏	(13.0)	[2.6]	—	C E I K	15	普通	にぶい橙		
17	土師器	坏	(14.0)	[2.8]	—	C E G I K	10	普通	橙		
18	土師器	坏	(12.6)	[3.9]	—	C E H I K	15	普通	橙	暗文坏 内外面共に摩耗が激しい	
19	土師器	坏	(12.8)	[4.4]	—	C E K	25	普通	にぶい橙	No.30	
20	土師器	坏	(12.0)	[3.6]	—	C H I K	15	普通	にぶい黄橙	内外面赤彩 外面黒斑有り	
21	土師器	坏	(16.6)	[3.0]	—	C E I K	10	普通	橙	No.2	
22	土師器	坏	(14.8)	[3.4]	—	B E I	10	普通	橙		
23	土師器	坏	(15.7)	[4.0]	—	B C E I K	20	普通	橙	No.25	
24	土師器	坏	—	[1.4]	(6.0)	E H I K	20	普通	にぶい橙	内黒 0.1～0.2cm程度の水晶を多く含む	
25	土師器	皿	(18.9)	3.5	—	C E H I K	50	普通	にぶい褐	No.36 底部煤付着 歪みが強い	112-10
26	土師器	皿	(17.0)	[3.0]	—	C E I K	20	普通	にぶい橙	No.16 内外面摩耗	113-1
27	土師器	皿	(16.6)	[3.9]	—	C E I K	15	普通	明赤褐	No.27 内外面摩耗	113-2
28	土師器	皿	(18.0)	[2.9]	—	C E G I K	5	普通	にぶい褐		
29	土師器	皿	(16.2)	[3.4]	—	E I K	15	不良	橙	No.2	
30	土師器	鉢	—	[7.1]	—	C E H I K	25	普通	橙	No.1 内外面共に摩耗が激しく調整は不明瞭	
31	黒色土器	塊か	—	[3.3]	—	E I K	5	良好	灰白	内外面黒色処理 外面摩耗	
32	土師器	小型壺	(11.0)	[4.2]	—	C E G I K	15	普通	赤褐		
33	土師器	甕	(22.0)	[20.4]	—	C I K	25	普通	にぶい橙	No.31	113-3
34	土師器	甕	(22.6)	[5.2]	—	C H I K	15	普通	明赤褐		
35	土師器	甕	(26.4)	[9.1]	—	B E H I K	10	普通	にぶい橙	No.10・11	
36	土師器	甕	(13.2)	[5.7]	—	C I K	15	普通	にぶい褐	外面煤付着 外面摩耗が激しい	
37	土師器	甕	—	[2.1]	(8.0)	C E H I K	20	良好	褐灰	No.39 内外面煤付着	
38	土師器	甕	—	[2.4]	(4.8)	C G I K	20	普通	明赤褐	外面摩耗	
39	土師器	高坏か	(15.6)	[3.9]	—	C E H I K	5	普通	褐灰		
40	土師器	台付甕	—	[11.7]	—	C E H I K	35	普通	にぶい赤褐	No.16 内外面共に強く被熱し摩耗剥離が激しい 外面全体に煤付着	113-4
41	石製品	磨石	長さ9.8 幅8.5 厚さ4.1 重さ142.9 g						角閃石安山岩 多孔質 自然面遺存 使用面1	127-3	
42	石製品	磨石	長さ[6.4] 幅7.6 厚さ5.0 重さ103.6 g						No.32 角閃石安山岩 多孔質 自然面遺存 溝状使用痕 使用面1	127-3	

規模は、残存部で長軸2.70m、短軸2.15m、深さ0.05mを測り、主軸方位はN-2°-Wを指す。

覆土はほぼ削平されているが、僅かに残存した箇所には焼土粒子や炭化物が含まれていた。カマド



第295図 第74号住居跡・遺物出土状況



第296図 第74号住居跡出土遺物

第93表 第74号住居跡出土遺物観察表（第296図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	高台付壺	14.6	6.1	6.7	B E I K	85	不良	褐灰	No.6 末野産 大き目片岩を多く含む	113-5
2	須恵器	高台付壺	(15.6)	6.3	7.6	B C I K	50	普通	黄灰	No.1 末野産	113-6
3	須恵器	壺	(13.5)	4.0	(6.2)	B E I K	40	不良	黄灰	No.7 末野産	113-7
4	須恵器	壺	—	[1.8]	(8.0)	B I K	10	普通	褐灰		
5	須恵器	瓶類	—	[1.7]	(8.0)	E I K	25	良好	灰白	外面降灰（自然釉状になる）	
6	土師器	壺	12.5	4.3	7.2	C H I K	95	普通	橙	No.5 内外面共に環状に煤付着 カマドの支脚として転用されたものか 口唇部の一部に植物圧痕が密集している	113-8
7	土師器	壺	(13.4)	[2.1]	—	C E H I K	5	普通	にぶい橙		
8	ロクロ土師器	壺	(13.8)	[3.5]	—	C H I K	10	普通	にぶい黄橙	内黒 内外面摩耗 内面調整は不明瞭	
9	ロクロ土師器	鉢	—	[2.6]	—	C I	5	普通	黒	内黒	
10	土師器	甕	(20.0)	[3.0]	—	C H I K	5	普通	橙		
11	土師器	甕	(12.5)	[2.4]	—	C H I K	10	普通	にぶい赤褐	内外面煤付着	
12	石製品	支脚	長さ25.5 幅8.9 厚さ[14.2] 重さ3810.5g							No.8 安山岩 研磨痕 刃物痕有り 被熱黒化	127-3

は北壁に設けられ、カマドを除いて壁溝が廻る。

カマドは削平を受けるが、袖が僅かに住居跡内に張り出し、燃焼部は浅く掘り窪められる構造が

捉えられた。規模は全長1.05m、幅0.37m、深さ0.15mを測る。覆土は火床面付近に炭化物を主体とする層が堆積し、カマド周辺にも広がる。カマ

ドの正面からは、炭化物層の広がりが確認された。またカマドの中央からは、支脚が検出された。

壁溝は確認できた範囲では、カマドを除いて全周する。規模は幅0.15～0.28m、深さ0.12～0.14mを測る。

ピットは検出されなかった。

遺物は須恵器坏・高台付坏・瓶類、土師器坏・甕・小型台付甕、ロクロ土師器坏・鉢、石製の支脚等が出土した（第296図1～12）。1～5は須恵器である。1、2は高台付坏で、末野の製品であり、胎土に大型の片岩粒を多く含む。3、4は坏で、3は末野の製品である。5は底部と高台部のみ残存するが、おそらく瓶類と考えられる。

6、7は土師器の坏である。6は外面下半に手持ちヘラケズリ調整が施され、口縁部の一部に植物の茎と推察される圧痕が多く認められる。

8、9はロクロ土師器である。8は内黒の坏で、体部が直線的に開く。9は鉢で、大型の製品になると推察される。

10、11は甕である。10は「コ」の字状口縁甕で、頸部の「コ」の字状がやや短くなる。11は小型台付甕と推察される。

12は安山岩製の支脚で、カマド燃焼部の中央に据え付けられ、全体が被熱していた。

遺物の時期は、須恵器坏や土師器甕の形状から、9世紀後半と考えられる。

第75号住居跡（第297～304図）

本住居跡は排水溝掘削時、掘削した壁面を精査し、遺構検出をしていた際に発見された。住居跡の床面と推察される薄い炭化物層の下に、厚さ0.05～0.10m程の砂層が確認され、更に精査していくところ、砂層より下層から液状化現象に伴う噴砂の噴出口が検出された。

この発見により、本住居跡は大地震によって液状化現象が発生した際に、住居跡の床面から噴砂が噴出して堆積し、そのままの状態で埋め戻された住居跡である可能性があると判断された。

断面を詳しく調べたところ、床面と考えられる薄い炭化物層が2面あることがわかり、当初は大地震によって被災したあとに、盛土をして再建されたのではないかと考え、被災した住居跡を第75b号住居跡、再建された住居跡を第75a号住居跡と呼称し、同一の住居跡として調査した。

また、排水溝掘削時に検出されたため面的な掘り下げを行う前であり、覆土が十分に残存していたことから、住居跡推定範囲を0.05mずつ掘り下げ、出土した遺物を全て記録し、取り上げていく手順で調査を進めていった。

本来の遺構確認面よりも上層から遺物の取り上げを行っているため、層上部は住居跡廃絶後に流れ込んだと考えられる遺物群を含む点に注意が必要である。

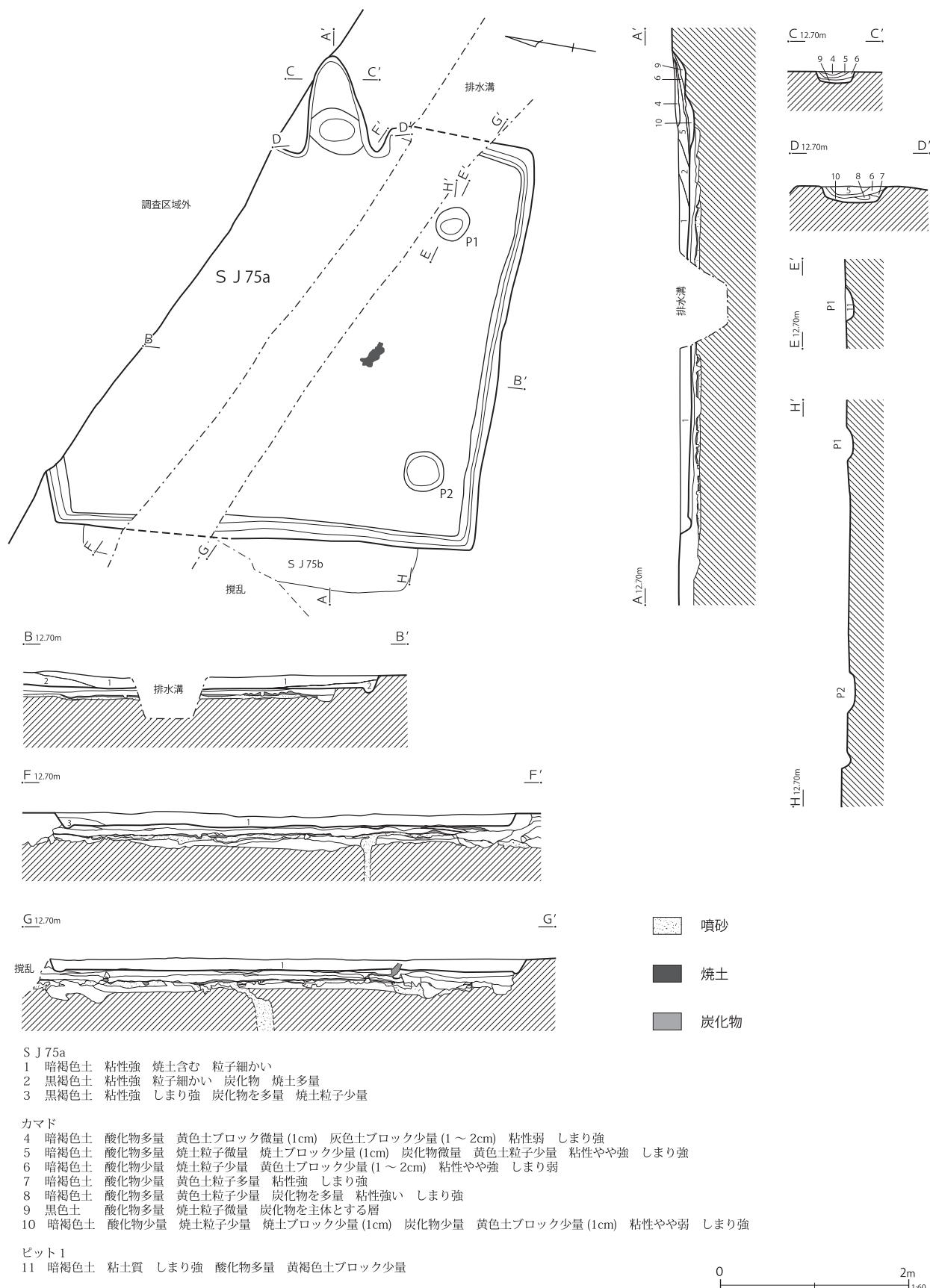
本住居跡は第4次調査におけるⅢ区の中央北壁際、L-22・23グリッドに位置する。遺構の北側は調査区域外へ延びる。

第75a号住居跡の概要は、平面形態はやや歪んだ方形で、規模は、残存部で長軸4.60m、短軸4.45m、深さ0.13mを測り、主軸方位はN-81°-Eを指す。覆土は緩やかなレンズ状堆積で、全層に焼土粒子を含み、床面付近は炭化物も含む。床面には、薄い炭化物層が形成されていた。

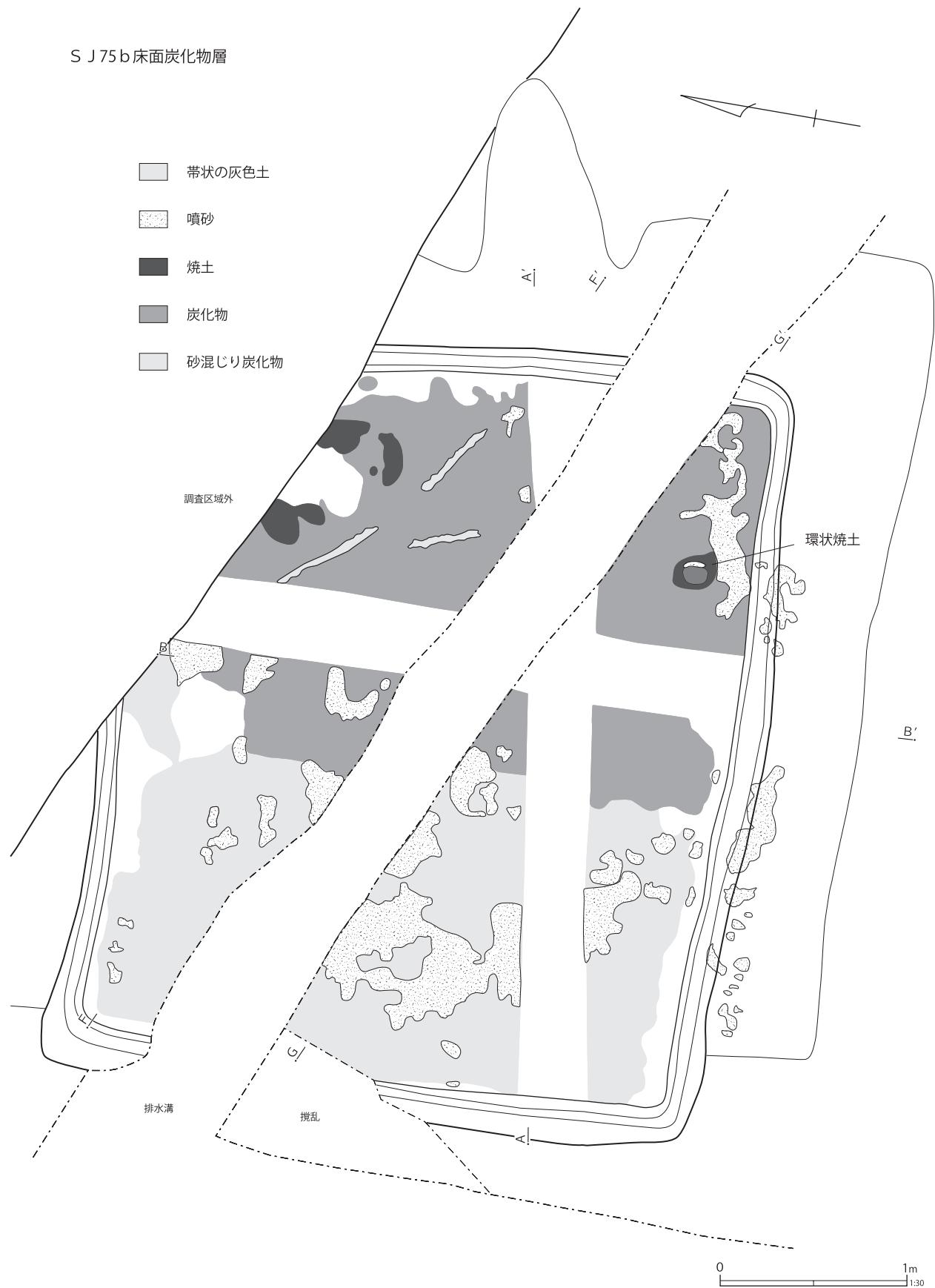
カマドは東壁やや南寄りに設けられ、壁溝はカマドを除いて廻る。ピットは住居跡の南側から2基検出され、住居の中央やや南寄りからは、焼土集中が検出された。

カマドは袖が僅かに住居内に張り出し、燃焼部は浅く掘り窪められ、煙道部に向って緩やかに立ち上がる構造を持つ。

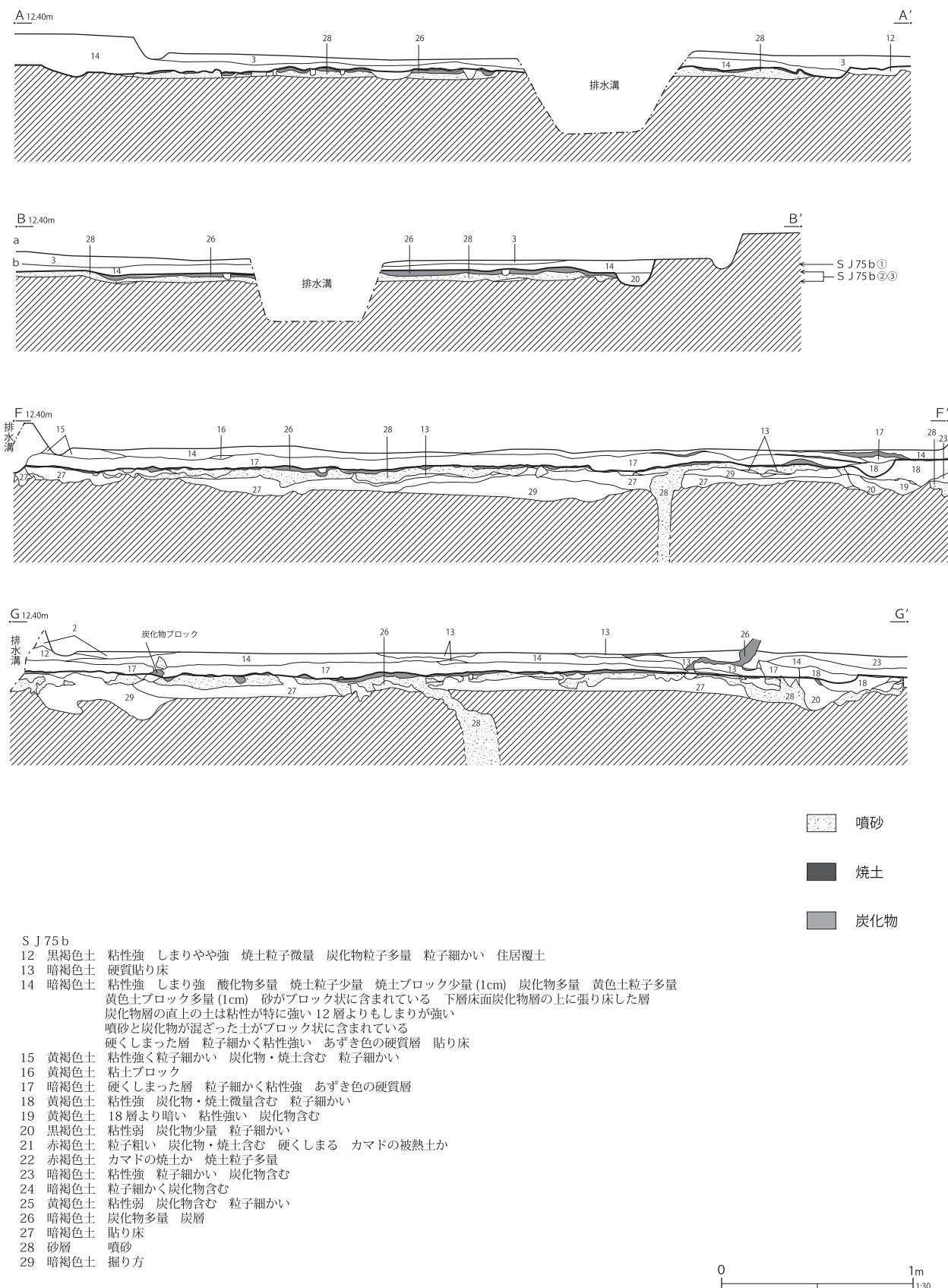
覆土は火床面直上に焼土粒子や焼土ブロック、炭化物を少量含む層が堆積し、その上に焼土や炭化物の含有量が異なる層が、薄く堆積していく。煙道部付近の床面からは、炭化物層が検出された。また、多くの層に黄色土ブロックが含まれる点も特筆される。カマドの構築材か。



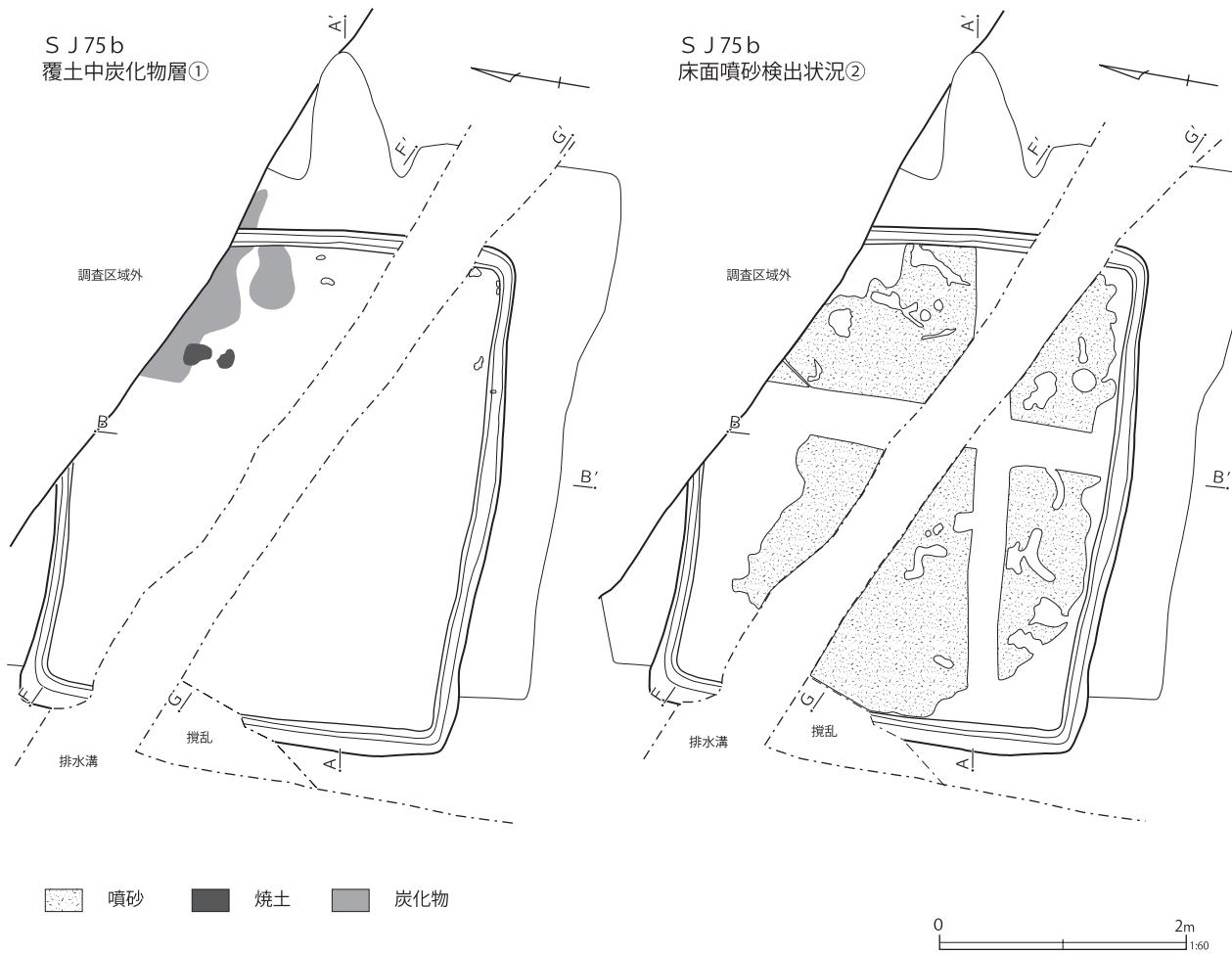
第297図 第75a号住居跡



第298図 第75b号住居跡（1）



第299図 第75b号住居跡（2）



第300図 第75b号住居跡（3）

壁溝は残存部では、カマドを除いて全周する。規模は幅0.13～0.25m、深さ0.03～0.05mを測る。

ピットは住居跡の南側から2基検出された。平面形態は楕円形で、規模はピット1が長径0.37m、短径0.35m、深さ0.09mを測る。ピット2は長径0.21m、短径0.20m、深さ0.07mを測る。配置は柱穴に近い位置になるが、どちらも浅いため、性格は不明である。

次に、第75b号住居跡の概要は、平面形態は東西にやや長い長方形で、規模は、残存部で長軸4.24m、短軸3.53m、深さ0.10mを測り、長軸方位はN-90°を指す。

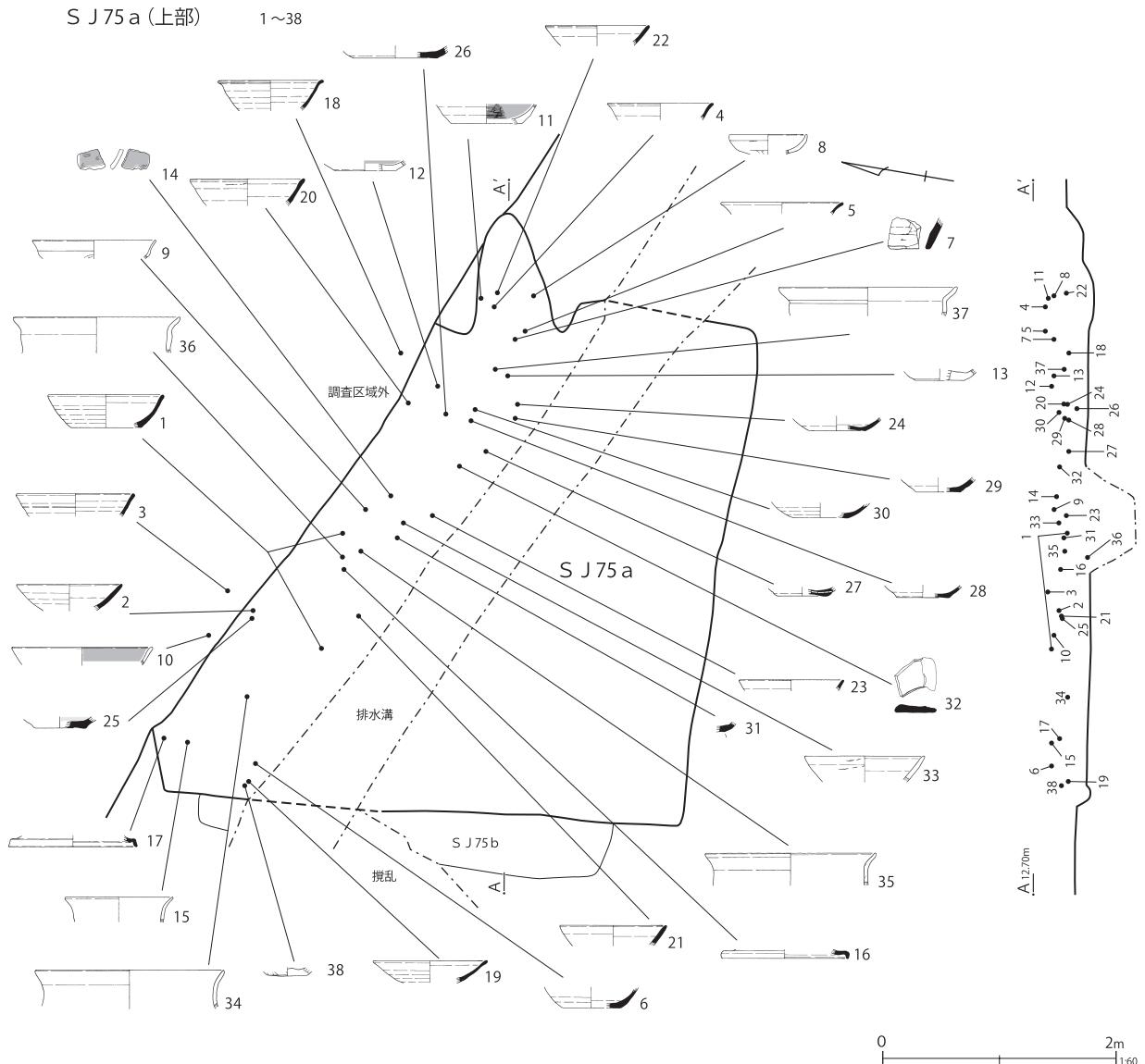
覆土は水平に堆積し、所々に炭化物層やブロック状の層が認められることから、人為的に埋め戻

されたと考えられる。床面には炭化物層が広がり、炭化物層の下には、液状化現象に伴う噴砂が0.05～0.10m程の層となって堆積していた。

床面の炭化物層は住居跡全体から検出された。東側では残存状況が良く、しっかりとした炭化物層が確認できたのに対し、西側はひどく乱れ、砂と炭化物が入り混じった状態となっていた。

これは、液状化現象が発生し、床面から噴砂が噴出した際に、床面に敷かれていた炭化物層が浮き上がり、東側は浮いたままの状態になったが、西側は沈んでしまったため上から砂を被り、このような残存状況になったのではないかと考えられる。

住居跡の北東部からは、焼土の堆積も確認され



第301図 第75a号住居跡遺物出土状況（1）

た。おそらく、この近辺にカマドが設けられ、噴砂発生時にカマド内の焼土が流出したものと推察される。

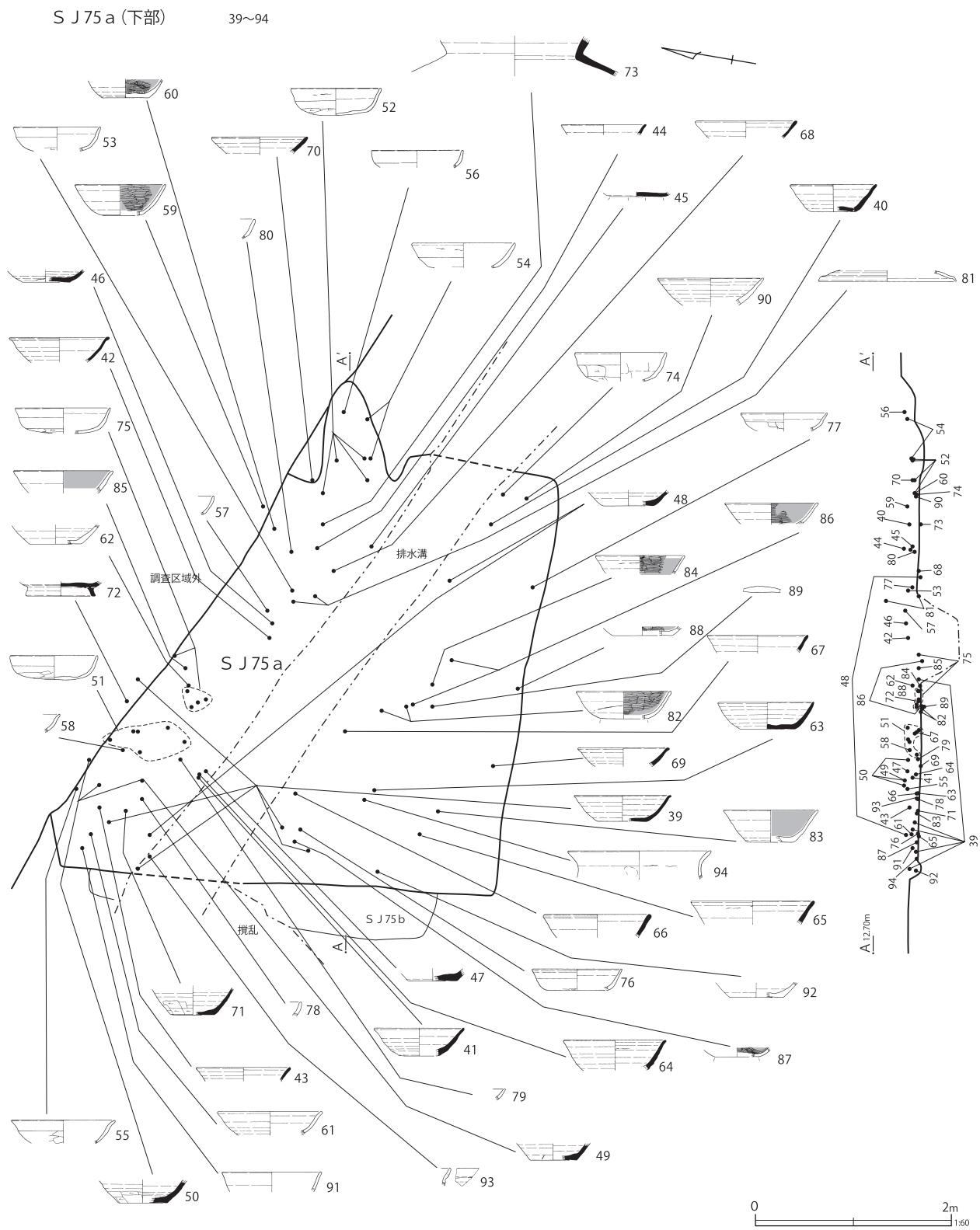
また、この付近からは、炭化物層を裂くように走る亀裂状の灰色土も確認された。炭化物層が噴砂によって浮き上がった際にズレが生じ、そこに灰色土が流入したものと考えられる。

住居跡の南東部からは、円形に廻る焼土が検出された。焼土の中央部には炭化物層と、部分的に噴砂が流入していた。形状からピットと考えられ、配置から柱穴である可能性が想定された。周りが

焼土化している点が特徴的で、震災時に火災が発生した可能性も考えられたが、住居跡の屋根材と考えられる炭化物の出土は無かった。

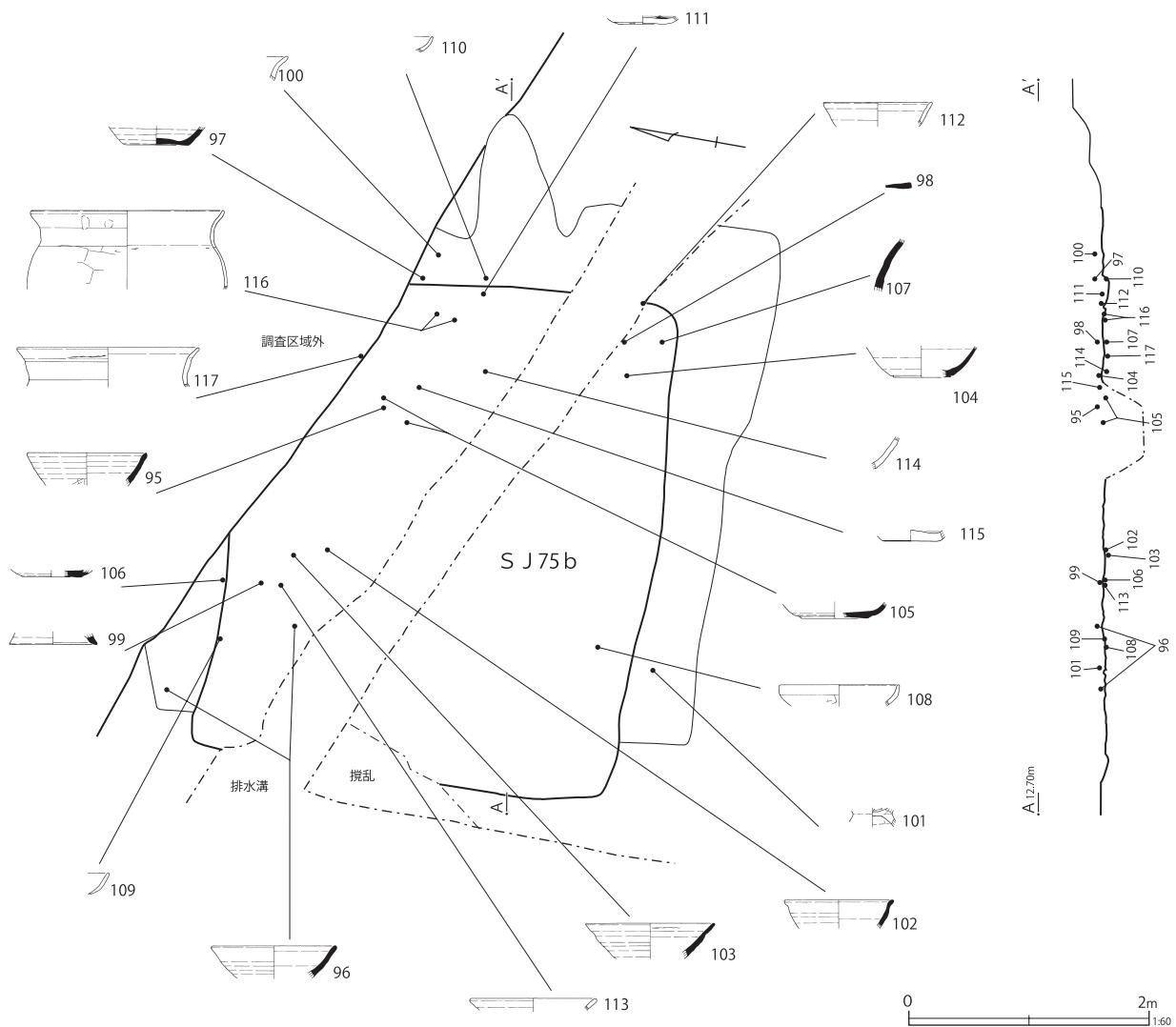
住居跡の西半部と南東角では、部分的に炭化物層上から砂の堆積が確認された。炭化物層の隙間から噴出したものか。

南壁からは、住居跡の外側まで染み出るように広がる砂が検出された。壁溝の外側まで広がり、住居跡床面と同じ高さから検出されたことから、平地式の住居跡であったか、南壁のみで確認されたことから、南壁の外側に何らかの屋外空間



第302図 第75a号住居跡遺物出土状況（2）

SJ 75b 95~117



第303図 第75b号住居跡遺物出土状況

があつた可能性が考えられる。

壁溝は住居跡を全周し、規模は幅0.10~0.23m、深さ0.06~0.08mを測る。壁溝中からは、噴砂の堆積が認められなかつた。

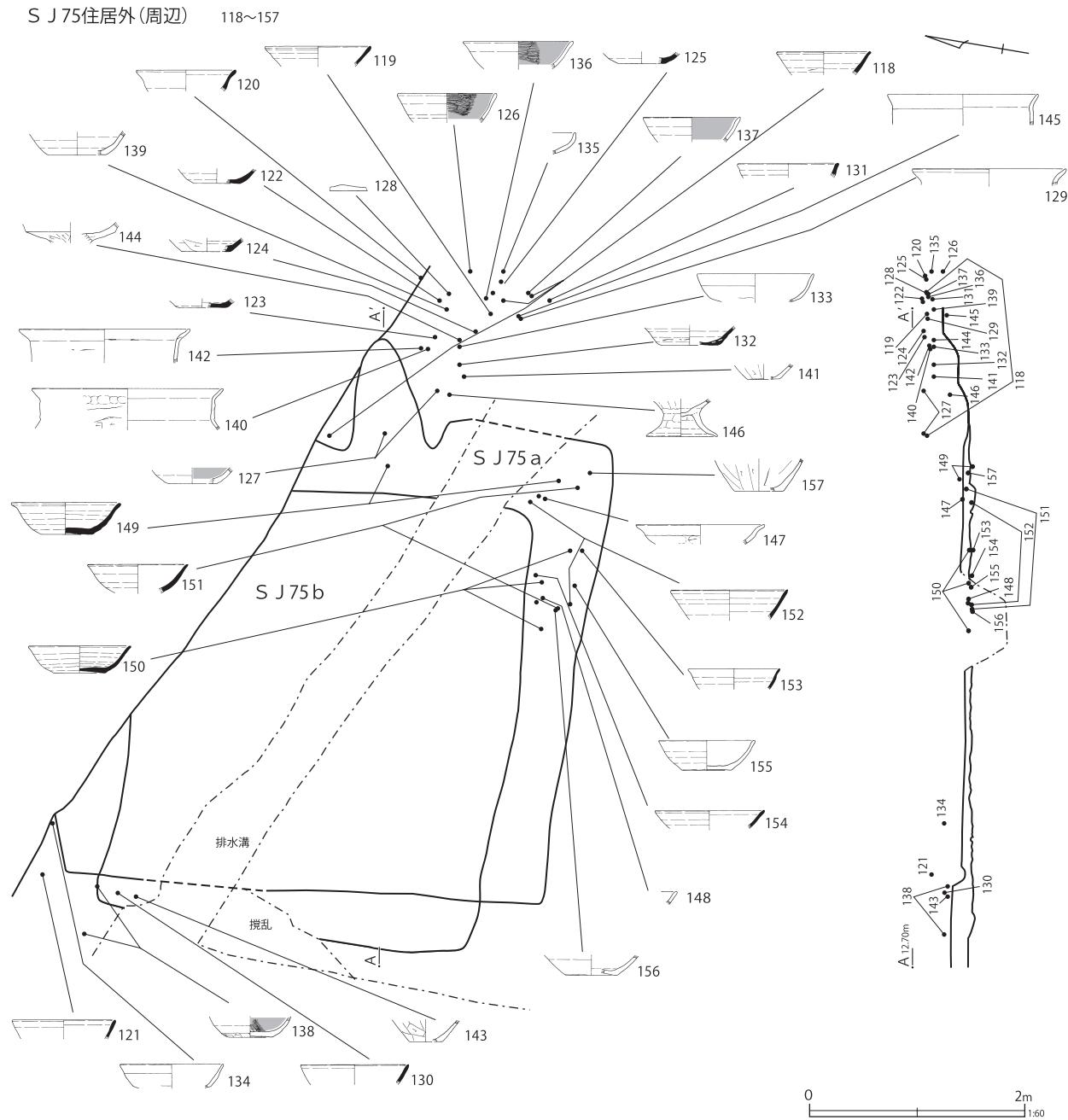
炭化物層の下に砂が堆積し、水気を含んだ状態で人の立ち入りがあれば、足跡が残る可能性があり、考慮した上で床面を観察したが、足跡らしき痕跡は確認できなかつた。このことから震災直後に人の立ち入りは無かつたと考えられる。

床面の炭化物層を外し、砂層を検出した状況が第300図第75b号住居跡②である。砂層は住居跡

の南西角と北側を除いて検出された。砂層中には黒褐色土ブロックが少量含まれ、遺物も住居跡北東部から少量出土した。

第75b号住居跡覆土の中位からは、北東部を中心と炭化物層の広がりが検出された（第300図第75b号住居跡①）。同層下部には埋め戻しに伴うと考えられる17層が水平に堆積する。床を貼り直したように見られるが、遺物の出土が少なかったため、埋め戻し中にカマドの灰が流れ込んだ可能性がある。

遺物は細片も含め1,700点程検出され、このう



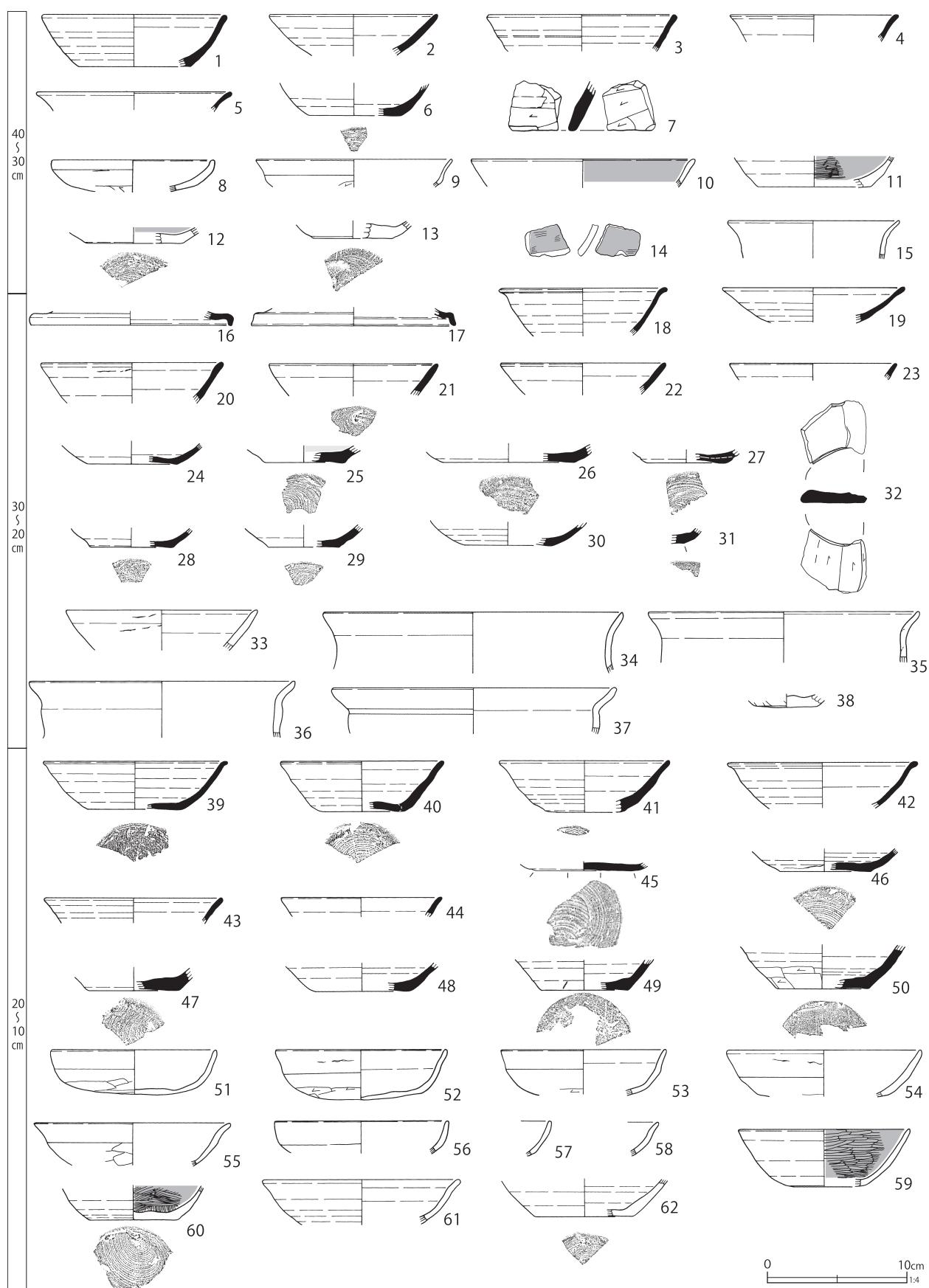
第304図 第75号住居跡外遺物出土状況

ち実測可能な個体は180点であった。須恵器蓋・坏・皿・高台付坏・甕・瓶、土師器坏・皿・甕・小型台付甕・高坏、ロクロ土師器蓋・坏、磨石等が出土した（第305図～第308図1～180）。

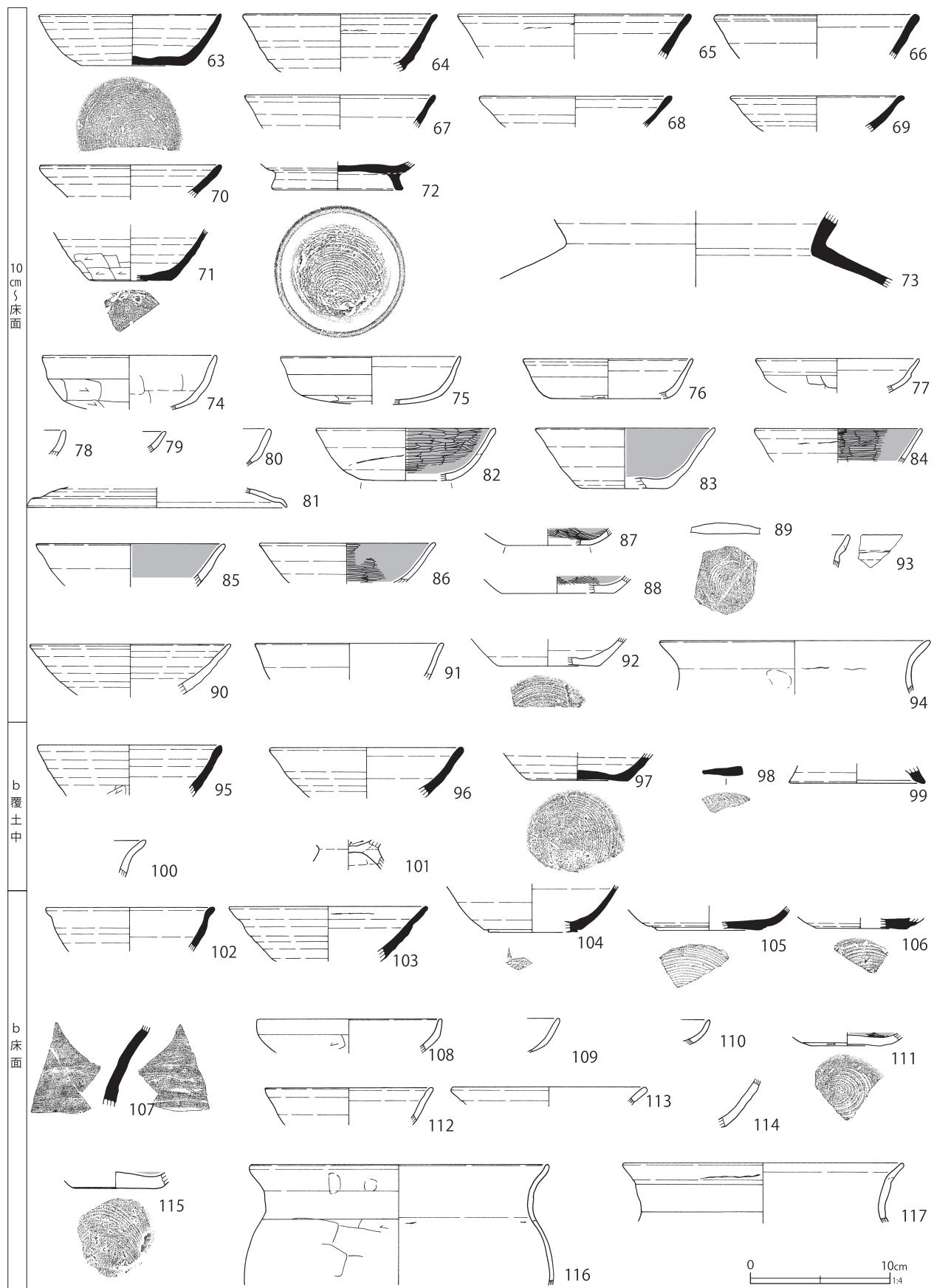
覆土より上層から取り上げを行ったため、本来の住居跡に帰属しない遺物も多く含まれる。そのため、混同を避けるために出土した高さで分けて掲載した。第75a号住居跡は、床面から10cm、

10～20cm、20～30cm、30～40cmの4区分に、第75b号住居跡は床面付近と覆土中の2区分に分類し、高さごとに遺物をまとめた。また、遺構周辺の遺物を全て取り上げたため、最終的に遺構外となった遺物も多い。これらの混同を避けるため、住居跡外出土遺物として、高さごとにまとめた。

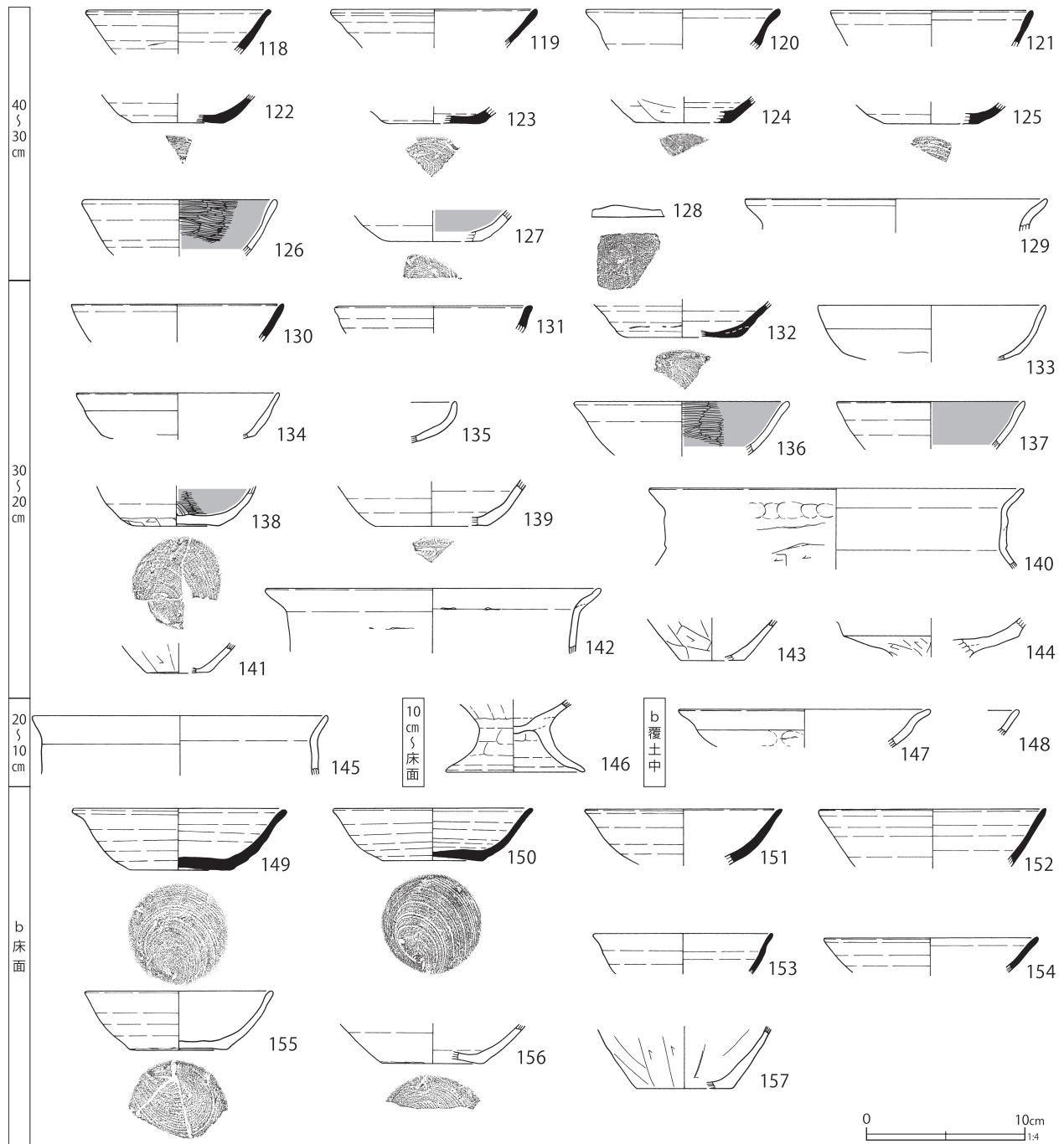
住居内で検出された遺物から見ていくと、上層の40～30cmの高さからは、須恵器坏・甕、土師



第305図 第75号住居跡出土遺物（1）



第306図 第75号住居跡出土遺物（2）



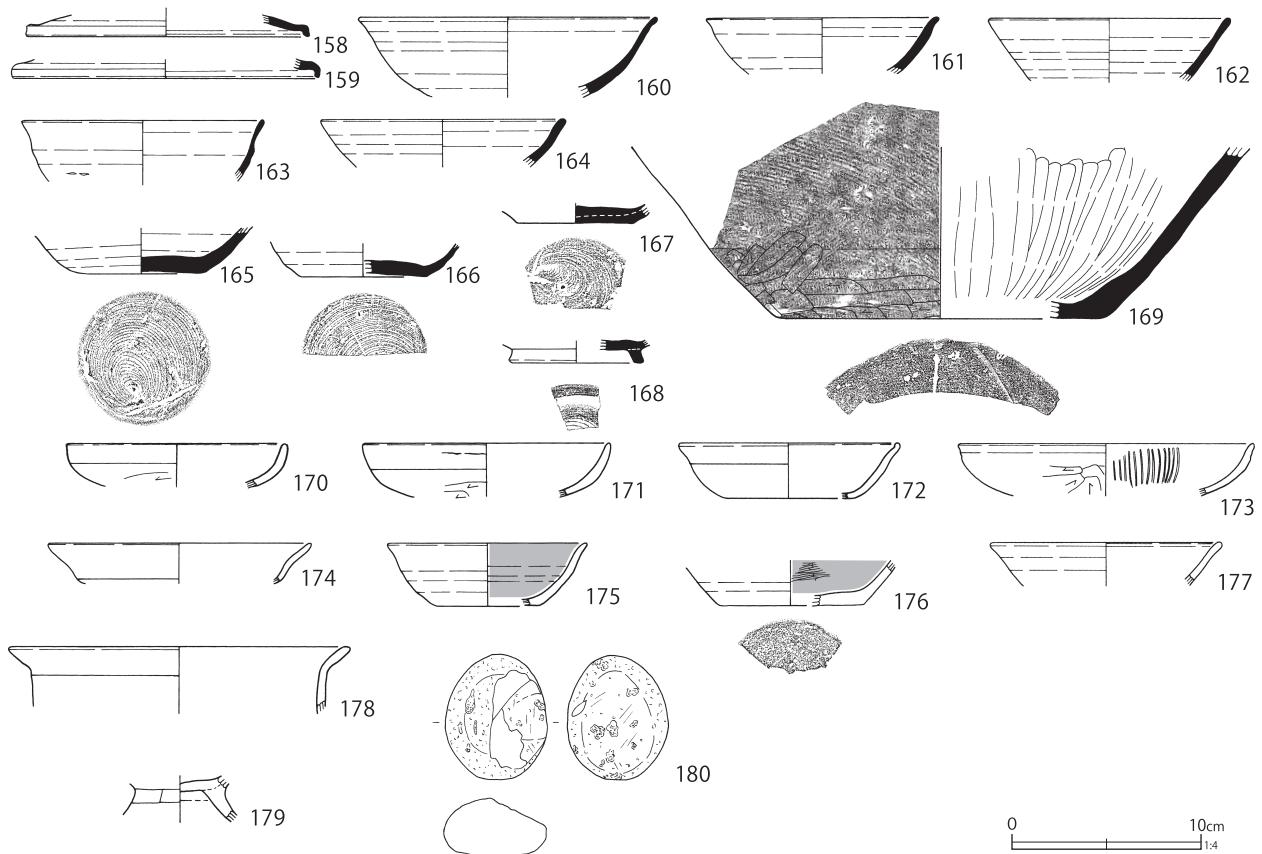
第307図 第75号住居跡外出土遺物（1）

器坏・小型台付甕、ロクロ土師器坏等が出土した（第305図1～15）。いずれも9世紀代の遺物と考えられるが、1はやや古式の特徴を持つ。埋没過程で混入したものか。

30～20cmの高さからは、須恵器蓋・坏・皿・甌、ロクロ土師器坏、土師器甕等が出土した（第305図16～38）。いずれも9世紀代の遺物と考えられ、

25は内面に朱が付着し、パレットとして転用された坏と考えられる。土師器甕は34のみやや古式の形状だが、他は9世紀前半～中葉と考えられる。

20～10cmの高さからは、須恵器坏、土師器坏、ロクロ土師器坏が出土した（第305図39～62）。基本的には9世紀中葉～後半のものを主体とするが、45のように、底部外周回転ヘラケズリ調整



第308図 第75号住居跡外出土遺物（2）

が施される8世紀代の壺も含まれる。

10cm～床面直上からは、須恵器壺・高台付壺・甕、土師器壺・甕、ロクロ土師器蓋・壺等が出土した（第306図63～94）。須恵器壺は、比較的残存率の高い63が床面から出土し、鳩山編年VI期と考えられる。他の土器も、9世紀前半～中葉と考えられるものが多い。ただし、71の三和産の壺のように、9世紀後半まで下ると考えられる遺物も、床面直上から出土している。81はロクロ土師器の蓋で、第3号住居跡から出土したものと器形・胎土ともに類似する。

第75a号住居跡の時期は、床面付近から出土した遺物から、9世紀前半から中葉と考えられる。

第75b号住居跡の覆土中から検出された遺物は少なく、須恵器壺・高台付壺、土師器甕・小型台付甕が出土した（第306図95～101）。残存率が低く詳細は不明だが、9世紀代と考えられる。

床面からは、須恵器壺・甕、土師器壺・甕、ロクロ土師器壺が出土した（第306図102～117）。遺物量は少なく、全形のわかるものは無かった。ただし、116の土師器甕は、カマドが想定される住居跡北東部の焼土付近の床面直上から出土したことから、住居跡に伴うものか、カマドから流出した遺物である可能性がある。器形は定型化した「コ」の字状口縁甕の前段階に当たる。

また、炭化物層下に堆積した噴砂の中からも遺物が数点出土した。図化し得たものは117の土師器甕のみであるが、こちらも「コ」の字状口縁甕の前段階的な様相を持つ甕である。噴砂中から出土したことから、地震が発生した際に住居跡内に在った土器と考えられる。

どちらも全形がわかる資料では無いが、「コ」の字状口縁甕の前段階的な様相を持つ甕が、床面付近から2点出土したため、この時期に使用され

第94表 第75号住居跡出土遺物観察表 (第305~308図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	(12.9)	3.6	(8.0)	I J	15	普通	褐灰	No.370・829 南比企産	
2	須恵器	壺	(12.0)	[2.9]	—	C D I J	20	普通	灰	No.502	
3	須恵器	壺	(13.2)	[2.6]	—	I J K	5	普通	褐灰	No.206 南比企産	
4	須恵器	壺	(11.8)	[1.9]	—	I J	15	普通	灰	No.155 南比企産	
5	須恵器	壺	(13.8)	[1.2]	—	E I	5	普通	黄灰	No.144	
6	須恵器	壺	—	[2.3]	(6.6)	B E I K	5	普通	灰	No.229 末野産か	
7	須恵器	甌	—	[3.5]	—	D E I	—	普通	褐灰	No.444 単孔式か 外面ヘラケズリ調整 内面はナデだが下端のみヘラケズリが施される	
8	土師器	壺	(12.2)	[2.2]	—	C I K	10	普通	橙	No.440 外面煤付着	
9	土師器	壺	(13.9)	[2.0]	—	C I K	5	普通	橙	No.471	
10	ロクロ土師器	壺	(15.8)	[2.0]	—	C I	5	普通	黒褐	No.526 内黒 摩耗により内面の調整は不明瞭	
11	ロクロ土師器	壺	—	[2.2]	(8.2)	B H I K	10	普通	にぶい黄橙	No.311 内黒	
12	ロクロ土師器	壺	—	[1.1]	(7.0)	C E I K	20	普通	にぶい橙	No.450 内黒	
13	ロクロ土師器	壺	—	[1.2]	(5.8)	C I K	20	普通	にぶい橙	No.468	
14	黒色土器	塊か	—	[2.3]	—	I K	5	普通	灰白	No.482 内外面黒色処理	
15	土師器	小型台付甌	(12.0)	[2.7]	—	C I K	10	普通	橙		
16	須恵器	蓋	(14.4)	[0.9]	—	K	10	普通	灰白	No.1187	
17	須恵器	蓋	(14.6)	[1.2]	—	I J K	5	普通	黄灰	No.711 南比企産 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	
18	須恵器	壺	(11.7)	[3.4]	—	I J	10	普通	灰	No.983 南比企産 内面被熱	
19	須恵器	皿	(12.8)	[2.5]	—	I	20	普通	黄灰	No.971	
20	須恵器	壺	(13.0)	[2.7]	—	I J	20	普通	灰	No.635 南比企産	
21	須恵器	壺	(12.0)	[2.3]	—	B I K	5	普通	灰白	No.678 三毳産 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	
22	須恵器	壺	(11.6)	[2.3]	—	I	10	普通	灰	No.759	
23	須恵器	壺	(11.8)	[1.2]	—	I	5	普通	黄灰	No.815 南比企産か 口唇部に降灰	
24	須恵器	壺	—	[1.5]	(6.4)	I K	10	普通	灰	No.790	
25	須恵器	壺	—	[1.2]	(6.0)	E I K	10	普通	灰	No.836 内面全体に朱付着 パレット転用か	
26	須恵器	壺	—	[1.3]	(9.5)	C E I	20	普通	灰オリーブ	No.1014	
27	須恵器	壺	—	[0.9]	(5.6)	C I K	10	普通	灰白	No.792 三毳産	
28	須恵器	壺	—	[1.3]	(5.8)	B H I K	10	普通	褐灰	No.625	
29	須恵器	壺	—	[1.6]	(5.2)	E I K	20	普通	にぶい黄褐	No.621	
30	須恵器	壺	—	[1.7]	(6.2)	C E H I K	15	普通	灰白	No.624	
31	須恵器	壺	—	[1.1]	(6.6)	E I J K	5	普通	灰	No.656 南比企産	
32	須恵器	甌	—	[0.9]	—	D E I K	5	普通	暗灰黄	No.646 多孔式 三和産か	
33	ロクロ土師器	壺	(13.6)	[2.8]	—	C D I	15	普通	灰白	No.658	
34	土師器	甌	(21.4)	[4.4]	—	B C I K	5	普通	にぶい橙	No.847	
35	土師器	甌	(19.2)	[3.6]	—	B H I K	5	普通	にぶい橙	No.830 内外面煤付着	
36	土師器	甌	(18.7)	[4.0]	—	E H I K	5	普通	黄灰	No.1028	
37	土師器	甌	(20.0)	[3.3]	—	B D H K	10	普通	にぶい橙	No.619	
38	土師器	甌	—	[0.9]	4.4	B C H I K	90	普通	橙	No.723	
39	須恵器	壺	(13.0)	[3.4]	(6.6)	B I K	25	普通	褐灰	No.3・12・1062・1125・1294 末野産	
40	須恵器	壺	(11.4)	3.6	(5.5)	E J K	25	普通	灰	No.987 南比企産 外面下端に粘土円柱技法による糸切り痕の重複が認められる	113-9
41	須恵器	壺	(12.0)	3.7	(5.8)	C E I	40	普通	にぶい黄橙	No.1040 口唇部内外縁煤付着	114-1
42	須恵器	壺	(13.2)	[3.4]	—	B J K	20	普通	明褐灰	No.947 南比企産	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
43	須恵器	壺	(12.6)	[2.0]	—	B E I K	5	普通	灰	No.966 末野産か 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	
44	須恵器	壺	(11.4)	[1.7]	—	I K	5	普通	灰白	No.782	
45	須恵器	壺	—	[0.7]	(7.0)	I J	30	普通	灰白	No.1003 南北企産	
46	須恵器	壺	—	[1.6]	(6.4)	C I K	20	普通	灰	No.945	
47	須恵器	壺	—	[1.6]	(6.4)	C I	5	普通	褐灰	No.1036	
48	須恵器	壺	—	[1.9]	(6.8)	B I J K	20	普通	黄灰	No.964・992 南北企産 外面被熱	
49	須恵器	壺	—	[2.1]	(6.2)	D I K	30	普通	灰白	No.845 三和産 体部外面下端手持ちヘラケズリ後ロクロナデが施される	
50	須恵器	壺	—	[3.1]	(6.4)	I	65	普通	灰白	No.845・856・955 三和産	
51	土師器	壺	11.5	3.1	—	A C I K	75	普通	にぶい橙	No.953・1032・1034・1085・1086・1042・1315	114-2
52	土師器	壺	12.0	3.6	—	B C E H K M	50	普通	橙	No.904・1004・1009・1218・1219	114-3
53	土師器	壺	(11.5)	[3.2]	—	B I K	10	普通	にぶい橙	No.932	
54	土師器	壺	(13.7)	[3.3]	—	B C D E I	25	普通	橙	No.1214・1217	
55	土師器	壺	(13.8)	[3.0]	—	C D E I K	10	普通	にぶい橙	No.967	
56	土師器	壺	(12.2)	[2.3]	—	C I K	5	普通	にぶい黄橙	No.897	
57	土師器	壺	—	[2.6]	—	C D I K	5	普通	にぶい橙	No.944	
58	土師器	壺	—	[2.8]	—	C D I K	5	普通	にぶい橙	No.1041	
59	口クロ土師器	壺	(12.0)	4.1	(5.5)	E I K	20	普通	にぶい褐	No.920 内黒	
60	口クロ土師器	壺	—	[2.4]	(6.2)	C D I K	30	普通	にぶい橙	No.919 内黒	
61	口クロ土師器	壺	(13.8)	[3.2]	—	E I K	10	普通	にぶい橙	No.1056	
62	口クロ土師器	壺	—	[2.7]	(7.0)	C E I K	10	普通	灰白	No.1270	
63	須恵器	壺	(12.8)	3.7	7.4	C H I J K	50	普通	灰白	No.22 南北企産	114-4
64	須恵器	壺	(13.6)	[4.1]	—	E I K	5	普通	灰白	No.1058	
65	須恵器	壺	(16.4)	[3.2]	—	D I K	10	普通	灰	No.29 東金子産か	
66	須恵器	壺	(14.0)	[3.1]	—	B I	10	普通	にぶい橙	No.998	
67	須恵器	壺	(13.4)	[2.3]	—	C D I K	5	普通	灰白	No.997 全体被熱	
68	須恵器	壺	(13.6)	[2.2]	—	B I K	5	普通	灰白	No.1020	
69	須恵器	壺	(12.2)	[2.5]	—	B I K	15	普通	にぶい橙	No.990	
70	須恵器	壺	(12.8)	[2.3]	—	C E I K	5	普通	灰白	No.1006 内面煤付着	
71	須恵器	壺	—	[3.7]	(6.0)	D I K	20	普通	灰白	No.1052 三和産 外面煤付着	114-5
72	須恵器	高台付壺	—	[2.0]	9.3	I K	80	普通	灰白	No.1075 三毳産か 全体被熱	114-6
73	須恵器	甕	—	[5.4]	—	I K	10	良好	黄灰	No.1011 外面降灰し自然釉状になっている	
74	土師器	壺	(12.2)	[3.8]	—	C E I K	20	普通	橙	No.985	
75	土師器	壺	(12.7)	[3.4]	—	C D I K	40	普通	にぶい赤褐	No.1027・1264・1267・1269・1272・1291 外面煤付着	114-7
76	土師器	壺	(12.0)	[2.8]	—	B C I K	15	普通	橙	No.711 南北企産 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	
77	土師器	壺	(11.4)	[2.4]	—	B I K	20	普通	にぶい橙	No.85	
78	土師器	壺	—	[1.8]	—	C E H I K	5	普通	明赤褐	No.1118	
79	土師器	壺	—	[1.5]	—	C I K	5	普通	にぶい褐	No.1091	
80	土師器	壺	(11.5)	[2.6]	—	C D K	5	普通	にぶい橙	No.1015	
81	口クロ土師器	蓋	(18.5)	[1.4]	—	D H I K	10	普通	橙	No.343・1021	
82	口クロ土師器	壺	(12.6)	3.7	(6.3)	B C I K	30	普通	浅黄橙	No.35・39 内黒	
83	口クロ土師器	壺	(12.6)	4.3	(6.0)	C H I K	25	普通	にぶい橙	No.32 内黒 内面剥離、摩耗が激しく調整は不明	
84	口クロ土師器	壺	(11.8)	[2.4]	—	B I	10	普通	にぶい橙	No.42 内黒	
85	口クロ土師器	壺	(13.2)	[3.0]	—	C E I K	5	普通	にぶい橙	No.1282 内黒	
86	口クロ土師器	壺	(12.4)	[2.8]	—	C E I K	10	普通	褐灰	No.40・49 内黒	
87	口クロ土師器	壺	—	[1.2]	(6.0)	B I	25	普通	にぶい橙	No.8 内黒	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
88	ロクロ土師器	壺	—	[1.2]	(8.0)	B I	20	普通	黒褐	No.81 内黒	
89	ロクロ土師器	壺	—	[0.8]	—	B H I K	—	普通	にぶい橙	No.41 内黒	
90	ロクロ土師器	壺	(14.2)	[3.6]	—	C E H I K	10	普通	橙	No.69	
91	ロクロ土師器	壺	(13.2)	[2.6]	—	C I K	5	普通	にぶい黄橙	No.1131	
92	ロクロ土師器	壺	—	[1.9]	(7.0)	C E H I K	15	普通	橙	No.25	
93	土師器	甕	—	[2.3]	—	B C E I K	5	普通	橙	No.1120	
94	土師器	甕	(19.2)	[3.8]	—	B H I K	10	普通	橙	No.21	
95	須恵器	壺	(12.8)	[3.6]	—	B I	25	普通	灰白	No.1310 三和産 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	
96	須恵器	壺	(13.6)	[3.6]	—	E I K	15	普通	灰白	No.1332・1347	
97	須恵器	壺	—	[2.0]	7.0	C I	35	普通	灰	No.1301	
98	須恵器	壺	—	[0.7]	(6.0)	H I K	5	普通	灰	No.1380 底部外周回転ヘラケズリ	
99	須恵器	高台付壺	—	[1.2]	(9.6)	K	5	普通	灰白	No.1340 三甕産 破断面煤付着	
100	土師器	甕	(16.0)	[2.6]	—	C I K	5	普通	にぶい橙	No.1300	
101	土師器	小型台付甕	—	[2.1]	—	C I K	45	普通	橙	No.1589	
102	須恵器	壺	(12.2)	[3.1]	—	C E I J K	5	普通	灰	No.1525 南比企産	
103	須恵器	壺	(13.9)	[3.9]	—	H I K	10	普通	橙	No.1620 三甕産か 酸化焰焼成	
104	須恵器	壺	—	[3.4]	(6.4)	B H K	25	普通	灰白	No.1383	
105	須恵器	壺	—	[1.7]	(7.4)	I K	20	普通	灰白	No.1538・1541 外面煤付着	
106	須恵器	壺	—	[0.7]	(6.6)	C E I K	5	普通	灰白	No.1536	
107	須恵器	甕	—	[6.0]	—	E J K	5	普通	灰	No.1374 南比企産 内面降灰	
108	土師器	壺	(13.0)	[2.4]	—	C E I K	5	普通	橙	No.1584	
109	土師器	壺	—	[2.4]	—	C I K	5	普通	にぶい褐	No.1326	
110	土師器	壺	—	[1.8]	—	B C I K	5	普通	にぶい橙	No.1614	
111	ロクロ土師器	壺	—	[0.9]	(6.6)	C H I K	30	普通	にぶい赤褐	No.1613 内黒	
112	土師器	壺	(11.9)	[2.6]	—	C H I K	10	普通	灰褐	No.1470	
113	土師器	壺	(13.5)	[1.3]	—	C H I K	10	普通	にぶい褐	No.1532	
114	土師器	壺	—	[3.5]	—	C H I K	5	普通	にぶい橙	No.1552 内外面煤付着	
115	土師器	壺	—	[1.2]	6.0	C H I K	80	普通	橙	No.1546 内黒	
116	土師器	甕	(21.2)	[8.6]	—	C H I K	20	普通	橙	No.1609・1610	114-8
117	土師器	甕	(19.9)	[4.3]	—	C E I K	10	普通	にぶい褐	No.1645	
118	須恵器	壺	(11.4)	[2.8]	—	I J K	10	普通	灰	No.250・316・413 南比企産 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	
119	須恵器	壺	(12.8)	[2.4]	—	I K	15	普通	にぶい黄橙	No.253 三甕産か	
120	須恵器	壺	(12.0)	[2.5]	—	B I K	5	普通	灰	No.281 末野産	
121	須恵器	壺	(12.8)	[2.3]	—	I K	5	普通	褐灰	No.559 東金子産か	
122	須恵器	壺	—	[1.8]	(5.8)	I J K	5	普通	黄灰	No.115 南比企産	
123	須恵器	壺	—	[1.0]	(6.0)	D I K	30	普通	灰白	No.426 三甕産	
124	須恵器	壺	—	[1.6]	(6.0)	D I	25	普通	褐灰	No.109 三和産	
125	須恵器	壺	—	[1.3]	(6.0)	B I	10	普通	灰	No.417 末野産	
126	ロクロ土師器	壺	(12.0)	[3.5]	—	C H I K	10	普通	橙	No.737 内黒	
127	ロクロ土師器	壺	—	[1.9]	(6.0)	B I	20	普通	にぶい橙	No.131・145 内黒 内面の調整は不明瞭	
128	土師器	壺	—	[0.7]	—	C H I K	—	普通	にぶい褐	No.268	
129	土師器	甕	(18.6)	[2.1]	—	B C H I K	10	普通	にぶい黄橙	No.415	
130	須恵器	壺	(13.4)	[2.4]	—	I J K	5	普通	褐灰	No.875 南比企産	
131	須恵器	壺	(12.6)	[1.8]	—	I J K	5	普通	黄灰	No.569 南比企産	
132	須恵器	壺	—	[2.3]	(7.0)	C I	10	普通	灰	No.601	
133	土師器	壺	(14.2)	[3.5]	—	C I K	10	普通	にぶい橙	No.590 外面煤付着	
134	土師器	壺	(12.5)	[2.8]	—	B C I K	5	普通	にぶい橙	No.863	
135	土師器	壺	(12.2)	[2.6]	—	C E I K	10	普通	にぶい橙	No.574	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
136	口クロ土師器	壺	(13.2)	[3.4]	—	C H I K	10	普通	にぶい橙	No.578 内黒	
137	口クロ土師器	壺	(12.6)	[2.6]	—	C H I K	5	普通	橙	No.571 内黒 摩耗により内面の調整は不明瞭	
138	口クロ土師器	壺	—	[2.5]	5.5	C I K	65	普通	にぶい橙	No.573・871 内黒	
139	口クロ土師器	壺	—	[2.8]	(8.0)	E H I K	20	普通	にぶい黄橙	No.584	
140	土師器	甕	(23.6)	[5.1]	—	B C H I K	10	普通	にぶい橙	No.594	
141	土師器	甕	—	[1.8]	(4.0)	B C I K	20	普通	にぶい褐	No.600 内面煤付着	
142	土師器	甕	(20.8)	[4.1]	—	B C I K	10	普通	にぶい橙	No.596	
143	土師器	甕	—	[2.6]	(4.0)	B I K	20	普通	橙	No.877	
144	土師器	高壺	—	[2.4]	—	C E H I K	20	普通	にぶい橙	No.589	
145	土師器	甕	(18.4)	[3.7]	—	B E H I K	10	普通	橙	No.741	
146	土師器	小型台付甕	—	[4.5]	(18.6)	B D K	70	普通	にぶい橙	No.895 外面煤付着	
147	土師器	皿	(15.6)	[2.4]	—	C I K	10	普通	橙	No.1364	
148	土師器	壺	—	[1.5]	—	C D H I K	5	普通	橙	No.1371	
149	須恵器	壺	(13.2)	3.8	6.2	D E F I J M	80	普通	灰白	No.68・1651 三甕産	114-9
150	須恵器	壺	12.4	3.3	6.2	B E I K	75	普通	灰白	No.1370・1392・1570 末野産	114-10
151	須恵器	壺	(12.3)	[3.5]	—	E I J	10	普通	褐灰	No.1465・1576・1579 東金子産か 一部半還元により赤みを帯びる	
152	須恵器	壺	(14.2)	[3.6]	—	C E K	5	普通	灰白	No.1468・1473	
153	須恵器	壺	(11.2)	[2.5]	—	I J K	5	普通	褐灰	No.1591 南比企産 口唇部に降灰有り	
154	須恵器	壺	(13.6)	[2.1]	—	I J	5	普通	灰	No.1575 南比企産	
155	口クロ土師器	壺	(11.6)	3.7	(6.2)	C D E H I	40	普通	橙	No.1573	
156	口クロ土師器	壺	—	[2.5]	(6.4)	E H I K	30	普通	にぶい橙	No.1373 三甕産か 内外面煤付着 酸化焰焼成	
157	土師器	甕	—	[3.9]	(6.0)	E H I	25	普通	にぶい橙	No.1459	
158	須恵器	蓋	(14.8)	[1.2]	—	I J K	5	普通	褐灰	南比企産 口唇部内外縁降灰	
159	須恵器	蓋	(16.0)	[0.9]	—	I K	5	普通	灰白	三甕産か	
160	須恵器	壺	(15.6)	[4.2]	—	B I	25	普通	灰	末野産	
161	須恵器	壺	(12.0)	[2.6]	—	I K	5	普通	灰		
162	須恵器	壺	(12.6)	[3.3]	—	E I K	10	普通	灰	三甕産か	
163	須恵器	壺	(12.6)	[3.2]	—	E I J K	5	普通	黄灰	南比企産 外面降灰	
164	須恵器	壺	(12.8)	[2.5]	—	D J K	10	普通	黄灰	南比企産	
165	須恵器	壺	—	[2.4]	6.9	E I K	85	普通	明赤褐	三甕産 外面一部被熱により赤色化している	115-1
166	須恵器	壺	—	[1.7]	(6.6)	E I J K	40	良好	灰	南比企産 ヘラ記号有り 火襷痕有り 内面の一部にわずかに降灰あり	115-2
167	須恵器	壺	—	[0.9]	(6.4)	C E H I K	70	普通	にぶい橙	三甕産か	
168	須恵器	高台付壺	—	[1.1]	(6.8)	E I K	20	普通	黄灰	南比企産	
169	須恵器	甕	—	[9.0]	(16.6)	E I K	5	普通	灰褐		115-3
170	土師器	壺	(12.2)	[2.2]	—	C I K	10	普通	にぶい黄橙		
171	土師器	壺	(12.8)	[2.8]	—	B C E H I K	10	普通	にぶい橙		
172	土師器	壺	(11.4)	[2.9]	—	C E I K	20	普通	橙		
173	土師器	壺	(15.4)	[2.7]	—	C H I K	10	普通	橙	暗文壺	
174	土師器	皿か	(13.6)	[2.1]	—	B C I K	10	普通	橙		
175	口クロ土師器	壺	(10.4)	3.3	(5.7)	C H I K	15	普通	にぶい黄橙	内黒 摩耗により内面調整不明瞭	
176	口クロ土師器	壺	—	[2.3]	(7.6)	E H I K	20	普通	にぶい黄橙	内黒 外面黒斑有り	
177	口クロ土師器	壺	(12.0)	[2.3]	—	C I K	10	普通	灰		
178	土師器	甕	(17.4)	[3.5]	—	C E H I K	10	普通	橙		
179	土師器	台付甕	—	[2.4]	—	A C E H I K	70	普通	にぶい橙		
180	石製品	磨石	長さ6.5 幅5.4 厚さ3.0 重さ45.6g							No.1591 角閃石安山岩 多孔質 自然面遺存 使用面2	127-3

ていた甕である可能性が高い。

第75 b 号住居跡の時期は、須恵器坏や土師器甕の形状から9世紀前半と考えられる。この時代に埼玉県北部に影響を与えた地震としては、『類聚国史』に記載された弘仁地震があり、本住居跡は地震が発生した弘仁九（818）年7月に、上屋があった住居跡と考えられる。

住居跡外から出土した遺物は、須恵器坏、土師器坏・皿・甕・小型台付甕・高坏、ロクロ土師器坏等がある（第307図118～157）。住居跡と時期が近い遺物が、住居跡の床面と同じ高さから検出されている点が注目される。壁溝中から噴砂が検出されなかつたため、おそらく壁状の構造物が壁溝の位置に廻っていたと考えられる。ただし、壁溝の外側に噴砂が広がる状況が捉えられたことから、壁外に何らかの空間があつた可能性がある。壁外から検出された同時期の遺物は、壁空間に伴うものか。また149は第75 b 号住居跡の床面と同じ高さから出土しているが、9世紀後半の遺物と考えられる。これは上層の遺物と接合関係にあるため、検出はできなかつたが、9世紀後半の別遺構が重複していた可能性がある。

一括で取り上げられた遺物は、須恵器蓋・坏・高台付坏・甕、土師器坏・皿・甕・小型台付甕、ロクロ土師器坏、磨石等がある（第308図158～180）。基本的に9世紀代の遺物と考えられる。

また、第75 b 号住居跡は、住居跡内で液状化現象が発生したにも関わらず出土遺物があまり無く、後から土器を持ち出した形跡も認められなかつた。弘仁九年の時点で既に廢屋になつてゐたか、或いは地震が発生した7月頃に、人が住んでいなかつた可能性も考えられる。

以上の点から、噴砂の発生は弘仁九年の事と考えられるが、床面や砂層中から残存率の高い遺物が検出されず、カマドも検出できなかつたため、住居跡に確実に伴う遺物は認められなかつた。

第77号住居跡（第309・310図）

第4次調査におけるⅢ区の中央やや西寄り、M・L-22グリッドに位置する。第73号住居跡、第152号溝跡と重複し、本遺構が新しい。遺構の東側はプランが不明瞭であったため、平面形態は不明である。

規模は、残存部で長軸5.10m、短軸4.87m、深さ0.15mを測り、主軸方位はN-10°-Wを指す。覆土は水平堆積であった。カマドは北壁に設けられ、住居跡内からはピットが2基、床下土壙と考えられる土壙が1基検出された。

カマドは袖が0.53m程住居跡内に張り出し、燃焼部は平坦で、奥壁から煙道部に向つて急峻に立ち上がる構造を持つ。規模は全長1.35m、幅0.50m、深さ0.15mを測る。覆土は焼土と炭化物を多く含む層が堆積していたが、明瞭な焼土層や炭化物層は検出されなかつた。

ピットは2基検出された。平面形態はどちらも橢円形で、規模はピット1が長径0.52m、短径0.45m、深さ0.25mを測る。ピット2は長径0.49m、短径0.36m、深さ0.30mを測る。配置から柱穴の可能性があるが、どちらも掘り込みが浅かつた。

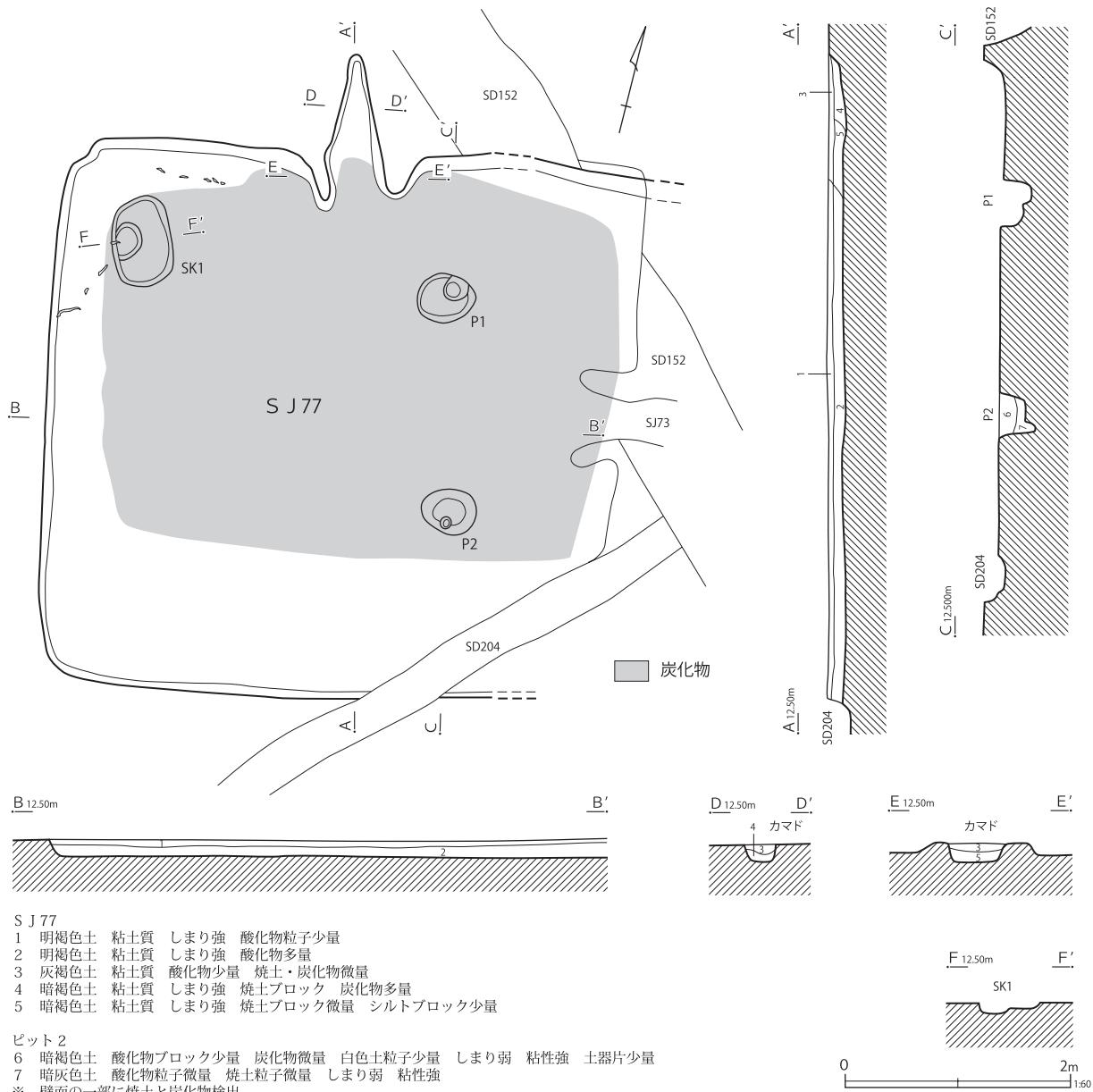
北西角からは、床下土壙の可能性がある土壙が検出された。平面形態は隅丸方形で、一部ピット状に一段下がる。

第73号住居跡の覆土掘り下げ途中に検出されたため、本住居跡の遺物の一部は第73号住居跡に混入している可能性がある。遺物は土師器坏・器種不明品等が出土した（第311図1～3）。

1、2は坏である。口縁部外面ヨコナデの下までヘラケズリが施される。

3は器種不明品である。内面にはナデのような痕跡が認められるが、外表面は摩耗、剥離が激しくザラメ状になる。口縁部も歪みが強く、外表面は凹凸が激しい。

遺物が少ないため時期は判然としないが、重複関係から恐らく8世紀前半の遺構と考えられる。



第309図 第77号住居跡

第78号住居跡（第312・313図）

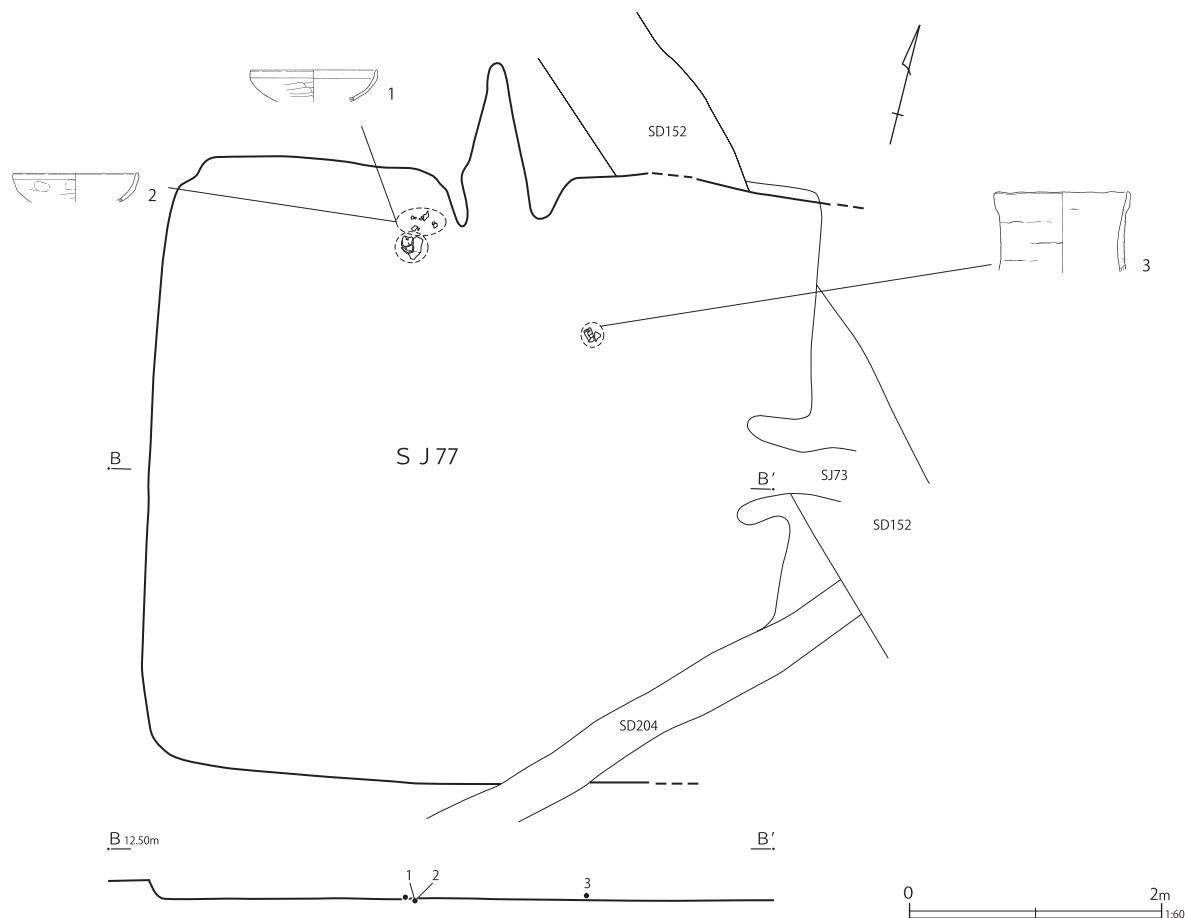
第4次調査におけるⅢ区の中央部、N-23グリッドに位置し、第152号溝跡と重複する。

平面形態は東西にやや長い長方形で、規模は長軸3.76m、短軸3.10m、深さ0.20mを測り、主軸方位はN-45°-Eを指す。覆土はレンズ状に堆積し、上層には焼土粒子や炭化物を含み、床面付近には白色土ブロックが多く含まれ、床面直上からは部分的に炭化物層が検出された。カマドは北壁東寄りに設けられる。

カマドは袖が無く、壁面を大きく掘り込んで構築される。燃焼部は平坦で、奥壁から煙道部に向って急峻に立ち上がる構造を持つ。規模は全長0.75m、幅0.45m、深さ0.14mを測る。覆土は全層に焼土が多く含まれていたが、明瞭な焼土層や炭化物層は検出されなかった。

壁溝、ピット等は検出されなかった。

遺物は住居跡全体に散在し、須恵器壺・高台付壺・塊、灰釉陶器長頸瓶、土師器壺・甕・小型台付甕、ロクロ土師器壺、磨石等が出土した（第



第310図 第77号住居跡遺物出土状況

314図1~23)。

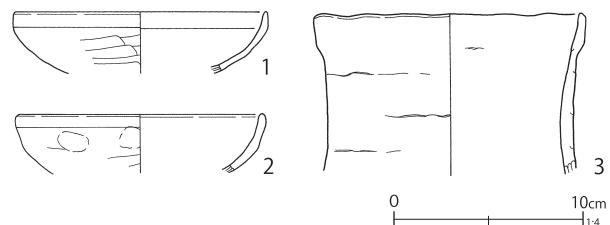
1~8は須恵器である。1~6は壺で、南比企や三和等の製品を含む。1は三和産の壺で、歪みが強い。器形から9世紀後半段階と考えられる。7は高台付壺で、底部のみ残存する。8は塊で、底部に回転ヘラケズリ調整が施される。

10、11は土師器の壺である。10は北武藏型壺で、丸みが強く、口縁部外面ヨコナデの下に無調整帶を持つ。11は暗文壺である。器形は浅く扁平になる。

12~17はロクロ土師器である。12~16は内黒

の壺で、いずれも胎土に角閃石を含むことから、利根川流域の製品と考えられる。17は壺で、やや大型になる。

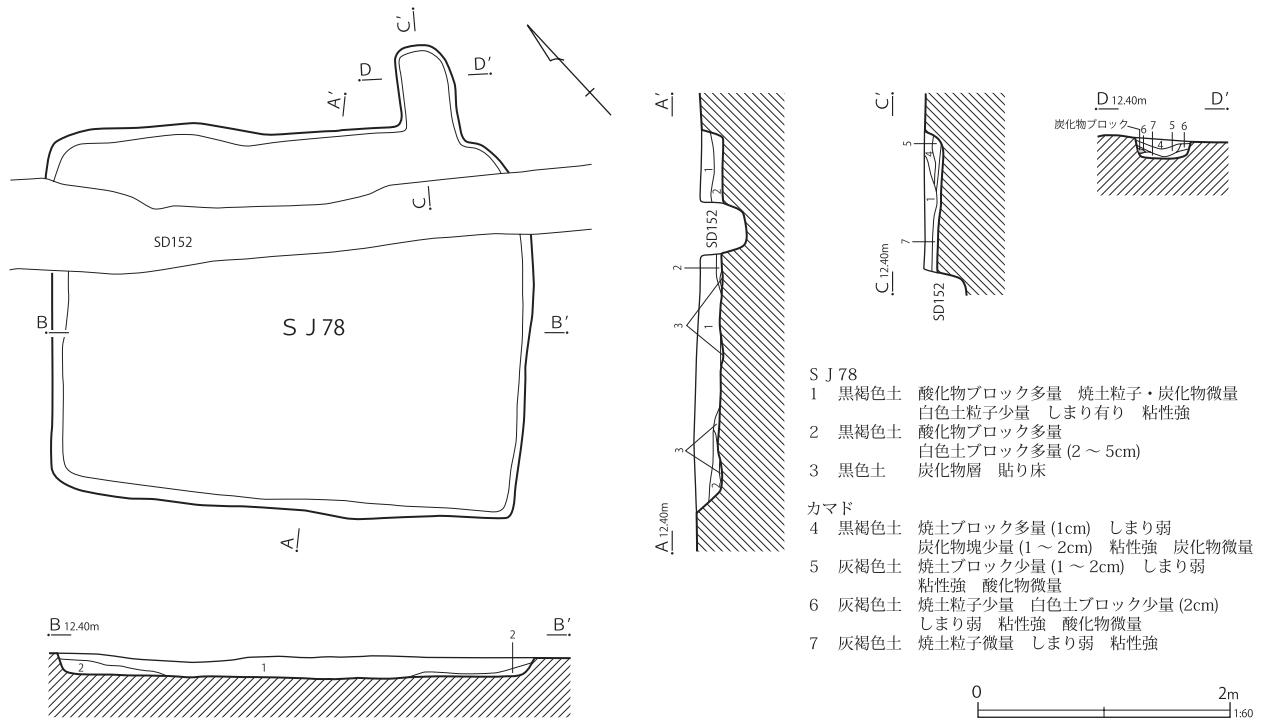
18~22は土師器の甕である。18、19は「コ」



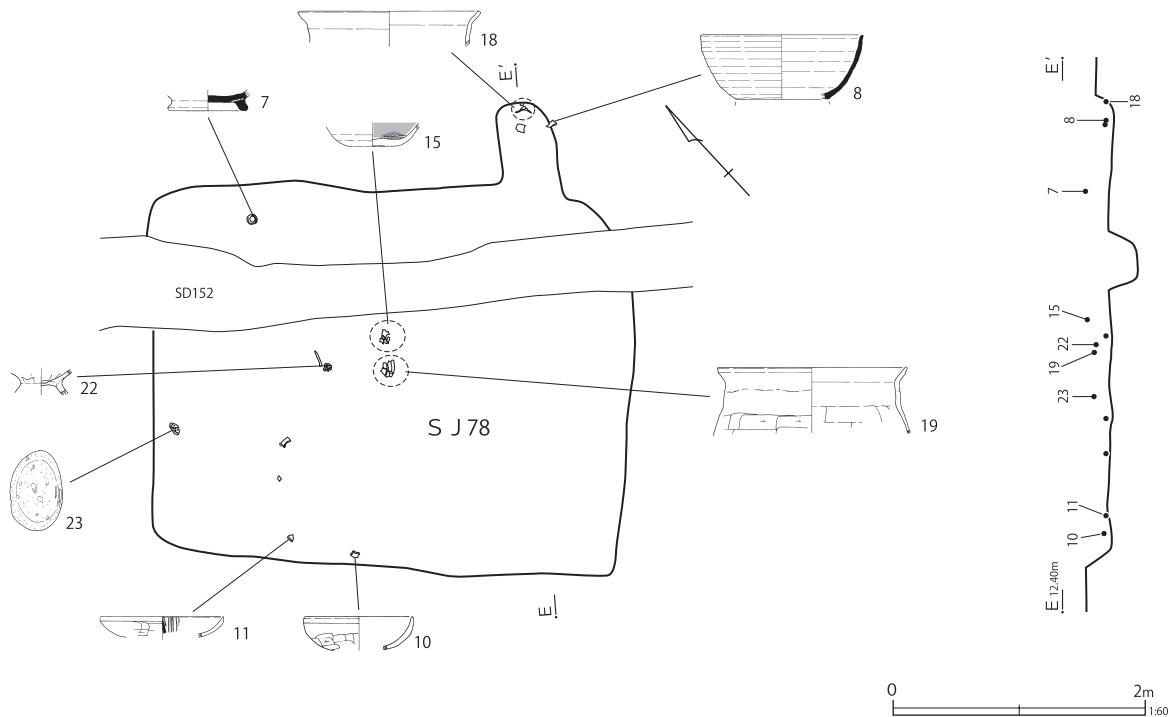
第311図 第77号住居跡出土遺物

第95表 第77号住居跡出土遺物観察表(第311図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(13.1)	[3.2]	—	C E I K	10	普通	橙	No.7	
2	土師器	壺	(12.8)	[3.1]	—	B E I K	15	普通	にぶい橙	No.7	
3	土師器	器種不明	(13.6)	[8.5]	—	C E H I J K	25	普通	にぶい赤褐	No.4	115-4



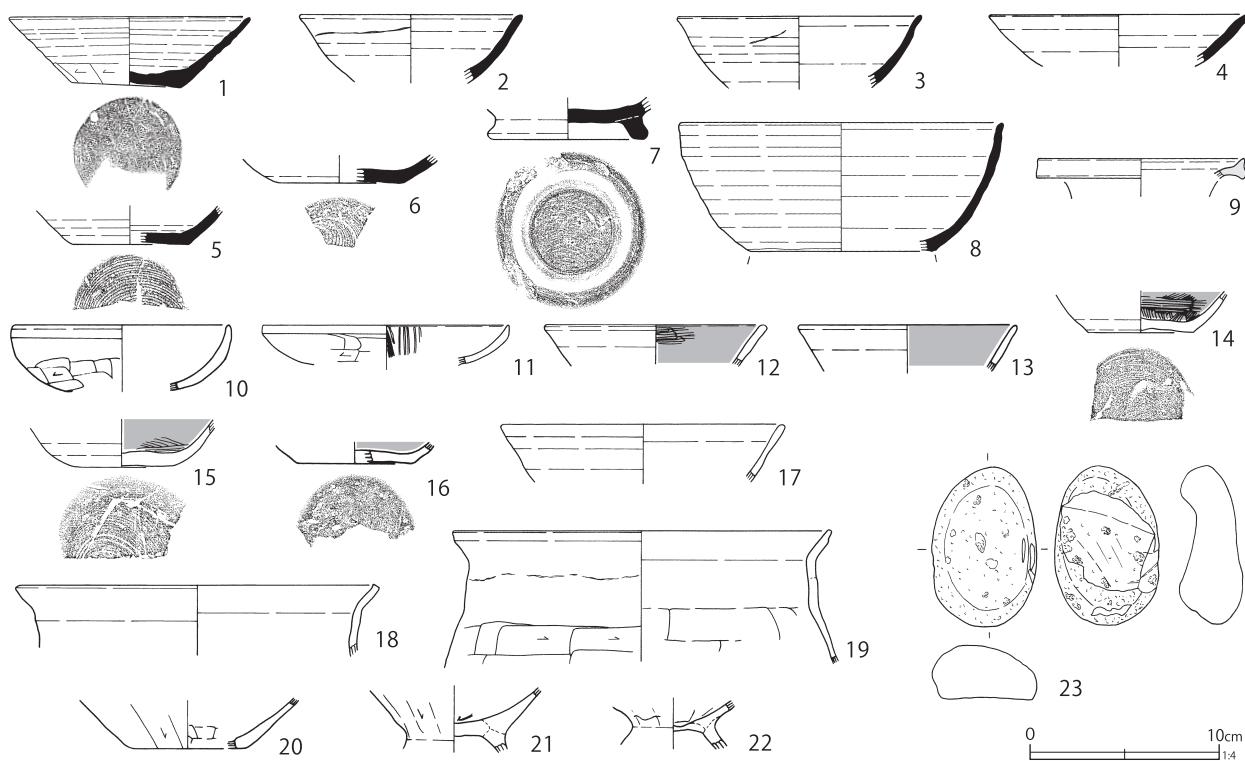
第312図 第78号住居跡



第313図 第78号住居跡遺物出土状況

の字状口縁甕で、19は定型化した段階、18は頸部がやや短くなる段階のものである。21、22は小型台付甕である。

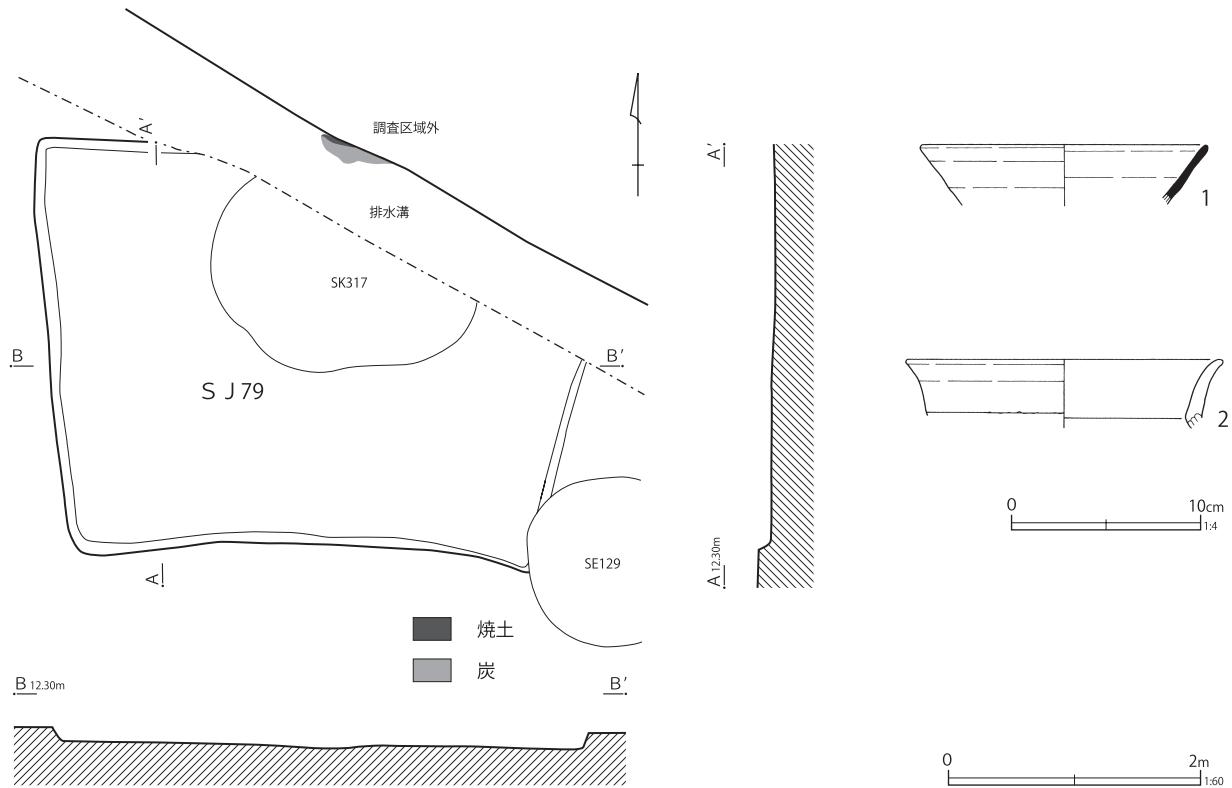
23は角閃石安山岩製の磨石である。遺物の時期は、須恵器壺や土師器甕の器形から、9世紀中葉～後半と推察される。



第314図 第78号住居跡出土遺物

第96表 第78号住居跡出土遺物観察表（第314図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	12.6	3.6	5.8	D E I K	70	普通	灰	三和産 歪み有り	115-5
2	須恵器	壺	(11.5)	[3.6]	—	B I J K	25	普通	灰	南比企産	
3	須恵器	壺	(12.8)	[3.8]	—	I J K	10	普通	灰白	南比企産 内面火襷痕有り	
4	須恵器	壺	(13.6)	[2.7]	—	I K	25	普通	灰白	口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	
5	須恵器	壺	—	[2.0]	(6.0)	E I J	40	普通	灰	南比企産	
6	須恵器	壺	—	[1.4]	(6.4)	C I K	20	普通	灰白		
7	須恵器	高台付壺	—	[2.1]	7.9	D I	90	普通	灰	No.1	115-6
8	須恵器	塊	(17.0)	[7.3]	(9.6)	I J K	10	良好	褐灰	カマドNo.3 南比企産	115-7
9	灰釉陶器	長頸瓶	(10.7)	[1.0]	—	I K	5	普通	灰白	猿投産か	
10	土師器	壺	(11.2)	[3.4]	—	C E I	25	普通	にぶい褐	No.10	
11	土師器	壺	(13.0)	[2.0]	—	C I K	5	普通	橙	No.9 暗文	
12	ロクロ土師器	壺	(11.6)	[2.1]	—	C I K	5	普通	褐灰	内黒	
13	ロクロ土師器	壺	(11.4)	[2.4]	—	B C I	15	普通	明赤褐	内黒	
14	ロクロ土師器	壺	—	[2.1]	(5.6)	C H I K	30	普通	にぶい橙	内黒	
15	ロクロ土師器	壺	—	[2.4]	(5.8)	C I	40	普通	にぶい橙	No.5 内黒 内外面共に摩耗	115-8
16	ロクロ土師器	壺	—	[1.1]	(6.0)	B C I	45	普通	浅黄橙	内黒 内外面共に摩耗	
17	ロクロ土師器	壺	(14.8)	[3.1]	—	C I K	20	普通	浅黄橙		
18	土師器	甕	(18.6)	[3.8]	—	B C I	25	普通	にぶい橙	カマドNo.1	
19	土師器	甕	(20.0)	[6.9]	—	C H I K	30	普通	橙	No.6	
20	土師器	甕	—	[2.5]	(6.0)	E I K	15	普通	橙	外面煤付着	
21	土師器	小型台付甕	—	[3.4]	—	B D E H I K	55	普通	明赤褐	No.3	
22	土師器	小型台付甕	—	[2.6]	—	C H I K	75	普通	橙		
23	石製品	磨石	長さ8.3	幅5.5	厚さ3.4	—	重さ65.7g	—	—	No.2 角閃石安山岩 多孔質 自然面 遺存 使用面1	127-3



第315図 第79号住居跡・出土遺物

第97表 第79号住居跡出土遺物観察表（第315図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	(15.1)	[3.2]	—	B D I K	10	普通	にぶい黄	東金子産か	
2	土師器	甕	(16.5)	[3.6]	—	C H I K	10	普通	にぶい橙	古墳時代	

第79号住居跡（第315図）

第4次調査におけるIII区とIV区の境界部、N-25・26グリッドに位置する。第129号井戸跡、第317号土壙と重複する。遺構の北東部は調査区域外へ延びる。

平面形態は東西に長いやや歪な長方形で、規模は長軸4.23m、短軸3.30m、深さ0.13mを測り、長軸方位はN-90°を指す。

カマド、壁溝、ピットは検出されなかった。

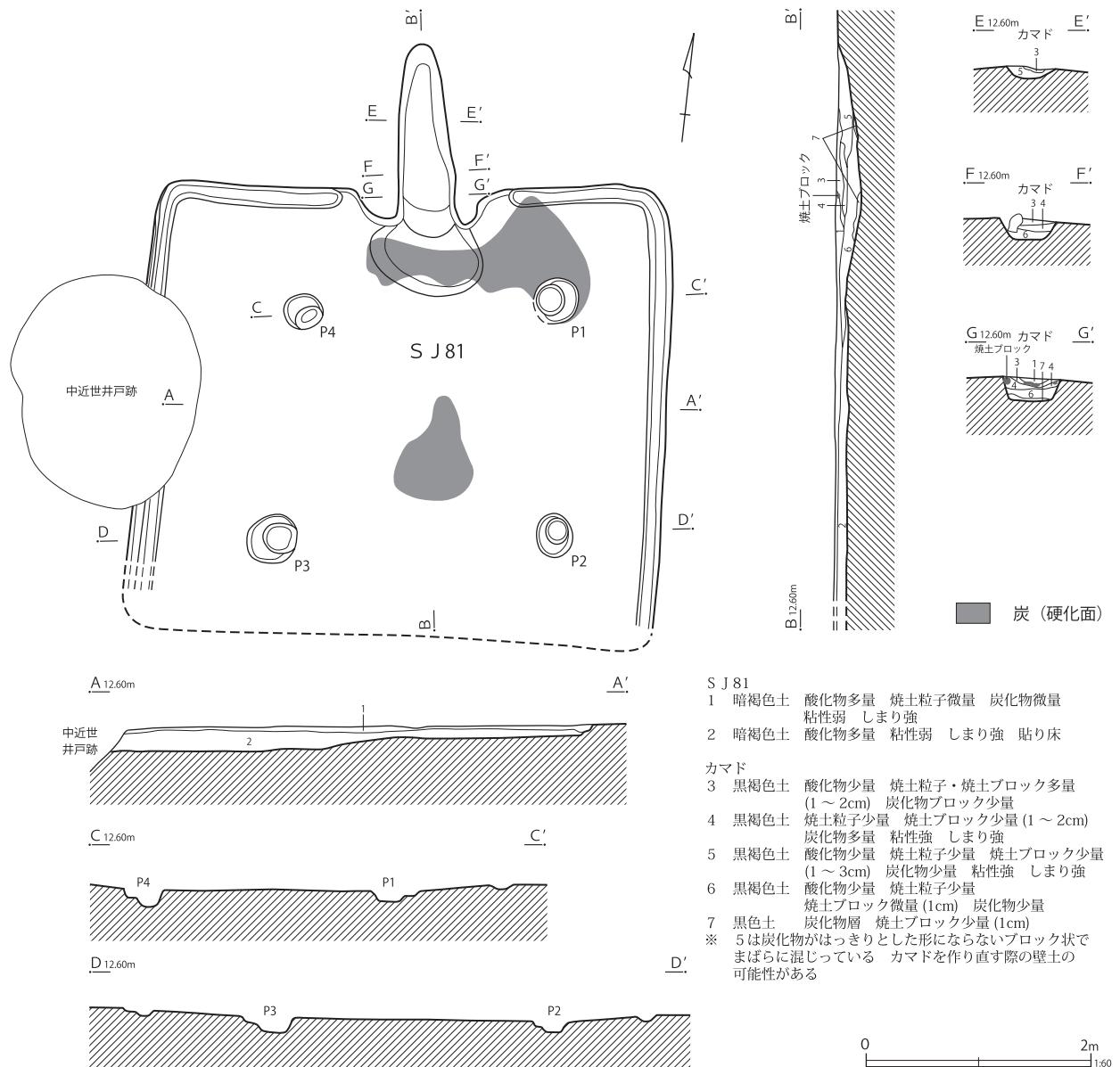
遺物は須恵器壺、土師器甕が出土した（第315図1、2）。1は須恵器の壺で、東金子の製品と考えられる。2は土師器の甕である。混入品か。

遺物が少ないため時期は判然としないが、検出面から古代の遺構と考えられる。

第81号住居跡（第316・317図）

第4次調査におけるIII区の西端部、L・M-20・21グリッドに位置する。第82号住居跡と重複し、本遺構が新しい。西壁の中央部は中・近世の井戸跡によって壊され、南壁はトレーニングによって壊される。

平面形態は方形と推察され、規模は、残存部で長軸4.75m、短軸3.80m、深さ0.22mを測り、主軸方位はN-7°-Wを指す。覆土はほぼ削平され、床面直上の覆土が僅かに残存するのみであった。そのため堆積状況はわからないが、床面直上の覆土には焼土粒子や炭化物が含まれ、その下からは貼床が検出された。カマドは北壁中央に設けられ、カマドを除いて壁溝が全周する。ピットは4基確



第316図 第81号住居跡

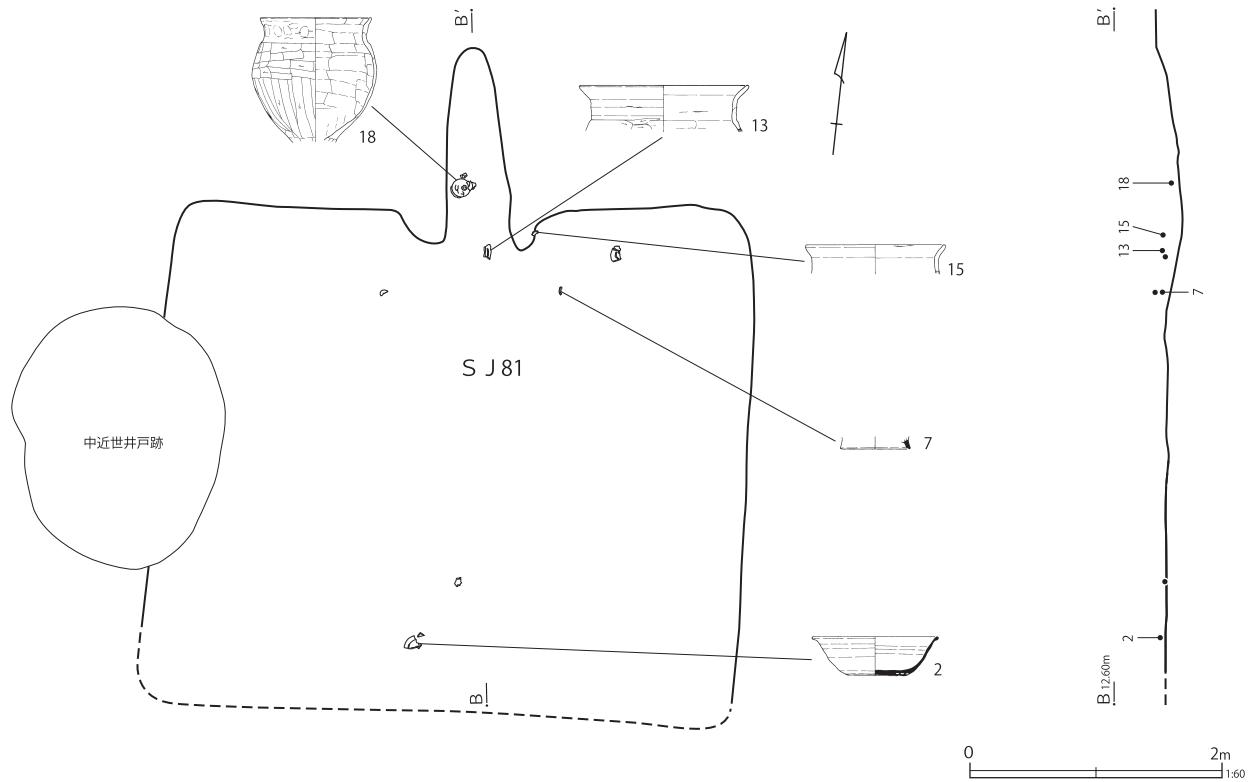
認された。

カマドは袖が僅かに張り出し、壁面を大きく掘り込んで構築される。燃焼部は浅く掘り窪められ、煙道部に向って緩やかに立ち上がる構造を持つ。規模は全長1.70m、幅0.52m、深さ0.22mを測る。覆土は全層に焼土が多く含まれ、燃焼部の一部からは、火床面直上から薄い炭化物層が検出された。

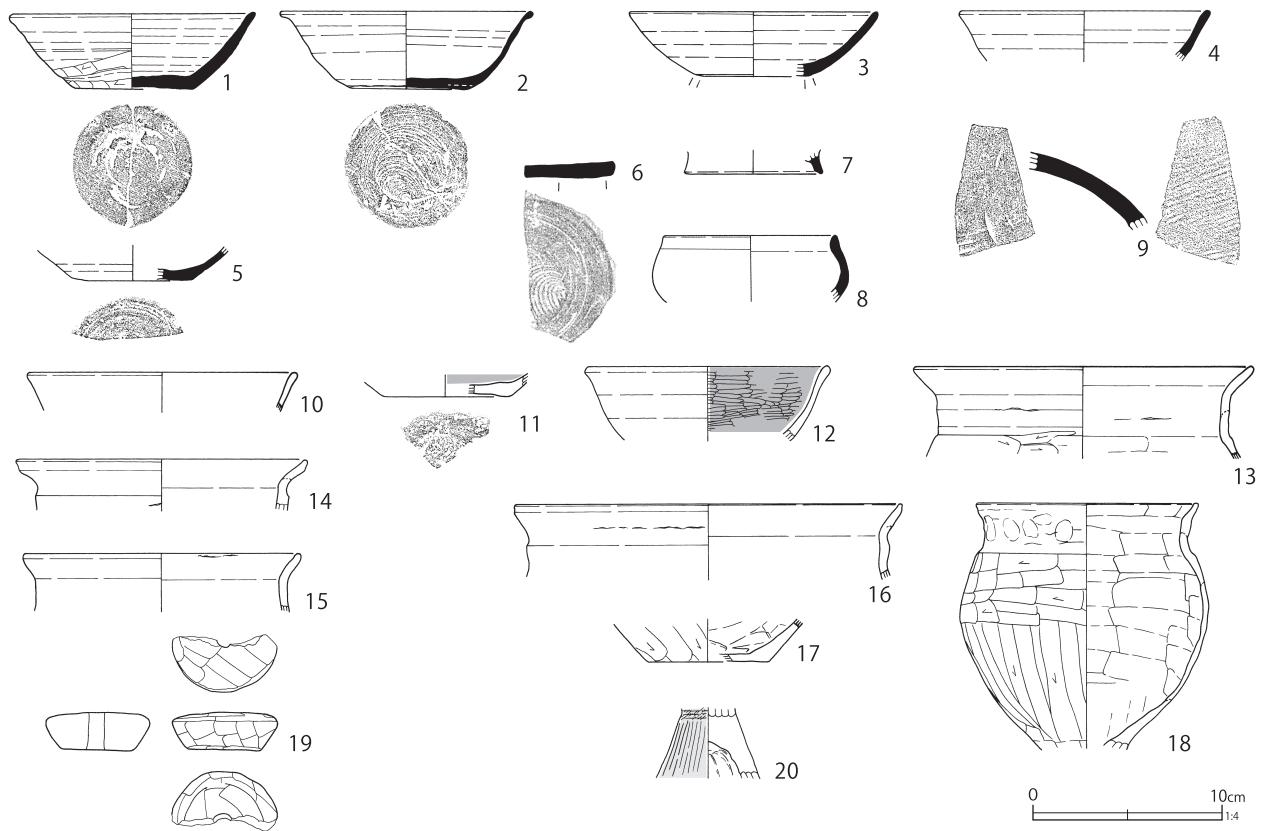
壁溝は、おそらくカマドを除いて全周していたと考えられる。規模は、幅0.15~0.25m、深さ0.05mを測る。

ピットは各コーナーを結んで対角線上に規則的に主柱穴4本が配置されていた。平面形態は円形または橢円形で、規模はピット1が直径0.40m、深さ0.08mを測る。ピット2は長径0.37m、短径0.32m、深さ0.10mを測る。ピット3は長径0.48m、短径0.42m、深さ0.14mを測る。ピット4は長径0.35m、短径0.31m、深さ0.15mを測る。配置から住居跡の柱穴である可能性があるが、いずれも掘り込みが浅い。

カマド周辺と住居跡中央部には炭化物の広がり



第317図 第81号住居跡遺物出土状況



第318図 第81号住居跡出土遺物

第98表 第81号住居跡出土遺物観察表（第318図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	12.8	3.9	6.3	D E H I K	75	普通	にぶい黄橙	No.6 三和産 酸化焰焼成	115-9
2	須恵器	壺	13.0	4.1	6.7	B E I	75	普通	にぶい橙	No.7 末野産 全体被熱により変色 糸切り痕が2重に認められる 粘土円柱技法の痕跡か	115-10
3	須恵器	壺	(13.0)	3.3	(5.4)	B I	25	普通	灰白	内面煤付着	
4	須恵器	壺	(13.0)	[2.6]	—	I J	15	普通	灰黄	南比企産 口唇部外縁に重ね焼きの痕跡が認められる	
5	須恵器	壺	—	[1.8]	(6.9)	B C I K	30	普通	灰白	末野産 全体被熱により内外面の摩耗が激しい	
6	須恵器	壺	—	[0.8]	(8.5)	I J	45	普通	黄灰	南比企産	
7	須恵器	高台付壺	—	[4.2]	(7.0)	B I K	25	普通	灰白	No.5 末野産	
8	須恵器	小型壺	(9.0)	[3.5]	—	A I K	15	普通	灰白	新治産か 外面黒色化	
9	須恵器	甕	—	[4.2]	—	B I K	10	普通	灰	外面降灰	
10	ロクロ土師器	壺	(13.7)	[2.1]	—	C H I K	5	普通	にぶい褐		
11	ロクロ土師器	壺	—	[1.1]	(6.8)	B I K	15	普通	にぶい黄橙	内黒 内外面共に摩耗	
12	ロクロ土師器	壺	(12.6)	[3.8]	—	C I K	20	普通	にぶい黄橙	内黒	
13	土師器	甕	(17.6)	[4.8]	—	E H K	15	普通	明赤褐	No.3 口唇部に煤付着	
14	土師器	甕	(15.0)	[2.7]	—	B I K	10	普通	にぶい黄橙		
15	土師器	小型甕	(14.4)	[3.1]	—	C E H I	10	普通	にぶい黄橙	No.4	
16	土師器	甕	(20.3)	[4.0]	—	B H I K	10	普通	にぶい橙	外面煤付着	
17	土師器	甕	—	[2.2]	(6.3)	C H I K	25	普通	橙		
18	土師器	小型台付甕	11.1	[13.1]	—	B H I K	100	普通	にぶい橙	No.2 脊部上半に煤付着	115-11
19	土製品	紡錘車	直径 (5.5) 厚さ2.0 重さ33.3g				50	普通	橙	No.1 黒斑有り	
20	土師器	高壺	—	[3.7]	—	B E H I K	35	普通	浅黄橙	外面赤彩 古墳時代	

が検出された。

遺物は住居跡全体に散在し、須恵器壺・高台付壺・小型壺・甕、ロクロ土師器壺、土師器甕・小型台付甕・高壺、紡錘車等が出土した（第318図1～20）。1～9は須恵器である。1～6は壺で、南比企、末野、三和の製品を含む。基本的には9世紀代の遺物だが、6の底部外周回転ヘラケズリ調整が施されたもののように、時期差のある遺物も含まれる。7は高台付壺の高台部で、末野の製品である。

8は小型壺である。胎土に雲母を多く含むため、新治の製品と考えられる。9は甕である。

10～12はロクロ土師器である。10は壺で、11は内黒の壺底部である。

13～18は土師器の甕である。13～17は「コ」の字状口縁甕で、頸部がやや短くなる段階である。18は小型台付甕でカマドから出土した。支脚として転用されたものか。

19は土製の紡錘車である。側面に光沢を持つため、単位は見えないが、ミガキが施されていたと考えられる。

20は土師器の高壺で、混入品である。

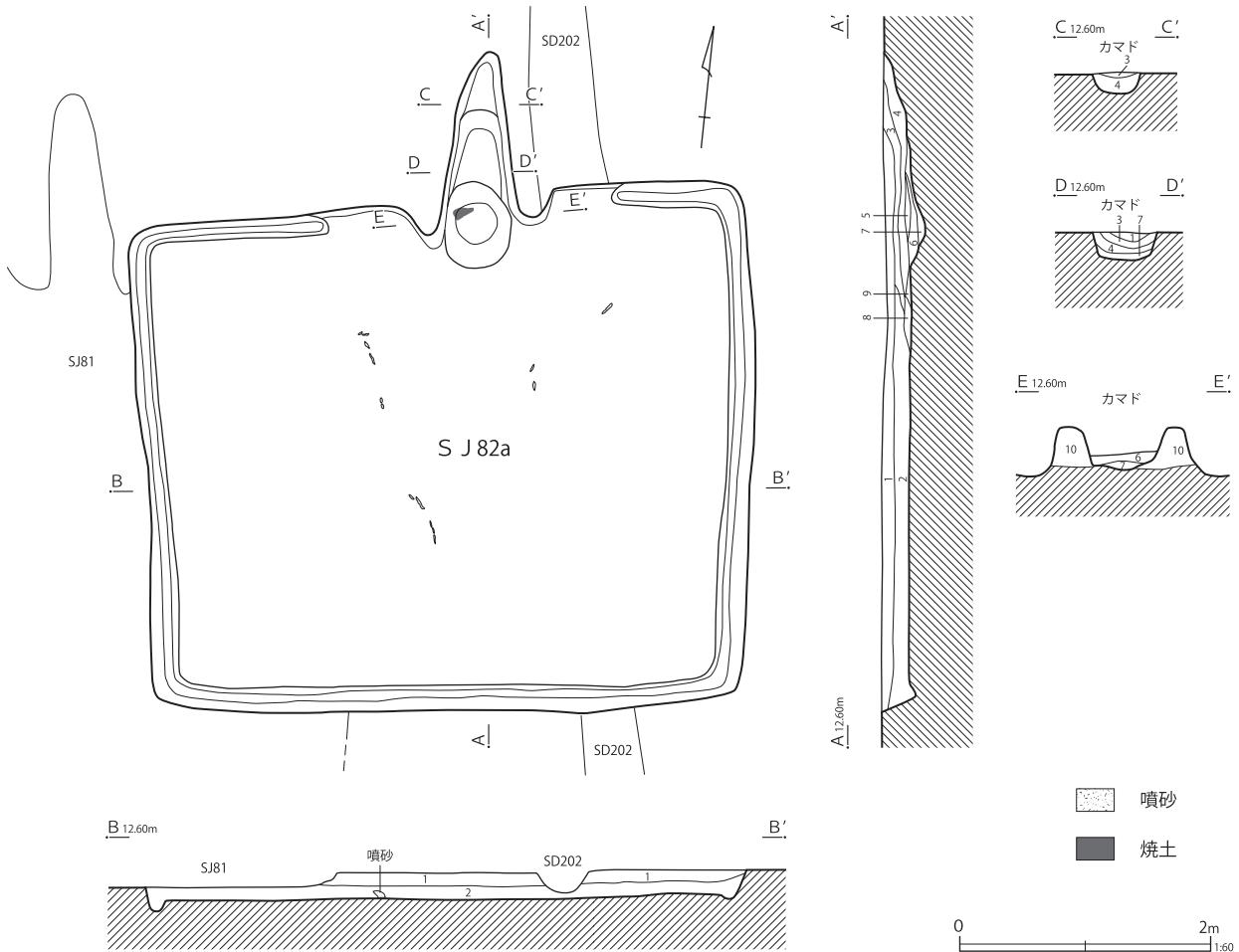
遺物の時期は、須恵器壺や土師器甕の器形から、9世紀中葉～後半と推察される。

第82号住居跡（第319～322図）

第4次調査におけるIII区の西端部、L・M-21グリッドに位置する。第81号住居跡と重複し、本遺構が古い。住居跡の中央部からは、後代の地震に伴う液状化現象によって発生した噴砂の痕跡が認められた。

本住居跡は生活面が2面確認され、第82a・82b号住居跡と分けて調査を行った。

第82a号住居跡は平面形態が方形で、規模は長軸4.95m、短軸4.21m、深さ0.20mを測り、主軸方位はN-6°-Wを指す。覆土は水平堆積で、全層に焼土粒子が含まれる。カマドは北壁中央に設



S J 82a				
1	暗褐色土	酸化物多量	焼土粒子少量	粘性強 しまり強
2	黒褐色土	酸化物少量	焼土粒子微量	粘性強 しまり強
カマド				
3	暗褐色土	酸化物少量	焼土粒子少量	焼土ブロック少量(1cm) 燃焼部付近に焼土ブロック多量 粘性弱 しまり強
4	暗褐色土	酸化物少量	焼土粒子多量	焼土ブロック多量(1cm) 粘性強 しまり強
5	黒褐色土	炭化物主体層	焼土粒子多量	焼土ブロック多量(1cm)
6	黒褐色土	酸化物少量	焼土粒子多量	焼土ブロック少量(1~3cm) 崩落天井部 粘性強 しまり強

7	黒褐色土	酸化物少量	焼土粒子多量	焼土ブロック多量(1~3cm) 炭化物少量 粘性強 しまり強
8	暗褐色土	酸化物多量	焼土粒子少量	炭化物少量 粘性強 しまり強
9	黒褐色土	焼土ブロック少量	炭化物少量	酸化物少量 粘性強 しまり強
10	暗褐色土	酸化物多量	焼土粒子少量	焼土ブロック少量(1cm) 炭化物微量 黄色土粒子微量 粘性弱 しまり強

第319図 第82a号住居跡

けられ、カマドを除いて壁溝が全周する。

カマドは袖が僅かに住居跡内に張り出し、壁面を大きく掘り込んで構築される。燃焼部は掘り窪められ、煙道部に向って緩やかに立ち上がる構造を持つ。規模は全長1.73m、幅0.62m、深さ0.33mを測る。

覆土は火床面直上に焼土粒子やブロック、炭化物を多く含む層が堆積し、その上にカマドの天井崩落土と考えられる第6層が堆積していた。他の

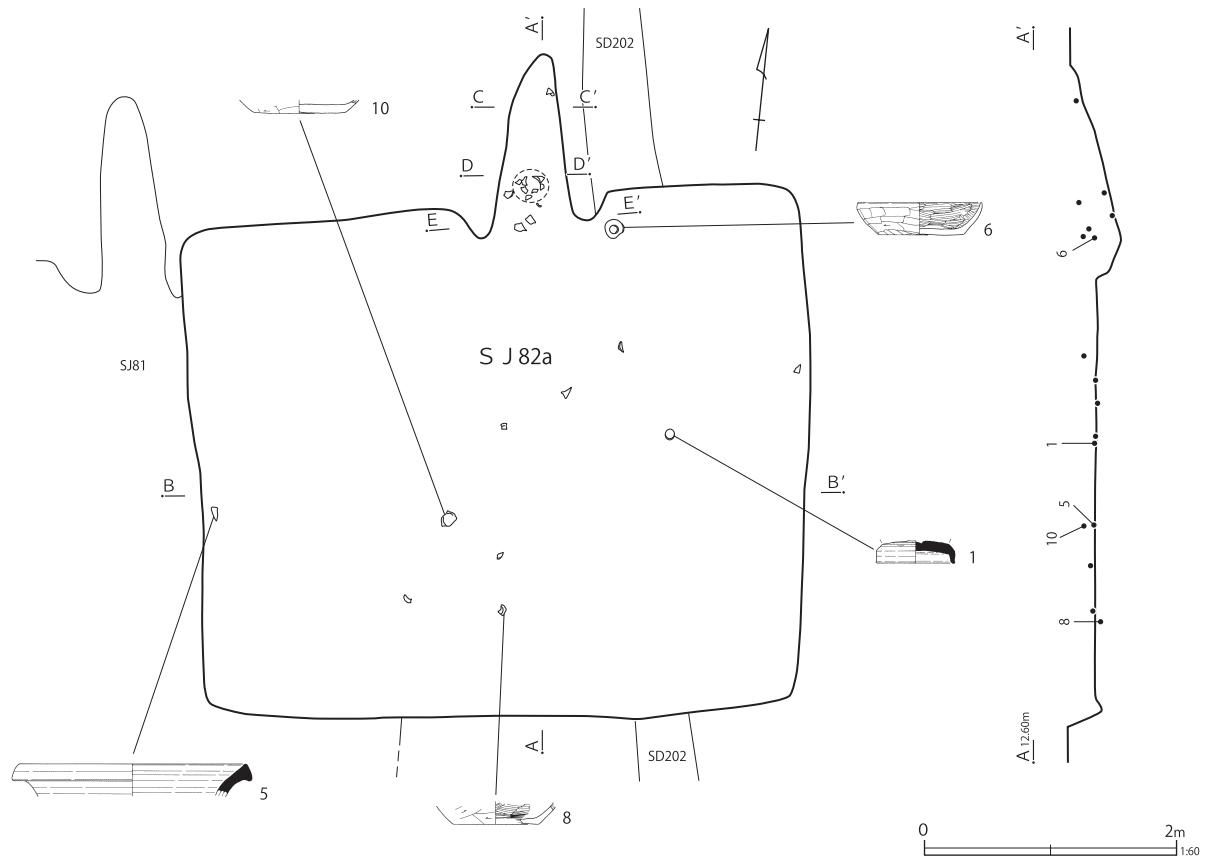
層も焼土粒子やブロックを多く含む。燃焼部の中層からは薄い炭化物層が検出されている。

壁溝は、カマドを除いて全周し、規模は幅0.16~0.25m、深さ0.05~0.07mを測る。

ピットは検出されなかった。

遺物は住居跡内全体から疎らに出土しているが、カマド周辺からは比較的多くの遺物が検出された。

遺物は須恵器蓋・壺・甕、土師器壺が出土した(第323図1~10)。1~5は須恵器である。1は



第320図 第82a号住居跡遺物出土状況

蓋で、新治の製品である。径が小さいため、瓶類の蓋である可能性がある。つまみは欠損していた。

2～4は壊である。いずれも南比企の製品で、3は回転ヘラケズリ調整が施されるが、2、4は回転糸切り離し後無調整であるため、9世紀代の遺物と考えられ、混入と考えられる。5は甕の口縁部である。

6～10は土師器の壊である。6は平底で底径が大きい壊で、外面は口唇部付近までヘラケズリ、内面は横方向のミガキが施される。8も同様の器形になると推察される。7も調整は類似するが、器壁が薄く口縁部が内湾する。

次に第82 b号住居跡は、平面形態が東西に長い長方形で、規模は長軸5.20m、短軸3.50m、深さ0.15mを測り、主軸方位はN-6°-Wを指す。覆土は水平堆積だが、カマド周辺は層序が乱れる。全層に焼土粒子やブロックが含まれ、床面付近に

は部分的に薄い炭化物層が堆積する。

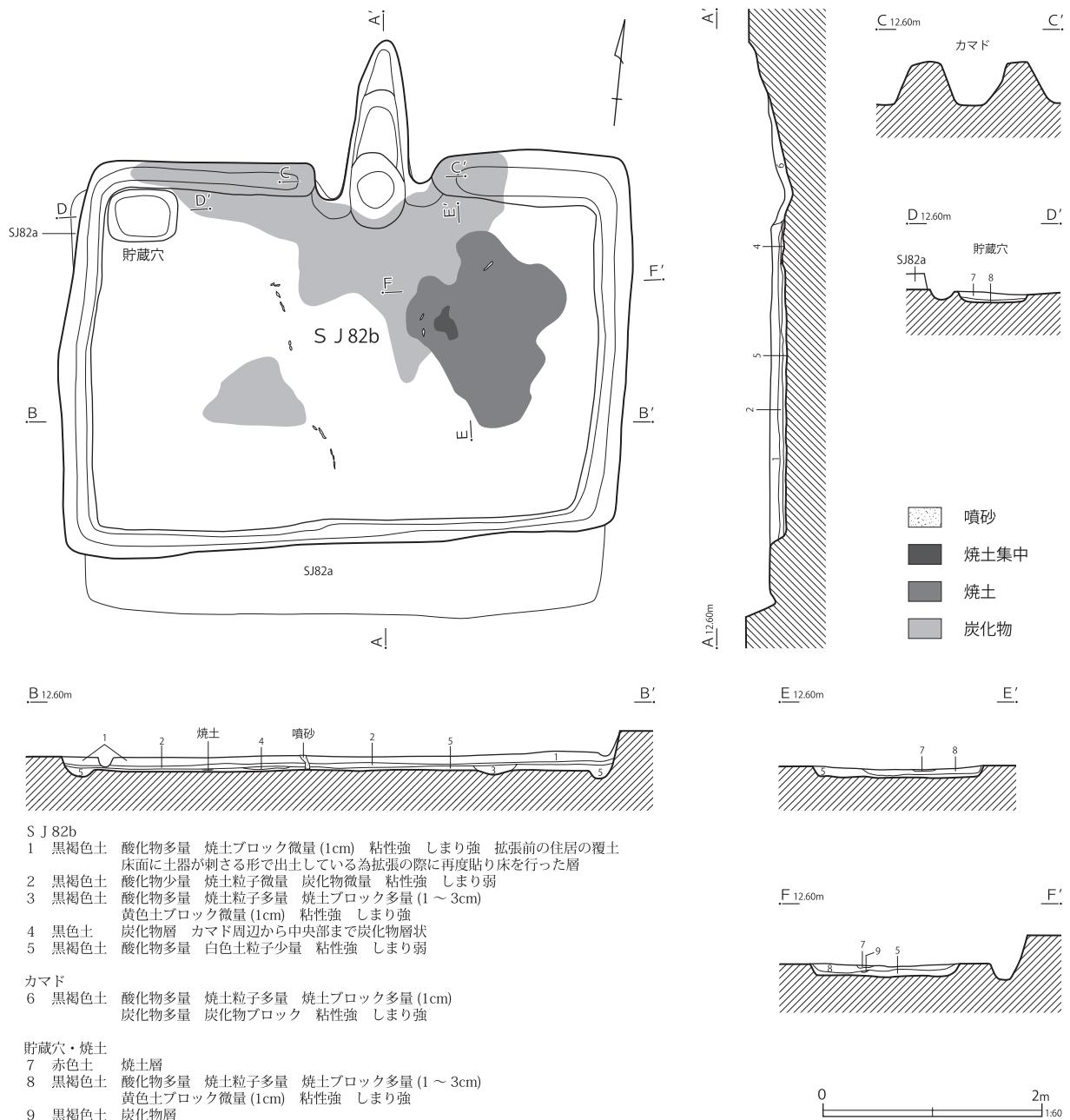
北壁中央部にはカマドが設けられ、カマドを除いて壁溝が全周する。住居跡の北西角からは貯蔵穴が検出された。

カマドは上層のカマド構築時に改修されている可能性があるが、袖が0.50m程住居跡内に張り出し、燃焼部は浅く掘り窪められ、煙道部に向ってスロープ状に立ち上がる構造を持つ。覆土は上層のカマドによって大部分が壊されているが、火床直上には焼土粒子やブロック、炭化物を多く含む層が堆積していた。

カマドの周辺には炭化物層が広がり、住居跡の東側には長径1.78m、短径1.45mの範囲で焼土が広がる。

壁溝はカマドを除いて全周し、規模は幅0.13～0.52m、深さ0.05～0.15mを測る。

貯蔵穴は住居跡の北西角から検出された。平面



第321図 第82b号住居跡

形態は隅丸方形で、規模は長径0.65m、短径0.46m、深さ0.07mを測る。貯蔵穴の上層には焼土層が堆積していた。

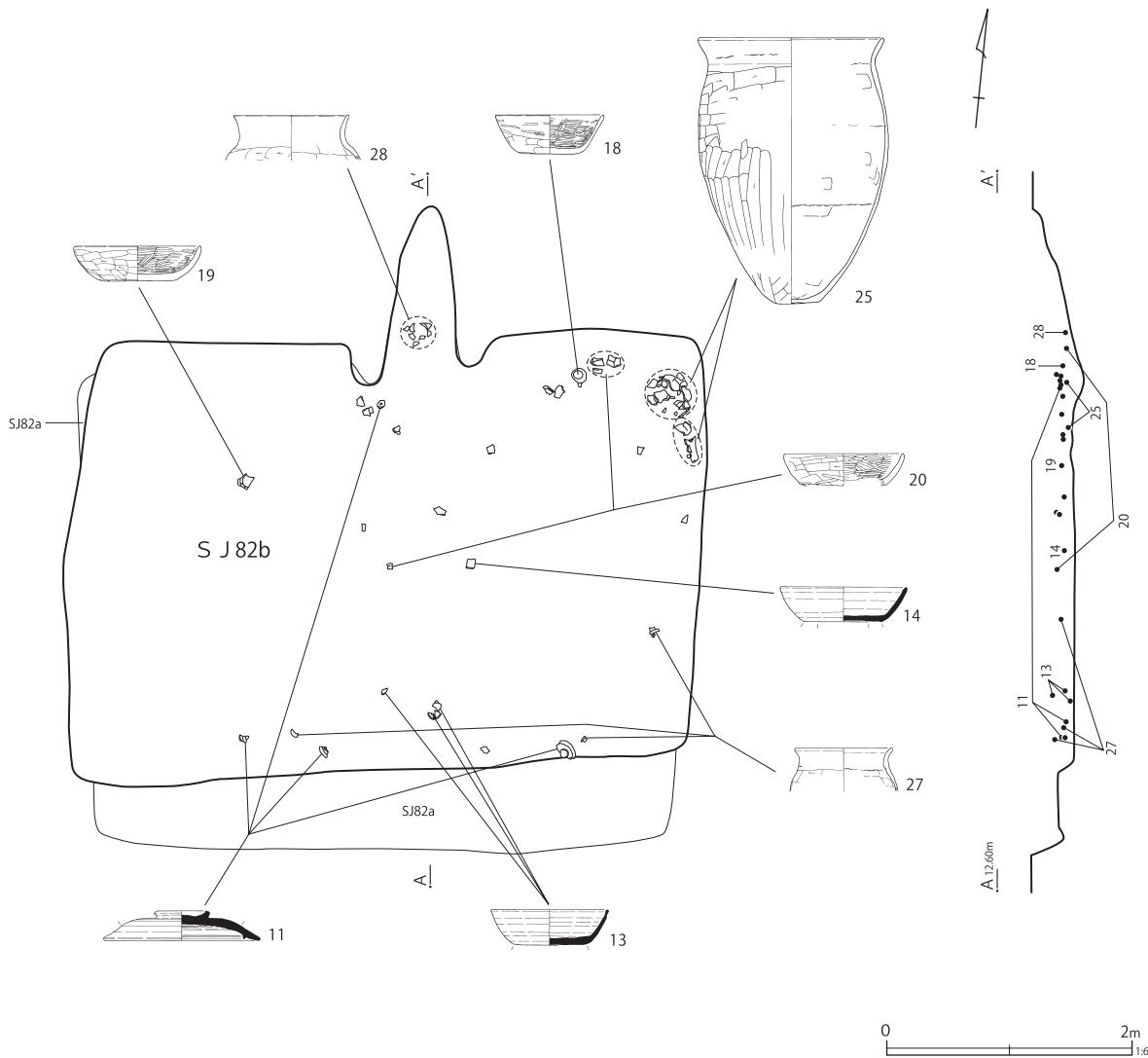
ピットは検出されなかった。

第82 b 号住居跡は、床面に焼土層や炭化物層の広がりが認められたことから、火災に遭った可能性が考えられる。同位置で住居の建て直しが行われ、その際にカマドの位置は踏襲されたと推察さ

れる。

遺物は住居跡内全体から出土し、北東角からは比較的まとまった量の遺物が検出され、須恵器蓋・壺・瓶類、土師器壺・甕・小型台付甕等が出土した（第323図11~28）。

11~17は須恵器である。11は環状つまみで、カエリを持つ蓋である。住居跡の南辺から出土した。外面には綺麗な自然釉が付着し、硬質に焼き締め



第322図 第82b号住居跡遺物出土状況

られ、厚手で重い。口唇部内縁には粘土バリが認められるため、正位で壺と重ねた状態で焼成されたものと推察される。逆位の状態で転用硯として使用されたと考えられ、内面中央部はロクロ目が摩滅し、光沢を持つほど研磨されていた。長期間使用されたと考えられる。太田金山の製品か。

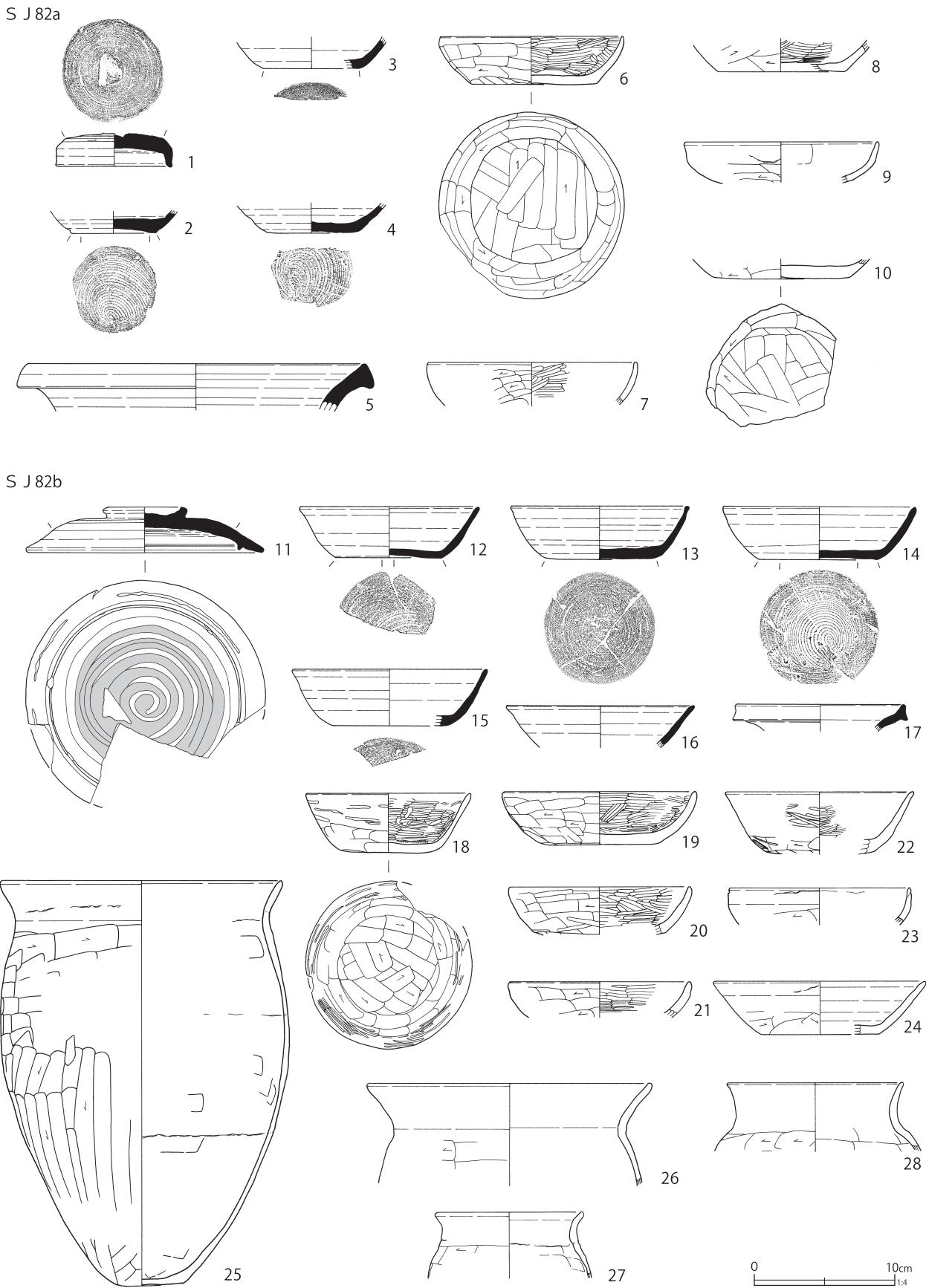
12~16は壺である。全て南比企の製品で、底部調整は全周回転ヘラケズリのものと、外周回転ヘラケズリのものが混在し、鳩山編年III期と考えられる。17は長頸瓶の口縁部である。

18~28は土師器である。18~24は壺で、18は器形が須恵器壺に類似し、内面は横方向のミガキ、外面は上半にミガキが施され、下半はヘラケズリ

調整が施される。19~21は浅身で扁平な形をした壺で、内面にはミガキ、外面はヘラケズリ調整が施される。22は18と似た器形となるものか。24は大型の壺で、外面下端に手持ちヘラケズリ調整が施される。

25~28は甕である。25は北東角から検出された。26は頸部が「く」の字状になる甕で、25は過渡期のものか。27、28は小型台付甕と推察される。

第82 b 号住居跡の時期は須恵器壺や土師器甕の器形から、8世紀中葉と考えられる。第82 a 号住居跡は下層の状況と、6と類似した土器が出土していることから連続して使用された住居跡と考えられ、8世紀中葉～後半と考えられる。



第323図 第82号住居跡出土遺物

第99表 第82号住居跡出土遺物観察表（第323図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	8.1	[2.3]	—	A D E I K	85	良好	灰褐	No.8 新治産 瓶類の蓋か	115-12
2	須恵器	坏	—	[1.5]	6.0	B I J K	85	普通	灰白	南比企産	
3	須恵器	坏	—	[2.2]	(6.8)	I J	15	普通	褐灰	南比企産	
4	須恵器	坏	—	[2.2]	(6.2)	B I J	45	普通	褐灰	南比企産	
5	須恵器	甕	(24.0)	[3.3]	—	B I K	10	普通	赤灰	No.1 内外面降灰	
6	土師器	坏	13.0	3.4	8.9	C E H I K	90	普通	橙	No.10 内面全体ミガキ	116-1
7	土師器	坏	(14.8)	[3.0]	—	C H I K	5	普通	橙	内面ミガキ	
8	土師器	坏	—	[2.2]	(9.0)	C E H I K	15	普通	明赤褐	No.5 内面全体ミガキ	
9	土師器	坏	(13.6)	[2.9]	—	C H I K	5	普通	にぶい橙		
10	土師器	坏	—	[1.4]	(9.4)	C E H I K	40	普通	明赤褐	No.2 内外面摩耗 内面ミガキか	
11	須恵器	蓋	16.5	3.2	—	I	70	良好	灰	No.18・19・22 太田金山産か 転用硯 外面全体降灰 内面研磨によりロクロ 目が磨滅し光沢がある 口唇部内縁に バリ付着	116-2
12	須恵器	坏	(12.8)	3.6	(7.6)	I J K	25	普通	灰白	南比企産 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	
13	須恵器	坏	(12.4)	3.8	7.8	B E I J K	65	普通	灰白	No.4・20・21 南比企産	116-3
14	須恵器	坏	13.5	3.8	8.3	I J K	75	普通	黄灰	No.25 南比企産 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	116-4
15	須恵器	坏	(13.7)	4.0	(7.9)	B I J K	30	普通	灰白	南比企産 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	
16	須恵器	坏	(13.0)	[2.7]	—	H I J K	5	普通	黄灰	南比企産	
17	須恵器	長頸瓶	(11.8)	[1.9]	—	I K	5	普通	灰	内外面降灰	
18	土師器	坏	11.6	4.2	7.1	C I K	80	普通	橙	No.37 体部外面上半・内面ミガキ	116-5
19	土師器	坏	(13.6)	3.7	7.4	B C H I K	30	普通	橙	No.28 内面全体ミガキ	116-6
20	土師器	坏	(12.7)	[3.4]	—	E I K	25	普通	明赤褐	No.6・38 内面全体ミガキ	
21	土師器	坏	(12.6)	[2.5]	—	C H I K	10	普通	にぶい褐	内面全体ミガキ	
22	土師器	坏	(13.2)	[4.4]	(8.0)	C H I K	20	普通	橙	内面全体および体部外面中央ミガキ 内外面摩耗	116-7
23	土師器	坏	(12.7)	[2.6]	—	C H I K	5	普通	にぶい橙		
24	土師器	坏	(14.9)	3.7	(8.2)	C D I K	20	普通	灰白		
25	土師器	甕	19.8	28.8	4.2	C E H I K	55	普通	明赤褐	No.39・40 外面煤付着 底部摩耗が激しい	116-8
26	土師器	甕	(20.0)	[7.3]	—	C E I K	10	普通	明赤褐		
27	土師器	小型台付甕か	(10.3)	[4.6]	—	B C E H I K	40	普通	橙	No.3・23・24	
28	土師器	小型台付甕か	12.3	[4.9]	—	E I K	50	普通	赤褐	No.15 頸部内面に煤付着	116-9

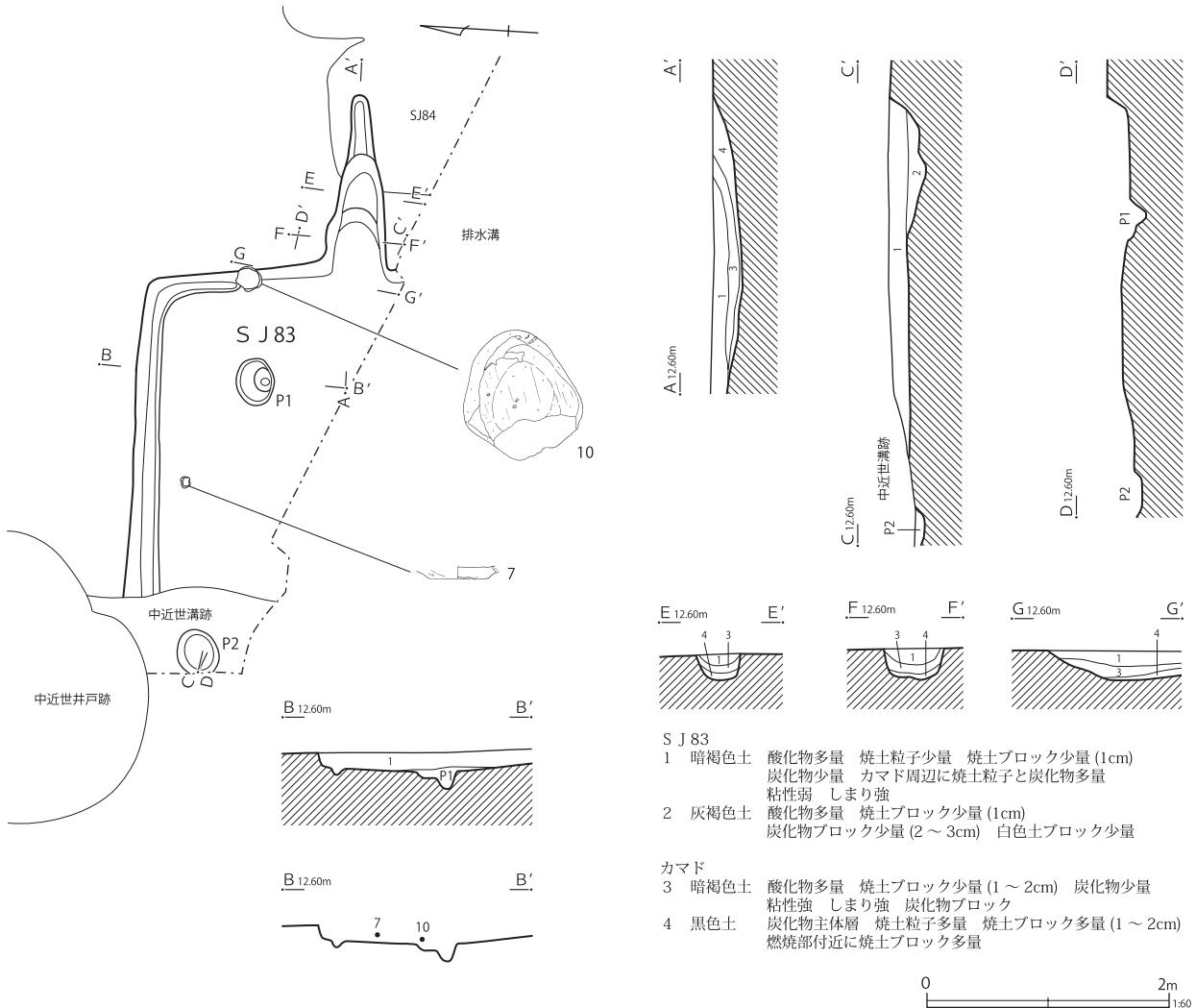
第83号住居跡（第324図）

第4次調査におけるIII区の南西角、M-20・21グリッドに位置する。第84号住居跡と重複し、本遺構が新しい。遺構の南側は調査区域外に延びるため、平面形態は不明である。

規模は、残存部で長軸2.62m、短軸2.10m、深さ0.15mを測り、主軸方位はN-84° -Eを指す。覆土は単層で、焼土ブロックと炭化物が含まれる。カマドは東壁に設けられ、カマドを除いて壁溝が廻る。住居跡内からはピットが2基検出された。

カマドは袖が無く、壁を大きく掘り込んで構築される。燃焼部は僅かに掘り窪められ、煙道部に向って緩やかに立ち上がる構造を持つ。規模は全長1.51m、幅0.50m、深さ0.25mを測る。覆土は床面付近に炭化物層が薄く堆積し、煙道部に向って厚くなる。燃焼部付近には焼土ブロックが多く含まれていた。その上に焼土ブロックや炭化物混じりの土が堆積する。

ピットは2基検出された。平面形態はどちらも楕円形で浅く、規模はピット1が長径0.38m、短



第324図 第83号住居跡・遺物出土状況

径0.32m、深さ0.14mを測る。ピット2は長径0.38m、短径0.35m、深さ0.08mを測る。ピット1は一部柱根状に一段下がるが、掘り込みは浅かった。

遺物は須恵器高台付壺・壺・皿、ロクロ土師器壺、土師器甕・小型台付甕、石製品が出土した（第325図1~10）。1~3は須恵器である。1は高台付壺で、末野の製品である。2は壺で、大型のため壺になる可能性もある。3は皿である。

4、5はロクロ土師器である。4は内黒の壺で、5は内黒ではないが、内面にミガキが施される。

6~9は甕である。6は「コ」の字状口縁甕で、頸部がやや短くなる段階のものである。7は甕の底部だが厚手であるため古墳時代のものか。8、

9は小型台付甕である。

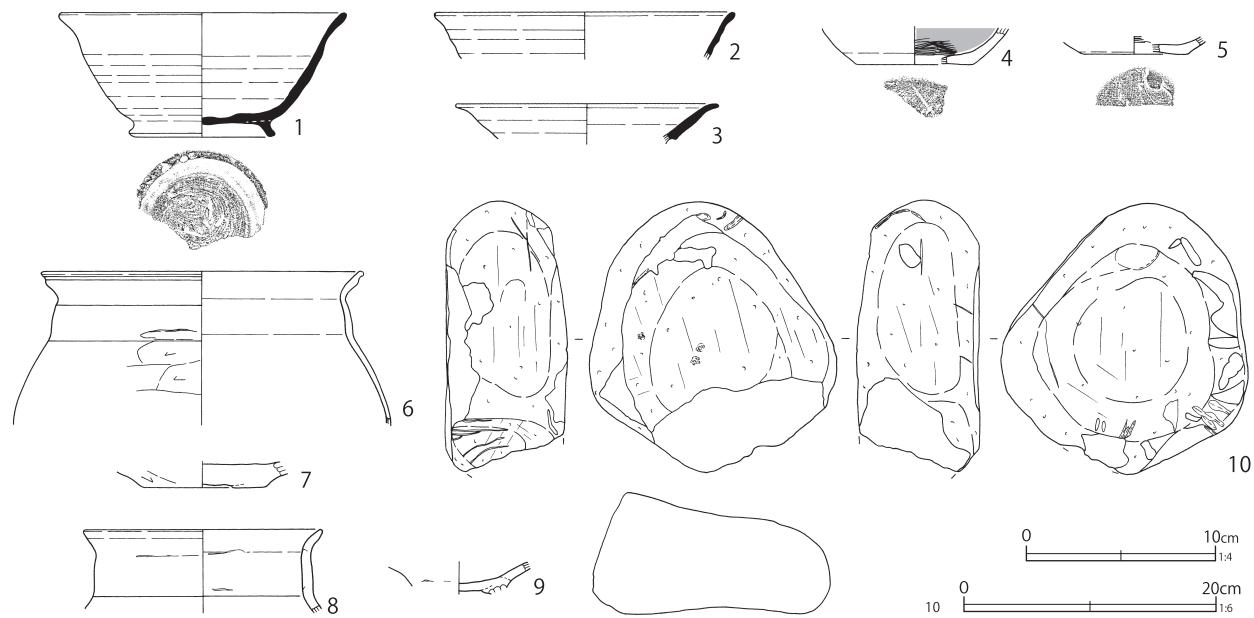
10は砥石の可能性があり、カマド付近の壁溝上から出土した。角閃石安山岩製で全面が研磨されている。

遺物の時期は、須恵器高台付壺や土師器甕の形状から、9世紀後半と考えられる。

第84号住居跡（第326図）

第4次調査におけるⅢ区の南西部、M-21グリッドに位置する。第83号住居跡と重複し、本遺構が古い。遺構の南側は調査区域外に延びるため、平面形態は不明である。

規模は、残存部で長軸3.00m、短軸2.65m、深さ0.16mを測り、主軸方位はN-8°-Wを指す。



第325図 第83号住居跡出土遺物

第100表 第83号住居跡出土遺物観察表（第325図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	高台付壺	(14.8)	6.5	(7.0)	B I K	35	普通	灰黄	末野産 内底面煤付着	117-1
2	須恵器	壺	(15.5)	[2.5]	—	B E I	5	普通	明赤褐		
3	須恵器	皿	(13.8)	[2.1]	—	B I	20	普通	灰	口唇部外面にシワ状痕有り	
4	ロクロ土師器	壺	—	[1.9]	(6.0)	B D I	20	普通	浅黄橙	内黒	
5	ロクロ土師器	壺	—	[0.9]	(5.4)	B H I K	20	普通	にぶい橙	内面ミガキ	
6	土師器	甕	(16.7)	[10.1]	—	C E H I K	15	普通	明赤褐		
7	土師器	甕	—	[1.3]	6.5	C D E I K	90	普通	明赤褐	No.1 古墳時代	
8	土師器	小型台付甕	(12.4)	[4.4]	—	C E H I K	15	普通	橙		
9	土師器	小型台付甕	—	[1.7]	—	B I K	20	普通	にぶい橙		
10	石製品	砥石か	長さ[21.8] 幅19.7 厚さ9.8 重さ3620.9 g							No.2 角閃石安山岩 灰白色 繊密 全面研磨 刃物痕有り 自然面遺存か	128-1

覆土は単層で、焼土粒子が僅かに含まれる。カマドは北壁中央部に設けられ、カマドを除いて壁溝が廻る。住居跡内からはピットが1基検出された。

カマドは袖が0.30m程住居跡内に張り出し、燃焼部は床面よりやや高い位置に設けられ、煙道部に向って緩やかに立ち上がる構造を持つ。

規模は全長0.73m、幅0.50m、深さ0.07mを測る。覆土は大部分が削平され、堆積状況は不明だが、火床面付近には焼土粒子や炭化物が少量混ざる土が堆積していた。

壁溝はカマドを除いて廻り、規模は幅0.16～0.29m、深さ0.07～0.10mを測る。

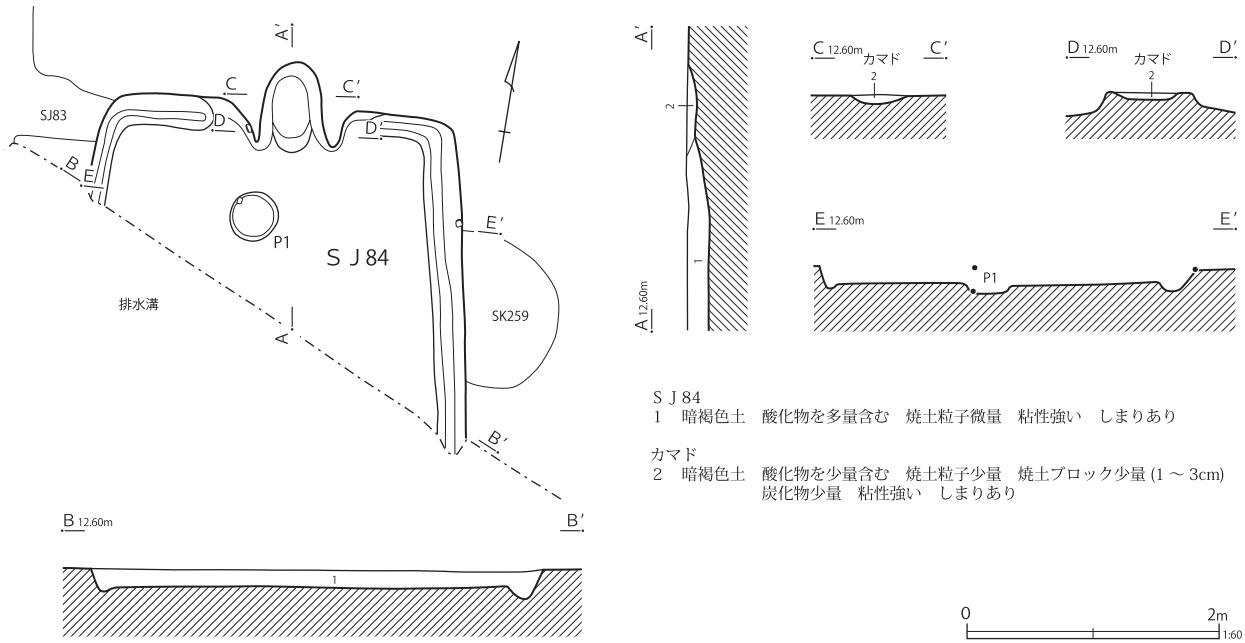
ピットは1基検出された。平面形態は円形で、規模は直径0.38m、深さ0.05mを測る。

遺物は須恵器壺、土師器壺、ロクロ土師器壺が出土した（第327図1～7）。1～3は須恵器の壺で、いずれも南比企の製品である。

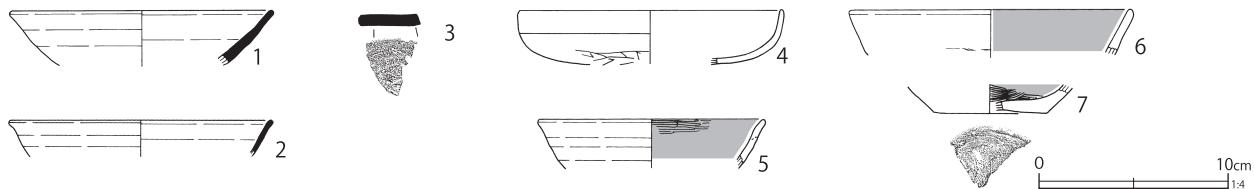
4は土師器の壺で、北武藏型壺である。浅身で平底になる。

5～7はロクロ土師器で、内黒の壺である。6は口径がやや大きい。

遺物は全て破片資料であるため、詳細な時期は不明だが、土師器壺の形状などから9世紀前半の住居跡と考えられる。



第326図 第84号住居跡



第327図 第84号住居跡出土遺物

第101表 第84号住居跡出土遺物観察表（第327図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	(13.7)	[2.9]	—	I J K	10	普通	灰黄	南比企産	
2	須恵器	壺	(13.8)	[1.9]	—	E I J	20	普通	灰	南比企産 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	
3	須恵器	壺	—	[0.6]	—	I J	15	普通	灰白	南比企産	
4	土師器	壺	(13.8)	[2.8]	—	C K	10	普通	にぶい橙		
5	ロクロ土師器	壺	(11.8)	[2.6]	—	C I K	5	普通	にぶい橙	内黒 黒色処理はほとんどない	
6	ロクロ土師器	壺	(14.5)	[2.4]	—	C E H	10	普通	灰白	内黒	
7	ロクロ土師器	壺	—	[1.5]	(5.9)	C I K	20	普通	灰黄褐	内黒	

第85号住居跡（第328・329図）

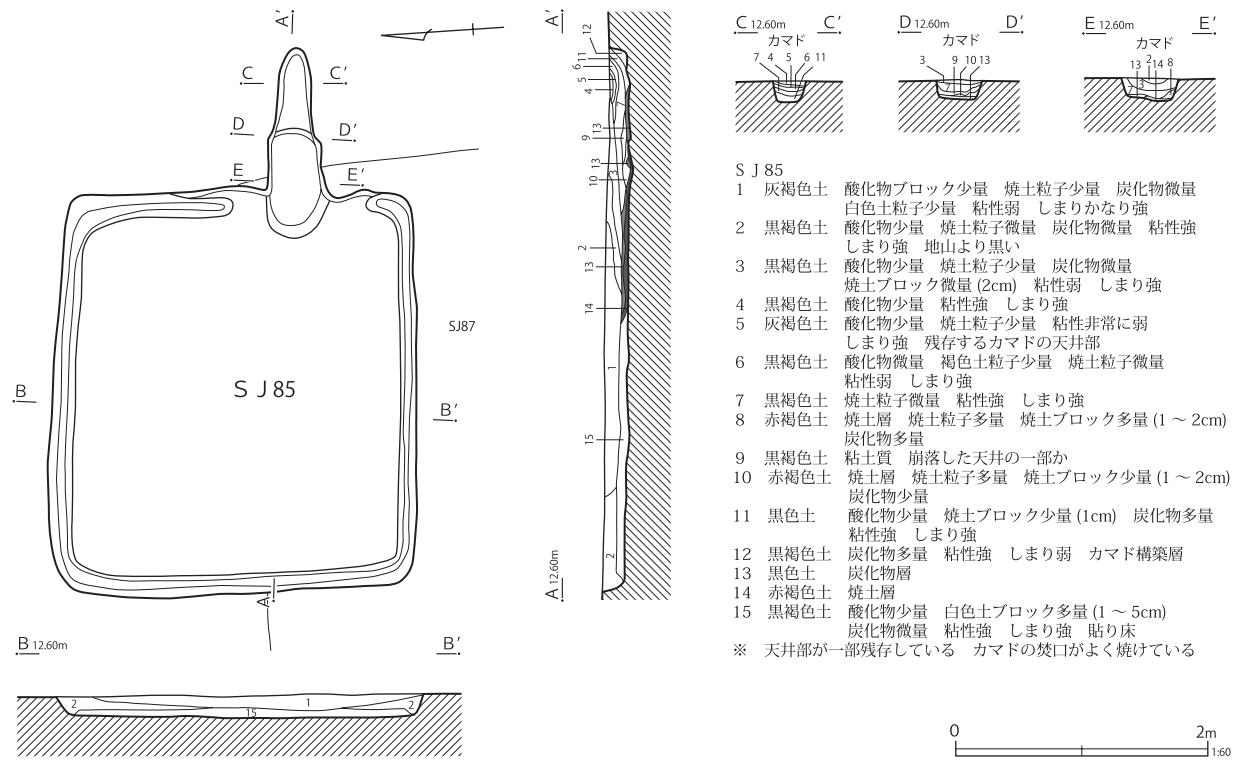
第4次調査におけるIII区の南西部、M-21・22グリッドに位置する。第87号住居跡と重複し、本遺構が新しい。

平面形態は東西にやや長い長方形で、規模は長軸3.24m、短軸2.90m、深さ0.20mを測り、主軸方位はN-84°-Wを指す。覆土はレンズ状に堆積し、焼土粒子や炭化物が含まれる。カマドは東壁

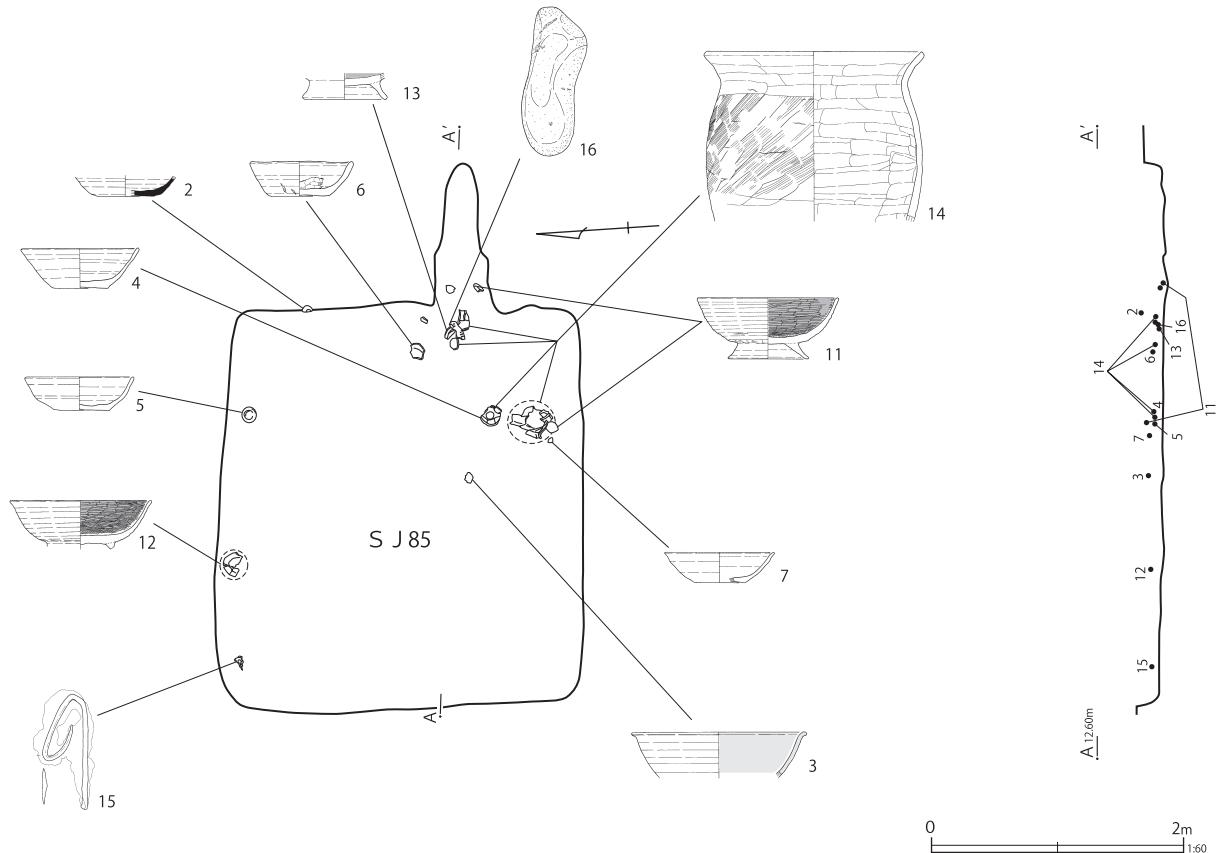
南寄りに設けられ、カマド部分を除いて壁溝が全周する。

カマドは袖が無く、壁面を大きく掘り込んで構築される。燃焼部は僅かに掘り窪められ、奥壁から煙道部に向って急峻に立ち上がる構造を持つ。煙道部付近の天井が一部残存していた。

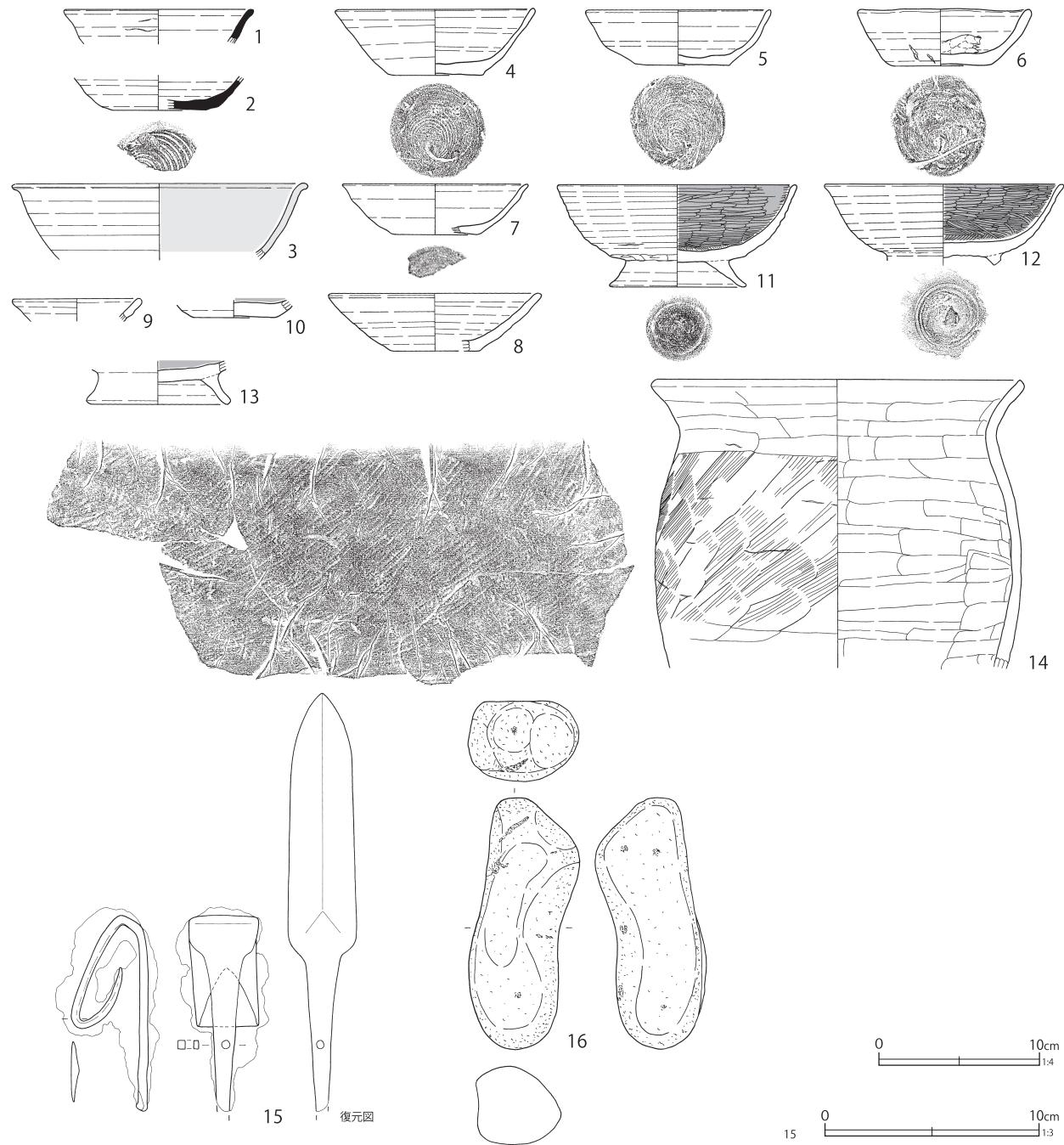
規模は全長1.52m、幅0.43m、深さ0.20mを測る。覆土は火床面直上に焼土層、煙道部付近には炭化



第328図 第85号住居跡



第329図 第85号住居跡遺物出土状況



第330図 第85号住居跡出土遺物

物層が薄く堆積していた。

壁溝はカマドを除いて全周し、規模は幅0.11～0.20m、深さ0.03～0.05mを測る。

ピットは検出されなかった。

遺物は住居跡全体から散発的に出土し、カマド周辺からは比較的まとまった量の遺物が検出され、須恵器壺、灰釉陶器壺、ロクロ土師器壺・高台付

壺、土師器甕、槍鉈、石製の支脚等が出土した（第330図1～16）。

1、2は須恵器の壺で、1は南比企の製品である。混入品と考えられる。

3は灰釉陶器の壺である。猿投の製品で、内面のみ施釉され、綺麗に発色している。黒窯90号窯式の古段階と考えられ、9世紀中葉の遺物と考え

第102表 第85号住居跡出土遺物観察表（第330図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	(11.5)	[2.1]	—	IJK	5	普通	灰	南比企産	
2	須恵器	壺	—	[2.1]	(5.8)	IJK	15	普通	灰白	No.4 南比企産か 外面煤付着	
3	灰釉陶器	塊	(18.0)	[4.7]	—	IK	15	良好	灰白	No.13 猿投産 灰釉ハケ塗り 黒壺14号窯～黒壺90号窯式古段階	117-2
4	ロクロ土師器	壺	12.1	4.1	5.9	C E H I K	75	不良	浅黄橙	No.14	117-3
5	ロクロ土師器	壺	11.2	3.4	5.9	C E H I K	100	普通	灰白	No.3	117-4
6	ロクロ土師器	壺	(10.4)	3.5	6.3	C H I K	65	普通	にぶい黄橙	No.5 口縁部歪み有り 内面体部下端に粘土塗り足し痕有り	117-5
7	ロクロ土師器	壺	(11.4)	3.1	(5.7)	C E H I	15	普通	浅黄橙	No.17	
8	ロクロ土師器	壺	(12.9)	3.5	(5.6)	C H I K	35	普通	橙		117-6
9	ロクロ土師器	壺	7.8	[1.5]	—	C E H I K	50	普通	浅黄橙	小型 内面黒斑有り	
10	ロクロ土師器	壺	—	[1.1]	5.1	C E I K	80	普通	橙	内黒 外面黒斑有り	
11	ロクロ土師器	高台付壺	(14.5)	[4.4]	—	C I K	50	普通	灰褐	No.8・16 内黒 底部煤付着	117-7
12	ロクロ土師器	高台付壺	14.6	[5.1]	—	C D E H I K	85	普通	浅黄	No.2 内黒 遺構間接合 底部回転ヘラケズリか	117-8
13	ロクロ土師器	高台付壺	—	[2.6]	(8.5)	C E H I K	60	普通	にぶい橙	No.11 内黒 内外面摩耗が激しい 底部調整は不明	
14	土師器	甕	(22.6)	[18.0]	—	C E H I K	45	普通	橙	No.14・15 胴部外面の調整がハケ・タタキのどちらにも見える 内面はナデ消されるが部分的に当て具の可能性がある 窪が認められる 外面が凸凹している	117-9
15	鉄製品	槍鉗	長さ[9.5] 幅2.9 厚さ0.4 重さ78.0g							No.1 三つ折り 復元全長19.5 茎部に目釘孔あり	126-2
16	石製品	支脚	長さ16.6 幅6.9 厚さ5.0 重さ740.5g							No.10 砂岩 被熱 煤付着	128-1

られる。混入品の可能性が高い。

4～13はロクロ土師器である。4～9は壺で、器形が整っているものが多い。4は薄手で体部が直線的に開き、5、7はやや腰が張り、6は底径が広く厚手になる。口縁部に歪みがあり、内面下半に粘土を塗り足したような痕跡が残る。8は厚手で体部が大きく開く。9は壺としたが、径が小さいため高台付壺の脚部である可能性もある。

10は内黒の壺である。11～13は内黒の高台付壺で、外面のロクロ目がきつく、高台部は「ハ」の字状に開く。11は外面下端に手持ちヘラケズリ調整が施される。

14は土師器の甕である。器壁が厚く硬質な甕で、内面及び外面口縁部はヨコナデが施される。胴部外面にはタタキにも刷毛目調整にも見える調整が施される。内面にも当て具である可能性がある窪みが僅かに残されるが、明確に当て具と認められる痕跡は無い。

15は鉄製品の槍鉗である。住居跡の北西角から三つ折りの状態で出土した。

16は砂岩製の支脚である。カマドの前部から被熱し、煤が付着した状態で出土した。

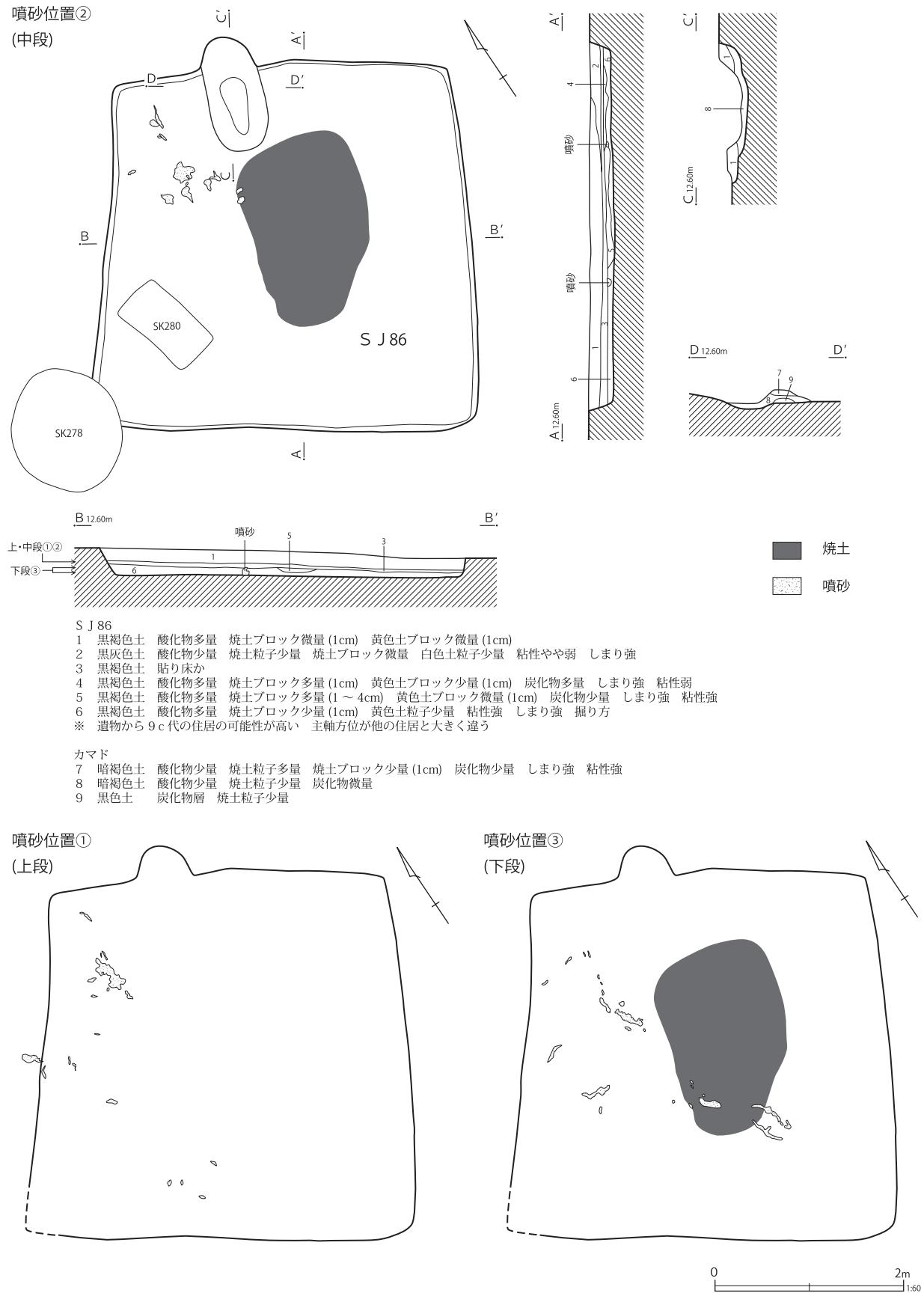
遺物の時期は、ロクロ土師器を主体とすることから、10世紀前半と考えられる。

第86号住居跡（第331・332図）

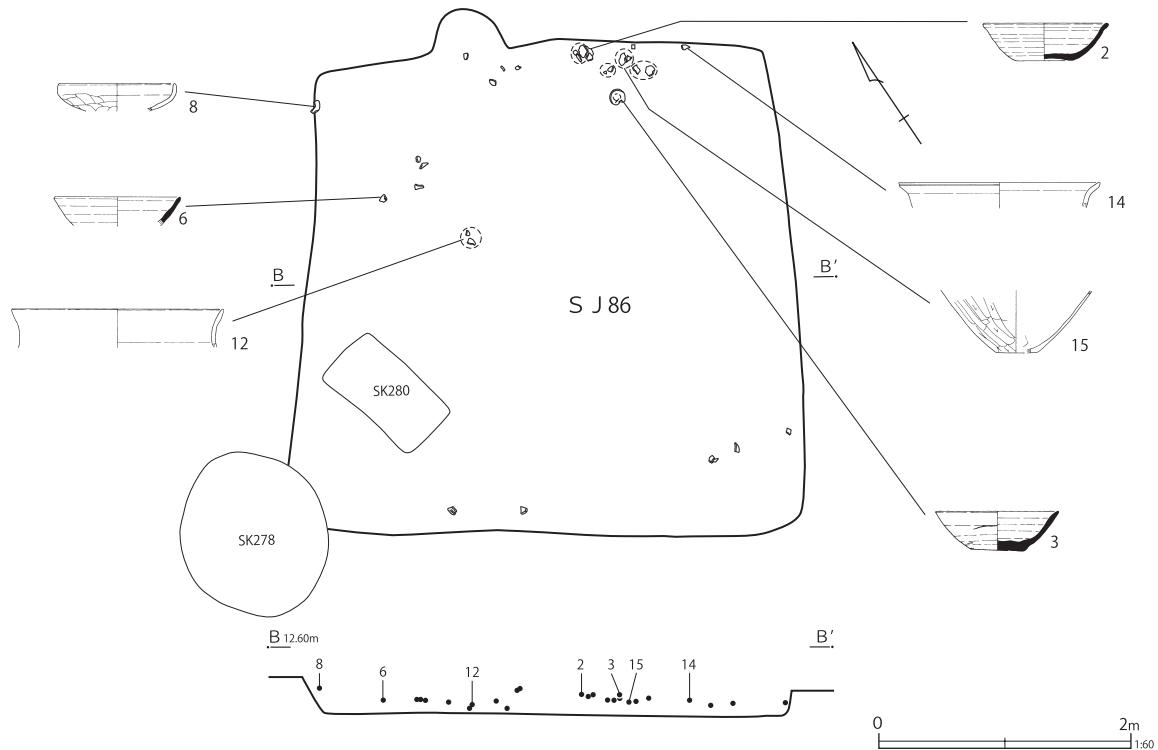
第4次調査におけるIII区の西側、M-21・22グリッドに位置する。床面付近からは噴砂の面的な広がりが検出された。

平面形態はやや歪な方形で、規模は長軸4.08m、短軸3.95m、深さ0.27mを測り、主軸方位はN-28°-Eを指す。覆土は水平に堆積し、焼土粒子やブロックが含まれる。カマドは北壁西寄りに設けられ、住居跡の中央部には焼土を含む土の広がりが検出されたが、貼床と考えられる噴砂を壊す第3層によって覆われているため、掘り方の一部である可能性も考えられる。

宮東遺跡



第331図 第86号住居跡



第332図 第86号住居跡遺物出土状況

カマドは排水溝によって壊され、底面付近が残存するのみであった。袖が無く、燃焼部は浅く掘り窪められ、奥壁から煙道部に向って急峻に立ち上がる構造を持つ。

規模は全長1.24m、幅0.60m、深さ0.30mを測る。覆土は焼土粒子や炭化物が含まれ、床面付近からは炭化物層が検出された。

床面からは噴砂が検出された。通常、噴砂は亀裂状に検出されるが、本住居跡の床面からは不整形に広がる状態で検出された。これは、住居跡が液状化現象発生時、つまり大震災発生後の近い時期に使用されていたことを示すと考えられる。

検出された噴砂は、面下げを行うと大きく形が変わったことから、自然に堆積したものではなく、ブロック状に混入していたと考えられる。

また、覆土中には砂のブロック等が含まれず、全て貼床中に混入していた。これは住居の堅穴掘削時に、周囲に噴砂に伴う砂が堆積した状態であり、貼床を敷いた際にその砂が混入した可能性が

考えられる。

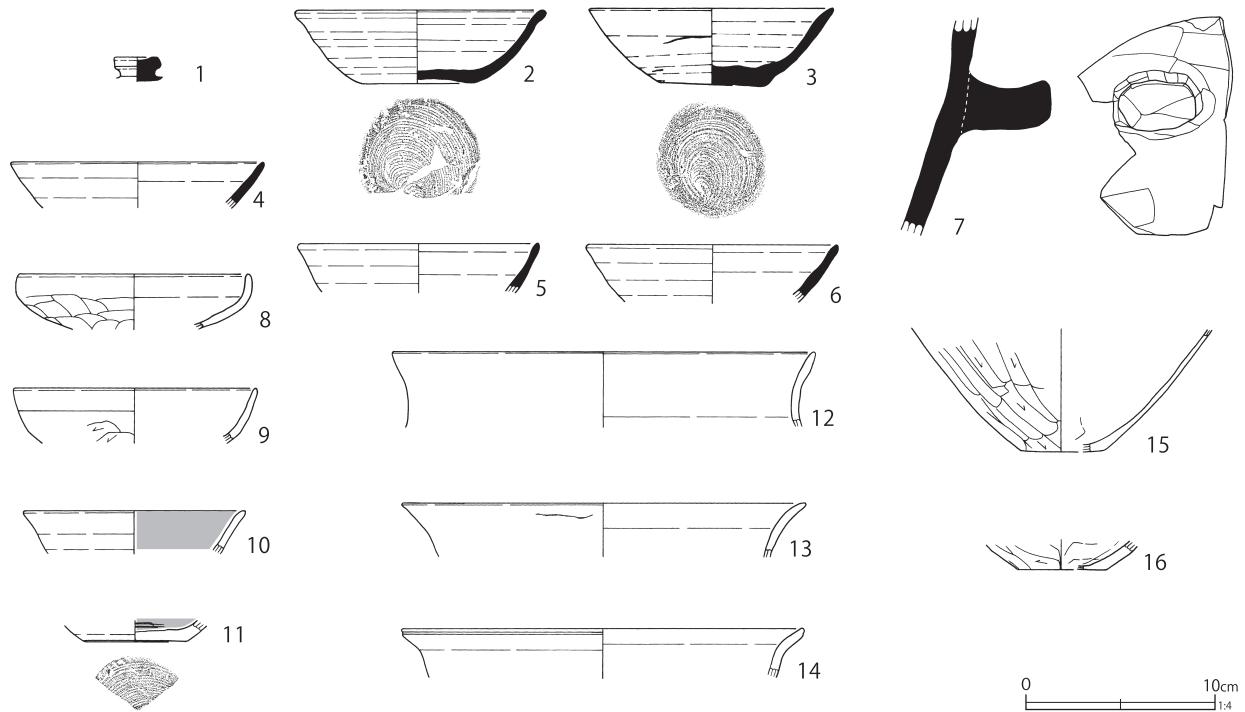
遺物は住居跡全体から散発的に出土し、北壁東寄りからは比較的まとまった量の遺物が検出された。須恵器蓋・坏・甌、土師器坏・甌、ロクロ土師器坏等が出土した（第333図1～16）。

1～7は須恵器である。1は蓋で、つまみ部分のみが出土した。2～6は坏で南比企、東金子、三甌の製品を含む。2は北壁際の床面直上で検出された。東金子の製品の坏で、鳩山編年VIII期並行のものと考えられる。3は三甌の製品の坏で、床面から少し浮いた状態で検出された。7は把手付きの甌と推察され、胎土の特徴から三甌の製品である可能性がある。

8、9は土師器の坏である。ともに北武藏型坏で、浅身で扁平になるものである。

10、11はロクロ土師器で、内黒の坏である。胎土に角閃石を含むため、利根川流域の製品と考えられる。

12～16は土師器の甌である。12、13は「コ」の



第333図 第86号住居跡出土遺物

第103表 第86号住居跡出土遺物観察表（第333図）

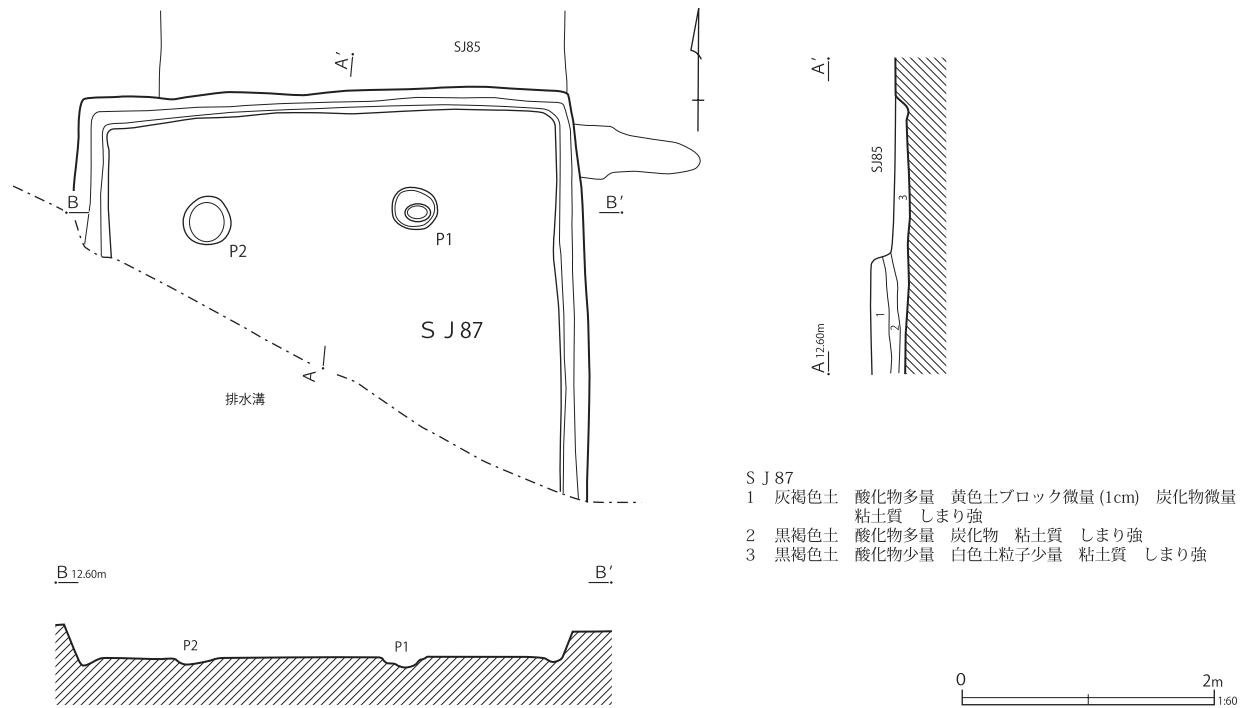
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	—	[1.2]	—	H I K	95	普通	灰白	摘み径2.3cm	
2	須恵器	壺	(12.8)	3.8	6.3	E I K	55	普通	灰	No.2 東金子産 焼成不良により内面の一部が赤褐色を呈する	117-10
3	須恵器	壺	12.8	4.1	5.6	E I K	85	普通	灰白	No.1 三毳産 全体被熱	118-1
4	須恵器	壺	(13.8)	[2.4]	—	H I J K	5	良好	灰	南比企産	
5	須恵器	壺	(12.4)	[2.6]	—	E H I J K	5	普通	灰白	南比企産	
6	須恵器	壺	(13.0)	[3.0]	—	E H I J K	5	普通	灰白	No.9 南比企産	
7	須恵器	甌	—	[11.5]	—	E H I K	5	普通	にぶい黄橙	三毳産か	
8	土師器	壺	(11.9)	[2.9]	—	C E I K	25	普通	橙	No.16	
9	土師器	壺	(12.7)	[3.9]	—	C H I K	10	普通	橙		
10	ロクロ土師器	壺	(11.4)	[2.2]	—	C H I K	5	普通	にぶい黄橙	内黒 内面摩耗が激しく調整は不明瞭	
11	ロクロ土師器	壺	—	[1.1]	(5.4)	C H I K	20	普通	明赤褐	内黒	
12	土師器	甌	(22.0)	[4.0]	—	C E H I K	10	普通	にぶい橙	No.20	
13	土師器	甌	(21.0)	[2.8]	—	C E H I K	5	普通	にぶい褐		
14	土師器	甌	(21.0)	[2.6]	—	A C E H I K	5	普通	にぶい橙	No.25	
15	土師器	甌	—	[6.5]	(4.4)	C E H I K	15	普通	灰褐	No.23 外面煤付着	
16	土師器	甌	—	[1.5]	(4.4)	B C H I K	25	普通	にぶい橙		

字状口縁甌の前段階に当たり、14は定型化した「コ」の字状口縁甌と推察される。

遺物の時期は、土師器の甌はやや古式の様相を持ち、9世紀前半と推察されるが、須恵器の壺は9世紀後半のものである。床面から噴砂の面的な広がりが検出されていることから、地震のあつた

弘仁九（818）年または元慶二（878）年のどちらかに近い時期の住居跡と考えられる。

前述した噴砂の堆積状況から、液状化現象発生後に建てられた住居跡と考えられ、古式の様相を持つ土師器の甌類は住居が建てられた頃の遺物であり、須恵器類は廃絶時に置かれたものである可



第334図 第87号住居跡

能性がある。どちらも元慶地震以前の遺物と考えられることから、本住居跡は弘仁地震後に造られた可能性が高い。

第87号住居跡（第334図）

第4次調査におけるIII区西寄りの南壁際、M・N-21・22グリッドに位置する。第85号住居跡と重複し、本遺構が古い。遺構の南側は調査区域外に延びるため、平面形態は不明である。

規模は、残存部で長軸4.05m、短軸3.25m、深さ0.30mを測り、長軸方位はN-90°を指す。覆土は北半部を第85号住居跡によって壊されるが、レンズ状に堆積していたと推察され、上層には炭化物が含まれていた。住居跡内は壁溝が廻り、住居跡の北寄りからはピットが2基検出された。

カマドは検出されなかった。

壁溝は検出されている限り住居跡内を全周し、規模は幅0.14~0.28m、深さ0.05~0.09mを測る。

ピットは平面形態が円形で、規模はピット1が長径0.37m、短径0.36m、深さ0.07mを測る。ピット2は長径0.38m、短径0.37m、深さ0.05mを測る。

ピット1には柱根のような形跡も認められるが、浅いため性格は不明である。

遺物は出土しなかった。

遺物が検出されなかつたため詳細な時期は不明だが、重複関係や検出面から古代の遺構と考えられる。

第88号住居跡（第335図）

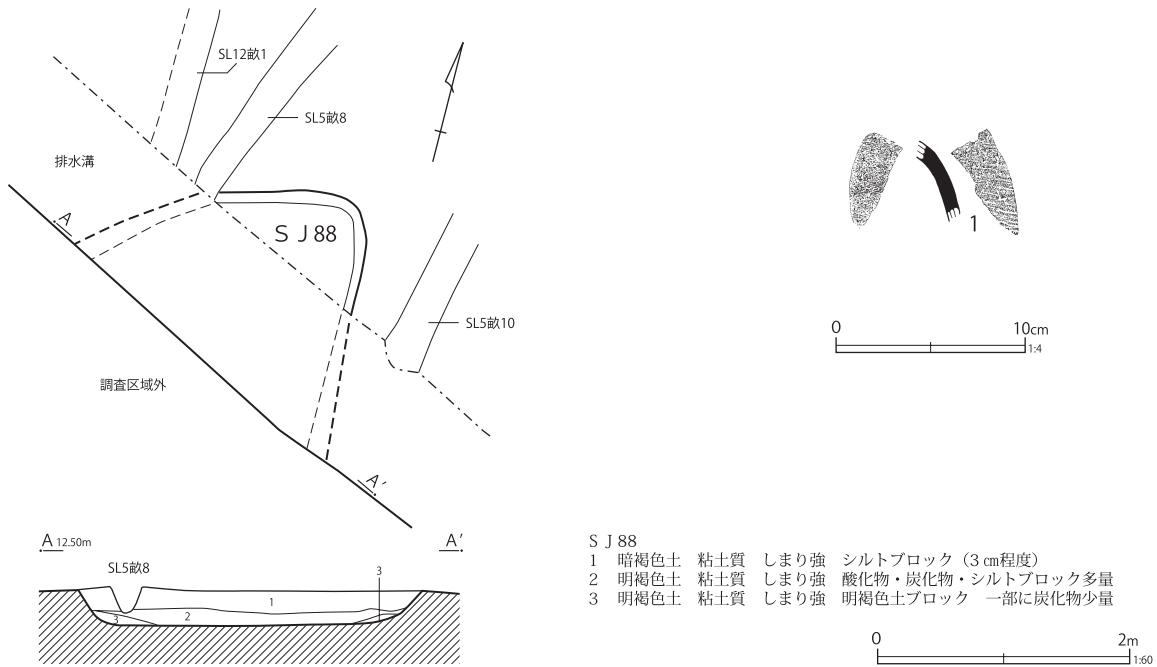
第4次調査におけるIII区東寄りの南壁際、O-24グリッドに位置し、第5号畠跡と重複する。遺構の大部分は調査区域外に延びるため、平面形態は不明である。

規模は、残存部で長軸1.05m、短軸0.90m、深さ0.28mを測り、軸方位は不明である。覆土は水平堆積で、シルトブロックを含む。

検出されたのがごく一部であったため、カマド、壁溝、ピット等は検出されなかった。

遺物は須恵器が1点出土した（第335図1）。1は破片だが、須恵器の瓶類と考えられる。

遺物が少なく詳細な時期は不明だが、検出面から古代の遺構と考えられる。



第335図 第88号住居跡・出土遺物

第104表 第88号住居跡出土遺物観察表（第335図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	瓶類	—	[5.4]	—	B I K	5	普通	灰	外面降灰	

第89号住居跡（第336・337図）

第4次調査におけるIII区東寄りの南壁際、M-23グリッドに位置する。第4号畠跡・第152号溝跡と重複し、本遺構が新しい。遺構の南西角は先に第152号溝跡を調査したことによって壊される。

平面形態は方形で、規模は長軸6.10m、短軸5.07m、深さ0.20mを測り、主軸方位はN-0°を指す。覆土は単層であった。住居跡中央部から東西方向に走る壁溝が検出されたため、住居跡の拡張が行われたと考えられる。中央部の上層からは、円形に広がる焼土集中が検出された。

北壁中央にはカマドが設けられる。壁溝は検出されたが、南側は壁より1.35m程内側を廻っていた。住居跡の拡張によって残された、古い段階の壁溝と考えられる。住居跡の北東角からは、貯蔵穴が検出された。

カマドは袖が僅かに住居跡内に張り出し、燃焼部は浅く掘り窪められて、煙道部に向って緩やか

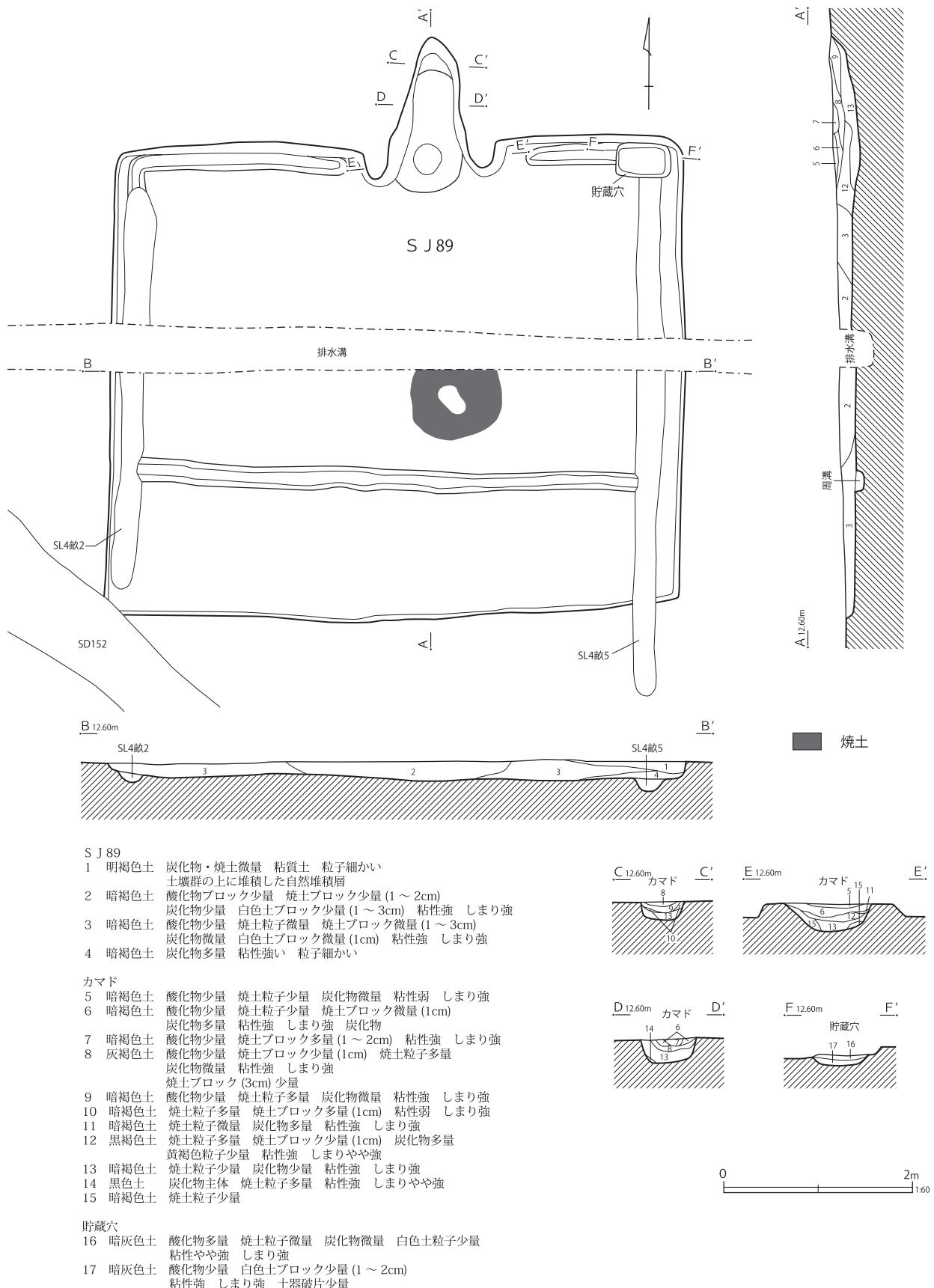
に立ち上がる構造を持つ。規模は全長1.63m、幅0.85m、深さ0.28mを測る。覆土は全層に焼土粒子やブロック、炭化物を含み、火床面直上からは一部炭化物層も検出された。

壁溝は北壁と南側で検出された。規模は、幅0.26～0.32m、深さ0.14～0.19mを測る。西壁側と東壁側の壁溝は、下層の畠跡を壁溝と誤認して掘り下げてしまったため、不明である。

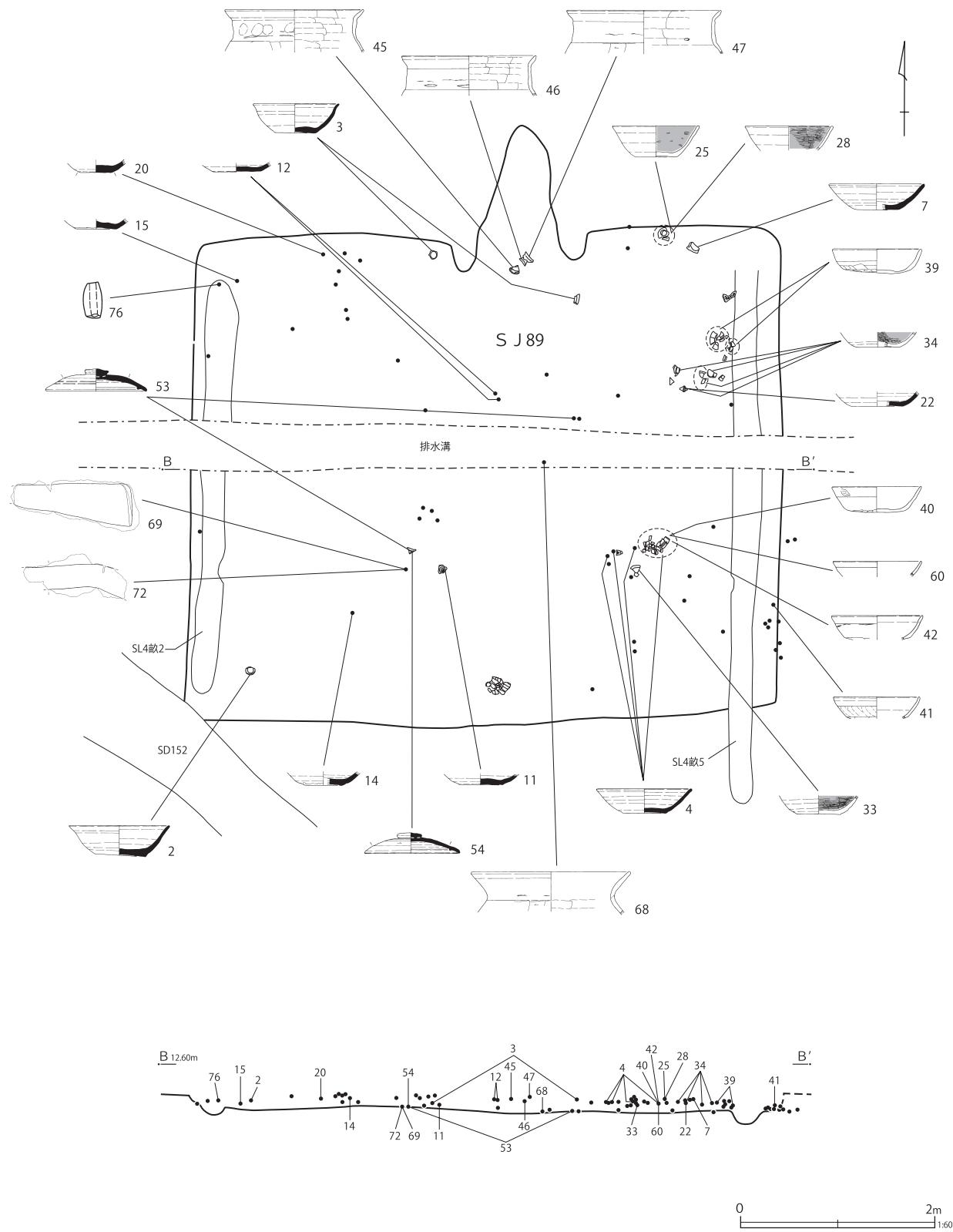
また、南側は壁から離れて壁溝が検出されたため、住居跡を拡張した際に残された古い段階の壁溝と考えられ、拡張前の住居跡の短軸は3.70m程であったと推察される。拡張後の南壁からは、壁溝は検出されなかった。

貯蔵穴は平面形態が方形で、規模は長径0.57m、短径0.35m、深さ0.12mを測る。覆土は上層には焼土粒子や炭化物が少量含まれ、下層には白色土ブロックや土器片が含まれていた。

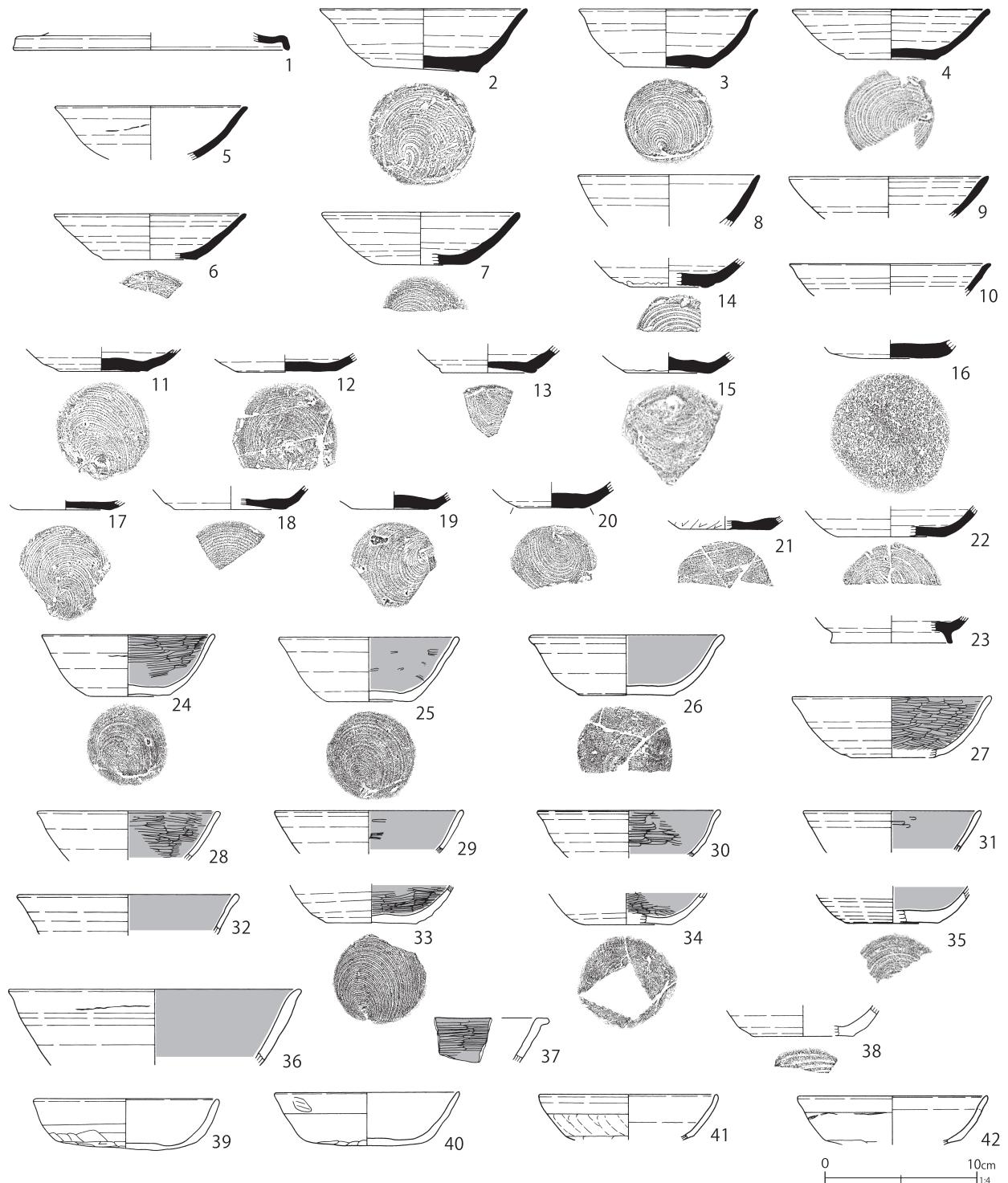
遺物は住居跡全体から検出されている。7～9



第336図 第89号住居跡



第337図 第89号住居跡遺物出土状況



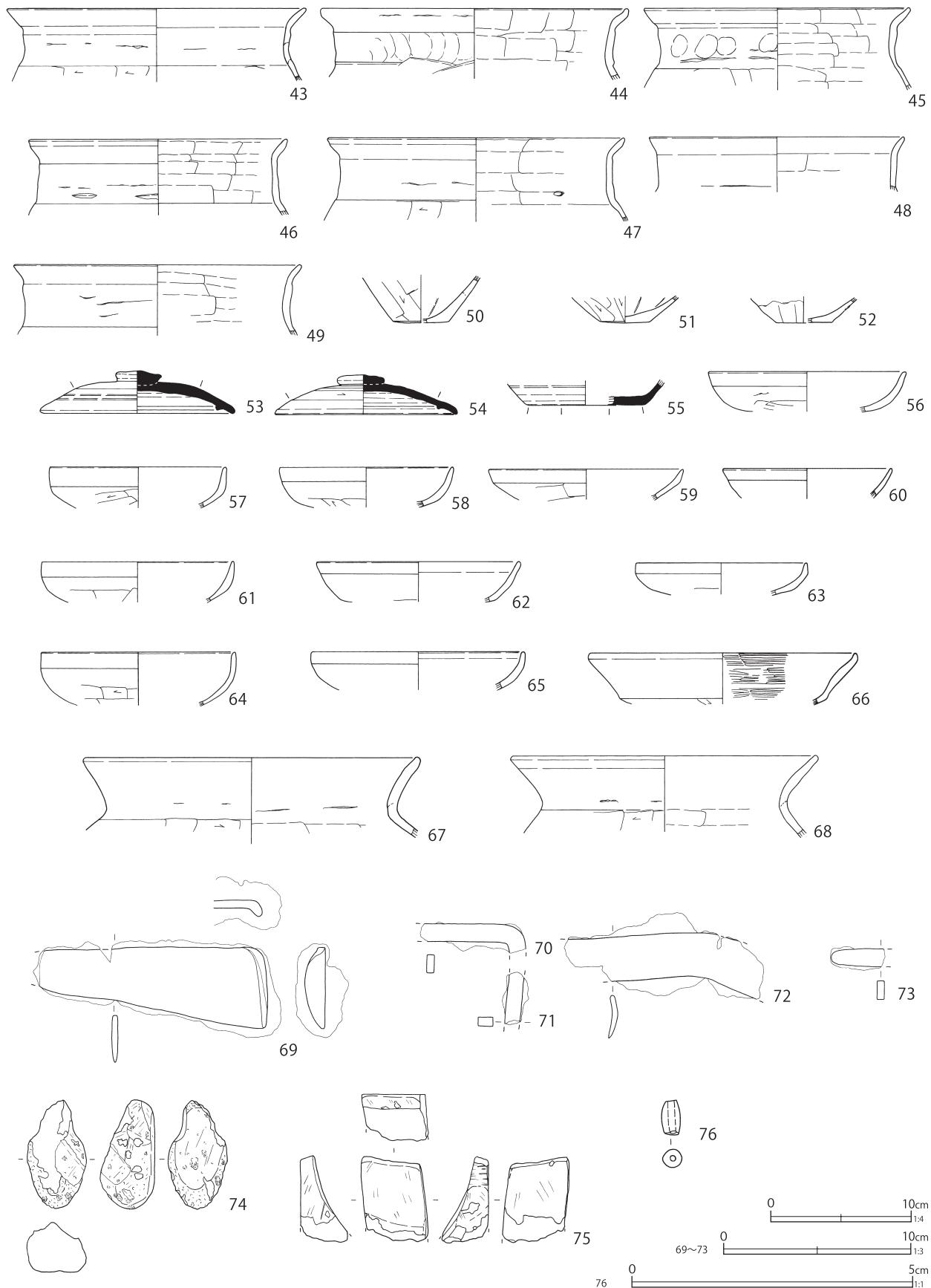
第338図 第89号住居跡出土遺物（1）

世紀代のものまで含まれるが、主体を成すのは9世紀代の遺物である。

遺物は須恵器蓋・坏・高台付坏、ロクロ土師器坏・塊・鉢、土師器坏・皿・甕、鉄製品鎌・門金

具・用途不明品、砥石、磨石、臼玉等が出土した（第338・339図1～76）。

まず、主体となる9世紀代の遺物から見ていくと、1～23は須恵器である。1は蓋で、南比企の



第339図 第89号住居跡出土遺物（2）

第105表 第89号住居跡出土遺物観察表 (第338・339図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(18.0)	[1.1]	—	J K	10	普通	褐灰	南比企産	
2	須恵器	坏	(13.6)	4.2	6.8	C I K	75	良好	灰白	No.40	118-2
3	須恵器	坏	(11.5)	3.9	(5.5)	I J	45	普通	褐灰	No.53・84 南比企産	118-3
4	須恵器	坏	12.6	3.3	5.8	E I K	80	普通	橙	No.59・60・61・63・68 三毳産か	118-4
5	須恵器	坏	(12.4)	[3.5]	—	J K	15	普通	灰黄		
6	須恵器	坏	(12.6)	3.0	(6.2)	H I K	20	普通	にぶい褐	三毳産か	
7	須恵器	坏	(12.8)	3.4	(5.6)	I K	35	普通	灰白	No.80 三毳産 底部および口唇部外縁に煤付着 外面全体被熱により摩耗剥離が激しい	118-5
8	須恵器	坏	(11.7)	[3.3]	—	I J	20	普通	黄灰	南比企産 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	
9	須恵器	坏	(13.0)	[2.7]	—	B I K	15	普通	灰白	三毳産か 内面煤付着	
10	須恵器	坏	(12.8)	[2.0]	—	I K	5	良好	灰		
11	須恵器	坏	—	[1.5]	5.8	E I K	75	普通	灰白	No.57 東金子産か	
12	須恵器	坏	—	[1.1]	(6.6)	E H I K	70	普通	にぶい黄橙	No.43・44	
13	須恵器	坏	—	[1.8]	(6.0)	I J	25	普通	にぶい褐	南比企産	
14	須恵器	坏	—	[2.4]	(5.0)	H I	5	普通	にぶい黄橙	No.30	
15	須恵器	坏	—	[1.3]	6.0	B C E H I K	70	普通	にぶい橙	No.91 末野産か 全体被熱	
16	須恵器	坏	—	[1.1]	6.4	G I J	95	普通	黄灰	南比企産か 胎土に砂粒子を非常に多く含む 内底面降灰 底部摩耗の為調整不明	
17	須恵器	坏	—	[0.6]	6.1	E I J K	75	普通	黄灰	南比企産	
18	須恵器	坏	—	[1.5]	(7.2)	C I K	20	普通	灰白	三毳産か	
19	須恵器	坏	—	[1.0]	5.5	A I	75	普通	にぶい黄橙		
20	須恵器	坏	—	[1.7]	(5.0)	A C E H I K	5	普通	灰白	No.50 三毳産 全体被熱	
21	須恵器	坏	—	[0.8]	(6.0)	D E H I K	5	普通	にぶい黄橙	三和産	
22	須恵器	坏	—	[1.9]	(6.0)	C I J	5	普通	灰白	No.73 三毳産	
23	須恵器	高台付坏	—	[1.7]	(8.0)	I K	5	普通	灰		
24	口クロ土師器	坏	(11.3)	4.0	5.4	C H I K	55	普通	灰褐	内黒	118-6
25	口クロ土師器	坏	11.6	4.2	5.6	C I K	70	普通	橙	No.81 内黒 内外面共に摩耗	118-7
26	口クロ土師器	坏	(12.4)	3.9	6.2	C E I K	45	普通	にぶい橙	内黒 内面摩耗が激しく調整は不明瞭	118-8
27	口クロ土師器	坏	(13.0)	4.0	(5.6)	B H K	40	普通	にぶい黄橙	内黒	118-9
28	口クロ土師器	坏	(11.8)	[3.2]	—	C I	20	普通	灰褐	内黒 口唇部内縁の摩耗が激しい	
29	口クロ土師器	坏	(12.2)	[2.7]	—	C H I	5	普通	灰白	内黒 内外面共に摩耗	
30	口クロ土師器	坏	(11.8)	[3.1]	—	C I	10	普通	にぶい黄橙	内黒	
31	口クロ土師器	坏	(11.6)	[2.7]	—	C H K	10	普通	にぶい橙	内黒 内面摩耗	
32	口クロ土師器	坏	(14.4)	[2.6]	—	C E I	10	普通	灰白	内黒 内面摩耗	
33	口クロ土師器	坏	—	[2.5]	6.0	C E H I K	70	普通	にぶい黄橙	No.64 内面被熱か 内黒と思われるが 黒色処理は完全に飛んでいる	
34	口クロ土師器	坏	—	[2.0]	5.8	C H K	70	普通	にぶい橙	No.71・72・73・75 内黒 黒色処理が部分的に飛んでいる	118-10
35	口クロ土師器	塊	—	[2.4]	(6.0)	C E I K	20	普通	にぶい黄橙	内黒	
36	口クロ土師器	塊	(19.2)	[4.0]	—	C I K	20	普通	褐灰	内黒 内面摩耗により調整不明瞭	
37	口クロ土師器	鉢	—	[2.9]	—	C H I	5	普通	橙	内黒	
38	口クロ土師器	坏	—	[2.0]	(6.8)	C E H I K	20	普通	にぶい黄橙		
39	土師器	坏	12.0	2.3	—	C I K	65	普通	にぶい橙	No.76・77	119-1
40	土師器	坏	(12.0)	3.5	—	C I K	35	普通	にぶい橙	No.68	
41	土師器	坏	(11.6)	[2.9]	—	C I K	20	普通	にぶい橙	No.8	
42	土師器	坏	(12.3)	[3.2]	—	C E K	20	普通	にぶい橙	No.68	
43	土師器	甕	(22.8)	[5.2]	—	C H I K	20	普通	にぶい橙		
44	土師器	甕	(21.7)	[5.0]	—	B C I K	15	普通	にぶい黄橙		
45	土師器	甕	(19.0)	[5.8]	—	B C E H I K	15	普通	にぶい橙	No.45	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
46	土師器	甕	(20.8)	[5.4]	—	C H I K	20	普通	橙	No.46	
47	土師器	甕	(21.0)	[5.9]	—	C H I K	15	普通	にぶい橙	No.47 内面頸部に種子圧痕有り 外面 煤付着	
48	土師器	甕	(18.0)	[3.9]	—	C E I K	10	普通	にぶい橙		
49	土師器	甕	(20.2)	[5.0]	—	C H I K	5	普通	橙		
50	土師器	甕	—	[3.4]	(4.0)	C H I K	20	普通	橙		
51	土師器	甕	—	[1.9]	(3.6)	B E I K	35	普通	にぶい橙		
52	土師器	甕	—	[1.8]	(4.0)	B C I K	15	普通	にぶい褐	外面煤付着	
53	須恵器	蓋	—	3.0	(13.4)	B D E I K	25	普通	にぶい黄橙	No.56・86 末野産 摘み径3.2	119-2
54	須恵器	蓋	(12.7)	[2.8]	—	B I K	45	普通	灰白	No.56	119-3
55	須恵器	坏	—	[1.7]	(8.0)	H I	5	普通	灰黄褐	東金子産か	
56	土師器	坏	(13.8)	[2.8]	—	C I K	10	普通	にぶい橙		
57	土師器	坏	(12.3)	[2.9]	—	B I K	10	普通	橙		
58	土師器	坏	(12.2)	[2.8]	—	C I K	10	普通	にぶい橙	外面煤付着	
59	土師器	坏	(13.6)	[2.2]	—	C E I	10	普通	にぶい橙		
60	土師器	坏	(10.7)	[2.3]	—	C D I	30	普通	明黄褐	No.68	
61	土師器	坏	(13.4)	[2.8]	—	B C I K	15	普通	にぶい橙		
62	土師器	坏	(14.2)	[2.8]	—	C I K	10	普通	にぶい橙		
63	土師器	坏	(12.0)	[2.2]	—	C E I K	10	普通	橙		
64	土師器	坏	(13.6)	[3.8]	—	C H I	10	普通	にぶい橙		
65	土師器	坏	(14.9)	[2.7]	—	C E I K	10	普通	にぶい橙		
66	土師器	皿	(18.7)	[3.7]	—	C H I K	10	普通	にぶい褐		
67	土師器	甕	(23.8)	[5.6]	—	B C D H I K	15	普通	橙	No.88	
68	土師器	甕	(11.7)	[5.3]	—	C I K	15	普通	にぶい黄橙		
69	鉄製品	鎌	刃長[12.6] 刃幅2.7 背幅0.4 重さ101.5g					No.90		126-2	
70	鉄製品	門金具	長さ[5.6] 幅1.0 厚さ0.4 重さ10.0g							126-2	
71	鉄製品	門金具	長さ[2.8] 幅0.8 厚さ0.5 重さ3.8g							126-2	
72	鉄製品	不明	長さ[10.7] 幅2.4 厚さ0.3 重さ82.9g					No.90		126-2	
73	鉄製品	不明	長さ[2.8] 幅1.0 厚さ0.4 重さ5.0g					門金具の一部か		126-2	
74	石製品	磨石	長さ7.7 幅4.2 厚さ3.8 重さ48.0g					角閃石安山岩 多孔質 自然面遺存 使用面3		128-1	
75	石製品	砥石	長さ6.1 幅4.7 厚さ3.3 重さ94.0g					凝灰岩 砥面5遺存 刀物痕有り		128-1	
76	石製品	臼玉	長さ1.2 幅0.7 厚さ0.6 重さ1.0g					No.48 玉髓 被熱(白化)		128-1	

製品である。

2~22は坏で、南比企と三毳を主体とし、東金子や三和の製品も含まれる。これらのうち4点には被熱が認められた。2は生産地不明の坏である。硬質に焼き締められ、胎土には石英の他、緑色鉱物を含む。3は南比企の坏で、底径が口径の二分の一以下になることから、鳩山編年VIII期と考えられる。16は針状物質を多く含むため、南比企の製品と考えられるが、厚手で砂粒を非常に多く含む。

24~38はロクロ土師器である。24~35は内黒の坏で、胎土に角閃石を含むため、利根川流域の製品と考えられる。底部調整は基本的に回転糸切り

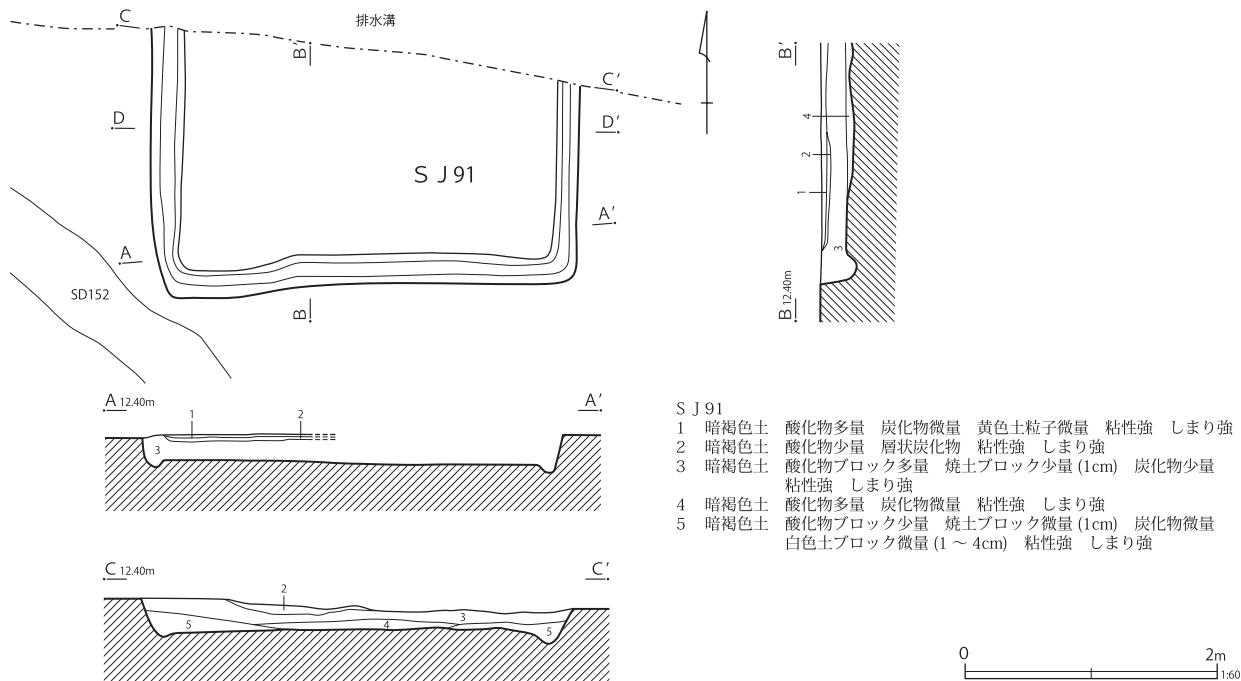
離し無調整だが、26は不整方向の手持ちヘラケズリ調整が施される。

36は内黒の塊である。大型の製品で器壁が厚く、口唇部が僅かに外反する。37は内黒の鉢である。大型の製品と推察され、口縁部が屈曲して水平に広がる。38は坏である。

39~52は土師器である。39~42は北武藏型坏で、平底で扁平になるタイプのものである。

43~52は「コ」の字状口縁甕である。定型化した段階で、頸部は長いものと短いものを含む。

以上が9世紀代の遺物になる。時期としては、須恵器坏の年代や土師器甕の頸部形状から、9世



第340図 第91号住居跡

紀中葉～後半と考えられる。

次に、9世紀以外の遺物を見ていくと、53～55は須恵器である。53、54は蓋で、どちらも内面にカエリを持つ小型のもので、7世紀代のものと推察される。55は須恵器の壺で、底部外周回転ヘラケズリ調整が施される。8世紀後半のものか。

56～68は土師器である。56～65は壺で、いずれも浅身で扁平になるが、丸底のものである。8世紀前半のものか。66は皿で、内面に横方向のミガキが施され、口唇部がやや内湾する。8世紀前半のものと推察される。

67、68は頸部が「く」の字状になる甕で、8世紀中葉の遺物と考えられる。

以上が9世紀代以外の遺物である。7～8世紀代の遺物が比較的まとまった量で検出されたため、付近に7～8世紀代の遺構があった可能性が考えられ、複数の時期の遺物が検出されていることから、時代幅を持ったさまざまな遺構が重複していたと推察される。

69～73は鉄製品である。69は鎌である。70、71は門金具で、断面が長方形になる。72、73は用途

不明品である。

74～76は石製品である。74は角閃石安山岩製の磨石である。75は凝灰岩製の砥石で、刃物痕が認められる。76は玉髓製の臼玉で、被熱し白色化している。

この他に、図示し得なかつたが、馬歯が1点出土した。

住居跡の時期は、9世紀中～後半の遺物が主体を占めることから、同時代の遺構と考えられる。

第91号住居跡（第340図）

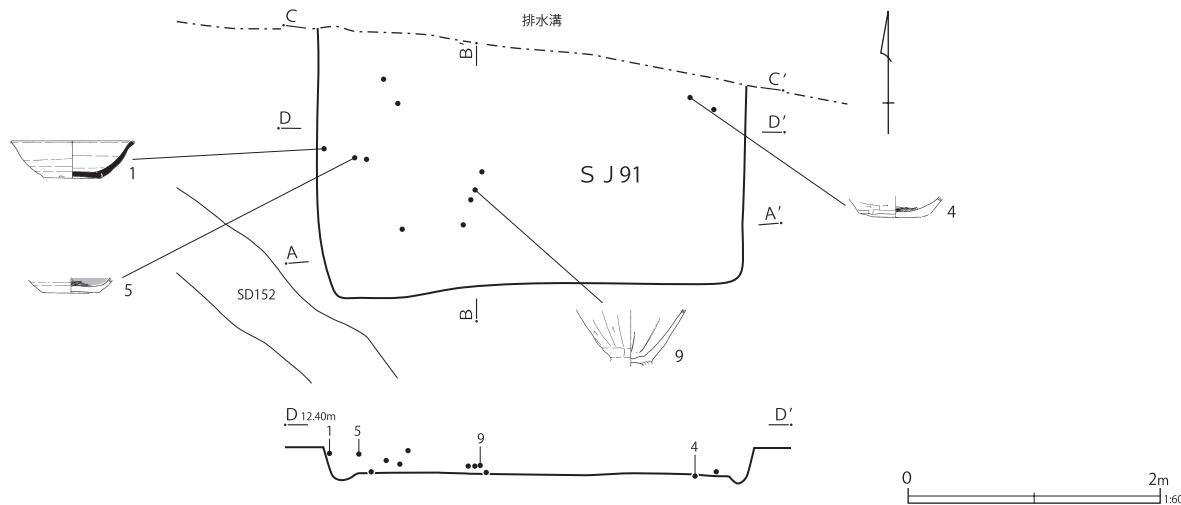
第4次調査におけるIII区西寄りの北壁際、L-21・22グリッドに位置する。遺構の北半部は調査区域外に延びるため、平面形態は不明である。

規模は、残存部で長軸3.40m、短軸2.15m、深さ0.28mを測り、長軸方位はN-90°を指す。覆土はレンズ状に堆積し、全層に炭化物が含まれる。検出された範囲内では壁溝が全周する。

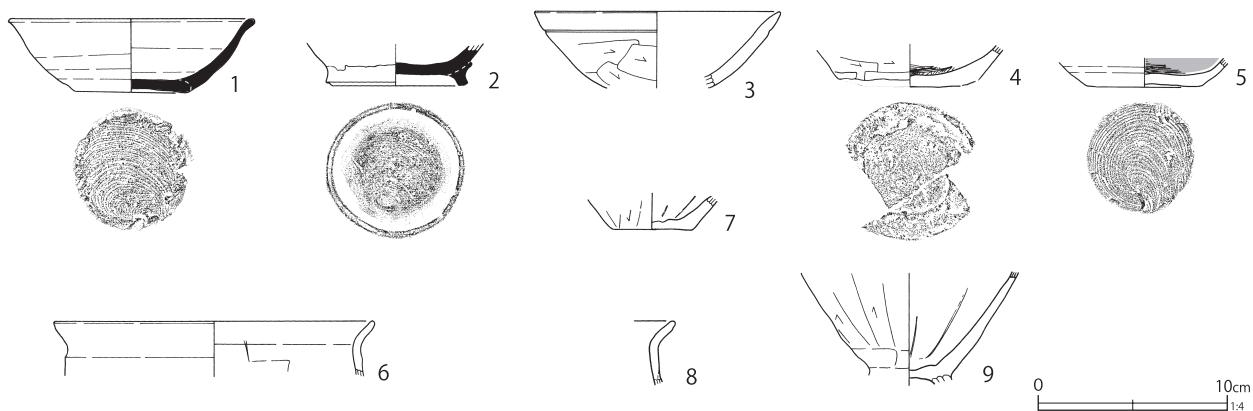
壁溝は規模が幅0.17～0.27m、深さ0.05～0.11mを測る。

カマド、ピット等は検出されなかった。

遺物は住居跡内全体から散発的に検出され、須



第341図 第91号住居跡遺物出土状況



第342図 第91号住居跡出土遺物

第106表 第91号住居跡出土遺物観察表（第342図）

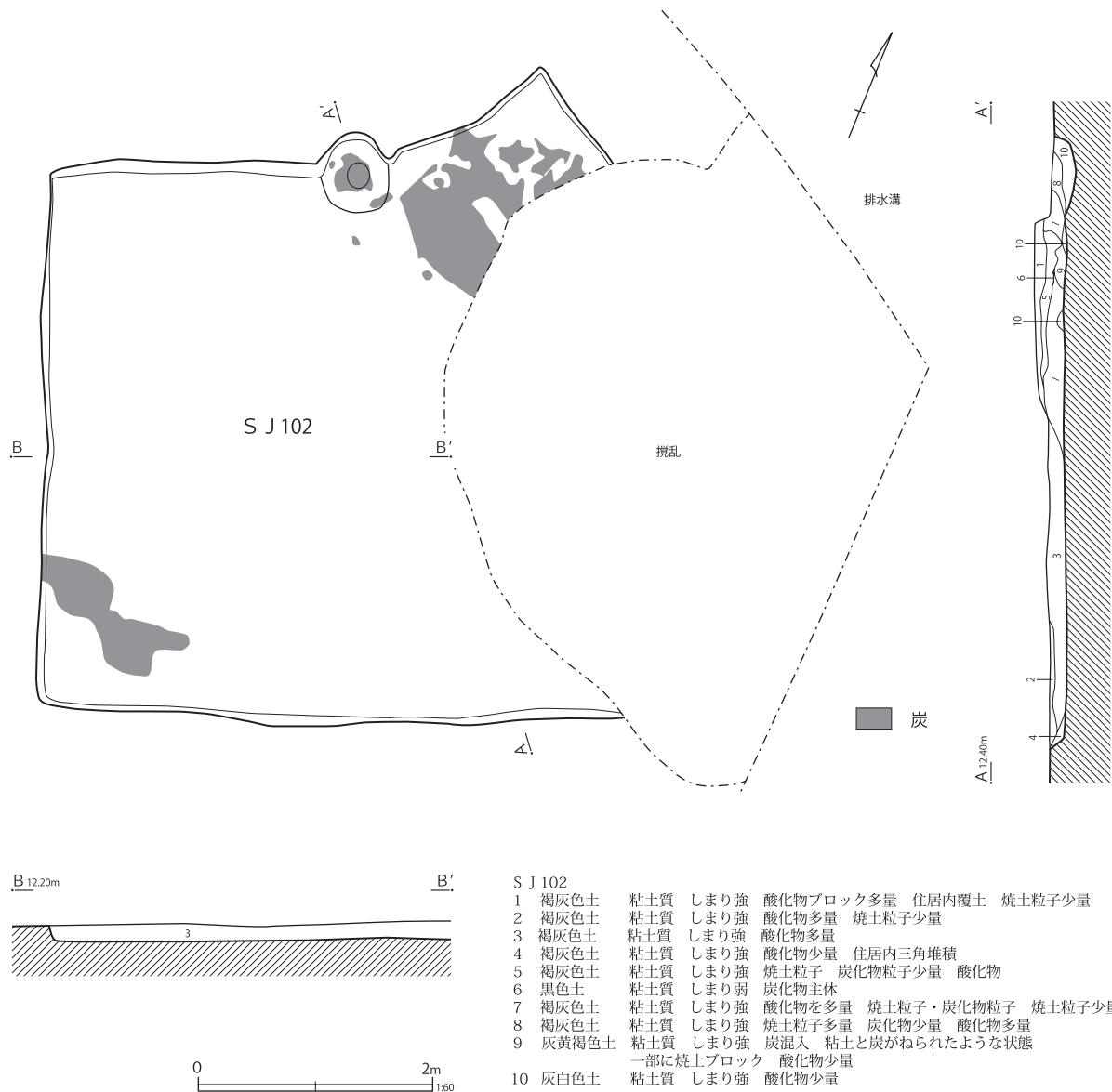
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	12.8	3.9	5.8	B E I K	75	普通	灰白	No.1 末野産	119-4
2	須恵器	壺	—	[2.2]	6.7	B E I	90	普通	灰	末野産 高台貼り付け痕が一部明瞭に残る	119-5
3	ロクロ土師器	壺	(12.7)	[4.0]	—	C D I K	15	普通	にぶい橙	内面摩耗	
4	ロクロ土師器	高台付壺	—	[2.1]	—	C E I K	70	普通	にぶい褐	No.2 高台剥離 内面ミガキ	
5	ロクロ土師器	壺	—	[1.5]	5.8	C I K	80	普通	灰白	No.11 内黒 外面全体煤付着	
6	土師器	甕	(16.7)	[2.9]	—	B H I K	10	普通	にぶい橙		
7	土師器	甕	—	[1.8]	(4.2)	C H I K	25	普通	にぶい橙		
8	土師器	甕	—	[3.4]	—	C I K	5	普通	にぶい黄橙		
9	土師器	小型台付甕	—	[5.9]	—	C H I K	55	普通	にぶい黄橙	No.7 内外面煤付着	

惠器壺・高台付壺、ロクロ土師器壺・高台付壺、土師器壺・甕・小型台付甕等が出土した（第342図1～9）。

1、2は須恵器で、どちらも末野の製品である。

1は須恵器の壺で、口縁部が僅かに外反する。2は高台付壺で、高台部の貼り付け痕が明瞭に残る。

3～5はロクロ土師器である。3は口縁部外面に沈線が廻り、口縁部はヨコナデ、外面下半は



第343図 第102号住居跡

ヘラケズリが施される。内底面には煤の付着が認められた。4と同一個体の可能性がある。4は高台付壺で、外面下端に手持ちヘラケズリ調整、内面にはミガキが施される。内底面には煤が付着し、底部外周には高台の剥離痕が明瞭に認められた。5は内黒の壺で、底部のみ残存していた。

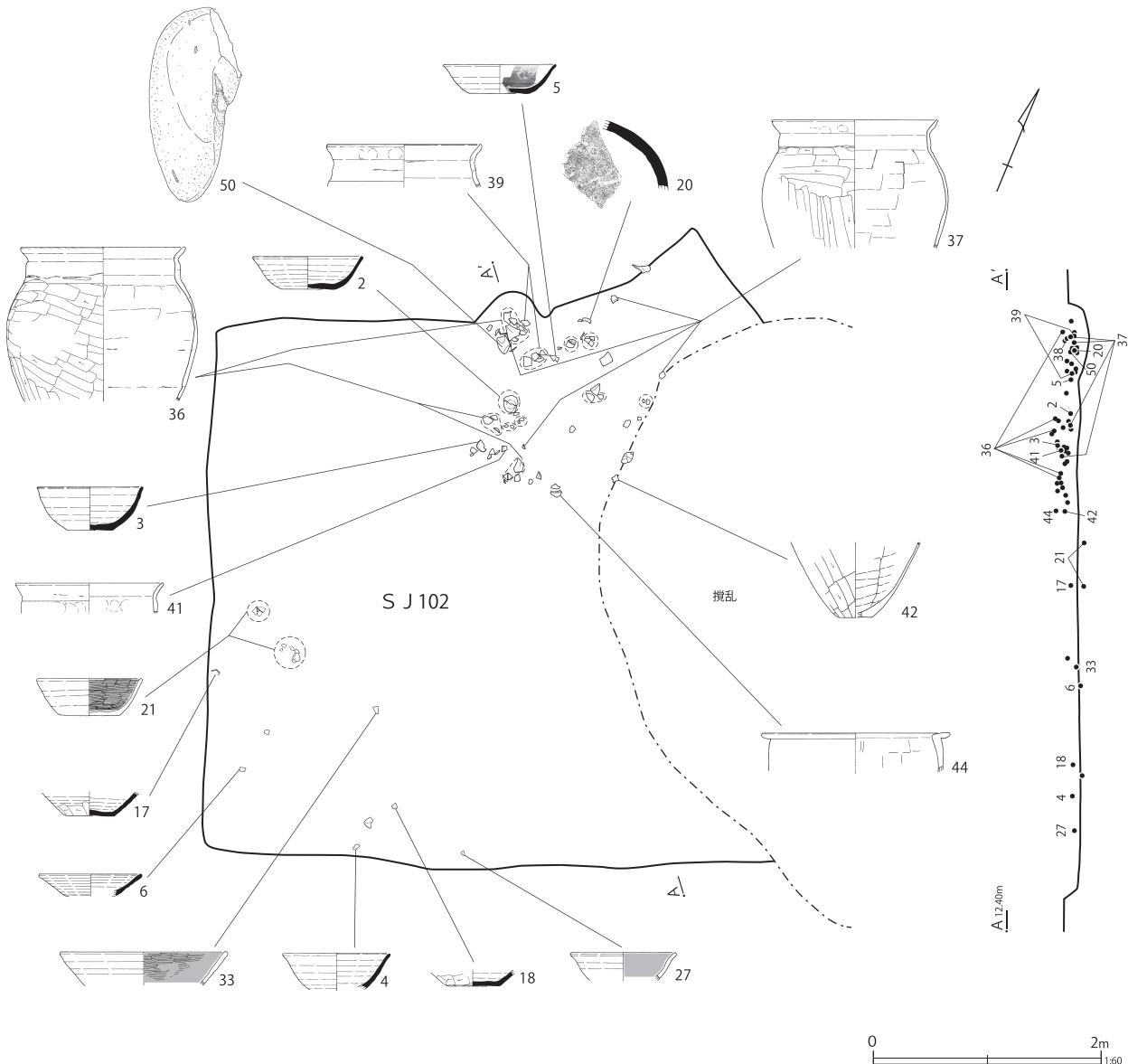
6～9は土師器の甕である。6、8は「コ」の字状口縁甕で、定型化した段階のものか。9は小型台付甕である。

遺物の時期は、須恵器壺や土師器甕の形状から、9世紀中葉～後半と考えられる。

第102号住居跡（第343・344図）

第5・6次調査におけるVI区中央やや西寄り、R・S-36グリッドに位置する。第2号遺物集中地点と重複し、本遺構が古い。住居跡の東半部は現代の井戸跡から湧水が発生し、養生したことによって未掘となったため、搅乱とした。平面形態は不明である。

住居跡の歪みが強く、北東角が北側へ大きく突出し、東壁も大きく東へ傾く。規模は、残存部で長軸5.00m、短軸4.83m、深さ0.24mを測り、主軸方位はN-27°-Wを指す。



第344図 第102号住居跡遺物出土状況

覆土は、南半部は単層だが、北半部は床面付近に白色土や炭化物を含む土がブロック状に堆積する。その上に焼土粒子や炭化物混じりの層が堆積する。住居跡北半部から検出されたブロックは、カマドの周辺部に当たるため、住居廃絶時にカマドを壊し、その際に発生したカマドの残骸である可能性が考えられる。北壁中央にはカマドが設けられる。

カマドは袖が無く、壁面を掘り込んで構築され、燃焼部は浅く掘り窪められる構造を持つ。煙道部は検出されなかった。規模は、残存部で全長0.68m、

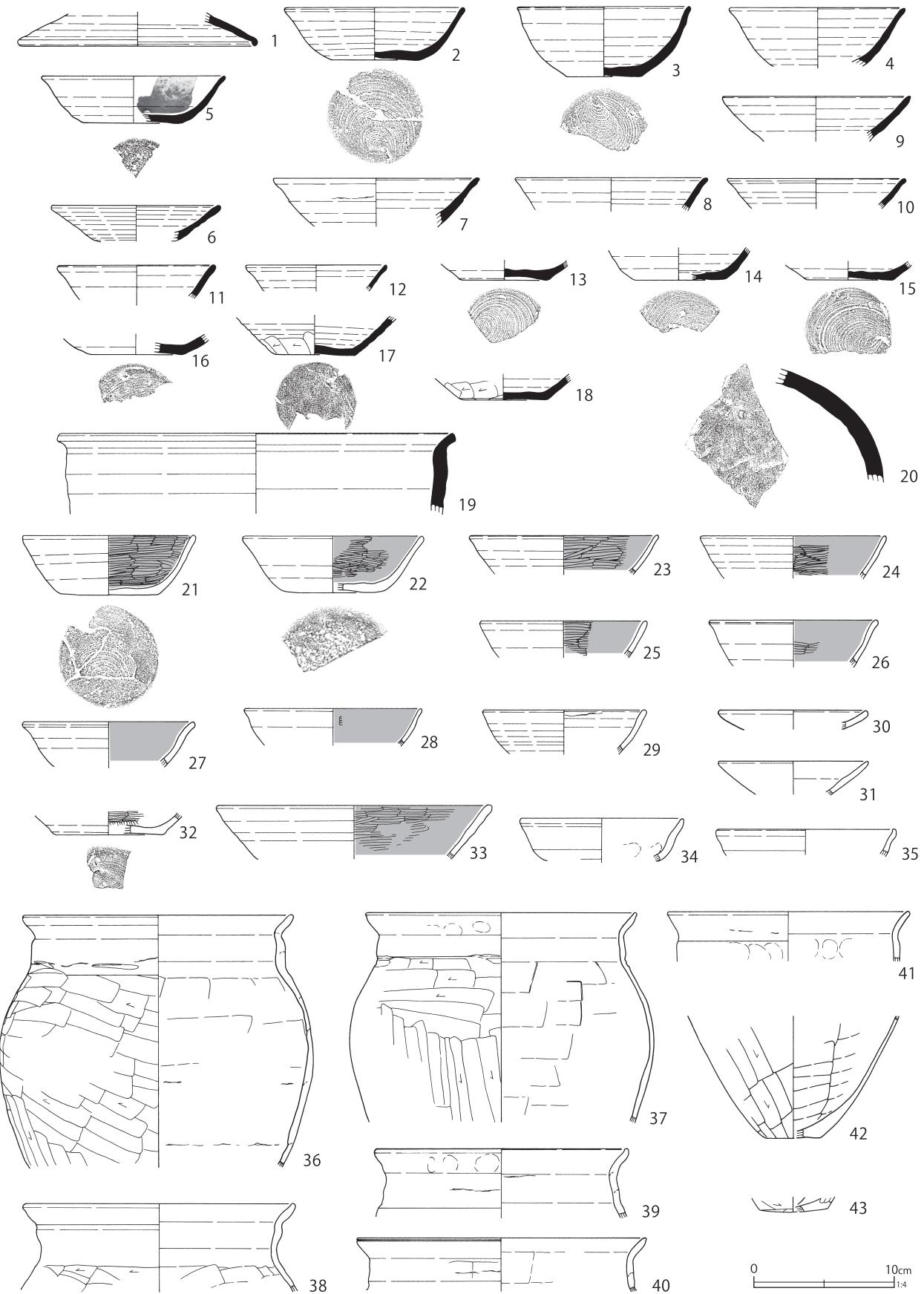
幅0.60m、深さ0.20mを測る。

覆土は全層に焼土粒子や炭化物を含み、部分的に炭化物層が検出された。燃焼部の中央からは、自然石を利用した支脚が検出された。自然石であるため、据え付けるために粘土を貼り付けて安定させていたと考えられ、石の上端には白色粘土が付着していた。

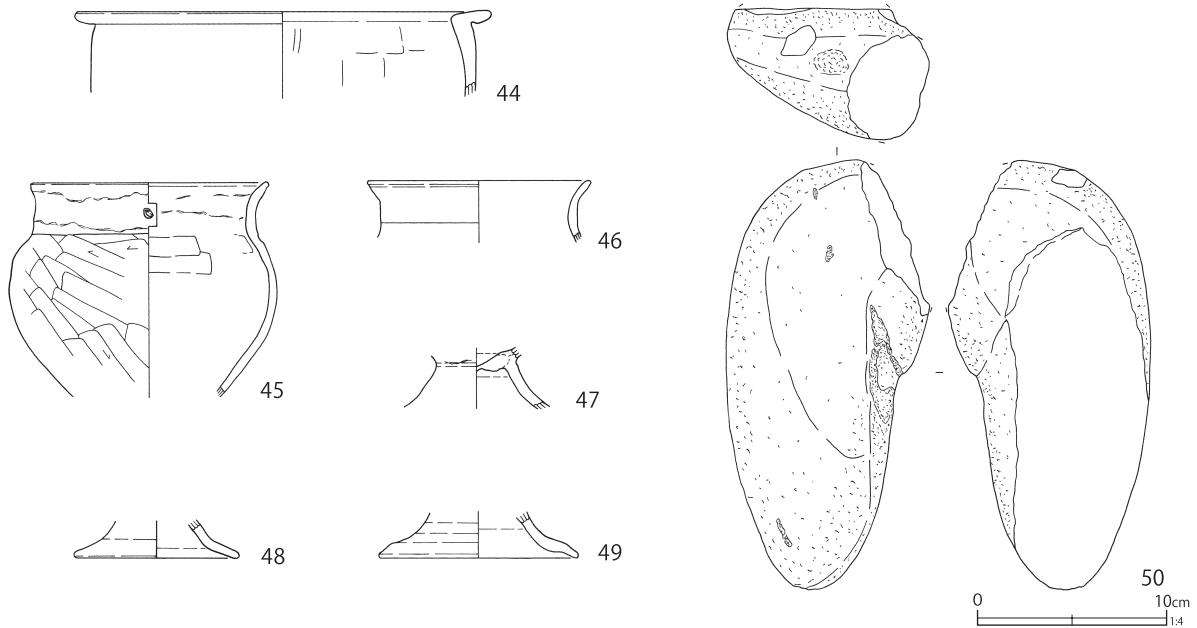
カマドの東側および住居跡の南西角からは、炭化物の広がりが検出された。

壁溝、ピット等は検出されなかった。

遺物は住居跡全体から出土し、特にカマドの前



第345図 第102号住居跡出土遺物（1）



第346図 第102号住居跡出土遺物（2）

部からまとまった量の遺物が検出された。遺物は須恵器蓋・壺・鉢・甕、ロクロ土師器壺・鉢、土師器壺・甕・小型台付甕、支脚等が出土した（第345・346図1～50）。

1～20は須恵器である。1は蓋で、末野の製品である。2～18は壺である。南比企や末野、三毳、三和等の製品が含まれる。2は生産地不明の壺で、胎土に赤色粒子を多く含み、角閃石または雲母と推察される微細な有色鉱物を僅かに含む。3は塊形になる。5は内面下半を主体に、煤が厚く付着する。

19は鉢または甕になると推察される。口縁部が僅かに外反するが、胴部は寸胴形になる。20は甕で、外面に降灰を受ける。

21～33はロクロ土師器である。21～28は内黒の壺で、いずれも角閃石を含むため、利根川流域の製品と考えられる。21は回転糸切り離し後に外周手持ちヘラケズリ調整が施される。

29～32は壺である。30、31は小皿形になる。10世紀代の遺物の混入品か、小型台付甕の脚部になる可能性もある。32は内黒ではないが、内面にミガキが施される。33は内黒の鉢で、大型で開く形

になる。胎土に雲母と思われる有色鉱物を含むため、他の内黒の土器類とは生産地が異なる可能性がある。

34～49は土師器である。34、35は北武藏型の壺で、平底になるタイプのものである。

36～49は甕である。36～43は「コ」の字状口縁甕で、定型化した段階のものであり、頸部が長い。

44は三河型の甕である。胎土に雲母を含み、口縁部が水平に延び、胴部内外面には丁寧なヘラナデが施される。短胴甕になると推察される。

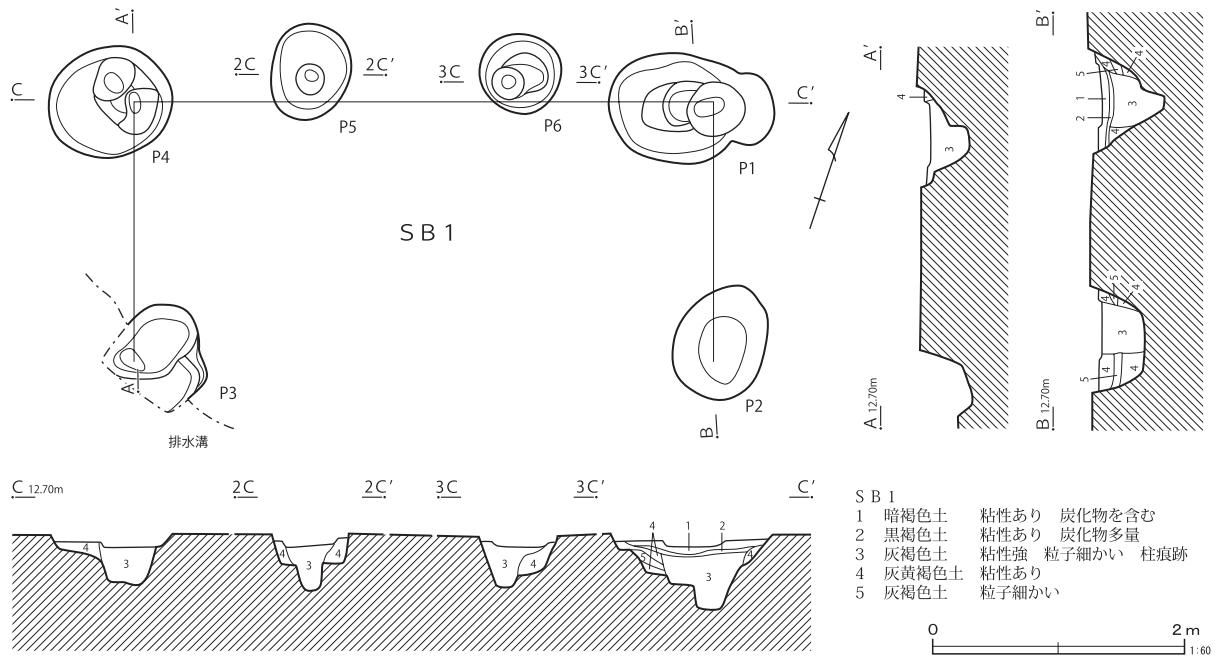
45～49は小型台付甕である。45は頸部外面が帶状に摩耗する。また、頸部に種子圧痕と推察される痕跡も認められる。

50は砂岩の自然石を利用した支脚である。上端部に白色付着物が認められることから、燃焼部に据え付けて使用していたと推察され、全体的に被熱し、煤が付着している。

遺物の時期は、須恵器壺や土師器甕の形状から、9世紀中葉～後半と考えられる。本住居跡の上層に土器集中が広がる。局地的に集中していることから、住居廃絶後は土器捨て場として利用されていた可能性が考えられる。

第107表 第102号住居跡出土遺物観察表（第345・346図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(16.6)	[2.3]	—	B E H I	10	普通	灰	末野産	
2	須恵器	坏	12.5	3.7	6.0	C E	80	普通	黄灰	No.43	119-6
3	須恵器	坏	(12.1)	5.0	(5.2)	H I K	45	普通	灰白	No.37 外面全面被熱	
4	須恵器	坏	(12.4)	[4.2]	—	E I K	10	普通	灰白	No.55	
5	須恵器	坏	(12.9)	[3.3]	(7.2)	B I K	15	普通	にぶい褐	No.9 末野産 内面全体に厚く煤付着	
6	須恵器	坏	(11.8)	[2.6]	—	D I K	20	普通	褐灰	No.51 口唇部外縁に重ね焼き変色有り	
7	須恵器	坏	(14.6)	[3.4]	—	G I J K	5	普通	灰	南比企産	
8	須恵器	坏	(13.4)	[2.3]	—	E I J K	5	普通	灰	南比企産	
9	須恵器	坏	(13.2)	[3.2]	—	E I K	5	普通	灰	南比企産	
10	須恵器	坏	(12.5)	[2.1]	—	B I	15	普通	黄灰		
11	須恵器	坏	(11.0)	[2.4]	—	B I K	5	普通	にぶい赤褐	末野産 内面煤付着	
12	須恵器	坏	(11.7)	[1.8]	—	B H I K	10	普通	黄灰		
13	須恵器	坏	—	[1.4]	(6.0)	I K	40	普通	暗黄灰		
14	須恵器	坏	—	[2.2]	(6.4)	B C I	30	普通	にぶい黄褐		
15	須恵器	坏	—	[1.3]	(6.1)	E I K	35	普通	灰		
16	須恵器	坏	—	[1.4]	(7.0)	E I K	25	普通	灰白	内面被熱	
17	須恵器	坏	—	[2.8]	5.7	B D I K	70	普通	灰白	No.49 三和産	119-7
18	須恵器	坏	—	[1.8]	(6.0)	D E I K	30	普通	灰白	No.53 三和産 内外面被熱	
19	須恵器	鉢	(28.0)	[5.7]	—	B I K	10	普通	灰白	三毳産か	
20	須恵器	甕	—	[8.1]	—	H I K	5	普通	灰	外面降灰	
21	口クロ土師器	坏	12.0	4.2	6.9	C E H I K	80	普通	にぶい橙	No.47・48 内黒 外面は摩耗が激しい	119-8
22	口クロ土師器	坏	(12.6)	4.0	(5.8)	C I K	25	普通	にぶい褐	内黒	
23	口クロ土師器	坏	(13.2)	[2.7]	—	C I	5	普通	橙	内黒	
24	口クロ土師器	坏	(13.0)	[3.0]	—	C I K	5	普通	浅黄橙	内黒 黒色処理は飛んでいる	
25	口クロ土師器	坏	(11.5)	[2.6]	—	C I K	10	普通	橙	内黒	
26	口クロ土師器	坏	(11.8)	[3.2]	—	C D H I K	15	普通	にぶい黄橙	内黒	
27	口クロ土師器	坏	(11.9)	[3.2]	—	B C D I K	15	普通	灰白	No.56 内黒 摩耗により不明瞭	
28	口クロ土師器	坏	(12.5)	[2.6]	—	C I	10	普通	橙	内黒	
29	口クロ土師器	坏	(11.4)	[3.1]	—	C E I K	5	普通	橙	内面剥離	
30	口クロ土師器	坏	(10.4)	[1.3]	—	B C H I K	20	普通	にぶい橙	小皿型	
31	口クロ土師器	坏	(10.5)	[2.4]	—	B E H I K	25	普通	橙	小皿型	
32	口クロ土師器	坏	—	[1.6]	(7.6)	C I K	5	普通	にぶい橙	内面ミガキ	
33	口クロ土師器	鉢	(19.2)	[3.8]	—	A E H I K	15	普通	橙	No.52 内黒	
34	土師器	坏	(11.4)	[3.0]	—	C I K	25	普通	にぶい橙	No.14	
35	土師器	坏	(12.4)	[1.9]	—	C D I K	5	普通	明赤褐		
36	土師器	甕	18.7	[17.9]	—	B C H I K	75	普通	にぶい赤褐	No.1・30・31・38・39 外面煤付着	119-10
37	土師器	甕	(19.2)	[14.9]	—	B C H I K	35	普通	にぶい赤褐	No.8・17・20・32・57 外面煤付着	119-11
38	土師器	甕	(19.0)	[6.2]	—	C E H I K	20	普通	にぶい橙		
39	土師器	甕	(17.7)	[4.9]	—	C H K	15	普通	にぶい橙	No.8・10	
40	土師器	甕	(20.3)	[3.8]	—	B E I K	10	普通	明赤褐		
41	土師器	甕	(17.0)	[3.5]	—	C E I	5	普通	にぶい黄橙	No.33	
42	土師器	甕	—	[8.7]	(3.8)	B C H I	15	普通	明赤褐	No.62	
43	土師器	甕	—	[1.0]	(4.8)	C I K	30	普通	にぶい黄橙	外面摩耗	
44	土師器	甕	(21.3)	[4.6]	—	A E K	10	普通	灰白	No.25 三河型甕	
45	土師器	小型台付甕	12.4	[11.3]	—	B E H I K	45	普通	にぶい褐	頸部から口縁部にかけて摩耗による剥離が帶状に認められる	119-9
46	土師器	小型台付甕	(11.6)	[3.3]	—	B C H I K	15	普通	橙		
47	土師器	小型台付甕	—	[3.2]	—	A B C E G H I	70	普通	明赤褐		
48	土師器	小型台付甕	—	[1.9]	(18.3)	C I K	45	普通	にぶい橙		
49	土師器	小型台付甕	—	[2.4]	(10.2)	C I K	25	普通	にぶい橙		
50	石製品	支脚	長さ22.7 幅10.7 厚さ6.9 重さ1774.2 g						No.2 砂岩 被熱（部分的に赤黒化）上端部白色付着物	128-1	



第347図 第1号掘立柱建物跡

(2) 掘立柱建物跡

古代の掘立柱建物跡は、東側調査区からIV区にかけて検出され、集落域に收まるように分布する。

主軸方位はほぼ北を指すものと、やや西に傾くもの、西に傾くものの3種類に分かれる。北を指すのは第3・7号掘立柱建物で、西に傾くのが第1・2・4号掘立柱建物、どちらとも異なり、やや西に傾くのが第6号掘立柱建物となる。

総柱建物は第3号掘立柱建物のみで、他はいずれも側柱建物である。おそらく、集落に伴う倉庫のような施設と推察される。

第1号掘立柱建物跡（第347図）

J-13グリッドに位置する。南側は調査区域外へ延びるため全体像は不明だが、検出された範囲で、桁行2間以上、梁行3間の南北棟の側柱建物である。

規模は芯々距離で桁行2.30m以上、梁行4.62m、柱間寸法は桁行方向が2.05m、梁行方向が1.40～1.60mを測る。長軸方位はN-19°-Wを指す。柱穴は、直径0.62～1.30m、深さ0.39～0.60mを

測る。

柱の当たりはピット1・2・4・5・6の5箇所で確認された。覆土は柱痕部分が第3層にあたり、その周りを固めるように第4・5層が互層状に堆積する。ピット1では、柱痕跡を覆うように炭化物を多く含む層が薄く堆積していた。

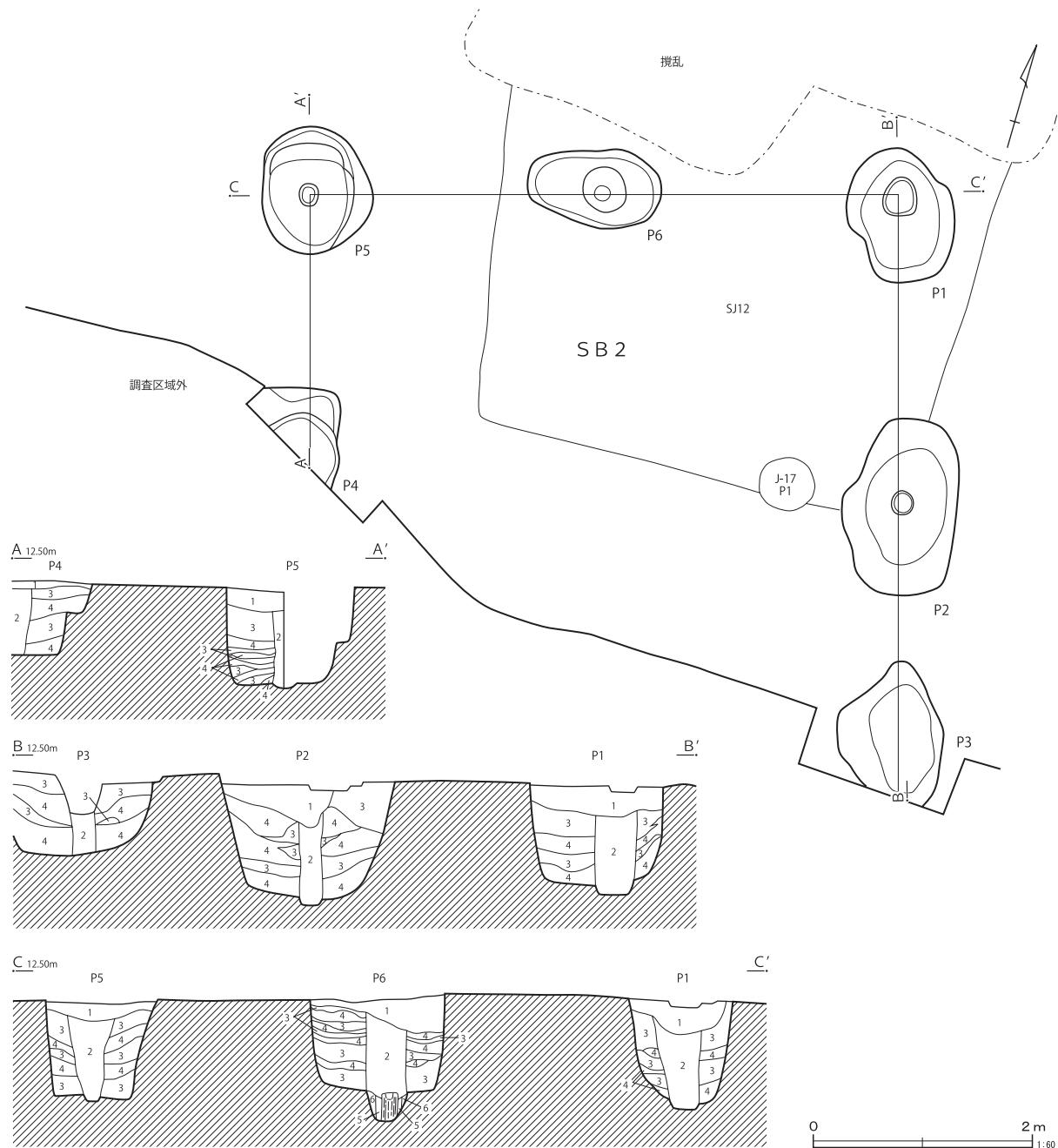
出土遺物は須恵器の蓋が1点のみ出土した（第353図1）。1は蓋で、南比企の製品である。

遺物が1点のみであるため、詳細な時期は不明だが、須恵器の蓋が出土したことから、8世紀以降のものと考えられる。

第2号掘立柱建物跡（第348図）

I・J-17グリッドに位置する。南側は調査区域外へ延びるため全体像は不明だが、検出された範囲で、桁行2間以上、梁行2間の南北棟の側柱建物である。

規模は芯々距離で桁行5.55m以上、梁行5.37m、柱間寸法は桁行方向が2.30～2.80m、梁行方向が2.65～2.70mを測る。長軸方位はN-17°-Wを指す。柱穴は、直径1.10～1.53m、深さ0.37～1.19m



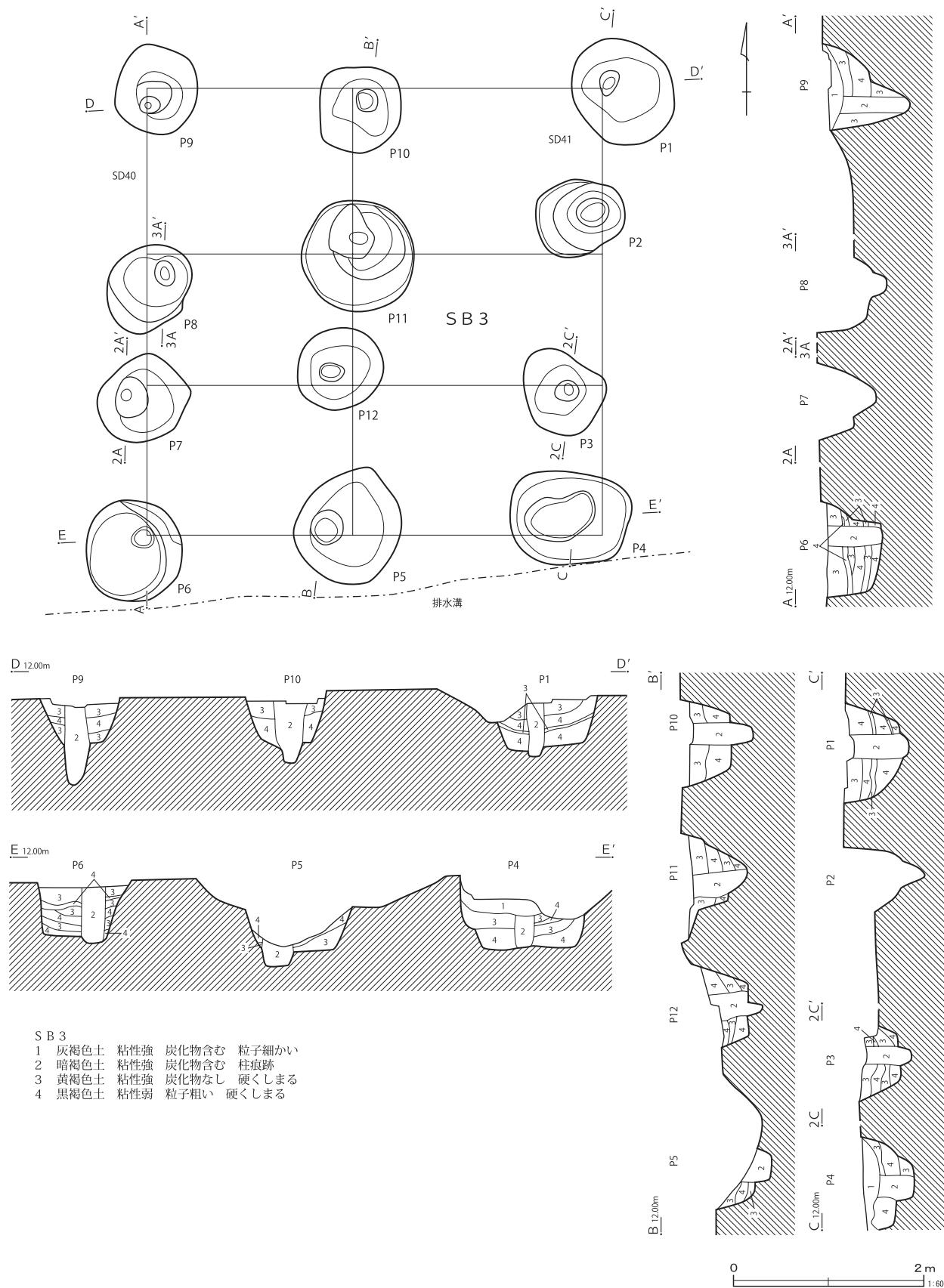
第348図 第2号掘立柱建物跡

を測る。

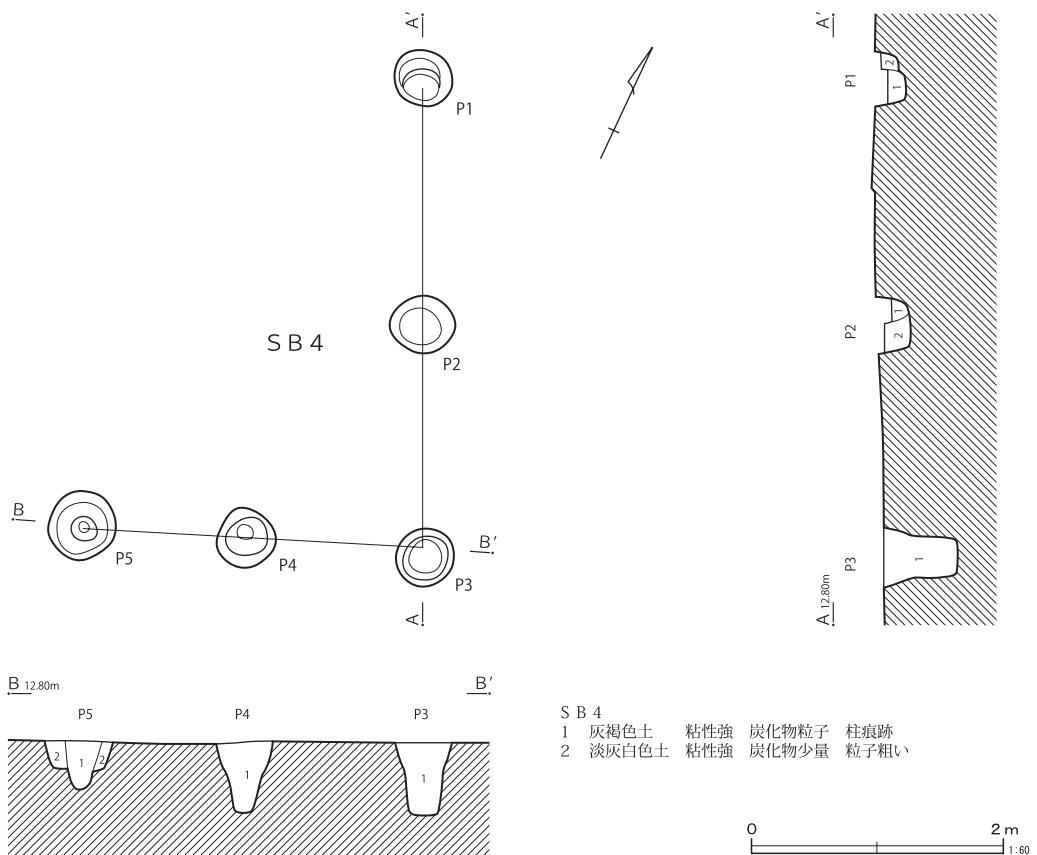
柱の当たりはピット1・2・5・6の4箇所で確認された。柱痕は全てのピットで検出され、覆土は柱痕部分が第2層にあたり、その周囲に根固めのために第3・4層が互層状に堆積する。ピッ

トの上層は、柱痕跡を覆うように焼土粒子や炭化物を含む層が薄く堆積していた。ピット6の柱痕部分からは、柱材が検出された。残存していたのは柱根部分であった。

出土遺物は須恵器蓋・壺、土師器皿・ミニチュ



第349図 第3号掘立柱建物跡



第350図 第4号掘立柱建物跡

ア土器、柱材が出土した（第353図2～7）。2～4は須恵器である。2は環状つまみの蓋で、南比企の製品である。3、4は壺で、口径と底径が大きいことから、8世紀代の製品と考えられる。

5、6は土師器である。5は皿か。6は薬壺形のミニチュア土器である。

7は柱材である。柱根部分で、芯持材が使用されていた。

遺物の時期は、須恵器蓋や壺の形状から、8世紀代のものと考えられる。

第3号掘立柱建物跡（第349図）

I・J-15・16グリッドに位置する。桁行3間、梁行2間の総柱建物だが、柱穴の並び方には歪みがある。

規模は芯々距離で桁行4.55～4.60m、梁行4.55～4.85m、柱間寸法は桁行方向が4.45～4.65m、梁行方向が2.31～2.65mを測る。柱穴は、直径0.92

～1.29m、深さ0.60～0.92mを測る。

柱痕は全ピットで確認された。覆土は柱痕部分が第2層にあたり、根固めとして第3・4層が互層状に堆積する。

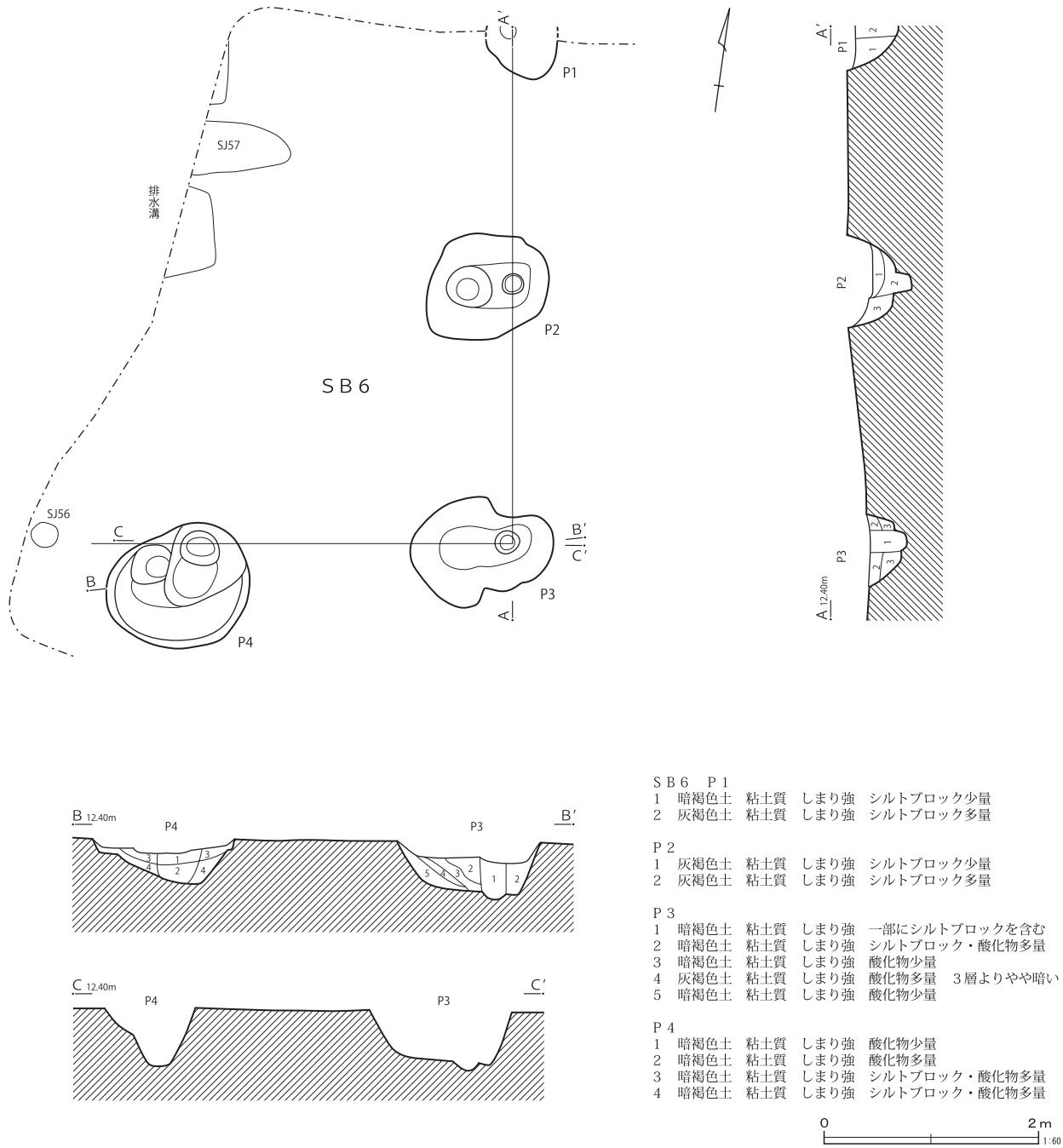
出土遺物は須恵器壺、土師器高壺・埴形土器・甕が出土した（第353図8～12）。8、9は須恵器である。8は南比企の製品で、口径が比較的大きいことから8世紀中葉の遺物と考えられる。

10～12は土師器である。10は高壺の壺部で、立ち上がり部に段を持つ。11は埴形土器または小型壺と推察され、上半部が残存する。12は甕の底部か。いずれも古墳時代の遺物であり、混入品と考えられる。

遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、須恵器壺の形状から、8世紀以降のものと考えられる。

第4号掘立柱建物跡（第350図）

I・J-14グリッドに位置する。全体像は不明



第351図 第6号掘立柱建物跡

だが、検出された範囲で、桁行2間以上、梁行2間以上の側柱建物である。他の掘立柱建物跡よりも柱穴が小規模で、他で確認された根固めの痕跡も認められない。

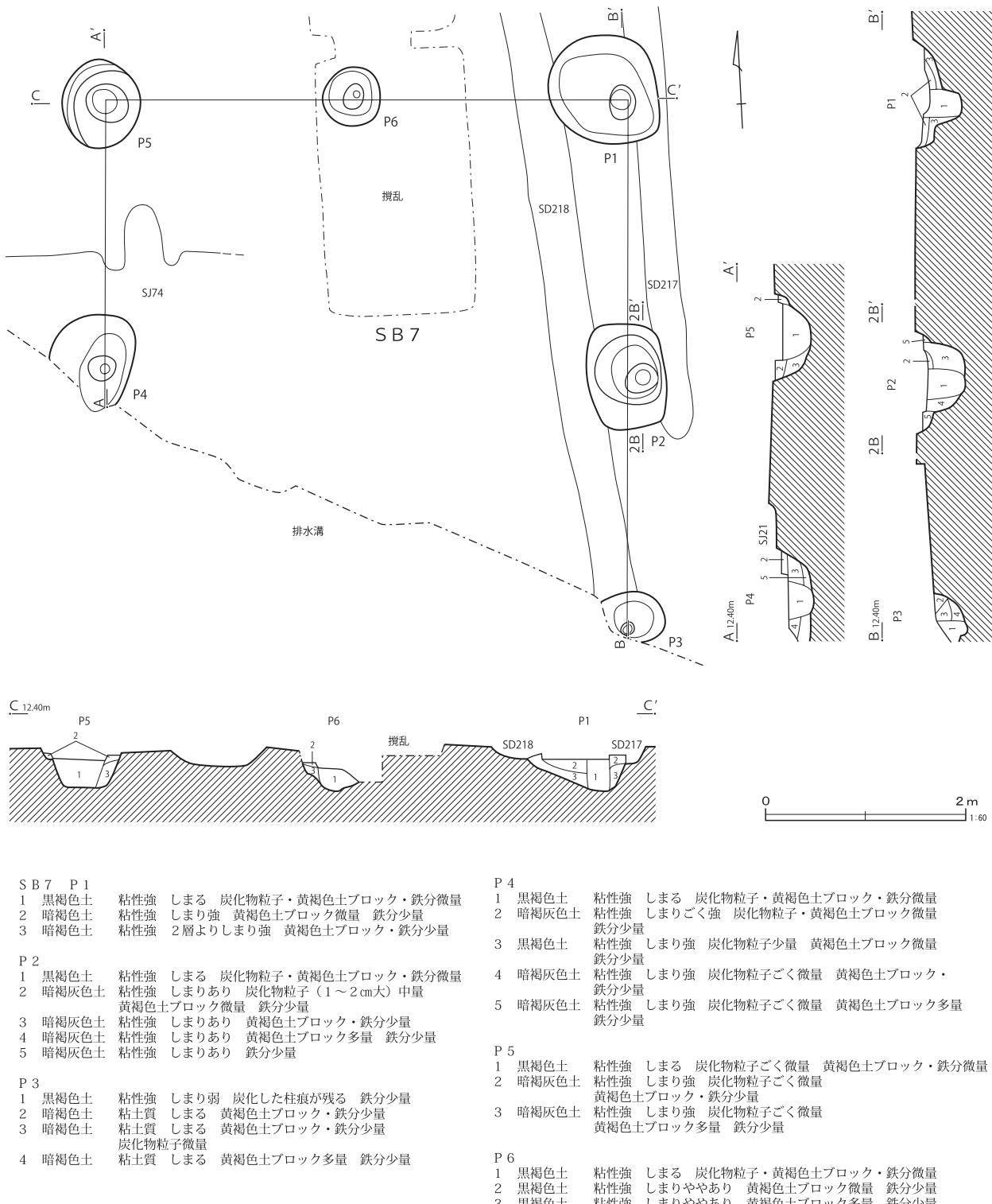
規模は芯々距離で桁行3.95m以上、梁行3.00m以上、柱間寸法は桁行方向が1.75~1.90m、梁行方向が1.30~1.40mを測る。長軸方位はN-26° -

Wを指す。柱穴は、直径0.46~0.55m、深さ0.28~0.60mを測る。

柱の当たりはピット1・5で確認され、柱痕は全ピットで確認された。

遺物は出土しなかった。

遺物が無いため詳細な時期は不明だが、検出面から、古代の遺構と考えられる。



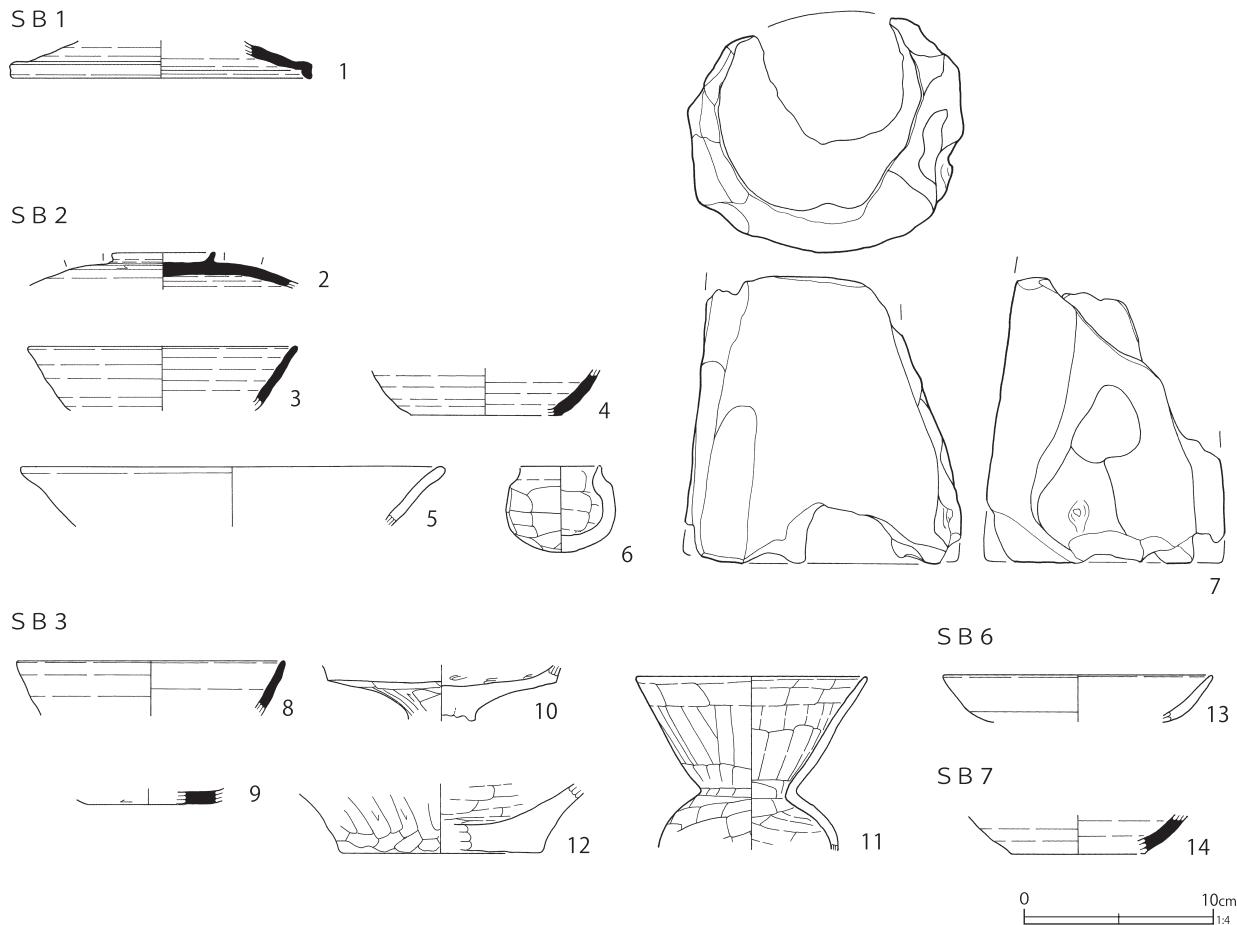
第352図 第7号掘立柱建物跡

第6号掘立柱建物跡（第351図）

K・L-17グリッドに位置する。北側と西側が調査区域外へ延びるため全体像は不明だが、検出

された範囲で、南北2間以上、東西2間以上の側柱建物である。

規模は芯々距離で行4.82m以上、梁行3.95m以



第353図 掘立柱建物跡出土遺物

第108表 掘立柱建物跡出土遺物観察表（第353図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(15.8)	[1.9]	—	E I J K	5	良好	灰	SB1P2 南比企産	
2	須恵器	蓋	—	[1.9]	—	E H I J K	25	良好	灰	SB2 P2No.1 南比企産	
3	須恵器	壺	(14.0)	[3.3]	—	E H K	10	良好	黄灰	SB2P6	
4	須恵器	壺	—	[2.4]	(8.0)	H I J K	10	良好	黄灰	SB2P3 南比企産か 底部手持ちヘラ ケズリ調整	
5	土師器	皿	(22.2)	[3.1]	—	C E H I K	5	普通	橙	SB2 内外面摩耗	
6	土師器	ニチュア土器	(4.2)	4.5	—	C H I K	70	普通	にぶい橙	SB2 外面黒斑有り	120-1
7	木製品	柱材	長さ[15.2] 幅[14.6] 厚さ[12.3]							SB2 芯持材	
8	須恵器	壺	(14.0)	[2.9]	—	E H I J K	5	良好	黄灰	SB3 南比企産	
9	須恵器	壺	—	[0.8]	(6.6)	E H I K	15	普通	灰白	SB3P7	
10	土師器	高壺	—	[3.0]	—	C E I K	50	普通	明赤褐	SB3P3 外面黒斑有り 内面ミガキか 古墳時代	
11	土師器	咲形土器	12.0	[8.1]	—	E I K	70	普通	にぶい赤褐	SB3P2・3 外面黒斑有り 古墳時代	120-2
12	土師器	甕	—	[3.6]	(10.5)	C E I K	20	普通	にぶい橙	SB3P2 外面黒斑有り 古墳時代	
13	土師器	皿	(14.0)	[2.4]	—	C H I K	10	普通	橙	SB2P4	
14	須恵器	壺	—	[2.0]	(7.0)	E H I K	20	良好	橙	SB3P4・5 東金子産か 酸化焰焼成 破断面および外面一部還元化	

上、柱間寸法は南北方向が2.40～2.45m、東西方が2.90mを測る。長軸方位はN-8°-Wを指す。柱穴は、直径0.58～1.35m、深さ0.36～0.62mを測る。

柱の当たりはピット2・3で確認され、柱痕はピット2～4で検出された。

出土遺物は土師器の皿が1点のみ出土した（第353図13）。13は皿で、器形から8世紀前半のものと推察される。

遺物が1点のみであるため詳細な時期は不明だが、検出面から古代の遺構と考えられる。

第7号掘立柱建物跡（第352図）

O-25・26、P-26グリッドに位置する。南側は調査区域外へ延びるため全体像は不明だが、検出された範囲で、桁行2間以上、梁行2間の南北棟の側柱建物である。

規模は心々距離で桁行5.30m以上、梁行5.32m、柱間寸法は桁行方向が2.50～2.80m、梁行方向が2.50～2.70mを測る。長軸方位はN-3°-Eを指す。柱穴は、直径0.67～1.16m、深さ0.43～0.52mを測る。

柱の当たりと柱痕は全ピットで確認された。

出土遺物は須恵器の壺が1点のみ出土した（第353図14）。14は壺で、体部下端の破片であるため、時期等は不明である。

遺物が1点のみであるため、詳細な時期は不明だが、須恵器の壺が出土したことから、8世紀以降のものと考えられる。

（3）井戸跡

古代の井戸跡は13基確認され、全て素掘りの井戸であった。井戸跡の分布は中央調査区の東側、II区東側、VI区西側に多い傾向が認められる。V区を除き、古墳時代の分布とはやや異なった配置となる。水脈が移動したか、集落内の土地利用方法が変化したためかは明確にし得ない。

平面形態は円形または楕円形で、出土遺物や検出面から、古代の井戸跡と判断した。

第55号井戸跡（第354図）

東側調査区西端にあたるH-13グリッドに位置し、西側は排水溝によって壊される。

平面形態は楕円形で、上部が崩れたことにより断面は漏斗状になる。規模は長径1.82m、短径1.45mを測り、深さは1.44m以上になる。

遺物は須恵器壺、土師器壺・皿・甕等が出土した（第356図1～8）。1は須恵器の壺で、南比企の製品である。

2～8は土師器である。2～4は北武藏型壺で、口縁部外面ヨコナデの下に無調整帶を持つ。5、6は皿である。5は口縁部が直線的に開き、6は大きく外反する。7、8は甕で、頸部が「く」の字状になる段階の甕である。

遺物の時期は、須恵器壺の口径や土師器壺・皿の器形、甕の頸部形状などから、8世紀代のものと推察される。

第82号井戸跡（第354図）

中央調査区北東端、G-12グリッドに位置し、西側は中・近世以降の溝跡によって壊される。

平面形態は円形で、上部が崩れたことにより断面は漏斗状になる。規模は直径1.25m、深さは1.52m以上になる。

遺物は出土しなかった。

遺物が無いため詳細な時期は不明だが、検出面から、古代の遺構と考えられる。

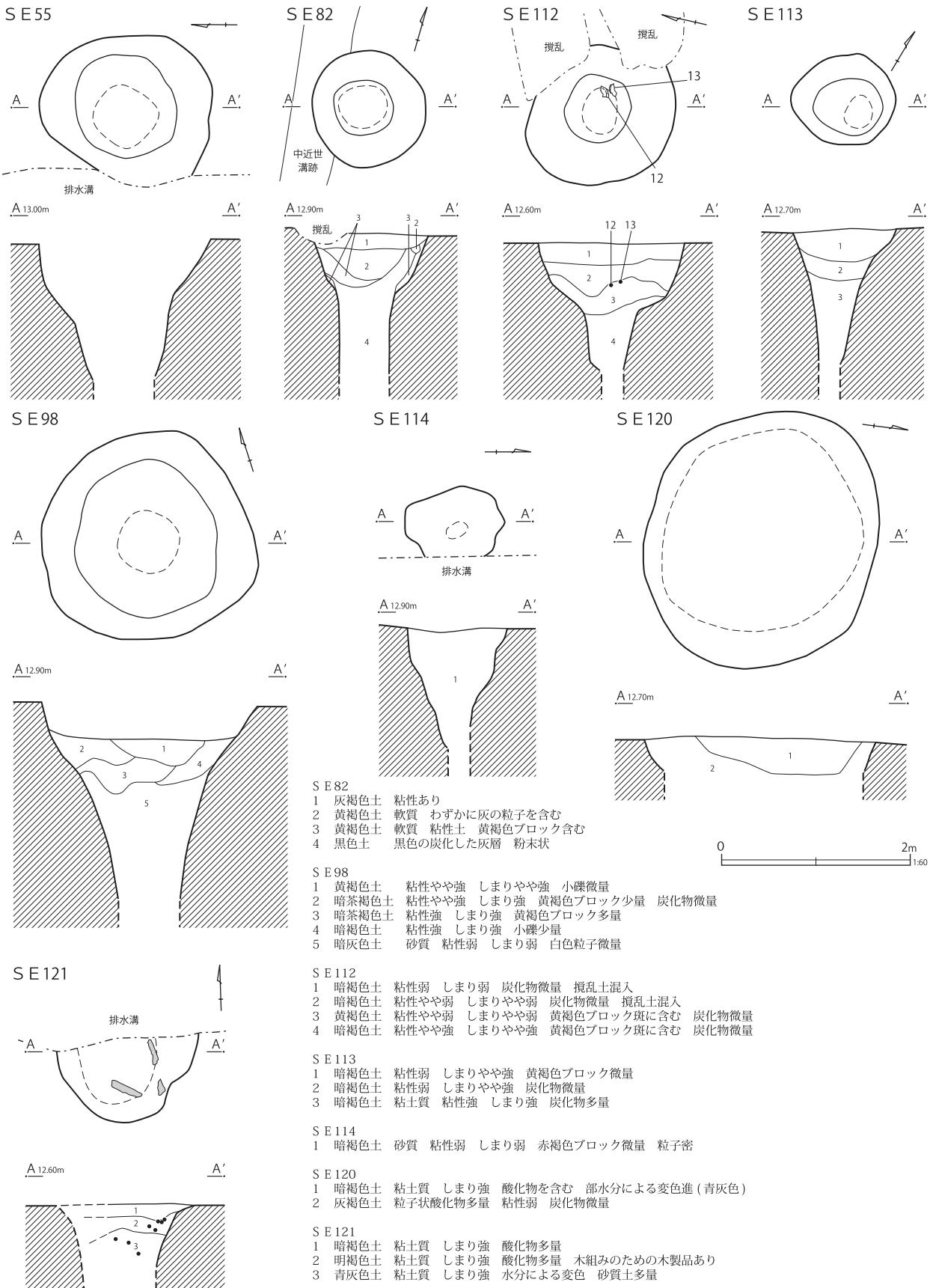
第98号井戸跡（第354図）

中央調査区中央部、H-10グリッドに位置する。

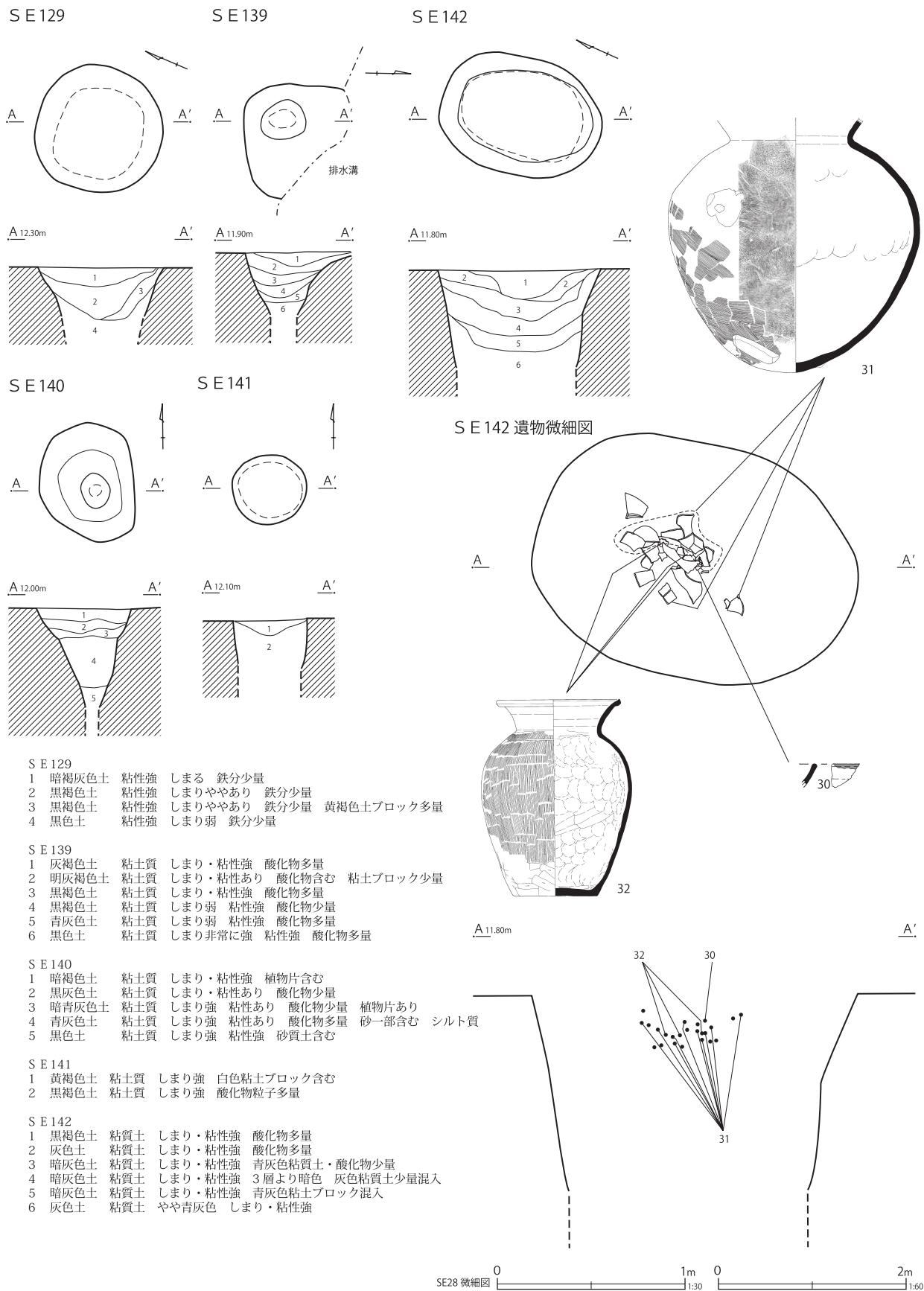
平面形態は不整円形で、上部が崩れたことにより断面は漏斗状になる。規模は長径2.27m、短径2.18m、深さは2.08m以上になる。

遺物は須恵器壺、土師器甕が出土した（第356図9～11）。9は須恵器の壺である。底部の破片だが、外周回転ヘラケズリ調整が認められる。

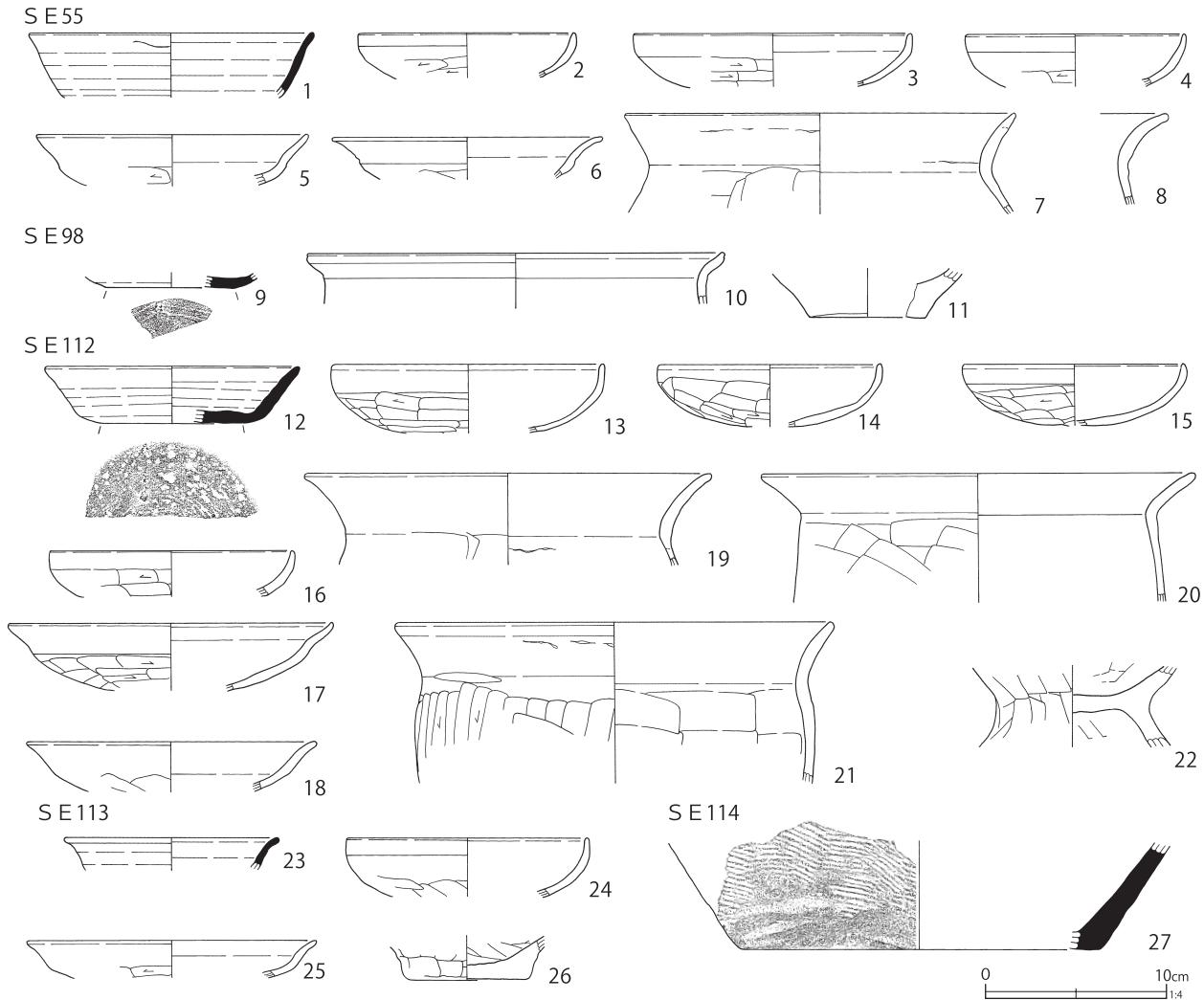
10、11は甕である。10は口縁部の破片だが、「コ」の字状口縁甕か。11は下端部の破片で、厚手になることから古墳時代の遺物と考えられる。



第354図 井戸跡 (1)



第355図 井戸跡（2）



第356図 井戸跡出土遺物（1）

遺物の時期は、点数が少なく、破片資料のみであるため詳細な時期は不明だが、検出面や須恵器壺、土師器甕の特徴から古代の遺構と考えられる。

第112号井戸跡（第354図）

中央調査区東端部、H-12グリッドに位置し、東側は搅乱によって部分的に壊される。

平面形態は楕円形で、断面は漏斗状になる。規模は長径1.68m、短径1.43m、深さは1.26mを測る。

遺物は須恵器壺、土師器壺・皿・甕・台付甕等が出土した（第356図12～22）。12は須恵器の壺で、三窓の製品と推察される。口径が広く、底部は全周回転ヘラケズリ調整が施される。

13～22は土師器である。13～16は北武藏型壺

で、口縁部はやや内湾し、口縁部外面ヨコナデの直下までヘラケズリが施される。

17、18は皿である。17は口縁部が直線的に開き、18は外反する。

19～21は甕である。19、20は口縁部に最大径を持つもので、胴部上半に僅かに膨らみを持つタイプのものか。22は台付甕で、古墳時代の遺物である。

遺物の時期は、須恵器壺や土師器壺・甕の形状から、8世紀前半と考えられる。

第113号井戸跡（第354図）

中央調査区東端部、H-12グリッドに位置する。

平面形態は不整円形で、断面は逆「ハ」の字状



第357図 井戸跡出土遺物（2）

になる。規模は長径1.11m、短径0.94m、深さは1.46m以上になる。覆土下層には、炭化物が多く含まれていた。

遺物は須恵器壺、土師器壺・皿・甕等が出土した（第356図23～26）。23は須恵器の壺で、口縁部が大きく外反する。

24～26は土師器である。24は北武藏型壺で、

口縁部は垂直気味に立ち上がり、口縁部外面ヨコナデの下に無調整帶を持つ。25は皿で、口縁部が大きく外反する。26は甕の底部で、厚手であることから古墳時代の遺物と推察される。

遺物の時期は、須恵器壺や土師器壺の形状から、8～9世紀代の遺構と考えられる。

第109表 井戸跡出土遺物観察表（第356・357図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	(15.5)	[3.5]	—	E I J K	5	良好	黄灰	SE55 南比企産	
2	土師器	壺	(11.5)	[2.5]	—	C E I K	10	普通	橙	SE55	
3	土師器	壺	(15.1)	[2.9]	—	C E I K	10	普通	橙	SE55	
4	土師器	壺	(12.0)	[2.9]	—	E H I K	5	普通	橙	SE55	
5	土師器	皿	(14.8)	[2.8]	—	C E H I K	5	普通	にぶい橙	SE55	
6	土師器	皿	(14.8)	[2.3]	—	C E I K	10	普通	橙	SE55	
7	土師器	甕	(21.4)	[5.6]	—	C I K	10	普通	橙	SE55	
8	土師器	甕	—	[4.9]	—	C	5	普通	橙	SE55	
9	須恵器	壺	—	[0.8]	(7.0)	E H I K	15	良好	灰	SE17	
10	土師器	甕	(22.9)	[2.8]	—	B C H I K	5	普通	にぶい橙	SE17	
11	土師器	甕	—	[2.7]	(6.4)	E H I K	10	普通	灰黄褐	SE17	
12	須恵器	壺	(13.8)	[3.1]	(8.2)	E I K	30	普通	灰白	SE31 SK10No.1 三毳産 口唇部外縁 に重ね焼きによる変色が認められる	120-3
13	土師器	壺	(14.7)	[3.8]	—	C E I K	30	普通	橙	SE31 SK10No.2 外面黒斑有り	120-4
14	土師器	壺	(12.1)	3.4	—	C E I K	35	普通	橙	SE31 内面口唇部油煙付着	120-6
15	土師器	壺	(12.1)	3.3	—	C E I K	25	普通	橙	SE31 口縁部内面2カ所に油煙付着	
16	土師器	壺	(13.4)	[2.5]	—	C H I K	10	普通	橙	SE31	
17	土師器	皿	(17.8)	[4.7]	—	C E I K	30	普通	にぶい赤褐	SE31 外面全体煤付着 内面摩耗が激 しい歪み有り	120-5
18	土師器	皿	(15.8)	[2.7]	—	C E H I K	5	普通	橙	SE31	
19	土師器	甕	(22.3)	[5.1]	—	C D E I K	10	普通	明赤褐	SE31	
20	土師器	甕	(22.7)	[7.1]	—	C E I K	15	普通	にぶい赤褐	SE31	
21	土師器	甕	(24.0)	[8.9]	—	C E I K	35	普通	にぶい褐	SE31 甕の可能性有り	
22	土師器	台付甕	—	[4.5]	—	E I K	75	普通	明赤褐	SE31 外面煤付着 古墳時代	
23	須恵器	壺	(11.6)	[1.8]	—	H I K	5	良好	灰	SE32	
24	土師器	壺	(13.2)	[3.2]	—	C H I K	15	普通	橙	SE32	
25	土師器	皿	(15.8)	[2.0]	—	C E H I K	5	普通	にぶい赤褐	SE32	
26	土師器	甕	—	[2.4]	(6.4)	E H I K	25	普通	赤褐	SE32 外面煤付着	
27	須恵器	甕	—	[6.0]	(19.6)	A E I K	15	普通	灰	SE33 新治産	
28	石製品	砥石	長さ[7.2] 幅6.0 厚さ[4.4] 重さ201.2 g						SE7 砂岩 砥面3 被熱(赤化) 自然礫素材	128-2	
29	土師器	壺	(13.6)	[3.3]	—	C H I K	15	普通	橙	SE15	
30	須恵器	壺	—	[2.0]	—	I K	5	良好	灰	SE28 No.11 口唇部油煙付着 内面はわずかに残る	
31	須恵器	甕	(21.4)	29.8	14.9	D I K	65	普通	黄灰	SE28 No.12・17・18 三和産 底部被熱により剥離が激しい	120-7
32	須恵器	大甕	—	[45.2]	—	D E H	60	良好	灰	SE28 外面全体および内底面降灰 外面上半降灰が特に厚い 外面窯体付着するが窯体の面取りが施されている底部使用による摩耗か	120-8

第114号井戸跡（第354図）

中央調査区東端部、I-12グリッドに位置し、東側は排水溝によって壊される。

平面形態は不整形で、断面は逆「ハ」の字状になる。規模は長径1.05m、短径0.52m、深さは1.35m以上になる。覆土は単層であった。

遺物は須恵器の甕が1点のみ出土した（第356

図27）。27は甕の下端部で、新治の製品である。外面は平行タタキ、下端には手持ちヘラケズリが施される。

遺物が1点のみであるため詳細な時期は不明だが、検出面や須恵器の甕が出土したことから、古代の遺構と考えられる。

第121号井戸跡（第354図）

II区北東部、K・L-20グリッドに位置し、北側は排水溝によって壊される。

平面形態は不整形で、断面は逆「ハ」の字状になる。規模は、残存部で長径1.51m、短径0.89m、深さは0.65mを測る。覆土上層からは、炭化材が検出された。

遺物は砥石が出土した（第357図28）。28は砥石である。砂岩製で、3面使用されており、被熱していた。

遺物が砥石のみであるため時期は不明だが、検出面から古代の遺構と考えられる。

第129号井戸跡（第355図）

IV区西側、N-26グリッドに位置する。平面形態は橢円形で、断面は逆「ハ」の字状になる。規模は長径1.37m、短径1.35m、深さは0.52m以上になる。

遺物は土師器の壺が1点のみ出土した（第357図29）。29は北武藏型壺で、扁平で平底になるタイプのものである。8世紀末～9世紀前半のものか。

遺物が1点のみであるため詳細な時期は不明だが、土師器壺の形状や検出面から、古代の遺構と考えられる。

第139号井戸跡（第355図）

VI区中央北端部、T-38グリッドに位置し、北側は排水溝によって壊される。

平面形態は不整形で、断面は漏斗状になる。規模は長径1.20m、短径1.18m、深さは0.99m以上になる。

遺物は出土しなかった。

遺物が無いため時期は不明だが、検出面から古代の遺構と考えられる。

第140号井戸跡（第355図）

VI区西側、S-35グリッドに位置する。

平面形態は橢円形で、断面は逆「ハ」の字状になる。規模は長径1.27m、短径1.01m、深さは1.08m

以上になる。

遺物は出土しなかった。

遺物が無いため時期は不明だが、検出面から古代の遺構と考えられる。

第141号井戸跡（第355図）

VI区東側、U-39・40グリッドに位置する。平面形態は円形で、断面は円筒形になる。規模は直径0.79m、深さは0.54m以上になる。

遺物は出土しなかった。

遺物が無いため時期は不明だが、検出面から古代の遺構と考えられる。

第142号井戸跡（第355図）

VI区東側、U-39グリッドに位置する。平面形態は橢円形で、断面は円筒形になる。規模は長径1.74m、短径1.26m、深さは0.99m以上になる。

覆土の上層からは、須恵器の甕の破片が中央部にまとめられた状態で検出された。主体となる遺物は須恵器の甕2点で、どちらも残存率が高い。

これらは第3号遺物集中地点の、U-39・40グリッドから出土した遺物群と接合関係にあり、特に、東隣のグリッドにあたるU-40グリッドに分布する遺物の多くと接合した点が注目される（第409図）。

おそらく、廃棄の段階で分割して捨てられたものと推察されるが、何故分けたのかは不明である。

遺物は須恵器壺・甕・大甕が出土した（第357図30～32）。30は壺の口縁部破片である。口唇部に油煙の付着が認められる。

31は甕である。三和の製品で、底部を中心に被熱による変色や剥離が認められる。浜ノ台～江口長沖段階のものか。

32は大甕である。口縁部を欠損するが、残存率は高い。井戸跡の中心部にまとまった状態で廃棄されていた。外面に降灰を受け、胴部にはところどころ窯体の付着が認められる。窯体はいずれも割れ口に面取りが施され、一部窯体を剥がした痕跡も認められる。

遺物の時期は、三和産の須恵器甕が出土していることから、9世紀中葉～後半と推察される。

第3号遺物集中地点から出土した遺物と接合関係にあるということは、遺物集中が形成された時期と極めて近い時期に、井戸跡が使用されていたと考えられる。

また、遺物が上層からまとまって出土したことから、埋没の過程で投棄されたと推察され、遺物集中地点より古い遺構とすることができる。

遺物集中地点が形成された9世紀中葉より古い時期に使用されていた井戸か。

(4) 溝跡

古代の溝跡は68条確認され、第110表にまとめた。溝跡の分布は、調査区のほぼ全域で検出されている。

畠跡である可能性がある浅いものや、短い溝跡も多く含まれるが、規則性が認められないものは全て単独の溝跡として扱った。

この内、第57号溝跡は、河川跡の際に沿って掘り込まれた溝跡であり、河川跡と関係のある遺構と考えられる。

また、第152号溝跡は、Ⅲ区を斜めに横断する形で検出された、全長50mを越える大規模な溝跡である。一直線に延びることから、何らかの区画か、主要な用水路などの施設であった可能性がある。

各遺構の詳細は表に記し、主要な遺構について概観していく。

第39号溝跡（第358図）

東側調査区西側から中央調査区南東端にかかる、H-14・15、I-12～14、J-12グリッドに位置し、調査区を南東一北西方向に縦断する溝跡である。第64号土壙と重複し、本遺構が古い。遺構の南東部および北西部は、調査区域外へ延びる。

断面は場所によって異なり、北半部は箱形に掘り込まれ、南半部は椀型になる。規模は、残存部で長さ32.11m、幅0.91～1.26m、深さ0.25～0.39m

を測り、走行方向はN-64°～Eを指す。

覆土中位から、洪水砂の可能性がある砂質土層が検出された。

遺物は須恵器坏、土師器坏・皿・甕等が出土した（第374図1～8）。1、2は須恵器の坏で、1は新治、2は南比企の製品である。2は底部に外周回転ヘラケズリ調整が施されるが、底径が小さいため8世紀後半のものか。

3～8は土師器である。3～5は坏で、3、4は北武藏型坏である。5は内面に斜格子状の暗文が施文される坏で、胎土に針状物質を多く含む。上総地域の製品か。6は皿である。大型で口唇部が内湾し、内面は全体にミガキ施される。

7、8は甕である。7は頸部が「く」の字状に屈曲する。8は胴部が開くため、壺になる可能性もある。

遺物の時期は、須恵器坏や土師器坏の形状から、8世紀代のものと推察される。

第51号溝跡（第359図）

中央調査区南東端中央部、H-10グリッドに位置する。第49号溝跡と重複し、本遺構が新しい。遺構の東側は中近世の溝跡によって壊される。

断面は椀形で、規模は、残存部で長さ6.27m、幅0.23～0.45m、深さ0.11～0.20mを測り、走行方向はN-89°～Wを指す。

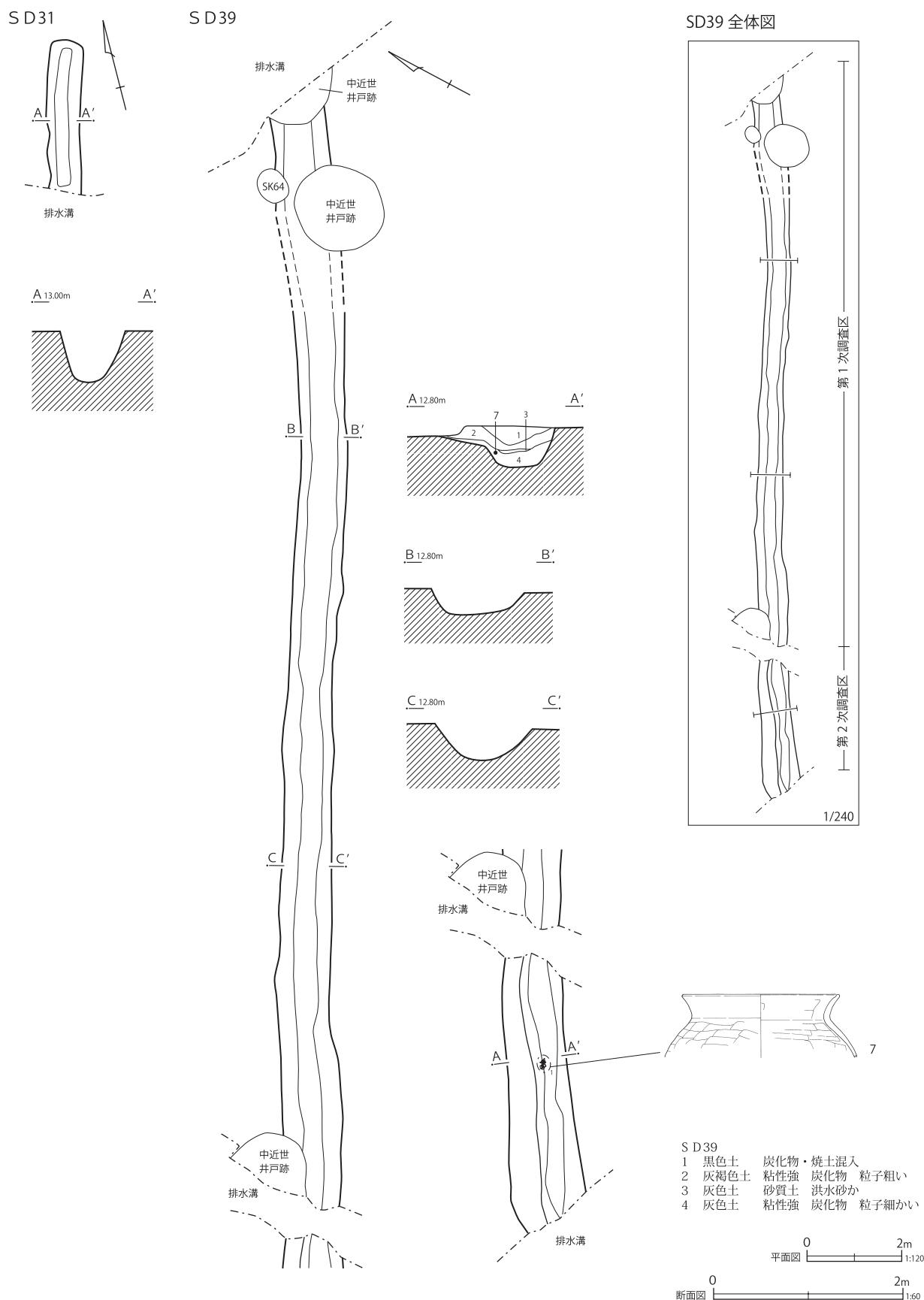
遺物は土師器甕が出土した（第374図9）。9は甕で、「コ」の字状口縁甕の口縁部である。

遺物が1点のみであるため詳細な時期は不明だが、「コ」の字状口縁甕が出土していることから、9世紀代の遺構と考えられる。

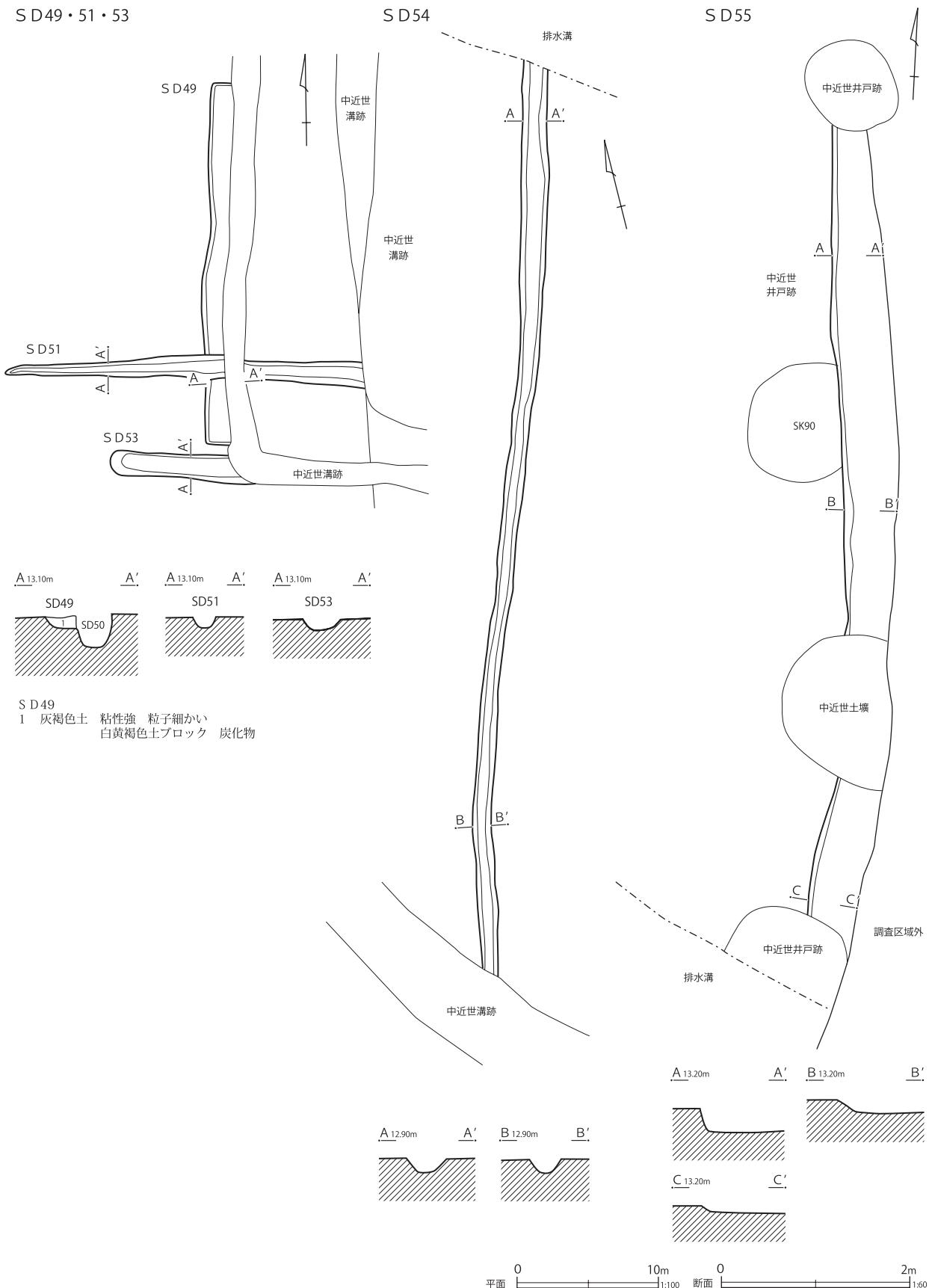
第56号溝跡（第360図）

中央調査区西側、G・H-8、H-9グリッドに位置する。南側は調査区域外へ延び、北側は河川跡と並行する第57号溝跡と重複する。第57号溝跡とは直交する形で交わることから、同溝跡に接続していた可能性が考えられる。

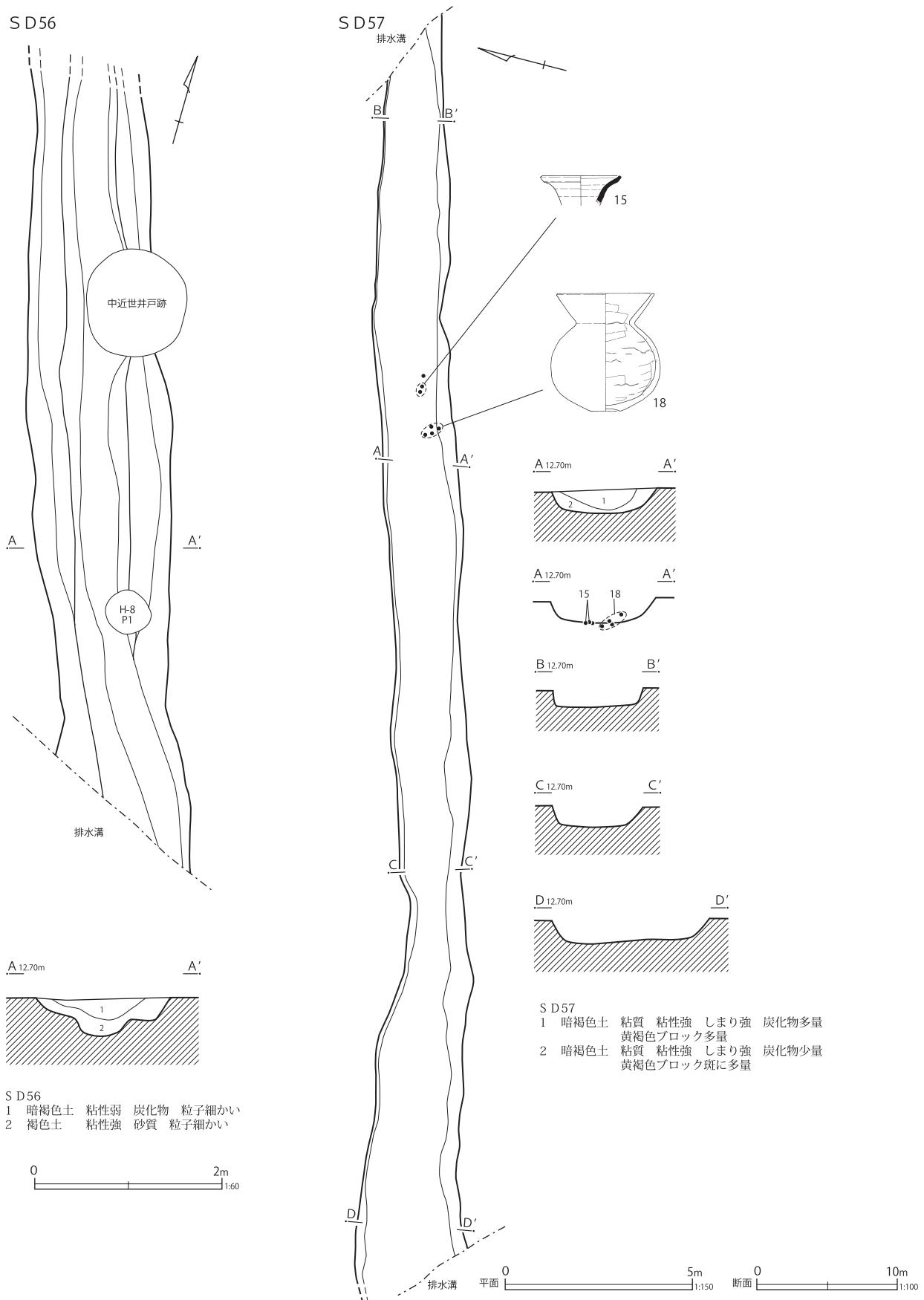
断面は逆台形の二段掘りで、規模は、残存部で



第358図 溝跡（1）



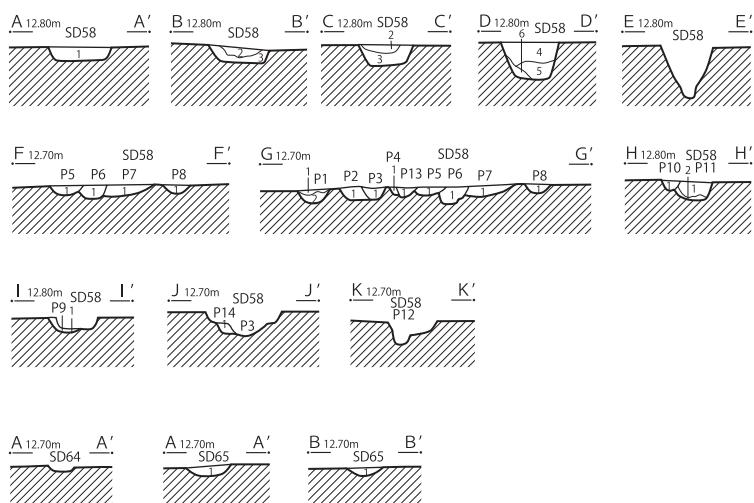
第359図 溝跡 (2)



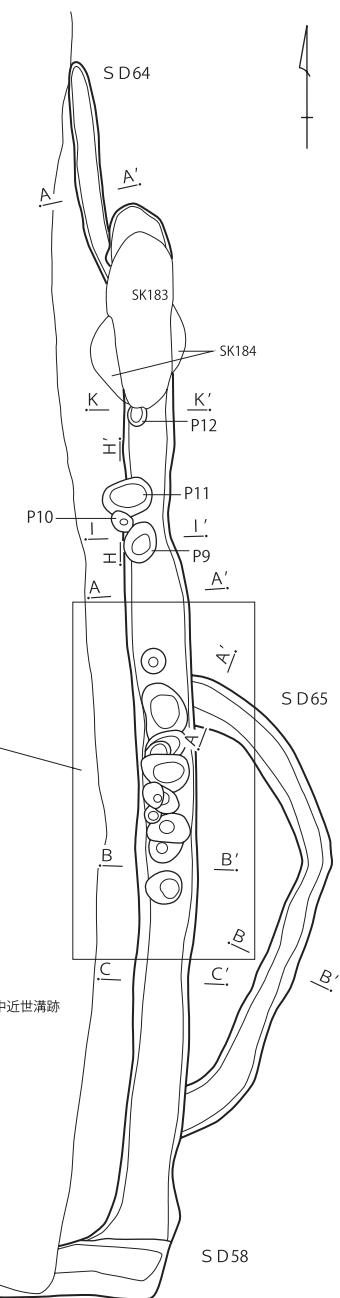
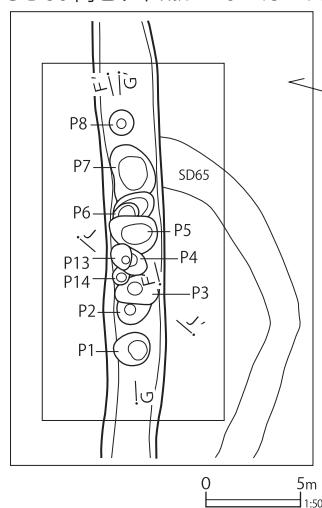
第360図 溝跡 (3)

宮東遺跡

S D 58・64・65



S D 58 内ピット No.1 ~ 8・13・14



S D 58

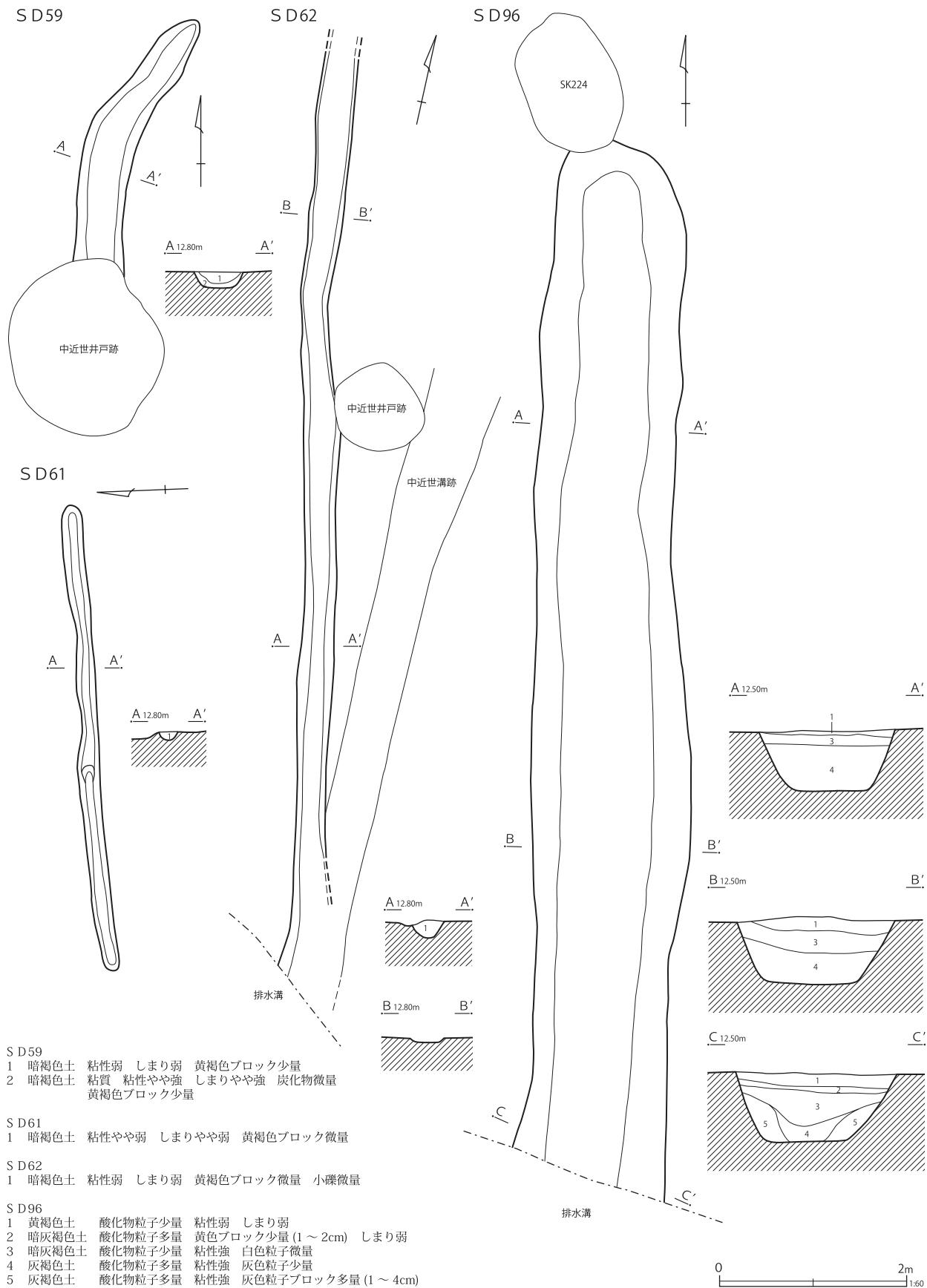
- 1 暗褐色土 粘性やや弱 しまりやや弱 白色粒子微量
- 2 黄褐色土 粘性やや弱 しまりやや弱 暗褐色ブロック少量
- 3 暗褐色土 粘性強 しまりやや強 黄褐色ブロック微量 白色粒子微量
- 4 暗褐色土 粘性やや弱 しまりやや強 黄褐色ブロック多量
- 5 暗褐色土 粘質 粘性強 しまり強 黄褐色ブロックやや多量
- 6 黄褐色土 粘性やや強 しまり強 白色粒子微量

S D 65

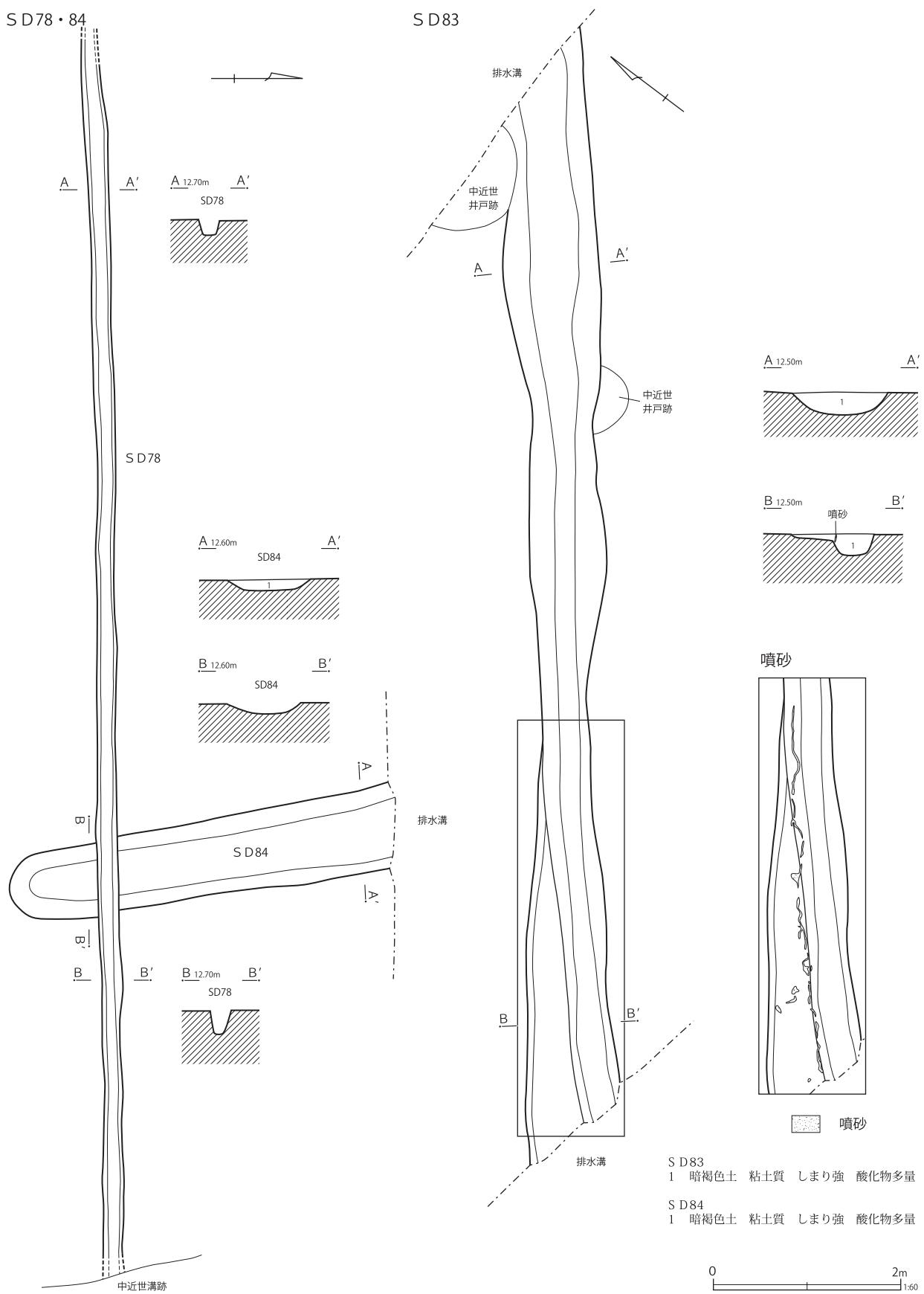
- 1 暗褐色土 粘性やや強 しまり強 黄褐色ブロック少量

0 10m
1:100

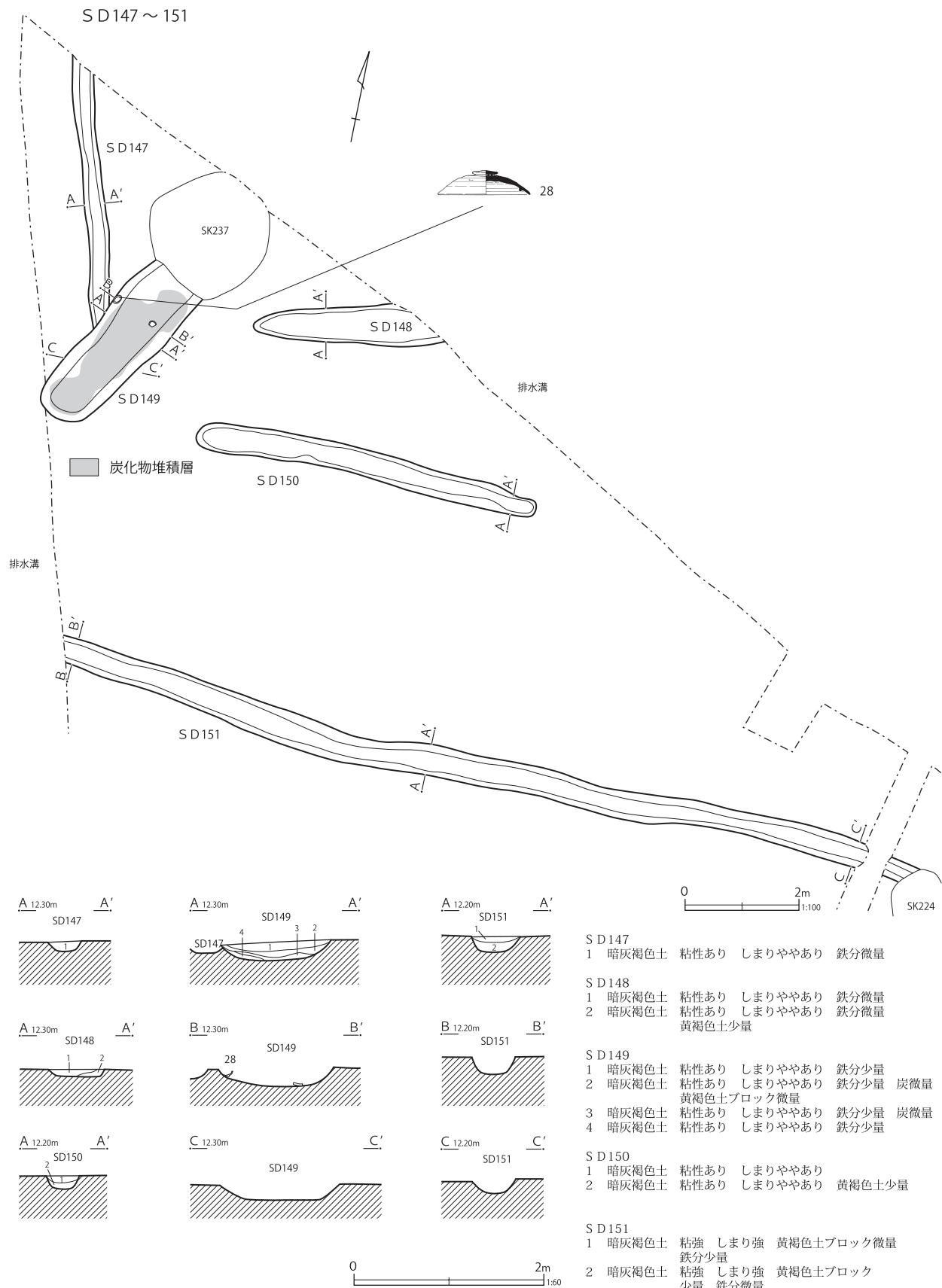
第361図 溝跡 (4)



第362図 溝跡 (5)



第363図 溝跡 (6)

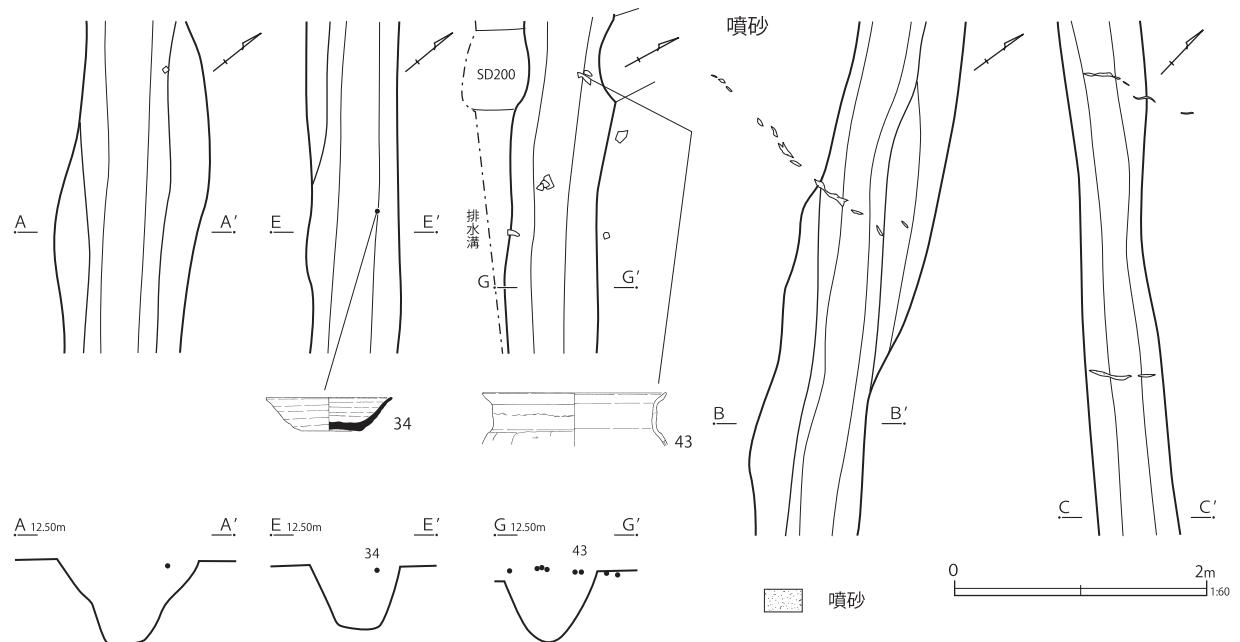


第364図 溝跡 (7)

SD152



第365図 溝跡（8）



第366図 溝跡（9）

長さ7.92m、幅1.10~1.53m、深さ0.27~0.39mを測り、走行方向はN-18°-Wを指す。

覆土は下層に砂質土が堆積し、上層には炭化物が含まれていた。

遺物は須恵器短頸壺、土師器壺・皿、磨石が出土した（第374図10~14）。10は須恵器の短頸壺で、口縁部の破片である。

11~13は土師器である。11、12は壺で、11は浅身で扁平、12は深身で丸底になる。13は皿で、口縁部が外反する。

14は軽石製の磨石である。

遺物の時期は、土師器壺や皿の形状から、8世紀代のものと推察される。

第57号溝跡（第360図）

中央調査区西側、G-7~10、F-9・10グリッドに位置し、河川跡の縁に沿って掘られた南西~北東方向に走行する溝跡である。遺構の南西部および北東部は、調査区域外へ延びる。

断面は箱形で、規模は長さ32.80m、幅1.58~2.80m、深さ0.28~0.59mを測り、走行方向はN-76°-Eを指す。

覆土中には全層に炭化物が含まれていた。

遺物は須恵器長頸瓶・甕、土師器壺・小型壺が出土した（第374図15~18）。15、16は須恵器である。15は長頸瓶で、硬質に焼き締まる。同一個体と思われる胴部破片の内面に、漆状の付着物が認められる。16は短頸壺である。

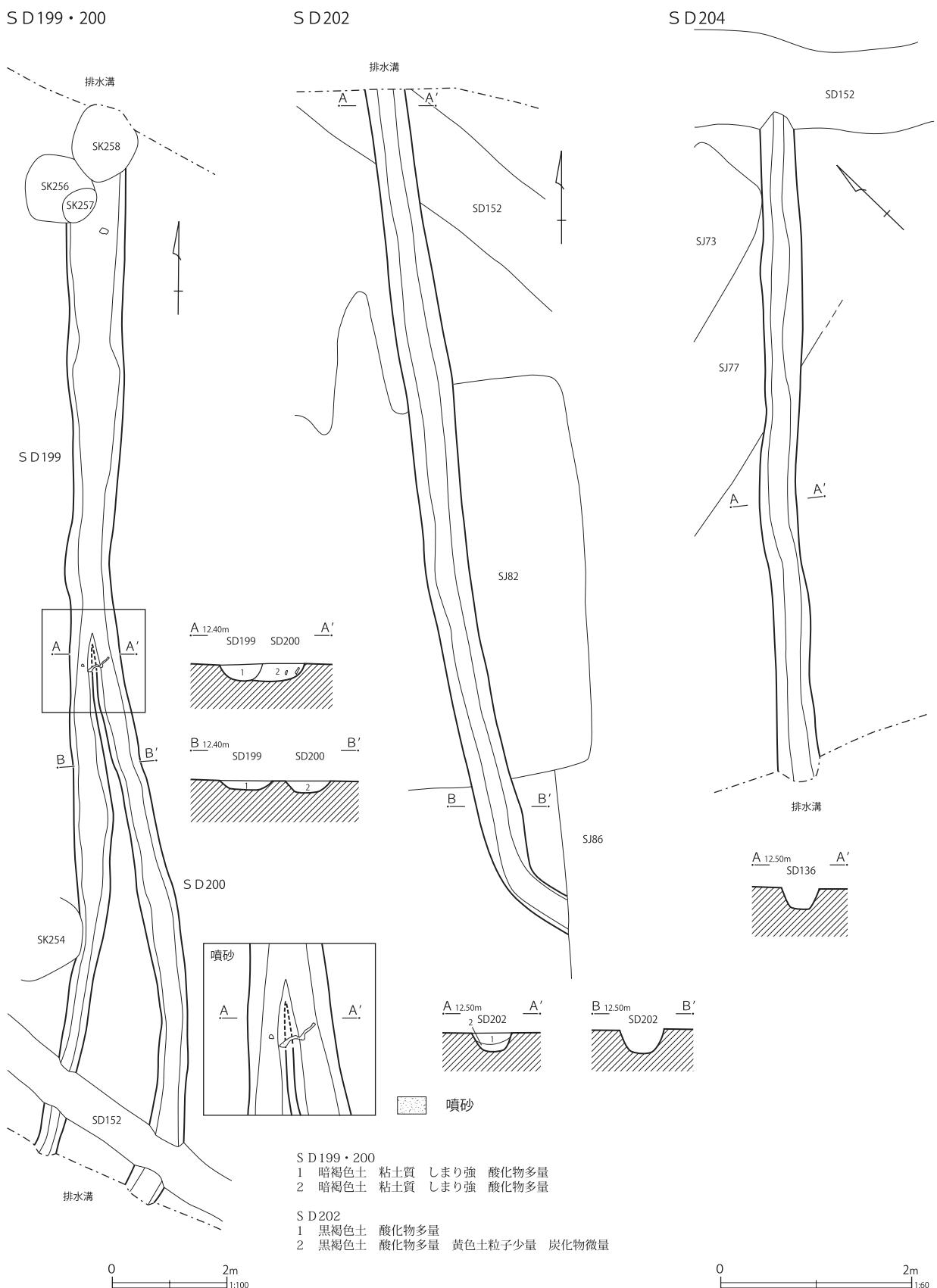
17、18は土師器である。17は北武藏型壺で、浅身になる。18は小型壺で、古墳時代の遺物である。おそらく溝を掘削した際に、重複していた遺構の遺物が混入したものと考えられる。

遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、おそらく古代の遺構と考えられる。

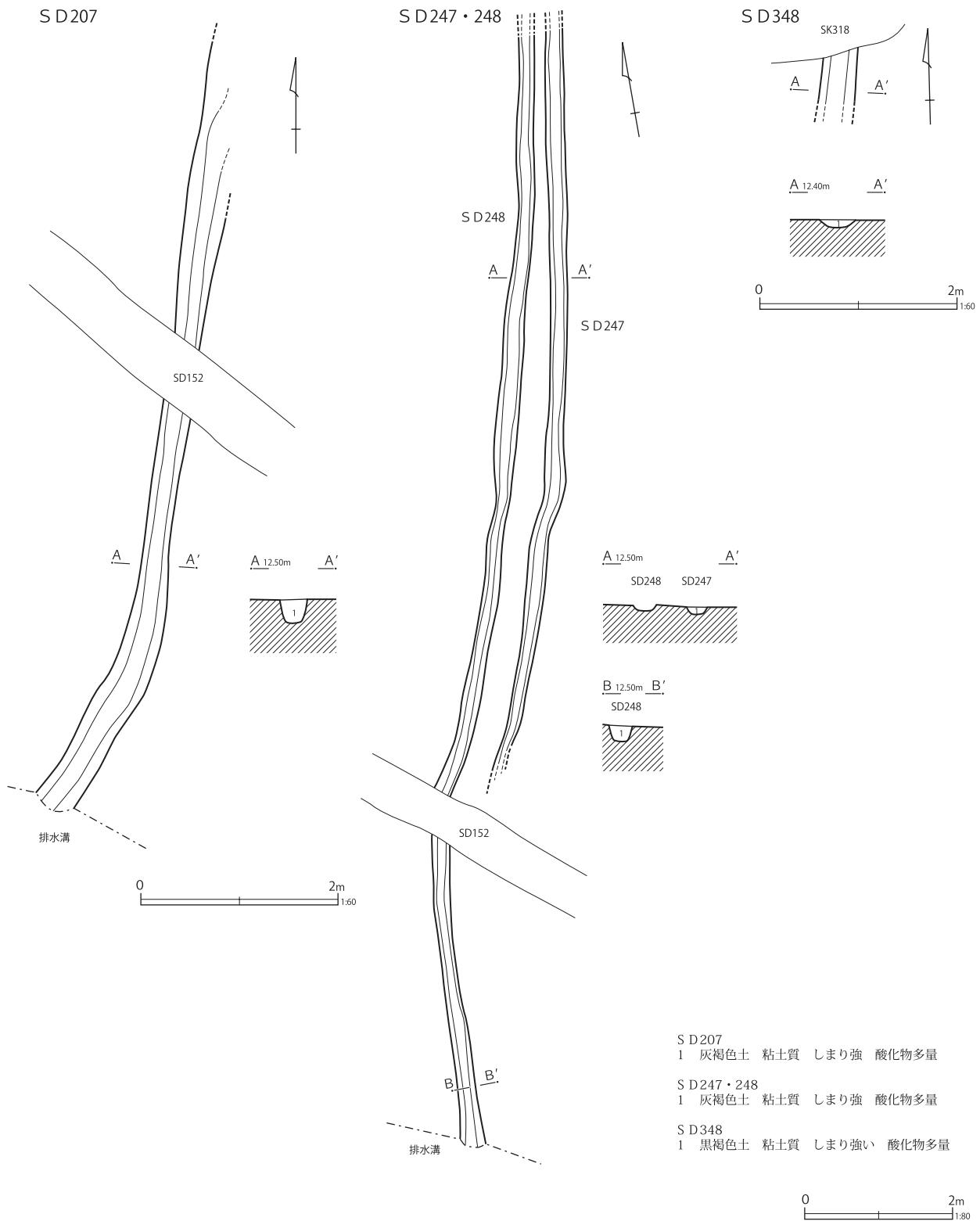
第58号溝跡（第361図）

中央調査区中央部、G-11、H-10・11グリッドに位置し、途中で北に向って直角に折れる溝跡である。遺構の南西部は調査区域外へ延びる。

断面は箱形で、長さは東西が12.80m、南北が14.50m、幅0.59~0.92mを測る。深さは東西方向と南北方向で差があり、東西が0.70mと深く、南北が0.18mと浅い。走行方向は、南北はN-3°-Wを、東西はN-87°-Wを指す。



第367図 溝跡 (10)



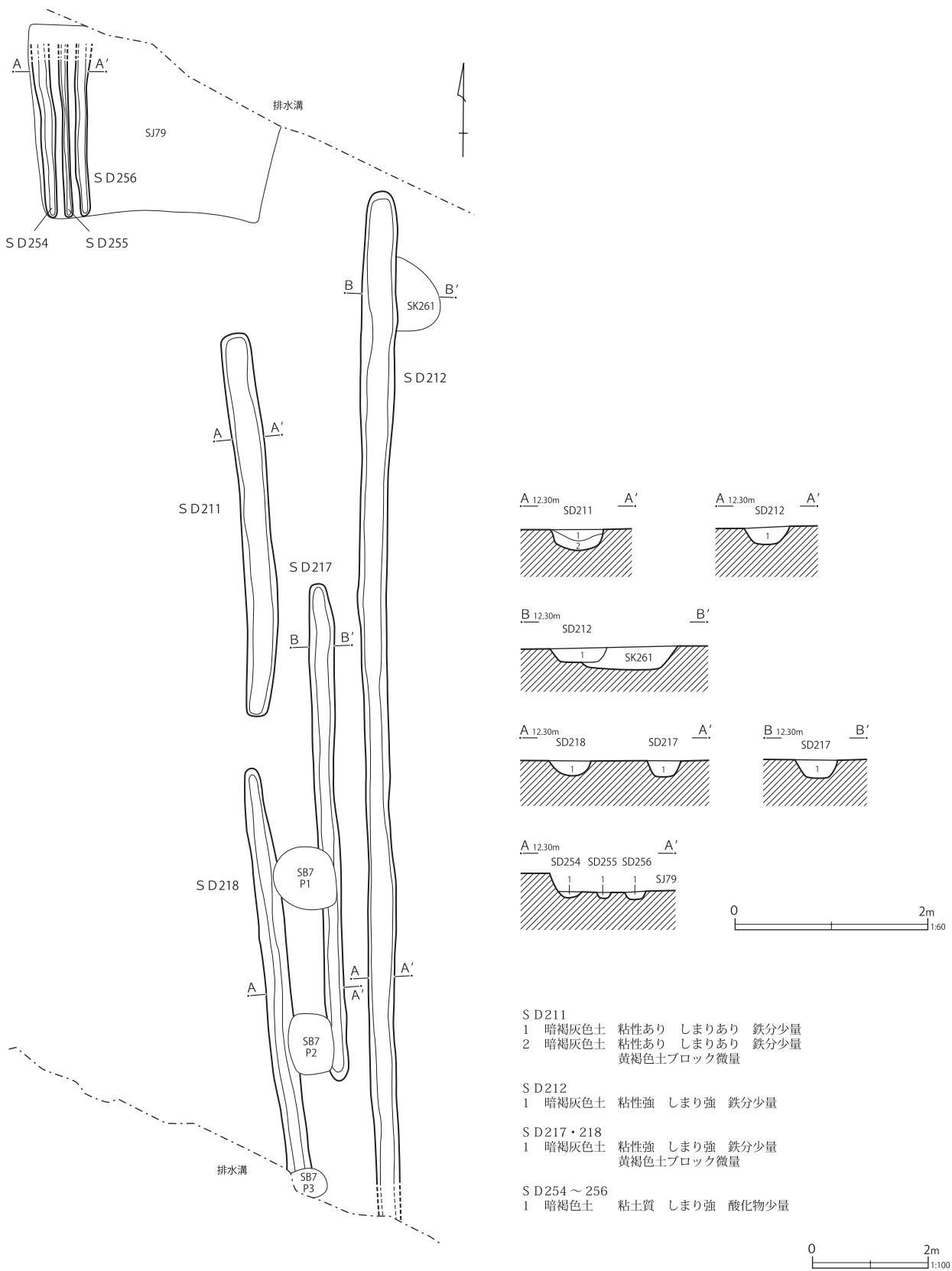
第368図 溝跡 (11)

溝の底面には部分的にピットが密集して掘り込まれており、南北方向の中央部が特に多く分布する。ピットは14基検出され、溝の中に連続する形

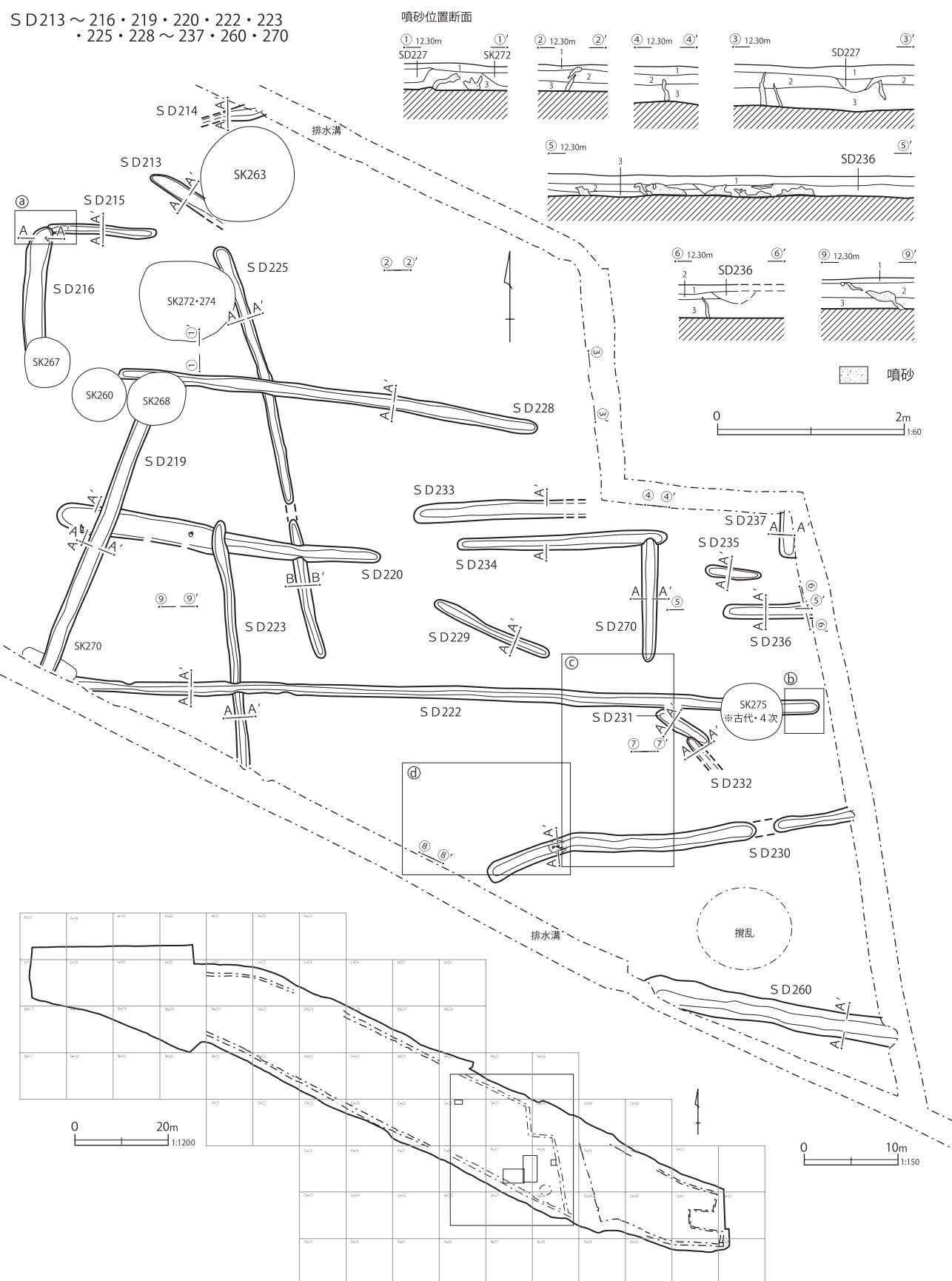
で並ぶことから、おそらく溝跡に関連するものと考えられる。

遺物は須恵器壊・瓶類、土師器甕が出土した(第

SD 211・212・217・218・254～256

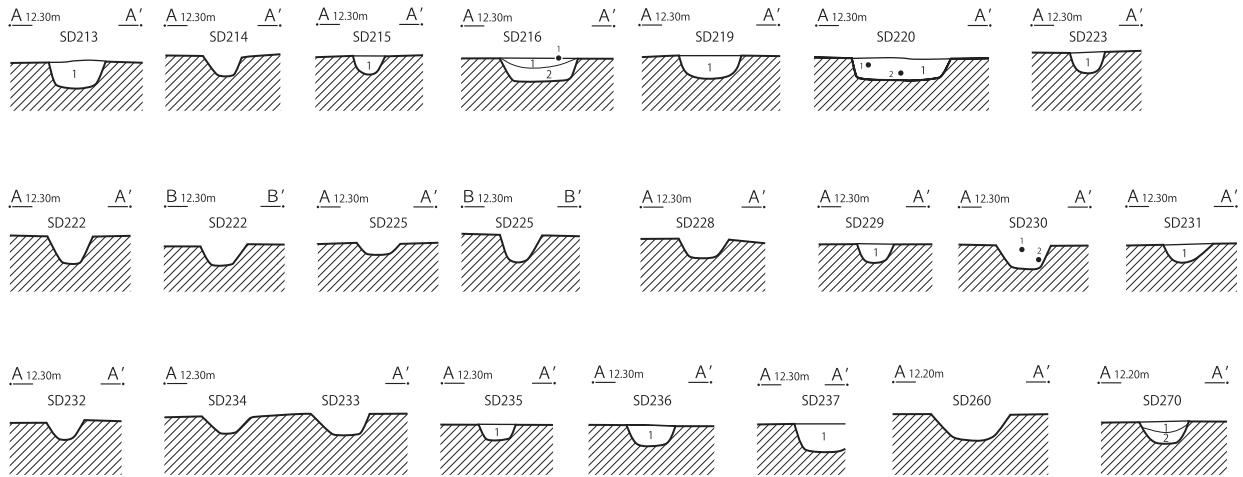


第369図 溝跡 (12)

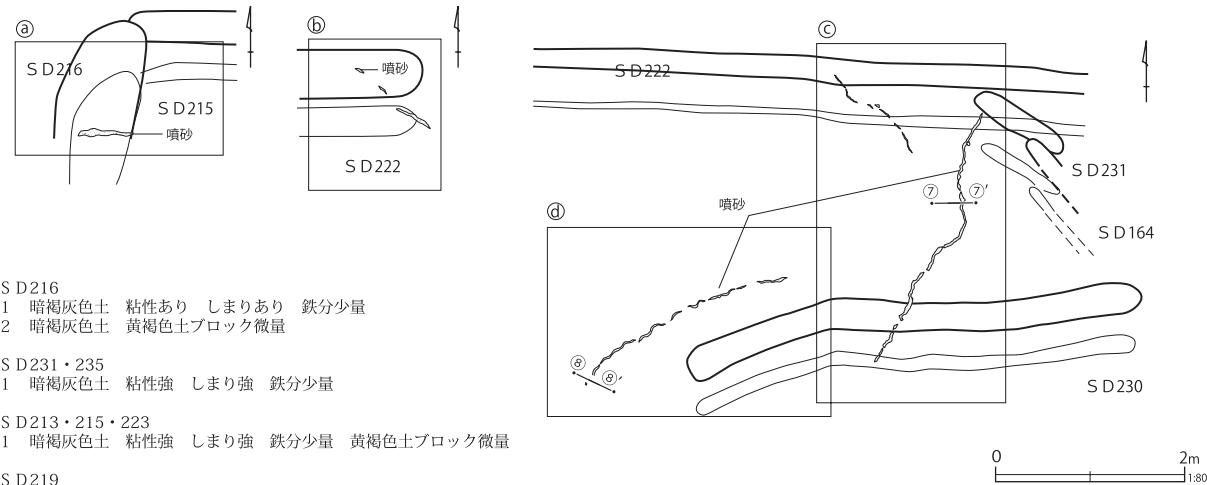


第370図 溝跡 (13)

宮東遺跡



噴砂分布図



SD216
1 暗褐色土 粘性あり しまりあり 鉄分少量
2 暗褐色土 黄褐色土ブロック微量

SD231・235
1 暗褐色土 粘性強 しまり強 鉄分少量

SD213・215・223
1 暗褐色土 粘性強 しまり強 鉄分少量 黄褐色土ブロック微量

SD219
1 暗褐色土 粘性あり しまりあり 鉄分少量 黄褐色土ブロック

SD220
1 暗褐色土 粘性強 しまりあり 鉄分少量 黄褐色土ブロック少量

SD229
1 暗褐色土 粘性強 しまりあり 鉄分少量

SD236・237
1 暗褐色土 粘性強 しまりあり 黄褐色土ブロック微量 鉄分少量

SD270
1 黒褐色土 粘性強 しまり強 鉄分微量 黄褐色土ブロック少量
2 黑褐色土 粘性強 しまり強 鉄分少量 黄褐色土中量

噴砂範囲土層断面
1 黒褐色土 粘性強 しまり強 鉄分少量
遺物包含層
(奈良・平安時代 9c 後半の土器)
2 暗褐色土 粘性強 しまり強
黄褐色土ブロック微量 鉄分少量
3 黄褐色土 粘性強 しまり強 鉄分少量
黄褐色土

0 2m
1:60

第371図 溝跡 (14)

374図19～23)。19～21は須恵器である。19、20は壺で、20は南比企の製品であり、底部外周に回転ヘラケズリ調整が認められる。21は瓶類の底部と推察され、南比企の製品である。

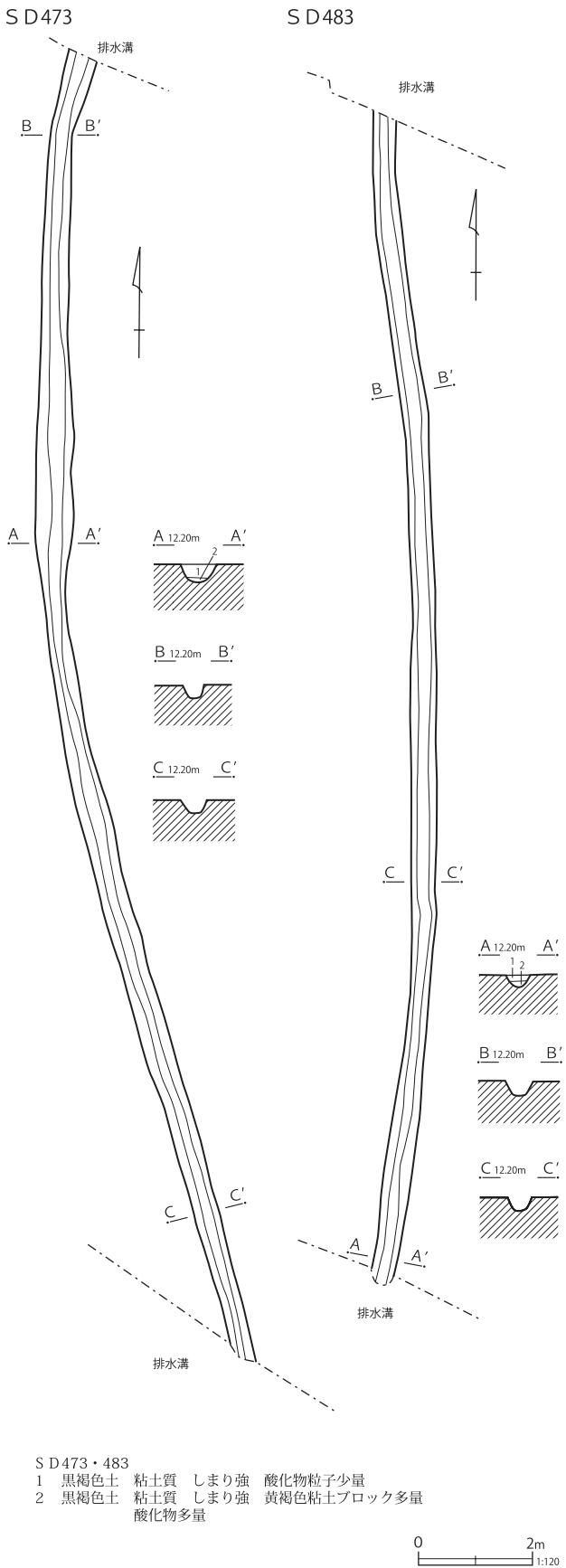
22、23は土師器の甕である。22は口縁部が大きく外反する。

遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、おそらく古代の遺構と考えられる。

第149号溝跡 (第364図)

V区西側、O・P-29グリッドに位置する幅広の溝跡である。遺構の北東部は、第237号土壌によって壊される。

断面は皿型で、規模は長さ3.20m、幅1.02～1.20m、深さ0.16～0.17mを測り、走行方向はN-32°-Eを指す。検出面には、炭化物層が薄く堆積していた。



第372図 溝跡 (15)

遺物は須恵器蓋・坏、土師器甕が出土した（第375図27～30）。27～29は須恵器である。27、28は蓋で、ともにカエリ付きの小型の蓋である。7世紀後半のものか。29は坏である。南比企の製品で、底部全周回転ヘラケズリ調整が施される。鳩山編年I期の製品か。

30は土師器の甕である。頸部は弓形に湾曲する。
8世紀後半のものか。

遺物の時期は、7世紀後半から8世紀後半まで
時期幅があるが、検出面から8世紀代の遺構と考
えられる。

遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、おそらく古代の遺構と考えられる。

第152号溝跡（第365図）

III区全域にあたる、L-21・22、M-22・23、N-23・24、O-24・25グリッドに位置し、北東-南西方向に調査区を横断する溝跡である。遺構の中央部と東部から、液状化現象に伴う噴砂の痕跡が認められた。

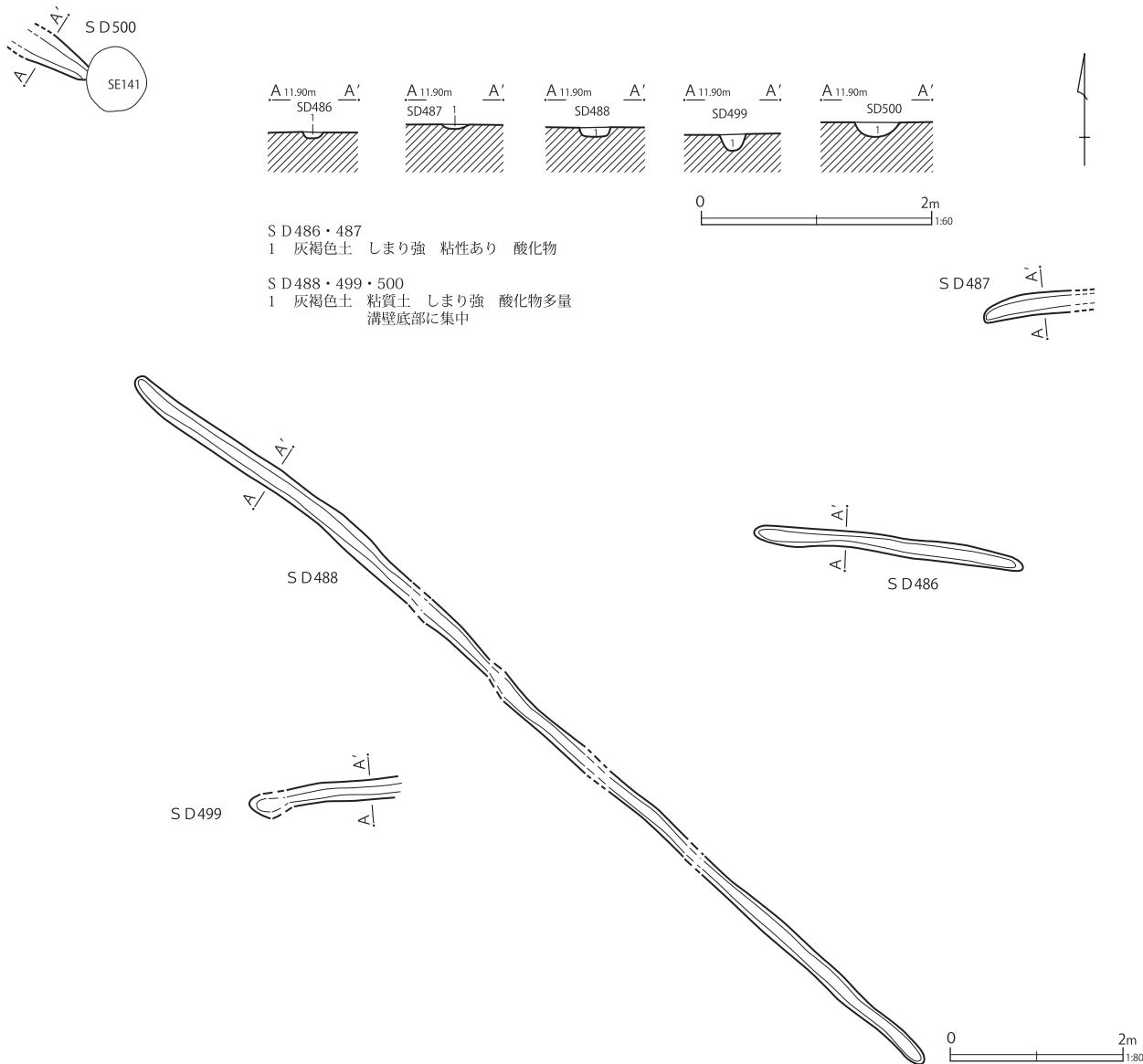
本溝跡は調査区を全周する排水溝の断面で、早い段階から検出できていた。遺構検出を行った結果、Ⅲ区には多数の遺構の存在が想定されたため、溝の壁面から断面情報を得ることを目的として、二面調査開始時に先行して調査を行った。

断面は楕形または箱形で、規模は長さ54.60m、幅0.40～1.13m、深さ0.40～0.69mを測り、走行方向はN-49°-Wを指す。

遺物は須恵器坏・高台付坏・長頸瓶、土師器坏・甕・高坏等が出土した（第375図33～48）。33～40は須恵器である。33～38は坏で、末野と三和の製品を主体とする。いずれも9世紀以降のものと考えられる。39は高台付坏で、南比企の製品である。40は長頸瓶で、口縁部の破片である。

41～48は土師器である。41は壺である。丸底になるため7～8世紀前半のものか。42～45は甕である。42、43は「コ」の字状口縁甕で、44は頸部が「く」の字状になる。

SD 486 ~ 488・499・500



第373図 溝跡 (16)

46は高壙、47、48は甕である。いずれも古墳時代の遺物である。

以上のように、本溝跡からは幅広い時期の遺物が出土している。先行して調査を行ったため、検出できなかった遺構の遺物が混入している可能性が高い。9世紀代の遺物が比較的多く出土しているが、出土位置がわかるものはいずれも検出面付近から出土しているため、混入や別遺構の遺物と考えられ、遺物から詳細な時期の推定は困難である。

本遺構は集落域を横断する溝跡であり、5・6・8・9世紀代の住居跡と重複関係にある。大規模な溝を短期的な目的のために掘削したとは考え難い。上記のことを踏まえると、遺構が少なくなる6世紀後半から7世紀代に掘削された可能性があるが、詳細は不明である。

第199号溝跡（第367図）

III区中央部、M・N・O-24・25グリッドに位置する。遺構の北端は第256～258号土壙によって壊され、南端は調査区域外へ延びる。

第110表 溝跡一覧表 (第358 ~ 373図)

No.	グリッド	方位	方位	長さ (m)	幅 (m)		深さ (m)		重複遺構
					最大	最少	最大	最少	
1次31	F-4	N-18° -E		[3.13]	0.75	0.63	0.52	-	
32	欠番								SL3畠 1に変更
33	欠番								SL3畠 2に変更
34	欠番								SL3畠 3に変更
35	欠番								SL3畠 4に変更
36	欠番								SL3畠 5に変更
37	欠番								
38	欠番								
39	H-14・15 I-12~14 J-12	N-64° -E		32.11	1.26	0.91	0.39	0.25	SK64
49	H-10	N-1° -E		6.37	[0.45]	[0.31]	0.10	-	SD51
51	H-10	N-89° -W		[6.27]	0.45	0.23	0.20	0.11	SD49
53	I-10	N-87° -W		[2.18]	0.45	0.39	0.08	-	
54	D・E-4	N-17° -E		[16.20]	0.51	0.28	0.25	0.21	
55	F・G-7	N-6° -W		[14.61]	[1.00]	[0.70]	0.45	0.13	SK90
56	G・H-8 H-9	N-18° -W		[7.92]	1.53	1.10	0.39	0.27	H8GP1
57	G-7 ~ 10 F-9・10	N-76° -E		[32.8]	2.80	1.58	0.59	0.28	
58	G-11 H-10・11	N-3° -W	N-87° -W	[27.3]	0.92	0.59	0.47	0.18	SD64・65
59	H-9	N-33° -E	N-12° -E	[2.80]	0.54	0.35	0.17	0.10	
60	欠番								SD50と同一
61	H-10	N-88° -E		4.95	0.24	0.15	0.09	0.02	
62	H・I-11	N-10° -W		[10.20]	0.39	0.28	0.15	0.04	
63	欠番								SD39と同一
64	G-11	N-9° -W		[2.88]	0.35	0.30	0.07	0.05	SD58
65	H-11	N-21° -E	N-32° -W	[6.75]	0.60	0.30	0.11	0.04	SD58
78	L-18・19・20	N-1° -E		[13.11]	0.22	0.17	0.26	0.13	SD84
83	K-18 L-17・18	N-51° -E		[12.08]	1.02	0.48	0.25	0.14	
84	K・L-19	N-9° -W		[4.12]	0.89	0.76	0.13	0.09	SD78
96	P・Q-30	N-0°		[11.30]	1.68	1.40	0.73	0.40	SK224
147	O・P-29	N-15° -W		[4.81]	0.38	0.30	0.11	0.07	SD149
148	O・P-29	N-78° -E		[3.33]	0.74	0.50	0.11	0.07	
149	O・P-29	N-32° -E		[3.20]	1.20	1.02	0.17	0.16	SD147 SK237
150	P-29	N-90°		6.06	0.52	0.33	0.18	0.08	
151	P-29・30	N-81° -W	N-90°	[15.36]	0.60	0.34	0.17	0.12	SK224
152	L-21・22 M-22・23 N-23・24 O-24・25	N-49° -W		[54.60]	1.13	0.40	0.69	0.40	SJ73・74・77・78 SD199・ 200・202・204~207・248 SB7
199	M・N・O-24・25	N-3° -E		[17.32]	0.70	0.45	0.15	0.09	SD152・200 SK254・256~258
200	M・N・O-25	N-4° -W		[19.20]	0.61	0.42	0.14	0.10	SD152・199 SK256~258
201	欠番								SL5畠13に変更
202	L・M-21	N-12° -W	N-56° -W	[8.96]	0.50	0.32	0.18	0.12	SJ82・100 SD152
204	M-22・23	N-44° -E		[7.02]	0.46	0.33	0.26	0.07	SJ77 SD152
205	欠番								SL4畠4に変更
206	欠番								SL4畠3に変更
207	N-23	N-9° -E	N-30° -E	[8.09]	0.43	0.25	0.23	0.08	SD152
208	欠番								SL4畠5に変更
209	欠番								SL4畠1に変更
210	欠番								SL4畠2に変更
211	N-25・26 O-26	N-4° -W		6.65	0.55	0.46	0.29	0.19	
212	N・O・P-26	N-0°		[17.87]	0.58	0.40	0.20	0.13	SK261
213	N-26	N-58° -W		[1.90]	0.46	0.35	0.19	0.14	SK263
214	N-26	N-82° -W		[1.20]	0.45	[0.25]	0.17	0.12	
215	O-26	N-86° -W		[2.91]	0.27	0.24	0.16	0.14	SD216

宮東遺跡

No.	グリッド	方位	方位	長さ (m)	幅 (m)		深さ (m)		重複遺構
					最大	最少	最大	最少	
216	0-26	N-4° -E		[3.32]	0.66	0.58	0.21	0.16	SD215 SK267
217	0・P-26	N-2° -W		8.62	0.44	0.30	0.20	0.13	SB7P1・2
218	0・P-26	N-7° -W		[6.97]	0.46	0.28	0.19	0.13	SB7P1・2・3
219	0・P-26	N-21° -E		[7.40]	0.51	0.46	0.16	0.12	SD220 SK268・270
220	0-26・27	N-83° -W		9.09	0.77	0.35	0.17	0.11	SD219・223・225
222	P-26～28	N-90°		[20.72]	0.42	0.29	0.21	0.09	SD223 SK270・275
223	0・P-26	N-7° -W		[7.02]	0.34	0.25	0.24	0.16	SD220・222
225	0-26・27 P-27	N-14° -W		(11.87)	0.37	0.25	0.13	0.08	SD220・228 SK272・274
226	欠番								SD225と同一
228	0-26・27	N-82° -W		11.73	0.42	0.27	0.16	0.14	SD225 SK260・268
229	P-27	N-64° -W		3.49	0.35	0.25	0.16	0.14	
230	P-27・28	N-84° -E	N-68° -E	[10.40]	0.49	0.32	0.18	0.14	
231	P-28	N-59° -W		1.54	0.38	0.35	0.11	0.09	SD232
232	P-28	N-41° -W		[0.68]	0.28	0.26	0.14	0.09	SD231
233	0-27	N-87° -E		[4.18]	0.58	0.50	0.21	0.12	
234	0-27・28	N-88° -E		5.81	0.46	0.31	0.14	0.10	SD270
235	0・P-28	N-85° -W		1.55	0.31	0.18	0.11	0.08	
236	P-28	N-88° -E		[2.40]	0.44	0.38	0.16	0.10	
237	0-28	N-3° -E		[1.24]	[0.52]	[0.50]	0.24	0.17	
238	欠番								SL5畝9に変更
239	欠番								SL5畝14に変更
240	欠番								SL5畝13と同一
241	欠番								SL5畝15に変更
242	欠番								SL5畝7に変更
243	欠番								SL5畝5に変更
244	欠番								SL5畝3に変更
245	欠番								SL5畝2に変更
246	欠番								
247	M・N・0-24	N-10° -E	N-2° -E	[10.20]	0.28	0.18	0.07	0.05	
248	M・N・0-24	N-14° -E	N-2° -E	[15.17]	0.31	0.20	0.15	0.04	SD152
249	欠番								SL5畝1に変更
250	欠番								SL5畝8に変更
251	欠番								SL5畝10に変更
252	欠番								SL5畝4に変更
253	欠番								SL5畝6に変更
254	N-25	N-4° -W		[2.75]	0.28	0.19	0.11	0.08	SJ79
255	N-25	N-2° -W		[2.75]	0.15	0.10	0.06	0.03	SJ79
256	N-25	N-1° -W		[2.72]	0.24	0.17	0.07	0.05	SJ79
257	欠番								SL5畝11に変更
258	欠番								SL5畝12に変更
259	欠番								SD229と同一
260	Q-28	N-82° -W		[7.10]	0.68	0.57	0.25	0.19	
270	0・P-28	N-0°		[3.24]	0.42	0.35	0.18	0.13	SD234
348	M-23	N-8° -E		[0.62]	0.35	-	0.08	-	SK318
473	T-38・39 U-38・39 V-39	N-0°	N-16° -W	[23.50]	0.64	0.34	0.29	0.24	
474	欠番								SL6畝14に変更
475	欠番								SL6畝13に変更
476	欠番								SL6畝12に変更
477	欠番								SL6畝11に変更
478	欠番								SL6畝10に変更
479	欠番								SL6畝9に変更

No.	グリッド	方位	方位	長さ (m)	幅 (m)		深さ (m)		重複遺構
					最大	最少	最大	最少	
480	欠番								SL6畝6に変更
481	欠番								SL6畝3に変更
482	欠番								SL6畝1に変更
483	R・S・T-35	N-3° -W		[20.85]	0.51	0.39	0.24	0.19	SL7畝9に変更
484	欠番								SL7畝8に変更
485	欠番								
486	U-40・41	N-82° -W		3.17	0.23	0.17	0.04	0.03	
487	U-40・41	N-79° -E		[1.04]	0.25	0.15	0.03	0.02	
488	U-40 V-40	N-48° -W		12.10	0.28	0.18	0.10	0.04	
489	欠番								SL7畝7に変更
490	欠番								SL7畝6に変更
491	欠番								SL7畝5に変更
492	欠番								SL7畝4に変更
493	欠番								SL7畝3に変更
494	欠番								SL7畝2に変更
495	欠番								SL7畝1に変更
496	欠番								SL7畝11に変更
497	欠番								SL7畝10に変更
498	欠番								SL7畝5と同一
499	U-40	N-83° -E		[1.79]	0.24	0.21	0.14	0.08	SL7畝1・4
500	U-39	N-62° -W		[0.83]	0.39	0.20	0.12		SE141
501	欠番								SL6畝4に変更
502	欠番								SL6畝5に変更
503	欠番								SL6畝7に変更
504	欠番								SL6畝8に変更
505	欠番								SL6畝2に変更

断面は椀形または皿形で、規模は長さ17.32m、幅0.45～0.70m、深さ0.09～0.15mを測り、走行方向はN-3° -Eを指す。

遺物は須恵器壺・穂、土師器皿が出土した（第375図49～52）。49～51は須恵器である。49、50は壺で、口径や底径からおそらく9世紀代のものと推察される。51は穂で、外面に櫛描波状文が施文される。

52は土師器の皿で、口縁部がやや外反する。

遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、検出面から古代の遺構と考えられる。

第202号溝跡（第367図）

III区西端、L・M-21グリッドに位置する。遺構の南側は途中で東側に向って屈曲し、北端は調査区域外へ延びる。

断面は椀形で、規模は長さ8.96m、幅0.32～0.50m、深さ0.12～0.18mを測り、走行方向はN

-12° -Wを指す。

遺物は須恵器壺、土師器壺が出土した（第375図55～58）。55、56は須恵器の壺で、55は末野の製品である。ともに9世紀代の遺物と考えられる。

57、58は土師器の壺で、58は内外面に赤彩が施される。

遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、検出面から古代の遺構と考えられる。

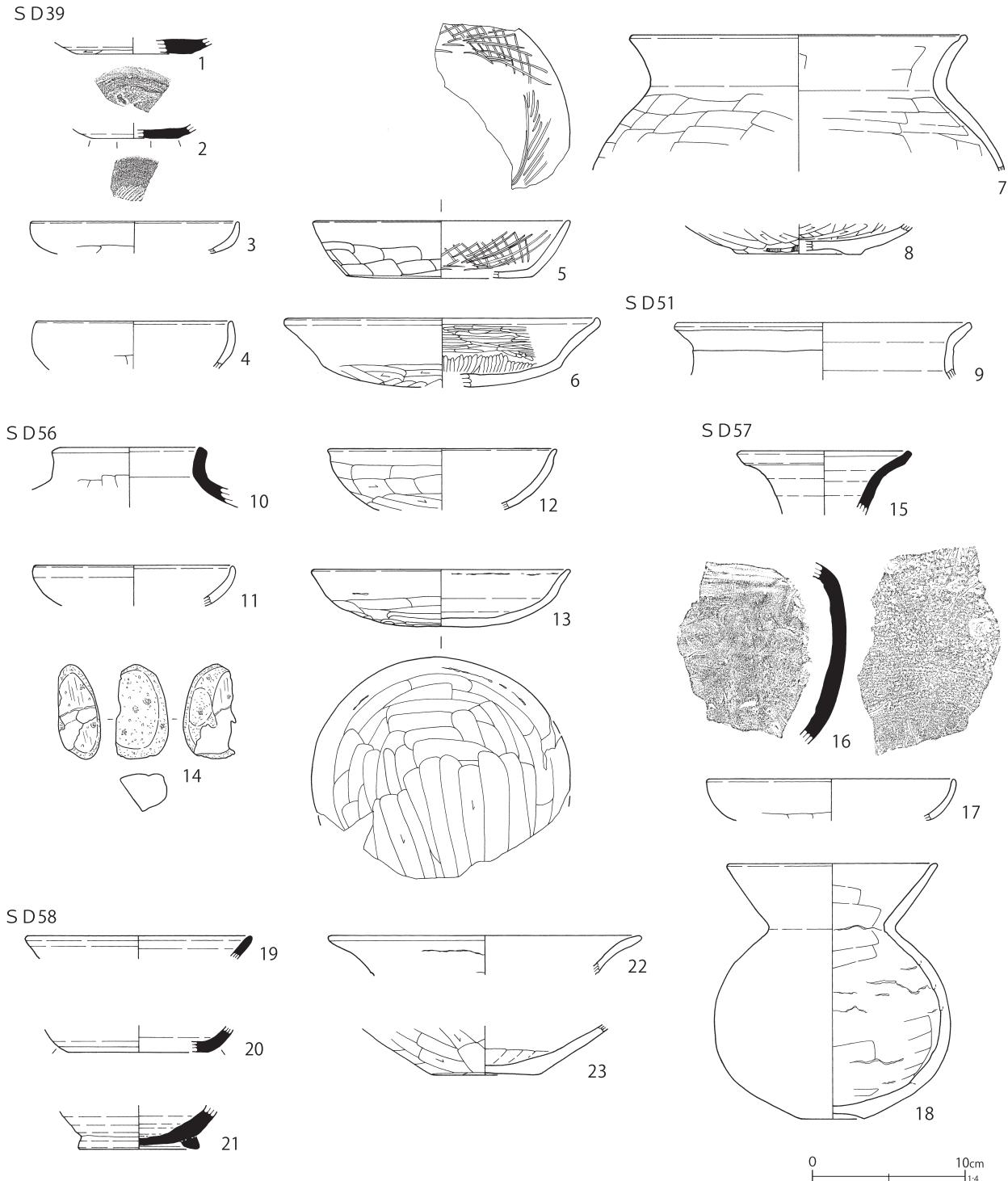
第212号溝跡（第369図）

IV区西端部、N・O・P-26グリッドに位置する。遺構の南端は調査区域外へ延びる。

断面は椀形で、規模は長さ17.87m、幅0.40～0.58m、深さ0.13～0.20mを測り、走行方向はN-0°を指す。

遺物は須恵器壺が出土した（第376図61、62）。

61、62は須恵器の壺で、61は堀ノ内の製品である。ともに9世紀代の遺物と考えられる。



第374図 溝跡出土遺物（1）

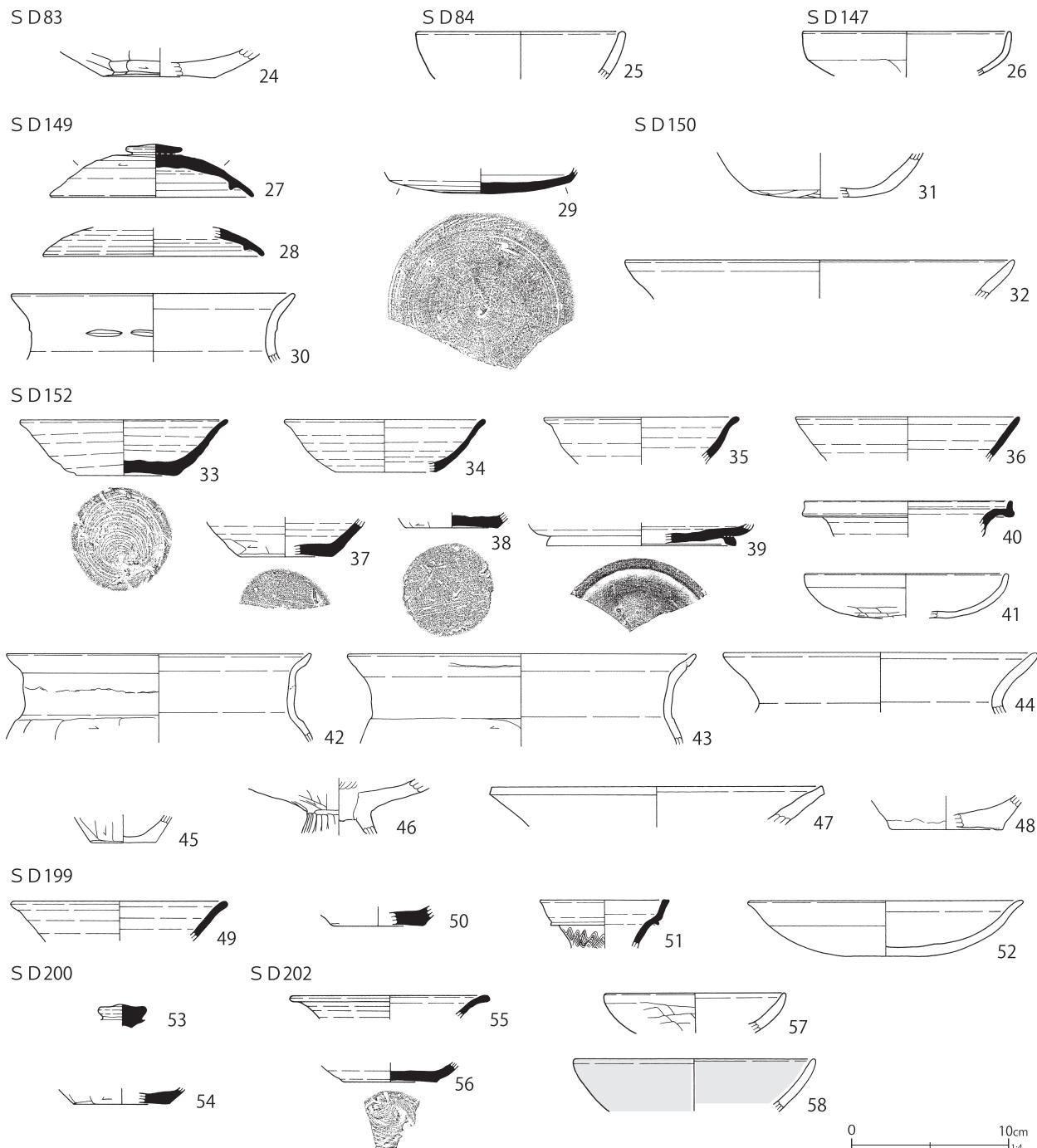
遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、検出面から古代の遺構と考えられる。

第216号溝跡（第370図）

IV区中央部、O-26グリッドに位置する。遺構

の南端は第267号土壙によって壊される。

断面は箱形で、規模は長さ3.32m、幅0.58～0.66m、深さ0.16～0.21mを測り、走行方向はN-4°-Eを指す。



第375図 溝跡出土遺物（2）

遺物は須恵器壊、土師器壊・甌が出土した（第376図64～66）。64は須恵器の壊で、底径が大きく、外周回転ヘラケズリ調整が施される。

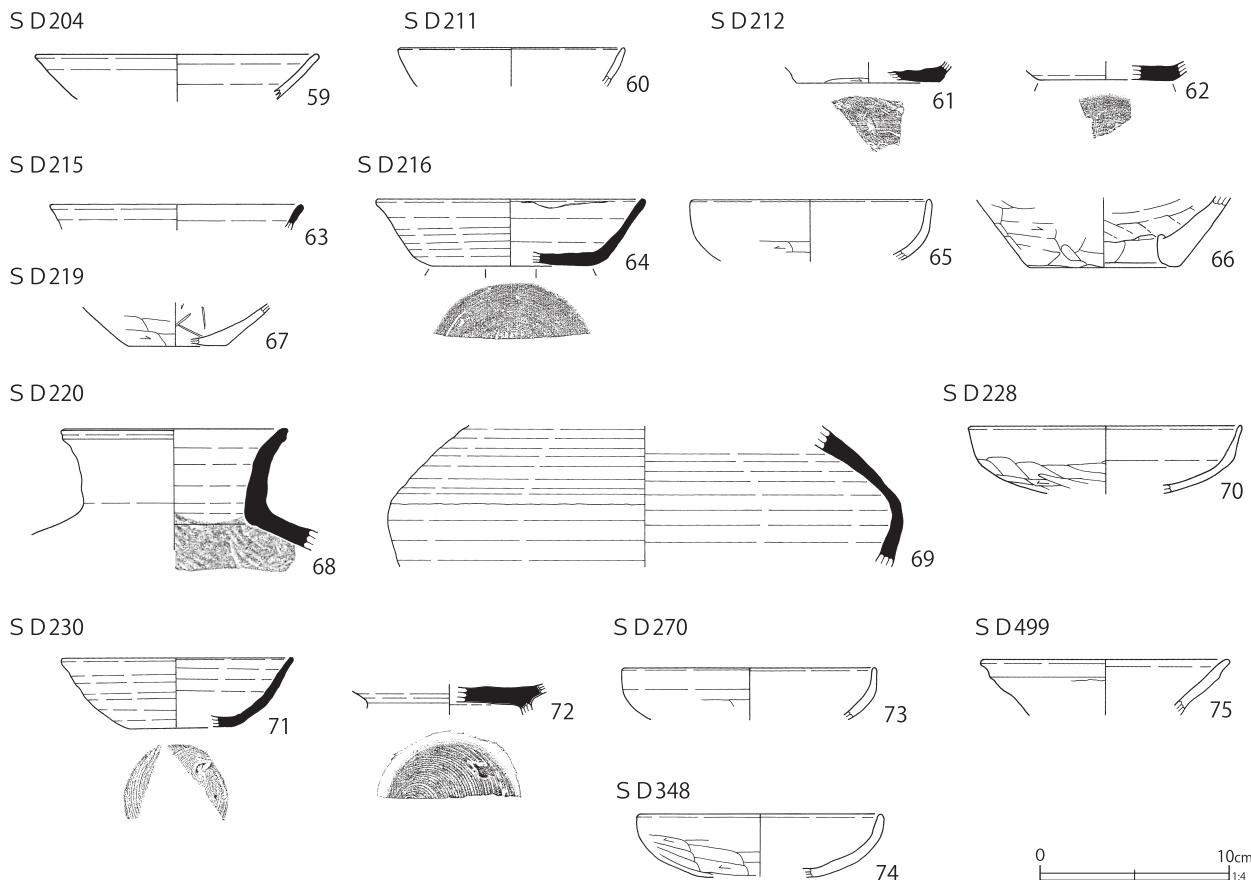
65、66は土師器である。65は壊で、口縁部がやや外反し、底部は丸底気味になる。66は甌である。単孔式の甌で、大型になると考えられる。

遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、検出面から8世紀代の遺構と考えられる。

第220号溝跡（第370図）

IV区中央部、O-26・27グリッドに位置し、第219・223・225号溝跡と重複する。

断面は箱形で、規模は長さ9.09m、幅0.35～



第376図 溝跡出土遺物（3）

0.77m、深さ0.11~0.17mを測り、走行方向はN-83°-Eを指す。

遺物は須恵器壺が出土した（第376図68、69）。68、69は壺である。68は短頸壺の口縁部と考えられ、胎土に凝灰岩片を含む。69は壺の胴部と推察され、肩が張る形状になる。

遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、検出面から古代の遺構と考えられる。

第228号溝跡（第370図）

IV区中央部、O-26・27グリッドに位置し、第225号溝跡、第260・268号土壙と重複する。

断面は楕円形で、規模は長さ11.73m、幅0.27~0.42m、深さ0.14~0.16mを測り、走行方向はN-82°-Wを指す。

遺物は土師器壺が出土した（第376図70）。70は北武藏型壺である。丸底であり、口縁部は外反気

味に立ち上がり、口縁部外面ヨコナデの下までヘラケズリ調整が施される。8世紀前半のものと考えられる。

遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、検出面から古代の遺構と考えられる。

第230号溝跡（第370図）

IV区東南部、P-27・28グリッドに位置し、中央部に液状化現象に伴う噴砂の痕跡が認められる。

断面は箱形で、規模は長さ10.40m、幅0.32~0.49m、深さ0.14~0.18mを測り、走行方向はN-84°-Eを指す。

遺物は須恵器壺・高台付壺が出土した（第376図71、72）。71は壺である。南比企の製品で、鳩山編年VIII期のものか。72は高台付壺で、三毳の製品である。底部のみ残存する。

遺物の時期は須恵器壺の年代から9世紀後半と

第111表 溝跡出土遺物観察表 (第374 ~ 376図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	—	[1.0]	(7.4)	A E I K	25	良好	黄灰	SD39 新治産	
2	須恵器	壺	—	[0.9]	(5.6)	E H I K	15	良好	にぶい赤褐	SD39 南比企産 外面煤付着	
3	土師器	壺	(13.4)	[2.1]	—	C H I K	10	普通	にぶい橙	SD39	
4	土師器	壺	(12.6)	[3.1]	—	C H I K	10	普通	にぶい黄橙	SD39	
5	土師器	壺	(16.4)	3.7	(12.2)	C H I J K	30	普通	にぶい橙	SD39 斜格子暗文壺 上総地域の製品 か 内面摩耗 内外面黒斑有り	121-1
6	土師器	皿	(20.2)	4.4	—	C E H I K	25	普通	橙	SD39	
7	土師器	甕	(21.8)	[8.9]	—	C E I K	30	普通	橙	SD39 SD8No.1	
8	土師器	甕	—	[1.9]	(8.0)	A E I K	25	普通	にぶい赤褐	SD8	
9	土師器	甕	(19.0)	[3.7]	—	C H I K	5	普通	にぶい褐	SD51 外面煤付着 やや歪み有り	
10	須恵器	短頸壺	(9.0)	[3.9]	—	B H I K	20	普通	灰	SD1	
11	土師器	壺	(12.8)	[2.6]	—	C H I K	10	普通	橙	SD1 外面摩耗により調整は不明瞭	
12	土師器	壺	(14.8)	[4.0]	—	C E H I K	25	普通	明赤褐	SD1	121-3
13	土師器	皿	16.5	3.8	—	C E H I K	80	普通	橙	SD1 No.1	121-4
14	石製品	磨石	長さ6.1 幅[3.4] 厚さ2.7 重さ15.6g							SD1 軽石 自然面遺存 使用面1	128-2
15	須恵器	長頸瓶	(10.8)	[4.2]	—	E I	40	普通	暗赤灰	SD2 G10No.2・3 同一個体と思われる 胴部小破片の内面に付着物有り 漆か	
16	須恵器	短頸壺	—	[11.7]	—	E H I K	5	普通	灰	SD2 外面の摩耗が激しい SD1-4と同 一個体の可能性がある	
17	土師器	壺	(16.0)	[2.7]	—	C H I K	10	普通	橙	SD2	
18	土師器	小型壺	13.6	16.6	4.2	E I K	55	普通	明赤褐	SD2 G10No.4・5・6・7 内外面共に摩 耗が激しく調整は不明瞭 古墳時代	121-5
19	須恵器	壺	(14.6)	[1.5]	—	H I K	5	良好	黄灰	SD3	
20	須恵器	壺	—	[1.7]	(9.0)	E I J K	20	良好	灰	SD3 南比企産	
21	須恵器	瓶類	—	[2.8]	(7.4)	E H I K	25	普通	黄灰	SD3 南比企産	
22	土師器	甕	(20.0)	[2.5]	—	B C H I K	5	普通	橙	SD3	
23	土師器	甕	—	[3.2]	(6.6)	C I K	25	普通	赤褐	SD3	
24	土師器	甕	—	[1.8]	(7.2)	E H I K	25	普通	にぶい橙	SD15	
25	土師器	壺	(13.0)	[3.0]	—	E H I K	5	普通	にぶい赤褐	SD16	
26	土師器	壺	(13.0)	[2.8]	—	C E H I K	5	普通	橙	SD79	
27	須恵器	蓋	12.2	3.3	—	B E I K	85	普通	灰白	SD81 No.1	121-6
28	須恵器	蓋	(13.8)	[1.8]	—	E H I K	15	不良	橙	SD81 末野産か 酸化焰焼成	
29	須恵器	壺	—	[1.6]	—	E I J	75	普通	灰	SD81 No.2 南比企産	
30	土師器	甕	(17.8)	[4.3]	—	C E H I K	10	普通	にぶい橙	SD81	
31	土師器	壺か	—	[2.8]	—	C H I K	25	普通	灰白	SD82 外面黒斑有り	
32	土師器	甕	(24.6)	[2.4]	—	C H I K	5	普通	橙	SD82	
33	須恵器	壺	13.0	3.6	6.4	E I K	80	普通	褐灰	SD84 No.1 末野産	121-7
34	須恵器	壺	(12.6)	2.3	(6.5)	E I K	15	良好	灰	SD84 末野産か	
35	須恵器	壺	(12.2)	[3.0]	—	B I K	10	良好	黄灰	SD84 末野産	
36	須恵器	壺	(14.0)	[2.8]	—	E H I K	5	普通	灰白	SD84	
37	須恵器	壺	—	[2.4]	(5.8)	E I K	25	普通	黄灰	SD84 三和産	
38	須恵器	壺	—	[0.9]	5.9	E I K	90	良好	灰白	SD84 三和産	
39	須恵器	高台付壺	—	[1.4]	(12.0)	E I J	20	普通	灰	SD84 No.9 南比企産か	
40	須恵器	長頸瓶	(13.0)	[2.3]	—	I K	10	良好	黄灰	SD84	
41	土師器	壺	(12.8)	[2.8]	—	C H I K	15	普通	にぶい橙	SD84	
42	土師器	甕	(19.3)	[5.6]	—	C I K	20	普通	にぶい赤褐	SD84 No.4	
43	土師器	甕	(22.0)	[5.8]	—	C E H I K	5	普通	にぶい褐	SD84	
44	土師器	甕	(19.8)	[3.9]	—	C E H I K	5	普通	にぶい橙	SD84	
45	土師器	甕	—	[2.7]	(4.0)	E I K	45	普通	にぶい赤褐	SD84	
46	土師器	高壺	—	[3.5]	—	E H I K	15	普通	橙	SD84 古墳時代	
47	土師器	甕	(21.0)	[2.5]	—	B C E H I K	5	普通	橙	SD84 古墳時代	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
48	土師器	甕	—	[2.1]	(7.0)	B E I K	45	普通	にぶい橙	SD84 外面被熱 内外面摩耗 古墳時代	
49	須恵器	壺	(13.4)	[2.5]	—	I K	5	普通	にぶい黄橙	SD131	
50	須恵器	壺	—	[1.2]	(5.6)	E I K	20	普通	灰白	SD131 内外面共に摩耗が激しい	
51	須恵器	甕	(8.2)	[3.1]	—	E I K	10	良好	灰	SD131 内面降灰	
52	土師器	皿	(17.2)	3.5	—	C E H I K	15	普通	橙	SD131 内外面共に摩耗が激しく調整は不明瞭	
53	須恵器	蓋(摘み)	—	[1.4]	—	H I K	95	不良	橙	SD132 三毳産か	
54	須恵器	壺	—	[1.0]	(6.0)	E H I K	25	普通	灰黄	SD132 三和産	
55	須恵器	壺	(12.2)	[1.5]	—	B E H I K	5	良好	黄灰	SD134 末野産	
56	須恵器	壺	—	[1.2]	(5.9)	B E H I K	15	普通	にぶい黄橙	SD134 内外面共に強く被熱し変色している	
57	土師器	壺	(11.3)	[2.5]	—	C I K	10	普通	明褐灰	SD134	
58	土師器	壺	(15.2)	[3.3]	—	C H I K	5	普通	にぶい橙	SD134 内外面赤彩	
59	須恵器	壺	(14.8)	[2.4]	—	C H I K	5	普通	黄灰	SD136 外面被熱	
60	土師器	埴輪	(11.8)	[2.0]	—	C H I K	5	普通	橙	SD143	
61	須恵器	壺	—	[1.0]	(7.6)	E I K	20	普通	赤灰	SD144 堀ノ内産	
62	須恵器	壺	—	[0.9]	(7.0)	I J K	20	普通	灰	SD144 南北企産	
63	須恵器	壺	(13.2)	[1.3]	—	E I K	5	良好	灰	SD147	
64	須恵器	壺	(14.0)	4.0	(8.0)	E I	30	普通	灰	SD148 No.1 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる 内底面の一部にパリ付着	121-8
65	土師器	壺	(12.4)	[3.2]	—	B C H I K	5	普通	橙	SD148	
66	土師器	甕	—	[3.6]	(8.0)	C E H I K	25	普通	明褐灰	SD148 外面黒斑有り 孔数は不明	
67	土師器	甕	—	[2.2]	(5.2)	E I K	15	普通	赤褐	SD151	
68	須恵器	短頸壺	(11.7)	[6.4]	—	E I	35	普通	灰	SD152 No.1 胎土に凝灰岩片を含む歪み有り 摩耗が激しい	
69	須恵器	壺	—	[7.4]	—	E I K	5	良好	灰白	SD152 No.1 内面降灰	
70	土師器	壺	(14.2)	[3.5]	—	A I K	25	普通	にぶい橙	SD160 外面黒斑有り	
71	須恵器	壺	12.0	3.7	5.5	I J	70	普通	黄灰	SD162 No.1 南北企産	121-9
72	須恵器	高台付壺	—	[1.5]	—	H I K	45	良好	灰白	SD162 No.2 三毳産	
73	土師器	壺	(13.2)	[2.7]	—	C H I K	10	普通	にぶい橙	SD202	
74	土師器	壺	(12.7)	[3.3]	—	C E I K	20	普通	にぶい褐	SD280	
75	土師器	壺	(13.0)	[2.9]	—	C H I K	5	普通	明赤褐	SD428	

考えられるが、噴砂に切られるため、8世紀代の遺構である可能性もある。

第270号溝跡（第370図）

IV区東側、O・P-28グリッドに位置し、第234号溝跡と重複する。

断面は椀形で、規模は長さ3.24m、幅0.35～0.42m、深さ0.13～0.18mを測り、走行方向はN-0°を指す。

遺物は土師器壺が出土した（第376図73）。73は北武藏型壺で、丸底で扁平な器形となり、口縁部は垂直気味に立ち上がる。口縁部外面ヨコナデの下までヘラケズリ調整が施される。8世紀前半

のものか。

遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、検出面から古代の遺構と考えられる。

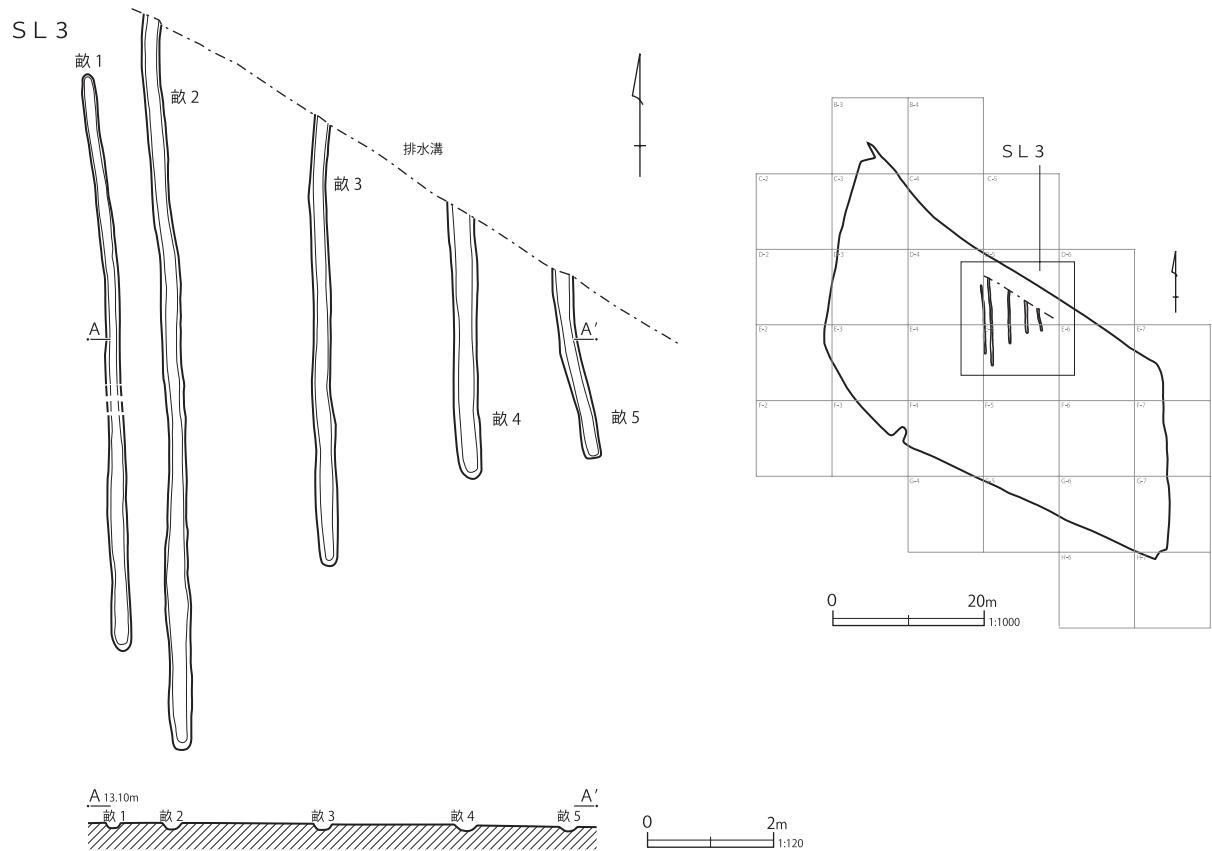
第499号溝跡（第373図）

VI区東部、U-40グリッドに位置する。

断面は椀形で、規模は長さ1.79m、幅0.21～0.24m、深さ0.08～0.14mを測り、走行方向はN-83°-Eを指す。

遺物は土師器壺が出土した（第376図75）。75は壺である。9世紀代以降のものか。

遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、検出面から古代の遺構と考えられる。



第377図 第3号畠跡

(5) 畠跡

古代の畠跡は、西側調査区の中央部と、III区東部およびVI区から検出された。いずれも古代の集落または住居跡に隣接する形で耕作が行われており、集落域から50~100m程離れた場所に位置する第3・102号住居跡の周辺にも畠跡が存在することが注目される。

走行方向は若干の違いはあるものの、いずれも北一南方向で統一されている。これは前時代の不規則な状況とは大きく異なる点である。

第3号畠跡（第377図）

西側調査区中央北端部、D・E-4・5グリッドに位置し、第3号住居跡と隣接し、一部重複する。

南一北方向に走行する畠間溝が5条検出され、範囲は東西7.85m、南北11.73mを測り、走行方向はN-0°を指す。畠間溝は幅0.31~0.42m、深

さ0.05~0.12mを測る。

遺物は須恵器の壺が1点出土した（第384図1）。1は須恵器の壺で、末野の製品と考えられる。9世紀代のものか。

遺物が1点のみであるため詳細な時期は不明だが、検出面から古代の遺構と考えられる。

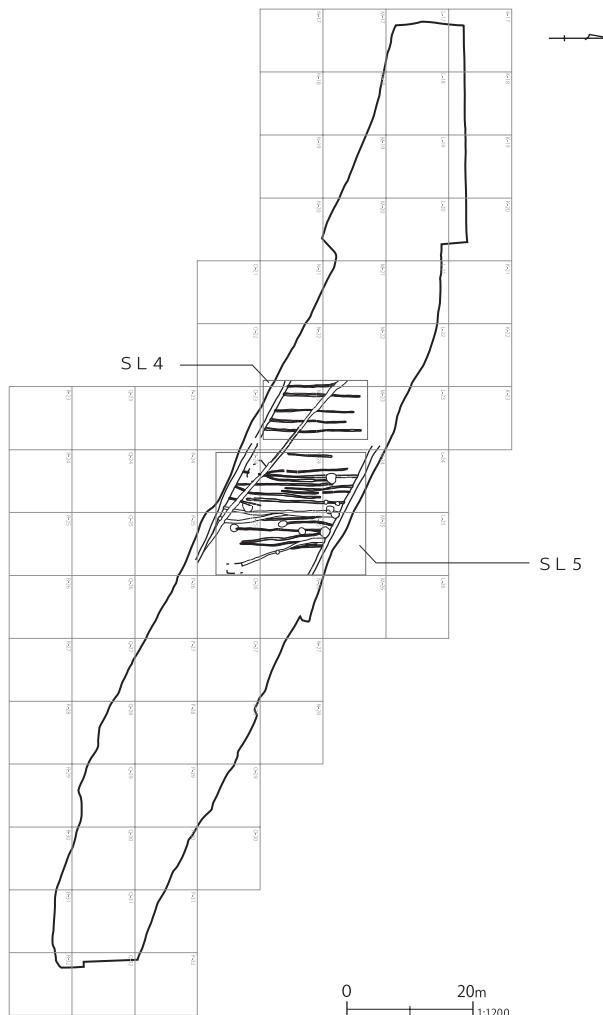
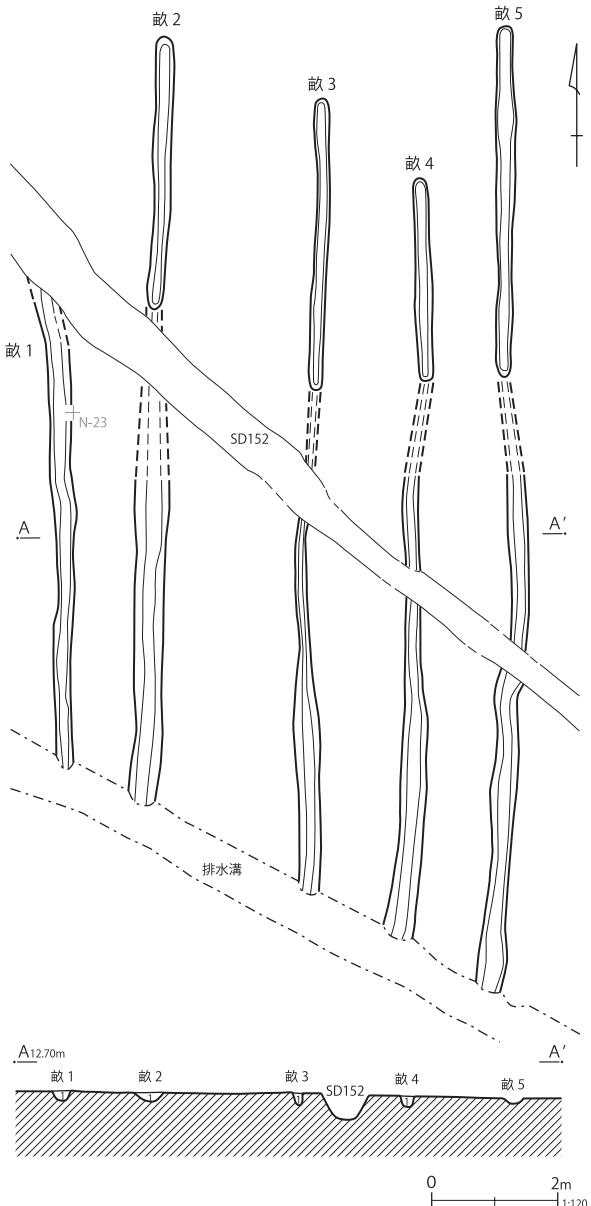
第4号畠跡（第378図）

III区中央部、M・N-22・23グリッドに位置する。南一北方向に走行する畠間溝が5条検出され、範囲は東西7.70m、南北15.30mを測り、走行方向はN-0°を指す。畠間溝は幅0.36~0.52m、深さ0.13~0.19mを測る。

遺物は須恵器壺・蓋、土師器壺・皿等が出土した（第384図2~7）。5、6は須恵器である。5は蓋である。6は壺で、口径が比較的大きい。8世紀代のものか。

2、3、7は土師器である。2、3は壺で、2

S L 4

S L 4 故 1 ~ 5
1 灰褐色土 粘土質 しまり強い 全面に酸化物を多量含む

第378図 第4号畠跡

は丸底で内面にミガキが施される。7は皿で、口縁部が大きく外反する。

4は内黒のロクロ土師器坏である。

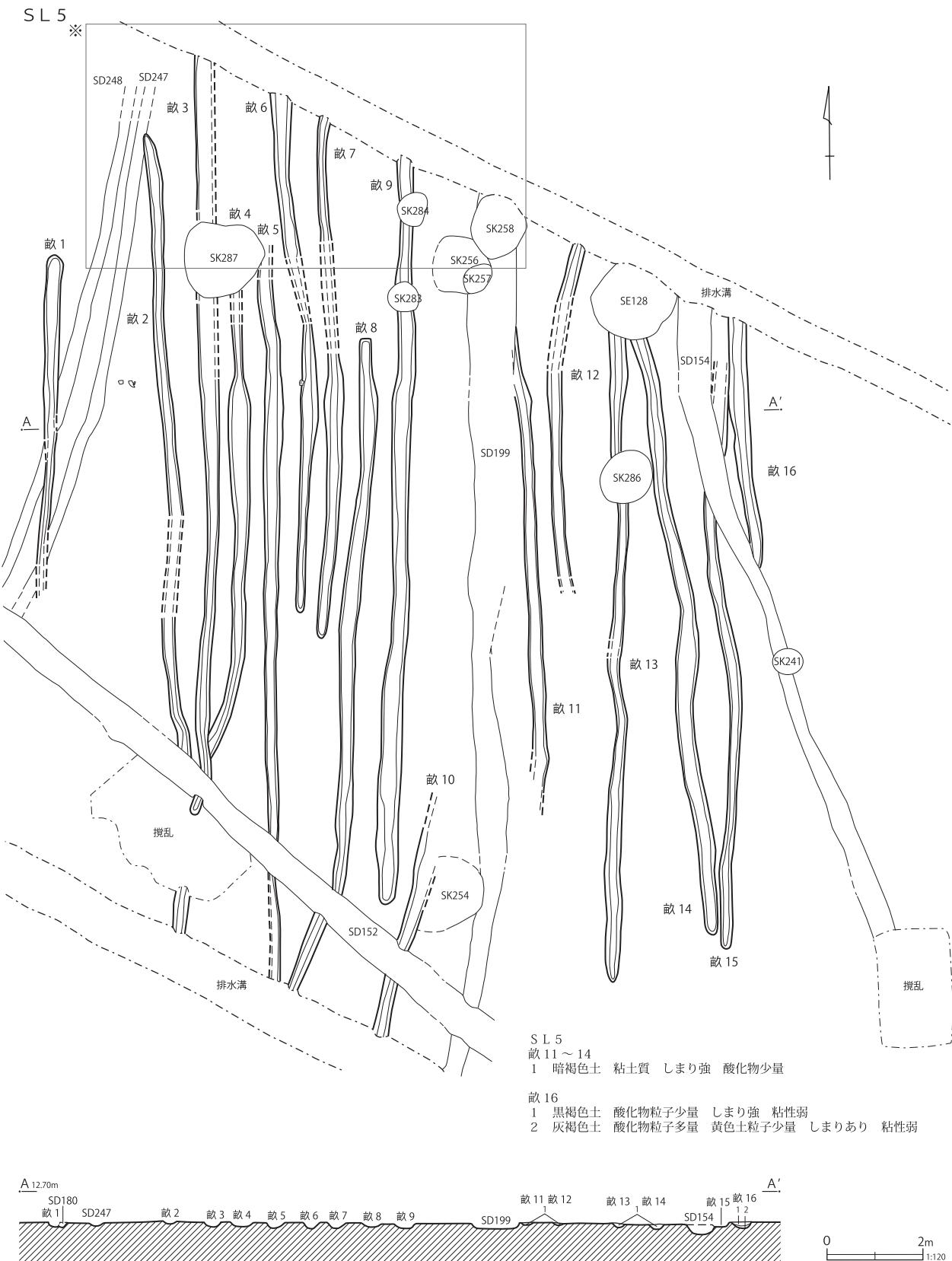
遺物の時期は、須恵器坏や土師器坏の形状から8世紀代のものと考えられる。

第5号畠跡（第379図）

III区東側、M・N・O-24・25グリッドに位置する。畠跡北西部の遺構確認面からは、液状化現

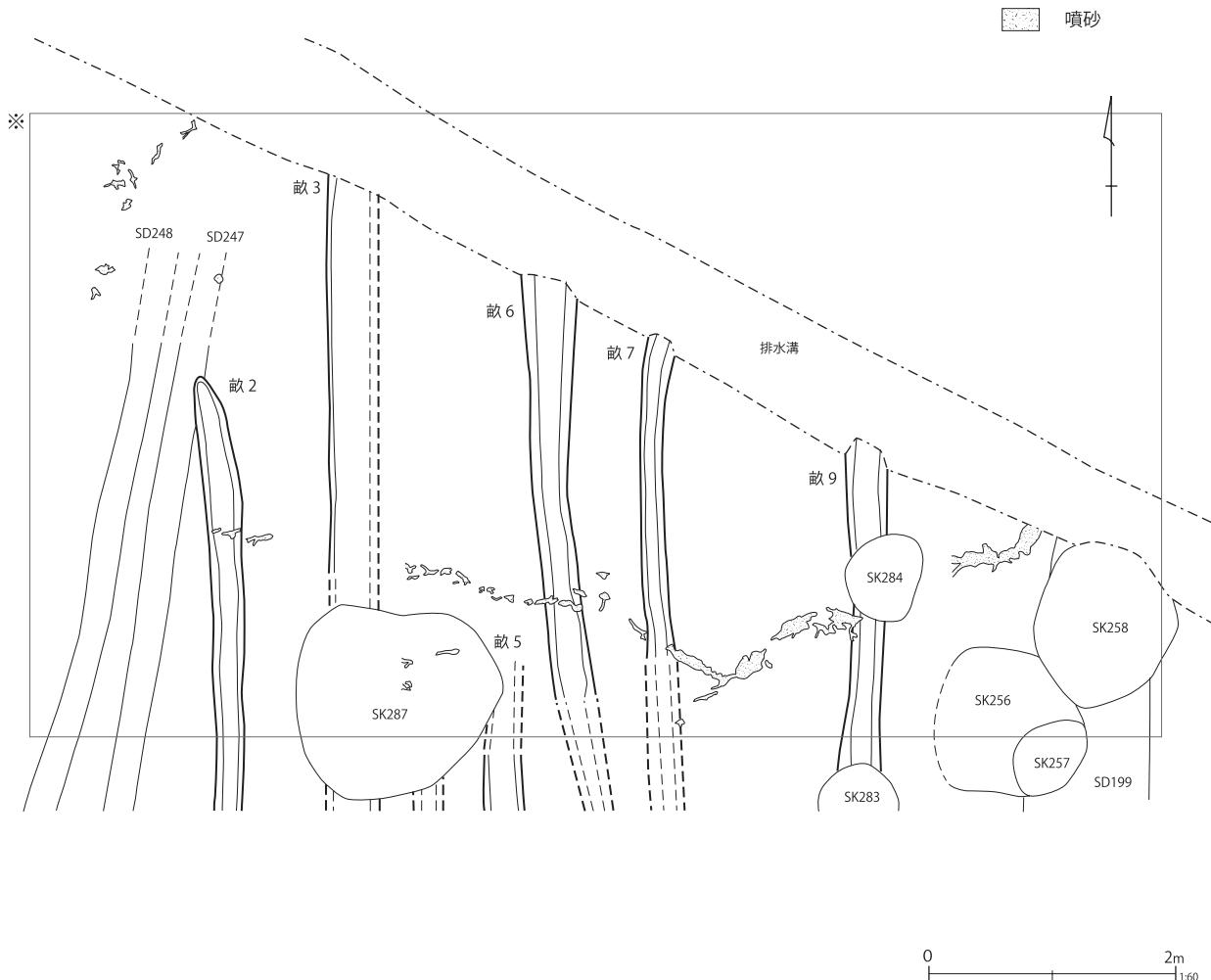
象に伴う噴砂の痕跡が、東西方向に大きく蛇行しながら走行する形で検出された。西側では幅が狭く、東側では広く検出されている点も特徴的である。また、北東部からは別方向に走行する噴砂も認められる。

南-北方向に走行する畠間溝が16条検出され、範囲は東西15.12m、南北20.60mを測り、走行方向はN-2°-Eを指す。畠間溝は幅0.28~0.50m、



第379図 第5号竈跡（1）

S L 5 噴砂分布図



第380図 第5号畠跡（2）

深さ0.04～0.14mを測る。

遺物は須恵器坏、土師器坏・高坏等が出土した（第384図8～13）。10は須恵器坏の口縁部破片である。

8、11、12は土師器の坏である。8は口縁部が外反する。11は内面全体および外面上半、12は内外面全体に赤彩が施される。11は口縁部が外反気味に立ち上がり、12は大きく内湾する。9は皿で、内面全体に横方向のミガキが施される。8世紀前半のものか。

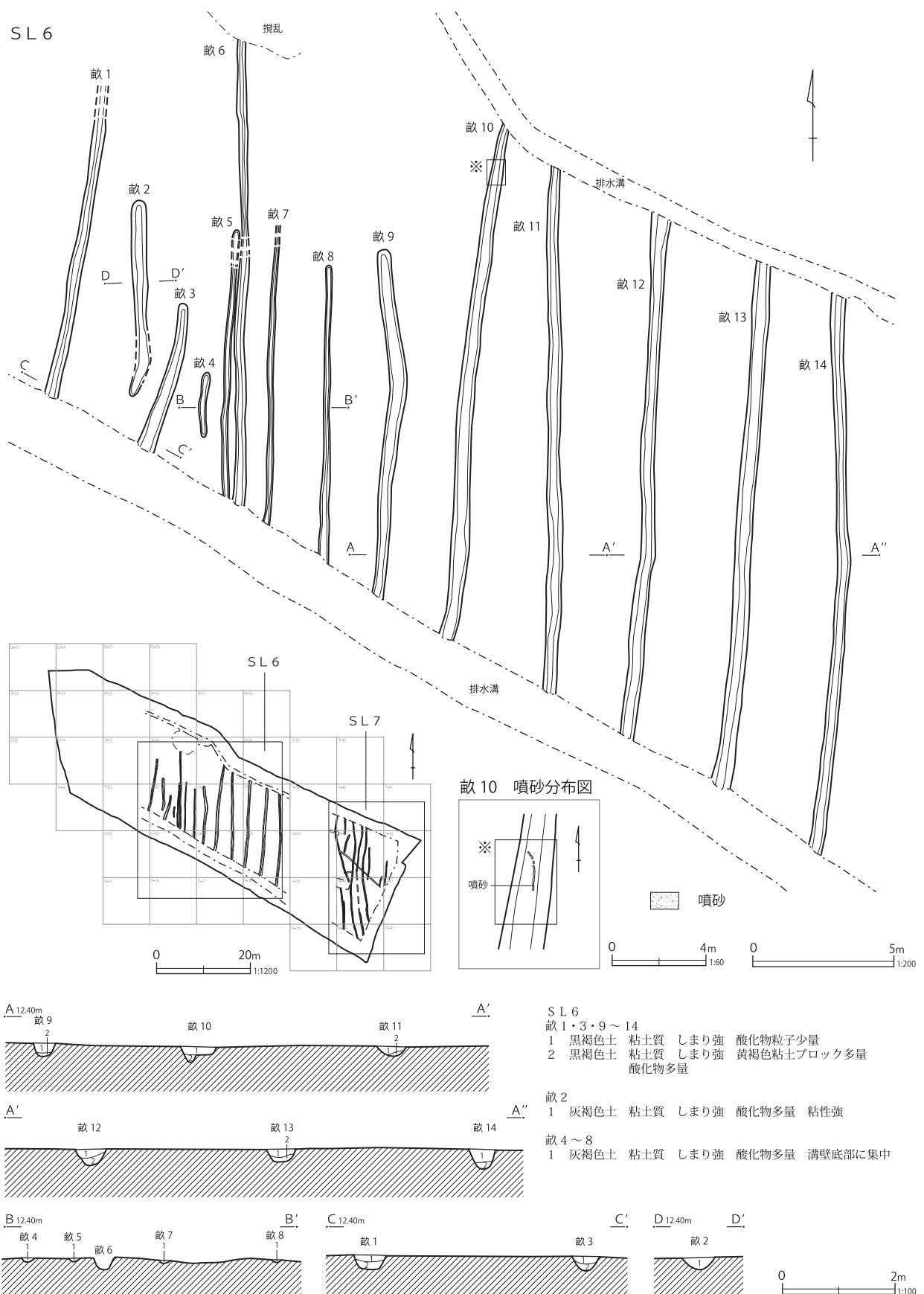
13は高坏の坏部である。立ち上がり部に段を持ち、内外面に縦方向のミガキが施される。古墳時代の遺物である。

遺物の時期幅がひろく、詳細な時期は不明だが、検出面から古代の遺構と考えられ、確認面で液状化現象に伴う噴砂の痕跡が認められたことから、9世紀初頭以前の畠跡と推察される。

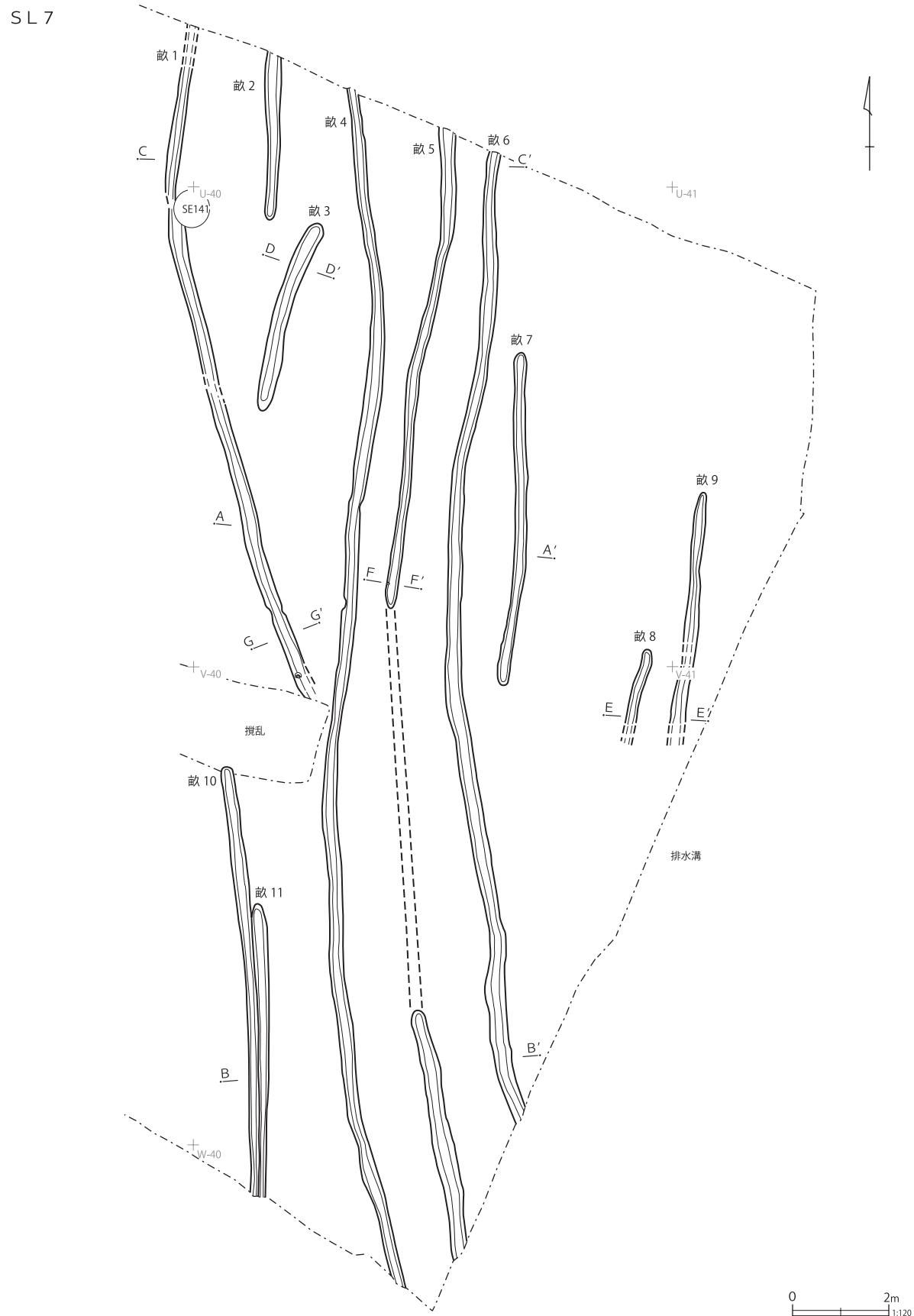
第6号畠跡（第381図）

VI区中央部にあたる、S・U-36～38、T-35～38、V-38グリッドに位置する。走行方向を揃えて並ぶことから畠跡としたが、規模が大きく、畠の間隔も広いことから、別遺構である可能性もある。第2号遺物集中地点の南東部に広がり、本畠跡は遺物集中地点とほぼ同じ高さから検出されている。

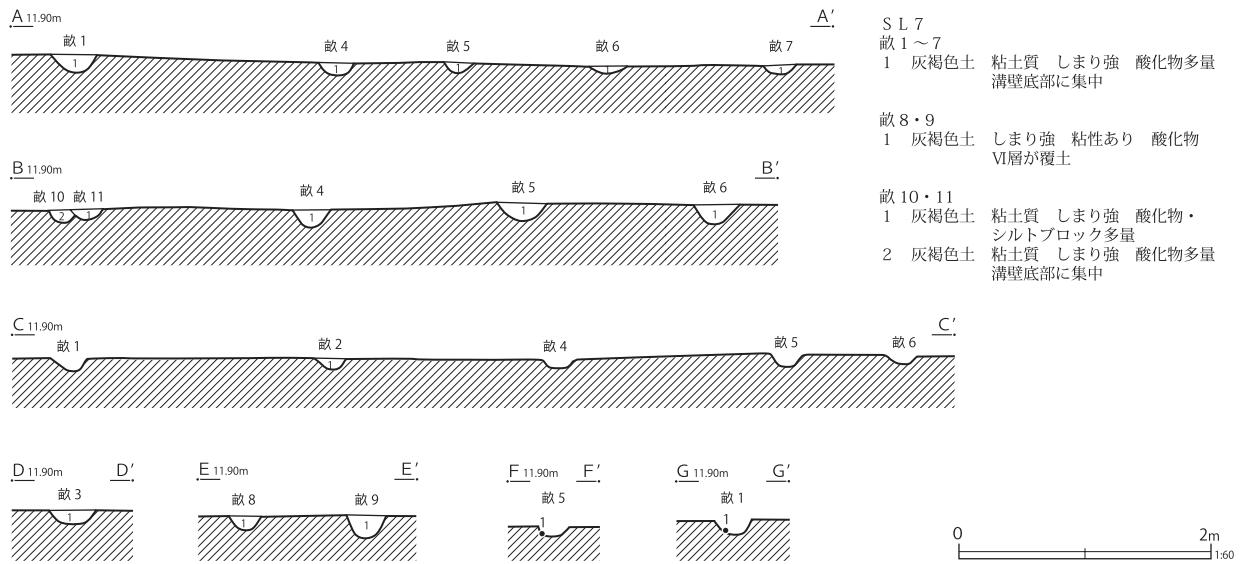
南-北方向に走行する畠間溝が14条検出され、



第381図 第6号畠跡



第382図 第7号畠跡（1）



第383図 第7号畠跡（2）

範囲は東西28.60m、南北29.10mを測り、走行方向はN-5°-Eを指す。畠間溝は幅0.24~0.69m、深さ0.03~0.30mを測る。

遺物は須恵器壺、ロクロ土師器壺、土師器甕、紡錘車等が出土した（第384図14~23）。14、18、22は須恵器の壺である。全て南比企の製品で、いずれも口縁部の破片である。

15、19、23は内黒のロクロ土師器壺である。い

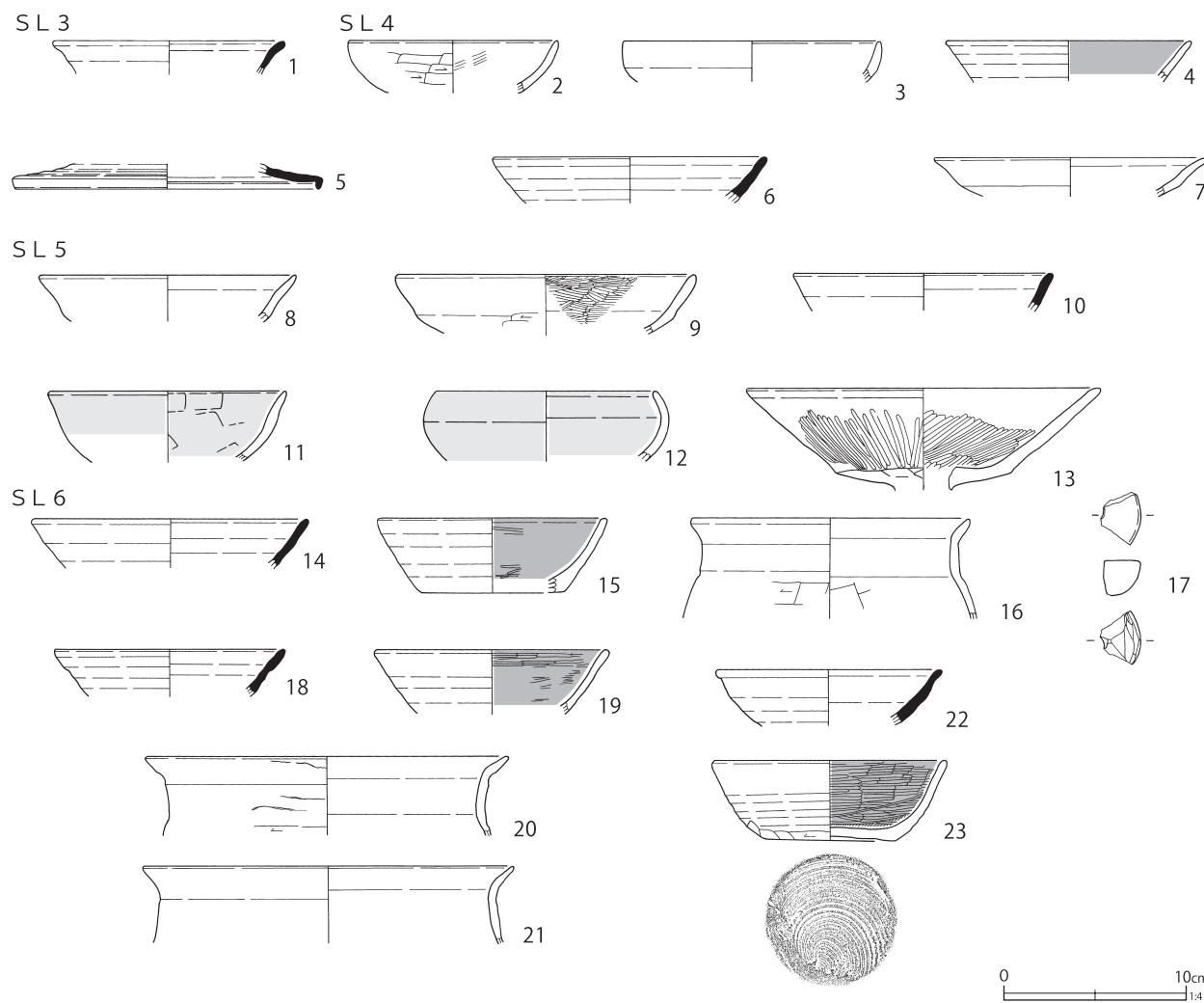
ずれも胎土に角閃石を含むことから、利根川流域の製品と考えられる。15はやや内湾気味に立ち上がり、19、23は口縁部が僅かに外反する。23は外面下端に手持ちヘラケズリ調整が施される。

16、20、21は土師器の甕である。いずれも「コ」の字状口縁甕で、定型化した段階のものである。9世紀中葉～後半のものか。

17は土製品の紡錘車である。破片だが、器面に

第112表 畠跡一覧表（第377~383図）

番号	畠No.	長さ	幅	深さ	番号	畠No.	長さ	幅	深さ	番号	畠No.	長さ	幅	深さ
3	1	9.07	0.31	0.06	6	8	[13.70]	0.40	0.09	7	9	[12.70]	0.60	0.25
	2	[115.50]	0.40	0.08		9	[15.52]	0.48	0.07		10	[18.44]	0.62	0.30
	3	[7.03]	0.35	0.12		10	[4.42]	0.32	0.10		11	[18.82]	0.54	0.21
	4	[4.21]	0.42	0.06		11	[9.50]	0.32	0.04		12	[18.80]	0.68	0.30
	5	[2.97]	0.32	0.05		12	[7.30]	0.28	0.07		13	[18.72]	0.69	0.22
4	1	[7.64]	0.36	0.19		13	[13.40]	0.36	0.07		14	[20.40]	0.52	0.30
	2	[12.16]	0.52	0.13		14	[12.44]	0.50	0.10		1	[14.29]	0.33	0.13
	3	[12.62]	0.42	0.19		15	[13.00]	0.30	0.06		2	[3.49]	0.34	0.08
	4	[12.00]	0.48	0.16		16	[5.30]	0.38	0.14		3	4.09	0.38	0.14
	5	[15.30]	0.48	0.19		1	[10.10]	0.50	0.30		4	[25.19]	0.35	0.13
5	1	[6.44]	0.34	0.09		2	7.00	0.54	0.20		5	[23.80]	0.34	0.11
	2	[12.90]	0.30	0.06		3	[5.44]	0.66	0.25		6	[20.36]	0.41	0.14
	3	[15.80]	0.34	0.08		4	2.29	0.30	0.05		7	6.93	0.26	0.07
	4	[12.76]	0.46	0.08		5	[9.54]	0.26	0.03		8	[1.60]	0.24	0.10
	5	[14.50]	0.40	0.10		6	16.55	0.42	0.25		9	[4.86]	0.30	0.15
	6	[10.80]	0.44	0.11		7	[9.90]	0.24	0.04		10	[8.94]	0.31	0.10
	7	[10.82]	0.40	0.13		8	[10.64]	0.35	0.04		11	[6.08]	0.31	0.10



第384図 畠跡出土遺物

ヘラケズリ調整が認められる。

遺物の時期は、須恵器壺や土師器甕の形状から、9世紀中葉～後半と推察される。隣接する第2号遺物集中も同時期であり、標高も近似することから、同時代に存在した遺構と考えられる。

第7号畠跡（第383図）

VI区西側、T-39・40、U-39・40・41、V-40・41、W-40グリッドに位置する。第3号遺物集中地点と重複し、本遺構が古い。遺物集中地点から検出された遺物群との高低差は10～30cm程になる。

長く蛇行する溝跡群で、走行方向もやや不規則だが、細く浅い溝跡が並走するため、畠跡と判断

した。第6号畠跡と同じような観点から、別遺構である可能性もある。

南～北方向に走行する畠間溝が11条検出され、範囲は東西11.80m、南北26.40mを測り、走行方向は凡そN-5°～Eを指す。畠間溝は幅0.26～0.41m、深さ0.07～0.15mを測る。

遺物は出土しなかった。

遺物が無いため詳細な時期は不明だが、西側に展開する第6号畠跡の時期や、重複する第3号遺物集中地点の時期が9世紀中葉から後半と考えられることから、9世紀中葉以前のものと考えられる。

第113表 畠跡出土遺物観察表（第384図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	(12.4)	[1.8]	—	E H I K	5	不良	灰黄褐	SD33 末野産か	
2	土師器	壺	(11.3)	[2.8]	—	C E H I K	5	普通	橙	SD138	
3	土師器	壺	(14.0)	[2.2]	—	C E H I K	5	普通	橙	SD138	
4	ロクロ土師器	壺	(13.2)	[2.2]	—	C H I K	5	普通	にぶい黄橙	SD138 内黒 黒色処理はほぼ飛んでいる	
5	須恵器	蓋	(16.6)	[1.4]	—	C H I K	5	不良	にぶい橙	SD141	
6	須恵器	壺	(14.8)	[2.5]	—	I J K	5	良好	灰	SD141	
7	土師器	皿	(14.8)	[2.1]	—	C E H I K	5	普通	橙	SD141	
8	土師器	壺	(14.0)	[2.5]	—	B C H I K	5	普通	橙	SD88	
9	土師器	壺	(16.2)	[3.2]	—	E I K	5	普通	にぶい黄橙	SD88	
10	須恵器	壺	(14.0)	[2.0]	—	C H I K	5	普通	灰黄	SD185	
11	土師器	壺	(12.9)	[3.8]	—	E H I K	15	普通	明赤褐	SD133 内外面赤彩 外面摩耗が激しく調整は不明瞭	
12	土師器	壺	(12.0)	[3.8]	—	C E H I K	15	普通	にぶい橙	SD177 No.2 内外面赤彩	
13	土師器	高壺	(19.2)	[5.5]	—	C E I K	25	普通	にぶい赤褐	SD177 No.3 内外面黒斑有 古墳時代	121-10
14	須恵器	壺	(15.0)	[2.7]	—	I K	5	良好	黄灰	SD404 南比企産か 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	
15	ロクロ土師器	壺	(12.2)	5.1	(7.8)	C E H I K	15	普通	にぶい橙	SD409 内黒	
16	土師器	甕	(15.0)	[5.5]	—	B C H I K	5	普通	にぶい橙	SD409	
17	土製品	紡錘車	外径(4.5) 内径(0.6) 高さ1.9			C H I K	20	良好	にぶい赤褐	SD409	
18	須恵器	壺	(12.4)	[2.6]	—	I J K	15	普通	灰	SD420 K27No.838 南比企産	
19	ロクロ土師器	壺	(12.6)	[3.5]	—	C E H I K	15	普通	橙	SD420 No.1 内黒	
20	土師器	甕	(19.6)	[4.3]	—	C H I K	5	普通	橙	SD420	
21	土師器	甕	(20.3)	[4.3]	—	C E H I K	10	普通	橙	SD420	
22	須恵器	壺	(12.2)	[3.0]	—	E I J K	5	良好	灰	SD421 南比企産	
23	ロクロ土師器	壺	12.5	4.4	7.1	C E I K	75	普通	灰褐	SD424 No.1 内黒	121-11

（6）土壙

土壙は調査区全域で検出された。特に、Ⅱ区からⅣ区にかけて、多く分布する傾向にある。

土壙の平面形態は円形や橢円形、方形、隅丸方形等であり、規模も大小さまざまである。遺物は全体的に少なく、図示可能なものは1、2点程度という土壙が多いが、一部の土壙からは比較的まとまった量の土器が出土した。

各土壙の詳細は一覧表に記した。ここでは遺物が出土した土壙を中心に、概観していく。

第55号土壙（第385図）

東側調査区中央部、I-15グリッドに位置する。平面形態は円形で、規模は長径0.90m、短径0.80m、深さ0.24mを測る。

遺物は覆土中位から検出され、須恵器壺、土師器壺・甕等が出土した（第398図1～3）。1は須

恵器の壺である。南比企の製品で、底部に外周回転ヘラケズリ調整が施される。鳩山編年IV期と考えられる。

2、3は土師器である。2は壺で、北武藏型壺である。扁平で平底になるタイプのものである。

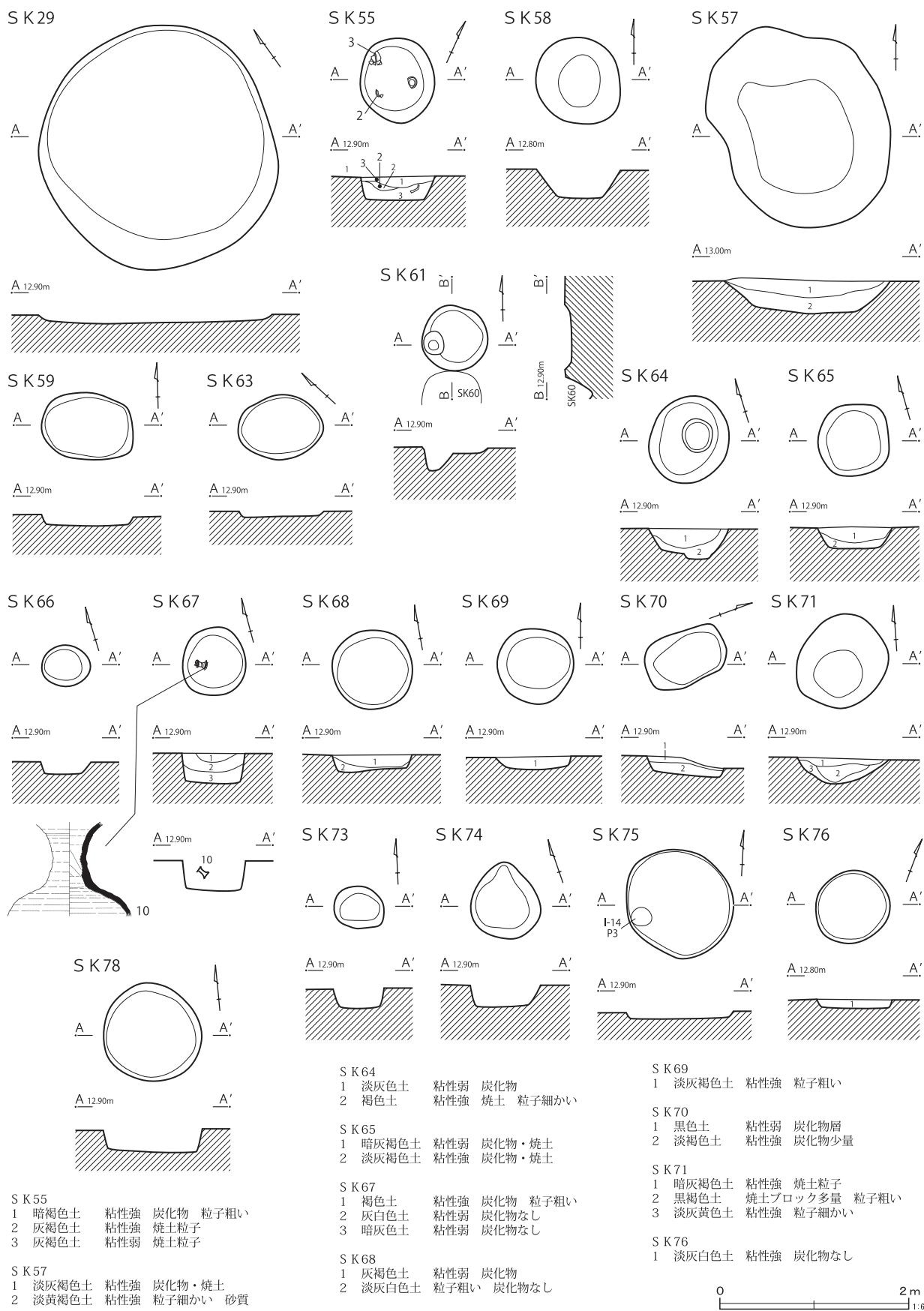
3は甕で、頸部が「く」の字状になる。

遺物の時期は、須恵器壺の時期や土師器壺の形狀から9世紀後半と考えられる。

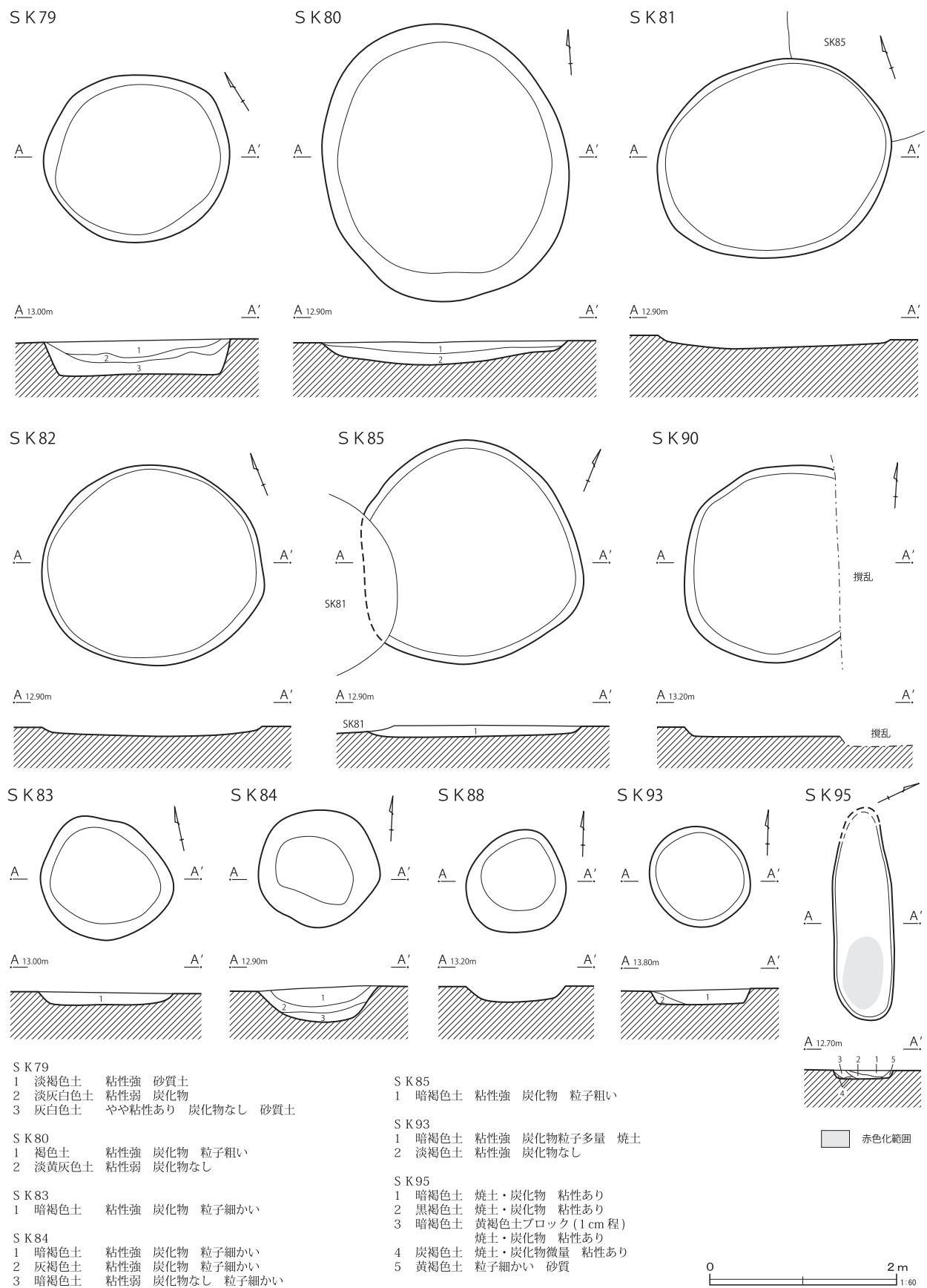
第67号土壙（第385図）

東側調査区北西部、H-14グリッドに位置する。平面形態は円形で、規模は長径0.73m、短径0.67m、深さ0.30mを測る。

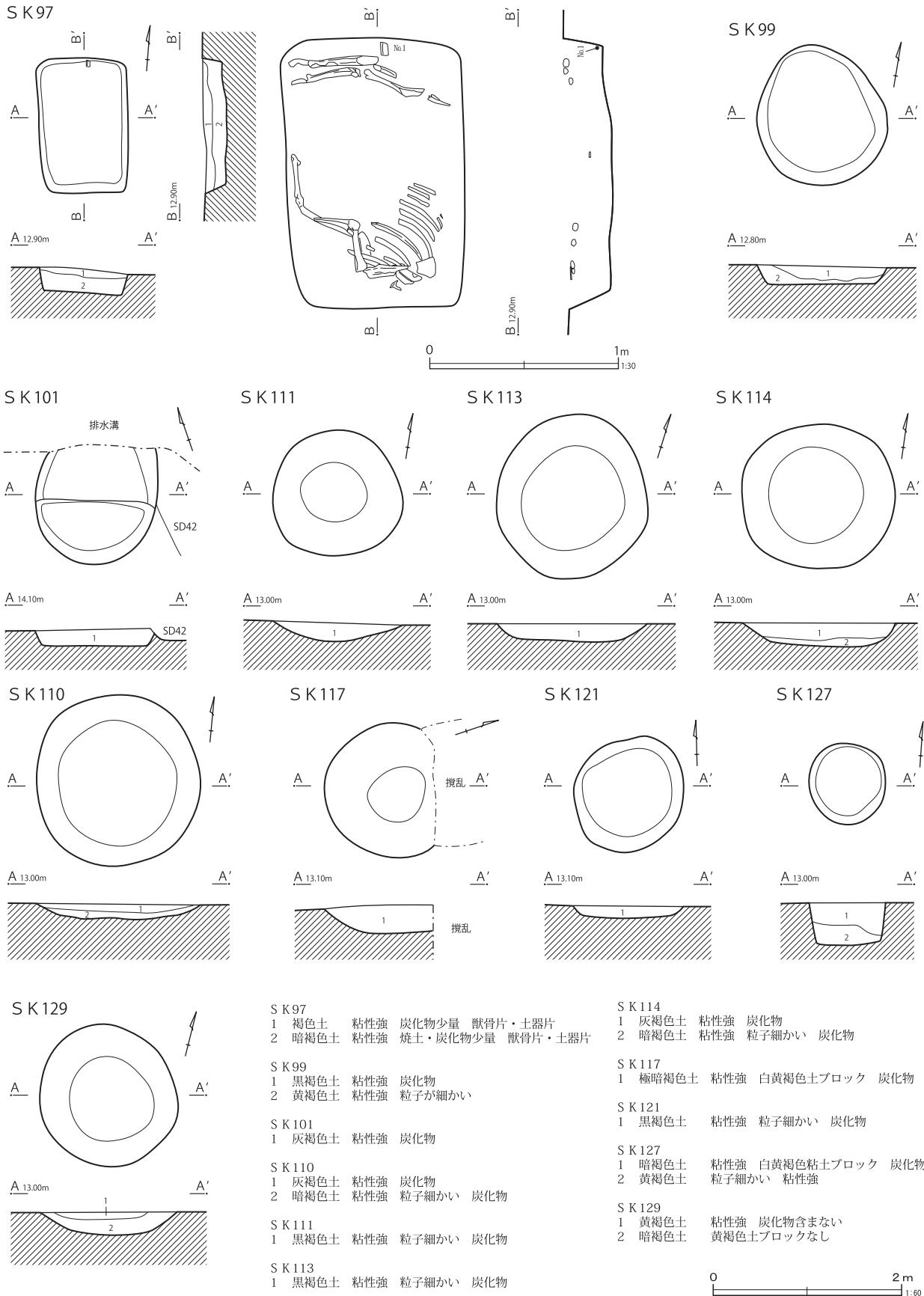
遺物は須恵器の長頸瓶が出土した（第398図10）。10は長頸瓶である。覆土中位から出土し、第1号住居跡から出土した胴部破片と接合関係にある。猿投の製品と推察され、胎土は白く、非常に硬質



第385図 土壌 (1)



第386図 土壌 (2)



第387図 土壌 (3)

に焼き締められる。外面全体および頸部上半に自然釉が付着し、綺麗に発色する。頸部中央は窄み、内面には絞りによる皺が斜め方向に走る。頸部形状から岩崎25号窯式段階か。

遺物の時期は、8世紀第II四半期段階のものであり、第1号住居跡の遺物と接合関係にあることからも、8世紀中葉以降のものと考えられる。

第71号土壙（第385図）

東側調査区東部、J-17グリッドに位置する。平面形態は不整形で、規模は長径1.02m、短径0.85m、深さ0.29mを測り、長軸方向はN-56°-Eを指す。

遺物は須恵器皿・高台付壺、小型台付甕が出土した（第398図13～15）。13、14は須恵器である。13は皿で、南比企の製品である。14は高台付壺である。末野の製品で、立ち上がりが弱く、高台付皿になる可能性もある。どちらも9世紀代のものと考えられる。

15は小型台付甕の脚部である。

遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、須恵器の形状から9世紀代の遺構と考えられる。

第97号土壙（第387図）

東側調査区西端部、H-13グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径1.42m、短径0.94m、深さ0.25mを測り、長軸方向はN-5°-Wを指す。土壙内から獸骨が検出された。

獸骨は頭部が無く、南を向き肢體左側を上面として横たえた状態で検出された。状況からおそらく埋葬されたものと推察される。自然科学分析の結果、馬の骨であることが判明した。

頭部が無いことから屠殺または犠牲とされた馬と考えられ、何等かの祭祀的行為が行われた可能性が考えられる。

遺物は獸骨の他に須恵器壺、土師器壺が出土した（第398図27、28）。27は須恵器の壺である。南比企の製品で、底部に外周回転ヘラケズリ調整が施される。8世紀後半のものか。28は土師器の壺

である。北武藏型壺で、扁平になるものと推察される。

遺物が少ないため詳細な時期はわからないが、土器の年代や検出面から、古代の遺構と考えられる。

第110号土壙（第387図）

中央調査区北西部、F-8グリッドに位置する。平面形態は円形で、規模は直径1.82m、深さ0.16mを測る。覆土には炭化物が含まれていた。

遺物は須恵器高台付壺・土師器甕が出土した（第398図29、30）。29は須恵器の高台付壺である。末野の製品で、9世紀後半のものか。

30は土師器の甕で、「コ」の字状口縁甕になると推察される。

遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、河川跡上に位置することから、河川跡を越えて遺構の分布域が広がる9世紀中葉以降と推察される。

第153号土壙（第388図）

中央調査区東端部、G・H-12グリッドに位置する。平面形態は橢円形で、規模は長径1.69m、短径1.36m、深さ0.32mを測り、長軸方位はN-10°-Wを指す。覆土は単層で、炭化物が含まれていた。

遺物は土師器皿が出土した（第399図37、38）。37は口縁部が大きく外反する。38は口縁部が内湾し、口唇部外面ヨコナデの下までヘラケズリが施される。どちらも8世紀前半のものか。

遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、土師器皿の形状から8世紀代のものと推察される。

第171号土壙（第388図）

中央調査区南東部、I-12グリッドに位置する。平面形態は円形で、規模は長径1.89m、短径1.67m、深さ0.25mを測る。覆土には炭化物が含まれ、全層から遺物が検出された。

遺物は須恵器壺・甕、土師器皿・ロクロ土師器壺が出土した（第399図41～49）。41～44は須恵器である。41は壺で、口径が大きいため8世紀代の

ものか。42～44は甕である。42、43は頸部外面に刷毛目状の工具痕跡が縦方向に施される。

45、46は土師器の皿である。45は薄手で、口縁部が大きく外反する。46は口縁部が直線的に開く。

47、48は内黒のロクロ土師器坏である。47は底径が大きく、腰が張る形状となり、底部調整は摩耗により不明である。一般的では無い器形だが、胎土に角閃石が含まれるため、利根川流域で作られたものと推察される。48は底部に回転ヘラケズリが施される。

遺物の時期は、須恵器坏の器形や、土師器皿が出土している点から8世紀代のものと考えられる。内黒の坏類も同時代のものか。

第178号土壙（第388図）

中央調査区中央南寄り、H-10グリッドに位置する。平面形態は不整形で、規模は長径1.92m、短径1.63m、深さ0.33mを測り、長軸方位はN-45°-Wを指す。覆土上層には炭化物が多く含まれていた。

遺物は須恵器坏、土師器坏が出土した（第399図52～54）。52、53は須恵器の坏である。52は南比企の製品で、残存率が高い。鳩山編年I期と考えられる。53は底部に单一方向の手持ちヘラケズリ調整が施される。堀ノ内の製品か。

54は土師器の坏である。北武藏型坏で、口縁部が外反し、口縁部外面ヨコナデの下に無調整帯を持つ。8世紀前半のものか。

遺物の時期は、須恵器坏や土師器坏の形状から、8世紀前半と推察される。

第187号土壙（第389図）

中央調査区中央部、H-10グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径1.13m、短径0.84m、深さ0.29mを測り、長軸方位はN-88°-Wを指す。

遺物は土師器坏・甕・壺が出土した（第399図55～62）。55～57は坏である。55は北武藏型坏で、扁平で丸底になる。56は外面下半にヘラケズリが

施される。57は内面に暗文が施文される。

58～61は甕である。58、59は「コ」の字状口縁甕の前段階的な様相を持つ甕か。60は常陸型甕である。

62は壺で、古墳時代の遺物である。

遺物の時期は、8～9世紀までの幅があるが、古代の遺構と考えられる。

第232号土壙（第390図）

III区東寄り、N-25グリッドに位置する。平面形態は不整形で、規模は長径1.17m、短径0.90m、深さ0.14mを測り、長軸方位はN-90°を指す。覆土は单層で、焼土粒子や炭化物が含まれていた。

遺物は須恵器蓋・甕、砥石が出土した（第400図75～77）。75、76は須恵器である。75は蓋である。76は大甕の胴部大型破片で、土壙底面から検出された。

77は石製品の砥石で、流紋岩製である。

遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、遺物や検出面から古代のものと推察される。

第236号土壙（第390図）

V区中央部、P-29・30グリッドに位置し、北側は排水溝によって壞される。平面形態は円形と推察され、規模は直径2.32m、深さ0.35mを測る。覆土中からは、薄い炭化物層の堆積が2面確認され、遺物は炭化物層上から検出された。

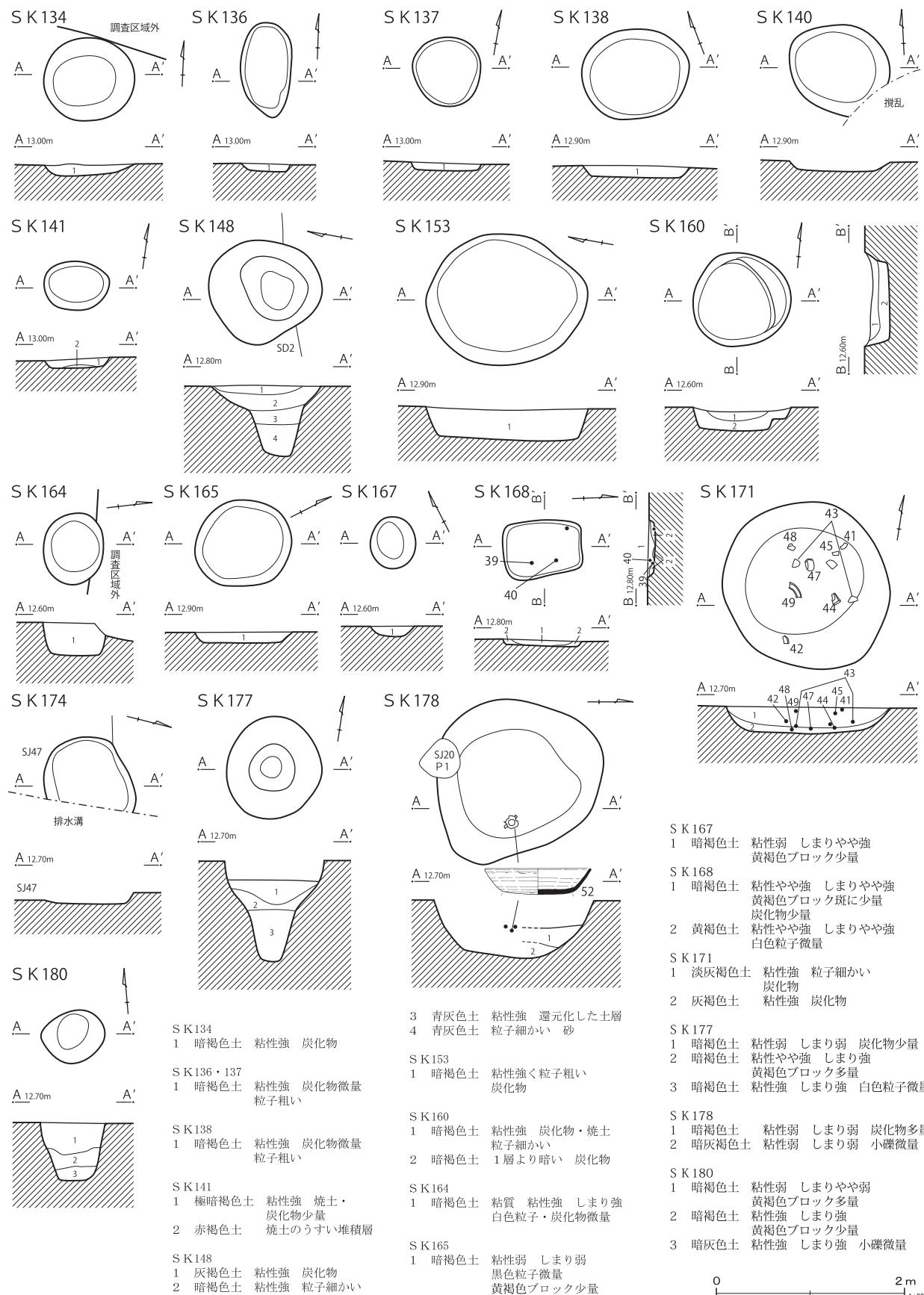
遺物は須恵器坏、土師器坏・皿・甕等が出土した（第400図83～88）。83、84は須恵器の坏である。84は生産地不明だが、底部が回転糸切り離し後無調整であることから、9世紀代のものと考えられる。

85～88は土師器である。85、86は坏である。85は半球形で肉厚になる。87は皿で、口縁部が大きく外反する。7世紀代のものか。88は小型甕である。

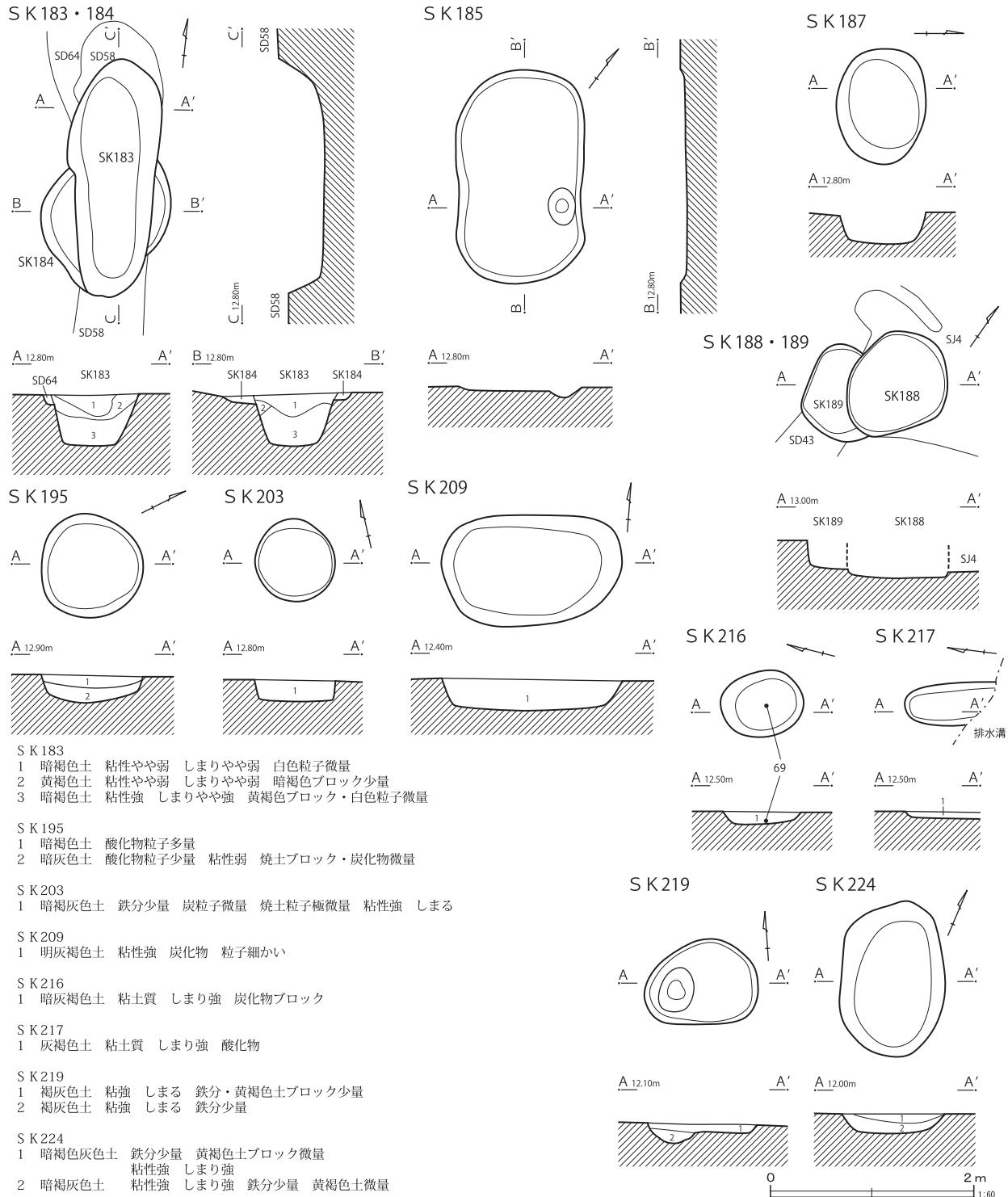
遺物の時期は7～9世紀まで時間幅があるが、検出面等から古代の遺構と考えられる。

第237号土壙（第390図）

III区北東部、O-29グリッドに位置する。遺構



第388図 土壌 (4)



第389図 土壙（5）

の北東部は排水溝によって壊される。

平面形態は不整形で、規模は、残存部で長径2.25m、短径2.10m、深さ0.28mを測り、長軸方位はN-3°-Wを指す。土壙中央部には、炭化物

を多量に含む層が、2層に分かれて薄く堆積していた。

遺物は須恵器壺、灰釉陶器瓶類、土師器壺が出士した（第400図89～96）。91は灰釉陶器の瓶類で

ある。頸部と胴部の接合部のみ出土した。9世紀代の遺物であるため混入品の可能性が考えられる。

92～96は土師器の壺である。92は北武藏型壺で、口縁部はやや外反する。93は厚手の壺で平底になり、底部はヘラケズリ調整が施される。96は浅身の壺で、口縁部が外反する。

遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、土師器壺の形状や検出面から、8世紀代のものと推察される。

第259号土壙（第391図）

III区西端部、M-21グリッドに位置する。平面形態は橢円形で、規模は長径1.38m、短径1.11m、深さ0.18mを測り、長軸方位はN-44°-Wを指す。覆土上層には焼土ブロックや炭化物が含まれ、遺物は中層から検出された。

遺物は須恵器壺・土師器小型台付甕が出土した（第401図106、107）。106は須恵器の壺である。

107は小型台付甕で、口縁部と脚部がそれぞれ出土した。

遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、小型台付甕が出土した点や検出面から、古代の遺構と考えられる。

第263号土壙（第392図）

IV区中央部、N-26・27グリッドに位置する。平面形態は橢円形で、規模は長径2.72m、短径2.42m、深さ0.38mを測り、長軸方位はN-38°-Eを指す。土壙底面には浅いピット状の掘り込みが2基検出された。

遺物は須恵器蓋・壺・高台付壺、土師器壺が出土した（第401図110～121）。110～113は須恵器である。110は環状つまみの蓋で、つまみの剥離部分には糸切り離し痕が認められる。111は壺で、南比企の製品であり、微細な石英粒を大量に含む。鳩山編年VI期と考えられる。113は高台付壺である。体部が打ち欠かれ、円盤状になっている。

114～121は土師器の壺であり、比較的残存率の高いものが多く出土した。全て北武藏型壺で、扁

平で平底になるものである。ケズリは底部のみ施され、体部下端は無調整帶になる。114は内底面中央部に沈線が円形に廻る。

遺物の時期は、須恵器壺の年代や土師器壺の形状から、9世紀前半と推察される。弘仁地震と前後する時期の遺物であり、一括性の高い遺物が出土している点は注目される。

第271号土壙（第392図）

IV区西側、O-26グリッドに位置する。平面形態は橢円形の二段掘りで、規模は長径2.50m、短径2.18m、深さ0.35mを測り、長軸方位はN-0°を指す。

遺物は須恵器壺・甕、土師器壺・甕等が出土した（第402図126～133）。126、127は須恵器である。126は壺で、外面のロクロ目がきつい。127は甕の胴部破片である。

128～133は土師器である。128～131は壺で、128は北武藏型壺である。口縁部は垂直気味に立ち上がり、底部は丸底になる。129は器壁が厚く、扁平になる。130は肉厚で丸みが強く、131は薄手で扁平になり、口縁部は垂直気味に立ち上がる。

132、133は甕である。132は頸部が「く」の字状になり、133は口縁部に最大径を持ち、胴部がやや膨らむものか。8世紀前半から中葉の形状と考えられる。

遺物の時期は、土師器壺や甕の形状から、8世紀代のものと考えられる。

第272号土壙（第393図）

IV区西側、O-26グリッドに位置する。平面形態は橢円形で、規模は長径2.55m、短径1.90m、深さ0.16mを測り、長軸方位はN-90°を指す。断面中央部には、液状化現象に伴う噴砂の痕跡が認められた。

遺物は須恵器蓋・壺、土師器壺が出土した（第402図134～139）。134～136は須恵器である。134は蓋で、瓶類または壺類の蓋と考えられる。135、136は壺で、135は南比企の製品である。136は新

治の製品で、底部にはヘラ切り痕が認められる。

137～139は土師器の坏である。137は浅身の扁平な形状で、口縁部は外反気味に立ち上がる。138、139は大型の製品になり、138は浅身の扁平で、139は丸底でやや深身になる。

遺物の時期は、須恵器坏や土師器の形状や、噴砂によって壊されていることから、8世紀代のものと考えられる。

第279号土壙（第393図）

Ⅲ区中央部、M-23グリッドに位置する。平面形態は歪な方形で、規模は長径1.68m、短径1.38m、深さ0.30mを測り、長軸方位はN-38°-Wを指す。覆土には焼土ブロックや炭化物が含まれていた。

遺物は須恵器坏・高台付坏・塊・甌、土師器坏が出土した（第402図143～147）。143～146は須恵器である。143は坏で、三和の製品である。144は高台付坏で、高台部は剥離している。145は口縁部に面を持つため塊と推察される。

146は甌の底部である。多孔式甌で、胎土に長石粒を含むため、三和の製品か。

147は土師器の坏である。浅身の扁平で皿状になる。

遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、三和の坏が出土していることから、9世紀以降のものと考えられる。

第284号土壙（第393図）

Ⅲ区東寄り、M-24グリッドに位置し、北側は排水溝によって壊される。平面形態は円形と推察され、規模は、残存部で直径0.72m、深さ0.32mを測る。噴砂に伴う液状化現象の痕跡を壊して掘り込まれている。

遺物は覆土中層から下層にかけて検出され、須恵器蓋・坏、土師器坏、ロクロ土師器坏が出土した（第402図149～153）。149～151は須恵器である。149は蓋で、南北企の製品である。150、151は坏である。150は三甌、151は末野の製品と考えられる。

152は土師器の坏で、扁平で平底になるタイプである。ケズリは底部のみ施され、外面下半には無調整帶が廻る。153はロクロ土師器の坏である。

遺物の時期は、須恵器坏や土師器坏の形状や、噴砂を壊していることから、9世紀中葉と考えられる。

第331号土壙（第395図）

Ⅲ区東側、N-25グリッドに位置する。平面形態は橢円形で、規模は長径0.89m、短径0.64m、深さ0.24mを測り、長軸方位はN-19°-Wを指す。

遺物は覆土下層から検出され、須恵器坏、土師器甌、磨石が出土した（第403図166～168）。166は須恵器の坏である。生産地は不明だが、硬質に焼き締まる。

167は土師器の甌である。「コ」の字状口縁甌で、定型化した段階のものである。大型の破片がまとまって出土した。

168は石製品の磨石で、角閃石安山岩製である。

遺物の時期は、須恵器坏や土師器甌の形状から、9世紀中葉～後半と考えられる。

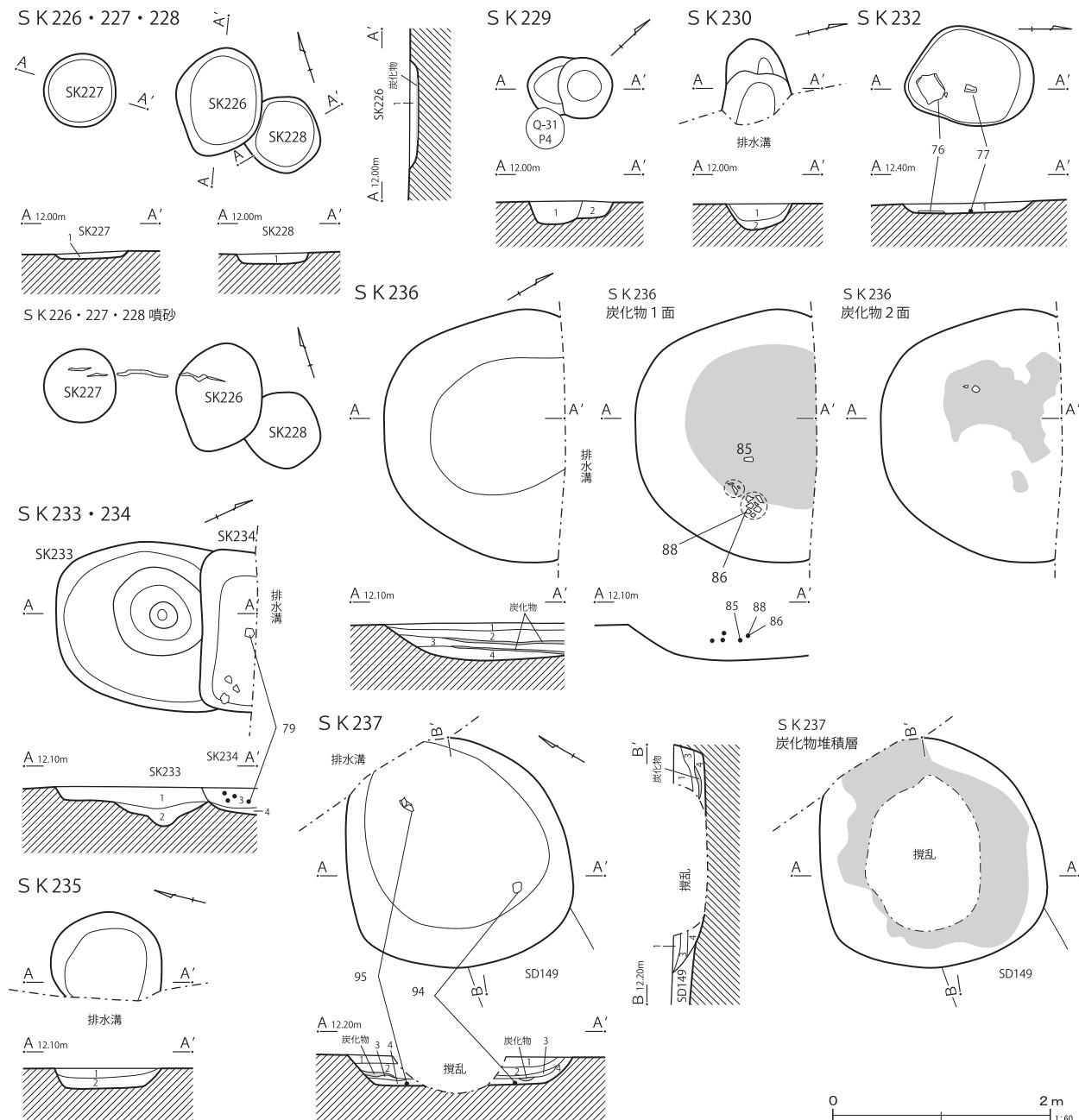
第348号土壙（第395図）

Ⅲ区中央部、M-23・24グリッドに位置する。平面形態は不整形で、規模は長径3.75m、短径2.77m、深さ0.28mを測り、長軸方位はN-60°-Eを指す。覆土中層から下層にかけては炭化物が多量に含まれていた。

遺物は覆土下層から検出され、須恵器蓋、土師器坏・甌、刀子が出土した（第403図170～179）。170、171は須恵器の蓋である。171は末野の製品と推察され、カエリが付く。

172～178は土師器である。172～175は坏で、172は暗文坏であり、口縁部が外反する。胎土に角閃石が含まれるため、利根川流域の製品と考えられる。173～175は北武藏型坏で、173は丸底、174、175は平底に近い形状であり、ヘラケズリは底部のみ施される。

176～178は甌である。176は頸部が「く」の字



S K 226・227
1 暗褐色土 粘性強 しまりややあり 鉄分少量

3 暗灰褐色土 粘性あり しまり弱 黄褐色土ブロック・鉄分微量
4 暗灰褐色土 粘性あり しまり弱 黄褐色土ブロック中量 鉄分少量

S K 228
1 暗褐色土 粘性強 しまりややあり 鉄分少量 黄褐色土微量

S K 235
1 暗褐色土 粘性あり しまる 鉄分少量
2 暗褐色土 黄褐色土ブロック少量

S K 229
1 暗褐色土 粘性強 しまりややあり 鉄分少量 黄褐色土ブロック少量
2 暗褐色土 粘性強 しまりややあり 鉄分少量 黄褐色土ブロック少量

S K 236
1 暗灰褐色土 粘性強 しまる 鉄分少量
2 暗灰褐色土 1層に炭少量 黄褐色土ブロック極微量
3 暗褐色土 粘性強 しまり弱 鉄分少量
4 暗褐色土 粘性強 しまりややあり

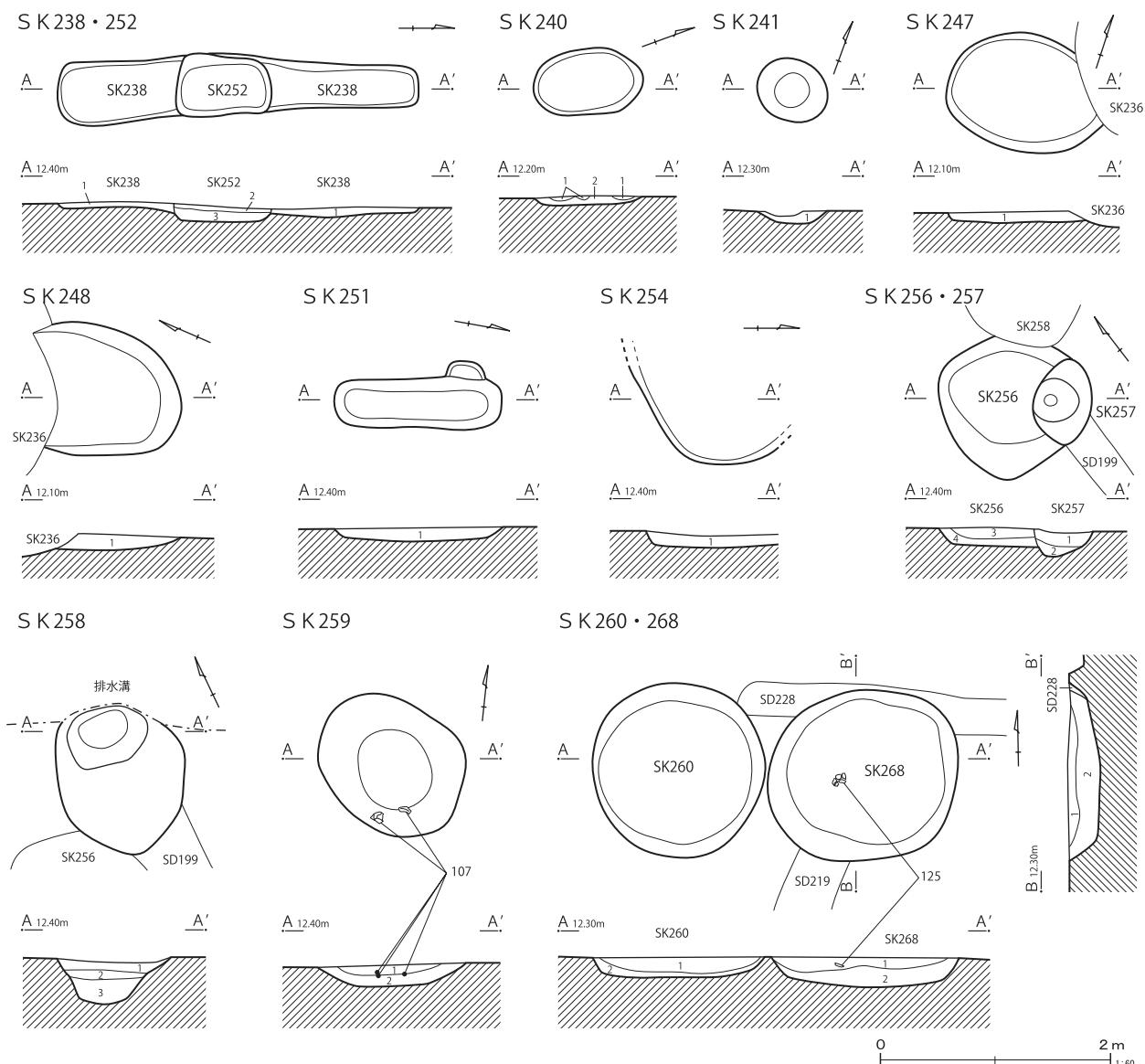
S K 230
1 暗灰褐色土 粘性強 しまりやや強 鉄分少量 黄褐色土ブロック中量
2 暗灰褐色土 粘性強 しまりやや強 鉄分少量 黄褐色土ブロック中量

S K 237
1 暗灰褐色土 粘性あり しまる 炭・黄褐色土ブロック・鉄分微量
2 暗灰褐色土 粘性あり しまる 炭極微量 地山ブロック少量(5×5cm 大)
3 暗褐色土 粘性あり しまり弱 炭・焼土少量 鉄分微量
4 暗褐色土 粘性あり しまる 炭微量 鉄分

S K 232
1 黒褐色土 褐色粘土ブロック少量(1~2cm) 焼土粒子微量 炭化物少量

S K 233・234
1 暗灰褐色土 粘性あり しまる 黄褐色土ブロック微量 鉄分少量
2 暗灰褐色土 粘性あり しまり弱 黄褐色土ブロック極微量 鉄分・炭少量

第390図 土壌 (6)



S K 238・252
 1 黒褐色土 酸化物少量 焼土粒子・炭化物微量 しまりあり 粘性弱
 2 黒褐色土 酸化物少量 烧土粒子微量 白色土粒子微量 しまりあり 粘性あり
 3 黑褐色土 酸化物多量 炭化物微量 白色土ブロック少量(2~4cm) しまりあり 粘性強

S K 240
 1 黒褐色土 粘土質 しまり弱 炭化物主体 土器片
 2 暗褐色土 粘土質 しまり強 酸化物

S K 241
 1 明褐色土 粘土質 しまり強 酸化物・シルトブロック少量

S K 247
 1 暗褐灰色土 粘性あり しまる 鉄分微量 炭粒子微量

S K 248
 1 暗褐灰色土 粘性あり しまる 鉄分・黄褐色土ブロック少量 炭化物(1cm)微量

S K 251
 1 黑褐色土 酸化物少量 炭化物微量 白色土粒子少量 しまりあり 粘性強

S K 254
 1 黑褐色土 粘土質 しまり強 酸化物を全面に多量 シルトブロック少量

S K 256・257
 1 灰褐色土 粘土質 しまり強 酸化物少量
 2 灰褐色土 粘土質 しまり強 酸化物多量
 3 暗褐色土 粘土質 しまり強 酸化物少量
 4 黑褐色土 粘土質 しまり強 炭化物主体 シルトブロック

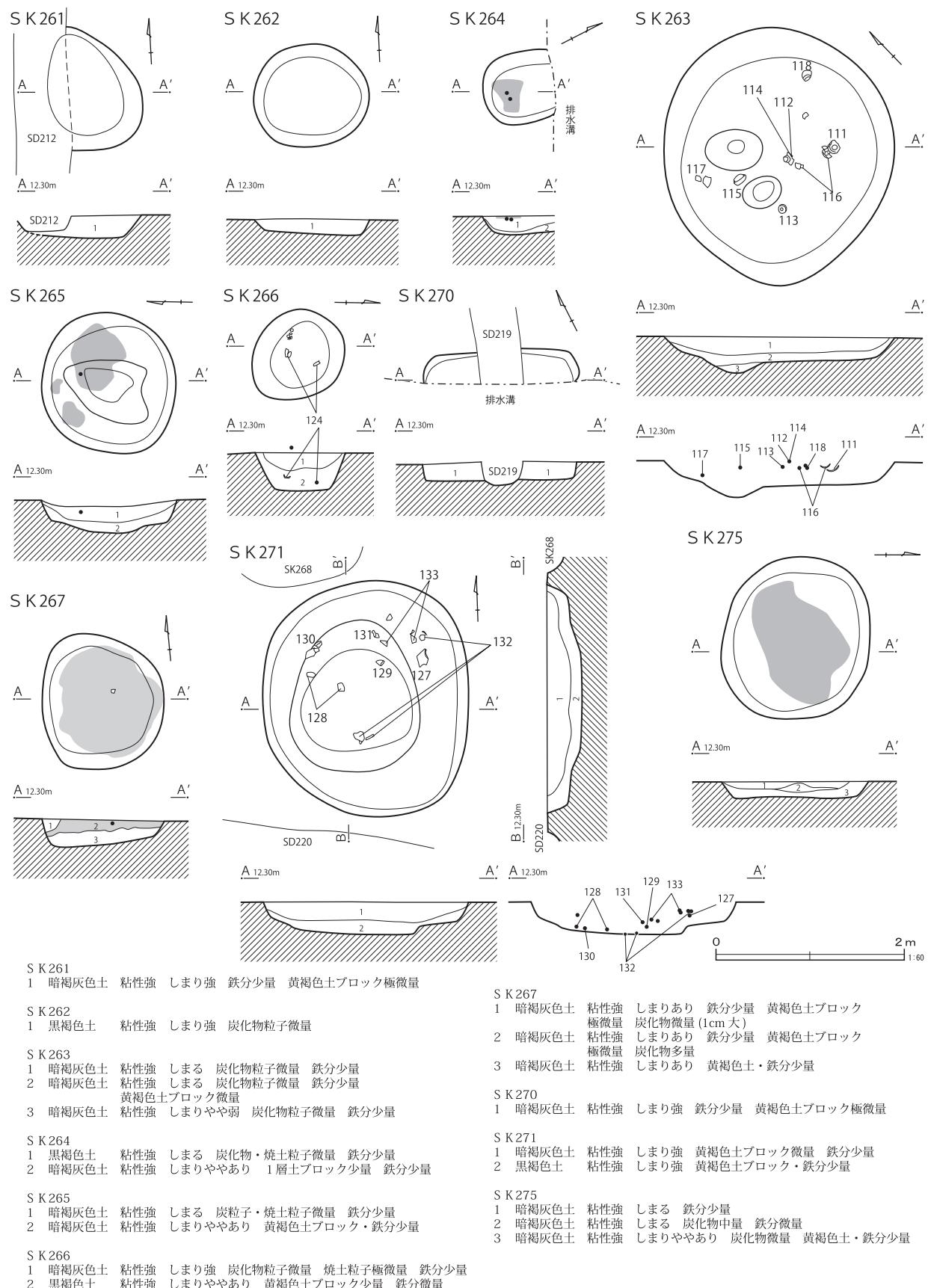
S K 258
 1 暗褐色土 粘土質 しまり強 炭化物多量 酸化物・シルトブロック少量
 2 暗褐色土 粘土質 しまり強 シルトブロック多量 酸化物少量
 3 黑褐色土 粘土質 しまり強 酸化物少量

S K 259
 1 黑褐色土 酸化物多量 烧土粒子少量 烧土ブロック(1cm)・炭化物・白色土ブロック微量(1cm) 粘性弱 しまりあり
 2 暗褐色土 酸化物多量 粘性強 しまり弱

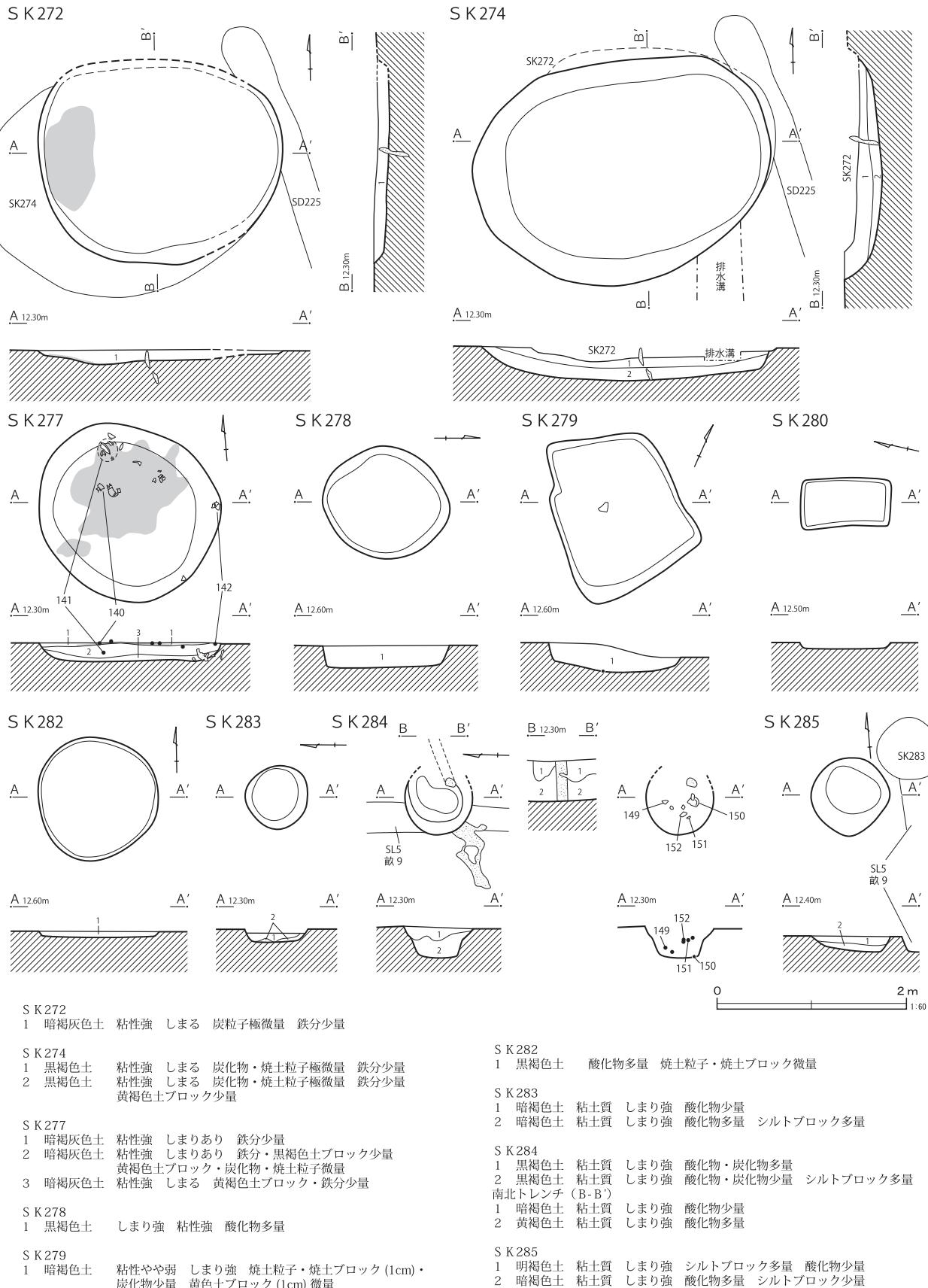
S K 260
 1 暗褐灰色土 粘性強 しまりやや強 黄褐色土ブロック微量 铁分少量
 2 暗褐灰色土 黄褐色土ブロック 1層よりも多量 しまり弱

S K 268
 1 黑褐色土 粘性強 しまり強 炭化物粒子・黄褐色土ブロック微量 铁分少量
 2 暗褐灰色土 粘性強 しまりやや強 炭化物粒子・黄褐色土ブロック微量 铁分少量

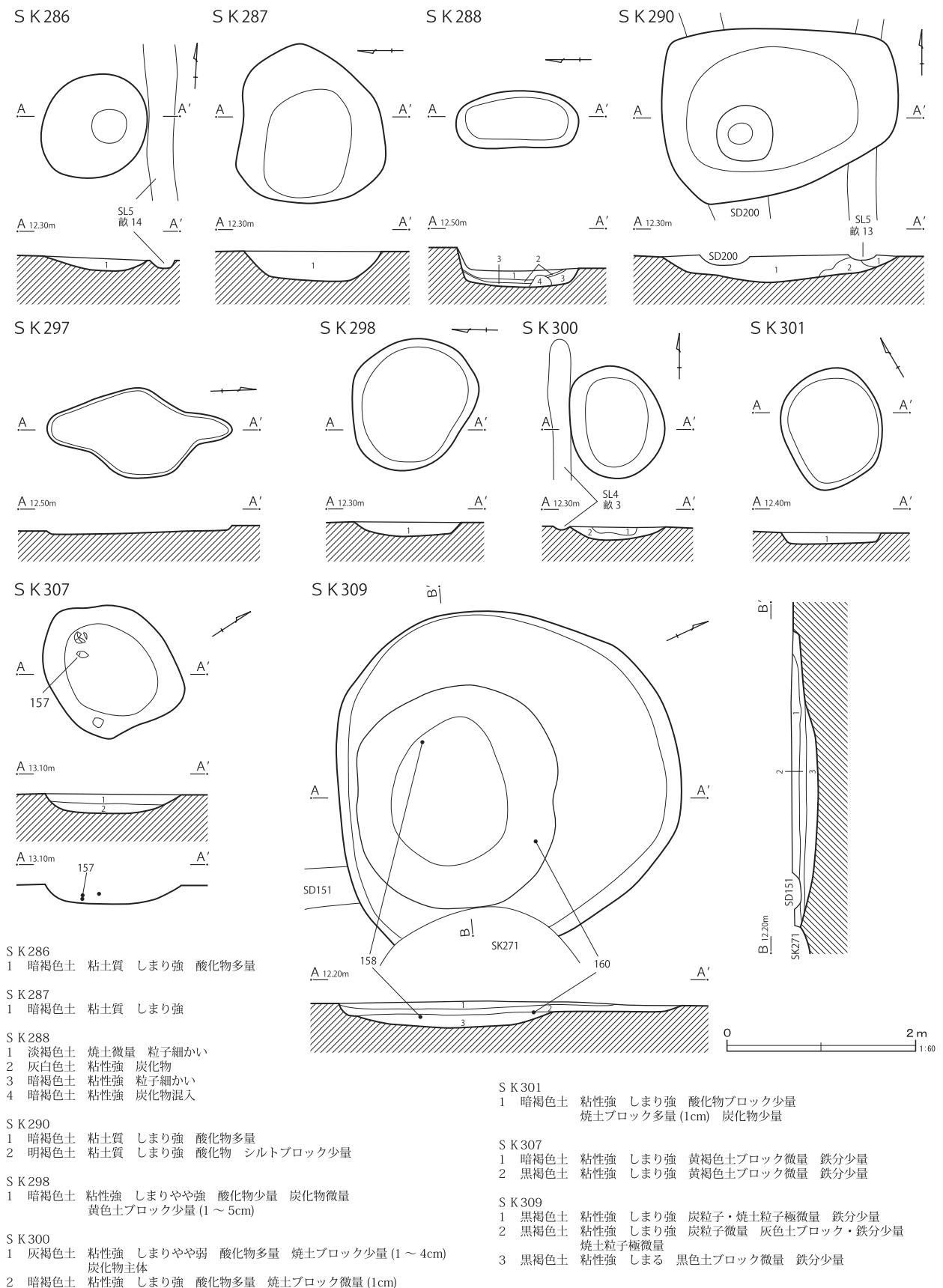
第391図 土壌 (7)



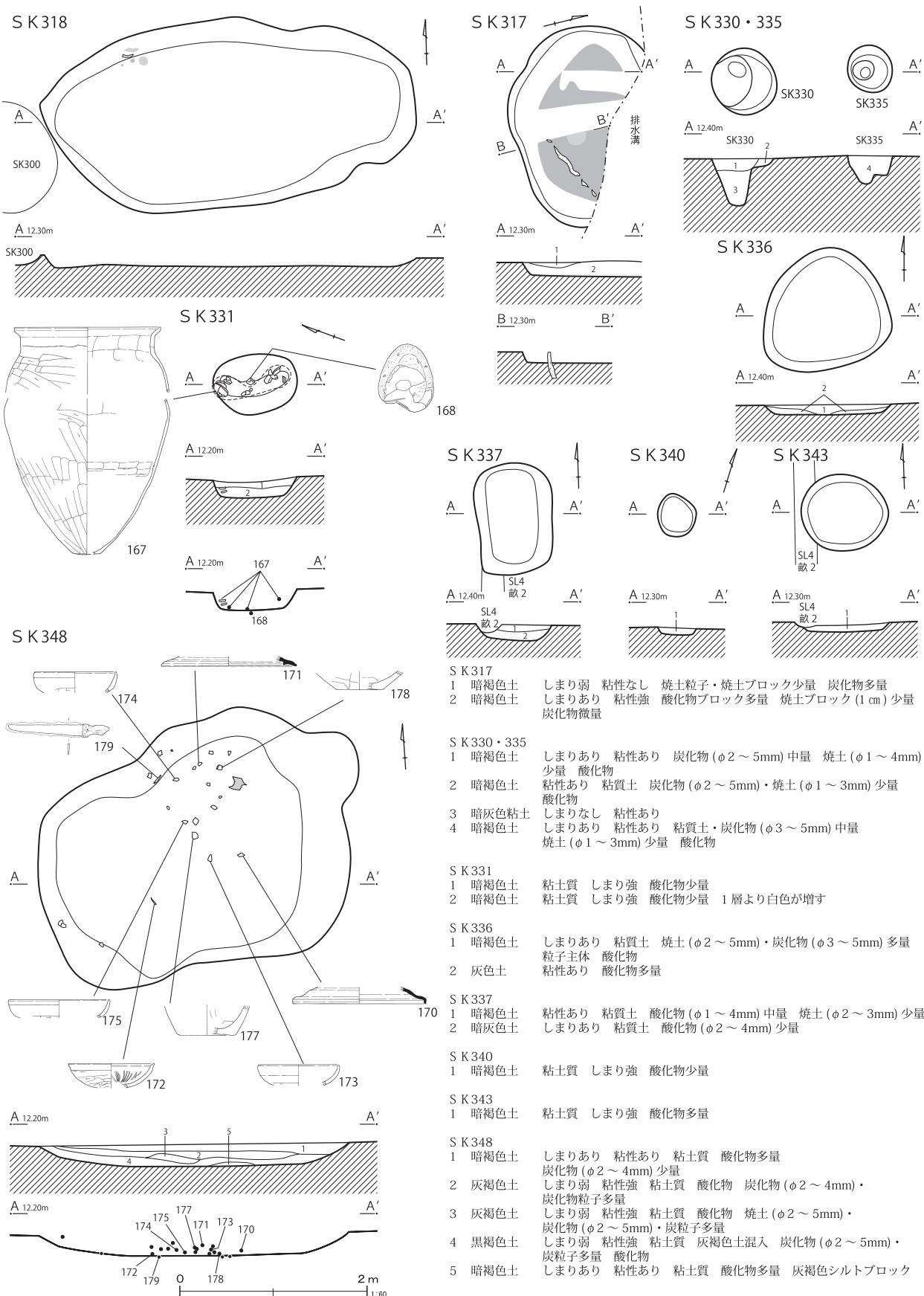
第392図 土壌 (8)



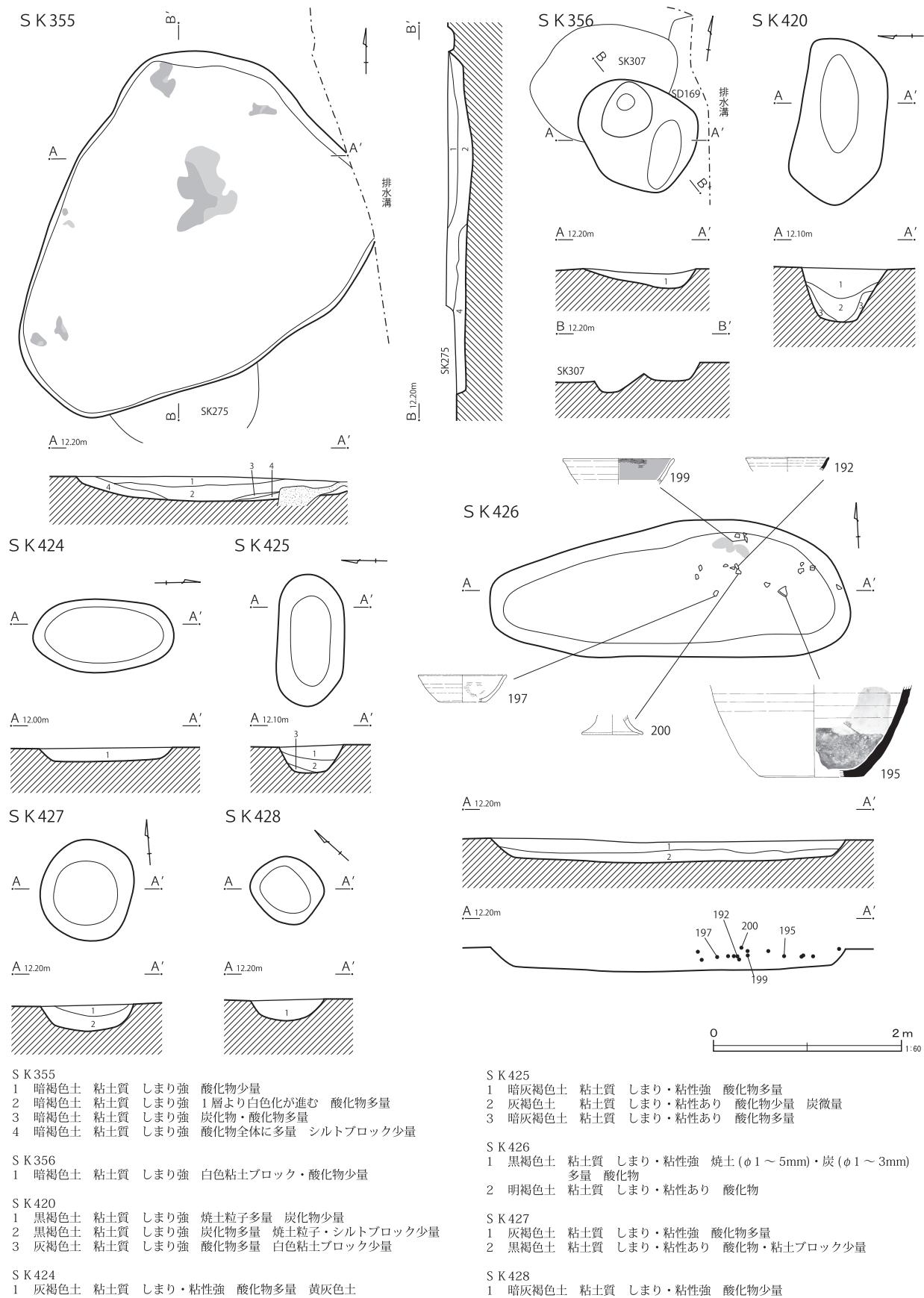
第393図 土壌 (9)



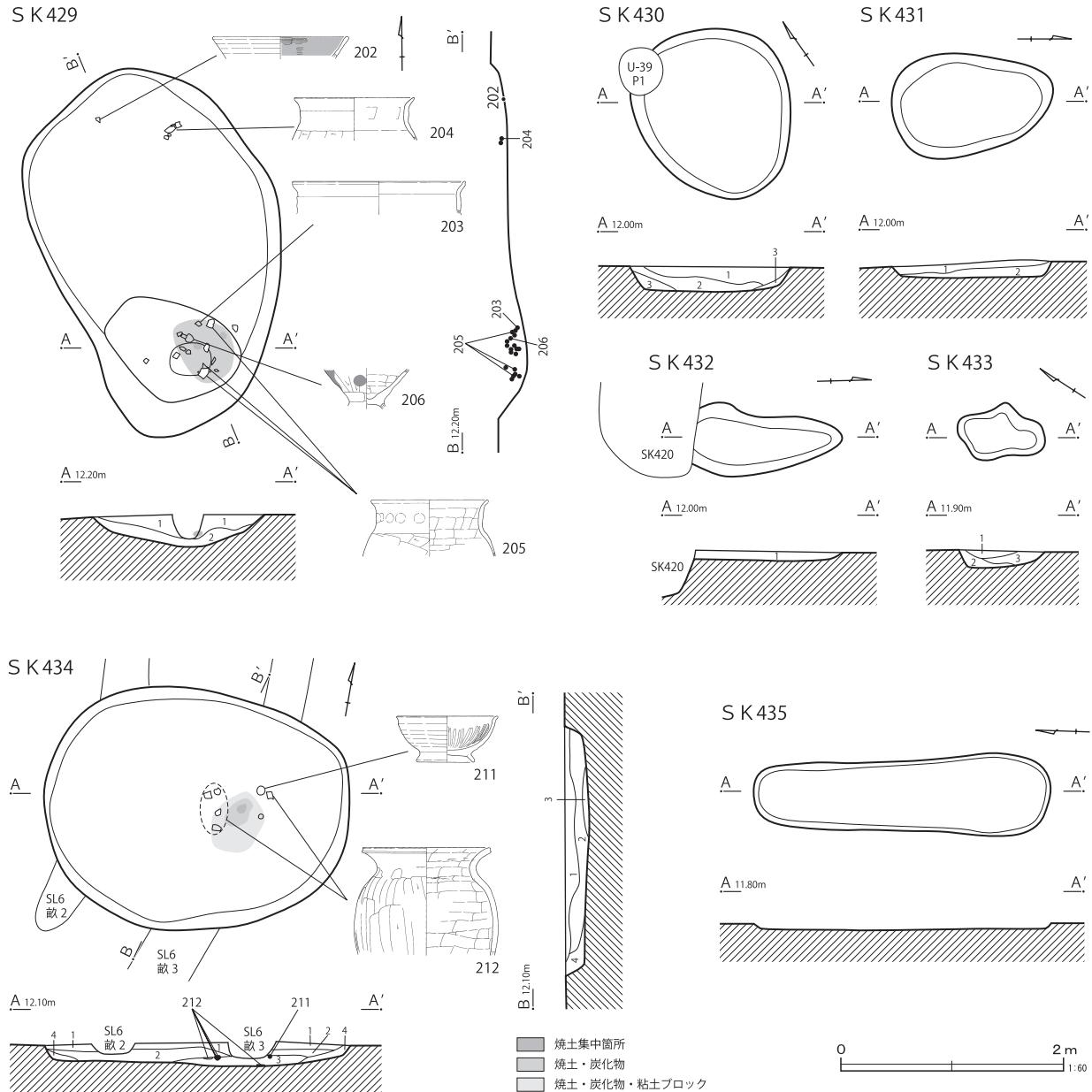
第394図 土壌 (10)



第395図 土壌 (11)



第396図 土壌 (12)



SK 429
1 黒褐色土 粘土質 しまり強 焼土粒子少量 酸化物少量
2 黒褐色土 粘土質 しまり強 焼土粒子多量 酸化物多量
焼土ブロック・炭化物

SK 430
1 灰褐色土 粘土質 しまり強 酸化物多量
2 灰褐色土 粘土質 しまり強
3 黑褐色土 粘土質 しまり強 酸化物多量

SK 431
1 暗灰褐色土 しまり・粘性あり 炭化物・焼土多量 酸化物
2 黑褐色土 粘土質 しまり・粘性あり 酸化物多量

SK 432
1 灰褐色土 粘土質 しまり・粘性あり 酸化物多量 黑褐色土混入

SK 433
1 黑褐色土 粘土質 しまり強 炭化物・焼土粒子少量
2 黄褐色土 粘土質 しまり強 烧土粒子少量
3 黑褐色土 粘土質 しまり強 炭化物主体 烧土ブロック多量

SK 434
1 黑褐色土 粘土質 しまり強 酸化物多量 灰色粘土ブロック少量
2 黑褐色土 粘土質 しまり強 1層より灰色化進む
シルトブロック・炭化物・焼土ブロック・酸化物少量
3 灰褐色土 烧土・炭化物を集中的にもつ。土壤内にある低い部分に焼土・
炭化物が重層的に確認され焼成の痕跡を伺わせる。
4 灰褐色土 粘土質 しまり強 酸化物少量 白色粘土ブロック含む

第397図 土壌 (13)

状になるものか。

179は鉄製品の刀子で、柄の木質が残存する。

遺物は時期幅があり、詳細な時期は不明だが、
検出面から、古代のものと推察される。

第114表 土壙一覧表

遺構名	グリッド	平面形	長軸方向	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	遺構名	グリッド	平面形	長軸方向	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
29	E-6	円形	-	2.60	2.55	0.11	160	I-15	円形	-	1.03	0.97	0.26
55	I-15	円形	-	0.90	0.80	0.24	164	E-7	楕円形	N-71° -W	0.78	0.63	0.36
57	I-13	不整形	N-24° -W	2.24	1.69	0.35	165	H-8	円形	N-16° -E	1.04	0.87	0.10
58	J-15・16	円形	-	0.98	0.87	0.30	167	G-9	円形	-	0.55	0.48	0.08
59	I-15	楕円形	N-90°	0.96	0.70	0.12	168	H-11	長方形	N-4° -W	0.83	0.57	0.05
61	I-15	円形	-	0.69	0.65	0.23	171	I-12	円形	-	1.89	1.67	0.25
62	欠番						172	欠番					
63	I-15	楕円形	N-50° -W	0.90	0.67	0.05	173	欠番					
64	H-14	円形	-	0.94	0.80	0.30	174	H-12	方形	N-55° -E	[0.84]	0.73	0.10
65	H-14	円形	-	0.83	0.77	0.23	175	欠番					
66	I-15	楕円形	N-70° -W	0.52	0.42	0.13	177	H-10	楕円形	N-10° -W	1.07	1.00	0.85
67	H-14	円形	-	0.73	0.67	0.30	178	H-10	不整形	N-45° -W	1.92	1.63	0.33
68	H-14	円形	-	0.85	0.82	0.17	180	H-11	不整楕円形	N-85° -W	0.67	0.54	0.60
69	I-14	円形	-	0.80	0.78	0.15	183	G-11	楕円形	N-3° -W	2.32	0.88	0.50
70	H-14	楕円形	N-0°	0.86	0.54	0.15	184	G-11	円形	-	1.35	1.27	0.08
71	J-17	不整形	N-56° -E	1.02	0.85	0.29	185	I-12	不整楕円形	N-37° -W	2.10	1.25	0.05
72	欠番						187	H-10	楕円形	N-88° -W	1.13	0.84	0.29
73	H-14	不整形	N-90°	0.51	0.42	0.20	188	G-12	不整形	N-0°	1.10	0.85	0.37
74	H-14	不整形	N-17° -W	0.80	0.70	0.22	189	G-12	不整形	N-50° -W	0.97	[0.45]	0.30
75	I-14	円形	-	1.15	1.10	0.07	195	L・M-21	円形	-	1.03	1.01	0.27
76	J-14	円形	-	0.80	0.74	0.08	203	M-23・24	円形	-	0.81	0.79	0.21
78	I-16	円形	-	1.05	1.10	0.25	209	L・M-20	楕円形	N-80° -E	1.76	1.09	0.32
79	F-5	円形	-	1.98	1.78	0.38	216	L-20	楕円形	N-13° -W	0.80	0.66	0.13
80	E-5・6	楕円形	N-0°	2.97	2.60	0.24	217	M-20	隅丸長方形	N-6° -W	[0.87]	0.42	0.07
81	E-5	楕円形	N-90°	2.52	2.08	0.13	219	Q-30	不整形	N-82° -W	1.12	0.83	0.26
82	E-6	円形	-	2.36	2.13	0.10	224	P-30	不整形	N-19° -W	1.53	1.00	0.20
83	D-4	不整形	N-45° -W	1.40	1.25	0.13	226	Q-31	不整形	N-37° -E	1.00	0.81	0.07
84	E・F-5	不整形	N-84° -W	1.28	1.18	0.36	227	Q-31	円形	-	0.68	0.66	0.05
85	E-5	不整形	N-86° -W	2.45	2.21	0.12	228	Q-31	不整形	N-13° -E	0.70	[0.69]	0.10
88	F-7	不整形	N-20° -E	1.13	0.98	0.12	229	Q-31	不整形	N-36° -E	0.76	0.55	0.21
90	F-7	円形	-	2.26	[1.93]	0.10	230	Q-31	不整形	N-80° -W	[0.75]	0.62	0.25
93	I-16	円形	-	1.08	0.99	0.14	231	欠番					
95	I-16・17	隅丸長方形	N-64° -W	2.14	0.62	0.08	232	N-25	不整形	N-90°	1.17	0.90	0.14
97	H-13	長方形	N-5° -W	1.42	0.94	0.25	233	P-30	楕円形	N-65° -W	1.53	[1.34]	0.35
99	H-13	不整形	N-30° -W	1.50	1.25	0.19	234	P-30	長方形	N-62° -W	1.46	[0.52]	0.25
101	G-12	楕円形	N-22° -E	[1.27]	[1.22]	0.18	235	P・Q-29	円形	-	1.02	[0.81]	0.19
110	F-8	円形	-	1.82	1.65	0.16	236	P-29・30	円形	-	2.32	[1.65]	0.35
111	F-8	円形	-	1.36	1.27	0.21	237	O-29	不整形	N-3° -W	[2.25]	2.10	0.28
113	F-8・9	円形	-	1.76	1.50	0.19	238	M-22	不整形	N-0°	3.10	0.55	0.09
114	F-8	円形	-	1.65	1.46	0.25	239	欠番					
117	F-7・8	円形	-	1.45	[1.15]	0.30	240	N-25	楕円形	N-15° -E	0.95	0.55	0.08
121	H-9	不整形	N-35° -E	1.26	1.10	0.13	241	N-25	楕円形	N-90°	0.63	0.53	0.10
127	H-9	円形	-	0.85	0.78	0.44	247	P-29	楕円形	N-74° -E	[1.20]	1.03	0.12
129	F-8	円形	-	1.53	1.36	0.25	248	P-30	楕円形	N-5° -E	[1.17]	1.14	0.17
134	F-8・9	楕円形	N-90°	0.97	0.81	0.12	251	M-22	隅丸長方形	N-10° -W	1.45	0.57	0.11
136	G-10	不整形	N-6° -W	0.10	0.50	0.09	252	M-22	不整形	N-0°	0.82	0.53	0.13
137	G-9	円形	-	0.76	0.67	0.07	254	O-24	不整形	N-0°	[1.32]	[0.86]	0.14
138	F・G-10	楕円形	N-80° -W	1.14	0.95	0.12	255	欠番					
140	G・H-10	楕円形	N-64° -W	[1.09]	[0.84]	0.07	256	M-24	不整形	N-40° -W	1.33	[1.15]	0.17
141	G-9	楕円形	N-75° -E	0.69	0.50	0.10	257	M-24	不整形	N-42° -E	0.75	0.50	0.22
148	F・G-10	不整形	N-0°	1.20	[0.98]	0.74	258	M-24・25	不整形	N-11° -E	[1.32]	1.12	0.40
153	G・H-12	不整形	N-10° -W	1.69	1.36	0.32	259	M-21	不整形	N-44° -W	1.38	1.11	0.18

遺構名	グリッド	平面形	長軸方向	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
260	0-26	円形	-	1.54	1.47	0.17
261	N-26	不整形	N-20° -W	[1.35]	[0.80]	0.24
262	N-26	円形	-	1.22	1.08	0.18
263	N-26・27	不整形	N-38° -E	2.72	2.42	0.38
264	N-27	楕円形	N-26° -E	[0.77]	0.77	0.21
265	0-27	円形	-	1.57	1.45	0.35
266	0-26	不整形	N-43° -W	1.05	0.90	0.40
267	0-26	不整形	N-30° -W	1.48	1.36	0.30
268	0-26	不整形	N-59° -E	1.70	1.53	0.29
269	欠番					
270	P-26	隅丸長方形	N-64° -W	1.64	[0.39]	0.19
271	0-26	楕円形	N-0°	2.50	2.18	0.35
272	0-26	不整形	N-90°	2.55	[1.90]	0.16
273	欠番					
274	0-26	楕円形	N-80° -E	3.12	2.32	0.40
275	P-28	楕円形	N-61° -W	1.79	1.58	0.19
277	0-27	不整形	N-38° -W	1.94	1.79	0.20
278	M-21	不整形	N-10° -E	1.34	1.15	0.23
279	M-23	不整形	N-38° -W	1.68	1.38	0.30
280	M-21	長方形	N-13° -W	0.94	0.52	0.09
281	欠番					
282	M-23	円形	-	1.29	1.28	0.08
283	M-24	円形	-	0.66	0.65	0.15
284	M-24	円形	N-40° -E	[0.72]	[0.70]	0.32
285	M-24	不整形	N-86° -W	0.83	0.82	0.16
286	N-25	不整形	N-43° -E	1.21	1.05	0.16
287	M-24	不整形	N-44° -E	1.72	1.59	0.31
288	M-20	隅丸長方形	N-0°	1.26	0.60	0.43
290	0-25	不整形	N-57° -E	2.59	1.93	0.29
291	欠番					
292	欠番					
293	欠番					
294	欠番					
295	欠番					

遺構名	グリッド	平面形	長軸方向	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
296	欠番					
297	M-23	不整形	N-3° -E	1.96	0.95	0.08
298	L-22	不整形	N-53° -W	1.47	1.26	0.16
300	M-23	不整形	N-19° -W	1.18	0.93	0.14
301	M-23	不整形	N-26° -E	1.20	1.05	0.15
307	O-28	不整形	N-80° -W	1.55	1.28	0.20
309	O-26	不整形	N-28° -W	3.92	3.64	0.28
318	M-23	不整形	N-90°	4.00	2.03	0.17
317	N-25	不整形	N-75° -W	2.13	[1.30]	0.18
330	N-23	円形	-	0.72	0.69	0.50
331	N-25	楕円形	N-19° -W	0.89	0.64	0.24
335	N-23	円形	-	0.53	0.48	0.29
336	M-23	不整形	N-52° -E	1.35	[1.20]	0.11
337	M-23	方形	N-0°	1.20	0.82	0.17
340	M-23	不整形	N-60° -W	0.47	0.42	0.07
343	N-23	不整形	N-90°	0.93	0.81	0.06
345	欠番					
348	M-23・24	不整形	N-60° -E	3.75	2.77	0.28
355	P-28	不整形	N-29° -E	4.10	3.12	0.26
356	O・P-28	不整形	N-60° -W	1.28	1.10	0.33
420	U-40	不整形	N-90°	1.75	0.97	0.58
424	T-38	楕円形	N-0°	1.50	0.77	0.14
425	R-34	楕円形	N-90°	1.40	0.70	0.29
426	S-36・37	楕円形	N-90°	3.78	1.46	0.25
427	S-35	不整形	N-0°	1.07	0.98	0.30
428	T-35	不整形	N-43° -W	0.78	0.71	0.25
429	S・T-36	不整形	N-5° -W	3.31	2.14	0.29
430	U-39・40	楕円形	N-13° -W	1.55	1.42	0.24
431	U-40	不整形	N-10° -W	1.45	0.93	0.18
432	U-40	不整形	N-0°	[1.33]	0.65	0.09
433	V-40	不整形	N-17° -W	0.80	0.53	0.14
434	T-36	楕円形	N-90°	2.73	2.18	0.20
435	T・U-39	不整形	N-0°	2.64	0.75	0.07

第420号土壙（第396図）

VI区東側、U-40グリッドに位置する。平面形態は不整形で、規模は長径1.75m、短径0.97m、深さ0.58mを測り、長軸方位はN-90°を指す。覆土上層には焼土粒子、中層には炭化物が多く含まれていた。

遺物は須恵器蓋・壺・高台付壺・大甕・甕・甑、土師器小型台付甕、用途不明の金属製品が出土した（第404図182～190）。182～188は須恵器である。182は蓋で、末野の製品であり、つまみの周囲に回転糸切り離し痕が残る。183、184は壺で、183は南比企、184は三毳の製品である。185は高台付

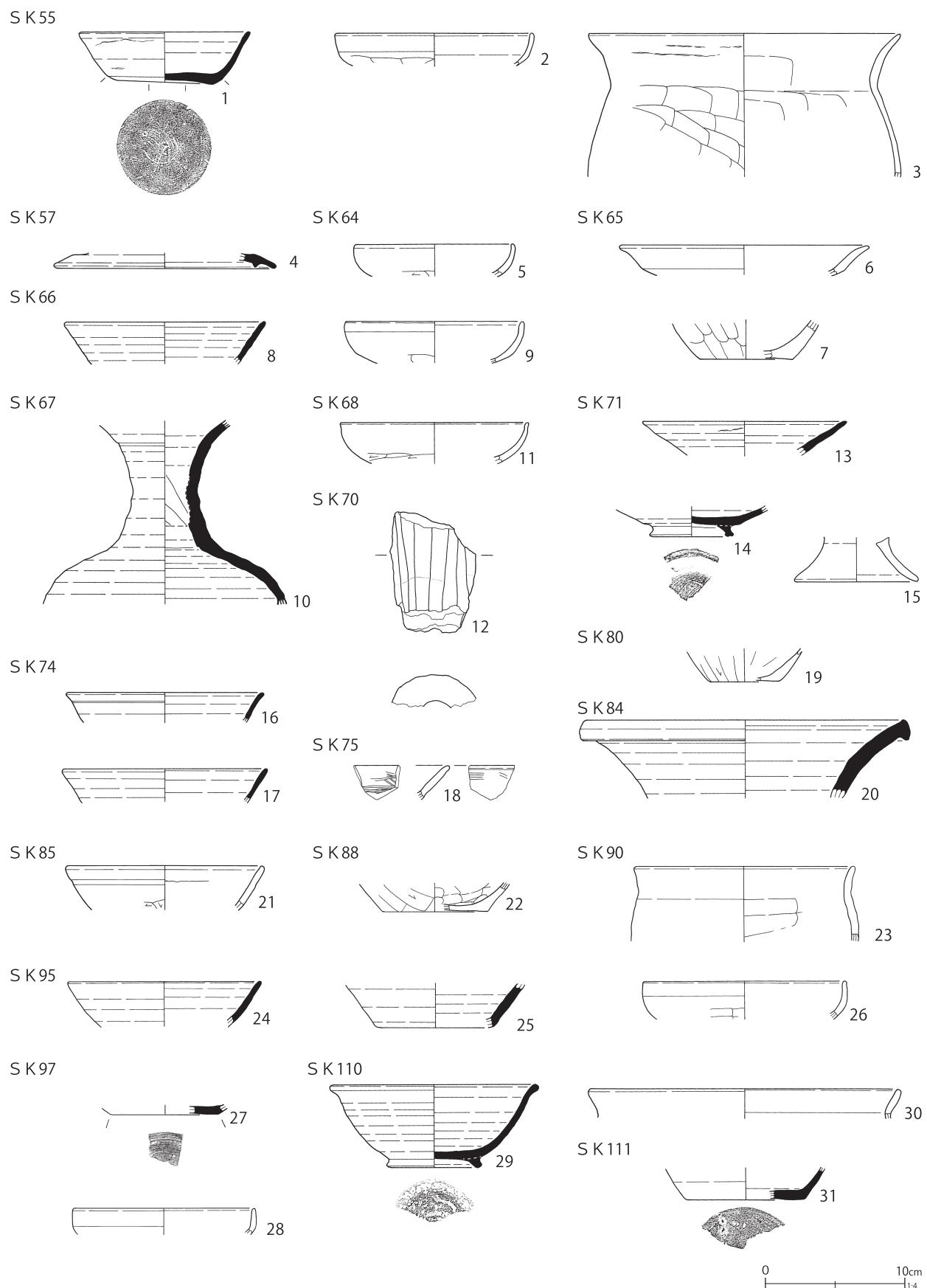
壺である。

186は大甕である。末野の製品であり、口径48cmの大型品である。器壁は薄く、頸部内面中位には指頭痕が残る。187は甕である。三和の製品で、バケツ形の甕か、甑になる可能性もある。188は甑である。三和の製品で、大型の多孔式甑になる。内外面とも胴部下半にヘラケズリが施される。

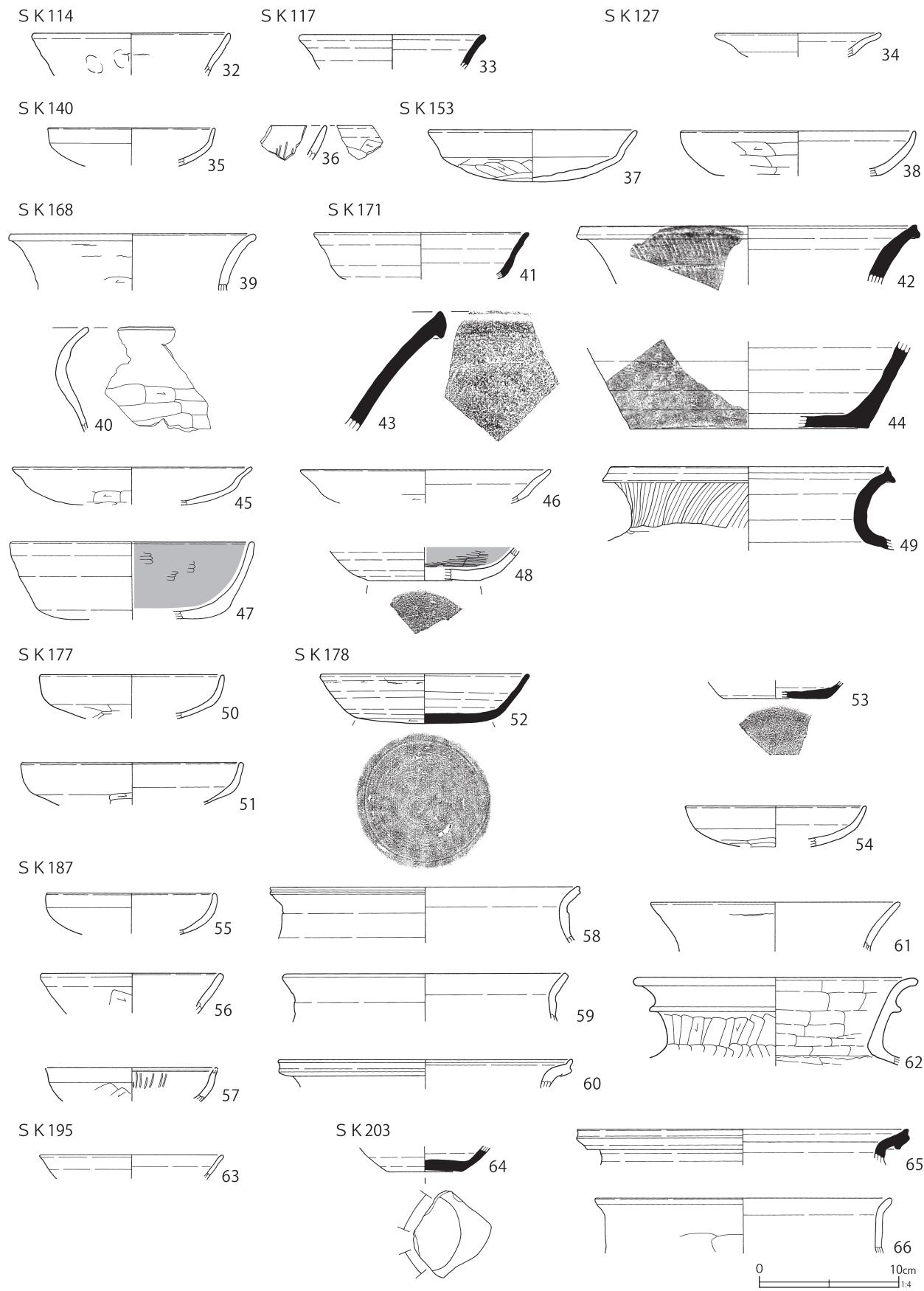
189は土師器の小型台付甕である。口縁部のみ残存する。

190は用途不明の鉄製品である。

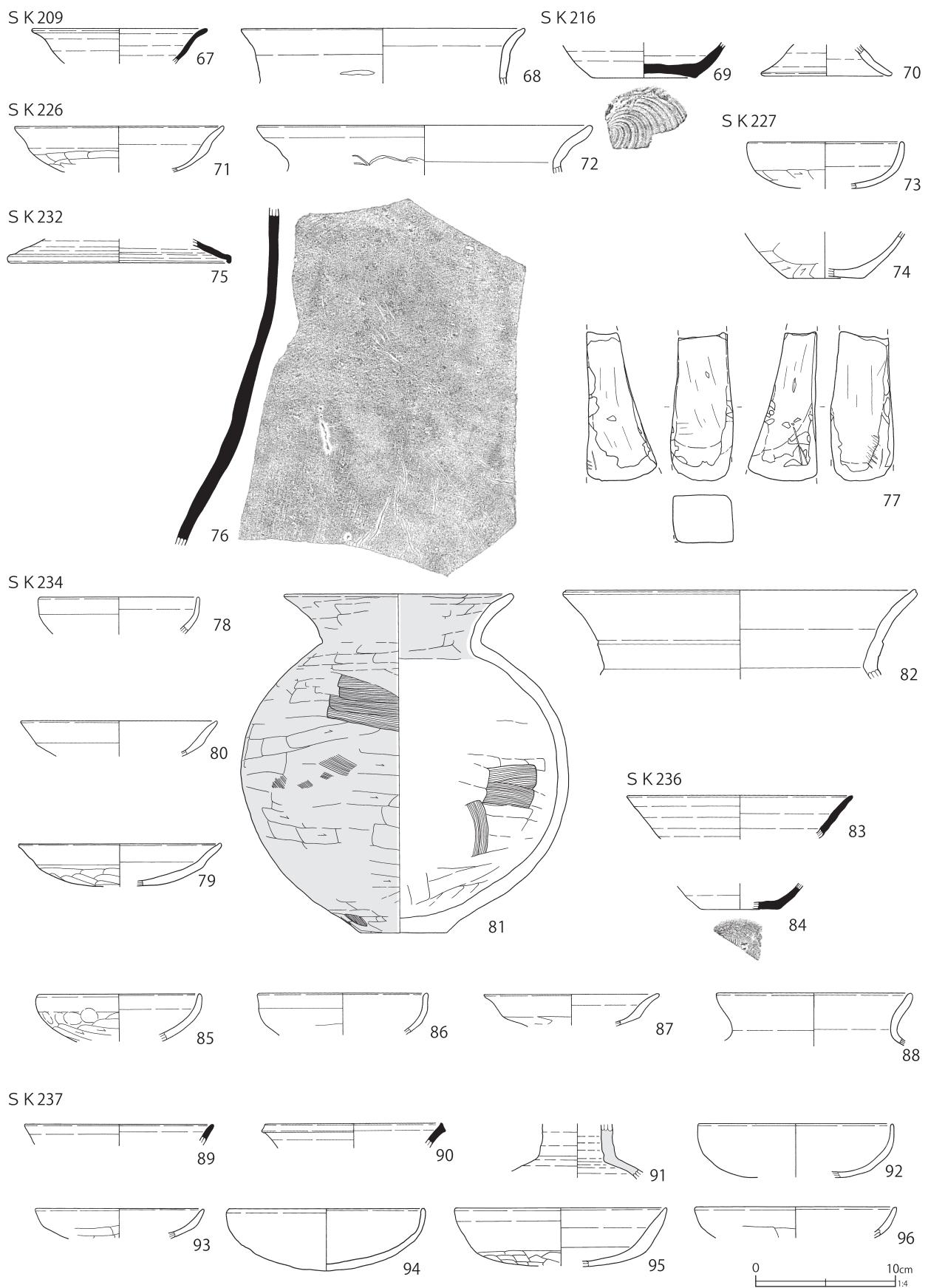
遺物の時期は、須恵器壺の形状や三和の製品が出土していることから、9世紀後半のものと推察



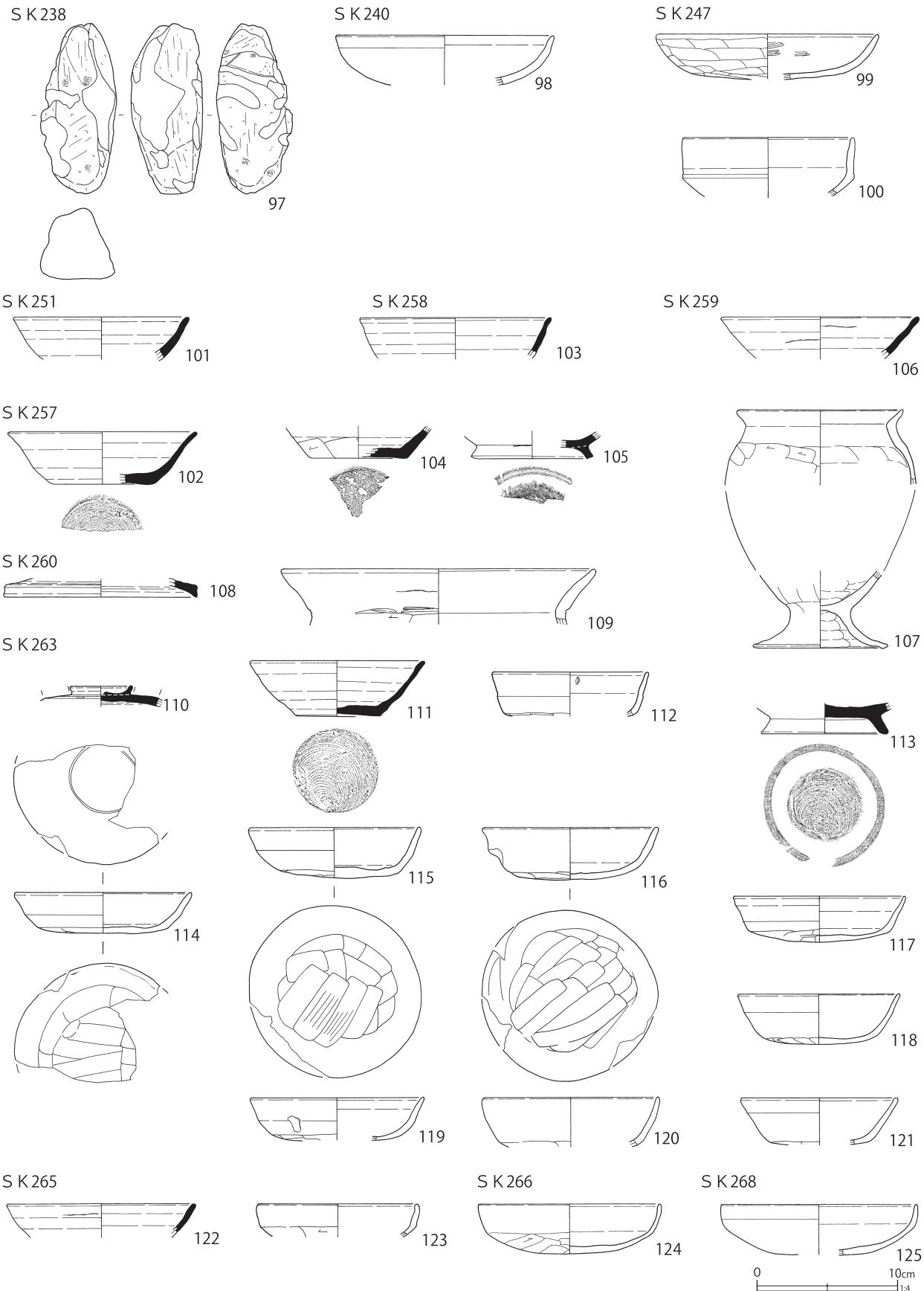
第398図 土壌出土遺物（1）



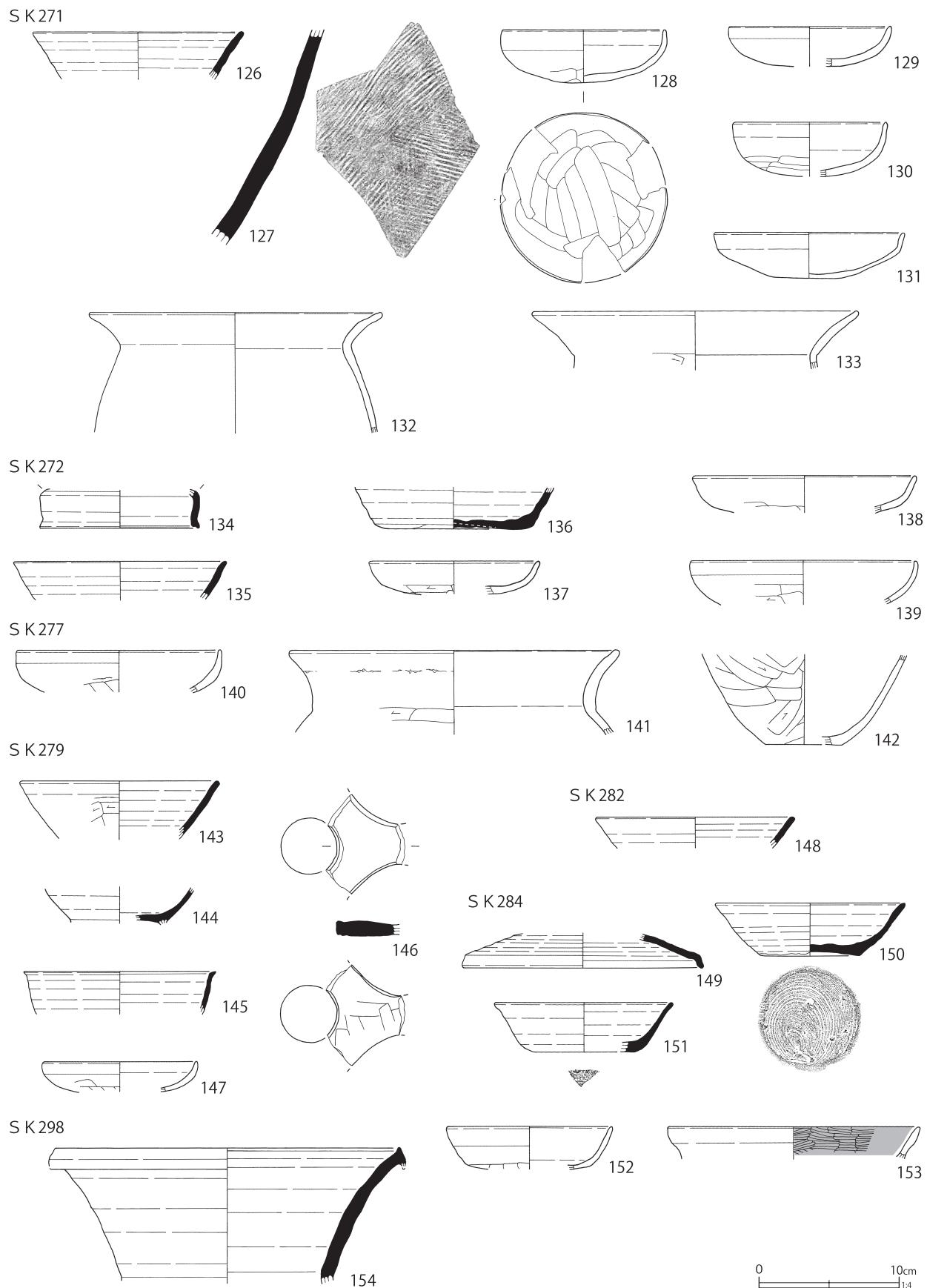
第399図 土壙出土遺物（2）



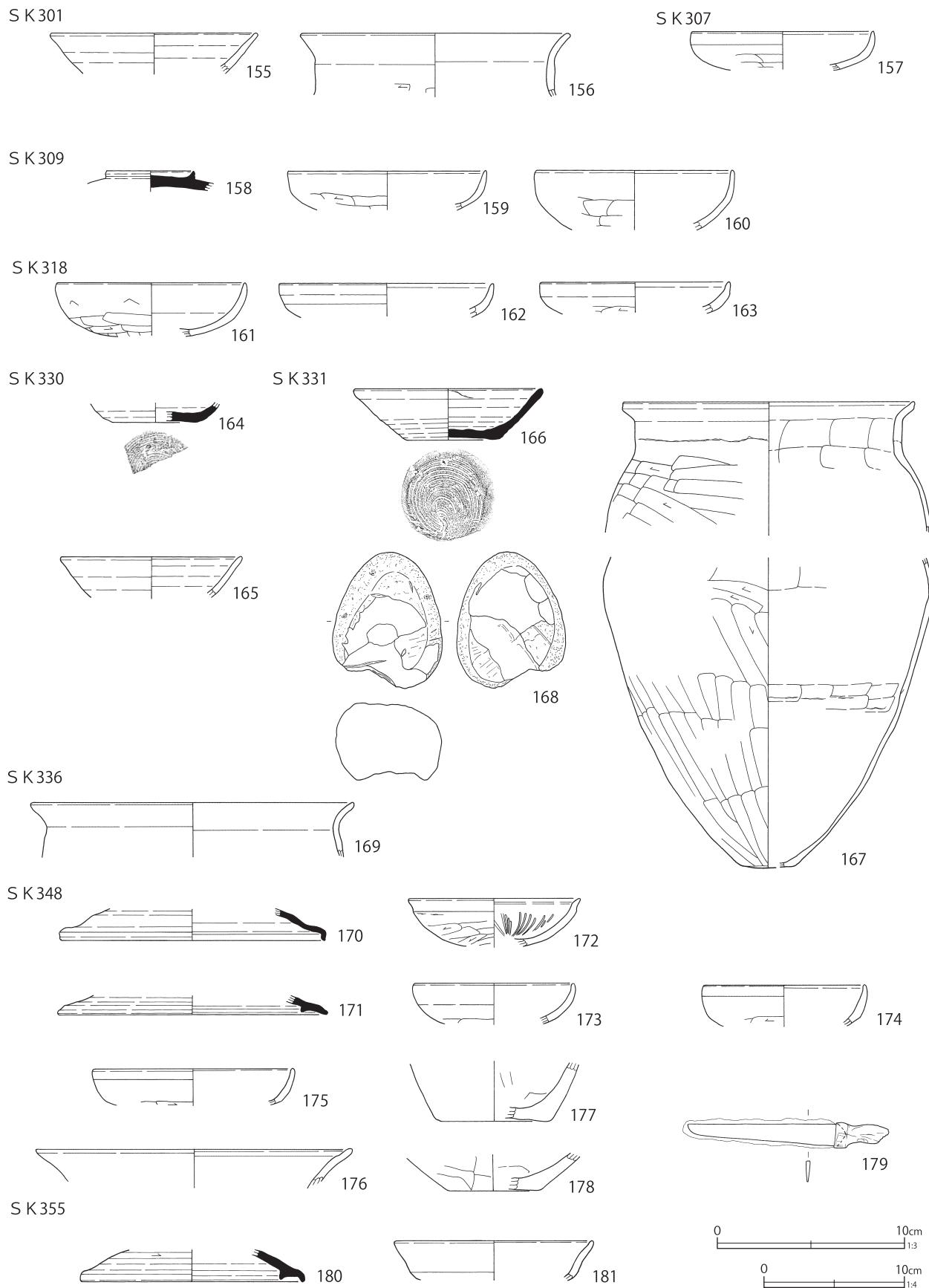
第400図 土壌出土遺物（3）



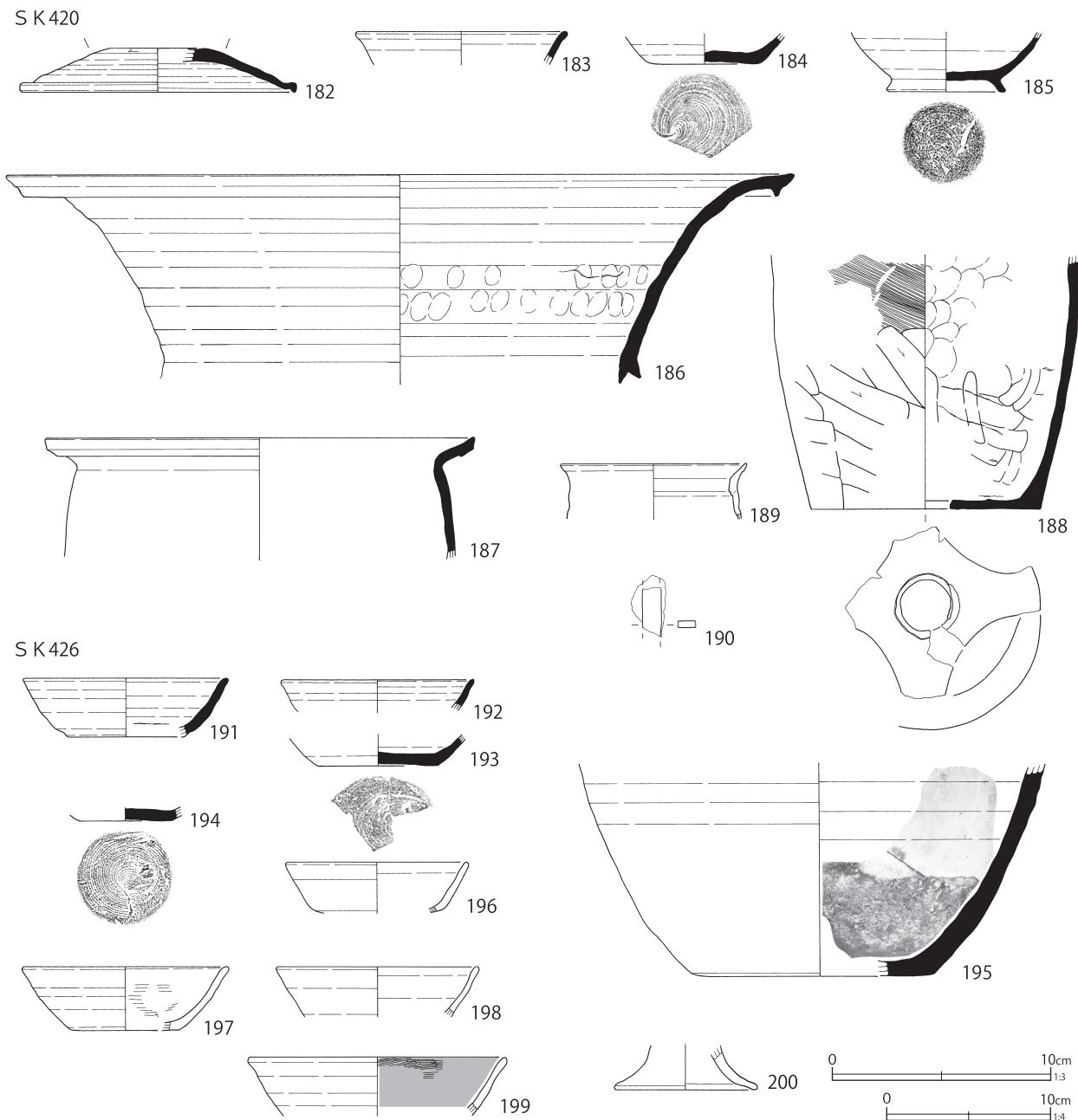
第401図 土壌出土遺物 (4)



第402図 土壌出土遺物（5）



第403図 土壌出土遺物 (6)



第404図 土壌出土遺物（7）

される。

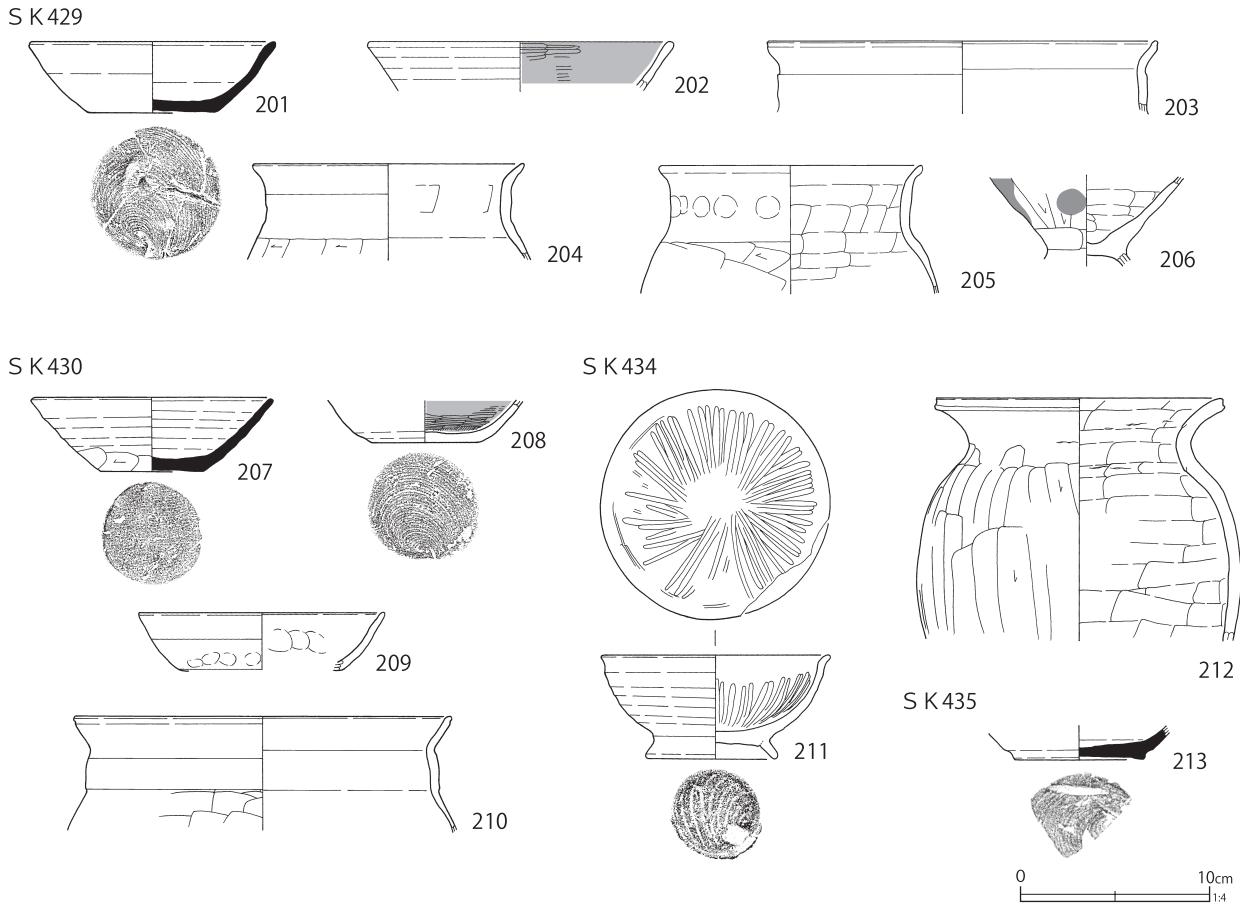
第426号土壌（第396図）

VI区西側、S-36・37グリッドに位置する。平面形態は歪な橢円形で、規模は長径3.78m、短径1.46m、深さ0.25mを測り、長軸方位はN-90°を指す。覆土上層には、焼土粒子や炭化物が多く含まれていた。

遺物は覆土上層から検出され、須恵器壺・甕、

ロクロ土師器壺、土師器壺・小型台付甕等が出土した（第404図191～200）。191～195は須恵器である。191～194は壺で、全て南比企の製品である。193は胎土に砂粒を非常に多く含む。

195は甕である。外面下半が強く被熱し、内面下半に黒色の付着物が認められる。須恵器甕が火災等によって被熱し、内容物が煮沸されてタール状にこびり付いたと考えられる。破断面にも付着



第405図 土壙出土遺物（8）

するが、これは内容部が液状になっている際に割れ、付着したのではないかと考えられる。

197～199はロクロ土師器である。197～199は壺で、197は内面に横方向のミガキが施されていることから、内黒であった可能性がある。199は内黒の壺で、やや大型になる。

196、200は土師器である。196は壺で、底部が平底になり、体部が直線的にひらくものである。

200は小型台付甕の脚部である。

遺物の時期は、須恵器壺や土師器壺の形状から、9世紀中葉と考えられる。

第429号土壙（第397図）

VI区西側、S・T-36グリッドに位置する。平面形態は不整形で、規模は長径3.31m、短径2.14m、深さ0.29mを測り、長軸方位はN-5°-Wを指す。覆土下層には焼土粒子やブロック、炭化物が

多く含まれていた。

遺物は覆土下層から検出され、須恵器壺、ロクロ土師器壺、土師器甕・小型台付甕が出土した（第405図201～206）。201は須恵器の壺で、三窓の製品である。

202は内黒のロクロ土師器壺でやや大型になる。

203～206は土師器である。203は甕で、「コ」の字状口縁甕になる。定型化した段階のものか。

204～206は小型台付甕である。204、205は頸部が「コ」の字状を呈し、206は外面に煤の付着が認められる。

遺物の時期は、須恵器壺や土師器甕の形状から、9世紀後半と考えられる。

第430号土壙（第397図）

VI区東側、U-39・40グリッドに位置する。平面形態は橢円形で、規模は長径1.55m、短径1.42m、

第115表 土壌出土遺物観察表 (第398 ~ 405図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	11.9	3.7	7.4	I J K	75	普通	にぶい赤褐	SK55 No.1 南北企産 半酸化焰焼成	122-1
2	土師器	壺	(13.9)	[2.3]	—	E I K	20	普通	にぶい赤褐	SK55 No.3	
3	土師器	甕	(22.2)	[10.2]	—	C E I K	15	普通	橙	SK55 No.2	
4	須恵器	蓋	(15.6)	[1.0]	—	E H I K	5	良好	灰	SK57	
5	土師器	壺	(11.2)	[2.3]	—	C H I K	5	普通	にぶい橙	SK64	
6	土師器	皿	(17.8)	[2.1]	—	E H I K	5	普通	橙	SK65	
7	土師器	甕	—	[2.8]	(6.6)	A E H I K	15	普通	にぶい褐	SK65 常陸型甕か	
8	須恵器	壺	(14.2)	[3.0]	—	A E H I K	15	普通	褐灰	SK66 新治産	
9	土師器	壺	(12.6)	[2.9]	—	H I K	5	普通	にぶい赤褐	SK66	
10	須恵器	長頸瓶	—	[13.2]	—	I K	30	良好	灰白	SK67 No.1 猿投産 外面全体および内面口縁から頸部にかけて自然釉 頸部しづり痕有り	122-2
11	土師器	壺	(13.4)	[2.9]	—	C H I K	15	普通	にぶい橙	SK68 歪み有り	
12	土製品	羽口	長さ[8.5] 幅[6.0] 厚さ1.9 重さ9.74g					普通	橙	SK70	126-1
13	須恵器	皿	(14.4)	[2.3]	—	E I J K	20	良好	黄灰	SK71 南北企産 外面火摺痕有り	
14	須恵器	高台付壺	—	[2.3]	(5.3)	E H I K	20	普通	橙	SK71 末野産 酸化焰焼成	
15	土師器	小型台付甕	—	[3.1]	(8.6)	C E I K	30	普通	橙	SK71	
16	須恵器	壺	(13.8)	[2.1]	—	A E H I K	5	良好	灰褐	SK74 新治産	
17	須恵器	壺	(14.5)	[2.4]	—	E H I K	5	普通	黄灰	SK74	
18	土師器	壺	—	[2.9]	—	C H I K	5	普通	橙	SK75 内外面ミガキ	
19	土師器	甕	—	[2.3]	(4.8)	C E I K	20	普通	にぶい褐	SK80 外面煤付着	
20	須恵器	甕	(12.8)	[5.5]	—	E I J K	5	良好	褐灰	SK84 南北企産 内面降灰	
21	土師器	壺	(14.0)	[3.1]	—	C E H I K	10	普通	にぶい黄橙	SK85	
22	土師器	甕	—	[2.0]	(7.6)	C E I K	25	普通	橙	SK88	
23	土師器	小型甕か	(15.6)	[5.4]	—	C H I K	10	普通	にぶい橙	SK90	
24	須恵器	壺	(13.8)	[3.2]	—	H I J K	5	良好	黄灰	SK95 南北企産	
25	須恵器	壺	—	[3.1]	(8.0)	A E H I K	20	普通	灰白	SK95 新治産	
26	土師器	壺	(14.4)	[2.7]	—	H I K	5	普通	橙	SK95	
27	須恵器	壺	—	[0.6]	(6.8)	E I J K	10	良好	黄灰	SK97 南北企産	
28	土師器	壺	(12.8)	[1.9]	—	C H I K	5	普通	橙	SK97	
29	須恵器	高台付壺	(14.4)	5.9	(6.0)	E H I K	25	普通	にぶい黄橙	SK110 末野産	
30	土師器	甕	(22.0)	[2.1]	—	C H I K	5	普通	褐灰	SK110	
31	須恵器	壺	—	[2.3]	(8.6)	H I K	15	普通	灰白	SK111 底部回転ヘラケズリ後ナデ調整	
32	土師器	壺	(14.0)	[3.0]	—	C H I K	5	普通	橙	SK114	
33	須恵器	壺	(13.0)	[2.5]	—	E I K	5	普通	黄灰	SK117 末野産	
34	土師器	皿か	(11.7)	[1.7]	—	C I K	5	普通	橙	SK127	
35	土師器	壺	(11.8)	[2.7]	—	C E H I K	5	普通	にぶい黄橙	SK140	
36	土師器	壺	—	[2.4]	—	C H I K	5	普通	橙	SK140 暗文	
37	土師器	皿	(14.8)	3.6	—	C I K	45	普通	にぶい赤褐	SK153 内外面摩耗	122-3
38	土師器	皿	(16.7)	[3.2]	—	C H I K	5	普通	褐	SK153	
39	土師器	甕	(17.4)	[4.0]	—	E H I K	5	普通	にぶい橙	SK6 No.3	
40	土師器	甕	—	[7.5]	—	C H I K	5	普通	橙	SK6 No.2	
41	須恵器	壺	(15.2)	[3.3]	—	E I K	15	普通	灰	SK9 No.1	
42	須恵器	甕	(23.9)	[4.2]	—	I	5	普通	灰	SK9 No.10 外面ハケ目	
43	須恵器	甕	—	[8.6]	—	E I K	5	良好	灰白	SK9 No.5・9 内外面降灰	
44	須恵器	甕	—	[6.2]	(17.0)	I	15	普通	灰	SK9 No.8 内面降灰	
45	土師器	皿	(17.0)	[2.7]	—	E H I K	5	普通	にぶい橙	SK9 No.2	
46	土師器	皿	(17.8)	[2.4]	—	C H I K	5	普通	橙	SK9	
47	クロ土師器	壺	(17.2)	5.5	(13.4)	C E I K L M	20	普通	にぶい橙	SK9 No.4 内黒 外面は摩耗、剥離が激しく調整は不明瞭	122-4

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
48	ロクロ土師器	壺	—	[2.3]	(8.0)	C H I K	25	普通	橙	SK9 No.6 内黒 底部回転ヘラケズリ	
49	須恵器	甕	(19.9)	[5.9]	—	I K	20	普通	灰	SK9 No.7	
50	土師器	壺	(13.0)	[3.1]	—	C H I K	10	普通	橙	SK15	
51	土師器	壺	(15.8)	[3.0]	—	C E H I K	5	普通	橙	SK15	
52	須恵器	壺	14.7	3.5	9.6	E I J	80	普通	黄灰	SK16 2次SE18No.1 南北企産 内底面 粘土紐巻き上げ痕が残る	122-5
53	須恵器	壺	—	[1.2]	(8.0)	E I K	20	普通	黄灰	SK16 堀ノ内産か	
54	土師器	壺	(12.8)	[2.9]	—	C E H I K	15	普通	にぶい橙	SK16	
55	土師器	壺	(12.0)	[2.9]	—	C H I K	15	普通	にぶい橙	SK25	
56	土師器	壺	(12.8)	[2.8]	—	E H I K	10	普通	にぶい橙	SK25	
57	土師器	壺	(12.0)	[2.4]	—	H I K	5	普通	明赤褐	SK25 暗文	
58	土師器	甕	(22.0)	[4.0]	—	C E H I K	10	普通	にぶい赤褐	SK25	
59	土師器	甕	(20.0)	[3.4]	—	C H I K	5	普通	にぶい褐	SK25 外面煤付着	
60	土師器	甕	(21.0)	[2.0]	—	A E H I K	5	普通	にぶい橙	SK25 常陸型甕	
61	土師器	甕	(17.6)	[3.5]	—	C E H I K	5	普通	にぶい橙	SK25	
62	土師器	壺	(17.8)	[6.3]	—	C E I K	20	普通	明赤褐	SK25 古墳時代	
63	ロクロ土師器	壺	(13.0)	[1.7]	—	C H I K	5	良好	灰白	SK4	
64	須恵器	壺	—	[1.8]	(5.4)	H I J K	25	普通	灰白	SK12 南北企産 転用砥具	
65	須恵器	甕	(23.6)	[2.5]	—	D E H I K	5	良好	褐灰	SK12	
66	土師器	甕	(21.0)	[3.9]	—	C E H I K	5	普通	橙	SK12	
67	須恵器	壺	(12.4)	[2.5]	—	H I K	5	良好	灰白	SK18 三甕産か	
68	土師器	甕	(20.0)	[3.9]	—	C E H I K	5	普通	橙	SK18	
69	須恵器	壺	—	[2.5]	(7.0)	E I K	25	普通	灰白	SK25 No.1 三甕産	
70	土師器	小型台付甕	—	[2.2]	(9.0)	C E I K	40	普通	にぶい褐	SK25	
71	土師器	壺	(14.8)	[3.3]	—	C E H I K	20	普通	橙	SK35 内面摩耗	
72	土師器	甕	(23.6)	[3.5]	—	B E H I K	5	普通	橙	SK35	
73	土師器	壺	(10.9)	[3.3]	—	C E I K	20	普通	明赤褐	SK36	
74	土師器	甕	—	[3.3]	(5.4)	E I K	15	普通	にぶい褐	SK36	
75	須恵器	蓋	(15.8)	[1.7]	—	E I K	5	良好	灰	SK41	
76	須恵器	甕	—	[24.2]	—	E I K	5	良好	灰	SK41 No.1	
77	石製品	砥石	長さ[10.6] 幅4.5 厚さ5.0 重さ301.0 g						SK41 No.2 流紋岩(緑色) 砥面4 刃物痕有り	128-2	
78	土師器	壺	(11.4)	[2.6]	—	C E H I K	10	普通	橙	SK43	
79	土師器	皿	(14.3)	[3.0]	—	C E H I K	20	普通	橙	SK43 No.4	
80	土師器	壺	(14.0)	[2.5]	—	C E H I K	5	普通	にぶい黄橙	SK43	
81	土師器	壺	(16.2)	24.2	(6.1)	C E I K	50	普通	灰白	SK43 内外面赤彩 外面黒斑	122-6
82	土師器	壺	(25.0)	[6.3]	—	H I K	15	普通	にぶい橙	SK43	
83	須恵器	壺	(16.0)	[3.1]	—	A E I K	15	不良	灰白	SK45 新治産か 内外面共に摩耗が激しい	
84	須恵器	壺	—	[1.9]	(6.0)	I K	15	普通	灰	SK45	
85	土師器	壺	(11.4)	[3.4]	—	E I K	25	普通	にぶい橙	SK45 No.1	
86	土師器	壺	(12.0)	[3.0]	—	C E H I K	5	普通	にぶい橙	SK45 No.3	
87	土師器	皿	(12.4)	[2.2]	—	C E H I K	5	普通	橙	SK45	
88	土師器	小型甕	(13.8)	[3.8]	—	C E H I K	15	普通	橙	SK45 No.3	
89	須恵器	壺	(13.4)	[1.5]	—	H I K	5	不良	灰白	SK46	
90	須恵器	長頸瓶	(12.7)	[1.7]	—	I K	5	良好	灰	SK46 内面に黒い付着物有り	
91	灰釉陶器	長頸瓶	—	[3.9]	—	I K	20	良好	灰	SK253 猿投産か 瓶は発色していない	
92	土師器	壺	(13.8)	[3.8]	—	C H I K	10	普通	橙	SK46 内外面共に摩耗が激しく調整は不明瞭	
93	土師器	壺	(12.0)	[2.1]	—	H I K	10	普通	橙	SK46	
94	土師器	壺	(13.8)	4.4	—	B H I K	30	普通	にぶい赤褐	SK253 SK46No.2 内外面共に摩耗、剥離が激しく調整は不明瞭	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
95	土師器	壺	(15.0)	[4.1]	—	C E H I K	30	普通	にぶい赤褐	SK253 SK46No.1 口縁部一部磨滅	122-7
96	土師器	壺	(14.2)	[2.2]	—	C H I K	5	普通	橙		
97	石製品	磨石	長さ12.1 幅5.4 厚さ5.1 重さ82.2 g							SK47 軽石 使用面3 酸化鉄付着	128-2
98	土師器	壺	(15.4)	[3.5]	—	C E H I K	25	普通	にぶい橙	SK49 外面の摩耗が激しい	
99	土師器	壺	(15.6)	3.2	—	E I K	35	普通	橙	SK56 No.1 外面黒斑有り 内面摩耗	122-8
100	土師器	壺	(12.0)	[4.2]	—	H I K	10	普通	橙	SK56 No.1 外面黒斑有り 内面摩耗	
101	須恵器	壺	(12.4)	[3.0]	—	E H I J K	5	良好	灰	SK60 南北企産	
102	須恵器	壺	(13.2)	3.7	(6.6)	B E I K	20	普通	紫灰	SK66 未野産か 歪み有り	122-9
103	須恵器	壺	(13.5)	[2.9]	—	E I J K	5	良好	灰白	SK67 南北企産	
104	須恵器	壺	—	[2.2]	(6.8)	E I K	15	普通	灰白	SK67 三和産 外面被熱	
105	須恵器	高台付壺	—	[1.9]	(7.8)	E I K	20	普通	灰	SK67 未野産か 器面発泡	
106	須恵器	壺	(13.8)	[2.9]	—	H I K	5	普通	黄灰	SK68 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	
107	土師器	小型台付甕	11.6	[10.9]	9.0	C E I K	60	普通	にぶい赤褐	SK68 No.1～3 外面煤付着	
108	須恵器	蓋	(13.6)	[1.3]	—	E I J K	5	普通	灰白	SK69 南北企産	
109	土師器	甕	(22.2)	[3.9]	—	B E H I K	5	普通	にぶい橙	SK69 南北企産	
110	須恵器	蓋	—	[1.5]	—	D E I J K	25	良好	灰	SK72 硬質 つまみ剥離部に糸切り痕	
111	須恵器	壺	12.2	4.1	6.0	E H I J K	80	良好	灰白	SK72 No.1 南北企産 内外面火襷痕	
112	土師器	壺	(11.0)	[3.1]	—	B H I K	25	普通	橙	SK72 No.5 SK74と接合 種子圧痕有り	
113	須恵器	高台付壺	—	[2.1]	(8.8)	E I	100	良好	灰	SK72 No.3 体部が打ち欠かれ円板状になっている 外面降灰	122-10
114	土師器	壺	(12.5)	2.9	(9.2)	C E I K	45	普通	橙	SK72 No.5 内底面中央に環状の沈線が廻る	123-1
115	土師器	壺	12.0	3.6	—	E I K	85	普通	橙	SK72 No.8	123-2
116	土師器	壺	12.2	3.7	—	E I K	90	普通	橙	SK72 No.2・4	123-3
117	土師器	壺	(12.1)	3.2	—	B C E I K	30	普通	橙	SK72 No.9	123-4
118	土師器	壺	(11.4)	4.5	—	B E H I K	25	普通	にぶい橙	SK72 No.7	123-5
119	土師器	壺	(12.4)	[3.0]	—	C E H I K	30	普通	橙	SK72 薄い箇所に1cm程の粘土を貼り付けている	123-6
120	土師器	壺	(12.2)	[3.5]	—	B H I K	15	普通	にぶい橙	SK72	
121	土師器	壺	(11.0)	[3.3]	—	B C H I K	20	普通	にぶい橙	SK72 No.6	
122	須恵器	壺	(13.2)	[2.4]	—	E I J K	5	良好	灰白	SK74 南北企産	
123	土師器	壺	(11.2)	[2.3]	—	C E H I K	10	普通	橙	SK74	
124	土師器	壺	(12.7)	3.5	—	C E I K	20	普通	明赤褐	SK75 No.2・3	
125	土師器	壺	(13.8)	[3.6]	—	C E I K	35	普通	にぶい橙	SK77 No.1 内外面共に摩耗が激しく調整は不明瞭	123-7
126	須恵器	壺	(14.8)	[3.4]	—	E H I K	5	良好	灰白	SK80 外面煤付着	
127	須恵器	甕	—	[15.3]	—	I K	5	良好	褐灰	SK80 No.1 内外面降灰	
128	土師器	壺	11.5	3.8	—	C E H I K	75	普通	にぶい橙	SK80 No.12・13	123-8
129	土師器	壺	(11.4)	[2.8]	—	C E H I K	10	普通	にぶい橙	SK80 No.9 外面摩耗、剥離が激しい	
130	土師器	壺	(10.7)	[3.5]	—	C E I K	20	普通	にぶい橙	SK80 No.10 外面被熱	
131	土師器	壺	(13.4)	[3.3]	—	C E H I K	25	普通	橙	SK80 No.8	
132	土師器	甕	(20.8)	[8.6]	—	C E H I K	20	普通	明赤褐	SK80 No.2・14・15 内外面共に摩耗が激しく調整は不明瞭	
133	土師器	甕	(23.2)	[4.1]	—	C E H I K	15	普通	にぶい橙	SK80 No.4・7	
134	須恵器	蓋	(11.2)	[2.7]	—	E H I K	10	普通	褐灰	SK81	
135	須恵器	壺	(15.0)	[2.7]	—	E H I J K	5	良好	黄灰	SK81 南北企産	
136	須恵器	壺	—	[2.9]	(11.4)	A I K	35	普通	灰白	SK81 新治産 外面煤付着	123-9
137	土師器	壺	(12.0)	[2.3]	—	C E H I K	10	普通	にぶい橙	SK81	
138	土師器	壺	(15.7)	[2.6]	—	C E H I K	10	普通	橙	SK81	
139	土師器	壺	(16.0)	[3.1]	—	C H I K	5	普通	にぶい赤褐	SK81	
140	土師器	壺	(14.4)	[3.0]	—	C H I K	5	普通	橙	SK86 No.2 外面煤付着	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
141	土師器	甕	(23.3)	[6.0]	—	B E I K	35	普通	明赤褐	SK86 No.1	
142	土師器	甕	—	[6.4]	(5.6)	C E I K	15	普通	明赤褐	SK86 No.6	
143	須恵器	壺	(14.0)	[4.1]	—	E I K	5	普通	黄灰	SK88 三和産	
144	須恵器	高台付壺	—	[2.6]	—	E I K	10	普通	灰	SK88	
145	須恵器	塊	(13.6)	[3.0]	—	I J K	5	良好	黄灰	SK88 南北企産	
146	須恵器	甌	—	[1.0]	—	E H I K	5	普通	褐灰	SK88 三和産か 底部の剥離が激しい	
147	土師器	壺	(10.8)	[2.1]	—	B E I K	5	普通	灰黄褐	SK88	
148	須恵器	壺	(13.9)	[2.2]	—	I K	5	普通	灰白	SK91	
149	須恵器	蓋	(16.9)	[2.5]	—	E I J K	5	普通	灰白	SK93 No.5 南北企産	
150	須恵器	壺	13.2	3.3	7.1	E H I K	75	普通	灰白	SK93 No.7 三毳産 外面被熱	123-10
151	須恵器	壺	(12.6)	3.5	(7.1)	E I K	10	良好	灰	SK93 No.1 末野産 歪み有り	
152	土師器	壺	(11.6)	[3.0]	—	E I K	25	普通	にぶい橙	SK93 No.2	
153	口クロ土師器	壺	(17.8)	[2.3]	—	E H I K	10	普通	にぶい黄橙	SK93	
154	須恵器	甕	(24.4)	[9.7]	—	E H I K	15	良好	暗灰	SK107 南北企産か 外面降灰	
155	口クロ土師器	壺	(14.6)	[2.9]	—	C H I K	5	普通	にぶい橙	SK110 口唇部内外縁に煤付着	
156	土師器	甕	(19.0)	[4.5]	—	C E H I K	5	普通	橙	SK110	
157	土師器	壺	(12.8)	[2.7]	—	C E H I K	5	普通	にぶい橙	SK116 No.2	
158	須恵器	蓋	—	[1.4]	—	E I J	85	普通	灰	SK309 No.1 南北企産	123-11
159	土師器	壺	(14.0)	[2.7]	—	C E H I K	15	普通	にぶい橙	SK118	
160	土師器	壺	(13.8)	[4.2]	—	C E H I K	10	普通	橙	SK118 No.2 外面黒斑有り	
161	土師器	壺	(13.2)	[3.8]	—	C E I K	30	普通	橙	SK125 外面黒斑有り	124-1
162	土師器	壺	(15.0)	[2.4]	—	C H I K	5	普通	にぶい黄橙	SK125 外面黒斑有り	
163	土師器	壺	(13.2)	[2.2]	—	C E H I K	5	普通	にぶい黄橙	SK125 外面黒斑有り	
164	須恵器	壺	—	[1.4]	(6.0)	E I K	25	良好	灰	SK137 末野産か	
165	口クロ土師器	壺	(12.8)	[2.8]	—	C H I K	5	良好	暗灰	SK137 内外面黒色化している	
166	須恵器	壺	(13.2)	3.6	5.9	E H I K	50	良好	灰白	SK138	124-2
167	土師器	甕	(20.5)	[9.3]	—	C H I K	20	普通	明赤褐	SK138 No.2・4 外面煤付着	
167	土師器	甕	—	[22.0]	(3.8)	C H I K	30	普通	明赤褐	SK138 No.1～3 外面下半煤付着	
168	石製品	磨石	長さ9.8 幅7.8 厚さ5.5 重さ188.3 g						SK138 角閃石安山岩 多孔質 自然面遺存 刃物痕・削痕・工具痕有り		
169	土師器	甕	(22.8)	[3.9]	—	C E H I K	5	普通	にぶい橙	SK143	
170	須恵器	蓋	(18.8)	[2.2]	—	I K	10	普通	灰	SK155 No.19	
171	須恵器	蓋	(19.0)	[1.3]	—	B E H I J K	5	普通	褐灰	SK155 No.8 末野産か	
172	土師器	壺	(12.0)	[3.4]	—	C H I K	15	普通	橙	SK155 No.20 暗文	
173	土師器	壺	(11.3)	[2.8]	—	C E I K	15	普通	橙	SK155 No.18	
174	土師器	壺	(11.4)	[2.9]	—	C E H I K	10	普通	灰褐	SK155 No.6 外面被熱	
175	土師器	壺	(14.0)	[2.5]	—	C E H I K	15	普通	灰褐	SK155 No.16	
176	土師器	甕	(22.4)	[2.7]	—	B C E H I K	5	普通	橙	SK155	
177	土師器	甕	—	[4.2]	(7.8)	E I K	20	普通	にぶい黄橙	SK155 No.17 外面摩耗が激しく調整は不明瞭	
178	土師器	甕	—	[2.5]	(6.4)	C E I K	20	普通	にぶい橙	SK155 No.11	
179	鉄製品	刀子	長さ[10.7] 刃長[7.0] 刃幅(1.1) 背幅(0.2) 重さ13.8 g						SK155 茎欠失 柄の木質残存		
180	須恵器	蓋	(15.9)	[2.2]	—	E I K	5	良好	灰白	SK162 東海産か	
181	土師器	壺	(14.0)	[2.7]	—	C E H I K	5	普通	橙	SK162 東海産か	
182	須恵器	蓋	(16.8)	[2.6]	—	B E I K	50	良好	黄灰	SK420 6次K27No.94 末野産 摘み部周辺に糸切り痕が残る	124-3
183	須恵器	壺	(12.6)	[1.9]	—	I J K	10	良好	黄灰	SK227 南北企産	
184	須恵器	壺	—	[1.6]	(6.6)	E H I K	50	普通	にぶい橙	SK227 三毳産	
185	須恵器	高台付壺	—	[3.7]	7.2	E H I K	60	普通	黄灰	SK227 K27No.187・1654 K28No.209 6次K27No.9	
186	須恵器	甕	(48.0)	[12.7]	—	B E H I K	20	良好	灰	SK227 5次K27No.232・416・1401・1606・1633・1641・6次K27No.16・26・35・86 末野産	124-5

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
187	須恵器	甕	(26.0)	[7.4]	—	D E H I K	15	良好	にぶい黄橙	SK227 No.765 三和産	
188	須恵器	甌	—	[15.5]	(14.0)	D E H I K	15	普通	褐灰	SK227 K27No.1116・1406・1829 K28 No.218 三和産	124-4
189	土師器	小型台付甕	(11.3)	[3.4]	—	C E I K	15	普通	にぶい橙	SK227 三甕産	
190	鉄製品	不明	長さ[2.2] 幅0.8 厚さ(0.3) 重さ2.7g							SK227 断面推定	126-2
191	須恵器	壺	(12.4)	3.5	(7.2)	E H I J K	20	良好	黄灰	SK231 5次I23No.98・481 南北企産	
192	須恵器	壺	(11.6)	[1.9]	—	I J K	10	普通	灰白	SK231 No.11 南北企産	
193	須恵器	壺	—	[1.8]	(7.2)	G I	20	普通	灰	SK231 南北企産 胎土に砂粒多量	
194	須恵器	壺	—	[0.8]	5.6	E I J K	95	普通	灰白	SK231 南北企産	
195	須恵器	甕	—	[13.0]	(14.0)	H I K	20	良好	褐灰	SK231 No.5 5次I24No.102 外面下半 強く被熱し剥離が激しい 内面下半付 着物有り 被熱により内容物が煮沸さ れ付着したものか	124-6
196	土師器	壺	(11.0)	[3.1]	—	C H I K	10	普通	橙	SK231	
197	ロクロ土師器	壺	(12.4)	3.8	(6.6)	C E I K	10	普通	にぶい褐	SK231 No.14 内外面共に摩耗が激し く調整は不明瞭	
198	ロクロ土師器	壺	(12.2)	[3.0]	—	C E I K	20	普通	にぶい橙	SK231	
199	ロクロ土師器	壺	(15.6)	[3.6]	—	C E H I K	5	普通	橙	SK231 No.7 内黒	
200	土師器	小型台付甕	—	[2.7]	(8.6)	B E H I K	20	普通	橙	SK231 No.10	
201	須恵器	壺	(12.7)	3.7	6.8	H I K	35	普通	灰	SK234 I23No.266・286 三甕産	
202	ロクロ土師器	壺	(16.0)	[2.6]	—	C H I K	5	普通	灰白	SK234 No.19 内黒	
203	土師器	甕	(20.4)	[3.8]	—	C E H I K	5	普通	明赤褐	SK234 No.13	
204	土師器	小型台付甕	(14.2)	[5.0]	—	C H I K	30	普通	橙	SK234 No.18 外面煤付着	
205	土師器	小型台付甕	13.8	[6.8]	—	C I K	50	普通	にぶい橙	SK234 No.8・14・20	124-7
206	土師器	小型台付甕	—	[4.8]	—	C E H I K	35	普通	橙	SK234 No.5 外面煤付着	
207	須恵器	壺	(12.6)	3.9	5.4	E I K	55	普通	黄灰	SK235 K27No.947 三和産	124-9
208	ロクロ土師器	壺	—	[2.2]	5.8	C H I K	85	普通	にぶい橙	SK235 内黒 外面被熱	124-8
209	土師器	壺	(12.8)	[3.0]	(7.7)	H I K	15	普通	にぶい橙	SK235	
210	土師器	甕	(19.8)	[6.1]	—	E H I K	15	普通	にぶい橙	SK235	
211	ロクロ土師器	高台付壺	11.8	5.5	(6.7)	E H I K	80	普通	にぶい橙	SK239 No.2 内面暗文状のミガキが施 される 外面煤付着	125-1
212	土師器	甕	(14.9)	[12.9]	—	C E H I K	25	普通	にぶい橙	SK239 No.1・3～6	125-2
213	須恵器	壺	—	[1.8]	(6.8)	I J K	20	普通	灰	SK240 南北企産	

深さ0.24mを測り、長軸方位はN-13° -Wを指す。

遺物は須恵器壺、ロクロ土師器壺、土師器壺・甕が出土した（第405図207～210）。207は須恵器の壺である。三和の製品で、器壁がやや厚い。

208は内黒のロクロ土師器壺である。内面には横方向のミガキが施される。

209、210は土師器である。209は壺で、北武藏型壺である。扁平で平底になり、口縁部外面ヨコナデの下から下端までは無調整帶となる。

210は「コ」の字状口縁甕で、定型化した段階のものである。

遺物の時期は、須恵器壺や土師器壺、甕の形状から9世紀後半と考えられる。

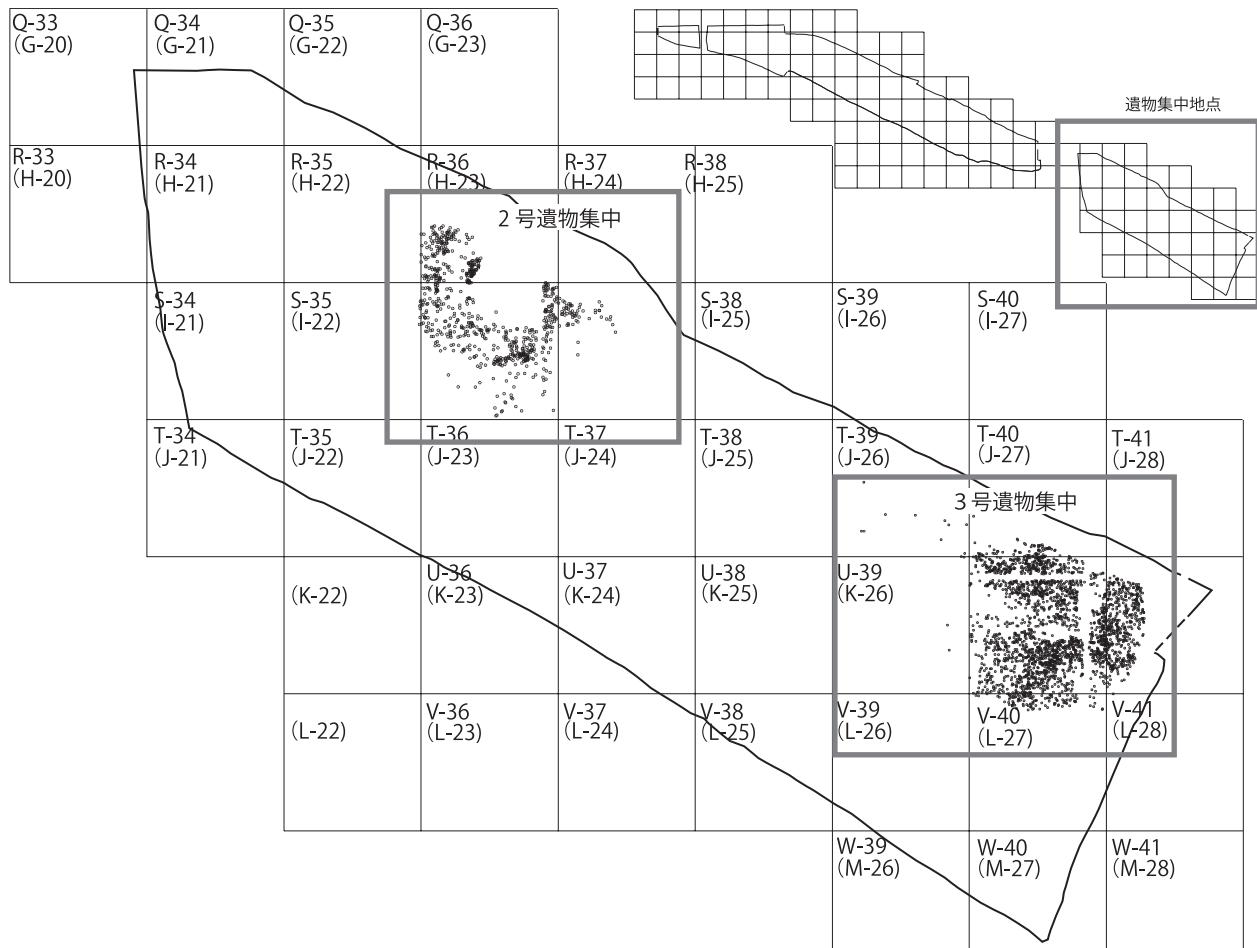
第434号土壙（第397図）

VI区西寄り、T-36グリッドに位置する。平面形態は橢円形で、規模は長径2.73m、短径2.18m、深さ0.20mを測り、長軸方位はN-90°を指す。土壙中央部では、焼土や炭化物集中が検出された。

遺物はロクロ土師器高台付壺、土師器甕が出土した（第405図211、212）。211はロクロ土師器の高台付壺である。内面には暗文状のミガキが施され、底部の切り離しは静止糸切りである。

212は土師器の甕で、外面に縦方向のヘラケズリが施される。

遺物は少ないが、どちらも10世紀代の遺物であるため、10世紀代のものと推察される。



第406図 遺物集中位置図

(7) 遺物集中地点

古代の遺物集中地点は2箇所検出された。調査の段階では包含層として扱われていたが、遺物が2箇所に集中して分布すること、出土した遺物が9世紀中葉から後半の限定的な時期で占められていることから、遺物集中地点とした。

古墳時代の遺物は非常に少なく、高壙の脚部と土師器甕の底部がそれぞれ1点ずつと、この他に図示し得なかつたが、土師器甕の胴部小破片が数点出土した程度であった。おそらく混入品か、下層にあった遺物が巻き込まれたものと考えられる。

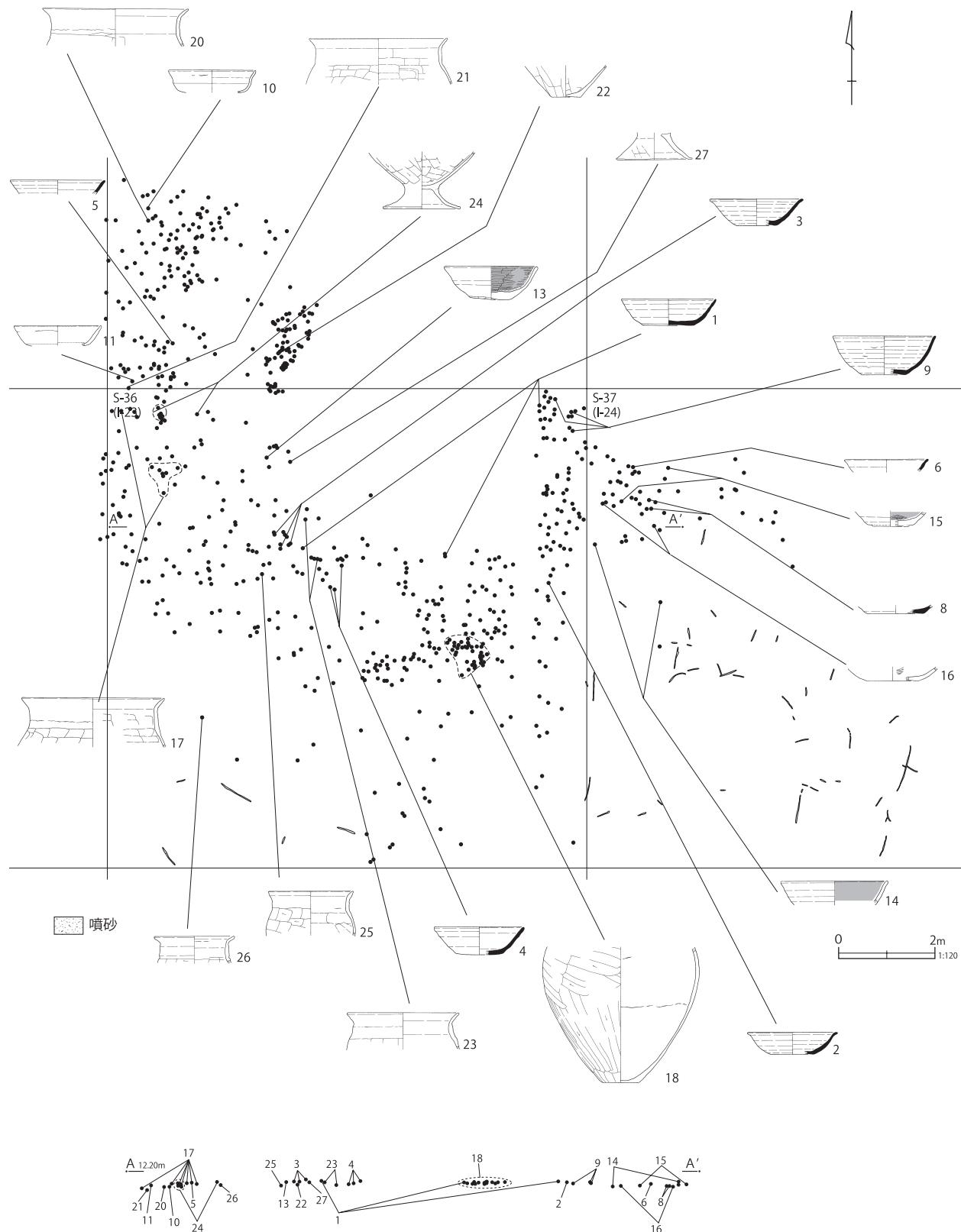
土器等の廃棄場所として使用されたか、洪水や地震等の災害で生じた廃棄物を集積した可能性なども考えられる。ただ、出土した土器類の年代が、弘仁地震よりも後、元慶地震よりも前に当たるため、両地震以外の要因によるものと推察される。

第2号遺物集中地点（第407図）

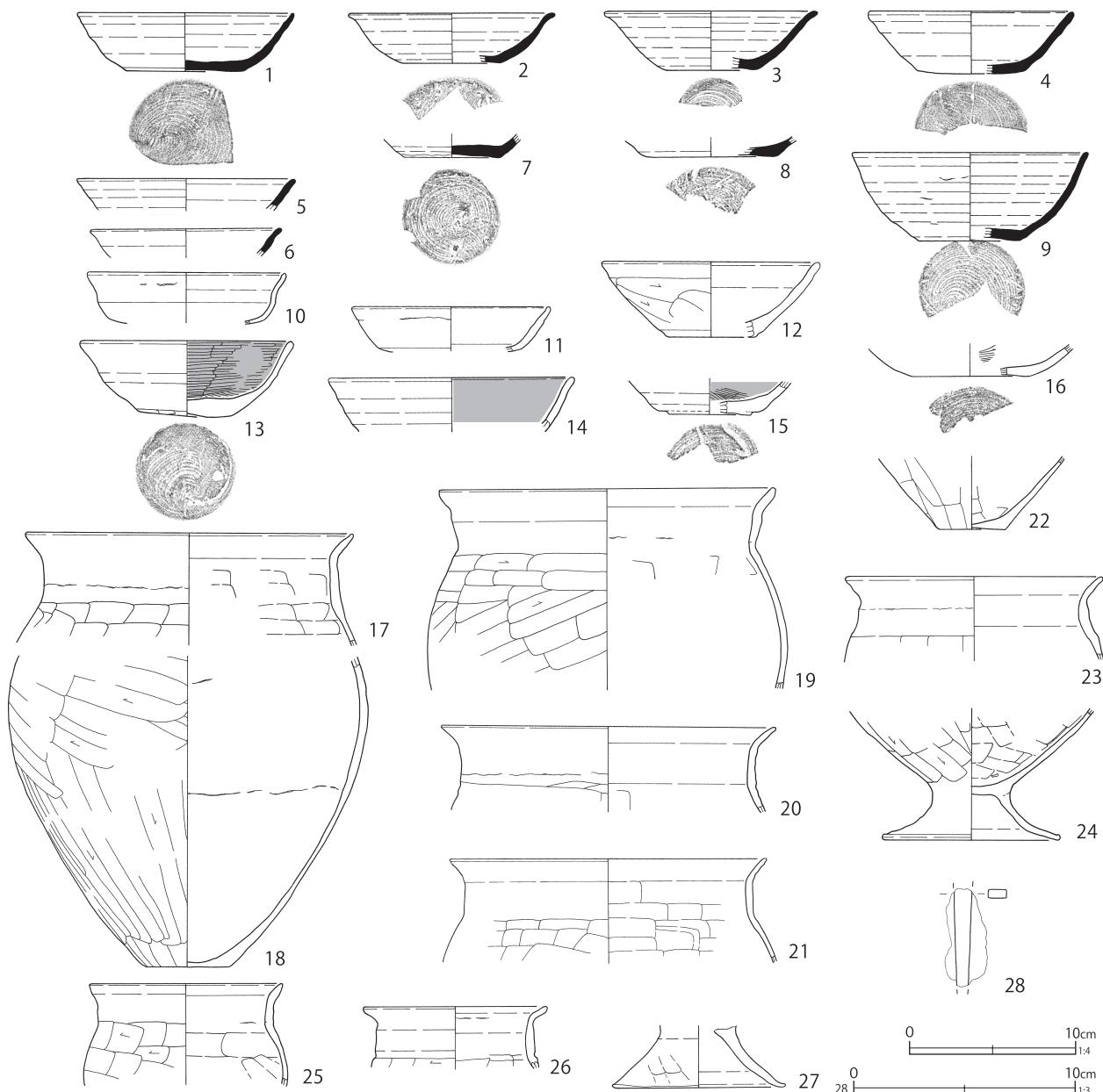
VI区中央やや西寄り、R・S-35～37グリッドに位置する。中央部に第102号住居跡が位置し、北東部は現代の井戸跡の養生により未掘である。

遺物集中地点は住居跡の周囲15m程の範囲に広がる。遺物は住居跡の周辺に多く分布し、南東部は散在的になる。南東部の散発的な箇所を除けば、平面形態は南東一北西方向に長い橢円形となり、規模は南東一北西14.25m、南西一北東9.45mを測る。遺物はほぼ水平に堆積し、高低差はあまり無い。恐らく、一括で投棄されたのであろう。

遺物集中地点の南東部からは、液状化現象に伴う噴砂の痕跡が検出された。噴砂に対して遺物集中地点の検出面は同じか、やや高い位置に当たるため、液状化現象発生後、砂が片付けられた後に形成されたと考えられる。



第407図 第2号遺物集中遺物出土状況



第408図 第2号遺物集中出土遺物

遺物は須恵器壺・塊、土師器壺、ロクロ土師器壺、土師器甕・小型台付甕・鉄製品が出土した(第408図1~28)。1~8は須恵器の壺で、南比企や三毳の製品を主体とする。1は被熱により変質するが三毳産と考えられ、大芝原窯A地点段階のものか。2は南比企の製品で、鳩山VII~VIII期と考えられる。3は全体が強く被熱する。4は厚手で底部が丸みを持ち、胎土に砂粒を多く含む。9は塊で、南比企の製品である。鳩山VIII期と考えられる。

10~12は土師器の壺である。10、11は北武藏型壺で、扁平で平底になるタイプのものである。ケズリは底部のみ施される。9世紀中葉のものか。12は深身で底径が小さくなるもので、外面は口縁部を除き、全体にヘラケズリが施される。

13~16は内黒のロクロ土師器壺である。13は底部の厚さが不均一で、一部ヘラケズリが施される。

17~27は土師器の甕である。17~22は甕で、「コ」の字状口縁甕である。定型化した段階のも

第116表 第2号遺物集中出土遺物観察表（第408図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	(13.1)	3.5	(7.1)	I K	45	普通	灰白	I23 No.2・117・313 三毳産か 外面 煤付着	
2	須恵器	壺	(12.0)	3.0	(6.0)	E I J K	30	良好	灰白	I23 No.67 南北企産	
3	須恵器	壺	(12.4)	3.6	(5.4)	H I K	25	普通	灰黄褐	I23 No.331・333・336 全体被熱	
4	須恵器	壺	(12.1)	3.3	(6.6)	I K	20	普通	黄灰	I23 No.302・306・490	
5	須恵器	壺	(14.1)	[1.9]	—	H I J K	5	良好	灰	H23 No.153 南北企産	
6	須恵器	壺	(11.3)	[1.7]	—	I K	10	普通	黄灰	I24 No.14 三毳産か	
7	須恵器	壺	—	[1.4]	(5.7)	E I J K	80	普通	褐灰	I24 6次No.1 南北企産	
8	須恵器	壺	—	[1.1]	(7.8)	I K	20	普通	黄灰	I24 No.142・143	
9	須恵器	塊	(14.0)	5.3	6.2	E H I J K	25	良好	灰	I23 No.7・11・22 南北企産	
10	土師器	壺	(11.8)	[3.0]	—	C E I K	10	普通	橙	H23 No.203	
11	土師器	壺	(11.8)	[2.7]	—	C E I K	10	普通	にぶい橙	H23 No.166	
12	土師器	壺	12.9	4.5	(5.2)	C I K	50	普通	にぶい橙	J23 6次No.1	
13	ロクロ土師器	壺	12.4	4.7	6.0	E H I K	90	普通	橙	I23 No.321 内黒 外面黒斑有り	
14	ロクロ土師器	壺	(14.6)	[3.2]	—	C E H I K	10	普通	橙	I24 No.45・77 内黒 内外面共に摩耗が激しく調整は不明瞭	
15	ロクロ土師器	壺	—	[2.0]	(6.0)	E H I K	20	普通	にぶい橙	I24 No.121・152 内黒	
16	ロクロ土師器	壺	—	[1.9]	(7.0)	C E H I K	15	普通	にぶい橙	I24 No.148・157	
17	土師器	甕	18.7	[6.8]	—	C I K	85	普通	橙	I23 No.458・467・472・474・476・480	
18	土師器	甕	—	[18.7]	5.0	C E H I K	50	普通	明赤褐	I23 No.131・132・135・137・138・142・144・145・147・153・155・163・167・168・170・171・494 内面 摩耗が激しく調整は不明瞭	125-3
19	土師器	甕	20.0	[14.4]	—	C E I K	20	普通	にぶい赤褐	I23 No.81	125-4
20	土師器	甕	(20.1)	[5.2]	—	B C I K	15	普通	橙	H23 No.202	
21	土師器	甕	(21.2)	[7.1]	—	C E H I K	20	普通	にぶい褐	H23 No.165	
22	土師器	甕	—	[4.4]	(4.0)	E I K	20	普通	にぶい赤褐	H23 No.28	
23	土師器	小型台付甕	(15.4)	[5.0]	—	C E H I K	15	普通	にぶい赤褐	I23 No.314・500 内外面煤付着	
24	土師器	小型台付甕	—	[7.9]	(10.5)	B C E H I K	30	普通	明赤褐	I23 No.401・403・404・406・411・493 内外面煤付着	
25	土師器	小型台付甕	(10.4)	[6.1]	—	C E H I K	20	普通	にぶい橙	I23 No.346 頸部内面剥離有り	
26	土師器	小型台付甕	(10.8)	[3.7]	—	C H I K	25	普通	橙	I23 No.363 内外面煤付着	
27	土師器	小型台付甕	—	[3.7]	10.0	B E H I K	100	普通	橙	I23 No.320	
28	鉄製品	不明	長さ[4.4]	幅0.8	厚さ0.4	重さ11.8g				I23	

ので、頸部が長いため古い様相を示す。9世紀中葉のものか。23~27は小型台付甕である。

遺物の時期は、1の壺が三毳編年の大芝原窯A地点段階に位置付けられ、9世紀第Ⅱ四半期と考えられている。また、2、9の壺および塊が鳩山編年VII~VIII期と考えられ、840~880年の年代と考えられる。10、11の土師器壺は9世紀中葉と推察され、17、19~21の甕は第75号住居跡より新しい段階に想定される。以上のことから、本遺物集中地点は9世紀中葉、9世紀第Ⅱ四半期から第Ⅲ四半期のものと考えられる。

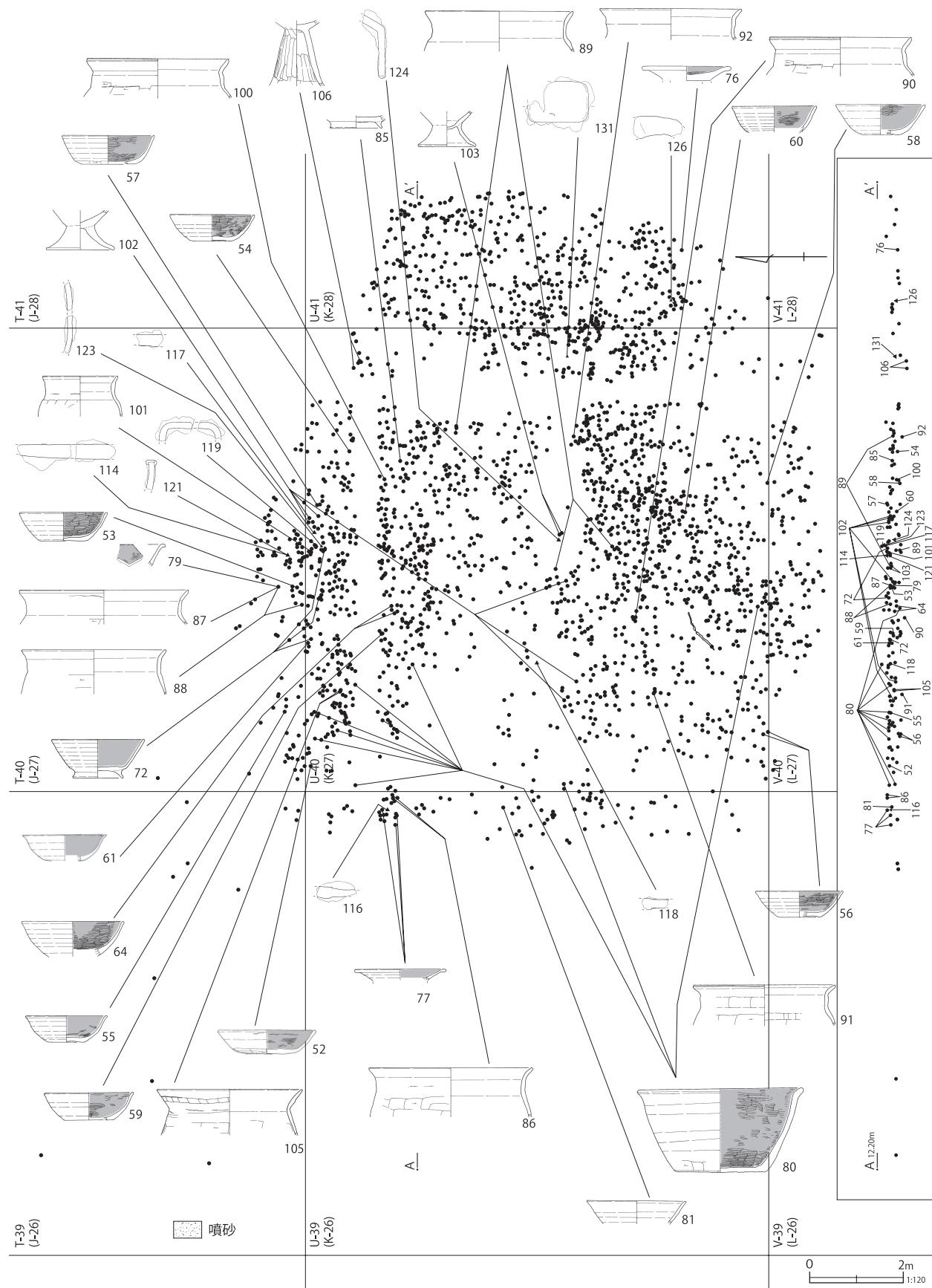
第3号遺物集中地点（第409・410図）

VI区北東部、T・U・V-39~41グリッドに位置する。遺物集中地点は13m程の範囲に広がる。遺物の密度にはあまり差が無く、全体に多く分布する。北西部からは数点の遺物が散発的に検出された。北西部の散発的な箇所を除けば、平面形態は橢円形となり、規模は南北14.70m、東西15.30mを測る。

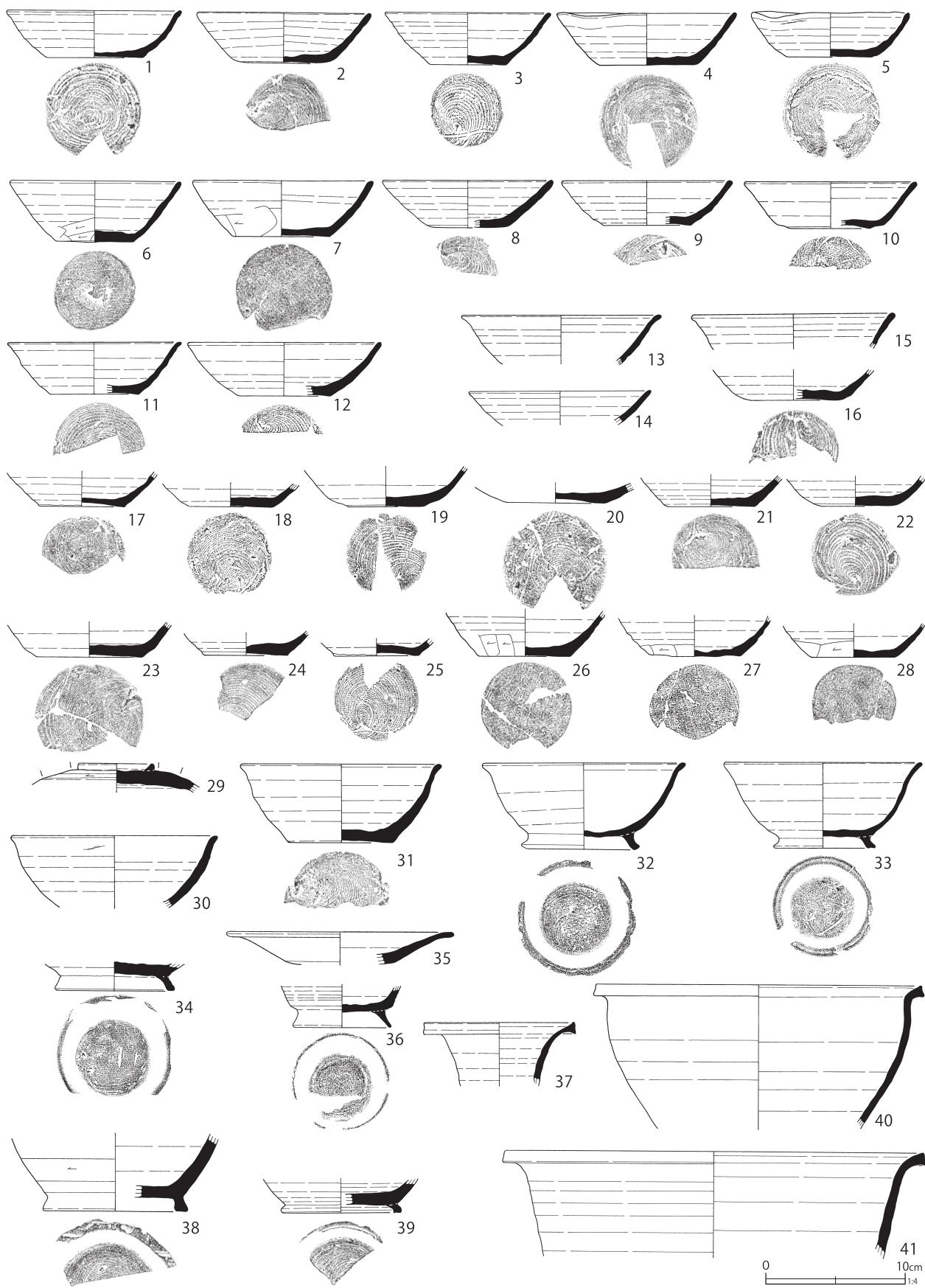
遺物は0.3m程の深さに亘って堆積し、この点は第2号遺物集中地点とは異なる。時間をかけて形成されたか、土器や石製品以外に、有機質のもの



第409図 第3号遺物集中遺物出土状況（1）



第410図 第3号遺物集中遺物出土状況（2）



第411図 第3号遺物集中遺物出土遺物（1）



第412図 第3号遺物集中遺物出土遺物（2）

も同時に多く廃棄され、それらが腐食し分解されていく間に埋没していった可能性が考えられる。

また、本遺物集中地点から検出された遺物は、U-39グリッドから検出された、第142号井戸跡出土の須恵器甕（第357図31、32）と接合関係にある。第142号井戸跡は隣接するグリッドに位置するが、遺物集中地点と重複関係には無い。井戸跡では中央部にまとめられた形で投棄されていた31が、遺物集中地点では広範囲に飛散した状態で検出されている点も特徴的である。

32は井戸跡から破片のみ出土した甕だが、大部分が隣接するD-40グリッドから検出され、分布はグリッドの北部中央に集中し、31とは対照的な検出状況を示す。

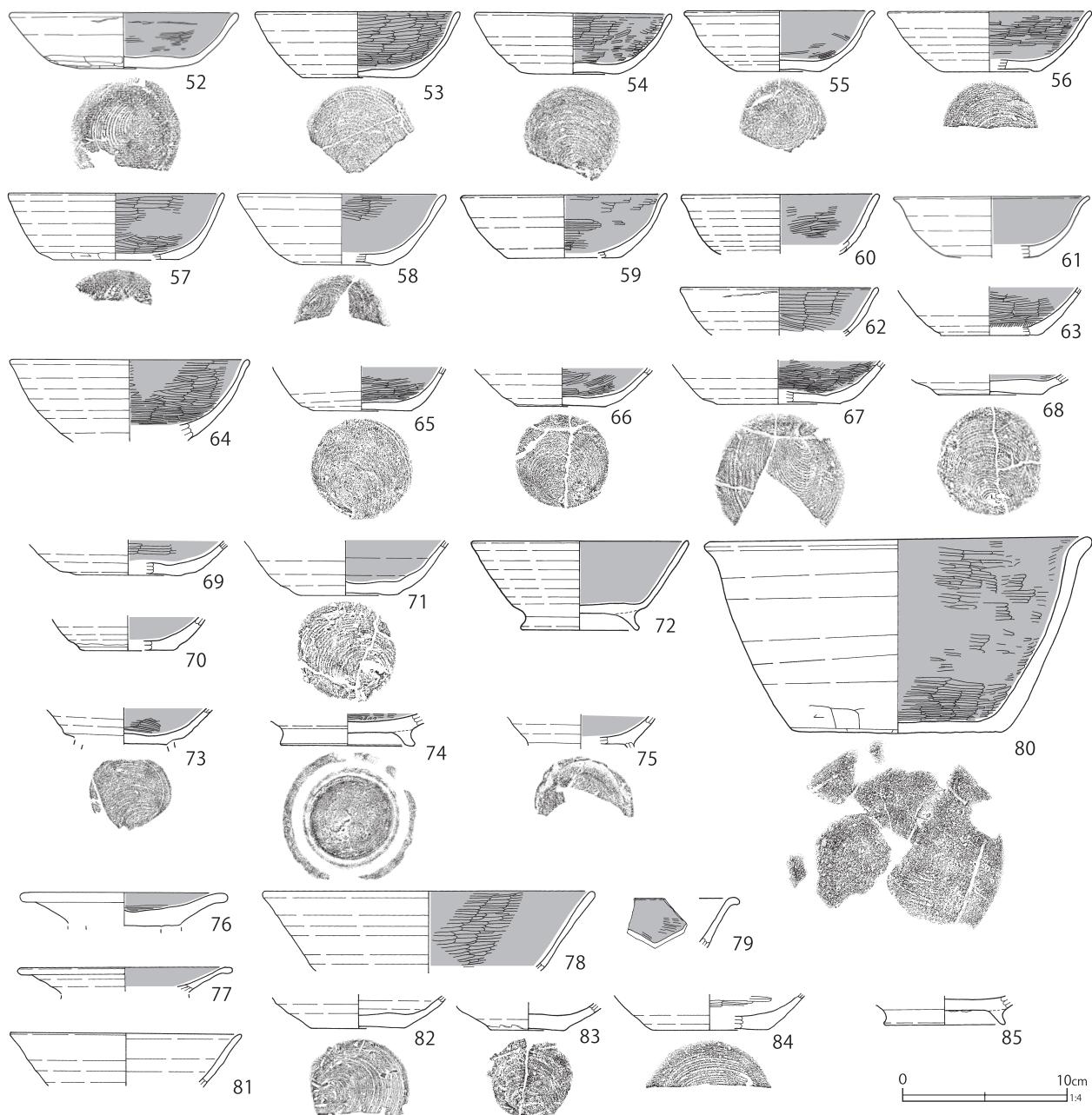
このような状況になった理由は不明だが、少な

くとも第142号井戸跡が開口していた頃に遺物集中地点が形成されたと考えられる。

遺物は須恵器蓋・壺・壇・高台付壺・皿・瓶類・鉢・甕・大甕・甌、灰釉陶器瓶類、土師器壺、ロクロ土師器壺・高台付壺・高台付皿・鉢、土師器甕・小型台付甕・高壺、巡方・砥石・磨石、刀子・門金具・楔・釘・用途不明品等が出土した（第411～415図1～130）。

1～47は須恵器である。1～28は壺で、南比企、末野、三毳、三和の製品を含む。南比企産は2、3、10が鳩山編年VII期、三和産は、6は底径が小さいことから江口長沖窯段階、7は底径が広く体部外側のケズリの幅が広いことから浜ノ台段階と考えられる。

36は三和の製品で、器形から双耳壺になると考



第413図 第3号遺物集中遺物出土遺物（3）

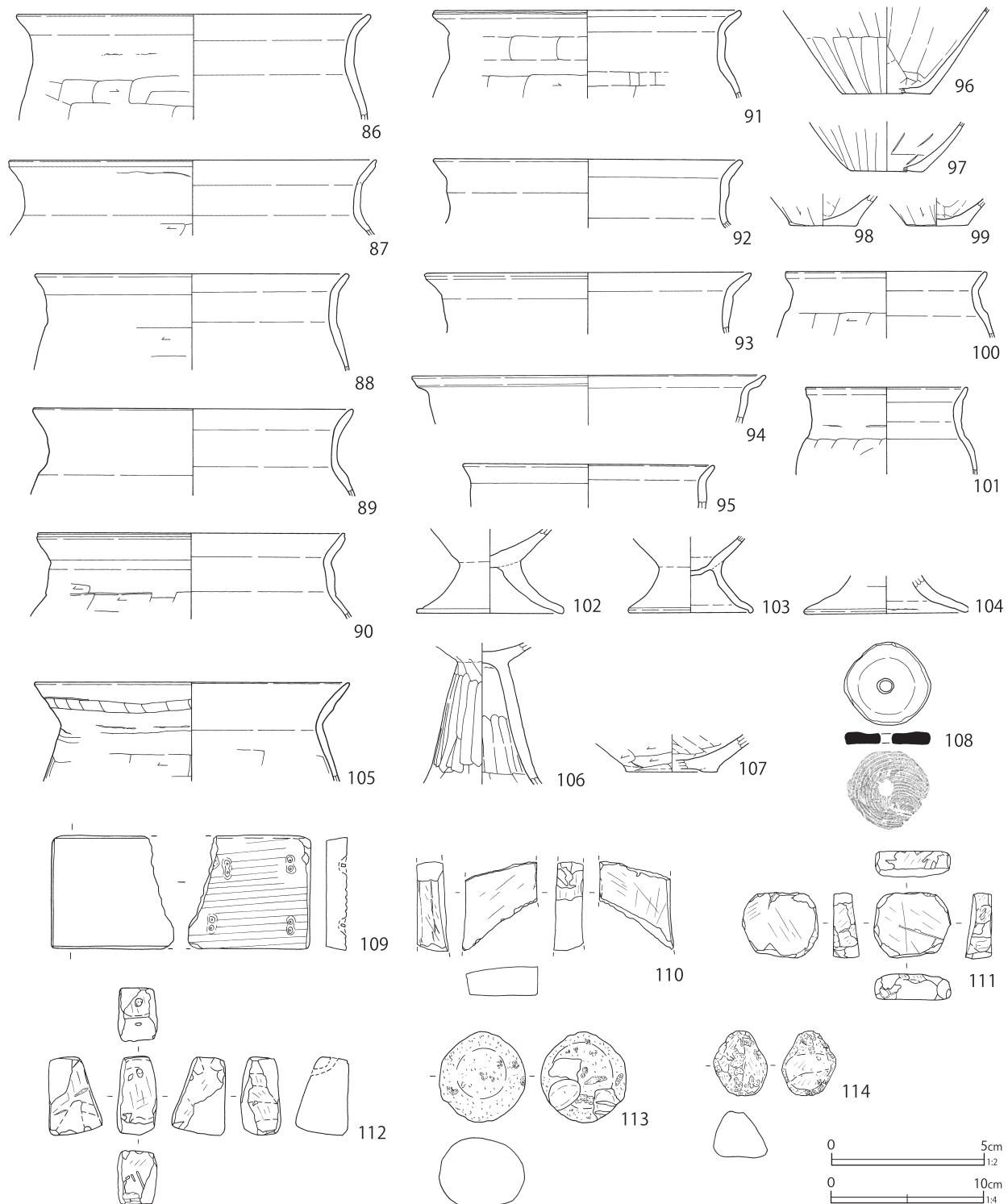
えられる。37～39は瓶類で、37は外面に自然釉がかかり、綺麗に発色する。

44は大甕の底部である。薄手だが大型品になると推察される。45、46は把手付甕である。甕形の単孔式で、46は胴部外面下端にヘラケズリが施される。

49から51は土師器の北武藏型坏である。平底で、ヘラケズリは底部にのみ施される。

52～85はロクロ土師器である。52～71は内黒の坏で、52、57は外面下端に手持ちヘラケズリが施される。72～75は内黒の高台付坏である。72は体部が直線的に開き、他のものとは器形が異なる。76、77は高台付皿で、76は厚手、77は薄手であり、ともに口縁部が大きく外反する。

78～80は鉢である。78、79は大碗になる可能性もある。80は厚手で寸胴形の鉢で、外面下端およ



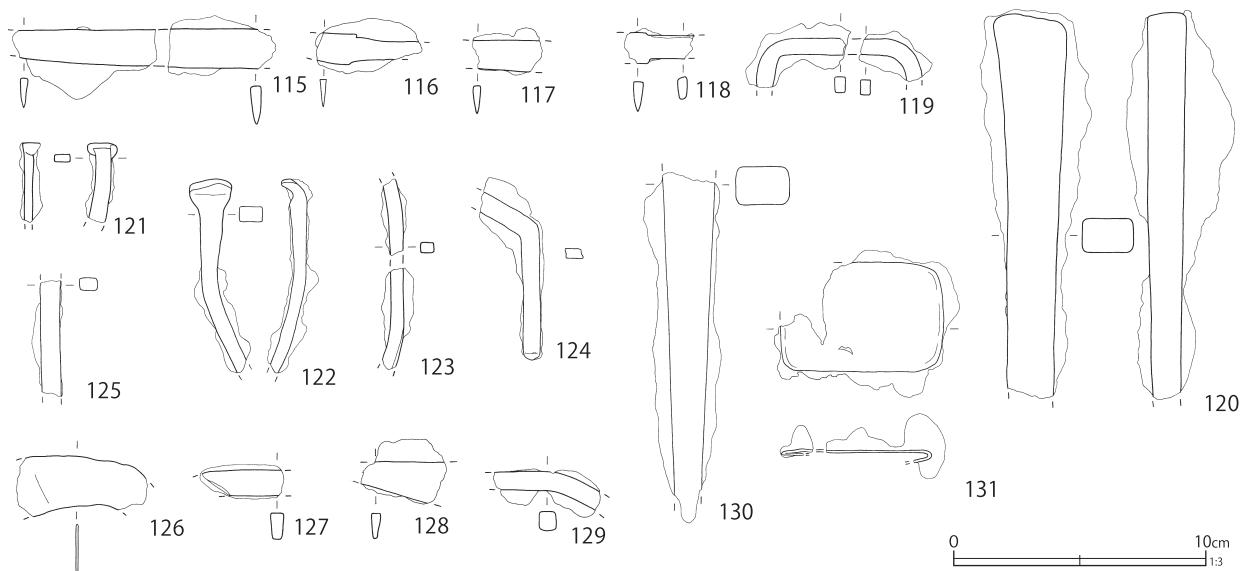
第414図 第3号遺物集中遺物（4）

び底部に手持ちヘラケズリが施される。81～84は壊である。84は内面にミガキが施される。85は高台付壊か。

86～107は土師器である。86～100は甕で、「コ」

の字状口縁甕である。頸部が短く、やや新しい様相を持つ。101～104は小型台付甕である。

105は頸部が「く」の字状に屈曲する甕で、8世紀代のものと推察される。混入品か。106は高壊、



第415図 第3号遺物集中出土遺物 (5)

第117表 第3号遺物集中出土遺物観察表 (第411～415図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考		図版
1	須恵器	壺	(12.3)	3.4	7.0	E H I K	50	普通	黄灰	K27 5次No.729	末野産か 器面摩耗している	
2	須恵器	壺	(12.2)	3.5	(4.8)	E H I K	30	良好	黄灰	K27 6次No.49	南比企産か	
3	須恵器	壺	(11.6)	3.7	5.4	E I J K	20	良好	黄灰	K27 6次No.117・120	南比企産	
4	須恵器	壺	12.7	3.7	7.0	G I K	80	良好	黄灰	K27 6次No.77	5次No.721	
5	須恵器	壺	(11.2)	3.2	6.1	I K	70	普通	灰	K27 5次No.425		
6	須恵器	壺	(12.0)	4.4	5.6	D E I K	25	良好	灰白	K27 5次No.1391・1772	三和産	
7	須恵器	壺	(12.6)	3.9	7.0	D I K	50	普通	灰	K27 5次No.718・1284・1386	6次No.157 三和産 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	125-5
8	須恵器	壺	(12.0)	3.3	(5.0)	I K	20	良好	灰	K27 5次No.734		
9	須恵器	壺	(12.8)	3.2	(7.2)	C E F H I K	20	普通	灰	J27 No.56		
10	須恵器	壺	(12.1)	3.3	(5.9)	I J	20	普通	灰	J27 6次No.1	南比企産	
11	須恵器	壺	(12.2)	3.6	(6.4)	E H I J K	35	良好	黄灰	K27 5次No.559・588・1325	南比企産	
12	須恵器	壺	(13.6)	3.8	(6.6)	E I K	25	普通	灰白	K27 5次No.80・922	三毳産 内面摩耗、剥離が激しい	
13	須恵器	壺	(14.0)	[3.5]	—	B E I K	20	普通	黄灰	J27 No.10	末野産 全体被熱	
14	須恵器	壺	(12.9)	[2.4]	—	E I K	25	良好	灰白	K28 No.3・4	三毳産	
15	須恵器	壺	(14.4)	[2.5]	—	B E I K	5	良好	灰	K26 No.50	末野産	
16	須恵器	壺	—	[2.2]	6.3	I K	40	普通	黄灰	K27 5次No.1301	南比企産か	
17	須恵器	壺	—	[2.5]	(3.0)	E I J K	50	良好	黄灰	K27 5次No.539・1896		
18	須恵器	壺	—	[1.7]	6.0	E I J K	70	良好	灰白	K27 5次No.1894	南比企産	
19	須恵器	壺	—	[2.8]	5.8	E I K	50	普通	灰白	K27 5次No.1397・1715・1737	三毳産か 内面被熱	
20	須恵器	壺	—	[1.4]	6.9	D E I K	80	普通	灰	K27 6次No.118		
21	須恵器	壺	—	[2.3]	6.2	C E H I J K	50	良好	にぶい橙	K28 No.322		
22	須恵器	壺	—	[2.1]	5.0	H I K	40	良好	灰白	K27 5次No.1470		
23	須恵器	壺	—	[2.5]	7.6	C I K	45	普通	灰白	K27 5次No.1491		
24	須恵器	壺	—	[1.8]	(5.8)	E I K	25	普通	黄灰	L27 5次No.118	三毳産か	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
25	須恵器	壺	—	[1.2]	6.0	E H I K	60	良好	灰白	K27 5次No.928・1363	
26	須恵器	壺	—	[3.3]	6.5	D I K	50	普通	黄灰	K28 No.87・99 J27No.92 三和産	
27	須恵器	壺	—	[2.9]	6.4	E I K	55	普通	褐灰	K27 5次No.1818 三和産	
28	須恵器	壺	—	[2.4]	(6.0)	E I K	50	普通	灰白	J27 No.16	
29	須恵器	蓋	—	[2.0]	—	E H I J K	95	良好	灰白	K27 5次No.920・921・924 南比企産	
30	須恵器	塊	(14.8)	[5.1]	—	I J K	25	普通	灰	L27 5次No.40 南比企産	
31	須恵器	塊	(14.1)	5.6	(7.4)	E H I J K	20	普通	褐灰	L26 6次No.1 南比企産 ヘラ記号有り	
32	須恵器	高台付塊	14.3	6.2	7.6	B I K	75	普通	灰	K27 5次 No.653・1156・1168・1130・1327・1784 末野産	
33	須恵器	高台付塊	14.0	6.1	7.0	B E I K	50	普通	灰	K27 5次 No.612・1015・1016・1070 末野産	
34	須恵器	塊か	—	[2.0]	8.4	H I K	90	良好	褐灰	K27 5次No.1727	
35	須恵器	皿	(16.0)	[2.4]	—	I	30	普通	灰	K27 5次No.1132・1257・1259	
36	須恵器	双耳坏か	—	[2.9]	6.9	I K	85	普通	灰	K27 5次No.1874 三和産	
37	須恵器	長頸瓶	10.6	[4.6]	—	E I K	45	良好	黄灰	K27 5次No.1005 6次No.72須恵質の灰釉陶器の可能性あり	
38	須恵器	瓶類	—	[5.6]	(10.2)	E I K	15	普通	灰	K27 5次No.279 内外面降灰	
39	須恵器	瓶類	—	[2.5]	(8.3)	C E H I K	25	普通	にぶい橙	K28 No.180	
40	須恵器	鉢	(23.3)	[10.3]	—	I K	15	普通	黄灰	K27 5次No.916・1453 三毳産か	
41	須恵器	鉢か	(30.0)	[7.6]	—	E I K	5	良好	灰白	K27 5次No.1022・1048・1067	
42	須恵器	甕	(25.0)	[5.0]	—	E I J K	15	良好	褐灰	K27 5次No.1180 6次No.78 南比企産	
43	須恵器	甕	—	[9.7]	—	E I K	25	良好	灰白	J26 No.3 内外面降灰	
44	須恵器	甕	—	[5.6]	(13.0)	E I K	30	良好	黄灰	K27 5次No.369・1649 5次K26No.3 6次K27No.7・36・145 末野産	
45	須恵器	甕	(29.0)	[15.9]	—	H I K	20	不良	灰白	K27 5次No.5・44・46・764・786・1172・1179・1292 三毳産か	
46	須恵器	甕	—	[27.0]	(15.4)	E H I K	20	良好	灰白	K27 5次No.940・1420 5次K28No.413 6次K26No.1 6次K27No.69 三毳産か	125-6
47	須恵器	甕	—	[5.8]	(7.6)	H I K	10	普通	灰白	K27 6次No.123	
48	灰釉陶器	瓶類	—	[3.0]	(8.2)	I K	15	普通	灰白	K28 No.151 猿投産か 内面降灰	
49	土師器	壺	(12.2)	3.1	9.4	C E H I K	35	普通	明赤褐	L26	
50	土師器	壺	(12.0)	[3.3]	—	C H I K	25	普通	橙	K27 5次No.667	
51	土師器	壺	(12.9)	[3.0]	—	C H I K	15	普通	にぶい橙	J27 No.44	
52	ロクロ土師器	壺	(13.8)	3.4	(5.6)	C E H I K	25	普通	にぶい橙	K27 5次No.1001 内黒	
53	ロクロ土師器	壺	(12.2)	4.0	(6.6)	C H I K	30	普通	橙	J27 6次No.15 内黒	
54	ロクロ土師器	壺	(11.7)	3.7	6.1	C E H I K	55	普通	にぶい赤褐	K27 6次No.76 内黒 外面被熱	
55	ロクロ土師器	壺	(11.3)	3.7	5.2	C E H I K M	30	普通	にぶい橙	J27 No.19 内黒か 被熱により黒色処理は飛んでいる	
56	ロクロ土師器	壺	(12.2)	3.7	(6.0)	C E H I K	25	普通	橙	K27 5次No.9・10 内黒 外面黒斑有り	
57	ロクロ土師器	壺	(12.9)	4.0	(7.6)	C E H I K	15	普通	にぶい橙	K27 5次No.1192 内黒	
58	ロクロ土師器	壺	(12.4)	4.3	(5.0)	C E H I K	20	普通	にぶい橙	K27 5次No.320 内黒 内外面強く被熱 内面の剥離が激しい	
59	ロクロ土師器	壺	(12.3)	3.8	(7.0)	C H I K	25	普通	橙	K27 6次No.109 内黒 被熱により黒色処理がほぼ飛んでいる	
60	ロクロ土師器	壺	(11.8)	[3.6]	—	C H I K	15	普通	橙	K27 5次No.469 内黒 内外面共に被熱により摩耗が激しい	
61	ロクロ土師器	壺	(11.8)	[4.7]	(5.8)	C I K	20	普通	褐灰	K27 5次No.1113 内黒 内外面共に摩耗が激しく調整は不明瞭	
62	ロクロ土師器	壺	(11.8)	[2.9]	—	E H I K	10	普通	にぶい褐	L27 内黒	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
63	ロクロ土師器	壺	—	[2.8]	(6.0)	E H I K	30	普通	橙	J25 6次No.1 内黒 外面黒斑有り	
64	ロクロ土師器	壺	(14.3)	[5.0]	—	C H I K	30	普通	橙	K27 6次No.108・159 内黒	
65	ロクロ土師器	壺	—	[2.7]	6.0	C E H I K	85	普通	橙	J26 6次No.1 内黒 外面黒斑有り	
66	ロクロ土師器	壺	—	[2.3]	5.4	C E H I K	60	普通	にぶい橙	K27 6次No.125 内黒 外面黒斑有り	
67	ロクロ土師器	壺	—	[2.6]	7.6	B C H I K	65	普通	橙	K27 5次No.973・1387 内黒	
68	ロクロ土師器	壺	—	[1.2]	6.2	C H I K	90	普通	灰褐	K27 5次No.461・462・891 内黒 内面摩耗が激しく調整は不明瞭	
69	ロクロ土師器	壺	—	[2.1]	(7.0)	E H I K	20	普通	にぶい橙	J26 No.6 内黒 内外面摩耗	
70	ロクロ土師器	壺	—	[2.0]	5.6	C H I K	65	普通	橙	K27 5次785・929・1864 内黒 器面の摩耗が激しく内面および底部の調整は不明瞭	
71	ロクロ土師器	壺	—	[3.3]	6.0	I K	50	普通	褐灰	K27 5次No.391・1479・1840 6次No.160 内黒 全体的に器面が黒色化	
72	ロクロ土師器	高台付壺	(13.0)	5.4	(7.0)	C H I K	25	不良	褐灰	K27 5次No.1114・1756・1766 内黒か 内面の摩耗が激しく調整は不明瞭	
73	ロクロ土師器	高台付壺	—	[2.2]	—	H I K	50	普通	橙	K27 5次No.1295 内黒 内外面共に摩耗	
74	ロクロ土師器	高台付壺	—	[1.9]	8.0	C E H I K	90	普通	橙	K27 5次No.1811 内黒	
75	ロクロ土師器	高台付壺	—	[2.0]	—	E H I K	45	普通	橙	K28 No.388 L27No.2 内黒 内外面共に摩耗が激しく調整は不明瞭	
76	ロクロ土師器	高台付皿	11.6	2.0	—	C E H I K	55	普通	橙	K28 No.463 内黒 高台剥離	
77	ロクロ土師器	高台付皿	(12.4)	[1.5]	—	C E H I K	20	普通	橙	K26 No.56・57・65 内黒 内外面共に摩耗が激しく調整は不明瞭	
78	ロクロ土師器	鉢	(20.0)	[4.8]	—	C H I K	5	普通	浅黄橙	L25 6次No.1 内黒	
79	ロクロ土師器	鉢	—	[3.0]	—	H I K	5	普通	橙	J27 No.31 内黒	
80	ロクロ土師器	鉢	(22.9)	11.8	12.9	E H I K	70	普通	浅黄橙	K27 5次No.59・624・1009・1012・1020・1024・1045・1101・1247・1438 内黒 大型 胎土に角閃石を含まない 搬入品か	
81	ロクロ土師器	壺	(13.9)	[3.2]	—	C E H I K	10	普通	橙	K26 No.42	
82	ロクロ土師器	壺	—	[3.0]	5.6	E H I K	45	普通	橙	K27 6次No.52	
83	ロクロ土師器	壺	—	[1.7]	4.6	C E H I K	75	普通	橙	K27 6次No.105・174	
84	ロクロ土師器	壺	—	[2.2]	(6.8)	C H I K	45	普通	橙	K26 No.69 内面ミガキ	
85	ロクロ土師器	高台付壺	—	[1.7]	(7.2)	C H I K	45	普通	橙	K27 5次No.787	
86	土師器	甕	(23.0)	[6.9]	—	C H I K	5	普通	橙	K26 No.62・63	
87	土師器	甕	(24.0)	[4.9]	—	C H I K	5	普通	橙	J27 No.31	
88	土師器	甕	(20.4)	[6.3]	—	C E H I K	10	普通	にぶい褐	J27 No.31・77	
89	土師器	甕	(20.8)	[5.6]	—	C E I K	20	普通	橙	K26 No.52・61・64	
90	土師器	甕	(20.0)	[5.6]	—	C E H I K	15	普通	橙	K27 6次No.170	
91	土師器	甕	(20.0)	[5.8]	—	C E H I K	15	普通	橙	K27 6次No.149 外面煤付着	
92	土師器	甕	(20.0)	[4.4]	—	C H I K	15	普通	褐灰	K27 6次No.33 内外面煤付着	
93	土師器	甕	(21.2)	[4.0]	—	E H I K	25	普通	橙	J27 No.7・100 6次No.3	
94	土師器	甕	(23.0)	[3.2]	—	C E H I K	5	普通	灰黄褐	K28 No.321	
95	土師器	甕	(16.4)	[2.8]	—	E H I K	5	普通	にぶい黄橙	K27 5次No.1768	
96	土師器	甕	—	[5.7]	(5.8)	C E I K	15	普通	にぶい橙	J27 6次No.13 外面煤付着	
97	土師器	甕	—	[3.3]	(4.6)	H I K	30	普通	明赤褐	J27 No.31	
98	土師器	甕	—	[2.0]	(4.4)	C E H I K	25	普通	灰褐	K28 No.112	
99	土師器	甕	—	[1.8]	(4.0)	E H I K	25	普通	にぶい橙	K28 No.310 外面煤付着	
100	土師器	小型台付甕	(13.0)	[4.4]	—	B C E H I K	15	普通	橙	K27 6次No.73	
101	土師器	小型台付甕	(10.4)	[5.7]	—	C I K	15	普通	にぶい橙	K27 5次No.1144 外面煤付着	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
102	土師器	小型台付甕	—	[5.5]	9.4	C E H I K	40	普通	明赤褐	K27 5次No.1169・1170・1457・1464・1713・1771	
103	土師器	小型台付甕	—	[5.0]	(7.8)	E H I K	50	普通	明赤褐	K27 6次No.43・44 外面煤付着	
104	土師器	小型台付甕	—	[2.9]	(10.3)	C E H I K	45	普通	明赤褐	K27 5次No.1273	
105	土師器	甕	(20.4)	[6.4]	—	C E H I K	25	普通	橙	K27 6次No.103・172 外面煤付着	
106	土師器	高坏	—	[9.3]	—	C E H I K	90	普通	にぶい橙	K27 6次3面No.1・2 古墳時代	125-7
107	土師器	甕	—	[2.4]	(6.0)	E H I K	25	普通	橙	K27 5次No.708 古墳時代	
108	須恵器	転用紡錘車	径5.6 厚さ0.8			G I K	100	普通	灰	J27 5次No.47 坏底部転用 面取り	
109	石製品	巡方	長さ[3.6] 幅4.0 厚さ0.7 重さ23.7g							K27 滑石 表裏研磨 裏面ノコギリ状工具痕 穿孔1対4箇所(1対補修) 補修前穿孔1遺存	126-3
110	石製品	砥石	長さ[5.8] 幅[4.9] 厚さ1.9 重さ61.0g							K26 No.65 流紋岩 砥面4遺存 刃物痕多数	128-3
111	石製品	砥石	長さ4.3 幅5.0 厚さ1.7 重さ52.9g							K27 No.1303 流紋岩 刃物痕表裏全面使用	128-3
112	石製品	砥石	長さ5.1 幅2.6 厚さ3.5 重さ63.5g							L27 No.116 流紋岩 被熱(黒色化)穿孔2箇所(貫通)	128-3
113	石製品	磨石	長さ5.9 幅5.6 厚さ4.6 重さ70.9g							K27 No.990 角閃石安山岩 多孔質自然面遺存 溝状使用痕	128-3
114	石製品	磨石	長さ4.2 幅3.5 重さ19.7g							K27 No.775 角閃石安山岩 多孔質全面使用	128-3
115	鉄製品	刀子か	刃長[10.1] 刃幅1.5 背幅0.4 重さ27.3g							J27 No.96 接合しないが同一個体と思われる	
116	鉄製品	刀子	長さ[4.2] 刃長[1.3] 刃幅1.1 背幅0.3 重さ11.4g							K26 No.84 開部破片 両開	
117	鉄製品	刀子	刃長[2.7] 刃幅1.1 背幅0.3 重さ5.1g							K27 No.1165 刃部破片	
118	鉄製品	刀子	長さ[2.8] 刀長[1.0] 刃幅1.2 背幅0.5 重さ2.3g							K27 No.1368 開部破片 両開	
119	鉄製品	門金具か	長さ[5.9] 幅0.6 厚さ0.4 重さ17.0g							K27 No.1146 接合しないが同一個体と思われる	
120	鉄製品	楔か	長さ[15.3] 幅2.0 厚さ1.4 重さ244.5g							K27 東西トレンチ	
121	鉄製品	釘	長さ[3.1] 幅0.6 厚さ0.3 重さ2.2g							J27 No.96	
122	鉄製品	釘	長さ[7.7] 幅0.9 厚さ0.6 重さ12.6							K27	
123	鉄製品	不明	長さ[7.0] 幅0.5 厚さ0.4 重さ7.1g							K27 No.1147 接合しないが同一個体と思われる	
124	鉄製品	不明	長さ[6.7] 幅0.7 厚さ0.4 重さ11.0g							K27 No.42	
125	鉄製品	不明	長さ[4.6] 幅0.7 厚さ0.5 重さ6.4g							J26	
126	鉄製品	不明	長さ[5.1] 幅[2.3] 厚さ0.1 重さ8.2g							K28 No.416	
127	鉄製品	不明	長さ[3.2] 幅1.0 厚さ0.5 重さ4.5g							K27	
128	鉄製品	不明	縦[1.8] 横[3.2] 厚さ0.4 重さ8.6g							K27	
129	鉄製品	不明	長さ[4.2] 幅0.7 厚さ0.7 重さ6.2g							K27	
130	鉄製品	不明	長さ[13.9] 幅2.1 厚さ1.5 重さ103.3g							K27	
131	鉄製品	不明	縦4.4 横6.4 厚さ0.1 重さ58.0g							K27 No.175 両端折れ曲がる	

107は甕の底部で、古墳時代の遺物である。

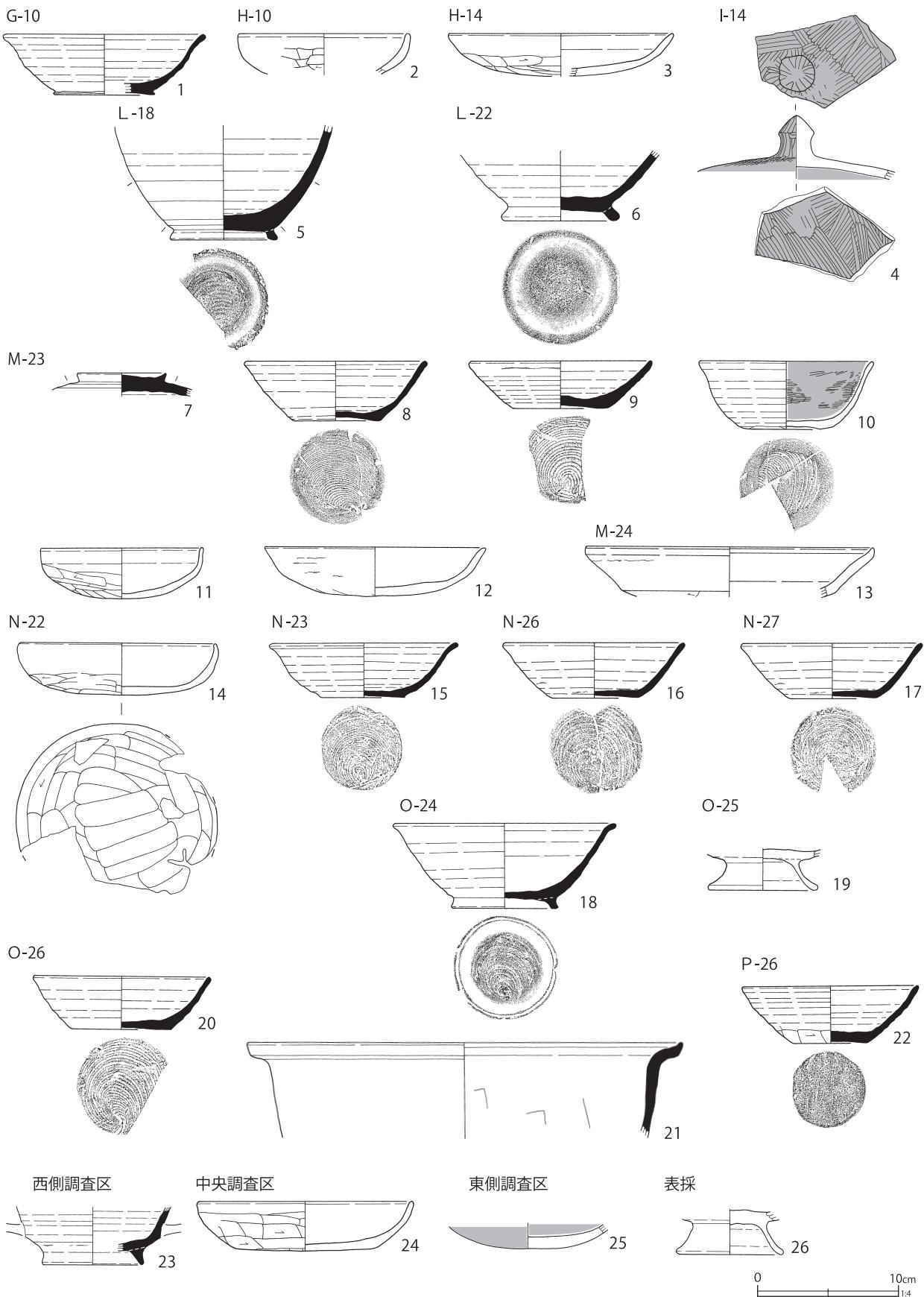
108は須恵器の坏底部を転用した紡錘車である。破損面には面取りが施されている。

109～114は石製品である。109は滑石製の巡方で、表側面は研磨され、裏面にはノコギリ状工具痕が認められる。一次穿孔部が一部破損し、補修のため二次穿孔が施される。110～112は砥石で、流紋岩製である。112は穿孔が施され、携行する

ための紐が通されていたと考えられる。

114～131は鉄製品である。114～117は刀子、118は門金具、119は楔、120、121は釘で、他は不明品である。

遺物の時期は、南比企や三和の坏の年代や、土師器坏や甕の頸部形状等から、9世紀中葉から後半、9世紀第III四半期と考えられる。第2号遺物集中よりやや新しいものか。



第416図 遺構外出土遺物

第118表 遺構外出土遺物観察表（第416図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	(14.0)	4.3	(7.1)	E H I K	25	良好	にぶい赤褐	G10 内外面被熱 外面口唇部油煙付着	
2	土師器	壺	(12.0)	[2.8]	—	C H I K	5	普通	にぶい橙	H10	
3	土師器	皿	(15.8)	3.0	—	C E I K	25	普通	橙	H14 歪み有り	
4	黒色土器	蓋	—	[4.4]	—	A	60	良好	灰白	I14 No.1 内外面黒色処理 ミガキ	125-8
5	須恵器	瓶類	—	[8.2]	(7.4)	E I J K	30	良好	灰	L18 No.1 南北企産 外面降灰	
6	須恵器	瓶類か	—	[5.0]	7.7	I K	65	良好	黒褐	L22	
7	須恵器	蓋	6.2	[1.6]	—	B E I K	75	普通	灰	M23 末野産か	
8	須恵器	壺	(12.7)	4.2	5.8	I J K	35	良好	にぶい橙	M23 南北企産 底部外縁使用による摩耗	
9	須恵器	壺	(12.7)	3.4	(6.8)	E H I K	30	普通	灰白	M23 太田金山産か	
10	ロクロ土師器	壺	(12.2)	4.8	6.6	C H I K	45	普通	橙	M23 内黒	
11	土師器	壺	(11.4)	3.5	—	C I K	45	普通	にぶい橙	M23 外面煤付着	
12	土師器	皿	(15.6)	3.5	—	C E I K	55	普通	橙	M23 外面摩耗により調整不明瞭	
13	土師器	皿	(20.4)	[3.5]	—	C H I K	25	普通	橙	M24	
14	土師器	壺	13.8	3.7	—	C I K	65	普通	橙	N22	
15	須恵器	壺	13.0	3.8	5.9	B E I K	100	良好	灰	N23 No.2 末野産 やや歪み有り	
16	須恵器	壺	(12.8)	3.2	6.4	C I K	55	良好	灰白	N26 太田金山産か	
17	須恵器	壺	12.5	3.9	6.0	H I J K	80	良好	灰白	N27 南北企産 ヘラ記号有り 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	
18	須恵器	高台付壺	15.4	6.1	7.2	B H I K	90	良好	黄灰	024 末野産	
19	ロクロ土師器	高台付壺か	—	[2.9]	(7.4)	C E H I K	50	普通	にぶい橙	025 内黒か	
20	須恵器	壺	(12.4)	3.7	7.0	I J K	55	良好	灰	026 No.1 南北企産 口唇部外縁に重ね焼きによる変色が認められる	
21	土師器	鉢	(30.9)	[6.7]	—	A C E I K	10	普通	にぶい橙	026 新治産	
22	須恵器	壺	(12.4)	4.0	5.3	H I K	45	良好	黄灰	P26 三和産	
23	須恵器	双耳壺	—	[4.1]	(7.0)	D I	25	良好	灰	1次西区確認面 三和産か	
24	土師器	壺	(15.0)	3.5	(10.0)	C H I K	50	普通	橙	中央調査区	
25	黒色土器	鉢か	—	[1.8]	—	E I	40	良好	灰白	1次東区 内外面黒色処理 摩耗	
26	ロクロ土師器	高台付壺	—	[3.1]	(7.3)	A H I K	70	普通	にぶい橙	表採	

（8）遺構外出土遺物

古代面は古墳時代以上に遺構の検出が難しかつたため、遺構外から検出された遺物が多い。比較的残存率が高く、形がわかるものを抽出した（第416図1～26）。

I-14グリッドから検出された（第49図）黒色土器の蓋（第233図4）は、内外面に黒色処理が施されたものである。つまみは長い錐宝珠状で、器面は内外面ともにミガキが施され、つまみ部分にも縦方向のミガキが施される。土師質ではあるが、焼成は良く硬質に焼き締まる。下野国府から類似した蓋が出土しており、8世紀代の年代とされている。

上記の蓋に組み合うものは不明だが、東側調

査区から、内外面に黒色処理が施された鉢が出土している（第416図25）。全体像はわからないが、壺の底部と考えられる。器面の調整は摩耗により不明だが、僅かに光沢を持つことから、ミガキが施されていたと推察される。胎土も蓋と類似することから、セットの遺物であった可能性も考えられる。

O-25グリッドと表採遺物から、10世紀代のものと考えられるロクロ土師器の高台付壺が検出されている（第416図19、26）。器形は類似するが、別個体である。10世紀代の遺構は第85号住居跡と第434号土壙の、住居跡1軒と土壙1基のみであったが、他にも遺構が存在していた可能性を考えられる。

VI 自然科学分析

宮東遺跡では、第1次調査で出土骨の分析、第2次調査で河道埋積物と珪藻・花粉分析、第4次調査では放射性炭素年代測定と木製品の樹種同定、第5・6次調査では珪藻・花粉分析を行った。

出土骨の分析では、第97号土壙から出土した骨は、馬であることがわかった。残りやすい馬歯が検出されていないことから、頭蓋の無い状態で埋葬されていた可能性が考えられ、また骨に癒着が認められたことから、足に病変が認められることが指摘された。

河川跡の河道埋積物分析では、テフラの分析の結果、Hr-FPに由来する可能性があるとされ、礫種構成分析の結果、利根川水系と渡良瀬水系の両河川の影響が同時にあった可能性が指摘された。

また、河川跡の珪藻・花粉分析の結果、河川跡

の下層から中層にかけては湿地の環境であり、河川とは機能しておらず、下層は付近の河川氾濫時に水が流れ込む凹地の環境であったとされる。中層以降は乾燥が進むとされ、遺物が出土しなくなることと何か関連性があるのだろうか。

放射性炭素年代測定は弘仁九年の地震との関連が想定される第75号住居跡の床面炭層を対象として実施した。結果は、7～8世紀の年代が得られ、住居跡の時期とは齟齬が発生した。

樹種同定は古墳時代の住居跡から検出された柱材を対象に行い、クヌギ節という結果が得られた。

VI区の包含層を対象とした珪藻・花粉分析では、珪藻や花粉化石はあまり検出されなかつたが、イネ属の植物珪酸体含量から、周辺で稲作が行われていた可能性が指摘され、畠跡に由来するものか。

1 宮東遺跡（第1次調査）出土骨の自然科学分析

はじめに

宮東遺跡（埼玉県加須市大越畠ヶ田）は、現在の利根川右岸に位置する。松丸（1979）によれば、本遺跡周辺には、いわゆる加須低地、渡良瀬川低地および中川低地が分布し、利根川右岸には今泉台地と島状に分布する利根川台地群が示されている。この図幅を参考とすると、本遺跡は利根川右岸の自然堤防および上記した利根川台地群の一部付近に立地する。本遺跡では、発掘調査の結果、古墳時代、奈良～平安時代、および中近世の3時期の遺構検出面が確認されている。とくに、二面では住居跡や掘立柱建物跡、三面では井戸跡や溝などが確認されている。

本報告では、宮東遺跡の発掘調査で出土した骨の種類や部位に係る資料の作成を目的として、骨同定を実施した。

（1）試料

試料は、SK-97より出土した骨片である。以下、

試料の概要を記す。

SK-97は、平面が長方形を呈する土壙であり、調査時の記録では、頭蓋および椎骨部分が残存していないが、肋骨・前肢・後肢がみられ、ウマないしウシとみられる大型獣が肢体左側を上にした状態で埋葬されていると判断される。

分析に供された出土骨は、一括で取上げられており、いずれも保存状態が極めて悪く、乾燥して破片となったものが多い。また、骨自体には泥などが付着し、固結した状態にある。

（2）分析方法

SK-97出土骨は、乾燥が進んでおり、骨自体の

第119表 検出分類群一覧

脊椎動物門 Phylum Vertebrata

哺乳綱 Class Mammalia

ウマ目（奇蹄目） Order Perissodactyla

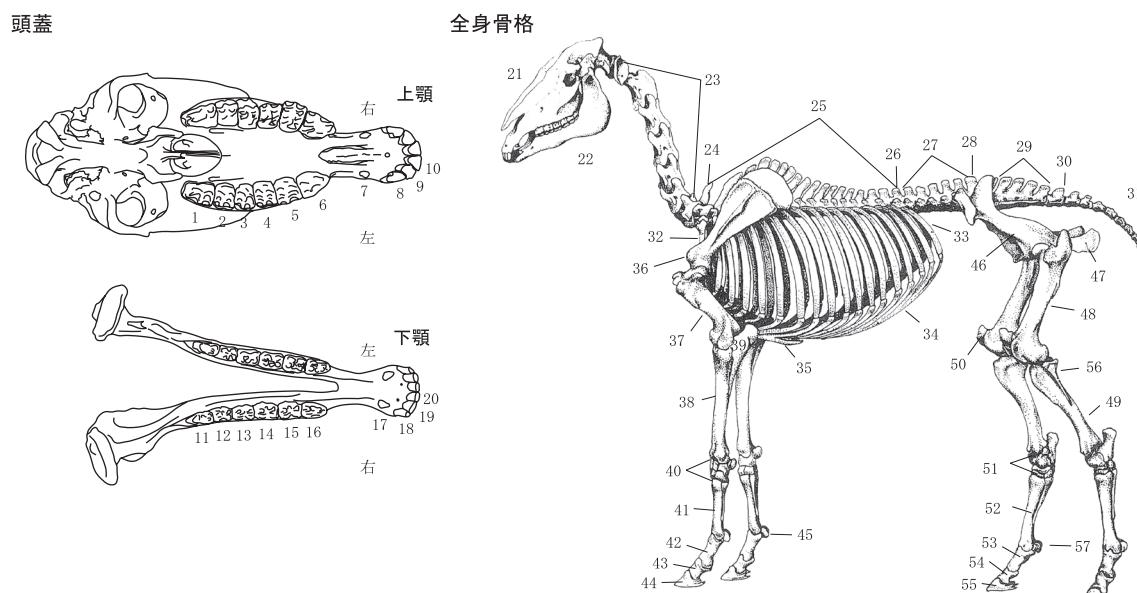
ウマ科 Family Equidae

ウマ Equus caballus

第120表 骨同定結果

試料名	種類	部位	左右	部分	数量 (g:重量)	被熱	備考
SK-97	ウマ	橈骨	左	遠位端	1		Bd63.58
		橈骨+尺骨	右	近位端片	1		
		橈側・中間・尺側・第3・第4手根骨, 中手骨	右	破片	1		中手骨Bp44.07 土塊状
		中手骨		遠位端	1		Bd41.61
		種子骨他		破片	1 +		中手骨と関節
		脛骨	左	遠位端	1		Bd64.99
		距骨, 跗骨	左	破片	1		脛骨と関節, 土塊状
		距骨	右	破片	1		
		中心・第3・第4足根骨, 第2・第3中足骨	左	破片	1		土塊状, 瘢着
		中心・第3・第4足根骨	右	破片	2		土塊状
		中足骨	右	近位端片	1		
		中足骨		遠位端	1		Bd40.85
		中足骨		遠位端	1		
		種子骨		破片	1		中足骨と関節
		基節骨		破片	1 +		中足骨と関節
		基節骨		破片	1 +		
		中節骨		破片	1		
		肩甲骨?		破片	1		土塊状
		上腕骨?		遠位端?	1		
		上腕骨/大腿骨?		近位端?	1		
		脛骨?		近位端?	1		
		肋骨?		破片	15		土塊状
		肋骨/四肢骨等		破片	39 +		
		不明		破片	15		
		不明		破片	1,840 g		土塊状
		土器			1		

Bp:近位端幅. Bd:遠位端幅



- | | | | |
|---------------|-------------|--------------|-------------|
| 1. 上顎第3後臼歯 | 2. 上顎第2後臼歯 | 3. 上顎第1後臼歯 | 4. 上顎第4前臼歯 |
| 5. 上顎第3前臼歯 | 6. 上顎第2前臼歯 | 7. 上顎犬歯(雄のみ) | 8. 上顎第3門歯 |
| 9. 上顎第2門歯 | 10. 上顎第1門歯 | 11. 下顎第3後臼歯 | 12. 下顎第2後臼歯 |
| 13. 下顎第1後臼歯 | 14. 下顎第4前臼歯 | 15. 下顎第3前臼歯 | 16. 下顎第2前臼歯 |
| 17. 下顎犬歯(雄のみ) | 18. 下顎第3門歯 | 19. 下顎第2門歯 | 20. 下顎第1門歯 |
| 21. 頭蓋 | 22. 下顎骨 | 23. 頸椎 | 24. 第一胸椎 |
| 25. 胸椎 | 26. 最後位胸椎 | 27. 腰椎 | 28. 最後位腰椎 |
| 29. 仙骨 | 30. 第一尾椎 | 31. 尾椎3 | 2. 第一肋骨 |
| 33. 最後位肋骨 | 34. 軟肋骨 | 35. 劍状軟骨 | 36. 肩甲骨 |
| 37. 上腕骨 | 38. 橫骨 | 39. 尺骨 | 40. 手根骨 |
| 41. 中手骨 | 42. 指骨(基節骨) | 43. 指骨(中節骨) | 44. 指骨(末節骨) |
| 45. 種子骨 | 46. 腸骨 | 47. 坐骨 | 48. 大腿骨 |
| 49. 脣骨 | 50. 膝蓋骨 | 51. 足根骨 | 52. 中足骨 |
| 53. 趾骨(基節骨) | 54. 趾骨(中節骨) | 55. 趾骨(末節骨) | 56. 腓骨 |
| 57. 種子骨. | | | |

第417図 ウマ骨格各部の名称

保存状態も著しく悪い。骨自体に付着した泥は、水に浸けたブラシや竹串などを使用して可能な限り除去し、接合・復元を試みた。クリーニングが終了した試料は、肉眼観察を行い、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。なお、状態が悪く、クリーニングが困難と判断される試料については、土塊状のまま観察を行っている。計測は、デジタルノギスを用いて測定する。

(3) 結果

検出された分類群を第119表に、各試料の同定結果を第120表に示す。また、骨格各部の名称については、ウマを例として第417図に示した。同定の結果SK-97出土骨にはウマが確認された。以下、結果を記す。

出土骨はウマに同定された。可能な限り泥分の除去を試みたが、状態が悪く十分なクリーニングが行えない骨が多く、土塊状のままで観察したものも含まれる。確認された部位は、左橈骨遠位端、右橈骨+尺骨近位端、右橈側・中間・尺側・第3・第4手根骨および右中手骨、中手骨遠位端、種子骨他、左脛骨遠位端、右中心・第3・第4足根骨、左中心・第3・第4足根骨および第2・第3中足骨、右中足骨近位端、中足骨遠位端、種子骨、基節骨、左距骨・踵骨、右距骨、基節骨、中節骨、肩甲骨・上腕骨・上腕骨/大腿骨・脛骨・肋骨の可能性がある破片、肋骨/四肢骨等、部位不明破片である。なお、左中心・第3・第4足根骨と第2・第3中足骨は骨が癒着

する（第418図-32）。

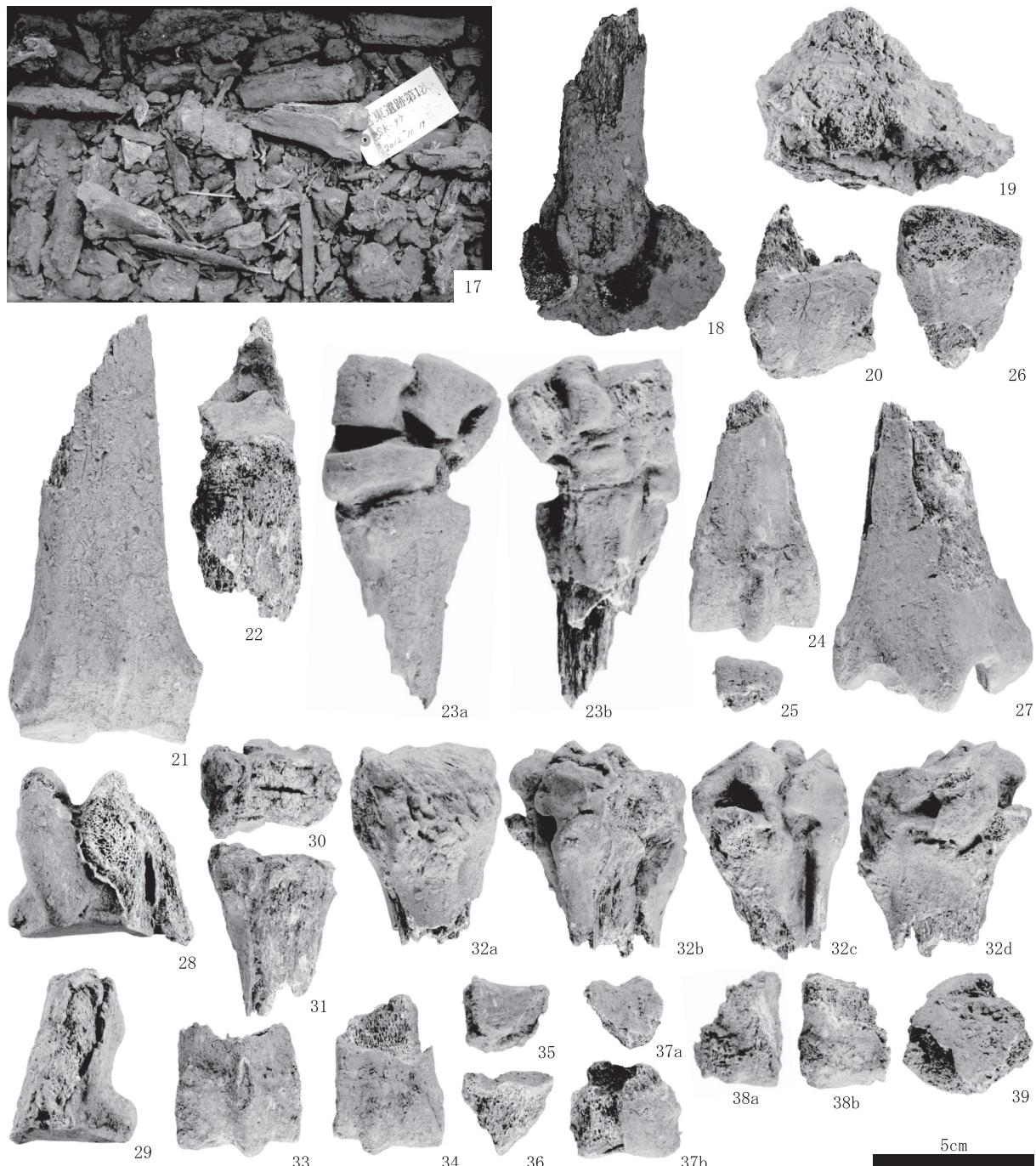
(4) 考察

SK-97出土骨は、発掘調査時の資料をみると肢體左側を上面として横たえた状態で検出されている。出土骨はウマであったことから、ウマの遺骸が土壤内に埋葬されたと考えられる。出土部位についてみると、前肢および後肢がみられ、手根骨と中手骨、脛骨と距骨、足根骨と中足骨、中足骨と基節骨などが関節した状態の骨が確認され、左後肢には病変がみられる足根骨と中足骨の骨が癒着する状態が観察された。SK-97のウマは、中手骨、脛骨、中足骨の骨端サイズから推定される体高（林田・山内, 1957; 西中川ほか, 1991）は120cm前後であることから、小中型馬程度の大きさとみられる。

なお、今回の出土骨には、骨体部と比較して残存することが多い歯牙が確認されなかった。また、上述した資料においても頭蓋は確認できないことから、頭蓋のないウマの遺骸が埋葬された可能性がある。松井（1997）によれば、ウマ・ウシの出土例などから自然死・事故死、屠殺、犠牲に分類できるとしている。本遺跡より出土したウマは、集落内より出土していることから家畜として利用されていた可能性があり、頭部（頭蓋）のない遺骸であることを考慮すると屠殺あるいは犠牲（頭蓋を供献）などの行為も推定される。

引用文献

- 加藤嘉太郎・山内昭二 2003 『新編 家畜比較解剖図説 上巻』 養賢堂 315p.
- 西中川駿・本田道輝・松元光春 1991 「古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」『平成2年度 文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書』 99p.
- 林田重幸・山内忠平 1957 「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告書』 6 146-156.
- 松井 章 1997 「考古学からみた動物利用」『部落解放なら』 8 奈良県部落解放研究所 2-31.
- 松丸国照 1979 「I 地形分類図」『土地分類基本調査 古河（埼玉県内）』 埼玉県 13-17.



17. 試料の状況 (SK-97)
 21. ウマ 左橈骨
 24. ウマ 中手骨
 28. ウマ 左距骨、踵骨
 31. ウマ 右中足骨
 34. ウマ 中足骨
 38. ウマ 中節骨

18. 試料(中手骨・種子骨他)の状況
 22. ウマ 右橈骨+尺骨
 25. ウマ 種子骨他
 29. ウマ右距骨
 32. ウマ 左中心・第3・第4足根骨, 第2・第3中足骨
 35. ウマ 種子骨
 39. ウマ上 腕骨/大腿骨?

19. ウマ 肩甲骨?
 23. ウマ 右橈側・中間・尺側・第3・第4手根骨, 中手骨
 26. ウマ 脛骨?
 30. ウマ 右中心・第3・第4足根骨
 37. ウマ 基節骨
 20. ウマ 上腕骨?
 27. ウマ 左脛骨
 32. ウマ 中足骨
 37. ウマ 基節骨 a: 近位端, b: 遠位端

第418図 出土骨

2 宮東遺跡（第2次調査）のテフラ分析、珪藻・花粉分析

はじめに

宮東遺跡（埼玉県加須市大越畠ヶ田地内）は、加須低地北東部を流れる利根川右岸に分布する自然堤防上に位置する（国土地理院発行2万5千分の1土地条件図「古河」）。この付近の利根川は、江戸時代のいわゆる「利根川東遷事業」により開削された新川通とよばれる水路であり、会の川や浅間川が利根川の旧本流であったとされている（大熊, 1981）。したがって、宮東遺跡の位置する自然堤防は、現在浅間川と呼ばれている旧利根川が形成した自然堤防になる。

加須低地は利根川中流域に広がる沖積低地であるが、関東造盆地運動（すなわち地盤の沈降運動）の中心付近に位置するとされ（堀口, 1974）、沈降した台地が島状台地として自然堤防と同程度の標高で分布しており（江口・村田, 1999）、利根川が複雑な河道変遷をした低地とされている。利根川は、最終氷期極相期（約2万年前）には荒川と熊谷付近で合流し、荒川低地を流れていたと考えられている（貝塚ほか編, 2000）。その後、上述した関東造盆地運動による加須低地の沈降を主な原因として、利根川は加須低地に流入したと考えられているが、その流入の時期については約3,000年前以降（平井, 1983）、約1,500年前（江口・村田, 1999）、8世紀初頭（小暮, 2011）などの見解が示されている。

宮東遺跡の発掘調査では、調査区西側より河川跡とされる凹地が検出されている。この河川跡を埋積する堆積物（以下、河道埋積物）最上部は砂層からなり、砂層上面より検出される遺構等の状況から、砂層の形成年代は9世紀頃と推定されている。また、河道堆積物下部～底部付近からは古墳時代の土器が出土している。これらの発掘調査所見により、河川跡は、古墳時代頃から埋積が進行し、古代には完全に埋積が終了したと考えられている。このような調査区内の環境変遷は、上述し

た利根川本流の加須低地への流入時期とも重なつておらず、その影響や関連性において注目される。

本報告では、古墳時代から古代にかけての時期における、1) 河道埋積物を構成する碎屑物の性状と由来、2) 河道埋積物の堆積（水域）環境変遷、3) 調査区内および周辺の古植生変遷、という3点の検討を目的として、自然科学分析を実施した。

（1）河道埋積物の性状と由来

ア 試料

（ア）河道埋積物の観察所見

試料は、河川跡内に設定されたトレンチ（東トレンチ）および調査区西壁に作製された土層断面より採取した土壤である。なお、土壤試料の採取にあたり、上記した各地点の堆積層の観察を行っていることから、各地点の模式柱状図を図1・2に示した。以下に、河道埋積物の観察所見を記す。

河川跡を埋積する堆積物を概観すると、上述した最上部の砂層より下位は泥（シルト～粘土径）を主体とする細粒堆積物を基質とし、後述する軽石様の碎屑物が混じる砂層の分布および河道埋積物下部の遺物包含層に相当する泥層より下位は泥あるいは砂泥互層からなる。これらの特徴から、河道埋積物は下層、中層および上層に大きく区分できる。

下層は、東トレンチ12層および西壁16, 15層に対応し、遺物包含層より下位の泥層あるいは砂泥互層から、古墳時代の土器や木材などが出土する遺物包含層に相当する泥層および遺物包含層上部の軽石とみられる白色を呈する碎屑物（径1～2mm程度）や細粒砂～中粒砂径の砂分が層状あるいはレンズ状に堆積する泥層までの堆積層に相当する。

遺物包含層より下位は、河川跡横断面中央は灰色泥を基質とし、河川跡際（西壁南側）は灰色泥～砂質泥、極細粒砂が互層をなす。上位の遺物包含層は、暗灰色～灰色泥を基質とし、河川跡際では炭化物が混じる暗灰色泥、灰色泥の偽礫や薄層

が確認される泥層、炭化物混じりの暗灰色泥を基質として、層厚約1.0cm前後の白色の軽石様の碎屑物が混じる砂層が挟在する。軽石様の碎屑物を含む砂は、東トレンチ12層、西壁中央の15層上部にも確認されるが、西壁南側とは堆積状況は異なり、偽礫（ブロック）が側方方向に連続する。また、西壁中央の遺物包含層に相当する泥層は、同南側と比べ色調の変化が不明瞭であり、炭化物の混入や炭化物あるいは植物遺体に由来するとみられる薄層の挟在も少ない。

中層は、東トレンチ11～5層、西壁14～8層に対応し、上記した軽石様の碎屑物が認められる泥層（東トレンチ12層、西壁15層）より上位、後述する砂層を主体とする上層より下位の堆積層に相当する。東トレンチと西壁ともに共通する特徴として、河川跡際の東トレンチ12層・西壁15層上位には灰色泥と暗灰色泥質砂～砂質泥が互層を為す堆積物が確認できる点が挙げられる。一方、河川跡横断面の中央の様相は異なっており、東トレンチは灰色泥と暗灰色泥および炭化物あるいは植物遺体に由来すると考えられる薄層が挟在する堆積物、灰色泥とやや腐植質な暗色化した泥層が累重する。西壁は、灰色泥を基質として部分的に腐植の影響とみられる暗色部も認められるが、色調の変化は東トレンチと比較して不明瞭である。

上層は、東トレンチ4～1層に対応し、ラミナが認められる砂層に相当する。砂層は、最下部が泥～極細粒砂、中～上部が極細粒砂～細粒砂（一部泥層を挟在する）からなり、砂層全体として上方に向かって粗粒化する傾向にある。また、砂層上部（3層上部）には、軽石様の碎屑物が混じる偽礫が認められる。

（イ）分析試料

本項では、河道埋積物の堆積時期に関わる年代指標となりうる軽石質テフラの降下堆積物とみられる砂層（西壁15層；試料番号12（中央），試料番号7（南側））と、上層の軽石様の碎屑物を含む

偽礫（東トレンチ3層；試料番号1）の3点を選択し、テフラの検出・同定に供した。また、屈折率の測定には、これら3点から、測定対象となる軽石または火山ガラスの状態の良い2点を選択している。

重軽鉱物分析については、上記した観察所見を参考として河道埋積物上～下層の各層より採取した試料を対象とした。選択した試料は、上層が東トレンチ3層（試料番号1）、中層が上部試料として東トレンチ5層（試料番号2）、下部試料として西壁（南側）14層（試料番号5）、下層が上部試料として西壁（南側）15層（試料番号6）、下部試料として西壁（南側）16層（試料番号12）の計5点である。

イ 分析方法

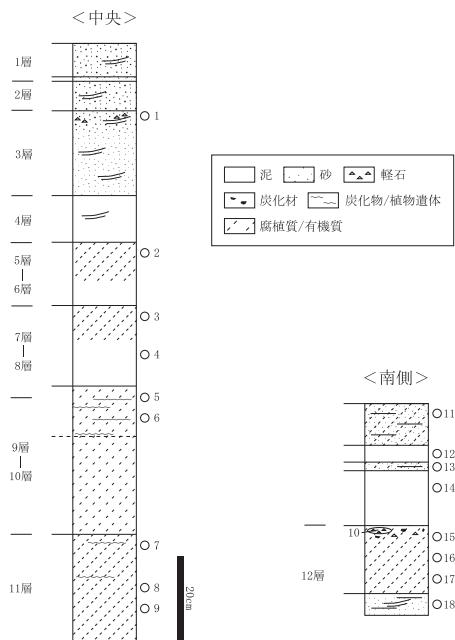
（ア）テフラの検出・同定（屈折率測定含む）

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

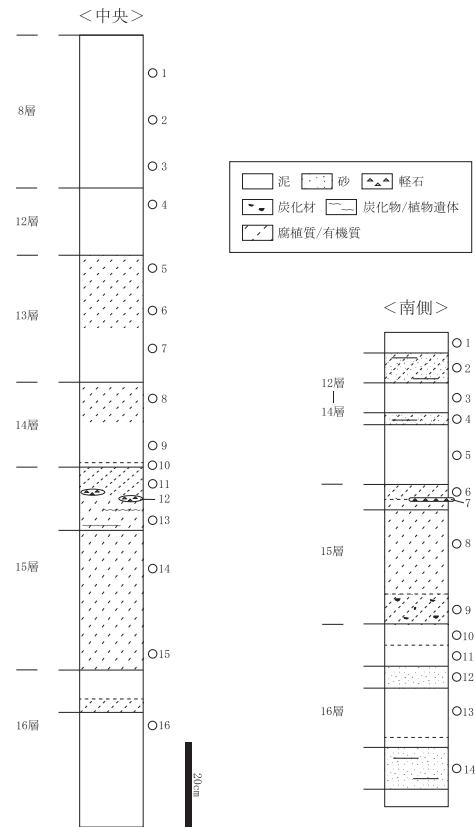
さらに軽石または火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

（イ）重軽鉱物分析

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径



第419図 河川跡東トレンチの模式柱状図および試料採取位置



第420図 河川跡西壁の模式柱状図および試料採取位置

1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタンクステン酸ナトリウム（比重約2.96）により重液分離、重鉱物と軽鉱物をそれぞれ250粒に達するまで偏光顕微鏡下にて同定する。重鉱物の同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とした。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は、「その他」とした。火山ガラスは、便宜上軽鉱物組成に入れ、その形態分類は、上述したテフラの検出同定と同様である。

なお、本分析では、碎屑物の由来を示唆するものとして、碎屑物中に含まれる岩石片の礫種も調べる。手順として、篩別の際に得られた径1/4mmより大きい砂粒（中粒砂以上）については実体顕微鏡観察により礫種の同定を行い、その量比の傾向を定性的に記載する。次に重液分離後の軽鉱物

分について偏光顕微鏡下で観察し、鉱物片と岩石片を区別し、岩石片の中でも礫種の判別されたものについては礫種を記載して計数する。

ウ 結果

(ア) テフラの検出・同定（屈折率測定含む）

結果を第121表に示す。スコリアおよび火山ガラスはいずれの試料においても認められない。軽石は、3試料ともに中量含まれる。

東トレンチ3層（試料番号1）の軽石は、最大径約2.5mm、白色を呈し、発泡度は良好なものとやや良好なものが比較的多く、やや不良なものも混在する。いずれの軽石も角閃石の斑晶を包有するものが認められた。軽石の径は1.0mm前後のものが多く、0.2~0.5mmという細粒の軽石も少量含まれる。軽石以外の碎屑物では、0.5mm以下の岩片、石英片、雲母片などが認められた。

西壁15層（試料番号12（中央）、試料番号7（南

側)) の軽石および砂分の状況は、同様の特徴を呈する。最大径は、約3mm、白色を呈し、発泡度は不良なものとやや不良なものが比較的多く、やや良好なものも混在する。いずれの軽石も角閃石の斑晶を包有するものが認められた。軽石の径は、東トレンチ3層（試料番号1）の軽石よりも全体的に粗粒の傾向を示し、0.2~0.5mmという細粒の軽石は極めて微量しか認められない。軽石以外の碎屑物では、粗粒砂径の新鮮な斜長石の鉱物片が多量に含まれ、新鮮な角閃石の鉱物片も少量あり、また新鮮なデイサイトの岩石片も微量混在する。なお、東トレンチ（南側）12層に認められた軽石からなる偽礫（試料番号10）についても概査により、同様の特徴を呈する軽石と碎屑物の状況を確認した。

屈折率の測定は、東トレンチ3層（試料番号1）の軽石と西壁（南側）15層（試料番号7）の軽石を対象とした。測定結果を図3に示す。東トレンチ3層（試料番号1）の軽石は、n1.502~1.505のレンジを示し、モードは1.503~1.504であり、西壁（南側）15層（試料番号7）の軽石は、n1.501~1.506のレンジを示し、モードは1.502~1.503である。

(1) 重軽鉱物分析

a 中粒砂以上の岩石片の産状

観察結果を第122表に示す。東トレンチ3層（試料番号1）は、上述した結果で述べたように軽石が中量含まれる。それ以外の岩石片は微量であり、安山岩とされる岩石片が認められた。東トレンチ5層（試料番号2）には、微量の岩石片が認められ、礫種が同定されたものではチャートがやや多く、安山岩を伴う傾向が窺えた。

西壁（南側）14層（試料番号5）では極めて微量のデイサイトとされる岩石片が認められたのみである。同15層（試料番号6）では、中量の軽石が含まれる。これは、上述した西壁（南側）15層（試料番号7）の軽石と同様のものである。他に少

量のデイサイトと微量のチャートおよび極めて微量の安山岩と花崗岩の各岩石片が認められた。西壁（南側）16層（試料番号12）にも少量の岩石片が含まれるが、その礫種は、チャート、頁岩、デイサイト、花崗岩の各種が混在する。

b 重軽鉱物組成

結果を第123表、第422図に示す。以下に重鉱物組成と軽鉱物組成に分けて述べる。

(a) 重鉱物組成

5試料は、いずれも斜方輝石、単斜輝石、角閃石の3者を主体とし、少量の不透明鉱物を伴い、微量の緑廉石を含むという組成を示す。ただし、試料によって主体となる3者間の量比関係は異なっている。東トレンチ3層（試料番号1）は、斜方輝石と角閃石がほぼ同量で多く、単斜輝石はこれらに比べてかなり少量であり、同5層（試料番号2）は、斜方輝石が多く、単斜輝石はそれよりやや少ない程度であるが、角閃石は少量である。

西壁（南側）14層（試料番号5）は、斜方輝石が多く、単斜輝石と角閃石はそれに比べて少量であり、両者間では同量程度である。同15層（試料番号6）は、角閃石が多く、斜方輝石はそれよりも少なく、単斜輝石はかなり少量である。同16層（試料番号12）は、斜方輝石が最も多く、単斜輝石と角閃石はそれよりもやや少なく、2者間では同量程度という組成である。

(b) 軽鉱物組成

5試料は、ともに長石が50~70%を占め、次いで石英が10~15%を占める。火山ガラスと岩石片の量比において、試料間の差が若干認められる。火山ガラスでは、東トレンチ3層（試料番号1）に軽石型火山ガラスが微量ながらも特徴的に認められ、西壁（南側）14層（試料番号5）にはバブル型火山ガラスと軽石型火山ガラスが微量含まれることを特徴とする。岩石片では東トレンチの2試料では、堆積岩類の多い傾向が窺えるが、西壁南側の3試料では、火山岩類と堆積岩類がほぼ同

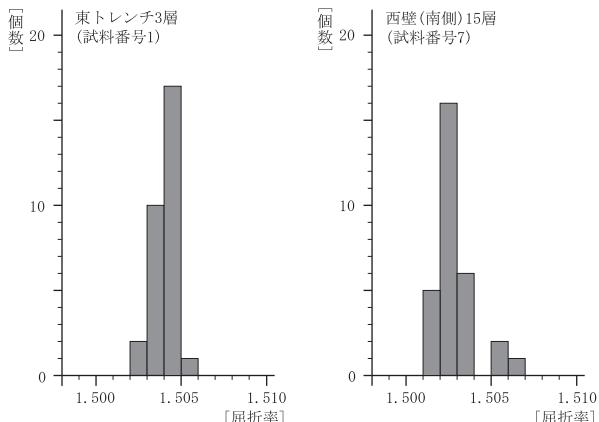
第121表 テフラ分析結果

地点名	層名	試料番号	スコリア	火山ガラス	軽石			備考
			量	量	量	色調・発泡度	最大粒径	
東トレンチ	3層	1	—	—	+++	W·g(ho), W·sg(ho) >W·sb(ho)	2.5	軽石の径は1.0mm前後のものが多く、0.2~0.5mmという細粒の軽石も少量含まれる。0.5mm以下の岩片、石英片、雲母片なども混在。
西壁(南側)	15層	7	—	—	+++	W·b(ho), W·sb(ho) >W·sg(ho)	2.5	軽石の径は上記試料よりも粗粒の傾向があり、0.5mm以下の細粒軽石は極めて微量。粗砂径の新鮮な斜長石片を多量に含み、角閃石片も少量含まれ、新鮮なデイサイト岩片も微量含まれる。
西壁(中央)	15層	12	—	—	+++	W·b(ho), W·sb(ho) >W·sg(ho)	3.0	同上

凡例

—:含まれない。 (+):きわめて微量。 +:微量。 ++:少量。 +++:中量。 ++++:多量。

W:白色。 g:良好。 sg:やや良好。 sb:やや不良。 b:不良。 (ho):角閃石斑晶包有。 最大粒径はmm。



第421図 軽石の屈折率

量程度で主体を占める。

工 考察

(ア) 河道埋積物の堆積年代

河道埋積物の下層、東トレンチ12層および西壁(南側)15層上部に認められた軽石様の碎屑物を含む砂分は、主に軽石と新鮮な斜長石と角閃石の鉱物片およびデイサイトの岩石片から構成される。これらの特徴と層位的に連続するなどの検出状況から、これらの堆積物は若干搅乱を受けながらも降下堆積時の層位を維持しているテフラの降下堆積物であると推定される。また、軽石の色調や発泡度、角閃石の包有、さらに軽石の屈折率から、そのテフラは古墳時代に榛名火山から噴

出したテフラである榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA) または榛名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP) (新井, 1979; 早田, 1989) のいずれかであると考えられる。Hr-FAは火碎流の噴出を主体とする活動であり、分布域は給源から東方に広がり、遠隔地では細粒の火山ガラスを含むことを特徴とする。Hr-FPは軽石噴火を主体とする活動であり、その分布軸は北東方向に向いており、遠隔地においても軽石として認められている (早田, 1989)。今回検出された軽石は、Hr-FAに伴う細粒の火山ガラスがほとんど認められることやその屈折率が町田・新井 (2003) のHr-FPとほぼ一致することから、Hr-FPに由来する可能性がある。ただし、Hr-FAにも今回検出されたような径数mm以下の軽石は多く含まれていることや宮東遺跡の地理的位置などを考慮すると、Hr-FAである可能性を否定することはできない。

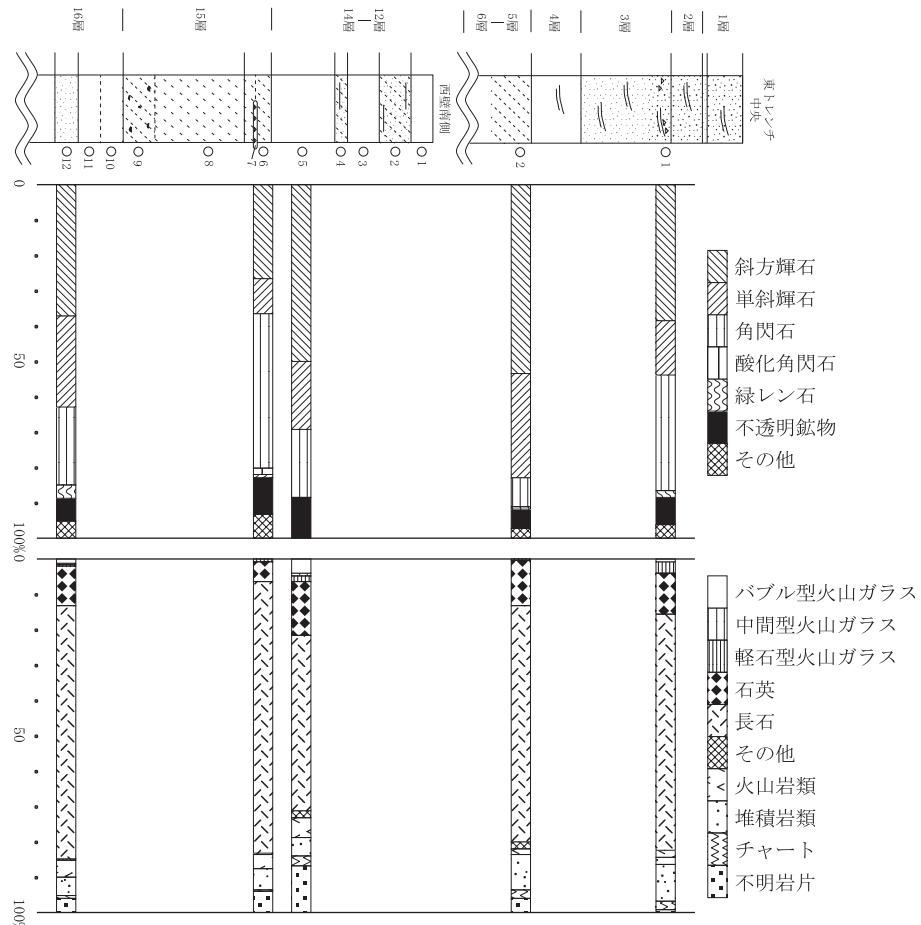
両テフラの噴出年代は、Hr-FAが5世紀末から6世紀表331第1四半期ぐらいまで (坂口, 1993; 中村ほか, 2008)、Hr-FPが6世紀第2四半期頃 (坂口, 1993) にそれぞれ噴出したとされている。したがって、下層上部の堆積年代は6世紀頃であると考えられる。

河道埋積物上層の砂層 (東トレンチ3層; 試料番号1) から検出された軽石は、発泡度の傾向や

第122表 中粒砂以上の岩石片の産状

地点名	層名	試料番号	量比	礫種
東トレーニング	3層	1	+++	軽石>>安山岩
	5層	2	+	チャート>安山岩
西壁(南側)	14層	5	(+)	デイサイト
	15層	6	+++	軽石>デイサイト>チャート>安山岩, 花崗岩
	16層	12	++	チャート, 頁岩, デイサイト, 花崗岩

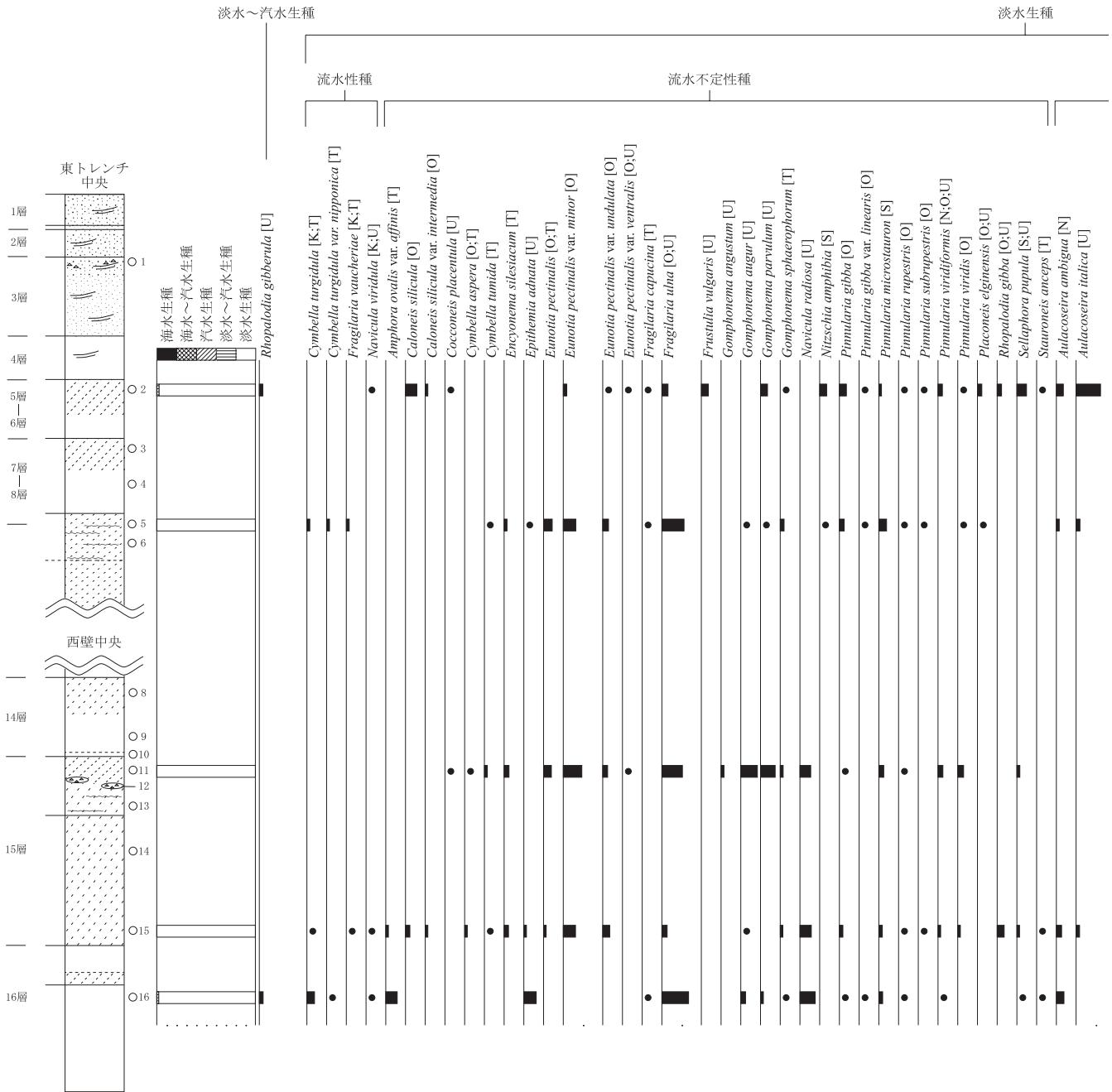
凡例 -:含まれない, (+):きわめて微量, +:微量, ++:少量, +++:中量, ++++:多量.



第422図 重軽鉱物組成

第123表 重軽鉱物分析結果

地点名	層名	試料番号	重鉱物							軽鉱物							合計					
			斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑レン石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石	風化鉱物粒	火山岩類	堆積岩類	変成岩類	不明岩片		
東トレーニング	3層	1	20	8	17	0	1	4	2	52	2	0	8	29	167	5	5	26	6	0	250	
	5層	2	78	43	12	0	1	8	4	146	0	0	1	32	167	5	4	25	6	0	250	
西壁(南側)	14層	5	13	5	5	0	0	3	0	26	10	2	4	38	124	5	14	13	7	0	33	250
	15層	6	59	22	97	4	2	23	15	222	0	0	2	14	192	1	10	15	1	0	15	250
	16層	12	69	48	41	0	7	12	9	186	3	1	1	28	179	1	12	13	2	0	10	250



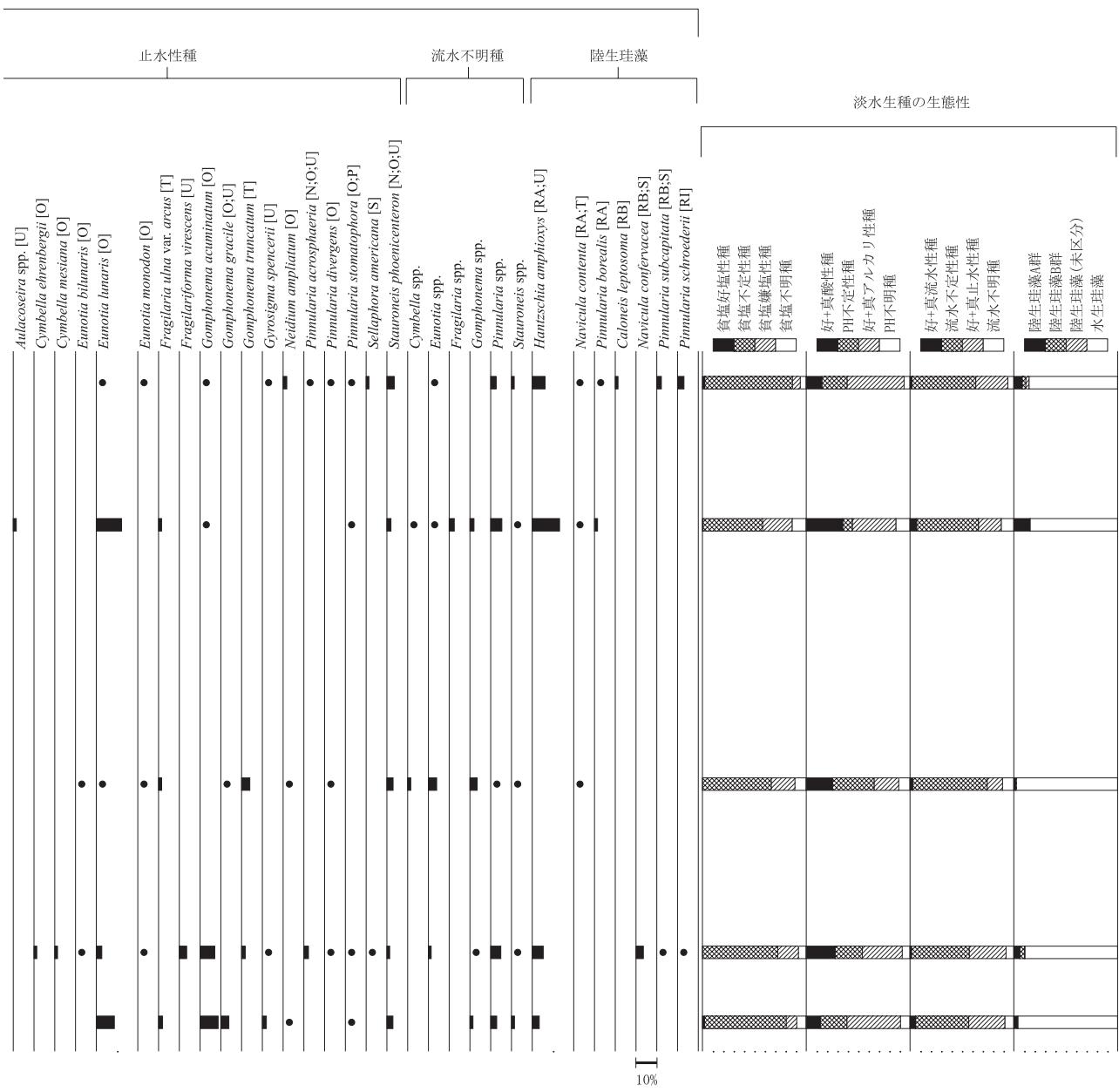
海水～汽水～淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基數、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基數として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。●は1%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

第423図 硅藻化石群集の産状

粒径の傾向が上述した軽石とは若干異なるものの、色調や角閃石の斑晶を包有することおよび屈折率もほぼ重なることから、下層上部の偽礫中の軽石と同様のテフラに由来すると考えられる。ただし、調査断面における産状と、共伴する碎屑物に石英

や黒雲母およびディサイト以外の岩石片などテフラとは異質な鉱物や岩石が含まれることから、Hr-FPあるいはHr-FAとされるテフラ降下堆積物の二次堆積物であると考えられる。

上述した対比結果から、東トレンチ3層（試料



番号1) の軽石は堆積年代を示す指標とはならぬが、宮東遺跡周辺域におけるテフラの産状を考慮すると、以下の年代観を得ることができる。町田・新井（2003）などによる関東地方のテフラの産状によれば、宮東遺跡周辺は、上述した古墳時代の榛名火山のテフラ以降では、平安時代の天仁元年（1, 108年）に浅間火山より噴出した浅間Bテフラ（As-B:新井, 1979）の分布域にある。As-B

は灰褐色で発泡やや不良の軽石を主体とするテフラであり、その軽石は斜方輝石の斑晶鉱物を包有することで、上述した榛名火山のテフラに由来する軽石とは明瞭に区別することができる。上層の東トレント3層（試料番号1）には、As-Bに由来する軽石が全く認められなかったことから、おそらくその堆積は、As-Bの降下堆積より以前すなわち12世紀初頭より以前と推定される。

(イ) 河道埋積物の由来

堆積物中に含有される岩石片の礫種構成からその起源を推定するという分析は、本地域では荒川や利根川の河川の影響を検討した先行研究に用いられている（例えば清水ほか（2010）、小暮（2011）、Kubo（2012）など）。これらの研究では、共通して結晶片岩を主とする変成岩類を荒川起源の堆積物の指標とし、安山岩を主とする火山岩類を利根川起源の堆積物の指標としている。

今回の調査地である宮東遺跡において河川堆積物の由来を考える場合、その地理的位置から、利根川と荒川との関係とともに、利根川と渡良瀬川との関係も主要な要因になっていると言える。これらの河川の影響度を検討する際に、各河川堆積物の指標となる礫種としては、利根川水系については、上述した先行研究でも用いられている火山岩類が適当である。一方の渡良瀬川水系については、その流域に分布する地質の特徴として、足尾山地を構成する堆積岩類が広く分布していることがあげられる。また、利根川水系流域には、堆積岩類の広い分布は認められていない。荒川水系流域では最上流部の関東山地に堆積岩類が広く分布しているが、後述するように今回の河道埋積物には荒川水系の影響はほとんどなかったと考えられることから、堆積岩類の給源は関東山地ではない可能性が高い。したがって、渡良瀬川水系の河川の影響を検討する際には、堆積岩類の含有量が指標になる可能性がある。以上のことから、ここでは各試料における火山岩類の産状と堆積岩類の産状とから河川の影響について検討してみたい。

火山岩類については、西壁（南側）の3試料に中粒砂以上ではデイサイトが認められ、これらの中でも15層（試料番号6）には安山岩も認められた。また、これらの試料の細砂分の軽鉱物組成では、火山岩類とされる岩石片の割合が比較的高い。デイサイトの給源は、至近で言えば榛名火山の噴出物があり、特に15層（試料番号6）のデイサイ

トは、直下の試料番号7が古墳時代の榛名火山のテフラであったことから、そのテフラに由来するものであると考えられる。その下位の16層（試料番号12）中のデイサイトも、榛名火山を構成している噴出物や溶岩に由来するものである可能性がある。したがって、デイサイトも含めた火山岩類を含有する河道理積物の下層～中層（下部）の堆積には、利根川水系の河川作用の影響があつたと考えられる。前述したように、小暮（2011）は、加須低地への利根川本流の流入は8世紀初頭としたが、本流ではないにしろ、それ以前から加須低地には利根川水系の河川の影響はあったのかも知れない。

河道理積物の中層（上部）～上層の試料である東トレンチの2試料には、中粒砂以上ではデイサイトは認められなかったものの安山岩が認められ、細砂径の軽鉱物組成でも火山岩類の含有が認められた。このような産状から、中層（下部）以降も引き続き利根川水系の河川作用の影響があつたことが推定される。

一方、堆積岩類については、細砂径の軽鉱物分も含めれば、今回分析の対象とした5試料には、いずれもチャートを主とする堆積岩類が含有されている。したがって、河道理積物の堆積には、下層から上層まで渡良瀬川水系による河川作用の影響も考えられる。すなわち、利根川水系と渡良瀬川水系の両河川の影響が同時にあつたと考えることができる。その場合、細砂径の軽鉱物組成において、西壁南側の3試料より東トレンチ試料の方が堆積岩類の量比が若干多い傾向が窺えるが、このことは、河道理積物の中層を境として渡良瀬川水系と利根川水系との河川作用の影響度に変化があつたことを示している可能性がある。

なお、今回の分析では、河道理積物中より選択した5試料全点において変成岩類とされる岩石片は、中粒砂以上の砂分においても細砂の軽鉱物分においても全く認められなかった。このことから、

河道の埋積には荒川水系の河川作用の影響はほとんどなかつたことが推定される。

今回の解析にあたっては、各河川水系の後背地質を踏まえ、火山岩類（利根川水系）、堆積岩類（渡良瀬川水系）を指標とし、層位的な各河川の影響度の変化について検討した。今回の分析結果を含め、各河川の影響度についてより確かな評価をするためには、さらに各河川流域の堆積物の分析事例の蓄積、すなわち空間的および時間的な礫種組成の違いの把握が重要である。それによって、局所的な場所の河川堆積物においてそれぞれの河川の影響度を、より定量的に評価することが可能になり、遺跡の立地環境の変化を考える際の重要な資料にもなると考える。

（2）古環境変遷

ア 試料

試料は、河道埋積物のうち、特に砂質の層位（上層）を除いた中層および下層より選択した。分析対象とした試料は、中層が東トレント5層（試料番号2）と8層（試料番号5）、下層が西壁（中央）15層上部（試料番号11）、同15層下部（試料番号15）、同16層（試料番号16）の計5点である。

イ 分析方法

（7）珪藻分析

湿重約3gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、

原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が検出できた後は、示準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努めた。

珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange-Bertalot (2000)、Hustedt (1930-1966)、Krammer & Lange-Bertalot (1985-1991)、Desikachariy (1987)などを参考にした。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類し、表に示した。

他方、試料中の化石全体の保存状態(Preservation)と産出頻度(Abundance)は、以下の記号を用いて示した。保存状態(Preservation)の目安は、G (Good)：良好（殻は溶解（破損）を受けていない）、M (Moderate)：普通（一部に溶解（破損）した個体が認められる）、P (Poor)：不良（殆どの殻が溶解（破損）の形跡が認められる）、VP (Very poor)：極不良（すべての殻が、溶解の痕があり、種の同定が容易でない）、VVP (Very very poor)：極極不良（すべての殻が、殆ど溶解しているため種の同定が困難）である。産出頻度(Abundance)の目安は、A (Abundant)：1mm²中に50個体以上、C (Common)：1mm²中に10個体以上、F (Few)：2mm²中に10個体以上、R (Rare)：2mm²中に1個体以下、VR (Very rare)：4mm²中に1個体程度、VVR (Very very rare)：4mm²中に1個体以下である。

堆積環境の変遷を考察するために珪藻化石が100個体以上検出された試料について珪藻化石群集変遷図を作成した。出現率は化石総数を基数とした百分率で表し、1%以上の出現率を示す分類群についてのみ表示した（図中の●印は、総数が

100個体以上産出した試料うち1%以下の種を、○印は総数100個体未満の場合の産出を示す)。図中には、海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・pH・流水の相対頻度について図示した。

イ 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉(1973)、中村(1980)等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類を-(ハイフン)で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、木本花粉総数が100個体未満の試料は、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるため、出現した種類を+で表示するに留めている。

(3) 結果

ア 珪藻分析

結果を第124・125表、第423図に示す。以下に地点毎に産状を述べる。

(ア) 東トレント

東トレント5層(試料番号2)と8層(試料番号8)の2試料は、いずれも比較的多くの珪藻化石が含まれており、200個体以上が検出された。化石殻の保存状態は、2試料とも半壊した殻が認められるものの、溶解の痕跡は認められないこと

から、状態は普通(良好)~不良である。検出された分類群は、2試料とも淡水生種を主とする組成であり、淡水生種以外は、2試料に淡水~汽水生種が極低率に認められたのみである。検出群集は、珪藻の3適応性(塩分・pH・流水に対する適応性)についてみると、5層(試料番号2)では貧塩-不定性、好アルカリ性、流水不定性種および止水性種が優占し、8層(試料番号5)では貧塩-不定性種、好アルカリ性および好酸性、流水不定性種が優占する。

特徴的に認められた種は、5層(試料番号2)が、流水不定性種の*Caloneis silicula*、*Frustulia vulgaris*、*Nitzschia amphibia*、止水性種の*Aulacoseira ambigua*、*Aulacoseira italica*、*Stauroneis phoenicenteron*、陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*等である。8層(試料番号5)は、流水不定性種の*Eunotia pectinalis*、*Eunotia pectinalis* var. *minor*、*Fragilaria ulna*、止水性種の*Eunotia lunaris*、流水不明種の*Pinnularia* spp.、陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*等である。

(イ) 西壁(中央)

西壁(中央)の15層(試料番号11, 15)、16層(試料番号16)の3試料は、いずれの試料もある程度の量の珪藻化石が含まれており、200個体以上が検出された。認められた個体の保存状態は、半壊した殻は認められるものの、溶解の痕跡は認められないことから、状態としては普通~やや不良である。認められた分類群は、淡水生種を主とする組成であるが、16層(試料番号16)のみ淡水~汽水生種を伴う種群が検出された。

多産または優占した種は、15層上部(試料番号11)が流水不定性種の*Eunotia pectinalis*、*Eunotia pectinalis* var. *minor*、*Fragilaria ulna*、*Gomphonema augur*、*Gomphonema parvulum*、*Navicula radiosa*等である。15層下部(試料番号15)は、流水不定性種の*Eunotia pectinalis*

var. minor、*Navicula radios*a、止水性種の*Fragilaria virescens*、*Gomphonema acuminatum*、流水不明種の*Pinnularia* spp.、陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*等である。さらに16層（試料番号16）は、流水性種の*Cymbella turgidula*、流水不定性種の*Epithemia adnata*、*Fragilaria ulna*、*Navicula radios*a、止水性種の*Eunotia lunaris*、*Gomphonema acuminatum*等である。

イ 花粉分析

結果を第126表、第424図に示す。花粉化石の産出状況は、中層と下層とで異なる。中層にあたる東トレーニング5, 8層（試料番号2, 5）の2試料は、いずれも花粉化石の産出状況が悪く、8層（試料番号5）よりモミ属、イネ科の花粉とサンショウモなどのシダ類胞子がわずかに認められた程度である。また、検出された花粉化石やシダ類胞子は、外膜が破損あるいは溶解するなど保存状態も悪い。分析残渣は、5層（試料番号2）は少ないが、8層（試料番号5）からは微細な炭化植物片（いわゆる微粒炭）が多く認められ、微粒炭の中にはイネ科葉部に由来する微粒炭とされる波状組織を持つものも確認された。

一方、下層にあたる西壁15, 16層（試料番号11, 15, 16）の3試料は、いずれの試料も花粉化石が豊富に産出する。群集組成は、木本花粉とシダ類胞子が多く、草本花粉はやや少ない傾向にある。木本花粉は、多産する種類は類似しており、モミ属、ツガ属、マツ属、クマシデ属—アサダ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ属等が認められる。層位的変化についてみると、上方に向かって、モミ属、ツガ属などが減少し、クマシデ属—アサダ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ属は増加する傾向にある。また、16層からは、第三紀消滅種のフウ属も僅かに産出する。

草本花粉は、イネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節—ウナギツカミ節、ヨモギ属などが多く

産出する。また、ヒシ属をはじめとして、ガマ属、ミクリ属、ミズアオイ属、ハス属、ツリフネソウ属、ガガブタ、アサザ属、ゴキヅル属、サンショウモ、アカウキクサ属等の水生・湿地生植物などに由来する花粉・胞子も検出された。なお、イネ科花粉中には栽培種のイネ属に類する花粉も認められたが、試料番号11が6個、試料番号15が3個、試料番号16が1個と僅かである。

（4）考察

ア 河道埋積物の堆積環境

（7）東トレーニング

a 5層（試料番号2）

本試料において特徴的に認められた種の生態性または生育環境を述べると、まず、流水性種の*Caloneis silicula*は、貧塩-不定、好アルカリ性、流水不定とされ、比較的、広範に認められる種であるが、沼澤湿地において優占して認められることの多い種である。同じく流水不定性種の*Frustulia vulgaris*は、貧塩—不定性、好アルカリ性、流水不定であり、湿地に生育することが多いが、池沼の縁辺など、水域には比較的広範に認められる種である。*Nitzschia ampHibia*は、淡水域でも水の出入りが少なく淀んだ水域に生育していることが多く、Asai & Watanabe (1995) は、好汚濁性種としている。次に止水性種の*Aulacoseira ambigua*は、浮遊性で富栄養の池・湖の沿岸等に多いとされる (Hustedt, 1930)。また、安藤 (1990) によると、湖沼における浮遊生種としても、沼澤湿地における付着性種としても優勢な出現がみられるが、これらの地域以外のところでみられることは希であることから、湖沼、沼澤湿地の環境を指標する可能性が大きいため、湖沼沼澤湿地指標種群とされている。なお、本種は好アルカリ性とされてはいるが、現生の調査の結果、弱酸性水域に特徴的に認められることが少なくない。そのため、基本的に広域適応種であるものの、好酸性の種である可能性がある。

第124表 珪藻分析結果（1）

種類	生態性			環境指標種	東トレンチ		西壁(中央)		
	塩分	pH	流水		5層	8層	15層上部	15層下部	16層
					2	5	11	15	16
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.) W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	1	-	-	-	-
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) Mueller	Ogh-Meh	al-il	ind	≈U	4	-	-	-	4
<i>Achnanthes crenulata</i> Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	1	-	-	-	1
<i>Achnanthes</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	not diagnostic	-	-	-	-	-
<i>Amphora inariensis</i> Krammer	Ogh-unk	unk	unk	not diagnostic	1	-	-	-	-
<i>Amphora ovalis</i> var. <i>affinis</i> (Kuetz.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	3	12
<i>Aulacoseira ambigua</i> (Grun.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N	8	3	-	6	8
<i>Aulacoseira granulata</i> (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U	-	-	-	2	-
<i>Aulacoseira italicica</i> (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	28	4	-	4	-
<i>Aulacoseira italicica</i> var. <i>valida</i> (Grun.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	2	-	-	-	-
<i>Aulacoseira</i> spp.	Ogh-unk	unk	l-ph	≈U	-	3	-	-	-
<i>Caloneis bacillum</i> (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	-	-	-	-
<i>Caloneis leptosoma</i> Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	3	-	-	-	-
<i>Caloneis silicula</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	0	13	-	-	5	-
<i>Caloneis silicula</i> var. <i>intermedia</i> A.Mayer	Ogh-ind	al-il	ind	≈0	3	-	-	3	-
<i>Coccneis placenta</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	2	-	-
<i>Coccneis placenta</i> var. <i>lineata</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	1	-	-
<i>Craticula cuspidata</i> (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	-	-	1
<i>Cymbella aspera</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	0,T	-	-	1	3	-
<i>Cymbella cistula</i> (Ehr.) Kirchner	Ogh-ind	al-il	l-ph	0,T	-	-	-	2	-
<i>Cymbella cymbiformis</i> C.Agardh	Ogh-ind	al-il	l-bi	T	-	-	-	1	-
<i>Cymbella ehrenbergii</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	l-ph	0	-	-	-	3	-
<i>Cymbella mesiana</i> Cholnoky	Ogh-ind	al-bi	l-bi	0	-	-	-	3	-
<i>Cymbella naviculiformis</i> Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	0	-	-	-	1	-
<i>Cymbella tumida</i> (Breb. ex Kuetz.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	1	3	1	-
<i>Cymbella turgidula</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	3	-	1	8
<i>Cymbella turgidula</i> var. <i>nipponica</i> Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	3	-	-	2
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	not diagnostic	-	2	3	-	-
<i>Encyonema silesiacum</i> (Bleisch in Rabenh.) D.G. Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	-	3	5	5	-
<i>Epithemia adnata</i> (Kuetz.) Brebisson	Ogh-ind	al-bi	ind	U	-	2	-	3	13
<i>Epithemia sorex</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-bi	ind	T	-	-	-	1	-
<i>Epithemia turgida</i> (Ehr.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	-	-	2
<i>Epithemia turgida</i> var. <i>westermannii</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1	-	-	-
<i>Eunotia arcus</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	not diagnostic	1	-	-	-	-
<i>Eunotia bilunaris</i> (Ehr.) Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph	0	-	-	2	2	-
<i>Eunotia exigua</i> (Breb.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	P	-	-	2	-	-
<i>Eunotia formica</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-bi	0	-	-	-	2	-
<i>Eunotia gracialis</i> Meister	Ogh-hob	ind	l-bi	0	-	-	1	-	-
<i>Eunotia lunaris</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	0	1	25	1	6	18
<i>Eunotia monodon</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	0	1	-	1	1	-
<i>Eunotia pectinalis</i> (Dillwyn) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	0,T	-	9	8	3	-
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	0	4	13	19	14	-
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>undulata</i> (Ralfs) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	0	1	6	5	8	-
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>ventralis</i> (Ehr.) Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	≈0,U	1	-	2	-	-
<i>Eunotia praerupta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,0,T	-	-	1	1	-
<i>Eunotia sudetica</i> (Muell.) Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph	≈0,U	-	-	-	1	-
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	not diagnostic	1	2	8	3	-	-
<i>Fragilaria capucina</i> Desmazieres	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	1	-	-	1
<i>Fragilaria capucina</i> var. <i>gracilis</i> (Oestr.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	1	-	-	-	-
<i>Fragilaria ulna</i> (Nitzsch.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	≈0,U	7	23	21	6	28
<i>Fragilaria ulna</i> var. <i>arcus</i> (Kuetz.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	3	3	-	4
<i>Fragilaria vaucheriae</i> (Kuetzing) Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	3	-	1	-
<i>Fragilaria virescens</i> var. <i>capitata</i> Oestrup	Ogh-ind	ac-il	l-ph	≈0,U	-	-	-	1	-
<i>Fragilaria</i> spp.	Ogh-unk	unk	not diagnostic	-	5	-	-	-	-
<i>Fragilariforma virescens</i> (Ralfs) Williamson & Round	Ogh-ind	ac-il	l-ph	U	-	-	-	8	-
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwaites) De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	8	-	-	-	-
<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	0	1	2	-	16	18
<i>Gomphonema angustum</i> C.Agardh	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	3	-	-
<i>Gomphonema augur</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	U	-	1	17	1	5
<i>Gomphonema clavatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	1	-	-
<i>Gomphonema clevei</i> Fricke	Ogh-ind	al-bi	r-ph	T	-	-	1	-	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	0,U	-	-	2	-	8
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	8	1	15	-	3
<i>Gomphonema quadripunctatum</i> (Oestr.) Wislouch	Ogh-ind	al-bi	r-ph	K,T	-	-	1	-	-
<i>Gomphonema sphaeophorum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	4	3	3	2
<i>Gomphonema sumatrense</i> Fricke	Ogh-ind	ind	r-bi	J	-	-	2	-	-
<i>Gomphonema truncatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	-	-	8	4	-
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	not diagnostic	-	4	7	2	3	-
<i>Gyrosigma scalpoides</i> (Rabenh.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	≈K,U	-	1	-	-	-
<i>Gyrosigma spencerii</i> (W.Smith) Cleve	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	1	-	-	2	4
<i>Gyrosigma</i> spp.	Ogh-unk	unk	not diagnostic	-	-	-	-	1	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	14	27	-	12	7
<i>Hantzschia amphioxys</i> var. <i>vivax</i> (Hantz.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	-	-	-	1	-
<i>Luticola mutica</i> (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	-	-	1	-	-
<i>Navicula capitatoradiata</i> Germain	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	1	-	-	-	-
<i>Navicula confervacea</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB,S	-	-	-	8	-
<i>Navicula contenta</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	2	1	1	-	-
<i>Navicula contenta</i> fo. <i>biceps</i> (Arn.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	-	-	1	-	-
<i>Navicula elginensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krass.) Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	-	-	-	-
<i>Navicula radiosia</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	11	13	16
<i>Navicula rhynchocephala</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-	-
<i>Navicula viridula</i> (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	1	-	-	1	1
<i>Navicula viridula</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	1	-	-	-
<i>Navicula viridula</i> var. <i>rostrata</i> Skvortzow	Ogh-unk	unk	unk	≈0,U	-	-	-	-	1
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	not diagnostic	-	-	-	-	-	2
<i>Neidium alpinum</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	-	-	-	-	1
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	≈0	4	-	1	-	1

第125表 珪藻分析結果（2）

種類	生態性			環境指標種	東トレンチ		西壁(中央)		
	塩分	pH	流水		5層	8層	15層上部	15層下部	16層
					2	5	11	15	16
<i>Neidium iridis</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	0	-	-	1	-	-
<i>Neidium</i> spp.	Ogh-unk	unk	not diagnostic	-	-	-	1	-	-
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	8	2	-	-	-
<i>Nitzschia brevissima</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB, U	-	-	1	-	-
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogh-unk	unk	not diagnostic	2	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> W. Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	≈N, O, U	2	-	-	5	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	3	-	-	-
<i>Pinnularia borealis</i> var. <i>rectangularis</i> Carlson	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	1	-	-	-
<i>Pinnularia braunii</i> (Grun.) Cleve	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	S	1	-	-	-	-
<i>Pinnularia divergens</i> W. Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph	≈0	1	-	1	2	-
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	0	8	5	1	4	2
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>dissimilis</i> H. Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	ind	≈0	-	1	-	-	-
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	≈0	2	2	-	-	1
<i>Pinnularia legumen</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ind	ind	≈N, O, U	1	-	-	1	-
<i>Pinnularia microstauron</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	3	8	5	4	4
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	0	-	-	-	2	-
<i>Pinnularia obscura</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	-	-	-	-
<i>Pinnularia rupestris</i> Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	≈0	2	1	2	1	1
<i>Pinnularia schroederii</i> (Hust.) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	7	-	-	1	-
<i>Pinnularia stomatophora</i> (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph	≈O, P	1	1	-	1	1
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB, S	5	-	-	1	-
<i>Pinnularia subrupicola</i> Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind	≈0	1	1	-	1	-
<i>Pinnularia viridiformis</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	≈N, O, U	5	-	5	3	1
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	0	2	2	6	3	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	not diagnostic	6	11	1	11	6	-
<i>Placoneis elginensis</i> (Greg.) Cox	Ogh-ind	al-il	ind	O, U	5	1	-	-	-
<i>Planothidium lanceolatum</i> (Breb. ex Kuetz.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	r-ph	K, T	-	1	-	-	-
<i>Rhopalodia gibba</i> (Ehr.) Mueller	Ogh-ind	al-il	ind	O, U	5	-	-	8	-
<i>Rhopalodia quisumburgiana</i> Skvortzow	Ogh-hil	al-il	ind	O, U	-	1	-	-	-
<i>Sellaphora americana</i> (Ehr.) D. G. Mann	Ogh-ind	al-il	l-ph	≈S	3	-	-	2	-
<i>Sellaphora bacillum</i> (Ehr.) D. G. Mann	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	2	-	-
<i>Sellaphora laevissima</i> (Kuetz.) D. G. Mann	Ogh-ind	ind	ind	≈U	1	-	-	-	1
<i>Sellaphora pupula</i> (Kuetz.) Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S, U	11	-	3	3	1
<i>Sellaphora</i> spp.	Ogh-unk	unk	not diagnostic	-	-	-	-	1	-
<i>Stauroneis acuta</i> W. Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	≈0	1	-	-	-	1
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	1	-	-	2	1
<i>Stauroneis nobilis</i> Schumann	Ogh-hob	ac-il	ind	not diagnostic	-	-	-	-	1
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	≈N, O, U	8	4	6	3	6
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> var. <i>signata</i> Meister	Ogh-ind	ind	ind	0	-	1	1	-	-
<i>Stauroneis smithii</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	1	-	-	-
<i>Stauroneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	not diagnostic	3	1	2	1	3	-
<i>Tabellaria fenestrata</i> (Lyngb.) Kuetzing	Ogh-ind	ac-il	l-bi	0, T	1	-	-	-	-
Marine water					0	0	0	0	0
Marine-Brackish water					0	0	0	0	0
Brackish water					0	0	0	0	0
Fresh-Brackish water					5	0	0	0	4
Fresh water					225	215	224	256	235
合計					230	215	224	256	239
産出率					C	F	F	C	F
保存状態					M	P	P	M	P

凡例
[適応性]

Salinity: 塩分濃度に対する適応性
 Euh: 海水生種
 Euh-Meh: 海水生種・汽水生種
 Meh: 汽水生種
 Ogh-Meh: 淡水生種・汽水生種
 Ogh-hil: 貧塩好塩性種
 Ogh-ind: 貧塩不定性種
 Ogh-hob: 貧塩嫌塩性種
 Ogh-unk: 貧塩不明種

pH: 水素イオン濃度に対する適応性
 al-bi : 真アルカリ性種
 al-il : 好アルカリ性種
 ind : pH不定性種
 ac-il : 好酸性種
 ac-bi : 真酸性種
 unk : pH不明種

Current. : 流水に対する適応性
 l-bi : 真止水性種
 l-ph : 好止水性種
 ind : 流水不定性種
 r-ph : 好流水性種
 r-bi : 真流水性種
 unk : 流水不明種

[環境指標種]

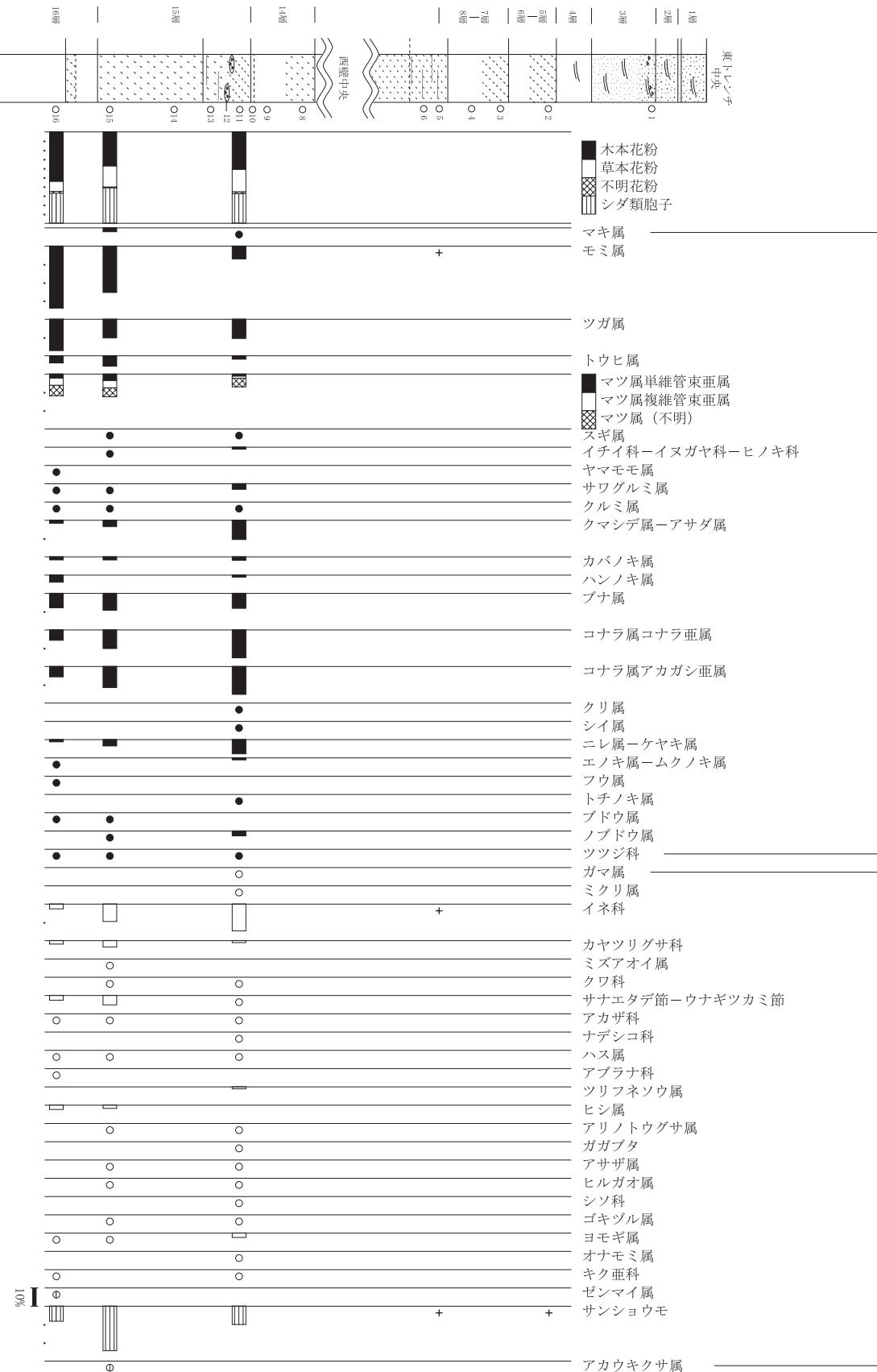
A: 外洋指標種. B: 内湾指標種. C1: 海水藻場指標種. C2: 汽水藻場指標種.
 D1: 海水砂質干潟指標種. D2: 汽水砂質干潟指標種.
 E1: 海水泥質干潟指標種. E2: 汽水泥質干潟指標種. F: 淡水底生種群(以上は小杉, 1988)
 G: 淡水浮遊生種群. H: 河口浮遊性種群. J: 上流性河川指標種. K: 中~下流性河川指標種.
 L: 最下流性河川指標種群. M: 湖沼浮遊性種. N: 湖沼沼澤湿地指標種. O: 沼澤湿地付着生種.
 P: 高層湿原指標種群. Q: 陸域指標種群(以上は安藤, 1990)
 S: 好汚濁性種. U: 広適応性種. T: 好清水性種(以上はAsai & Watanabe, 1995)
 R: 陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)

[産状]

産出率 A:多い. C:普通. F:少ない. R:稀. VR:極稀. VVR:極々稀
 保存状態 G:良好. M:普通. P:不良. VP:著しく不良. VVP:極めて不良

木本花粉

草本花粉・シダ類胞子



木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で表した。○●は1%未満を示す。+は木本花粉100個未満の資料において検出された種類を示す。

第424図 花粉化石群集の産状

第126表 花粉分析結果

種類	東トレンチ		西壁(中央)		
	5層	8層	15層 上部	15層 下部	16層
	2	5	11	15	16
木本花粉					
マキ属	-	-	2	5	-
モミ属	-	1	18	57	77
ツガ属	-	-	27	23	39
トウヒ属	-	-	5	13	9
マツ属単維管束亜属	-	-	3	8	5
マツ属複維管束亜属	-	-	3	9	9
マツ属(不明)	-	-	12	11	13
スギ属	-	-	2	1	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	3	1	-
ヤマモモ属	-	-	-	-	1
サワグルミ属	-	-	8	1	1
クルミ属	-	-	1	1	2
クマシデ属-アサダ属	-	-	27	8	4
カバノキ属	-	-	5	4	4
ハンノキ属	-	-	3	-	9
ブナ属	-	-	21	21	18
コナラ属コナラ亜属	-	-	39	23	13
コナラ属アカガシ亜属	-	-	39	26	13
クリ属	-	-	2	-	-
シイ属	-	-	2	-	-
ニレ属-ケヤキ属	-	-	20	8	3
エノキ属-ムクノキ属	-	-	3	-	1
フウ属	-	-	-	-	1
トチノキ属	-	-	1	-	-
ブドウ属	-	-	-	1	2
ノブドウ属	-	-	7	2	-
ツツジ科	-	-	1	1	2
草本花粉					
ガマ属	-	-	4	-	-
ミクリ属	-	-	2	-	-
イネ科イネ属	-	-	6	3	1
イネ科	-	2	83	54	10
カヤツリグサ科	-	-	7	21	8
ミズアオイ属	-	-	-	1	-
クワ科	-	-	5	1	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	-	-	2	31	11
アカザ科	-	-	3	2	1
ナデシコ科	-	-	1	-	-
ハス属	-	-	2	5	1
アブラナ科	-	-	-	-	1
ツリフネソウ属	-	-	7	-	-
ヒシ属	-	-	-	11	10
アリノトウガサ属	-	-	3	1	-
ガガブタ	-	-	1	-	-
アサザ属	-	-	1	1	-
ヒルガオ属	-	-	2	1	-
シソ科	-	-	1	-	-
ゴキヅル属	-	-	5	1	-
ヨモギ属	-	-	15	5	1
オナモミ属	-	-	1	-	-
キク亜科	-	-	1	-	2
不明花粉					
不明花粉	-	-	13	6	8
シダ類胞子					
ゼンマイ属	-	-	-	-	2
サンショウモ	1	3	61	145	34
アカウキクサ属	-	-	-	4	-
他のシダ類胞子	2	2	138	82	101
合計					
木本花粉	0	1	254	224	226
草本花粉	0	2	152	138	46
不明花粉	0	0	13	6	8
シダ類胞子	3	5	199	231	137
合計(不明を除く)	3	8	605	593	409

*Aulacoseira italica*は、広域分布種であり、適度に富栄養な池沼や河川等の止水域に生育するとされる(Krammer and Lange-Bertalot, 1991)が、通常はある程度の水深がある水域に多産する傾向にある。*Stauroneis pHOenicenteron*は、比較的、広範に止水域に認められる種であるが、Cholnoky (1968)は最適pHを6.8に持つ種類であるとしている。本種も湿地や池沼・湖沼の縁辺等の止水域に生育する種である。

以上の特徴種の産状と他の希産種群の構成から、本試料の堆積時は、おおむね湿地の環境下にあつたものと推定される。

b 8層(試料番号5)

本試料において特徴的に認められた種の生態性または生育環境(前述していない種)を述べると、まず、流水不定性種の*Eunotia pectinalis*および*Eunotia pectinalis* var. minorは、普通の水域にも認められるが湿地に多産する種とされる(埼玉県教育委員会, 1962)。同じく流水不定性種の*Fragilaria ulna*は、貧塩不定性、好アルカリ性および流水不定であり、広域領布種の一種で広範のさまざまな水域から見出される。次に止水性種の*Eunotia lunaris*は、貧塩嫌塩性、好酸性、好止水性とされ、通常は湿地や湿原に特徴的に生育している種である。さらに陸生の*Hantzschia amphioxys*は、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壤の表層部など大気に接触した環境に生活する一群(小杉, 1986)である。特に、本種は、離水した場所の中で乾燥に耐えうることのできる群集とされる(伊藤・堀内, 1989; 1991)。また、堆積物の分析を行った際、これらの種群が優占する(70~80%以上)結果が得られれば、その試料が堆積した場所は、水域以外の空気に曝されて乾いた環境であったことが推定できるとしている。

以上の特徴種の産状と他の希産種群の構成から、本試料の堆積時は湿地から沼澤湿地の環境下に

あつたものと推定される。ただし、上位の試料番号2の環境に比較すると、やや乾燥していた傾向が窺える。

(イ) 西壁（中央）

a 15層上部（試料番号11）

本試料において特徴的に認められた種の生態性または生育環境（前述していない種）を述べると、まず、流水不定性種の*Gomphonema augur*は、塩分・pH・流水に対しては不定であり、比較的、適応能力が高いことから、広範に認められるが、通常は沼沢湿地に多産する傾向にある種である。次に*Gomphonema parvulum*は、流水に対して不定なだけでなく、塩分濃度やpHに対しても不定であり、極めて高い適応能力を持つ種であり、さまざまな水域に認められる。そのため、Asai and Watanabe (1995) は、広域適応種としている。ただし、経験的には、流水域に多産することが多いことから、以前は流水性種に含められていた種である。*Navicula radiosala*は、さまざまな環境に生育することから広域適応種とされるが、経験的には沼沢湿地に優占種と認められることが多い。

以上の特徴種の産状と他の希産種群の構成から、本試料の堆積時は概ね沼沢湿地の環境下にあつたものと推定される。

b 15層下部（試料番号15）

本試料において特徴的に認められた種の生態性または生育環境（前述していない種）を述べると、止水性種の*Gomphonema acuminatum*は、貧塩不定、pH不定の止水性種であり、安藤（1990）によれば水深が1m内外で、一面に植物が繁殖しているところ、および湿地に認められることが多いことから、沼沢湿地付着性種とされている。

以上の特徴種の産状と他の希産種群の構成から、本試料の堆積時は、湿地から沼沢湿地の環境下にあつたものと推定される。

c 16層（試料番号16）

本試料において特徴的に認められた種の生態性

または生育環境（前述していない種）を述べると、流水性種の*Cymbella turgidula*は、河川沿いの河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形がみられる部分に集中して出現するとされ、中・下流性河川指標種群（安藤、1990）と呼ばれる。次に流水不定性種の*Epithemia adnata*は、貧塩不定、真アルカリ性、流水不定であり、生育場所としては池沼の縁辺、沼沢地から湿地にわたり比較的広域に認められる種である。

以上の特徴種の産状と他の希産種群の構成から、本試料の堆積時は概ね湿地の環境下にあつたものと思われるが、河川性の種が認められたことから、一時的に河川水の影響があった可能性が示唆される。

(ウ) 河道埋積物（試料）の堆積環境変遷

上述した各層の珪藻化石群集の特徴から、河道埋積物の下層から中層までの堆積は、ほぼ湿地の環境下で進行したことが推定される。すなわち、その時期にはすでに河道としては機能しておらず、下層および中層は河川氾濫時に後背湿地に供給された細粒堆積物が凹地に流れ込むことにより形成されてと考えられる。なお、遺物包含層より下位に相当する16層では、若干の河川水の流れ込みもあつたと考えられるが、中層の堆積する頃には、より乾燥化が進んだことが窺える。

イ 古植生

河道埋積物下層に相当する遺物包含層を含む15層とその下位の16層は花粉が豊富に産出し、とくに草本類ではガマ属、ミクリ属、ミズアオイ属、ハス属、ツリフネソウ属、ヒシ属、ガガブタ、アサザ属、ゴキヅル属、サンショウモ、アカウキクサ属などの多くの水湿地生種の産出により特徴付けられた。水湿地生種の多くは浅い水湿地や水面に浮遊する種類であるが、比較的水深のある場所に生育するハス属やヒシ属、河畔などを含む水辺に生育するツリフネソウ属やゴキヅル属も含む。さらに、比較的多く産出したイネ科、カヤツリグ

サ科には水湿地に生育する種類が含まれる。上述の珪藻分析結果では湿地の環境下にあったことが推定されており、上記した分類群は河川跡（凹地）内や周囲の湿地の植生を反映すると考えられる。なお、サナエタデ節—ウナギツカミ節、アカザ科、ヨモギ属などの比較的開けた明るい場所を好む人里植物を含む分類群は河川跡周縁の草地に生育したものに由来すると思われる。

木本類では、モミ属、ツガ属、マツ属等の針葉樹、クマシデ属—アサダ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属—ケヤキ属等の落葉広葉樹、常緑広葉樹であるコナラ属アカガシ亜属が多く産出した。モミ属、ツガ属などは周辺の山地部に生育していたと推定され、特にトウヒ属、マツ属単維管束亜属、ブナ属などは比較的標高のある山地部の森林植生に由来すると考えられる。また、山地下部や低丘陵地、比較的安定した微高地にはコナラ亜属やアカガシ亜属などからなる林分が分布しており、渓谷沿いや河畔などにはハンノキ属、ニレ属—ケヤキ属をはじめとして、サワグルミ属、クルミ属、クマシデ属—アサダ属、エノキ属—ムクノキ属、トチノキ属などが林分を形成していたと考えられ、ブドウ属、ノブドウ属、ツツジ科はこれらの林分の林縁に生育したと考えられる。本遺跡より北に分布する茂林寺沼を含む池沼群（群馬県館林市）の堆積物を対象とした調査成果によれば、おそらくとも約2,300年前～12世紀末は、コ

ナラ亜属やクマシデ属—アサダ属などの落葉広葉樹とアカガシ亜属が卓越する時期であったとされている（辻ほか、1986）。今回の分析結果で比較的産出が多く認められたクマシデ属—アサダ属、コナラ亜属、アカガシ亜属などは、上記した館林地域を含む周辺域の森林植生を反映していると考えられる。

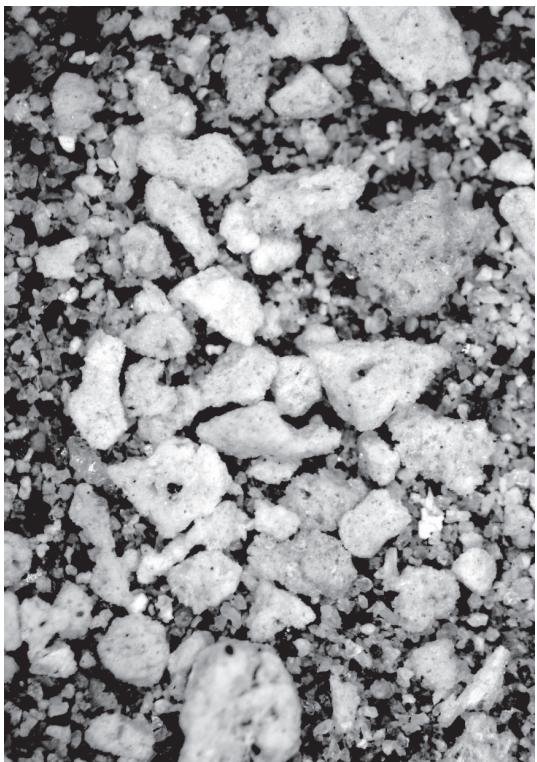
なお、河道埋積物下層試料では、上位に向かってモミ属、ツガ属が減少し、クマシデ属—アサダ属、コナラ亜属、アカガシ亜属が増加するという傾向が認められた。珪藻分析結果では、16～15層はいずれも湿地環境であったことが推定されているが、16層について若干の河川水の影響も想定されている。また、16層では再堆積したとみられる第三紀消滅種のフウ属が検出されているため、上記した木本花粉の多寡は堆積環境の変化による可能性がある。

一方の中層に相当する東トレント試料からは、花粉化石やシダ類胞子がほとんど検出されなかつた。花粉やシダ類胞子は、堆積後に好気的環境に曝されると、酸化や微生物により分解される。中層試料を対象とした珪藻分析では、8層（試料番号5）などで陸生珪藻の産出状況からやや乾燥していた状況も示唆されている。検出された花粉化石の保存状態を考慮すると、堆積物中に取り込まれた後の経年変化の影響により分解・消失した可能性がある。

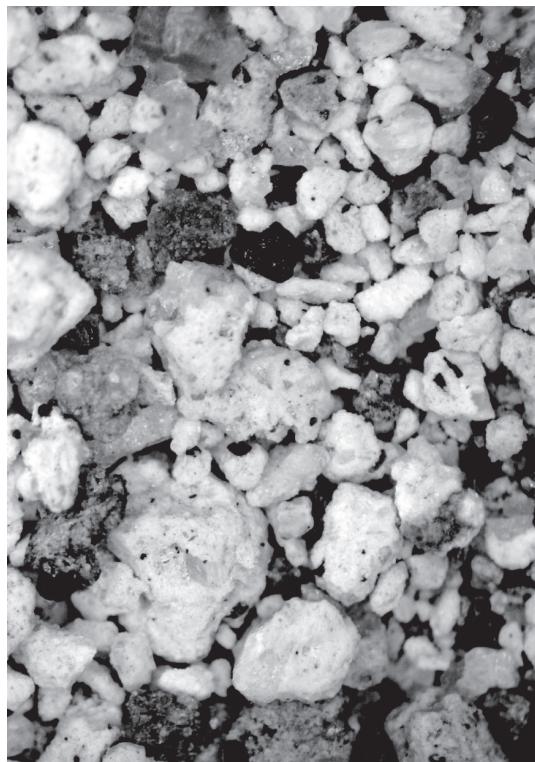
引用文献

- 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42 73-88.
- 新井房夫 1979 「関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層」『考古学ジャーナル』157 41-52.
- 江口誠一・村田泰輔 1999 「関東平野中央部加須低地における完新世の環境変遷史」『地理学評論』72 253-266.
- 伊藤良永・堀内誠示 1989 「古環境解析からみた陸生珪藻の検討—陸生珪藻の細分ー」「日本珪藻学会第10回大会講演要旨集」 17.
- 伊藤良永・堀内誠示 1991 「陸生珪藻の現在における分布と古環境解析への応用」『日本珪藻学誌』6 23-44.
- 大熊 孝 1981 「近世初頭の河川改修と浅間山噴火の影響」『アーバンクボタ』19 18-31.
- 貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦編 2000 『日本の地形4 関東・伊豆小笠原』東京大学出版会 349p.

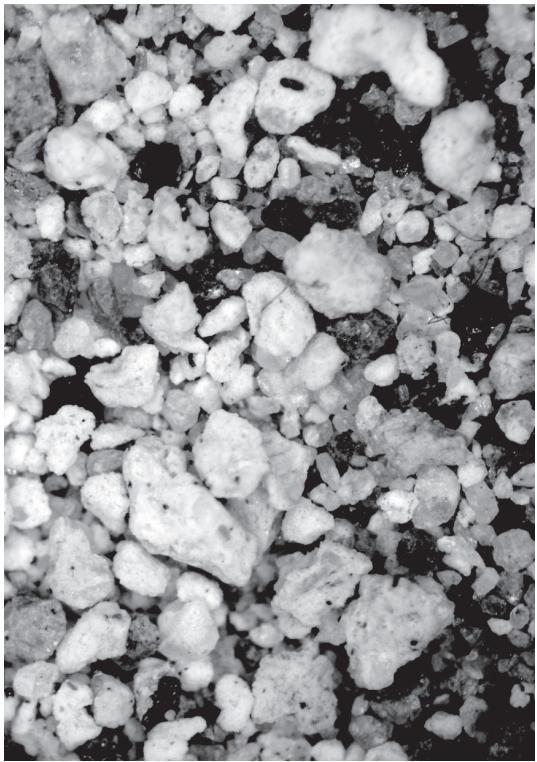
- 小暮岳実 2011 「荒川低地へ向かった後期完新世の利根川旧流路-妻沼低地における旧流路の復元-」『地学雑誌』120 585-598.
- 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27 1-20.
- 埼玉県教育委員会 1962 『埼玉県植物誌』埼玉県教育科学振興会 289-313.
- 坂口 一 1993 「火山噴火の年代と季節の推定法」新井房夫編『火山灰考古学』古今書院 151-172.
- 島倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集 60p.
- 清水康守・駒井 潔・小林健助・小川政之・堀口萬吉・金子直行・加藤智江 2010 『荒川低地北部の地形発達-利根川の流路変遷を中心として-』埼玉県立自然の博物館研究報告4 55-70.
- 辻誠一郎・南木睦彦・小杉正人 1986 「文化財総合調査 茂林寺沼及び低地湿原調査報告書第2集」『館林の池沼群と環境の変遷史』館林市教育委員会 110p.
- 中村 純 1980 「日本産花粉の標微 I II (図版)」『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録』第12・13集 91p.
- 中村賢太郎・早川由紀夫・藤根 久・伊藤 茂・廣田正史・小林紘一 2008 「ウィグルマッチング法による榛名渋川噴火の年代決定(再検討)」『日本第四紀学会講演要旨集』38 18-19.
- 早田 勉 1989 「六世紀における榛名火山の二回の噴火とその災害」『第四紀研究』27 297-312.
- 平井幸弘 1983 「関東平野中央部における沖積低地の地形発達」『地理学評論』56, 679-694.
- 古澤 明 1995 「火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別」『地質学雑誌』101 123-133.
- 堀口萬吉 1974 「関東平野西部の地形区分と段丘面の変動」垣見俊弘・鈴木尉元編『関東地方の地震と地殻変動』119-127, ラティス.
- 町田 洋・新井房夫 2003 『新編 火山灰アトラス』東京大学出版会 336p.
- 吉川俊一 2006 「京都市、沢ノ池の堆積物中の珪藻類について」『日本珪藻学会誌』Vol. 23 91-104.
- Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.
- Desikachariy, T. V., 1987, *Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean*. Madras science foundation, Madras, Printed at TT. Maps & Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. 1-13, Plates:401-621.
- Horst Lange-Bertalot., 2000, *ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA:Annotated diatom micrographs*. Witkowski, A., Horst Lange-Bertalot, Dittmer Metzeltin:Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1. 219 plts. 450 4figs, 925 pgs.
- Hustedt, F., 1930, *Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Bericksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz*, 7, Leipzig, Part 1, 920p.
- Hustedt, F., 1937-1938, *Systematische und okologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III. Arch. Hydrobiol. Suppl.*, 15, 131-809, 1-155, 274-349.
- Hustedt, F., 1959, *Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Bericksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz*, 7, Leipzig, Part 2, 845p.
- Hustedt, F., 1961-1966, *Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Bericksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz*, 7, Leipzig, Part 3, 816p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, *Naviculaceae. Bibliotheca Diatomologica*, vol. 9, p. 250.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, *Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa*, 2(1):876p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, *Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa*, 2(2):596p.



1. 椿名火山の軽石(東トレンチ3層;1)



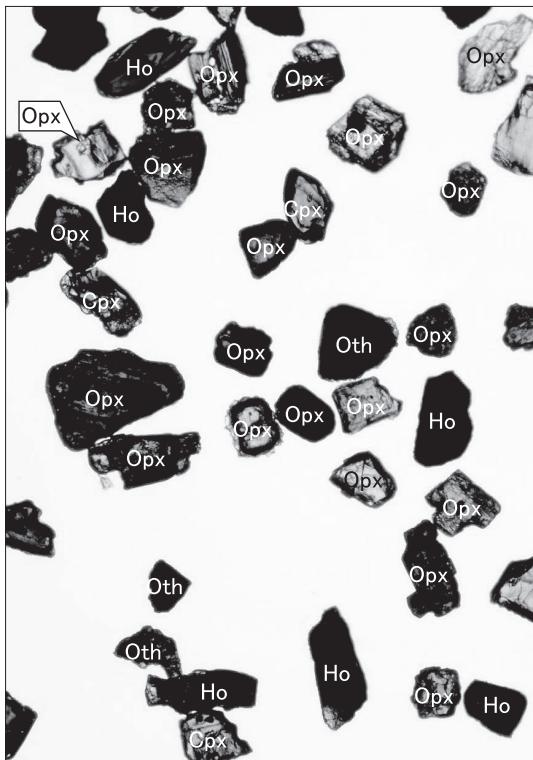
2. 椿名火山の軽石(西壁(南側)15層;7)



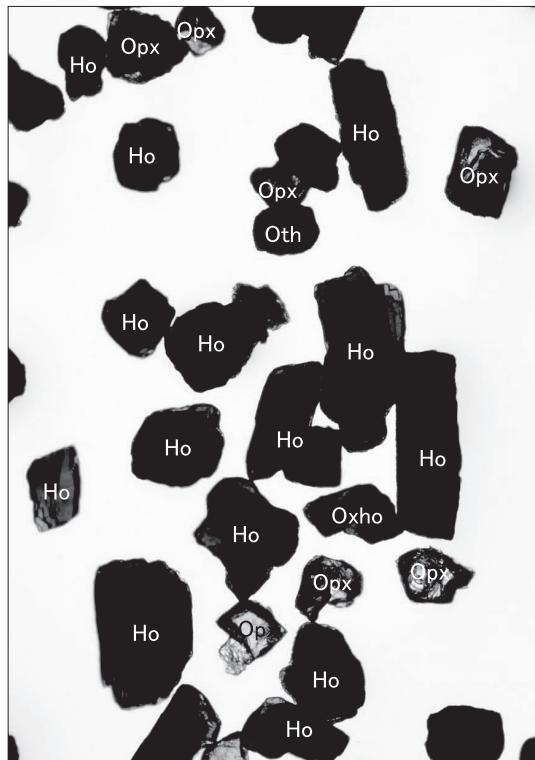
3. 椿名火山の軽石(西壁中央;12)

2.0mm

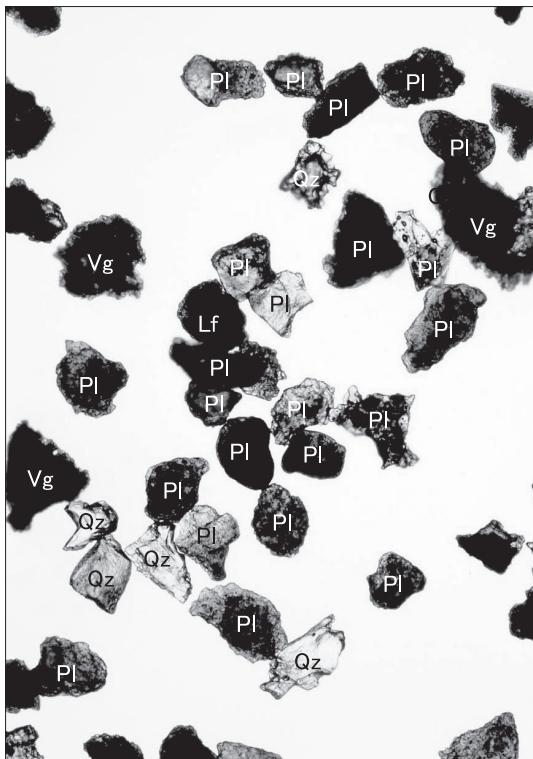
第425図 テフラ



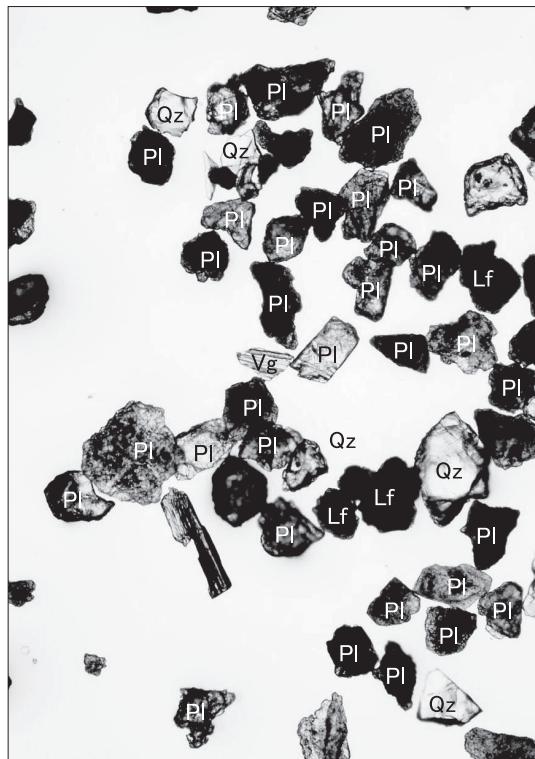
1. 重鉱物(東トレンチ5層;2)



2. 重鉱物(西壁(南側)15層;6)



3. 軽鉱物(東トレンチ3層;1)

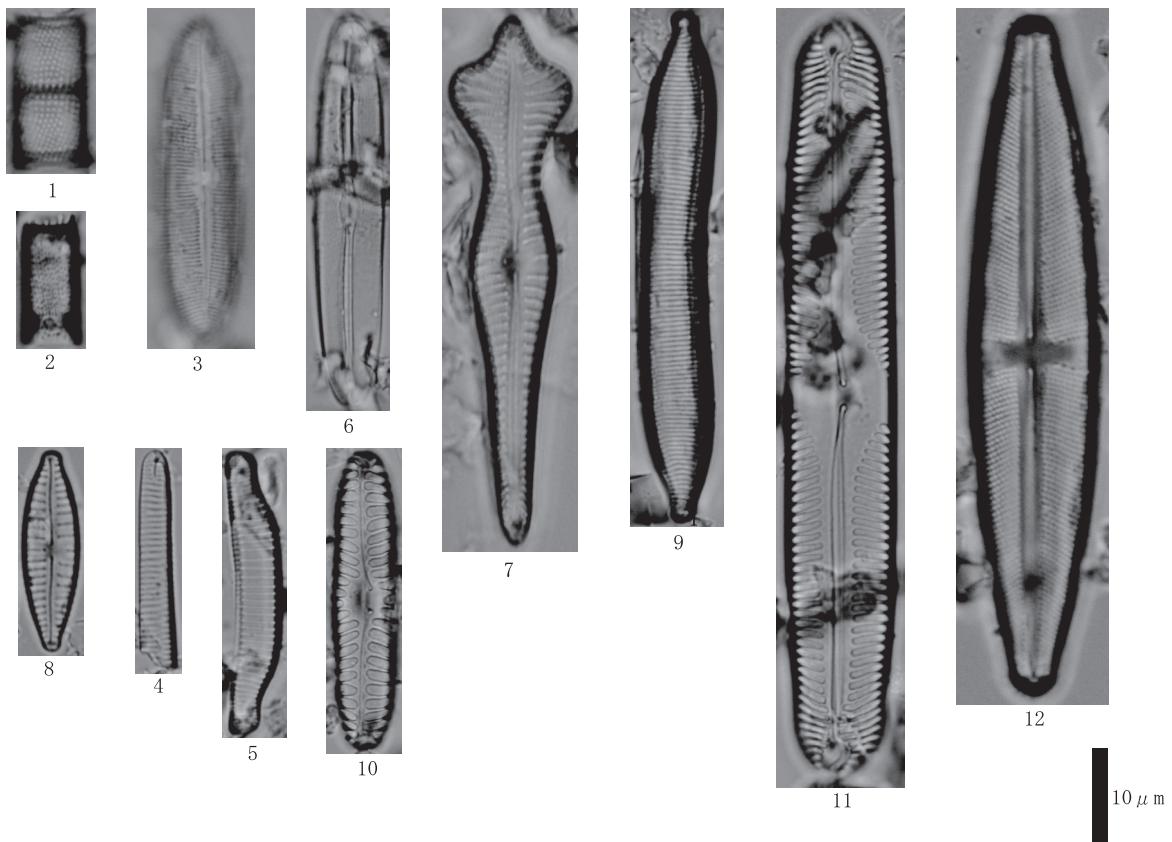


4. 軽鉱物(西壁(南側)14層;5)

0.5mm

Opx:斜方輝石, Cpx:単斜輝石, Ho:角閃石, Oxho:酸化角閃石, Oth:その他.
Vg:火山ガラス, Qz:石英, Pl:斜長石, Lf:岩片.

第426図 重鉱物・軽鉱物



1. *Aulacoseira ambigua* (Grun.) Simonsen (西壁(中央) 15層; 15)
2. *Aulacoseira italicica* (Ehr.) Simonsen (東トレンチ 5層; 2)
3. *Caloneis silicula* (Ehr.) Cleve (東トレンチ 5層; 2)
4. *Eunotia lunaris* (Ehr.) Grunow (東トレンチ 8層; 5)
5. *unotia pectinalis* (Dillwyn) Rabenhorst (東トレンチ 5層; 2)
6. *Frustulia vulgaris* (Thwaites) De Toni (東トレンチ 5層; 2)
7. *Gomphonema acuminatum* Ehrenberg (西壁(中央) 15層; 15)
8. *Gomphonema parvulum* (Kuetz.) Kuetzing (東トレンチ 5層; 2)
9. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (東トレンチ 5層; 2)
10. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (東トレンチ 8層; 5)
11. *Pinnularia gibba* Ehrenberg (東トレンチ 5層; 2)
12. *Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg (東トレンチ 5層; 2)

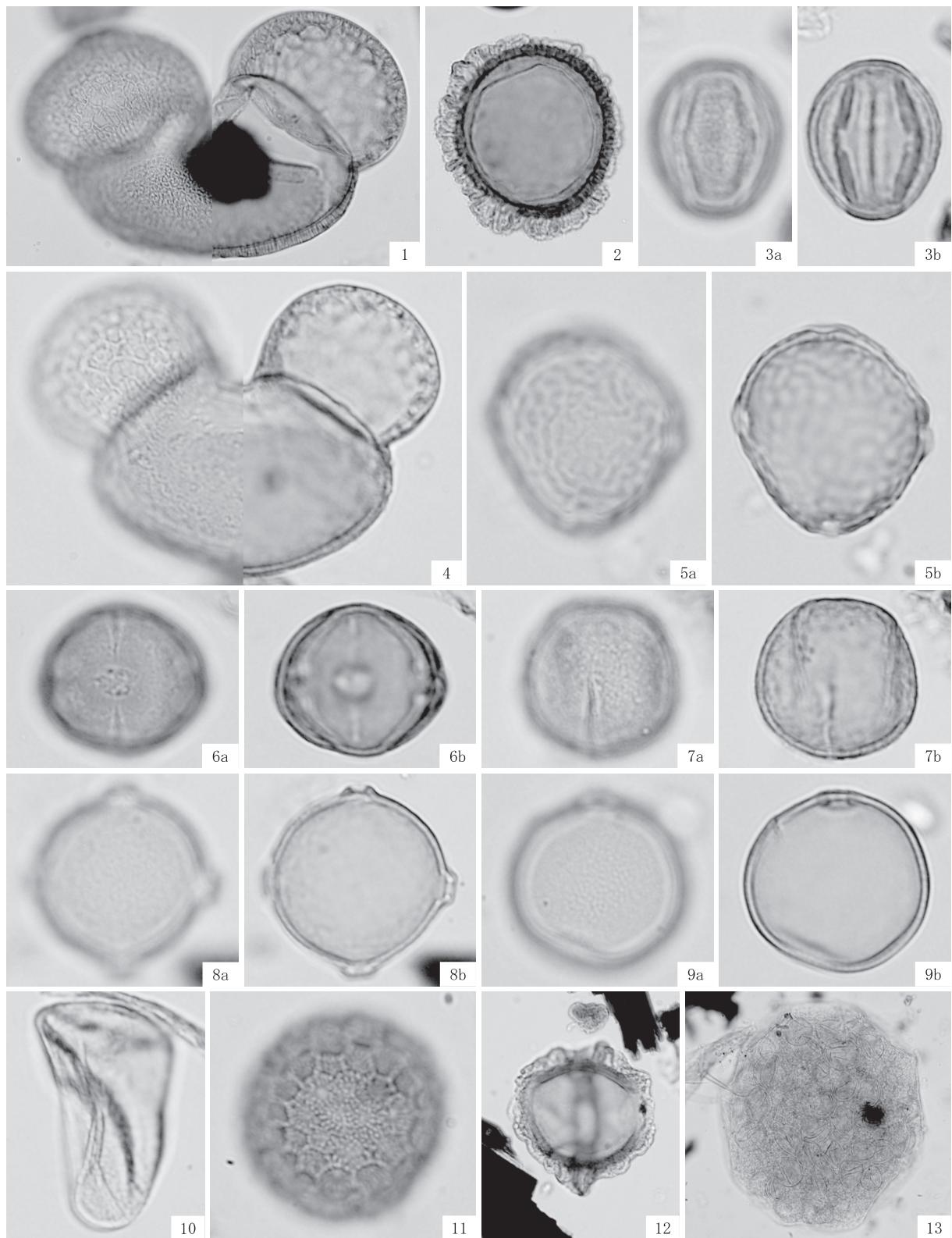
第427図 珪藻化石

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa. 2(3):576p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa, 2(4):437p.

KUBO Sumiko, 2012, Shifting of The Arakawa River in the Kanto Plain, Central Japan, during the Late Holocene: A Geomorphological Approach. Geographiccal Review of Japan Series B, 84, 71–80.

Lowe, R. L., 1974, Environmental requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. In Environmental Monitoring Ser. EPA-670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center office of Res. Develop. U.S. Environ. Protect. Agency. Cincinnati. 1-344.



1. モミ属(西壁(中央)16層;16)
 3. コナラ属アカガシ亜属(西壁(中央)16層;16)
 5. ニレ属一ケヤキ属(西壁(中央)16層;16)
 7. コナラ属コナラ亜属(西壁(中央)16層;16)
 9. イネ科(西壁(中央)16層;16)
 11. サナエタデ節ーウナギツカミ節(西壁(中央)16層;16)
 12. ヒシ属(西壁中央;16)
2. ツガ属(西壁(中央)16層;16)
 4. マツ属(西壁(中央)16層;16)
 6. ブナ属(西壁(中央)16層;16)
 8. クマシデ属ーアサダ属(西壁(中央)15層;11)
 10. カヤツリグサ科(西壁(中央)16層;16)
 13. サンショウモ(西壁(中央)15層;11)

50 μm (1, 2, 12)
 20 μm (3-11)
 50 μm (13)

第428図 花粉化石

3 宮東遺跡（第4次調査）の放射性炭素年代測定・樹種同定

はじめに

宮東遺跡（埼玉県加須市大越畠ヶ田地内）は、現在の利根川右岸の沖積地に立地する。宮東遺跡の第4次調査の結果、平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、畠の畝跡と考えられる溝跡群が検出され、これらの遺構の分布状況などから集落域および耕作域の広がりが明らかとされている。また、検出された古代の竪穴住居跡の中には、液状化とともになう墳砂が遺構内に埋積した遺構も確認されている。

本報告では、上記した墳砂の埋積が認められた竪穴住居跡の年代観、竪穴住居跡に伴う柱穴より出土した柱材の樹種、出土人骨の性別・年齢などの検討を目的として、自然科学分析を実施した。

（1）放射性炭素年代測定

ア 試料

調査の対象とされた竪穴住居跡（SJ-75：旧SJ-22）は、調査区中央部の調査区北壁付近の奈良・平安時代の遺構確認面（第2面）より検出されている。調査区際に設定された暗渠壁面に認められたSJ-75埋積物を含む堆積層の観察では、住居掘削面より下位の地山（基底）は青灰色砂混じり泥（シルト～粘土）からなり、上部は泥層となる。住居跡掘削面はこの青灰色泥上部まで及んでおり、掘削面より上位には、暗灰色～暗褐灰色泥、褐灰色～灰色細粒砂、焼土とみられる褐色泥の偽礫（ブロック）が混じる灰色砂混じり泥、暗灰色泥が累重する。このうち、褐灰色～灰色細粒砂は、液状化に伴う砂脈より噴出した墳砂に由来する砂層に相当し、この砂層上位の褐色泥の偽礫（ブロック）が混じる灰色砂混じり泥は貼床とされている。さらに上位の暗灰色泥は、焼土と考えられる褐色泥の偽礫や炭化材などの混入の程度により上部・下部とに分層されている。

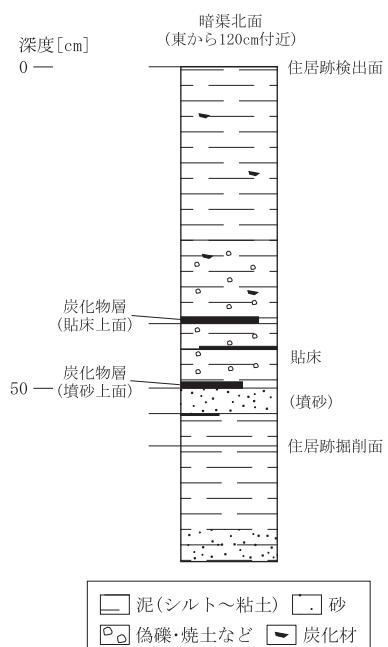
また、SJ-75埋積物中には、とくに砂層の上面と上位の貼床中および上面に炭化物層（層厚0.5

～2cm前後程度）が面的に分布する状況が確認されている。また、墳砂（砂層）による埋積と貼床の形成から、被災後に住居跡を再利用した可能性が指摘されている。

今回の分析では、上記した調査所見から、墳砂に伴う砂層の年代および住居跡再利用の年代の検討が目的とされた。このことから、暗渠の南面・北面にそれぞれ認められた炭化物層を対象とし、炭化物7点（サンプル1～7）を採取している（第127表）。

なお、これらの試料は、現地での採取時および室内観察では、いずれも炭化材などは認められず、炭化あるいは灰化した微細な植物片を主体とする状況が確認された。そのため、試料の性状確認として炭化物試料の顕微鏡観察を行い、その状況を第431図-1～4に示した。

また、放射性炭素年代測定には、上述した分析目的を踏まえ、貼床上面の炭化物2点（炭化物サンプル1, 5）、墳砂上面の炭化物（炭化物サンプル4, 6）の計4点を供している。



第429図 SJ-22埋積物の模式柱状図

第127表 炭化物試料一覧

遺構名	試料採取位置*			性状	試料名	備考
SJ-22	暗渠南面	貼床上面(砂層上位)	東から110cm~120cm	炭化物	サンプル1	放射性炭素年代測定対象
	暗渠南面	墳砂上面	東から110cm~120cm	炭化物	サンプル2	
	暗渠南面	墳砂上面	東から230cm~255cm	炭化物	サンプル3	
	暗渠南面	墳砂上面	東から280cm~310cm	炭化物	サンプル4	放射性炭素年代測定対象
	暗渠北面	貼床上面(砂層上位)	東から60cm~110cm	炭化物	サンプル5	放射性炭素年代測定対象
	暗渠北面	墳砂上面	東から240cm~300cm	炭化物	サンプル6	放射性炭素年代測定対象
	暗渠北面	墳砂上面	東から380cm~400cm	炭化物	サンプル7	

イ 分析方法

試料中の土壤や根などをメスやピンセットを用いて取り除いた後、HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C (30分) 850°C (2時間) で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いてδ 13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma; 68%）に相当する年代である。暦年較正

は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0. (Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正は、CALIB 7.1.0. のマニュアルに従い、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値および北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

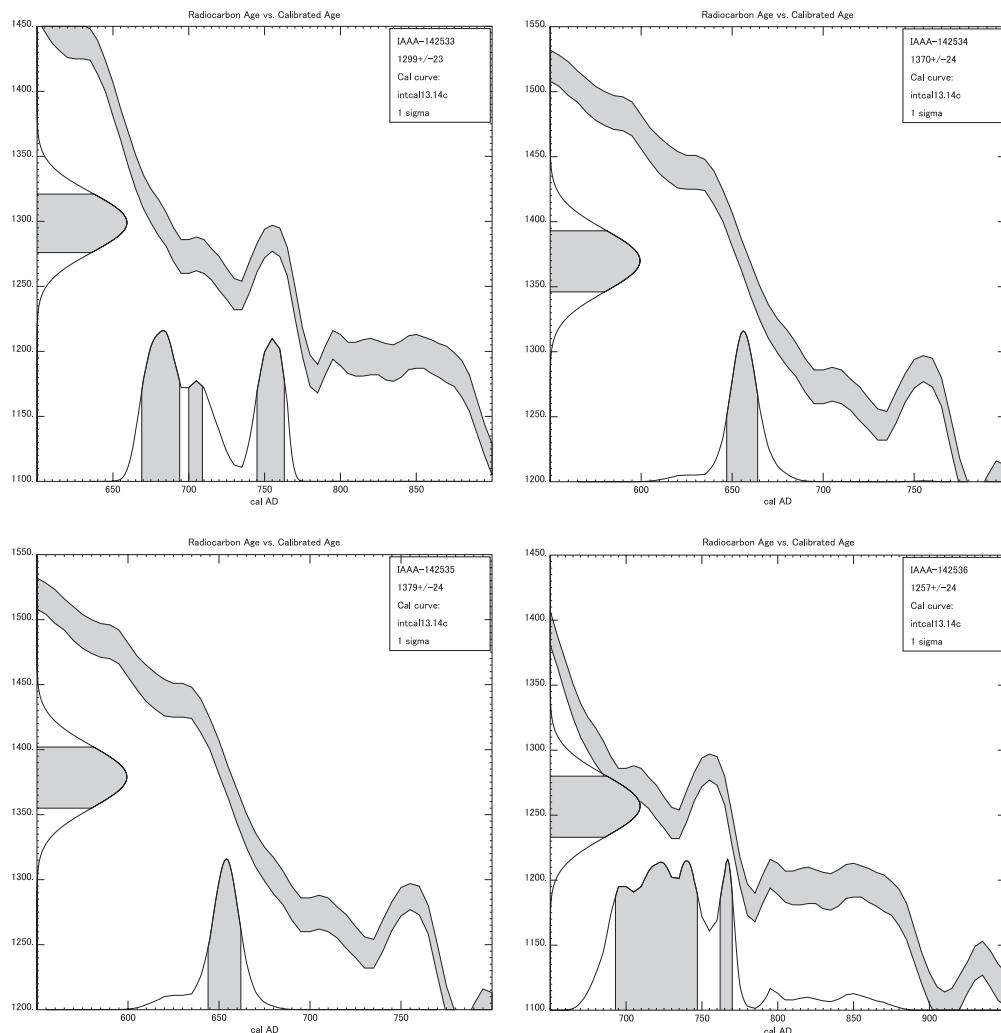
暦年較正結果は $\sigma \cdot 2\sigma$ (σ は統計的に真の値が68.2%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95.4%の確率で存在する範囲) の値を示す。また、表中の相対比は、 $\sigma \cdot 2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。なお、較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

ウ 結果および考察

炭化物試料の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は、サンプル1（暗渠南面；貼床上面）が1,300±20BP、サンプル4（暗渠南面；墳砂上面）が1,370±20BP、サンプル5（暗渠北面；貼床上面）が1,380±20BP、サンプル6（暗渠北面；墳砂上面）が1,260±20BPを示す（第128表）。また、補正年代に基づく暦年較正結果（ 1σ ）

第128表 放射性炭素年代測定および曆年較正結果

試料	測定年代 (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (曆年較正用) (yrBP)	曆年較正結果					相対比	測定機関 CodeNo.
SJ22 サンプル1 (貼床上面) 炭化物	1,300±20	-24.03±0.21	1,299±23	σ	cal AD 669 - cal AD 695	cal BP 1,281 - 1,255	0.511	IAAA- 142533		
				2σ	cal AD 700 - cal AD 710	cal BP 1,250 - 1,240	0.136			
SJ22 サンプル4 (墳砂上面) 炭化物	1,370±20	-21.61±0.37	1,370±24	σ	cal AD 746 - cal AD 764	cal BP 1,204 - 1,186	0.353	IAAA- 142534		
				2σ	cal AD 663 - cal AD 724	cal BP 1,287 - 1,226	0.674			
SJ22 サンプル5 (貼床上面) 炭化物	1,380±20	-18.41±0.25	1,379±24	σ	cal AD 739 - cal AD 768	cal BP 1,211 - 1,182	0.326	IAAA- 142535		
				2σ	cal AD 648 - cal AD 665	cal BP 1,302 - 1,285	1.000			
SJ22 サンプル6 (墳砂上面) 炭化物	1,260±20	-27.16±0.47	1,257±24	σ	cal AD 630 - cal AD 681	cal BP 1,320 - 1,269	1.000	IAAA- 142536		
				2σ	cal AD 618 - cal AD 673	cal BP 1,332 - 1,277	1.000			
				σ	cal AD 693 - cal AD 747	cal BP 1,257 - 1,203	0.870			
				2σ	cal AD 762 - cal AD 770	cal BP 1,188 - 1,180	0.130			
				σ	cal AD 672 - cal AD 777	cal BP 1,278 - 1,173	0.951	IAAA- 142536		
				2σ	cal AD 792 - cal AD 804	cal BP 1,158 - 1,146	0.017			
				σ	cal AD 815 - cal AD 823	cal BP 1,135 - 1,127	0.008			
				2σ	cal AD 841 - cal AD 860	cal BP 1,109 - 1,090	0.024			

第430図 曆年較正結果 (1σ)

は、サンプル1がcalAD 669 – calAD 764、サンプル4がcalAD 648 – calAD 665、サンプル5がcalAD 645 – calAD 663、サンプル6がcalAD 693 – calAD 770である（第128表、第430図）。

以上の結果を参考とすると、SJ-75の炭化物層は、7世紀中頃から8世紀後半頃までの年代が推定される。なお、炭化物層の層位的な新旧関係と年代の比較では、暗渠南面試料は砂層上面の炭化物が7世紀中頃（サンプル4）、貼床上面の炭化物（サンプル1）が7世紀後半から8世紀後半頃であり、層位関係と概ね整合する。一方、暗渠北面試料は、砂層上面の炭化物（サンプル6）が7世紀末から8世紀後半頃、貼床上面（サンプル5）が7世紀中頃と新旧が逆転する。このうち、サンプル6は、試料採取地点の位置および層位関係により暗渠南面のサンプル4に対比されることから、履歴の異なる植物片の混入などによる影響が考えられる。また、サンプル5（貼床上面）については、暗渠南面との対比が難しいため、調査所見に基づく層位関係の確認が必要と考えられる。

なお、本地域における古代頃の地震痕跡については、埼玉県や群馬県などの遺跡で多くの事例が確認されており、文献史料や調査所見から9世紀代の地震（818年（弘仁九年）、878年（元慶2年）によるものと推定されている。SJ-75に認められた液状化による墳砂は、炭化物層の較正暦年代（ 1σ ）が7世紀中頃から8世紀後半頃までの範囲にあることから、9世紀以前の災害痕跡の可能性がある。また、住居跡の再利用までの期間については、暗渠北面・南面の貼床上面の炭化物試料が示した較正暦年代範囲（ 1σ ）が砂層上面と一致する、あるいは近似する較正暦年代範囲を含むことから比較的短期間であった可能性があり、この点についてはSJ-75における出土遺物による評価が期待される。

また、上述した放射性炭素年代測定に供した炭化物試料の性状確認の結果、第431図に示すよう

に微細な植物組織片を主体とする状況が認められた。また、これらの組織片には栽培植物のイネ属の葉部や穎（穂殼）に由来する珪化組織片などが確認されたことから、炭化物層の形成にはイネの植物体も利用されたことが示唆される。

（2）木製品の樹種

ア 試料

試料は、古墳時代の遺構確認面（第3面）より検出された堅穴住居跡（SJ-64：旧SJ-11）の柱穴（pit2, 4）より出土した柱材2点である。

イ 分析方法

試料の木取りを観察した上で、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995-1999）を参考にする。

ウ 結果

同定結果を第129表に示す。SJ-11より出土した柱材は、いずれも広葉樹のコナラ属コナラ属クヌギ節に同定された。以下に、確認された分類群の解剖学的特徴等を記す。

- ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*）ブナ科

環孔材で、孔圈部は1-2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

工 考察

SJ-64より出土した柱材2点は、いずれも落葉高木のクヌギ節に同定された。日本のクヌギ節には、クヌギとアベマキの2種があり、クヌギは関東地方の二次林・河畔林に広く分布する。一方、アベマキは西日本を中心に分布し、関東地方には分布していないことから、今回の試料もクヌギの可能性が高い。クヌギの木材は、比較的重硬で強度が高いことから、このような材質的な特徴から柱材として利用されたと考えられる。

埼玉県内の古墳時代～古代の堅穴住居跡における

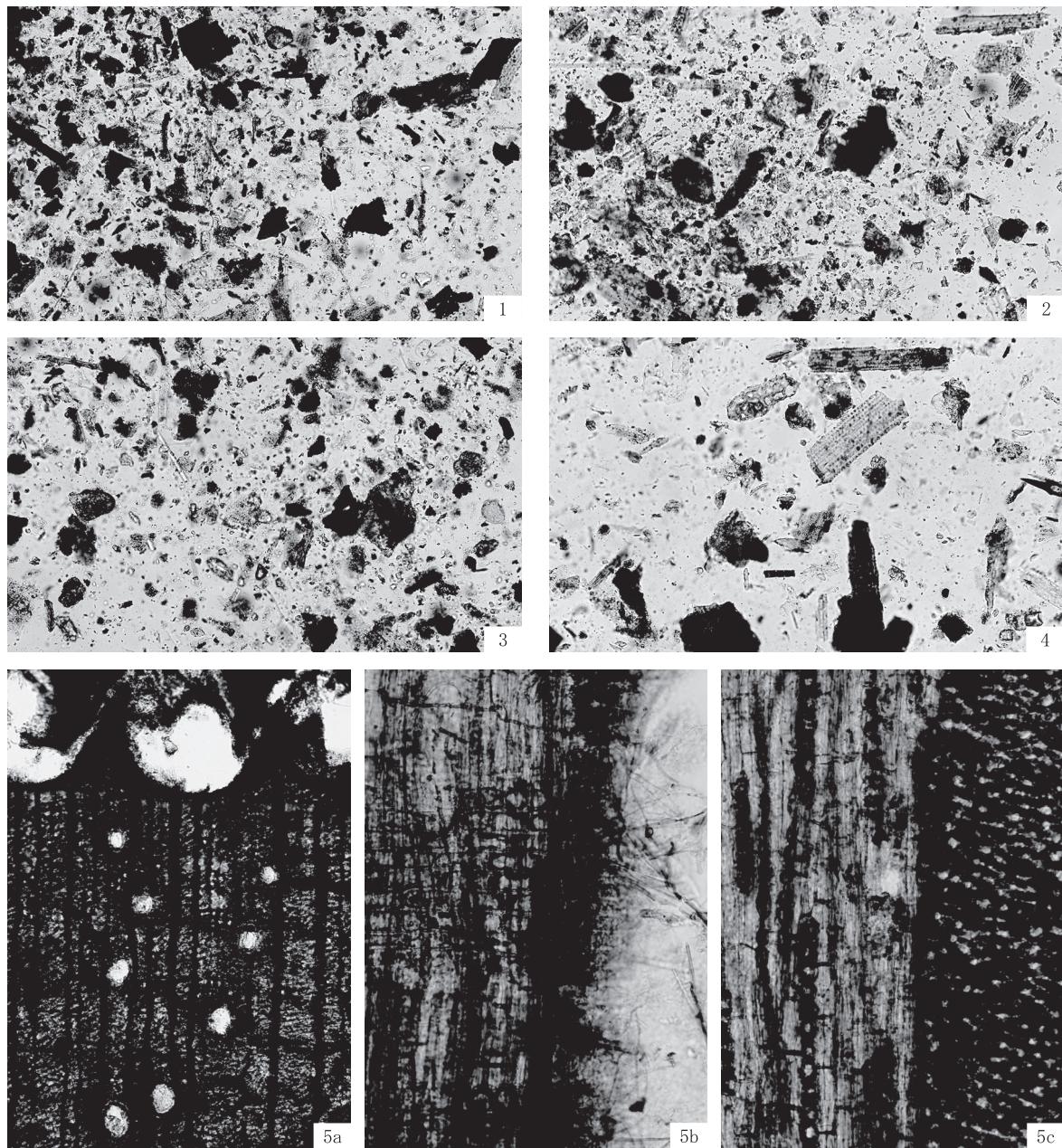
クヌギ節の利用例（伊東・山田, 2012）についてみると、垂木と考えられる炭化材に多数確認されている。柱材については、清水上遺跡（深谷市）の古墳時代とされる8号住居跡や古代？とされる中堀遺跡（上里町）の第149号住居跡などで確認されている。このように、クヌギ節は強度などを必要とする垂木や柱材などに利用されていたことが示唆され、本遺跡のSJ-64の柱材にクヌギが認められた状況は、上記した木材利用と調和する結果と言える。

引用文献

- 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31 京都大学木質科学研究所 81-181.
伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32 京都大学木質科学研究所 66-176.
伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33 京都大学木質科学研究所 83-201.
伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34 京都大学木質科学研究所 30-166.
伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35 京都大学木質科学研究所 47-216.
伊東隆夫・山田昌久（編） 2012 『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社 449p.
島地 謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』地球社 176p.
林 昭三 1991 『日本産木材顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所.
Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E., 1989, IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

第129表 樹種同定結果

出土地点		器種	木取り・形状	種類 (分類群)
第11号住居跡 (SJ-11)	pit2	柱材	分割材(ミカン割)状 長さ52cm、幅9cm、厚さ6cm	コナラ属コナラ属クヌギ節
	pit4	柱材	分割材状 長さ38cm、幅10cm、厚さ6cm	コナラ属コナラ属クヌギ節



1. プレパラート内の状況(SJ-22 炭化物; サンプル1)
2. プレパラート内の状況(SJ-22 炭化物; サンプル4)
3. プレパラート内の状況(SJ-22 炭化物; サンプル5)
4. プレパラート内の状況(SJ-22 炭化物; サンプル6)
5. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(SJ-11 pit4; 柱材)
 - a:木口, b:柾目, c:板目

───────────
 100 μm: 5a
 ───────────
 100 μm: 1-4
 ───────────
 100 μm: 5b, c

第431図 炭化物試料・木材

4 宮東遺跡（第5次調査）の珪藻・花粉分析

はじめに

宮東遺跡（埼玉県加須市大越字畠ヶ田地内）は、現在の利根川右岸に位置し、松丸（1979）を参考にすると、利根川右岸に分布する利根川台地群の一部および自然堤防付近に立地する。宮東遺跡（第5次）の発掘調査の結果、Ⅲ～V区では古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世の集落跡が確認されており、VIでは中世・近世の土坑や溝跡、井戸跡、平安時代の土師器を主体とする遺物集中などが確認されている。

本分析では、宮東遺跡（第5次）のVI区で確認された古代包含層とされる堆積層における古環境の検討を目的として、珪藻分析、花粉分析および植物珪酸体分析を実施した。

（1）試料

試料は、試料採取地点候補とされた調査区北側の3箇所付近（東から順に1地点、2地点、3地点とする）に認められた古代の遺物包含層より採取した土壤3点（1地点；試料番号1、2地点；試料番号1・3地点；試料番号1）である。

今回の分析対象とされた古代の遺物包含層（V層）は、地点間で色調に若干の差異が認められるものの、総じて暗色を呈する腐植質な堆積物（黒灰色～暗灰色泥）からなる。また、調査所見によれば調査区全体に分布が確認され、層厚は調査区南側から北側に向かって厚くなる状況が明らかとされている。

（2）分析方法

ア 硅藻分析

湿重約5gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバ

ガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。

珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange-Bertalot (2000)、Hustedt (1930-1966)、Krammer and Lange-Bertalot (1985-1991)、Desikachariy (1987)などを参考にする。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類し表に示す。

堆積環境の変遷を考察するために、珪藻化石が100個体以上検出された試料について珪藻化石群集変遷図を作成する。出現率は化石総数を基数とした百分率で表し、1%以上の出現率を示す分類群についてのみ表示する（図中の●印は、総数が100個体以上産出した試料うち1%未満の種を、+印は総数100個体未満の場合の産出を示す）。図中には、海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・pH・流水の相対頻度について図示する。

イ 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製

し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉（1973）、中村（1980）、三好ほか（2011）等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。表中で複数の種類を-（ハイフン）で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

ウ 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由來した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体）および葉身機動細胞に由來した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を乾土1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、各分類群の含量は100単位として表示し、100個/g未満は「<100」と表示する。また、各分類群の植物珪酸体含量を試料毎に図示する。

（3）結果

ア 硅藻分析

結果を第130表、第432図に示す。以下、試料毎に結果を述べる。

（ア）1地点；試料番号1

本試料は、ある程度の量の硅藻化石が含まれており、100個体以上が検出された。化石の保存状態は、半壊した殻が多いだけでなく、殻表面には溶解の痕跡も認められることから、保存状態と

しては不良～極不良である。検出された分類群は、淡水生種を主として極低率に淡水～汽水生種を伴う種群で構成される。

本試料から特徴的に認められた種は、淡水生種で流水不定性種の*Nitzschia amphibia*、陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*、*Luticora mutica*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia subcapitata*等である。

（イ）2地点；試料番号1

本試料は、1地点と同様にある程度の量の珪藻化石が含まれており、100個体以上が検出された。化石の保存状態は、半壊した殻が多いだけでなく、溶解の痕跡も認められることから、保存状態としては不良～極不良である。検出された分類群は、淡水生種を主として極低率に淡水～汽水生種を伴う種群で構成される。

本試料から特徴的に認められた種は、淡水生種で流水不明種の*Fragilaria* spp.、*Pinnularia* spp.、陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*、*Luticora mutica*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia subcapitata*等である。

（ウ）3地点；試料番号1

本試料は、上記した1・2地点と同様に、ある程度の量の珪藻化石が含まれており、100個体以上が検出された。化石の保存状態は、半壊した殻が多いだけでなく、溶解の痕跡も認められることから、保存状態としては不良～極不良である。検出された分類群は、淡水生種を主として極低率に淡水～汽水生種を伴う種群で構成される。

本試料から特徴的に認められた種は、淡水生種で流水不明種の*Fragilaria* spp.、陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*、*Luticora mutica*、*Navicula contenta*、*Pinnularia borealis*等である。

イ 花粉分析

結果を第131表に示す。1～3地点の各試料は、いずれも花粉化石の産出状況が悪い。また、わず

第130表 珪藻分析結果

種類	生態性			環境指標種	1地点	2地点	3地点
	塩分	pH	流水		1	1	1
Rhopalodia gibberula (Ehr.) Mueller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	1	1	1
Achnanthes lanceolata var. elliptica Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	K, T	1	-	-
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	4	-	-
Amphora spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-
Aulacoseira italicica (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	1	-	-
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	-	-	1
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	-	3	-
Cocconeis placentula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1	-
Cymbella tumida (Breb. ex Kuettz.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	-	-
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-
Fragilaria ulna (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	O, U	-	1	-
Fragilaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	16	6
Geissleria ignota (Krasske) Lange-Bertalot et Metzeltn	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	-	-
Gomphonema angustum C. Agardh	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, U	87	42	63
Hantzschia amphioxys var. capitata Muller	Ogh-ind	al-il	ind	RA, U	6	3	2
Luticola mutica (Kuetz.) D.G. Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA, S	4	6	13
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, T	1	-	4
Navicula contenta fo. biceps (Arn.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA, T	-	-	1
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	-	2	-
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	13	1	-
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB, U	-	3	-
Nitzschia fonticola Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	1	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	4	12	12
Pinnularia borealis var. rectangularis Carlson	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	-	-
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	-	1
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	1	-
Pinnularia Schroederii (Hust.) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	2	-
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB, S	4	5	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	13	2
Placoneis elginensis (Greg.) Cox	Ogh-ind	al-il	ind	O, U	1	-	-
Planothidium lanceolatum (Breb. ex Kuettz.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	r-ph	K, T	-	-	1
Rhopalodia gibba (Ehr.) Mueller	Ogh-ind	al-il	ind	O, U	1	-	-
Sellaphora pupula (Kuetz.) Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S, U	1	-	-
Stauroneis obtusa Lagerst	Ogh-ind	ind	ind	RB	2	-	1
Surirella ovata var. pinnata (W. Smith) Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	-	-
海水生種					0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0
汽水生種					0	0	0
淡水～汽水生種					1	1	1
淡水生種					141	114	107
珪藻化石総数					142	115	108

凡例

[適応性]

塩分：塩分濃度に対する適応性	pH: 水素イオン濃度に対する適応性	流水：流水に対する適応性
Euh : 海水生種	al-bi : 真アルカリ性種	1-bi : 真止水性種
Euh-Meh : 海水生種 - 汽水生種	al-il : 好アルカリ性種	1-ph : 好止水性種
Meh : 汽水生種	ind : pH 不定性種	ind : 流水不定性種
Ogh-Meh : 淡水生種 - 汽水生種	ac-il : 好酸性種	r-ph : 好流水性種
Ogh-hil : 貧塩好塩性種	ac-bi : 真酸性種	r-bi : 真流水性種
Ogh-ind : 貧塩不定性種	unk : pH 不明種	unk : 流水不明種
Ogh-hob : 貧塩嫌塩性		
Ogh-unk : 貧塩不明種		

[環境指標種]

A: 外洋指標種。B: 内湾指標種。C1: 海水藻場指標種。C2: 汽水藻場指標種。D1: 海水砂質干潟指標種。D2: 汽水砂質干潟指標種。

E1: 海水泥質干潟指標種。E2: 汽水泥質干潟指標種。F: 淡水底生種群(以上、小杉, 1988)

G: 淡水浮遊生種群。H: 河口浮遊性種群。J: 上流性河川指標種。K: 中～下流性河川指標種。L: 最下流性河川指標種群。

M: 湖沼浮遊性種。N: 湖沼沼澤湿地指標種。O: 沼澤湿地付着生種。P: 高層湿原指標種群。Q: 陸域指標種群(以上、安藤, 1990)

S: 好汚濁性種。U: 広適応性種。T: 好清水性種(以上、Asai and Watanabe, 1995)

R: 陸生珪藻(RA:A群、RB:B群、RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)

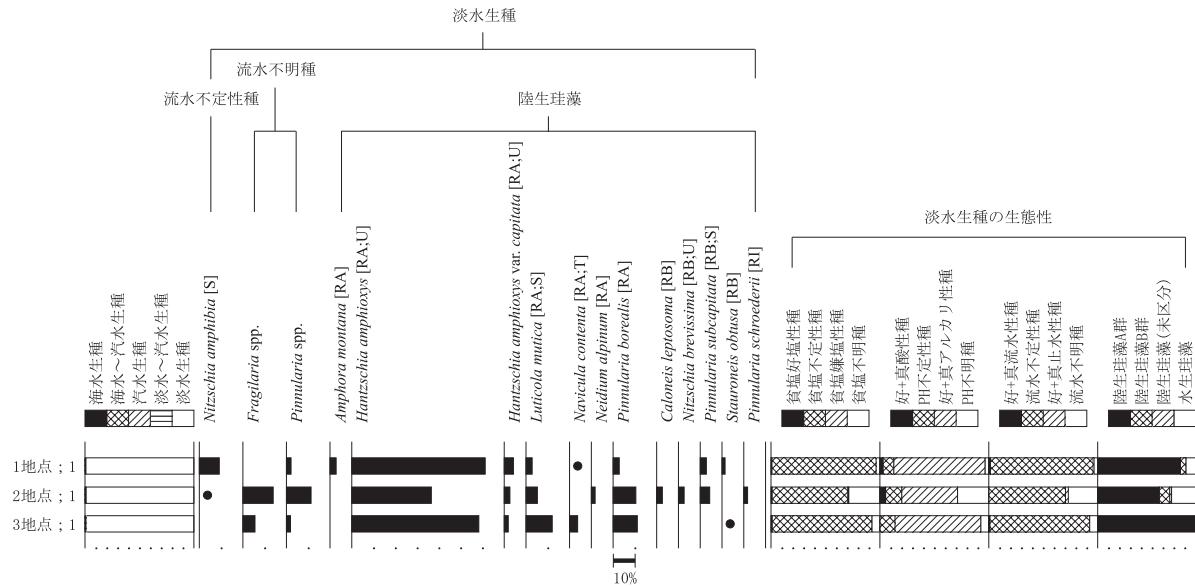
かに得られた花粉化石の保存状態も悪く、花粉外膜が破損・溶解している個体が多く認められた。

検出された種類は、木本花粉ではマツ属、ニレ属-ケヤキ属、シナノキ属、草本花粉ではイネ科、

ヨモギ属、キク亜科であり、いずれも1～数個程度の産出にとどまる。

ウ 植物珪酸体分析

結果を第132表、第433図に示す。以下、試料毎



海水～汽水～淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いすれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満の試料について検出した種類を示す。

[環境指標種]

A:外洋指標種, B:内湾指標種, C1:海洋藻場指標種, C2:汽水藻場指標種, D1:海水砂質干潟指標種, D2:汽水砂質干潟指標種, E1:海水泥質干潟指標種, E2:汽水泥質干潟指標種, F:淡水底生種群(以上、小川, 1988)、G:淡水浮遊性種群, H:河口浮遊性種群, I:上流性河川指標種, K:中～下流性河川指標種, L:最下流性河川指標種群, M:湖沼浮遊性種, N:湖沼沼澤地指標種, O:沼澤湿地付着生種, P:高層湿原指標種群, Q:陸域指標種群(以上、安藤, 1990), S:好汚濁性種, T:好清水性種, U:広適応性種(以上、Asai & Watanabe, 1995), RI:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群;伊藤・堀内, 1991)

第432図 主要珪藻化石群集

に結果を述べる。

(ア) 1 地点 ; 試料番号 1

本試料の植物珪酸体含量は、約9.0万個/gであり、3試料の中で最も高い。植物珪酸体群集は、メダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが認められ、これらの分類群ではタケ亜科やススキ属の産出が目立つ。また、栽培植物のイネ属の葉部に形成される植物珪酸体が産出する。その含量は、短細胞珪酸体が約1.4万個/g、機動細胞珪酸体が約1.2万個/gである。この他、珪化組織片として、イネ属の穎(穂殼)に形成される穎珪酸体、葉部に由来する短細胞列や機動細胞列も確認されたほか、栽培種を含むコムギ連の穎珪酸体も確認された。

(イ) 2 地点 ; 試料番号 1

本試料の植物珪酸体含量は、約3.5万個/gである。植物珪酸体群集は、メダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属などが認められ、これらの分類群ではタケ亜科、ヨシ属の産出が目立つ。また、栽培植物のイネ属の植物珪酸体が産出する。

その含量は、短細胞珪酸体が1,700個/g、機動細胞珪酸体が約3,300個/gである。この他、珪化組織片として、イネ属の穎珪酸体や短細胞列も確認された。

(ウ) 3 地点 ; 試料番号 1

本試料の植物珪酸体含量は、約4.7万個/gである。植物珪酸体群集では、メダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが認められ、これらの分類群ではヨシ属、次いでタケ亜科やススキ属の産出が目立つ。また、栽培植物のイネ属の植物珪酸体が産出する。その含量は、短細胞珪酸体が2,200個/g、機動細胞珪酸体が4,700個/gである。この他、珪化組織片として、イネ属の穎珪酸体、短細胞列および機動細胞列、コムギ連の穎珪酸体が確認された。

(4) 考察

ア 堆積環境

古代の遺物包含層より採取された3試料の珪藻化石群集は、いすれも淡水生種を主とし、陸生珪藻が優占するという組成によって特徴付けられた。

第131表 花粉分析結果

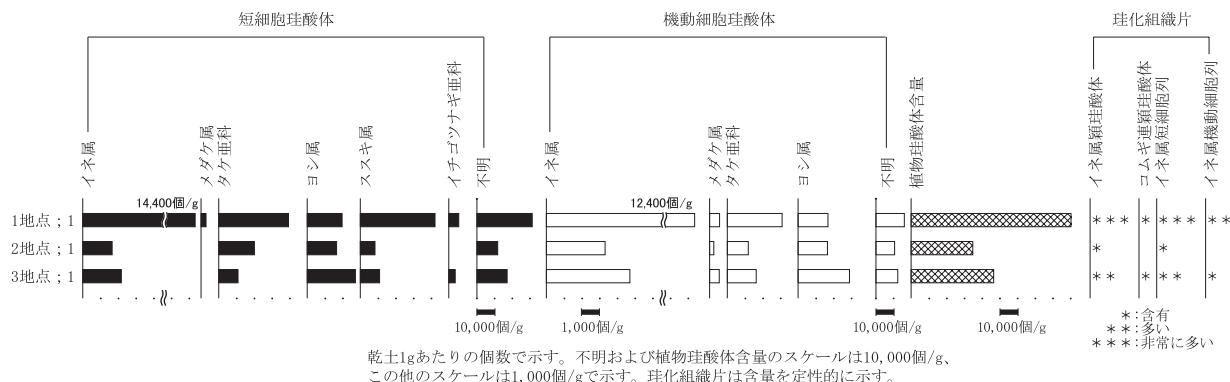
種類	1地点	2地点	3地点
	1	1	1
木本花粉			
マツ属複維管束亞属	-	-	1
マツ属(不明)	-	-	1
ニレ属-ケヤキ属	-	-	1
シナノキ属	-	1	-
草本花粉			
イネ科	2	1	-
ヨモギ属	-	-	3
キク亜科	-	-	1
シダ類胞子			
ゼンマイ属	-	-	1
他のシダ類胞子	5	5	7
合計			
木本花粉	0	1	3
草本花粉	2	1	4
シダ類胞子	5	5	8
合計	7	7	15

第132表 植物珪酸体含量

分類群	1地点	2地点	3地点
	1	1	1
イネ科葉部短細胞珪酸体			
イネ属	14,400	1,700	2,200
メダケ属	300	-	-
タケ亜科	3,900	2,000	1,100
ヨシ属	2,000	1,700	2,700
ススキ属	4,200	800	1,100
イチゴツナギ亜科	600	-	400
不明	31,200	11,700	17,100
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
イネ属	12,400	3,300	4,700
メダケ属	600	200	500
タケ亜科	3,100	1,200	1,600
ヨシ属	1,700	1,700	2,900
不明	16,000	10,500	12,300
合計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	56,600	17,900	24,500
イネ科葉身機動細胞珪酸体	33,800	16,900	22,100
植物珪酸体含量	90,400	34,800	46,600
珪化組織片			
イネ属珪酸体	***	*	**
コムギ連珪酸体	*	-	*
イネ属短細胞列	***	*	**
イネ属機動細胞列	**	-	*

<100 : 100個/g未満。

珪化組織片の産状 -:未検出。*:含有。**:多い。***:非常に多い。



第433図 植物珪酸体含量

また、1地点と2・3地点との間では、*Fragilaria* spp. や *Pinnularia* spp. などの産出状況から群集組成に若干の差異が認められた。

各試料で特徴的に認められた種のうち、3試料で多産した *Hantzschia amphioxys* をはじめ、*Luticora mutica*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia subcapitata* 等の陸生珪藻は、水中や水底以外の大気に接触した環境（例えばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など）に生活する一群であり、特に離水した場所の中で乾燥に耐えうることのできる種群とされる（小杉, 1986; 伊藤・堀内, 1989, 1991）。この他、

1地点（試料番号1）に認められた淡水生種で流水不定性種の *Nitzschia amphibia* は、淡水域でも水の出入りが少なく淀んだ水域に生育していることが多く、Asai & Watanabe (1995) は好汚濁性種としている。また、2地点（試料番号1）や3地点（試料番号1）に認められた *Fragilaria* spp. および *Pinnularia* spp. は、それぞれ数種類で構成されるが、これらの属はいずれも湿地に最も特徴的に認められ、主要な構成種になる属である。

以上のことから、古代の遺物包含層の堆積環境としては、基本的には地下水位が低かったことや、

水の影響が少なく、普段は大気に曝されるような環境（好気的環境）にあったと推定される。なお、*Fragilaria* spp. や*Pinnularia* spp. 等の産出から短期間には湿地化するような環境があった可能性や、*Nitzschia amphibia* の産出からやや汚濁状態の水域が分布した可能性が考えられる。

イ 古植生

古代の遺物包含層の花粉分析の結果、いずれの試料も花粉化石の産出および保存状態は悪かった。花粉化石が常に酸化状態に置かれている場所では、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている（中村, 1967; 徳永・山内, 1971; 三宅・中越, 1998など）。上記した珪藻分析結果では、陸生珪藻が優占し、好気的環境が推定されていることなどを考慮すると、堆積時に取り込まれた花粉・シダ類胞子はその後の経年変化により分解・消失したことなどが考えられる。

なお、わずかに産出した花粉化石についてみると、木本類のマツ属複維管束亞属は二次林などに由来すると考えられ、ニレ属一ケヤキ属、シナノキ属などは河川沿いなどに生育した樹木に由来する可能性がある。一方、草本類では、ヨモギ属、キク亜科などの花粉化石やメダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などの植物珪酸体が検出された。これらは、いずれも開けた明るい場所に生育する人里植物を含む分類群であることから、調査地周辺の草地植生に由来すると考えられる。また、ヨシ属は、湿潤な場所を好むことから、周辺の水湿地などに生育したと考えられる。

なお、古代の遺物包含層の植物珪酸体分析では、

各試料より栽培植物のイネ属が産出し、その含量は栽培種を除く各分類群と同等程度、あるいはそれを上回るという特徴が認められた。

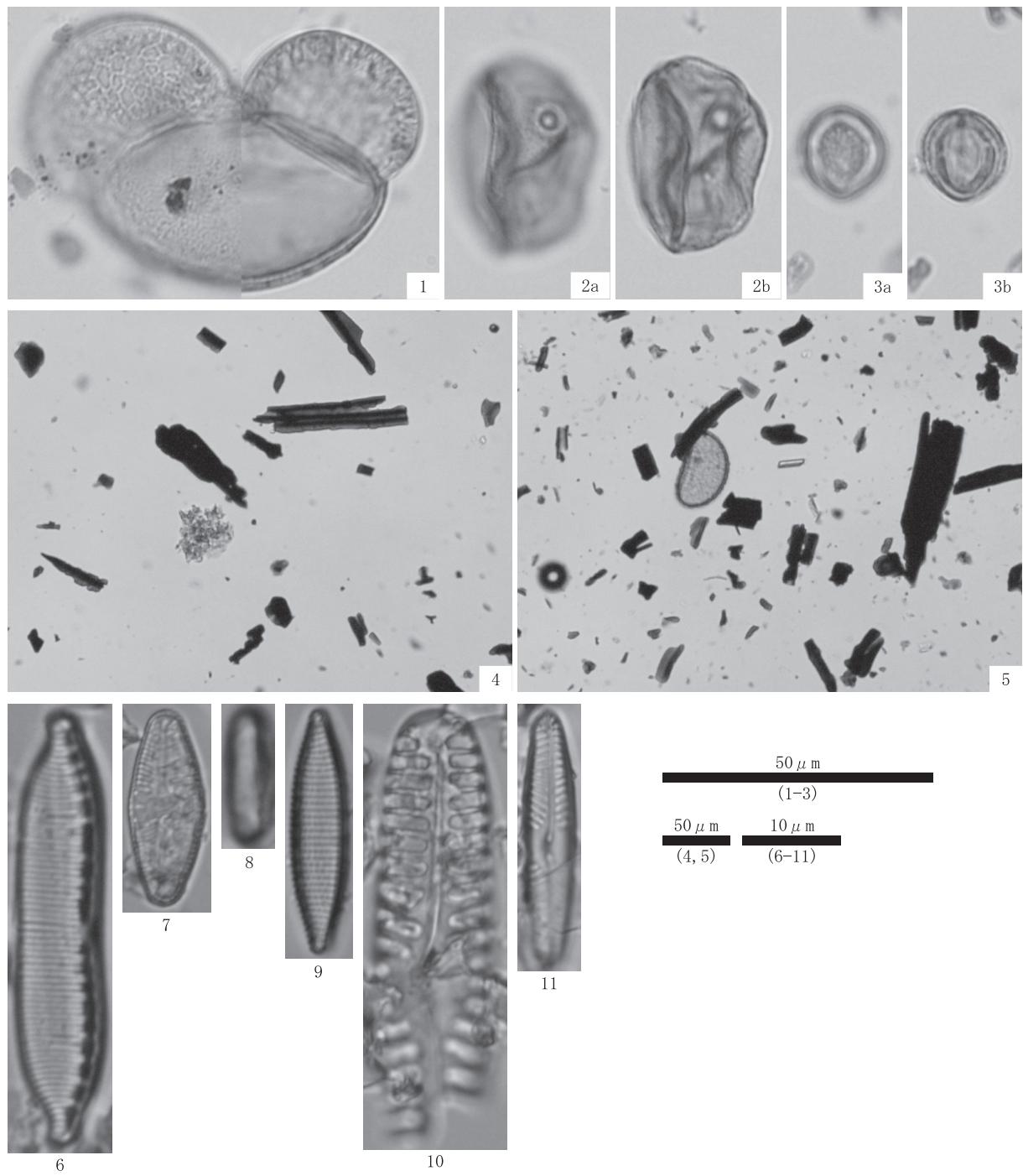
安定した稻作が行われた水田跡の土壤では、栽培されていたイネ属の植物珪酸体が土壤中に蓄積され、植物珪酸体含量（植物珪酸体密度）が高くなる。水田跡（稻作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（機動細胞由来）が試料1g当たり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稻作が行われた可能性が高いと判断されている（杉山, 2000）。

今回の分析対象とした各地点におけるイネ属の機動細胞珪酸体含量についてみると、1地点（試料番号1）が1.2万個/g、2地点（試料番号1）が3,300個/g、3地点（試料番号1）が4,700個/gである。上述した判断目安との比較では、1地点（試料番号1）は明らかに含量が高く、2地点（試料番号1）はやや含量が低いものの、3地点（試料番号1）は同等程度の含量と言える。このような産状を考慮すると、調査地付近において稻作が行われていた可能性が考えられ、イネの穎や葉部に由来する珪化組織片の検出や分析対象とされた層準が古代の遺物包含層であることなどを考慮すると、イネの植物体の利用や廃棄の痕跡を示している可能性もある。

なお、1・3地点では、栽培種を含むコムギ連の穎珪酸体も検出された。コムギ連には野生種が含まれ厳密な区別には至らないが、確認された珪化組織片が栽培種に由来するものであれば、当該期におけるムギ類の栽培や利用も想定される。

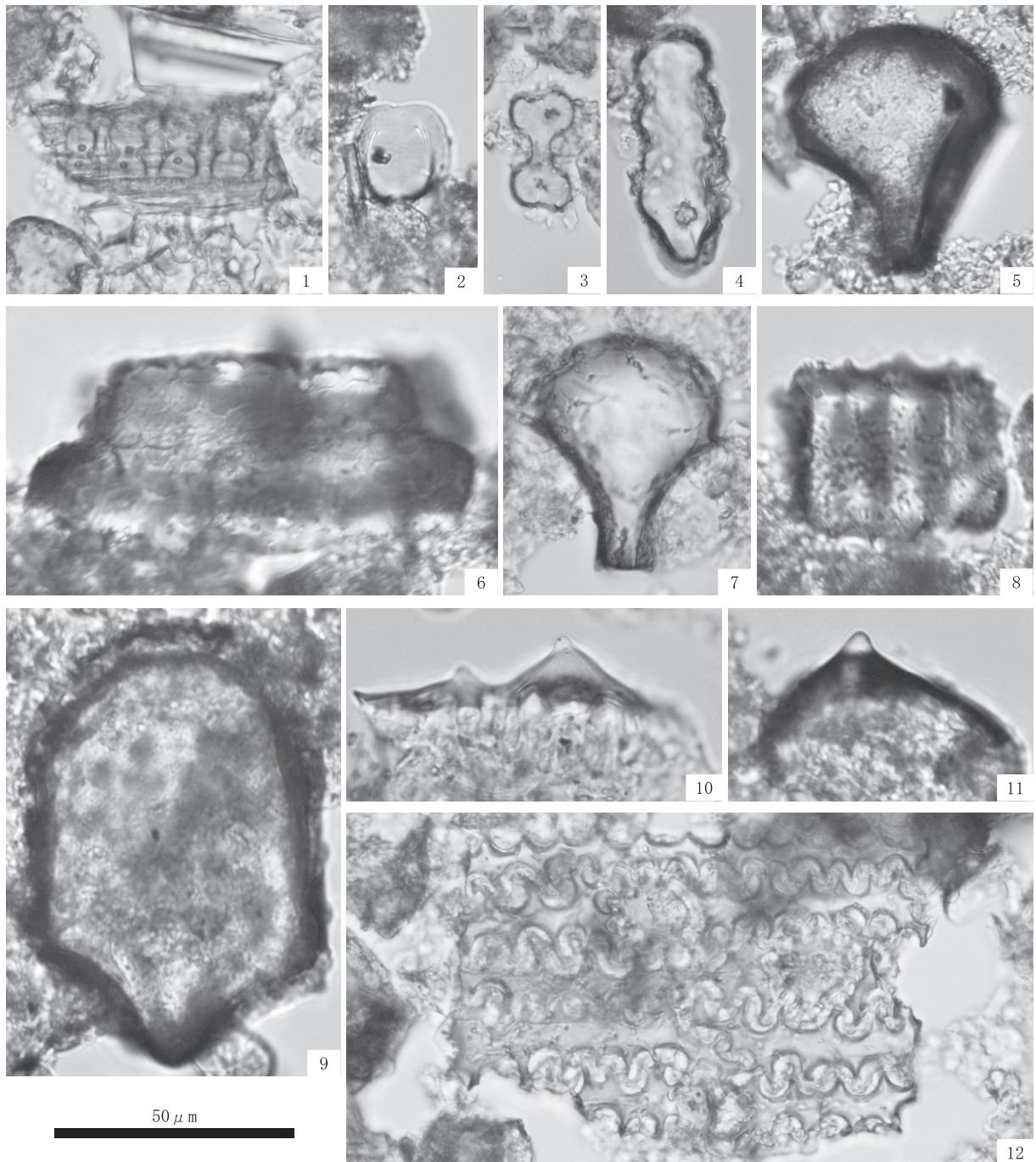
引用文献

- 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42 73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示 1989 「古環境解析からみた陸生珪藻の検討－陸生珪藻の細分－」『日本珪藻学会第10回大会講演要旨集』17.
- 伊藤良永・堀内誠示 1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『日本珪藻学誌』6, 23-44.
- 小杉正人 1986 「陸生珪藻による古環境の解析とその意義－わが国への導入とその展望－」『植生史研究』1 9-44.
- 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27 1-20.
- 近藤鍊三 2010 『プラント・オパール図譜』北海道大学出版会 387p.
- 島倉巳三郎 1973 『日本植物の花粉形態』大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集 60p.
- 杉山真二 2000 「植物珪酸体（プラント・オパール）」辻誠一郎（編著）『考古学と自然科学3』 考古学と植物学 同成社 189-213.
- 徳永重元・山内輝子 1971 「花粉・胞子」『化石の研究法』共立出版株式会社 50-73.
- 中村 純 1967 『花粉分析』古今書院 232p.
- 中村 純 1980 「日本産花粉の標微 I II (図版)」『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録』第12・13集 91p.
- 松丸国照 1979 「I 地形分類図」『土地分類基本調査 古河（埼玉県内）』埼玉県 13-17.
- 三宅 尚・中越信和 1998 「森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究』6 15-30.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子 2011 『日本産花粉図鑑』北海道大学出版会 824p.
- Asai, K. and Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.
- Desikachariy, T. V., 1987, *Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean*. Madras science foundation, Madras,
- Printed at TT. Maps and Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. 1-13, Plates:401-621.
- Horst Lange-Bertalot., 2000, *ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA*:Annotated diatom micrographs. Witkowski, A., Horst Lange-Bertalot, Dittmer Metzeltin:Diatom Flora of Marine Coasts Volume1. 219plts. 4504figs, 925p.
- Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part1, 920p.
- Hustedt, F., 1937-1938, Systematische unt okologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I-III. *Arch. Hydrobiol. Suppl.*, 15, 131-809, 1-155, 274-349.
- Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part2, 845p.
- Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part3, 816p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, *Naviculaceae. Bibliotheca Diatomologica*, 9, 250p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, *Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa*, 2(1), 876p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, *Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa* 2(2), 596p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, *Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa* 2(3), 76p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, *Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa* 2(4), 437p.



1. マツ属(3地点;1) 2. イネ科(2地点;1)
3. ヨモギ属(3地点;1)
5. 花粉分析プレパラート内の状況(3地点;1)
7. *Luticola mutica* (Kuetz.) D.G.Mann(1地点;1)
9. *Nitzschia amphibia* Grunow(1地点;1)
11. *Pinnularia subcapitata* Gregory(1地点;1)
4. 花粉分析プレパラート内の状況(1地点;1)
6. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow(1地点;1)
8. *Navicula contenta* Grunow(1地点;1)
10. *Pinnularia borealis* Ehrenberg(1地点;1)

第434図 花粉化石・珪藻化石



1. イネ属短細胞列(1地点;1)
3. ススキ属短細胞珪酸体(1地点;1)
5. イネ属機動細胞珪酸体(1地点;1)
7. イネ属機動細胞珪酸体(2地点;1)
9. ヨシ属機動細胞珪酸体(1地点;1)
11. イネ属穎珪酸体(3地点;1)
2. ヨシ属短細胞珪酸体(3地点;1)
4. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(3地点;1)
6. イネ属機動細胞列(1地点;1)
8. メダケ属機動細胞珪酸体(1地点;1)
10. イネ属穎珪酸体(1地点;1)
12. コムギ連穎珪酸体(1地点;1)

第435図 植物珪酸体

5 宮東遺跡（第6次調査）の花粉分析

はじめに

宮東遺跡（埼玉県加須市大越川堤内）は、現在の利根川右岸に位置し、調査地周辺の土地分類図（松丸, 1979）などを参考にすると、利根川右岸に分布する自然堤防に立地する。本遺跡は、これまでに第1次～第5次に渡る発掘調査が実施されており、古墳時代～中世・近世の遺構・遺物が確認されている。今回の第6次調査は、第5次調査の東側調査区の下層が対象とされており、これまでに溝跡などが検出されている。

本分析では、第6次調査で確認された古墳時代包含層における古環境、とくに古植生の検討を目的として花粉分析を実施した。

（1）試料

ア 概要

試料は、第6次調査区の古墳時代包含層より採取した土壌4点である。試料採取地点は、担当者により指定された、調査区北東隅付近の壁面（1地点）、1地点の西側壁面（2地点）、古代遺物包含層の遺物集中地点付近（3地点）、調査区北西隅付近の壁面（4地点）の計4箇所である。

なお、第6次調査における層序はVIII～IV層に区分されている。このうち、VIII層が基盤層、VII層が古墳時代包含層、VI層が上位のV層との間に認められる堆積物、V層が古代遺物包含層、IV層が古代の遺物包含層を不整合に覆う堆積物に相当する。以上の調査所見を参考として、試料採取を行った各地点の観察所見を以下に記す。また、観察所見に基づき作成した模式柱状図を第436図に示す。

イ 1地点（調査区北東隅付近 壁面）

観察対象とした堆積層は層厚約80cmを測る。堆積物は全体的に酸化鉄により褐色を帶びており、下位より、褐灰色～灰褐色泥（VIII層）、暗（褐）灰色泥（VII層）、褐灰色～灰色泥（VI層）、黒色～黒褐色泥（V層）が累重する。各層準の層界は比較的明瞭であり、本地点ではV層中に土師器や

須恵器の破片、焼土粒とみられる褐色土の偽礫（ブロック）～微小ブロックが混じる。また、VIII層には植物根痕と思われる根成孔隙が特徴的に認められる。

ウ 2地点（1地点西側 壁面）

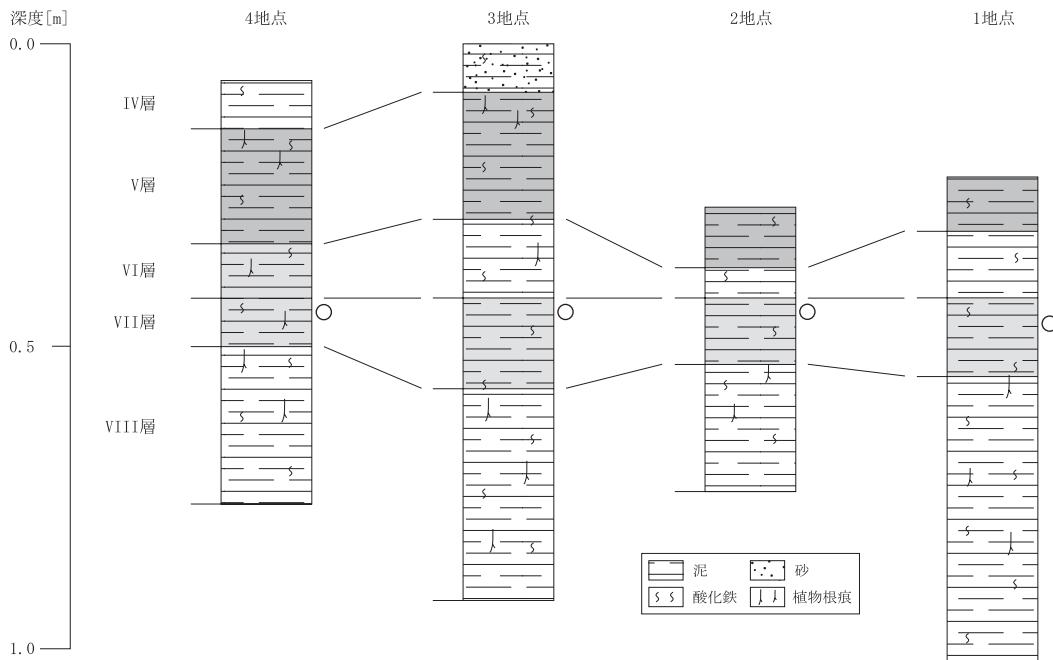
観察対象とした堆積層は層厚約47cmを測る。堆積物は、1地点と同様に酸化鉄の発達により全体的に褐色を帶びる。下位より、褐灰色～灰褐色泥（VIII層）、暗（褐）灰色泥（VII層）、（暗）褐灰色～灰色泥（VI層）、黒色～黒褐色泥（V層）が累重する。VIII層は植物根痕に由来する孔隙が多く認められるほか、VIII層およびVII層との層界付近は擾乱が著しく、両層起源と思われるブロックが分布する。VI層はやや暗色を呈し、1地点と比較してVII層との色調の差異は不明瞭となる。

エ 3地点（古代の遺物集中地点付近）

観察対象とした堆積層は層厚約92cmを測る。堆積物は、上述した1・2地点と同様に酸化鉄の発達により全体的に褐色を帶びる。下位より、褐灰色～灰褐色泥（VIII層）、暗（褐）灰色泥（VI層）、褐灰色～灰色泥（V層）、黒色～黒褐色泥（V層）、灰色～褐灰色泥～砂質泥（IV層）が累重する。VIII層はVII層起源とみられる堆積物が充填する植物根痕が発達する。VII層はVIII層との層界が明瞭であるほか、VII層全体に白色を呈する碎屑物が混じる。VI層は、VII層上面を不整合に覆い、上位に向かつて漸移的に暗色化する。V層は、上部にIV層起源と思われる砂質泥を充填する孔隙が認められる。

オ 4地点（調査区北西隅 壁面）

観察対象とした堆積層は層厚約70cmを測る。堆積物は、1～3地点と同様に酸化鉄の発達により全体的に褐色を帶びる。下位より、黄灰色～灰黄色泥（VIII層）、暗灰色～暗褐色泥（VII、VI層）、黒色～黒褐色泥（V層）、灰色～黄灰色泥（IV層）が累重する。VIII層は、とくに上部の擾乱が著しく、VII層起源と思われる暗灰色泥のブロックが分布す



第436図 1～4 地点の模式柱状図および試料採取位置 (○)

第133表 花粉分析結果

種類	1地点	2地点	3地点	4地点
	VII層	VII層	VII層	VII層
<hr/>				
木本花粉				
モミ属	-	-	-	1
ツガ属	-	1	-	-
マツ属	4	1	2	2
スギ属	6	3	1	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	-	2
サワグルミ属	-	1	-	-
ブナ属	1	3	1	-
コナラ属コナラ亜属	1	2	-	1
ニレ属ケヤキ属	1	-	1	-
<hr/>				
草本花粉				
ガマ属	-	-	1	-
イネ科	1	2	-	-
カヤツリグサ科	1	-	-	-
クワ科	-	1	-	-
ヨモギ属	-	2	1	-
キク亜科	-	-	-	1
<hr/>				
不明花粉				
不明花粉	3	-	1	1
シダ類胞子				
シダ類胞子	18	22	9	2
<hr/>				
合計				
木本花粉	13	11	5	6
草本花粉	2	5	2	1
不明花粉	3	0	1	1
シダ類胞子	18	22	9	2
合計(不明を除く)	33	38	16	9

る。VII層とVI層は粒径や色調が類似しており、若干の色調の違い (VII層がやや暗色) により区分される。VI～V層は上方に向かって漸移的に暗色化しており、V層とIV層との層界は明瞭である。また、IV層は、3 地点では砂質泥であったが、本地

点では泥質の堆積物からなるという特徴を示す。

(2) 分析試料

分析試料は上述した分析目的を踏まえ、古墳時代の遺物包含層 (VII層) を対象として、各地点より 1 点の計 4 点の土壤試料を採取している (図 1)。本分析では、これらの試料を花粉分析に供した。

ア 分析方法

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛、比重 2.3) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス (無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 の混合液) 处理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉 (1973)、中村 (1980)、三好ほか (2011) 等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。表中で複数の種類を一 (ハイフン) で結んだも

のは、種類間の区別が困難なものを示す。

(3) 結果

結果を第133表に示す。花粉化石は1～4地点のいずれも産出状況が悪く、定量解析に有効な個体数は得られなかつた。また、わずかに検出された花粉化石の保存状態も全体的に悪い。

検出された種類は、木本花粉ではマツ属、スギ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属一ケヤキ属などが、草本花粉ではイネ科、ヨモギ属などが僅かに認められた程度である。

(4) 考察

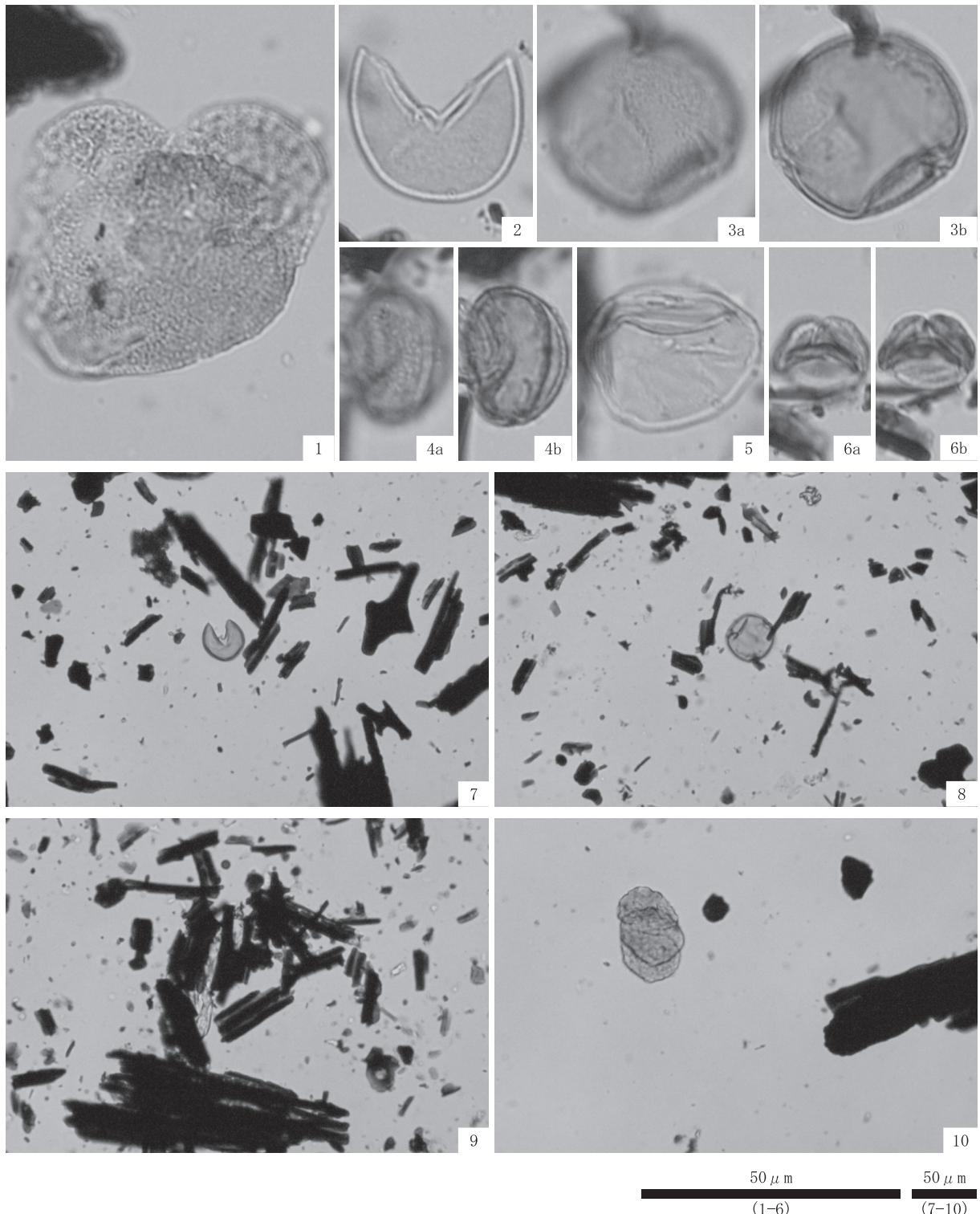
第6次調査において確認された古墳時代包含層（VII層）を対象とした花粉分析の結果、4試料を通じて花粉化石の産出は数個～数十個程度と僅かであり、保存状態も悪かつた。一般的に、花粉化石が常に酸化状態に置かれている場所では、酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている（中村, 1967; 徳永・山内, 1971; 三宅・中越, 1998など）。また、本調査区では過去に古代遺物包含層（V層）を対象として微化石分析が実施されており、珪藻分析では陸生珪藻が優占する組

成が確認されたことから、普段は大気に曝されるような好気的環境にあったことが推定されている。今回の花粉分析結果もV層と同様に産状が悪いことから、好気的環境にあったためにその多くが分解・消失した可能性が考えられる。

なお、僅かに産出した花粉化石についてみると、木本類では針葉樹のモミ属、ツガ属、マツ属、スギ属、イチイ科一イヌガヤ科ヒノキ科、および落葉広葉樹のブナ属は周辺の山地や丘陵などに分布した森林植生に由来すると思われる。針葉樹のマツ属については複維管束亜属などの二次林要素に由来する可能性もある。落葉広葉樹のコナラ亜属は二次林要素として山地や丘陵、河川沿いなどに生育しており、サワグルミ属やニレ属一ケヤキ属などは渓畔林・河畔林などとして周辺に分布していたと考えられる。また、草本類では、イネ科、カヤツリグサ科、クワ科、ヨモギ属、キク亜科などは調査地周辺の明るく開けた場所に分布した草地植生に由来し、周辺の水湿地にはガマ属なども認められたと考えられる。

引用文献

- 島倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集 60p.
- 徳永重元・山内輝子 1971 「花粉・胞子」『化石の研究法』共立出版株式会社 50-73.
- 中村 純 1967 『花粉分析』古今書院 232p.
- 中村 純 1980 「日本産花粉の標徴 I II (図版)」『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録』第12・13集 91p.
- 松丸国照 1979 「I 地形分類図」『土地分類基本調査 古河(埼玉県内)』埼玉県 13-17.
- 三宅 尚・中越信和 1998 「森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究』6 15-30.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子 2011 『日本産花粉図鑑』北海道大学出版会 824p.



1. マツ属(1地点;VII層)
2. スギ属(2地点;VII層)
3. ブナ属(2地点;VII層)
4. コナラ属コナラ亜属(2地点;VII層)
5. イネ科(1地点;VII層)
6. ヨモギ属(2地点;VII層)
7. 分析プレパラート内の状況(1地点;VII層)
8. 分析プレパラート内の状況(2地点;VII層)
9. 分析プレパラート内の状況(3地点;VII層)
10. 分析プレパラート内の状況(4地点;VII層)

第437図 花粉化石

VII 調査のまとめ

調査の結果、宮西遺跡および宮東遺跡からは、古墳時代中期から平安時代にかけての集落跡が検出された。古代面で検出された、床面に噴砂が堆積した第75b号住居跡は、弘仁九年（818年）に上野国を震源として発生した弘仁地震の際に、上屋が存在した可能性があり、前例の無い貴重な発見となった。

また、宮東遺跡は古墳時代から平安時代まで続く集落であるのに対し、宮西遺跡は平安時代の9世紀中葉から末にかけての短い期間のみ営まれた集落であったことが確認された。継続期間の異なる2つの集落跡が、隣接した調査区の中で検出されたことは重要である。

ここでは、両遺跡における古墳時代中期から平安時代までの土器変遷について見ていく。

古墳時代の土器について

古墳時代の遺構は主に宮東遺跡から検出された。5世紀前半から6世紀中葉にかけての遺構が主体であり、6世紀後半から7世紀代にかけては遺構が希薄になる傾向が認められた。

ここでは古墳時代の遺構を、I～V期の5段階（第438・439図）に分類し、代表的な遺構と各段階における遺物の特徴を概観する。

I期は第5・14・55号住居跡が該当する。代表的な遺物として1～9、119～123を抽出した。この時期はミガキや刷毛目調整が多い傾向にある。壺は非常に少なく、高壺は脚部が直線的に開く。埴形土器や小型壺はミガキが施される。

甕は胴部が球胴形になり、胴部は全体的に張るか、算盤玉形になる。外面および口縁部内面に刷毛目調整が施されるものが比較的多い。また、少量だが台付甕も認められた。

II期は第10・64号住居跡が該当する。代表的な遺物として10～36、124～130を抽出した。壺類は少ないが、I期よりも増加し、口縁部が外反する

壺や壺蓋模倣形、椀形、半球形等種類も増加する。高壺は脚部に膨らみを持つようになり、埴形土器はナデまたはケズリ調整のものが増加する。小型壺や鉢は口縁部にミガキが施され、壺は複合口縁や棒状浮文が貼付されるものなど、さまざまな口縁部形状のものが認められる。

甕は胴部がやや長くなり、胴部中位に最大径を持つ。中型や小型の甕も認められる。調整はケズリが主体で、部分的にミガキや刷毛目調整が施されるものもある。台付甕もこの段階まで残存する。

III期は第6・94・98号住居跡が該当する。代表的な遺物として37～64、131～136を抽出した。TK23段階と考えられる須恵器蓋を伴う。土師器壺類は出土量が増加し、高壺は小型のものが主体となる。

甕は胴部がやや細身になって長胴化し、胴部下半に最大径を持つ下膨れ状になる。また、鉢形の甕や小型甕等も認められる。

IV期は第21・96・99号住居跡が該当する。代表的な遺物として65～95、137～142を抽出した。壺類は更に増加し、やや浅身のものが多くなる。高壺は小型品が主体で、脚部が屈曲せずに広がる。

甕類は長胴形で胴部全体が張り、胴部中位に最大径を持つ。

V期は第17・92号住居跡が該当する。代表的な遺物として、96～118、143～147を抽出した。壺類は体部が更に浅身になる。

甕類は胴部が更に長胴化し、胴部中位が張ってラグビーボール形になるものがある。

以上、古墳時代の土器を概観した。各期の年代は、I期は5世紀前半～中葉、II期は5世紀中葉～後半、III期は5世紀末、IV期は6世紀前半、V期は6世紀中葉と考えられる。

古代の土器について

古代の遺構は、宮西遺跡からは9世紀中葉～後

半の短期的な集落跡が、宮東遺跡からは8世紀～10世紀まで続く集落跡が検出された。8世紀後半に一時的な断絶が認められるが、住居跡以外から遺物が出土しているため、調査区の周辺に8世紀後半の住居跡が存在していた可能性がある。

古墳時代に引き続き、古代の遺構をVI～XIII期の8段階に分類し（第440・441図）、代表的な遺構と各期の遺物を概観する。

VI期は第27号住居跡が該当する。代表的な遺物として、1～15、186～191を抽出した。須恵器蓋はカエリが付くものと無いものが混在する。土師器壺は丸底の北武藏型壺が多く、皿はやや小型である。甕類は口縁部に最大径を持ち、胴部は僅かに膨らみを持つ。小型甕も認められる。

VII期は第33・36・73号住居跡が該当する。代表的な遺物として16～47、192～200を抽出した。須恵器壺は鳩山I期に当たる。土師器の北武藏型壺は大型と中型のものが認められ、前段階より浅くなる。皿は大型化し、内面に横方向のミガキが施されるものも認められる。

甕は引き続き口縁部に最大径を持ち、胴部がやや大型化する。また、搬入遺物として胴部下半にミガキが施される常陸型甕（197）が認められる。

VIII期は第1・2・12・37・82号住居跡が該当する。代表的な遺物として48～94、201～208を抽出した。須恵器壺は鳩山II～III期が含まれ、新治窯の製品も認められる。土師器の北武藏型壺は更に浅くなる。底径が広く内面にミガキが施される壺や北武藏型暗文壺、房総地方の斜格子暗文壺（75）も認められる。また内面に黒色処理が施された壺（以下、内黒とする）がこの段階から認められる。

甕類は頸部が「く」の字状になり、胴部上半に最大径を持つようになる。この他に、搬入遺物として常陸型甕（206）や、破片だが内外面に刷毛目調整が施される伊勢型甕（205）が認められる。

VIII期とIX期の間には形式差が認められる。

IX期は第75・86号住居跡、第263号土壙が該当

する。代表的な遺物として95～109、209～212を抽出した。須恵器は底部糸切り無調整で、底径が大きい。土師器の北武藏型壺は平底化し、ケズリは底部のみ施される。

甕は口縁部が「コ」の字状となる前段階的な様相を持つもので、209は弘仁九年（818年）の地震で被災したと考えられる第75b号住居跡の床面直上で検出された甕であり、818年前後の時期のものと考えられる。

X期は第38・89・102号住居跡、第2号遺物集中地点が該当する。代表的な遺物として110～140、213～221を抽出した。須恵器壺類は底径が小さくなり、三和窯の製品が含まれるようになる。土師器の北武藏型壺はやや小型化し、調整の粗い壺が増加する。内黒のロクロ土師器壺は壺や鉢などの大型器種がこの段階から認められる。

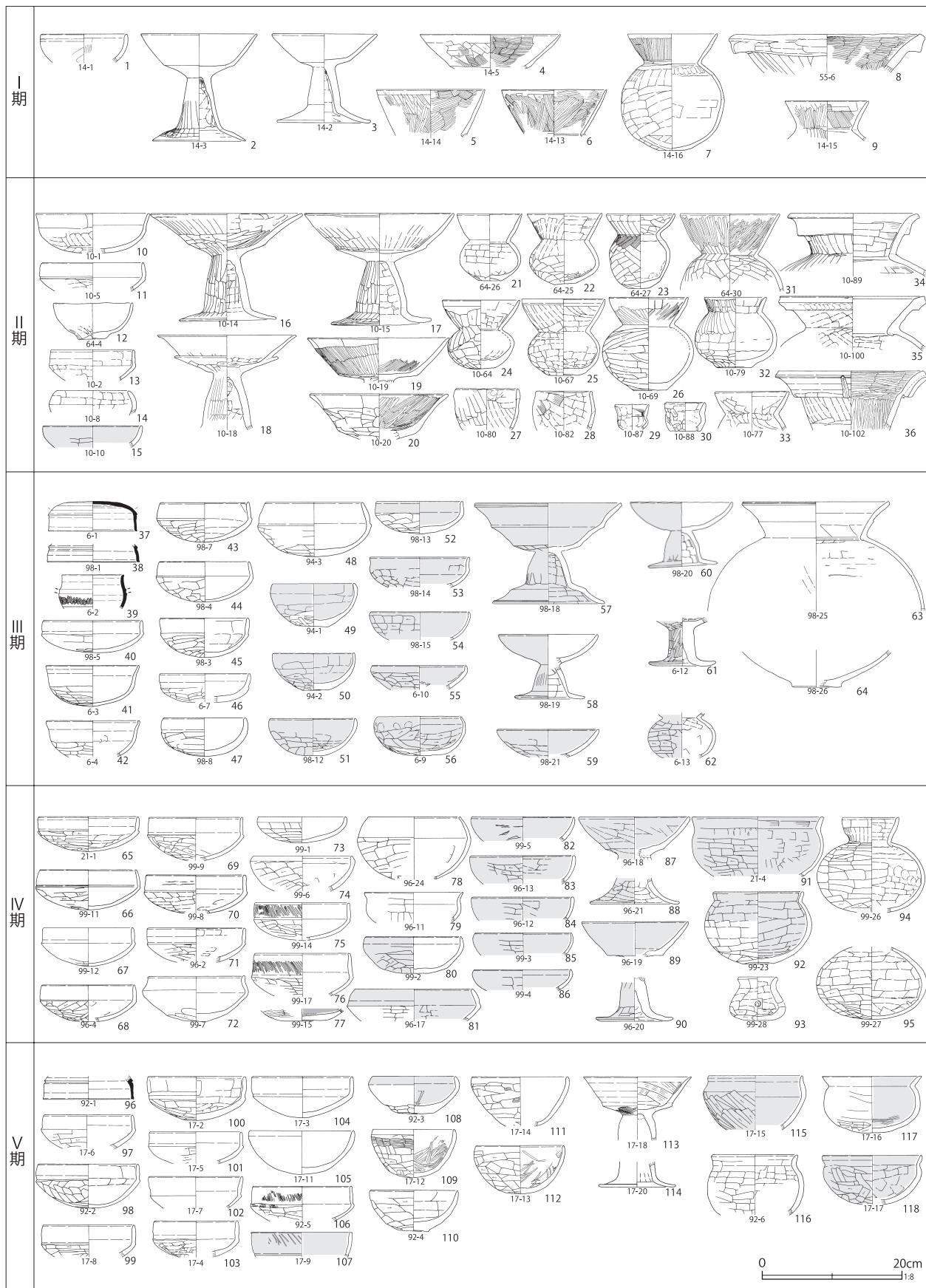
甕類は定型化した「コ」の字状口縁甕となり、頸部が長く伸びる。また、搬入品として三河型甕が認められ（219）、口縁部が扁平で水平になる。

XI期は第3・74・81・83・91号住居跡、宮西遺跡第1号住居跡が該当する。代表的な遺物として141～171、222～227を抽出した。須恵器壺はさらに底径が小さくなる。この段階から末野窯の高台付壺が増加する点も特徴的であり、大型品が多い。土師器壺は減少し、内黒のロクロ土師器壺が増加する傾向が認められ、大型の壺等が含まれる。

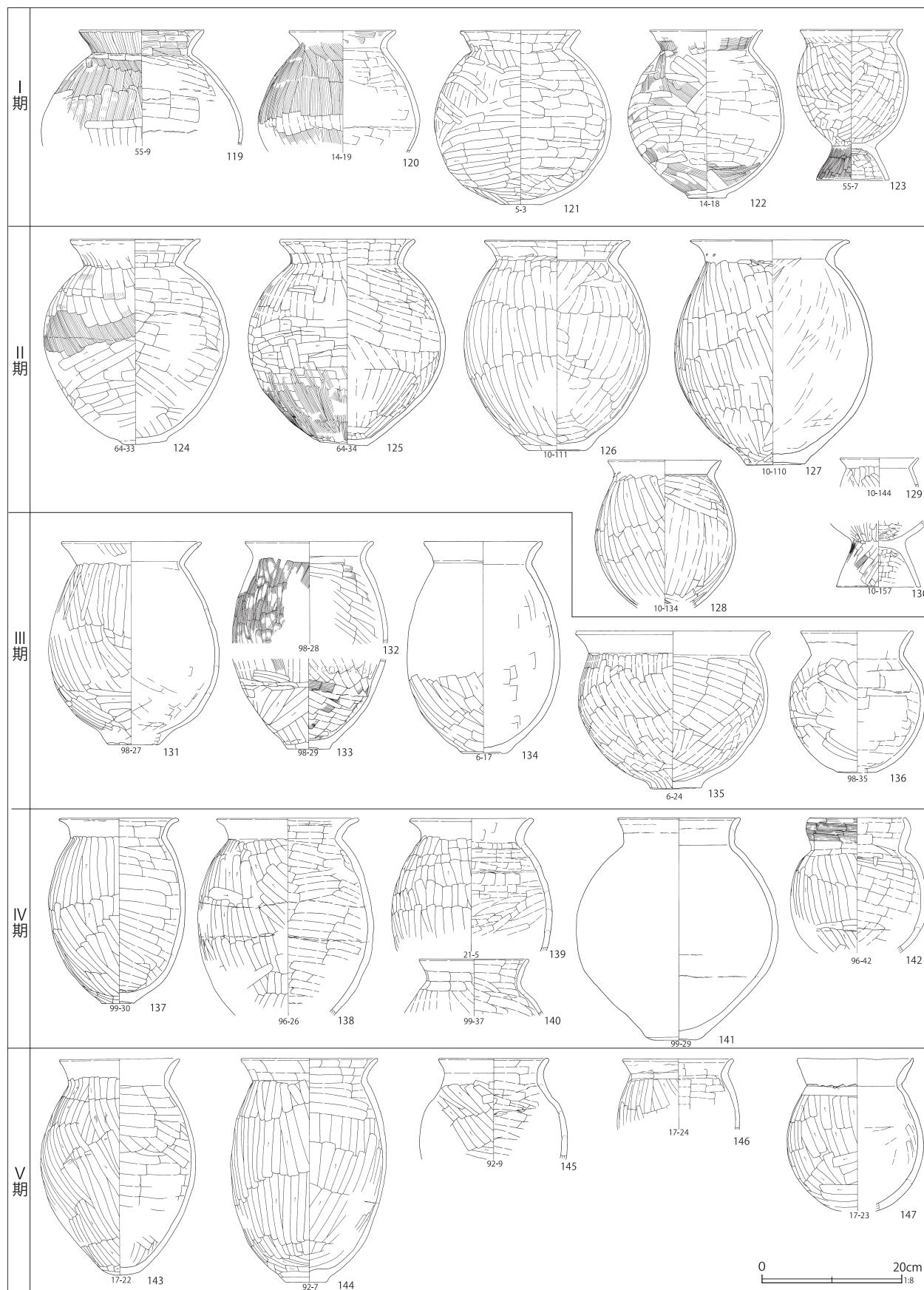
甕類は引き続き定型化した「コ」の字状口縁甕だが、前段階と比較して頸部が短くなる。また、搬入品として前段階と同じく三河型甕が認められ（226）、口縁部はやや内斜する形状になる。

XII期は第22号住居跡、宮西遺跡第7号住居跡が該当する。遺構が少なく遺物も少量だが、代表的な遺物として、172～176、228、229を抽出した。須恵器は末野窯の高台付壺が認められ、やや小型なものが主体となる。この他に、土師器壺やロクロ土師器壺が認められる。

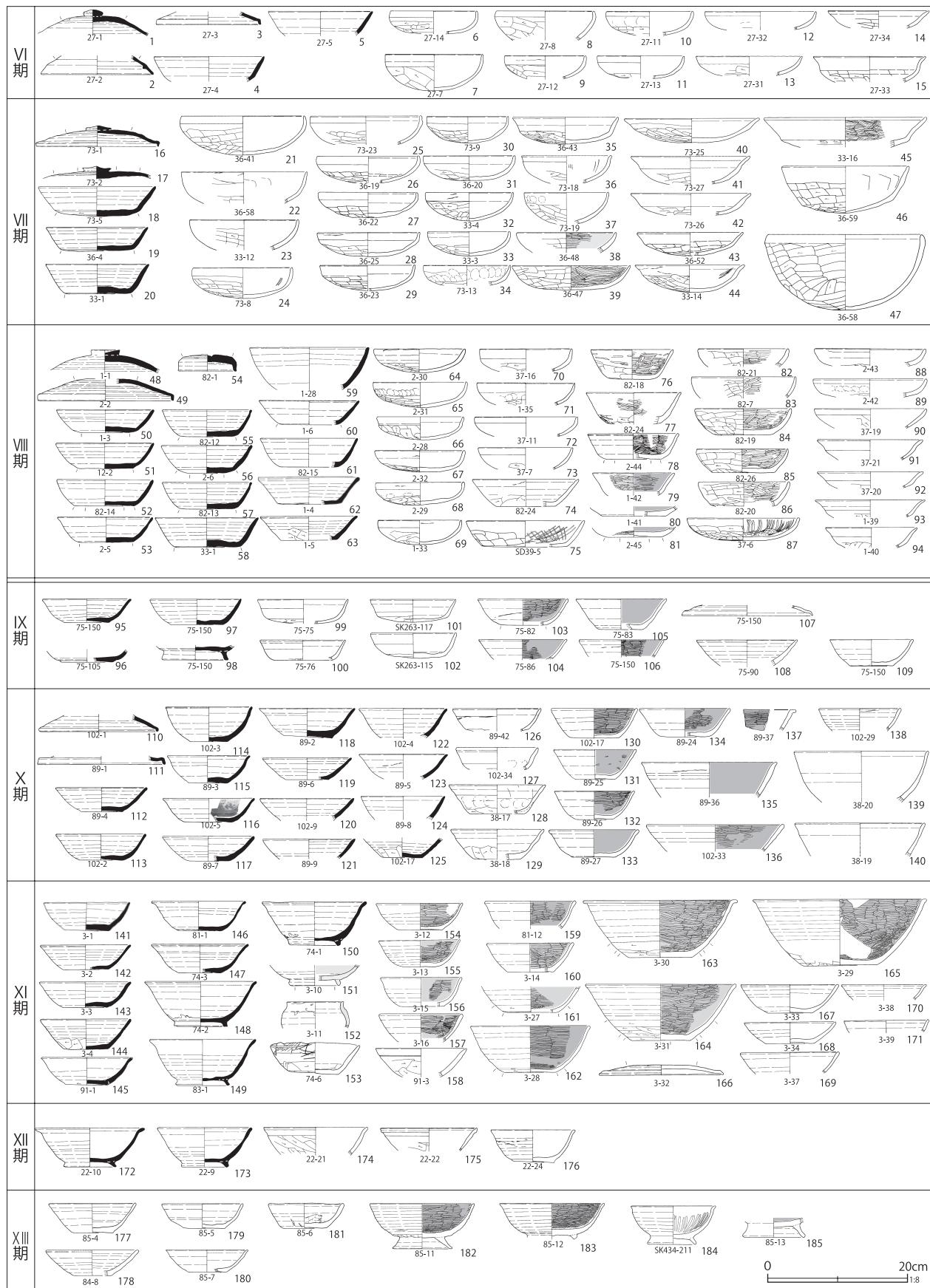
甕は「コ」の字状口縁甕で、頸部の「コ」の字



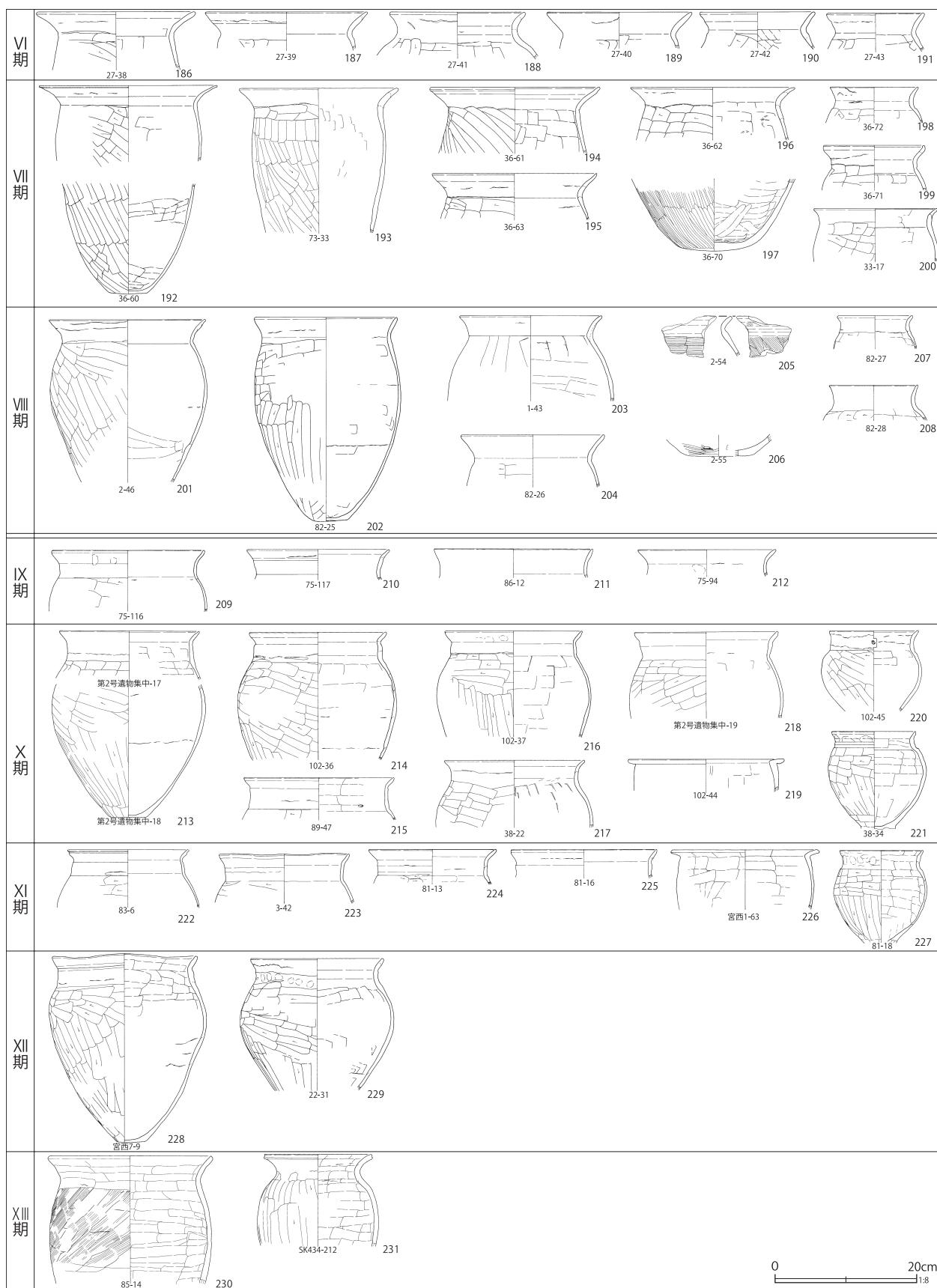
第438図 古墳時代遺物変遷図（1）



第439図 古墳時代遺物変遷図（2）



第440図 古代遺物変遷図（1）



※IX期とX期の間は型式差が大きいので二重線で表現した

第441図 古代遺物変遷図（2）

形状が崩れ、歪みが強いものが増加する。

XIII期の遺構は少なく、第85号住居跡、第434号土壙が該当する。代表的な遺物として177～185、230、231を抽出した。須恵器の坏類は消滅し、ロクロ土師器が主体となる。坏類は体部が直線的に立ち上がるものや腰に丸みを帯びるもの等、同一住居内に複数のタイプが混在する。高台付坏は大型で外面のロクロ目がきついもの、第434号土壙からは内面に暗文状のミガキが施される高台付坏が検出されている。

甕類は外面にタタキまたは刷毛目調整が施されるものと、外面に縦方向のヘラケズリが施されるものが認められる。

以上、古代の土器を概観した。各期の年代は、VI期は7世紀末～8世紀初頭、VII期は8世紀前半、VIII期は8世紀中葉、IX期は9世紀前半、X期は9世紀中葉、XI期は9世紀後半、XII期は9世紀末、XIII期は10世紀前半と考えられる。

このうちIX期の第75b号住居跡は、弘仁九年という実年代に関わる住居跡である。破片資料が多いが、209はカマド想定箇所付近の床面直上から出土し、本住居跡に伴う可能性が高い。818年前後に使用されていた甕である可能性があり、9世紀第I四半期後半と考えたい。

また、破片資料だが、IX期には伊勢型甕（205）、X・XI期には三河型甕（219、226）の出土があった。いずれも東海地方で作られた甕であり、東海地方から人が携えて来たと考えられる。宮西遺跡および宮東遺跡のある加須市北西部は、駅路や伝路とは離れた地域であり、東海地方の土師器甕は、河川等を利用して水上交通によって、持ち込まれた可能性がある。両遺跡からは、他にも関東各地から坏や甕類が持ち込まれており、周辺地域と人的交流が盛んな地域にあったと推察される。このことから、長期間に亘って集落が営まれたと考えられる。

引用文献

- 愛知県 2015『愛知県史 別編窯業 I 古代猿投産』
大岩桂子 2012「房総における斜格子暗文坏の分布—斜格子暗文坏の特殊性について—」『研究連絡誌』千葉県教育振興財団 文化財センター
太田市教育委員会 2000『市内遺跡 XVI』
古河市教育委員会 2011『江口長沖窯跡』古河市埋蔵文化財調査報告書第5集
古代生産史研究会 1997『東国の須恵器』
古代の入間を考える会 2015『南比企窯と東金子窯（II）—東金子窯の開窯と9世紀の編年—』
古代の土器研究会 1996『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東4 煮沸具—』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2001『箱石遺跡 II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第267集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2007『飯積遺跡 II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第334集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2014『長竹遺跡 I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第413集
埼玉県立自然の博物館 2020『地図と模型で見る 埼玉の台地』解説書
埼玉考古学会 2006『古代武藏国の須恵器流通と地域社会』埼玉考古学会
早田 勉・熊原康博・若井明彦編 2018『弘仁地震の実像に迫る—平安の関東地方北西部の大地震—』発表要旨集
群馬大学理工学部
津野 仁 1984「岩舟町日陰沢・大芝原窯跡採集の須恵器と瓦」『栃木県考古学会誌』第8集 栃木県考古学会
永井宏幸 2011「第3節 土器の生産と流通」『愛知県史』資料編4（考古4 飛鳥～平安） 愛知県
鳩山町教育委員会 1990『鳩山窯跡群 II』鳩山町教育委員会 鳩山窯跡群遺跡調査会
三毳山窯跡研究会 2009「三毳山麓窯跡群の須恵器生産（III）—岩舟町和田窯跡出土須恵器の再検討（報告篇）—」
『栃木県考古学会誌』第30集記念特大号 栃木県考古学会